THE CENTRAL REVIEW

中央公論

一年一回定期増刊

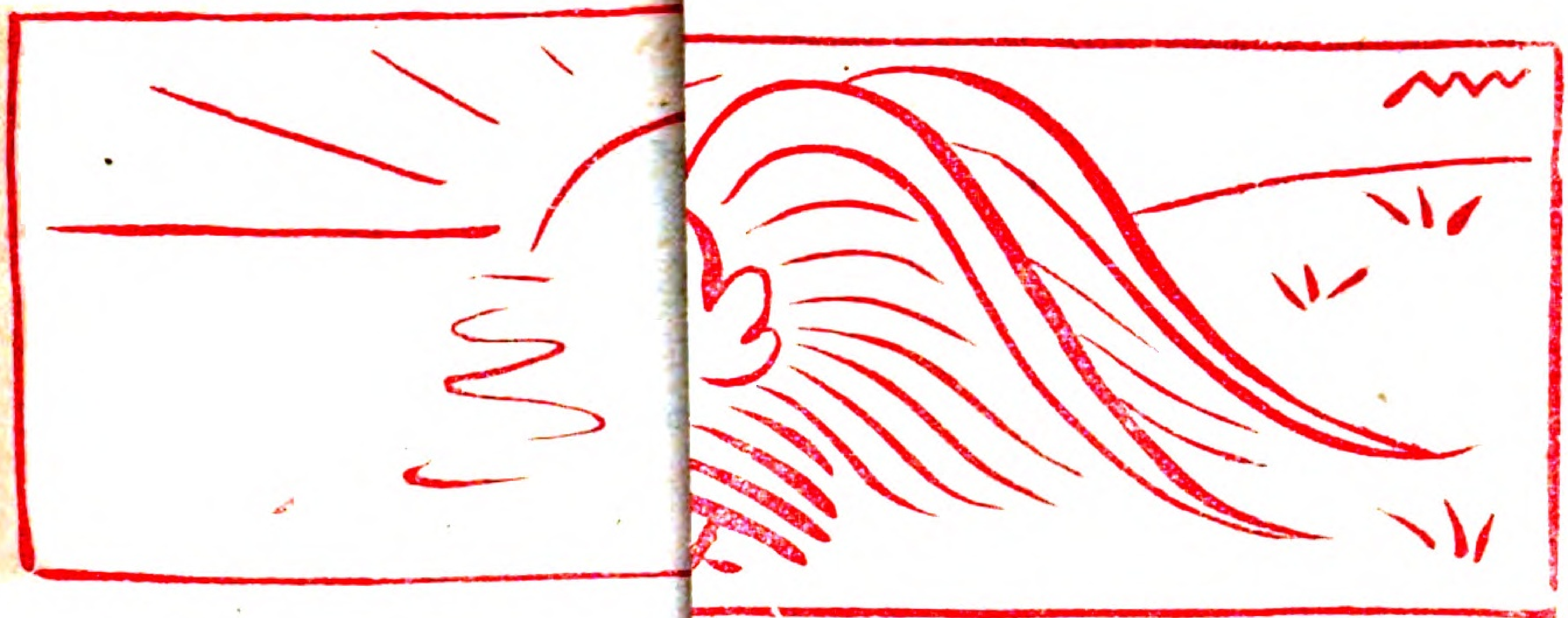
『都市と田園』號

第三十六年第八號　第三百九十八號

大正十年七月十五日發行

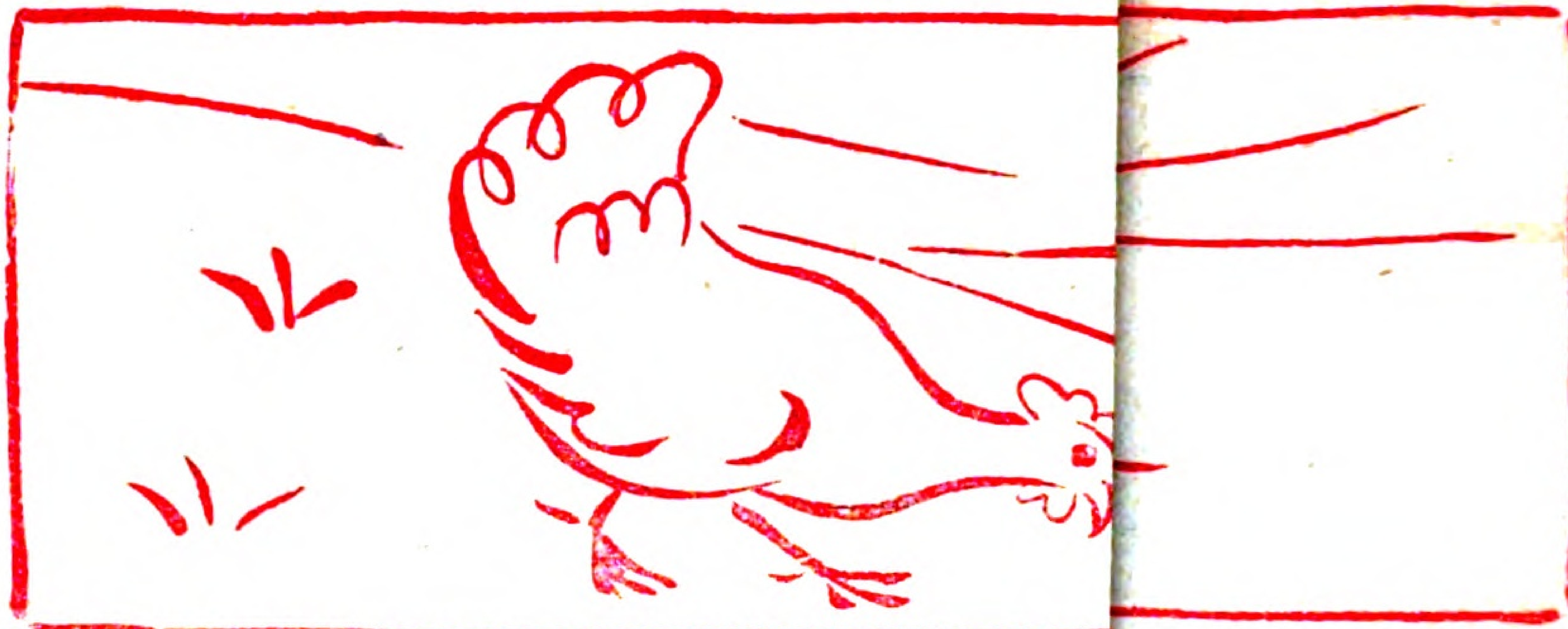

染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
タッタ二十分で染る。
自然の髪の色艶に染る。
襟枕に汚染の惧なく。
洗ふて剝げず永く保ち。
用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり





中央公論第卅六年年一回夏季特別「都市と田園」號目次

▼公論



世界の大都・舊都の壯觀・美觀

《創作》

LILIES IN THE COURTYARD. MADAME JULIETTE WYTSMAN.



LILIES IN THE COURTYARD. MADAME JULIETTE WYTSMAN.

夏休みを如何に利用すべきか

夏休みは長い、新奇の計劃を立てゝ變つた利用を試みるだけのものはある。併し夏休みは案外短い、うまく計劃を立てないと、過ぎて仕舞つてから取り返しの附かぬ後悔に悶へることもあらう。

記者は少年時代に二三の友人を誘うて一ト夏を近縣の徒步旅行に費した事がある。學生時代などには斯んな事は何度でも繰り返し得さうであつて、而かも月餘に跨る長途の旅は、後にも前にも之が唯の一度だ。夫れ丈け二十餘年前の昔ながら、今でも之が一生の中の最も面白かつた思ひ出の一つとなつて、時々彷彿として眼前に浮んで來る。何時でも出來ると油斷して居ると、一生涯出來ずに濟むことがある。容易に得難い經驗は其が出來る時に容赦なくやつて置くに限る。長い夏休みは斯うした機會を手輕に提供するが故に我々に取つて貴いのである。

併し段々年を取り社會に對する交渉が濃厚切實になつて來ると、誰れしもに取れる樣な夏休みは其實容易に取れぬものだ。否、取れぬのではない、平素餘りにも忙を極めて居た結果、爲すべくして爲し了へざりし殘務やら又は將來の計劃に對する準備の氣懸りやらが襲ひ來つて、中々我々に安靜を與へないのだ。斯くて我々の生活は年と共に極度に單調になり勝である。之れでは堪へられぬと誰しも思ふが、併し又如何とも致し難いと云ふのが多くの人の經驗する所であらう。而して斯う云ふ人々に取つてせめてもの慰となるのは、卽ち幼時に於ける變つた經驗の追憶である。

變つた事はして置くものだ。夏休みの利用の大切なる所以である。

夏休みの利用は他日の追憶に於て生活の單調を慰むる料たるのみならず、又二度と繰むことの出來ない經驗を積むことに由つて、其人の生活の內容を頗る豐富ならしむるものである。此意味に於て夏休みは好んで變つた風に利用すべきである。故に吾人はよく例へば學生諸君などから此事の相談を受くる每に、學課の復習豫習をしたりなどするを破め、或は朝鮮に往つて百姓をやれの、樺太に往つて漁業をやつて見ろの、又は貧民窟に往つて如實に其生活を味はつて見ろのと勸めるを常とする。夏休みでも無ければ自分の生涯に二度とやることの出來ない樣な事を試みるに限る。平常の生活を延長することと程拙い夏休みの利用法はないと云ふてやる。

今や長い夏休みは與へられた。然らば之を如何に利用すべきか。之には境遇の如何により人各々觀る所があらう。而して又能く考ふる所ありて之を決するを要するは云ふまでもない。

此意味に於て本誌「都會と田園號」は、或は讀者に向つて一好參考資料たるを得んか。蓋し都會と田園とは人生に接觸する自然の二つの貌であり、我々は一ト夏の變つた生活を托すべき場處を此兩者の內に選擇するのだからである。而して傯忙にして容易に夏休みを見出し得ざる讀者に對しては、本號は亦變つた追憶を誘ひ出す料ともならう。一言以て本號を公にする趣旨を明にして置く。

中央公論



第卅六年第八號
「都市と田園」號
第三百九拾八號

都市及び田園觀

杉森孝次郎

十九世紀は奇蹟の續發であつた。その奇蹟の一は都市だ。産業革命は、他の多くの現象を生むと同時に都市を生んだ。産業革命以前の都市は、産業革命以前の産業と同然だ。絶無ではなかつたが、規模に於いて、要素に於いて、今日の都市の早期態であるよりも、別生命であつた。近代の都市は、往昔の都市の完成ではなく、破壊だ。往昔の都市は、往昔に於いて、その進化の終點にまで達した。近代の都市は、近代自身の本能と衝動と欲望と意思と想像とによつて、廻顧なき希望によつて、その車輪の第一回轉を實行した。そして、數知れた回轉を重ねて現瞬時に及んだ。近代の都市は、近

代の創作だ。近代の功績と過失と、恐らくは都市に於いて、最も完全なる一例證を有する。

科學工藝の力に依る經濟的生産が可能にされて、同じくまた科學工藝の力に依る運輸交通が可能にされて、近代の都市は發生した。數百年の歴史を、眞實に曳帶する都市は、現代に存しない。偶ま存するが如くに見える場合はあつても、それは、産業文明を樞軸とする都市が、雅懷を示して廢殘の工を蹂躙せずに、却つてそれを稀貴として保護し、愛惜する、對他的心理行實の誤認されたかたちだ。近代の都市が自覺した狀態は、たとひその都市が位置する土地や、その土地内の或る道路や、建築は、往昔の都市の遺産であつても、意義に於いては、それらをば、後天、獲得、外來の價値として認める。

近代の都市は、商店でなければ工場だ。多くは、商店と工場の雜居だ。しかも本質に於いては概ね工場だ。なぜかといふに、近代の商店の賣品は、概ね工場の産物だ。例へば、ロンドンには、工場よりも商店の方が遙かに數量が勝つてゐる。けれども、その商店の内容は、工場生産品だ。斯くの如くにして、近代の都市は、工場の附屬現象たる意義を、いろ〳〵の様式に於いて帶んでをるのだ。産業が、家庭を離れて工場に移り、その工場を中心として、人口の都市集中が、西洋に於いては、百年前から始まつたのだが、商店本位の都市といへども、工場本位の都市の一連續に過ぎない。商店は工場の延長だ。

近代の都市は、工場を背景とする商店だ。工場は、國家社會主義なり、都市社會主義なり、ギルド社會主義なりの、どの一形が實現される曉が來ても、物質的には大變化が必らずしも招くまい。自然資源の産地の近域とか、原料や機械を運び來たし、製品を送りだし、生産從業者を住み、働かせるに適當な土地を擇んで、工場は、從來すでに設置されたのだが、産業が保護される限り、今後とても、この點に大滓は起こる餘地がない。商店に至つては、全く問題が別だ。

現今の商店は、資本主義の一部だ。もしも、生産組合が、恐らくは勞働組合の發達として、綜合的規模に大成され、また、國營、自治地方營に屬する生産も發達して、私營生産が影を隱す日ともならば、そして、他面に於いて、消費組合と、國營、自治地方營に屬する分配が發達して、商人すなはち私營分配者が影を隱す日ともならば、現代の都市は、商店全滅にもとづく大變化を招く筈だ。最近の露都、殊にピータースバーグが、落寞たる無商店の光景を呈してをるさうだが、これは、共産主義の社會に、必然起こる事實だ。商店全滅の可否は、別問題だ。

現代の都市は、資本主義的生産者と、資本主義的分配者と、資本主義的消費者との合成だ。その生産者は工場に象徴され、その分配者は商店に象徴され、その消費者は住宅に象徴される。消費者は永存的事實だ。生産者も、消費者と並存する恒久的事實だ。分配者は、今しがた言ひ及んだ理由によつて、消費、生産兩者ほどに存在理由が本質的でない。生産組合が分配を兼營する案も、すでに一部の研究者、例へば或るギルド主義者によつては提說されてをるほどだ。國家や、地方自治體が分配を引き受ける可能も、無定限だ。消費者の兼營としての分配、すなはち消費組合の可能も、無定限だ。現代都市のうちの住宅區域、すなはちやしき町と、工場區域とは、その社會の經濟制度が、多少現在の資本主義を廢用にしても、現代都市のうちの商店區域ほどには廢用にされない。しかし、住宅區域も、經濟組織が共産制になればなるほど、劃一化され、均等化される。工場區域は、共産制の進勢と共に、一層衛生的に、一層藝術的に、一層文化的、人間的に改まる可能がある。

商店の全滅は、單純に歡迎すべき可能でない。なぜかといふに、私營分配者としての現代の商店は、幾多の弊患をば有するが、多少の功績をも有する。その弊患の一は、私營分配者は、その分配の動機が、純私的、偏私的なことだ。商人は、暴利をも、過當の利益をも、動機としては常に貪る。動機としての私利主義は、殆んど人間の通性であつて、商

人に限らずその所有者だが、私營分配制は、その人間通有の動機に、しかも社會的に有害な惡動機に、實現の機會を與へ過ぎる。同業競爭のほかに、商人の私利主義を緩和し、矯正する力はないのだ。同業競爭に原因する公利は、結果ではあるが、目的ではない。分配者の目的を、公利的、すなはち消費者の利益に合するやうに、分配の制度そのものを改善する餘地がある。大商人の一人の力、殊にその合同的勢力をもつてすれば、同業競爭をさへも輕減し、滅却する可能があるのだから、私營分配制の絕對自由、すなはち無政府主義的自由をば、適當に制度方面からも限節すべきだ。生産費と、購力買とを研究調査して、分配者の要求額すなはち卸し及び小賣相場に、國家が、或る程度の監視を引き受ける如きは、その一方法だ。或る程度とは、商人の創始力を奬勵し、商人の盜奪欲を阻遏する程度だ。

商人の創始力は、われらが、商人の盜奪欲を非認すると同時に、是認すべき事實だ。われらは、商人の盜奪欲をば、非認してそれの絕滅につとめ、商人の創始力をば、是認してそれの極大限の發達と實現とを策すべきだ。商人の創始力とは、商人が、消費者の趣味欲望を研究して、生産者に發明、進歩、改善を示唆する能力を意味する。購買も、分配も、生産も、私營すなはち各人の自由意思に委した方が、經濟生活の内容としての富の、すなはち人爲的物質價の進歩は助けられる。共産主義は、郵便の如き、公的利害の明確、精緻、顯著、切實なる産業には、原則的、無例外的に適用される理由と必要があるが、多少の餘裕ある種類の産業には、實情の緩急に應じて、寬嚴にされ、不採用と採用とを決せらるべきだ。

各家庭の自由意思に依る食料品購入と、その料理と飲食とが、制度的に否定され、國營や市町村營の、すなはち公營庖廚に、各家庭が制度的にたよらねばならぬことになつたら、飲食に代表される個性の發達は、たしかに妨げられる。しかし、英、米の如き資本主義國でさへも、戰時、物資の不足と、細民の窮乏とを救濟する非常策として、やゝこれ

に近い方策を採用した。昨今のロンヤばかりの實行ではないのだ。飲食は一例に過ぎない。個性に、文化生活に於いてのみならず、經濟生活に於いても發表される。個性主義の哲學は、現代の都市が、商店全滅によつて蒙むる影響を、その關係諸事情とあはせ考へて、無條件的には歡迎しない。

生產者と分配者と消費者とは、判然としてその場處を別にすべきだ。工場區域と商店區域と住宅區域とは、相侵入してはならんのだ。東京市を見ても、殊にいはゆる市外を含めて觀るときには、この三者の混戰は完全だ。先づ工場區域を、自然的及び人間的便宜に隨うて確設せよ。それから、住宅をして、工場及び商店から離れしめよ。そのために要する第一事は運輸交通の手段だ。ロンドン及び英國の地方大都市の如きにあつては、勿論これは英國に限つた現象ではないが、商店と住宅とは、地域を異にしてをる。店は市內に、住宅は市外にあるのだ。家庭と商店とは空間的に、及びそれに附隨するあらゆる意味に於いて別存在だ。これは、家庭の發達のためにも、商店の發達のためにも、必要事だ。主人だけが、役所通ひの方法に隨つて、市外の家庭と、市內の店との間を、朝夕に一往返するのだ。家庭と商店との分離は、しかしながら、地下電車の力を利用するでなくては、概ね困難だ。市外のいかなる一地點からも、市內のいかなる一地點へも、安全に、急速に、廉價に、成るべく健康に、愉快に、通へる方法が準備されてゐなくては、それは出來ぬ相談だ。そして、その方法は、地下電車のほかに、現在見あたらない。

運輸交通の手段は、社會の各員がその使用者であるから、義務教育の原則、または郵便の原則と同じ原則に根據して、出來るだけその使用費を低廉にすべきだ。只にすることを理想とすべきだ。勿論、この場合にも、使用者の必要の程度と、數量すなはち分布圈とを條件として、使用費の有無、多寡を定むべきだ。公用と私用、共用と專用、乘り合ひとかゝへとの差が、その決定標準だ。公、共用をば、公、共費で辨ずる方針を取るべきだ。通路は文明の過半だといふ

俗說は、將來なほ意義を帶ぶ。都市問題の最先要位に立つ一項は、市內と市外との間の道路の公設だ。地下電車の既設された都市は、それを發達させよ。未設の都市は、それを開設せよ。步道と車路とを遍ねく竝設して、自働車、電車の、公衆用、私人用の各種をして、安全に疾走せしめる便宜を準備することは、通路に於いて原始的都市に屬する東京の如きにとつては、眼前卑近の一要事だ。東京を原始的都市と呼ぶべき理由は、勿論、そのほかにもある。

東京に限らず、世界の都市のすべてにむかつて、多少の程度において切實な着手目錄のうちには、下水の開設または完備がある。上水の發達がある。細民街の改造をはじめとして、住宅整理がある。廢汚物の處分がある。烟の隔離がある。衞生及び生活の一般的條件の改善がある。防火がある。公園の發達がある。無費學校の發達がある。幼少年者の無費遊戲場の發達がある。無費圖書館、無費美術館、無費博物館、無費劇場、無費浴場、無費體育及び競技場の開設と發達がある。ただちに無費とまで行かずとも、無費を理想として、これらの事業をば、市の公營に委すべきだ。そして、可能的最低價格を、その使用消費に代償さすべきだ。市營事業の發達は、市の公營を直接目的とするのだが、市民は、市民であると同時に私人であるから、そして市民的生活は、私人的生活の一部的事情に過ぎないのだから、市營事業のいかなる發達も、私營事業の部分的代理であつて、私營事業を全部無用にする意味をば、決して帶有してはならんのだ。公設浴場の發達は、各家庭の私設浴場の發達と兩立すべきだ。公設圖書館の發達は、各人の私設圖書館の發達と兩立すべきだ。乘り合ひ自働車の發達は、私用自働車の發達と兩立すべきだ。原始人が本能と衝動と欲望を奔放させた弊禍に懲りて、次期の豫言者は禁欲を說き、自己否定を唱導した。最近代に至るまでの代表的宗教信條と代表的道德理說とは、禁欲と自己否定に對する偶像崇拜であつた。私營經濟、私營產業の弊禍に懲りて、共產と公營とを偶像的に崇拜してはならん。產業革命以來、今日に至るまでの經濟生活は、原始的であつたのだ。新興の共產主義は、いさゝか禁欲

主義、自己否定主義に似かよつてゐる。

先段に於いて、われらは、商店と家庭の分離を主張した。工場と住宅の分離は、これ以上にも本質的必要事であり、時代的急要事だ。工場勞働者をして、十分に家庭を所有せしめねばならん。そのためには、工場勞働者の住宅が、工場の周圍や裾にたかつてをるやうではいけない。住宅が、工場の寄生物であつたり、附屬物であつたりするやうではいけないのだ。住宅は家庭の身體だ。家庭は住宅の心意だ。家庭の過去は、殆んど零であつた。家庭の將來は、殆んど全でなくてはならん。家庭の本質は、必らずしも夫妻子の合成には限らない。獨身者でも、かれの私生活を象徵する社會的方法は、家庭だ。この意味に於いての家庭は、個性主義の至寶殿だ。個性主義そのものゝ自覺と發達とが、從來甚だ幼稚であつたから、新眞意義の家庭は、未存在だ。家庭の存在は、今日以後の可能として希望される。筋肉、頭腦、各種勞働者が、家庭の力と、光りと、熱と、潤いと、匂ひとを滿身に帶ぶる日が、われらが迎ふべき明日だ。

家庭の價値は、個性保護の牆壁たるところに存すべきだ。家庭の內容は、量よりも質だ。空間的大小と、その物質的內容とは、家庭としての住宅の本質價ではない。けれども、精神と物質とは、そも／＼二元でないのだから、家庭といへども、物質的美を一面の必要條件とする。いはゆる細民街や、貧民窟をば、早く取り拂うて、よそ目にも、氣の毒でない住宅を、その代はりに建てる責務を、今日となつては、都市の名に於いて、時としては多少國家の名に於いて、先づ社會が負荷せねばならん。住宅問題は、品性、智識、趣味の問題と、直接に連續した問題だ。住宅問題は、家屋問題ではなく、人格問題だ。住宅は、社會からいふならば個性教育の一部だ。個性からいふならば、社會教育の一部だ。市民の風尙嗜向を優質化するために、市はその最貧者にまでも、かれの住宅を機會として、道德と科學と藝術の手を伸ばすことを怠つてはならん。レーニン氏の治下に於ける一「職人安息家庭」の、ウエルズ氏の『陰影のロシヤ』內

の一粗描は、多餘だ。

均質等量は社會理想の要點でない。社會理想の最要點は、自覺ある各部の、隨つて全體の暢達だ。分配の理想態を實現すべくあせり過ぎて、人類を羊群化してはならん。一人の向上は、他人の向上を誘拉する形勢を多少かもす。思想史、藝術史、宗教史を見ても明らかな話だ。他人に、他人自身の意思あり、手脚あり、みだりに手を引くべきではない。智見と感情に點火することが捷徑だ。都市殊に住宅區域を、建築美の方面から力を用いて、藝術化する可能と必要がある。

都市の藝術化は、勿論工場にも、また商店が當然存すべき限り商店にも、その可能と必要の例外をなさない。そもそも、繪畫と彫塑とは、視覺藝術の全體では無論ないが、恐らくはその時代的最高型でもない。民衆視覺藝術の名に値ひするものがあるとしたら、それは建築だらう。建築は、すくなくともその外容は、藝術的經驗の對象としては、公有だ。家屋庭園の或る部分は、往來の人の目にも、いや應なしに投象する。法律的、經濟的、道德的に、その邸宅が、わが所有であるか、ないかは、藝術的には無關係の問題だ。牆内の人に低級の虛榮心なく、路上の人に低級の嫉妬心なくば、邸宅美は、或る程度までは公共美だ。

現代は、しかしながら、みなの人が、三度の食事に事を缺く同時に、自分だけ贅澤料理に舌鼓を打つてはいけないといふ意識が、社會理想の最前線に旺勃として發動して來た瞬間だ。鐵は、灼熱した際にこれを槌打形成すべきだ。社會正義の意識が、分配の公平の目標を立てて、進潮した今日に、われらは、社會の價値的の掃除、洗濯、改造、再生を、出來るだけ成就すべきだ。一時に萬事を企てることは、しば〲愚策だ。されば、われらは、都市の藝術化を要求するにあたつても、都市自身、及びその所屬國家等の公的企業として、現存する中級を上級に助け進め、上級を最上級に助

け進めるには及ばない。われらの新手は、下級を中級に助け進めるに集中すべきだ。遞外税法をも、善用する餘地ある限り善用すべきた。工場及び田園勞働者の定收を、正當にのぼす餘地ある限り、のぼすことも肝要だ。勿論、これらは、綜合的方法の、一二小部分に過ぎざるべきものだ。

都市をして、綜合的一大藝術品たらしめよ。綜合的に語弊があらば、集成的でよい。都市そのものが、一家屋だ。しかも、各人本位、各家庭本位、各小團體本位の家屋の自由生存を內容とする一大家屋だ。現代人は都市を發明した。しかし、それは、産業や國際的社會と同樣、本能の作用であつて、自覺の結果ではない。斯くして、現代人は、外形において都市を所有し、經營すれども、內質においては、依然たる田園孤棲の心理だ。自他協力して、各自の目的を大成する良心もなく、聰明もない。國內、門內、町內くらゐが、現代市民の關心區域だ。曾て村の人であり、小字の人であつた當時の習慣が、都市の人に殘存して、むしろかれの市民道德を支配してをる。新市民敎育が必要だ。

都市の將來は、われらが、獨奏と交響樂の原則を、視覺藝術の方面に、大規模に發揮する一機會でなくてはならん。獨奏に比應するものは各個建築だ。交響樂に比應するものは全都市だ。生存的最低限の必要が滿たされない前に、藝術的滿足を問題とすべきでないと、われらは、反省すべきを時代的境遇にある。けれども、その反省の結果は、われらをして、都市藝術化の必要を、一層切實に感ぜしめる。先づ、勞働者の住宅の改善改美から始めなくてはならん。

都市と田園と、いづれがわれらの選擇に値ひするかといふ問ひは、もしもそれが現代のわれらに向けられたなら、われらの答へは、都市と田園とは、並有して始めて價値を全うするといふにある。現在のまゝでは、都市と田園とは、二者その一を擇ぶべく出來てゐて、二者を同時に所有するやうに出來てゐない。大體に於いて、文明は都市に集中する。すくなくとも、過去一世紀間の事實はさうであつた。十九世紀は、田園荒廢して、都市繁昌した時代であつた。田園の

荒廢は、必らずしも雑草と荊棘が原野を埋めたことを意味しない。才能が、及び才能に伴ふ希望が、水が低い方へ流れるやうな勢ひで、田園を去つて都市におもむいたことを意味する。その社會的象徴は、農時代が退いて、工商時代が進んだことだ。人は、食はずには生きられない。産業革命以降、世界、殊に文明諸國の人口は、死亡率の低下その他の事情に原因して、劇増した。その劇増した人口が、都市に膨集した。都市の人口は農作しない。しかしかれらは餓えなかつた。機械その他の科學的功績が人力を省減し、農作能率を飛躍的に高めたのだ。及び、交通の手段が發達して、遠地異域から、殊に低級文明の國土民族から、食料品を運び來たす便宜が殖えたのだ。知識、趣味、興樂、榮華、權力、およそ普通の意味に於ける人生の動機は、累然として田園を虚脱狀態に殘し去つた。そして、悉く都市に營養した。誇りも愛も、都市でなくては機會をえられなくなつた。都市は、人里中の人里となつた。この傾向は、今日なほ事實だ。

十九世紀以來の都市集中主義が、多少不健全なものであることは、最近、勞働運動が文明諸國に顯著なる發達を現實にし來たれるにかゝはらず、食料品生産者といふ、重要なる一部勞働者、すなはち農勞者が、全然勞働運動の列外に委棄されてをる事實を見てもわかる。文明諸國に於ける農勞者の生活標準は、すなはち第一にその收入は、話にならぬほど低い。工場勞働者の收入も低いが、田園勞働者の收入は、概しては遥かにその下位に落ちる。田園勞働者は保守的だ。國家または社會が、それをいゝ事にして、かれらに對する善遇策を講じない。昨今、おもむろに、田園勞働者の自覺、及び局外識者の注意が萌發して來た。工場に於ける産業自治の原則を、社會は、農場にも適用すべきだ。小作人の位置を變改しなくてはならん。借地農を廢して、自作農をそれに代へねばならん。

田園と都市とが、今日の如くに相孤立してゐる狀態は原始的だ。田園は都市の緣邊であり、都市は田園の中心であるやうに、兩者の間に生命の交通が完全にならなくてはいけない。都市を、生産、分配、消費の各機能に應じて、空間的

に分類しなくてはいけない。そして、非衞生的、非藝術的混雜を除去しなくてはいけない。住宅の理想地は郊外だ。郊外の發達が必要だ。郊外に於いて、都市と田園とは接觸する。交會する。合して一となる。郊外の原則が、到處に實現されなくてはいけない。各田園をして、附近に都市または都市的文化中心を持たしめることが肝要だ。快速なる交通手段を普及させることが最大必要條件だ。人は、空間に於いて相遠く、意義に於いて相近く住むべきだ。田園の各地點と都市の各部位とを、意義に於いて最近距離に短縮せねばならん。

常平制度を確立せる米穀法の新設と國民生活及び米穀生產の安定

貴族院議員　上山滿之進

大正十年法律第三六號米穀法は常平制度を以て其の內容とす、本篇に於ては特に必要ある場合の外は、總て其の內容に從ひ米穀法の文字に代ふるに常平制度の語を以てす、一に說述の便に從ひたるものなり。

甲　米穀法の使命

米穀法の成立は原內閣の功績なり、世間或は法案提出の動機を疑ふ者あり、曰く「大正九年春夏の交より米價著しく暴落し農家の苦惱少からず、是に於て農家は米價の釣上を政府に强要し、政府は農家に迎合せんが爲めに、急遽米穀法案を議會に提出せり、即ち政府提案の本意は、食糧政策永久の基礎を確立せんとするよりは、寧ろ重きを目下の農家の救濟策に置きたるものなり」と。

予は此の批評の當否を知らず、假りに言者の說くが如きものありたりとするも、其の實績に於ては、明かに常平制度を永久に確立したるものにして、將來實施の方法宜しきを得ば、國家國民の幸福、蓋し之に過ぐるもの無からん、故に予は米穀法の制定を以て原內閣の功績なりと稱揚するを憚らず。

過去十年間の事實に徵すれば、米價は數年毎に、或は非常の騰貴を爲し、或は激烈なる下落を來し、動搖極まる所無し、是に於てか其の生產者たると將た又消費者たるとを問はず、國民は常に一般に甚しき不安を感ぜざるを得ざりき、其の結果として消費者に付て言へば、國民生活は脅威せられ、生產者に付て言へば、事業の基礎震撼せらる、故に米の問題は明治維新以來屢世の物議を釀し、當路者をして苦慮憂心措く能はざらしめたるものにして、實に我國に於ける最も重大なる問題の一たり

然るに其の對策は常に姑息彌縫を事とするに過ぎずして未だ曾て之れが根本方策を定め、依つて以て徹底的に米價調、節を行ひたるもの無し、大正三四年の交、豐作の後を受けて米價著しく下落し、石當り十一圓を稱ふるに至りたるの時、物論大いに沸騰し、政府も亦鋭意之れが救治に努めたりしも、其の當面の問題を解決するが爲には著しき成績の認むべきもの無かりしなり、然れども此の機會に於て政府の開設したる米價調節調査會は、米問題の根本恒久の策を講じ、其の結果は遂に今日の米穀法制定の先驅を爲すことを得たり、爾來米價の或は暴騰し、或は暴落するに伴ひ常に調節問題の喧々たるを見たりしが、終に現政府は前議會に米穀法を提出して其の通過を得、今や之れが實行に着手せり。

今回制定せられたる米穀法は常平制度の主義を實現したるものにして、大正四年米價調節調査會に當時の當局者が參考として提出したる四者の第一案の趣旨を採用したるものなりとす。

米穀法の負へる使命に重要なるもの二あり、國民生活及米穀生産の安定是なり。

（一）國民生活の安定　米價の暴騰暴落常なき時は、國民生活の基礎は長へに脅威せらる、而して同じく國民と稱するも、爲めに最も甚大なる壓迫を受くるは實に大多數の貧者なり、蓋し一家の生活費の中に含有せる米代金の全生活費に對する比例は、下層に進むに從つて益々大に、最下層に至るときは米代金は生計費の殆ど全部を占むるに至る、然るに最上層に於ては、米代金の如きは之を全生活費に比して殆ど言ふに足らず、翻つて我國民の富の程度を按ずるに、米價を顧念せずして生計を立つる富者は甚だ少數にして、生計の安否が米價に支配せらるゝ者頗る多く、生計費の大部分を米價の爲めに、占領せらるゝ貧者は更に益々多ければなり、是を以て一たび常平制度の確立を見以て米價の激變を防止するを得ば、大多數國民の生活の安定すべきは火を睹るよりも明かなりとす。

世界の大勢を按ずるに、數十年以來、歐洲就中獨逸に於て、漸次勢力を養ひたる社會主義は、近年益々其の威力を長じ、殊に歐洲大戰以來、過激なる社會主義或は共産主義の如きもの、露國を始め歐米の山野を風靡し、其餘勢は東洋に及び、我國に於ても今や此の問題の爲に、大いに識者の心膽を寒からしむるものなきを得ざるに至れり、予は今此の問題の本質に付て批評を試みんとするに非ざるも、之を適當に解決すべき第一着歩は、國民生活を安定するに在ることを確信する者なり。

社會に各種の缺陷あることは、固より予の否定せざる所、之を匡正せざるべからざることも、亦た論を須たざる所なり、然

るに此の大問題を適當に解決せむには、相當の調査を爲し、考究を盡し、萬遺算なきを期せざるべからず、若し適當なる方策の發見せらるるに先ちて、一たび國民の生活危殆に瀕するが如きことあらば、民心忽ち揺き、勢の激する所或は不測の事變を醸すなきを保し難し、不幸萬一斯る事態を生ずるあらば、社會問題の根本的解決は、愈々益々其の難きを加ふに至るべきは、何人も首肯する所ならむ。

凡そ人類は平和を好む、若し易く食ひ、暖く著、靜かに眠るを得ば、必ずしも破壞を欲するものにあらず、然れども其の生活に不安を感ずるときは、羊の虎に化するが如きものあり、古語に「衣食足りて禮節を知る」と曰へるは詢に萬古の金言なり、衣食住を安固にするは蓋し政治の根本たるべし、由つて以て天下の民心を安むじ、輕擧妄動することなからしむるが故なり、國民其の生に聊むじ秩序ある生活を爲すの時に當りて、始めて適正公平に社會問題を處理するを得べし、故に常平制度の確立は第一に國民生活を安定し、以て社會問題解決の第一著歩を成せるものなりと信ず。

(二)米穀生產の安定　米價の暴騰暴落常なき時は生產者は其の依る所を失ひ事業上常に不安の念を懷かざるを得ず、斯くの如きは國民の主要食料品たる米穀の生產の將來を、危殆ならしむるものと云はざるべからず、米穀は國民の主食品として我國に於ては最も主要なる產物たるのみならず、其の產額莫大にして、單に產業上の見地よりするも、最も重大なるものなり、即ち米價激變の一事は、國民主食品の生產を脅かすのみならず、我最大產業の基礎を動かすものなれば、米價を調節する常平制度は、自から米穀の生產を安定し、國民食料の供給を安固にし、我產業の基礎を確立せるものなり。

米穀法は斯の如き重大なる使命を帶びて本年四月呱々の聲を擧ぐ、能く之を育成して完全に其の本務を盡さしむるは全く我等國民の責任に屬す、就中當路者其の他同政に關與する者及び帝國農會其の他公益を目的とせる團體に於ては、常に至公至平の心を以て此の嬰兒を哺育するに努力せざるべからず、或は一時の政略の爲に、或は一部の利害關係者の爲に苟くも米穀法の運用を私するが如き事あらば、此貴重なる任務を負へる嬰兒を荼毒するに等し、愼まざるべからず。

乙　常平制度の三大要領

常平制度の根本觀念として三大要領を明確にするを要す、第一、常平制度の目的如何、第二、常平制度實行の手段如何、第三、其の實行の標準如何、即ち是れなり。

此の目的手段標準に於て、出發點を誤る時は、常平制度は其の本然の效果を擧ぐる能はざるのみならず、却て米穀經濟を擾亂し、遂には寧ろ此の制度の存在せざるを優れりとするの結果を來すの虞なきを得ず、是れ常平制度實施の初に當りて、先づ以て此の三要領の意義を明確ならしむるの必要ある所以なり。

（一）目的　常平制度の目的は米價の調節に在り、更に正確に之れを言へば米量の過不足に原因せる米價の調節に在り。

常平制度の目的は價に在って量に在らず、世間往々にして之を顚倒し、量の調節を以て常平制度の目的とし、價の騰落を以て其の結果と爲す者あり、此の說誤れり、既往數十年間に於て國民の齊しく苦みたる所は、價の激變に在りて量の給否に存せず、若し價の暴騰暴落を憂へずんば、何等の人爲的政策を用ふべき理由無し、凡そ物資は價の低きより其の高き所に向ふ、恰も水の低きに就くが如し、故に米の分量の如きは之を自然に放任するも、各地の有無相通じて漸次に需要供給の平準を得べきことは、苟も經濟論の一葉を讀みたる者の直に首肯すべき所たり、往時交通の未だ開けざりし世に在りては、物資の有無を通ずること甚だ困難なりしが故に、山村僻邑に於ては一たび凶荒に遭遇せば食ふに米無く、又之れを他方に仰ぐの便無く、住民は口に黃白を啣みて道途に餓莩と爲るの已むを得ざるもののありき、斯の如き時代に於て、斯の如き僻陬の地に在りては、價格の如何に拘らず、米量を調節するの必要ありしは言を須たず、故に舊藩時代に於ては、各藩其制必らずしも同じからざるも、多くは備荒貯蓄の制を設け、玄米又は籾を貯藏して萬一に備へたるものなり、然るに內外交通の便大いに開けたる今日に於ては、國內の一地方に假令收穫皆無の年あるも、他の地方の米は數日を出でずして此の地に移送せられ、住民は毫も米量不足の爲めに飢餓に陷るを憂ふるを要せず、故に現代の實情に於ては、若し價格の暴騰暴落を憂ふることなくむば、米問題は擧げて之を自然の經濟理法に放任して、毫末　支障を生ずることなきは明かなり、唯國民の米に關して齊しく苦しむ所は價の激變あるのみ、此の價を調節して國民の困苦を除去する一事が、即ち常平制度を必要とする理由たらずんばあらず。

然らば常平制度は米價の暴騰暴落ある毎に必ず調節の機能を發揮すべき任務を有するや、是れ然らず、米價激變の原因には經濟界一般の事情に存するものと、米、量のみに存するものとあり、前者は常平制度の興る所にあらす、唯米量の過不足に基ける米價の部分が常平制度の調節の目的たるのみ。

通貨膨脹し、一般物價の騰貴せる場合に於ては、同じく物資の一たる米の價格も、固より自から騰貴せざるべからず、其の

他社會各般の事情は或は之が價を騰貴せしめ、或は之を下落せしむることあらむ、然るに是等の事情は總て一般的にして、單に米のみに關するものにあらざれば、斯かる原因の爲に變動したる米價は、若し之を調節するの必要ありとせば、宜しく一般的手段を以て一般物價に普及するの方法を選ぶべきのみ、然るに米價の中、米量の過不足のみに依りて騰落したる部分は、一般經濟事情の毫も關知せる所にあらざるが故に、之れが調節は米量策の増減に求むるの外由無し、是れ即ち常平制度を制定せざるべからざる理由にして、又常平制度に依りて米價の調節を爲すことを得る唯一の範圍なり、故に曰く常平制度の目的は、米量の過不足に原因せる米價の調節に在りと。

(二)手段　常平制度の目的にして既に米量の過不足に原因せる米價の變動を調節するに在りとせば、之が調節の手段は一に市場に於ける米量の増減に由らざるべからざるは、當然の歸結なり。

世間或は米量に基ける米價の變動をも米量増減以外の手段を以て調節せむとするものなきにあらず、其方法の主なるものを(一)、米價公定制度　(二)、米穀取引機關に對する干渉とす、是れ共に誤れる觀念に出づ。

米價公定の議は、往々世に唱へらるゝ所にして、又歐洲大戰中歐米諸國に於ても物價公定は實行せられたり、然れども斯の如き制度は、第一、價格の測定に於て、第二、實行の方法に於て、共に頗る繁雜を極め、而して第三、實行の效果大に豫期に反したるものあるは、歐米の實歷に就て、天下の普く知る所なり、國民の主要食料品たる米に關して、斯の如き煩瑣なる制度を設くるは、甚だ危險なり、加之本來斯る制度は國運を賭して大敵に向ひたるが如き場合に於ては、一時應急の處置として、或は實施の已むを得ざるものあるべく、又國民も時局に顧みて、自から多大の不便を忍ぶに躊躇せざるべしと雖、平時に於ては決して實行すべきものにあらず。

米穀取引機關に對する干渉は前年我國に於ても行はれたる米價調節の方法なり、然れども此の方法は徒らに天下の物議を挑發せるのみにして其の效果は則ち甚だ少なく、却つて多少の弊害を釀したるものなり、抑米價の暴騰暴落は前にも述べたる如く、其の一般的原因に基くものを除きては、米量の過不足に存するのみ、然らば米量足らざれば之を補ひ、過剩あらば之を減じ、由りて以て始めて、米價の平準を期するを得べし、定期取引所又は正米市場に於て、米價の騰落するは米量過不足の反映たるに過ぎず、然るに其の實質たる米量の増減を傍さずして、之が陰影たる取引機關の立會場を非難するは、押條たる

鷹が地上に映する飛鳥の影を追ふに異ならず、遂に鳥の一羽毛をも獲る能はざるのみならず、或は躓きて其の身を傷ふに至らむ、予が前年「米の問題」なる一篇に於て、米問題の主體は量に在りて價に在らずと結論せるは即ち此の意なり、米穀法に依り、量を以て價を調節するの制度定まりたる今後に於ては、蓋し何人も好んで當年の覆轍を再びする者なかるべしと雖、量の手段に依る價の調節が所期に一致せざる場合に於ては、世論は或は再び取引所又は正米市場の壓迫を政府に要求することなきを期し難し、然れども此の方法は害あつて益なく、決して手を之に觸るることあるべからざるものなり。

（三）調節の標準　常平制度に依る米の買入賣出の時期、數量、價格は何を標準として之を定むべきや、予の所見に依れば、其の標準は當時の米價相當なりや否やの一事に在るのみ。

世或は米量の多少を標準として調節に著手すべきや否やを決定すべしとするものあり、此の說は理論に於ても實際に於ても當を得ず。

量を標準とすべしとの說は、前年度（玆に年度と稱するは、米穀經濟の年度にして、即ち、新穀出廻期たる十一月より翌年十月に至るの一年間を指す、以下皆同じ）の端境持越米高及米生產高に本年度の輸移入米高を加へ、是より本年度の端境持越米高、輸移出米高及米消費高を除去し、玆に本年度に於ける米量に幾何の過剩を生ずるや將た又不足を來すやを算出し、之に依りて米を買入るべきや或は之を賣出すべきや、又其の分量は幾何たるべきやを決定せむとするものなり。

前に詳說せるが如く、常平制度の唯一の目的が米價の調節に在りて米量に存せざること明白なるに於ては、調節の標準を價に取るべきは秋毫も疑を容るるの地なし、故に米量標準說の謬れるは理論上多辯を須ゐず、而して實際上に於ては此の說は實行不能なり、其の最大理由は米量の不足額の信憑するに足るものを豫算するの到底不可能なるの一事に在り。

前年度の持越米高及生產高は既定の事實なれば大體に於て信頼すべく、又輸移出米高には未知數を包含すれども其の年額平均三十餘萬石の少量なれば暫く之を問はず、本年度の持越米高も亦未來のとなれども、多年の經驗を以て必要量を豫定すること必ずしも不當にあらざれば、是れ亦暫く之を措かむ、然るに此の計算中の最大數量を占むる輸移入米高及消費高は如何にして信據すべき數字を算出するを得べきや、論者の主張する米量計算を爲すに當りて當該年度殘期間の輸移入米高及消費高は固より豫測に依るの外なく、而して此豫測は人智の能くする所にあらず。

米の需要と供給

	前年度内	輸移入額			輸移出額			輸移入	消費	人口	一人當
	地生產額	輸入額	移入額	計	輸出額	移出額	計	超過額	總額		消費量
明治42	51,934,	1,373,	1,155,	2,528	347,	31,	378,	2,149,	54.083.	49.550,	石 1.091
同 43	52,438,	894	863,	1,757,	518,	37,	555,	1,202,	53,640,	50.247,	1.067
同 44	46,[illegible]33,	1,857,	1,076,	2,932.	213,	59,	272,	2,534,	49,168,	50.956,	0.965
大正 1	51,712,	2,011,	900,	2,911	201,	51,	252.	2,658,	54,370,	51,[illegible]79,	1.052
同 2	50,223,	3,329,	1,275.	4,605.	208,	44.	252,	4,353,	54,575,	52,415,	1.041
同 3	50,255,	2,471.	1,837	4,309.	250,	48	298,	4,005,	54,261,	5[illegible],091,	1.022
同 4	57,007,	517,	2,567,	3,084	622,	62.	683,	2,401,	59,408,	53,6[illegible]1,	1.108
同 5	55,925,	287,	2,134,	2,420	677,	90,	768,	1,656,	57,581,	54,177,	1.063
同 6	58.412,	524,	1,981,	2,505.	837,	100,	937,	1.565,	6[illegible],008,	54,7[illegible]8,	1.096
同 7	54,568,	3,662,	2,872,	6,534	266,	81,	347,	6.187,	60,755,	55,[illegible]86,	1.099
同 8	54,099,	5,428,	4.020,	9,448.	25,	33,	158,	9,290,	63,989,	55,8[illegible]0,	1.145
同 9	60,818,	750	2,312.	3,062	96,	1[illegible]9,	135,	2,927,	63,715,	56,444.	1.129

備考　1.本表ハ農商務省編纂「米穀要覧」ノ抜萃ナリ。
2.米ノ數額ハ一人當消費量ノ外ハ總テ千石、人口ハ千人ヲ單位トシ以下ハ四捨五入ス。
3.此外内輸移出入アレドモ少額ナレハ特記セス。

外米輸入高は彼我米價の高低に從ひて年々多大の消長あることは何人も之を知る。然るに年度の又は年度央に於て誰か責任を以て之が將來の數量を豫言するを得るものあらむや、試みに別表を一瞥せよ、明治四十二年度より大正九年度に至るの十年間に於て、輸入總額は八十六萬餘石より四百餘萬石の間を上下して年々定まる所なし、斯る數字の豫測を將來に向て敢てし、之を以て米價調節の標準を算定せむとするが如きは、甚しく愼重なる考慮を缺けるものなり。

外米輸入高を豫測するの不條理なること此の如し、而して消費高豫測の困難に至りては更に之より甚しきものあり。

農商務省の統計書類には每年の消費高を掲示せり、是れ過去の事實なれば大體に於て信を措くに足る、然れども將來に至りて國民の米消費力を推算することは全く不可能なり。

將來に於ける米消費高　計算方法は、先づ過去の事實を參酌して國民の一人當消費量を推定し、之に當該年度の人口總數を乘ずるの外なし、然るに一人當の消費量なるものは、別表に見ゆるが如く、過去十年間に於て、少きは一斗に滿たず、多きは一石一斗五升に垂むとし、著しき增減あるものあり、此の差額の生ずる主因が國民生活の向上に存せざることは、明治四十二年度の一石九升餘が二年後の四十四年度に至りて九斗六升餘に減

少したるの事實に依りて明なり、然らば其の變動の主因は何ぞや、是れ他なし、一人當消費量は、米價の貴賤及一般景氣の良否等の事情に基ける國民の「食延ばし」及「食込み」の爲めに、年々著大なる變動を示すものなり、此の如き性質を有する一人當消費量の將來の畢竟豫測を許さざるは何人も直ちに諒解する所ならむ、若し其の豫測に五升の誤ありとせば、國民の總消費額に於ては無慮三百萬石の差を生ず。而して一人當五升なるものは一日に就て言へば僅に一勺四才にも足らさる少量なることを知らざるべからず、顧て從來米價問題の沸騰せし當時の米量の過不足額なるものは普通三四百萬石に過ぎざりしの事實を顧みるときは、一人當消費量の將來を豫想して總米量の過不足を推算するの危險にして其の寧ろ無意義に歸するの理は復た多言を費すを要せざるべし。

之を要するに米量の過不足を標準として常平制度に依る米の買上賣出を決定せむとするの說は不合理にして又實際に適せず。

常平制度施行の第一步として政府の最に著手したる米の買上は前述の米量說に從ひ、大正十年度の過剩米を四百十九萬石と推定し其の百萬石を第一回に市場より除去せむとせるものなり。而して此の推定の最も重要なる基礎たる米の一人當消費量は之を一石九升とせり。一石九升なる數字は大正三年以來七年間の一人當消費量中最多最少の二者を除たる殘餘を平均したるものに相當す。政府の計算若し此の種の平均方法に依りたるものとせば誤れるの甚しきものなり。蓋し國民は單に當時の經濟事情に從ひて食延ばし食込みを爲すものにして、決して過去數年間の平均數字を顧みて日々の食量を加減するものにあらざればなり。

政府の米量推算は毫も信賴すべき理由たきこと此の如しと雖、米穀法施行の當初未だ準備の完備せざる今日に於て米の買上を爲さんとせば或は斯かる說明を用ふるの已むを得ざるものあらむ、然れども永久に亘りて常平制度を發達せしめむが爲めには米量標準說は頗る非理にして大に危險なり、予は朝野識者の一日も速に相當なる調節標準を案出せむことを切望す。

米價調節の標準は米價に求むるの一途あるのみ、然らば米價の當否を檢定する準繩は如何、是を得るの方法固より甚だ容易ならず。然れども難は不能に異れり。既に理論に於ても實際に於ても價格を以て調節の標準とせざるべからざること明白なるに於ては、只百の難關を突過して之を發見せざるべからず、而して予は必ず之を發見するを得べきを確信す。

米價調節標準に關する卑見の要領は過去數十年間の事實を基

礎として一定の方式を設け、以て將來常に米價が一般物價と均衡を保てるや否やを知り、均衡を失するの甚しきに至りたるときは、自働的に米の買上又は賣出の時期の現はるべき制度を定めむとするに在り。

此の調節標準を定むるの方法に付ても多少の腹案なきにあらずと雖猶ほ未た研精を盡さざるの點あるが故に、今は他日を期して之を省く。

丙 米穀法の二大缺點

米穀法の制定に依りて常平制度の基礎確立したるは國家の慶事なりと雖、政府の米穀法案提出は燥急に失したるの嫌ありて、之に必要なる準備的考究の未だ完からざりしものありたるが爲めに、米穀法は、永久的制度としては種々の缺陷を有するものとなれり。缺陷の最も大なるもの二あり、調節標準の確立せざることと及外米管理の制を缺くことと是れなり。

(一)調節標準の不確立 調節標準の要領は前節に於て之れを述べたり。此標準は常平制度を有效に活用するに於て缺くべからざるものとす、若し一定の標準無くして、米價調節に着手せんとする時は、單に當路者の時々の見込を以て買上賣出の時期、數量及び價格を決定するの外無し。固より當路者が之れを決定するに當りては、先つ各種の材料を精査すべきは言を須たずと雖、結局之れを決定するに、一定の標準なきが故に、當路者の意思の向ふ所に從つて、如何樣にも其の材料を取捨選擇する事を得、此の如きは常平制度の實行上甚だしき疑惧を感ぜざるを得す。

イ 生産者及消費者の常時の不安 米價が幾何に下落せば政府は米を買上げて其の騰貴を企つるや、又幾何に騰貴せば米を賣出して之を低下せしむるや、此の點は米の生産者たる農家にも其の消費者たる一般國民にも米穀法に依つて發生せる重大なる利害問題なり。然るに其の調節の標準無く、唯當路者の意思のみに依りて、買上賣出が自由に取捨せらるゝに於ては、彼等は毫も適從する所を知らず。常に不安の念に脅かさるゝこと明かなり。抑々常平制度を設くる所以は、常に米價の平準を得しめ以て一には國民生活を安定し、一には米穀の生産を安固にせんとするに在るは、前に陳べたる所の如し、然るに米穀法の下に於て依然として、彼等は此の兩者の安定を得ること難く、居常自ら安んぜざるものあるに於ては、寧ろ米穀法を制定せずして百事自然の經濟理法に放任するを以て優れりとす。

ロ 調節着手豫想に基く米價の一層の混亂 米價調節に一定の標準ある時は、之に對する米穀相場の貴賤は天下萬

兼日々之れを耳目にし、如何なる時期に於て如何なる價格を以て米價調節に着手せらるべきやは何人も、大體に於て之れを測知するを得べきが故に、政府が調節に着手するに至るも米穀市場に影響　及ぼすことなからん。然るに此の標準を設けずして、臨機の裁量を以て突然調節に着手せば、着手毎に米界は甚だしき動揺を來すべく、其の未だ着手せざるに當りては、或は急に着手せらるべしとする者、或は容易に着手せられざるべしと信ずる者、即ち所謂强氣と弱氣とは、互に其機略を戰はし、定期關係者も正米關係者も、又地方の農家も、相競ふて、愈々米價の暴騰暴落を助長し、米界の混雜を大ならしむべきは、想像するに難からず。斯の如くんば、米價の激變を調和せんとして設けられたる米穀法は、偶々却つて調和を破壊するの結果を來すに至るべきは數の當に然るべき所なりとす。

八　各種の弊害

上に述べたるが如く一定の標準なく單に一時の權宜を以て、或は米の買上を爲し、或は賣出を行ふに於ては、關係者は自家の利害上、政府の措置に對して空しく袖手傍觀するを甘んぜざるべく、百方手腕を揮ひて當局の意向を探り以て其の利益の保全に努めむ、又實行に關する委員會の設けられたる場合に於ては、彼等は直ちに政府の提案を探知し或は直接に、或は縁戚故舊に由り進むで委員の意中を叩き、更に其の意を動かさむが爲めには、陋劣なる手段と雖、之れを施すに躊躇せざらむ、當局者が是等の弊習に對して嚴格なる警戒を怠らざるべきは勿論なりと雖、錯綜せる世事は多く此の所期に反するの結果を來すものなるとは何人も之れを肯定せざるを得ざるべし。官紀の稍々弛緩せんとせる現代に於て、斯の如く弊害の百出すべき方法を用ふるは、殊に最も忌避すべき所ならずや　然るに若し一たび調節標準にして定まらば、殆んど自動的に買上、賣出の時期價格數量自ら決定し、此の間當路者或は委員會等の自由裁量を許すの餘地甚だ少きを以て、此の種弊害の發生に機會を與ふることなきは明瞭なり。

大正三四年の交米價調節調査會に於て、政府が參考案として常平制度を提出したる場合に於て、當路者は深く調節標準を設くるの必要を感じたりと雖、當時の調査會の第一任務は調節方法の大綱を定むるに在りて、實行に關する周到なる準備は大綱る決定を俟ちて後始めて着手せらるべきものなりしなり。されば政府の當時の參考案には、調節標準の案を添加せざりしも、調節根本案の編成に干與したる當時の吏僚は、總て此の標準の絶對に必要なることを知り、若し此標準にして制定せられずんば、常平制度の如きは到底實行すべからざるものなりと信じ、又當時の調査委員中常平制度に反對したる者の多くは、標準の

制定不可能なるが故に、常平制度の實行に百害ありて一利なしと信じたりき、是れに由つて之れを觀るも、調節標準の制定は常平制度の根抵にして、之れなくして常平制度を行ふは、所謂沙上に樓閣を築くに同じ、何の日か崩壞せざるを得む。

政府は米穀法に依り目下實行中なる米の買上を決定するに、當りては、固より未だ調節標準の存するものなければ、政府は委員會の議を經て單に自由裁量を以て其の時期、價額數量を定めたり、目下の米買上は其の名は永久制度たる米穀法の下に於いて行はれたるも、其の實は、米穀法より分離して臨時的に決行せられたるの性質を有す、何となれば、永久法たる米穀法としては、實行の準備何ほ未だ全からざれは、完全なる行動を開始するを得ざるものなればなり、予をして忌憚なく言はしめば、本年の米買上は、昨年十一月より本年二月迄の間に於て、或は追加豫算に依り或は責任支出を以て、迅速に斷行すべかりしものなり、然るに事此に出でずして、應急臨時の米價釣上策を以て、根本永久の制度たる米穀法の施行に屬せしめたるは、聊か其の當を得ざりき、即ち本年米買上の實行順序に付ては、予は賛意を表するを得ずと雖、偶々其が永久法たる米穀法の下に行はれたるが故に、是れ亦一定の調節標準に依らざるべからずとして、難きを他に責むるは予の欲せざる所なり。

(二)外米管理制度の缺如　常平制度を實行して相當の功果あらしめんには、必ずや外米管理の制度を隨伴せしめざるべからず、今其の理由を述ぶるに先ちて、米量に依る米價調節の各種の世説及び其の長短を概評せんとす。

イ　米價不足の場合　米量の不足の爲に騰貴せる米價を調節するの方法として、從來世に唱へられたるもの頗る多し、而して之を概括すれば凡そ六項あり。

第一は米の消費節約論なり、米量不足の場合に於て、麥其他の雜穀或は蔬菜類の混食又は之と米との混食を行ふべしとの說の盛んに唱道せられたるは、一兩年前のことにて、讀者の記憶に新なる所ならん、當時政府に於ても、内務、大藏、農商務三大臣の連名を以て、地方長官に訓令を發し、所謂節米運動なるものに後援を與へたり、予は此運動を指して、惡事なりとは稱へざるも、之を呼ぶに俗論を以てするに憚らず、米以外の食料にして、其の價米より廉に、其の味米に同じからば、國民は他の慫慂を待たずして、自から進んで之を用ふべく、彼等は必ずしも米を捨てゝ他の食料に趨くことを絕對に嫌ふ者にはあらず、然るに國民が米に執着する所以のものは、數千年來米食が最も我が民俗の體質に適し、従つて其の味我等には常食として最も美なるに在り、現時に於ては如何なる食物も、米に代りて國民の

主要食料たるべき物未之あらず、抑も國民の嗜好は急遽變易を許さず、若し食料の變更を可とし、或は混食を是とせば、唯其の效果を永年に期して、居常撓まず孜々之を勸奬すべきのみ、米量足らず。米價騰し、國民の生活脅威せられ、米問題が爛額焦眉の急に迫りたる場合に至りて、遽々然として節米論を大聲疾呼するが如きは、予其の可なる所以を知らず、是れ予が之を斥けて俗論と呼ぶ所以なり。

第二は米輸入說の減免論なり、米量不足の場合に於て、輸入稅を減額若くは免除し、以て外米の輸入を進むべしとの說あり。此の說は米穀法に於ても亦採用せらる、是れ固より適當なる一方法たるを失はず、然れども其の效果は則ち甚だ微々として殆ど云ふに足るものなし、其の理由は第一、減免せらるべき稅額が米價に比して甚だ僅少なると、第二、減免實行の時期早きに及ぶ能はざる事情あるとの二點に存す。

米價の暴騰したる場合に於て、其の暴騰額と輸入稅額とを比較するときは、輸入稅額は極めて輕微にして、所謂九牛の一毛の如く、之あるが爲に外米の輸入を阻止するが如き事なく、又之を減免するが爲に、輸入を促進するを得べき程度のものにあらず。

外米の買付時期は十一月より翌年一月の間に在るを普通とす。然るに我國に於て從來米問題の最も喧傳を極むるに至るは多くは翌年にして、茲に始めて調節策の考究せらるゝ順序なり。其の考究の結果輸入稅減免の實行せらるゝは二三月より早き能はず。而して此時は既に外米の買付季節を經過せるを以て、如何なる方法を用ふるも多額の外米を輸入すること難し。

要するに輸入稅の減免なるものは叙上二個の理由に依りて、米量不足を補充するが爲には之に多大の效果を期待するを得ざるものなり。

第三は米輸入奬勵金交付論なり。內地に於て米の不足せる場合に、大に外米を輸入するが爲め、輸入者に奬勵金を交附せんとする說あり、是れ亦從來屢次提唱せられ、當局に於ても亦考究せられたる所なり。此の方法は前項輸入稅減免に關して述べたると同一の理由に依り、其の效果頗る微弱なるべきのみならず、無益に商人を利するものなり。但し輸入業者は坐ながら政府の特別交付金を手にすることとなれば、所謂夏も小袖にして、喜んで之に贊成すべきは勿論なり。

第四は外米輸入國營論なり、是れ米量不足を補ふに最も有效なる手段なるも、常時之に關する制度を確立せずして、時に臨んで周章狼狽すること從來の如きは、如何なる手腕ある當局者と雖、之れが效果を全うするを得ざるものなり。後に之を詳說

すべし。

第五は米輸出の禁止制限論なり、米價騰貴の場合に於て日本米の海外輸出を禁止制限せんとするの要望は、常に消費者側より熱心に唱へられ其の制限の手段は從來數回實行せられ又米穀法中にも規定せられたる所とす、大正八年に於ては、此の制度極端に實行せられ、其の甚だしきは北米シヤトル在留邦人が、新年の餅の原料として熱望せる糯米の輸出をも拒絕せられ、僅かに特別の條件の下に之が許可を得るに至りたるが如き事例あり、抑々日本米の海外に輸出せらるゝは、年額約三十萬石にして、我國に於ける生產高の二百分の一に過ぎず、(歐洲大戰中に於ては七八十萬石に上りたることあるも、是れ前古未曾有の唯一の例外たり、而して此の輸出米の大部分は實に我海外在留同胞の主要食料に供せられ、その外國人に依つて使用せらるるは糊又は菓子の原料たる僅少の部分のみ、外國人は米を食用とする場合に於ても、粘り氣多き日本米を好まずして、外米の淡泊なるを擇ぶの風あり、故に日本米の輸出は之を自然に放任するも、歐洲大戰の如き場合を除きては、其の額決して多大に上るを得ざるものにして米量維持上顧慮するに足らざるが故に之が禁止制限を爲すの必要なし、況んや之が爲めに萬里の波濤を凌ぎて異鄉の風土と戰ひつつある勤勉なる同胞の生活を脅かすに至るに於てをや。

米價暴騰の際恰も國內に現存する外米の輸出を禁止制限するは固より必要たり。然れども有効に其の結果を收めむには外米管理の制度に待たざるべからず。

第六は貯藏米の賣出なり。米量過剩の場合に買上げたる日本米を、其の不足の時に賣出すは、米穀法規定の行動にして其の大に效果あるは言を須ゐず。若し之に加へて平時外米を貯藏して有事の日に備ふるを得ば更に可なり。是れ亦後段に詳述せむ。

ロ　米量過剩の場合

米量過剩の爲めに低落せる米價を調節するの手段として、曾て世論に現はれたるもの大凡六項あり。

第一は米の加工を獎勵せむとするに在り。價格過廉なる米に加工して普通食料以外の用に供し、以て普通食料としての米の量を減ぜむとするの說なり。是れ大正四年米價調節調査會に於ても、熱心に論議せられたる所とす。此の趣旨は必ずしも非難すべきに非ず。或は頗る稱揚するに足らん。然れども其の方法は米量不足に對する消費節約論と同じく、平素に於て常に留意考究すべき問題にして、米量過剩の場合に至りて、遽に之を行ふも寸效なし。

第二は米の輸入税增加。第三は米輸入の禁止制限。第四は米の輸出奬勵金交付等の諸說なり。是れ亦た從來屢々唱へられたる所にして、第二、及第三、の一部は輸入税の減免、輸出の禁止制限と共に、現に米穀法中に規定せらる、然るに是等三樣の手段の孰れも效果頗る微少なるべきは、輸入税減免、輸出禁止制限及び輸入奬勵金に付て述べたる所と其の理を同うし米價調節上多く望を屬するに足らざるのみならず、却て弊害を伴ふものあり。

第五は米の輸出國營論なり。此の說も亦た曾て考究せられ、時に實行せられたることあり、然れども其の效果は則ち之を見るを得ざりき、日本米に付て之を見れば、前にも述べたるが如く、海外に於ける需要量極めて僅少にし、假令政府自から奮闘するも大量の輸出に成功するべきい理なし。畢竟無用の業たらんのみ、外米輸出の國營は平素外米管理制度を設けたる場合は格別とし、其の制度なきに政府が强ひて商人に命じて、之を行はしめんとすることあらば、事務上の煩雜甚だしく又國帑を無用に消費し、遂に徒らに商人を利するに過ぎざるに至るべし。

第六は日本米の買入貯藏なり。米量過剩の場合に於て日本米の買入貯藏を爲すは、市場の商品たる米の數量を減少するものにて卽ち過剩なる供給を減じ、以て需要と調和せしむる方法なり。從て米價調節上其の效果の多大なるべきは言を須たず。常平制度の設けられたる理由の一半は全く此に在り。

以上米量の不足と過剩の二つの場合に於ける各種の米量加減方法に付き、大體の考究を經たり。依つて茲に外米管理の必要と其の方法とに付て一言せんとす。

外米管理の必要　凡そ商品の移動は需要供給の自然作用に一任するを可とす。外米の輸出入の如きも亦此の經濟理法に委すべしとは、外米管理の制度を喜ばざる論者の唯一の理由なり。然れども若し食糧問題を擧げて自然に放任せば則ち已む、苟くも一たび米穀法を以て日本米糶糴の制を定めたるに於ては、日本米と共に國民食糧を成せる外米に對しても之が輸出入を制御するにあらずむば到底米穀法本來の目的たる米價調節の實效を完うする能はず。譬へば茲に一の水瓶あり、左右各一個の注水口を有し、底に水存口を備ふ。今此の瓶中の水を常に一定の水壓に保ちて飲用者の便に供せむとせば、必ずや二個の注水口は共に之を管理して注入量を加減せざるべからず。若し其の一を他人の管掌に委せば假令自己所管の注水口に對して細心不休の注意を爲すも、水壓は他人の爲に刻々に上下變動せしめられ、決して所期の目的を達するを得ざるべきは、三尺の童子

も亦之れを知らむ。外米管理を缺如せる常平制度の不完全なるは實に全く此の水瓶の如し、予は常平制度の健全なる發達を切望するが故に、速に外米管理の制成りて、米量加減の手段の具備せむことを欲す、今其の理由の二三を添加せむ。

日本米の產額は國民食糧に充つるに足らず、必ずや外米を以て補足するを要す、從來の輸入外米平均年額は實に約二百萬石にして、米價問題沸騰の場合に於て過剩或は不足と推算せらるる米量の二分の一前後の巨額を占む、是れ當局者も亦異議なき所ならむ。而して其の每年の輸入額は國內の豐凶と景氣とに從ひ甚しく消長して一定することなし、其の一斑は別表に於ても之を見ることを得。

外米は此の如く我國の必需品にして其の輸入平均額は米問題の死命を制するに足り、其の年別額は增減常あることなし、是を以て若し外米の輸出入に對し平素深甚の注意を爲すことなくむば、外米は啻に米量補足の本務を盡すを得ざるのみならず。往々にして却て日本米の價格を攪亂することあるに至るものなり。

商業は私益を目的とす、故に商人が外米の輸出入を爲さむとするに當りては、一に內外米價の比較を斟、之に自家の思惑を加へ、苟くも利あらば或は買ひ或は賣り、固より國內の食糧問題を顧念するに遑あらず、殊に米價の變動激甚なるの時に當りては、外米商は外米の現今輸入を爲すを好まず、唯買付轉賣の間に利鞘を占むるを以て目的とするに至ることあり。此事例の極めて顯著なりしは大正六七年の交予の親しく明知したる所なり。是れ商業上固より當然の行爲なりと雖、國民生活の公益より之を觀れば內地の米量不足せる時は必ず外米を輸入し、剩餘あるときは必ず其の輸入を制抑せざるべからず、價の昂廉の如きは時に問ふを得ざることあり。況んや利鞘の如きをや、是を以て外米輸入を商業の自然に放任せば一面に於ては公益上所要の數量を輸入するを得ずして米價の暴騰を坐視するの已むるを得ざるに至ることあり。他面に於ては商人の思惑の爲めに公益上不必要なる多量の外米の輸入を見、因りて益々內地の米價の壓迫せらるることあり。此の事實は米價の暴騰暴落の場合に於て常に我國の經驗したる所、就中大正四年に於ける外米の米價壓迫は實に忍ぶべからざる　のありき。

或は曰はむ、米價の甚しく暴騰暴落したる場合に於ては米穀法の規定に從ひ、或は輸入稅の增減免除を行ひ、或は輸出入を制限し、更に進みては政府自から輸出入の任に當り、以て米量を加減するを得るが故に、常時に於て管理制度を設けて商業の自由を束縛するの必要なし、況んや常時に於ても必要あらば米

穀法に依り政府自から外米の賣買をも爲すを得るに於てをや と。

予と雖、不必要に國權を以て商業に干渉すべしとするものにあらず。然れども必要に臨みて、急に輸入税を變更し或は輸出入を制限するも其の效少きは前に詳述せる所、輸出入國營も後に陳ぶるが如く過去の事實に照して頗る困難なり。果して然らば米價暴騰暴落の時に備へむが爲めに常時に於て豫め外米の輸出入を管理して其の數量を節制するは洵に已む得ざるの措置ならずや、加之、論者の言の如く、政府が米穀法に依り常時外米の賣買を爲すことあらば外米商は自家獨立の見込を立つるを得ざるが故に法律制定前に於て行はれたる外米の輸出入さへも、將來或は杜絶するの虞なしとせず。然らば則ち此際速に政府が進んで管理の制を設け外米全部の支配に當るを要するの理更に愈々明瞭なり。

米價激變の場合に於ける外米輸出入加減の必要は毎に眞に焦眉の急切なるものあり。米の生産が季節的にして工業品の如く需要に應じて容易に増減するを得ざること、供給が限地的にして需要が國民一般の日常必須なる米の性質上、量の僅少の過不足も價に及ぼす影響急激多大にして甚しく國民を苦しましむることの二の事實は、米價の暴騰暴落に當り悠々として時日を米穀の自然的移轉に借すを許さず。是れ我國に於ける米問題の特質なり。然るに從來行はれたる外米の輸入國營は此の急迫の時に至りて始めて遽に著手せるが故に、前に輸入税及輸出入制限に付て言へるが如く、其の時期は毎に外米取引の季節と齟齬し、當局の苦慮焦心も竟に失敗の譏を買ふに過ぎざりき。

之を事實に徵するに、大正七年米價の暴騰に際し、其の四月急に外米管理の制を定めて輸入國營に努力したりと雖、僅かに二百萬石を得たるに過ぎずして、米問題は依然全國に紛糾し遂に米騷動の不祥事を見るに至れり。其の後現内閣の成立すや一たび放任政策を取りたるも、八年末より九年初頭に及びて是れ亦外米輸入の計劃を定むるの已むを得ざるに至れり。此の計劃は一切の犧牲を忍びて專心米量補塡に努力したるものにて、其の方法中には國際關係上好んで行ふべからざるものをも包含せり。政府は斯の如く大に外米輸入に奮勵したりと雖、其結果は豫期の數量を輸入するを得ざるに歸せり。而して其の輸入したる外米の價格の如きは不條理に高貴にして、高きは一石百二三十圓に上り、其の平均に於ても一石六七十圓の多額を拂ひ以て漸くにして或數量の輸入を爲すを得たるのみ。先是、政府當初の計劃は一時國内米價緩和の色見はれたるに當りて一たび挫

折したるの形跡あり。此の挫折の結果は、後日外米價格昂騰の時に至りて終に此の如き高價を以て之を購入せざるべからざる苦境に陷ることとなれり。予は此の事實に依りて世人が外米管理の必要なることを痛切に理解せむを望むで已まず。

米價騰貴の場合に於て貯藏米賣出の目的を貫徹せむには、平素國家自から相當數量の外米を準備するを要す。凡そ斯かる場合に於ける米量の補充は、賣出額に限度なきに由りて始めて之を全うするを得るものなり。然るに豐年に於て政府の買入貯藏を爲すを得る分量には自から限度あり。此の時若し凶年に備ふるに必要なる數量を强ひて買入れんとせば不當に米價を昂騰せしむべければなり。此の限度ある貯藏日本米を以て限度なき凶歉の不足量に應ずるの不能なるは識者を俟たずして之を知る。然らば其の缺陷に備へむが爲めに、平素適量の外米を貯藏すべきは當然なり。

此の目的は現行法に於ても之を達するを得ざるにあらざれども、政府が一定の規律なくして隨時に外米の賣買を爲すときは外米商は其の業を廢するの已むなきに至り却て外米輸入を妨碍するの虞あること前に言へるが如く、又其の貯藏外米の入換及國內賣出に付ても煩累尠からざるべし、寧ろ一般に外米管理を斷行するに若かず。

外米管理の必要なること此の如し。政府は宜しく速に其の制度を確立し、日本米糶糴の現行法と相竝んで米價調節の重任に當らしむべきなり。蓋し二者は兩輪兩翼の如き歟。

外米管理の方法

外米の輸出入を政府に於て統一するの必要なるは、前に架說せる所の如し、此の制度は從來往々外米專賣と呼ばれたるとあり、予も亦此命名を用ゐたる一人なり、然るに專賣なる語は、本件の目的を達するに不必要なる權力行爲をも包含するを普通とするが故に、或は世の誤解を招きたるとなしとせず。依つて今此の語を避けて管理の文字を用ふ。管理(Control)とは權力を以て一定の事項を支配統一するの義にして、其の機能廣汎なれども常平制度に於ける外米の關係に於ては、單に之れが輸出入量を節制するの限度に於て必要なり。

外米管理の方法に就いて二三の說明を要するものあり。

外米管理は必ずしも輸出入を政府の直營と爲すを要せず

外米管理の目的は、輸出入の分量を適當に增減し、以て國內に於ける米穀の需要供給を調和せんとするに在り、故に政府の希望に合致したる輸出入なるに於ては、之を爲すものの何人なるやは常平制度實行上寧も問ふを須ゐず、是を以て輸出入の實行は、若し必要あらば政府の直營と爲すも不可なけれども、或は外米商に委託して之を行はしむるも可なり。或は

に進みて彼等の計算に於て營業せしむるも可ならむ。此の最後の場合に於ては政府は不必要なる分量の輸入及過大の輸出を制遏すれば足り、彼等の敢てするを欲せざる多量の輸出入は、或は直營を以て、或は委託に依りて政府自から之を行ふべし。

外米の內地に於ける買賣は一切自由とす　外米管理の目的は國内に於ける米量の調和に存するが故に、既に之が輸出入量を節制するを得ば、其の一たび内地に入りたる後に於ては、内地米と同じく各種商人の自由なる取扱ひに一任するを至當とし、政府は毫も自ら之が販賣に當らざるべからざるの理由なし、是れ普通の專賣と全然其の趣きを異にせる最も重要なる點なり。

或は外米管理を行ひて輸入商の自由行動を制限する時は、彼等に對して相當の賠償を爲さざる可からずと云ふ者あり。若し其の必要あらば常平制度の大目的を達するが爲には、國家は固より之に應ずるに躊躇せず。然れども、外米貿易の實際に顧みれば、假に絕對に外米の輸出入を禁止すとも之が實施の際相當の除外を許さば國家は何等賠償を爲すべき理由なし。從來外米貿易に從事する者は、全國を通じて一二の大商店あるのみ、而して彼等が經營せる外國貿易は、廣く百般の商品に亘り、外米の如きは其の僅少なる一部たるに過ぎず。此點に於ても、外米管理が輸入商に格段の不利を與へざるを知るべく、加之既契約に屬する輸出入を禁遏せざるに於ては、彼等は新たに取引を爲すを得ざるに止まり。毫末も既得の利益を害せらるることなし。　終

（大正十年六月二十五日脫稿）

都市と國民生活

諸井四郎

（一）

歐洲大戰の影響を受け我國富は著しく增進すると共に經濟狀態も一變し、貧富の懸隔甚しくなりたると、一面には物價騰貴の爲め國民生活を脅威し、更に外來思想の傳播は之に共鳴する

者を生じ兎もすれば惡化せんとするの傾向にある。而も世界を擧げての不景氣は不自然なる好況の後を受け、其程度は極めて激烈で且つ永續性を帶びて居る。隨て失業者は今後益々多數に上り絶えず勞働爭議を惹き起さんとしつゝある。如斯く國民生活が攪亂された變態の下に在りては階級間の闘爭が漸く深酷ならんとするは自然の趨勢である。國民生活としての衣食住に對する經濟的價値を中心とした生活の改善、家族の保健敎養、藝術趣味性の滿足、若くは兒童の娛樂設備等新らしき生活樣式の慾望に適應する高級生活を爲さんとするは、理想として洵に望むべき所なるも、一定の收入を基礎として考ふる時は、容易に之を望むことを至難とする。畢竟資力　購買力を前提とする個人の經濟的事情を主たる條件とせねばならぬ。然るに餘裕ある上流階級に於ての生活は美化され、改善される事が割合に容易であるが、一般國民の大多數は恐らく人間生活としての必要條件すら之を滿足し得ざるに、況して所謂文化生活を實行せんとするは寧ろ難事に屬する。現在の國民生活を基準とする階級は多く勤勞者を對象とするが、其生活は餘りに物質化され、唯だ生存の手段としてのみ生存して居るに過ぎない。殊に都會の住民に對しては、其環境が內面的生活に於て神經を鋭敏ならしめ、趣味を殺減せしむべき作用を爲して居る事が甚しい。縱し理想の生活は直ちに之を實現するは至難なりとするも、少くとも現在於ける生活上の脅威を除くには是等の精神的不愉快を先づ一掃せねばならぬ。衣食足つて禮節を知り倉廩充ちて榮辱を知ると云ふが、現今の狀態に於ては、遂に國民生活の根帶を紊るものと云はねばならぬ。隨て在來の思想より超脫して資本家も、勤勞者も若くは勞働者も倶に覺醒し、自省し、所謂社會の大勢に順應して新らたなる道程に上ると共に、一面には社會的施設方法を講じ、相俟て國民生活の容易を求むるを以て必要とする。之に對しては都市の密集生活、交通機關の整備、往來の雜閙、市民の思想生活及び趣味生活等、爲すべき事少なからざるも、生活費問題、住宅問題若くは交通問題の如きは最も重要さるものとする。而して國民各自も亦生活費の研究に力を盡して消費の節約を圖るべきである。是等の施設方法は相俟て國民生活上に於ける脅威を防止し、緩和し以て安定に導くものと思ふ。

（二）

嘗て獨逸のエンゲル博士は國民の家計統計に關して四つの論斷を指摘した。曰く、一、所得の少ない者ほど食物費が家計の大部分を占める。二、所得の大小に拘らず、住宅費、燈火費及び薪炭費は略ぼ同一である。三、所得の大小の如何に拘はらず、衣服費

も亦略ぼ同一ほどである。四、所得の少ない者ほど自由に消費し得る教育、健康、娯樂の費用は遞減すると。然し此論斷は其後各種の統計に依つて一と四の論點は正鵠であつたが、二と三とは多少の修正を要する事が分つた、卽ち二は所得の少ない者ほど住宅、燈火及び薪炭の費用が増加し、三、所得の少ない者ほど衣服費が減少すると云ふ事である。要するに何れの國如何なる時代に於て消費の法則は複雜であるが、家族の貧困なるに從ひ、生計費の中食物に關する費用は増加し、而も幾何級數的であると云はれて居る。随一般國民の物質的生活を測定する基準となる。卽ち國民生活の主要なる問題は衣食住の問題殊に食料費の問題である。獨逸及び亞米利加に於ける家計統計に依れば、同收入の筋肉勞働者と精神を消耗する事多き官吏其他の勤勞者階級とは食物費の割合が前者に多い。云ふ迄もなく激烈に體力を使用する勞働者の生活は生理上食物の攝取分量が多くなる。

随　他の家賃若くは衣服費等の生活費を節約して之に振り向けねばならぬ。此點は我國に於ても同樣である。殊に物價の基準が米價に依つて左右される現狀にあつては、米價が騰貴し、他の食糧品の價格も騰貴する場合には、勞働者ほど著しく感ずる者はない。随て國民生活の將來を云爲しようとするならば、勢ひ米價の騰貴に一言する必要がある。[illegible]米穀法の實施を公布して其買上價格を發表した。固より備荒貯蓄を目的とし數量の調節を圖らんとするに於ては、豐作を擧げたる本年を以て適當とする。然し之が爲め價格の下落を防止して一部の大農を利益する事となつたが、未だ多數の國民を保護するものとは云はれない。如何にも昨年の收穫米は生産費の極度に膨脹したる際に於て生産されたもので、現作の價格を以てしては引合はぬかも知れないが、之を其前年に遡つて考へるならば財界好況の際、米價も亦暴騰して優に生産費を償ひ、相當の利益を擧げたのである。然るに一般物價の低落と共に、少なくも、尙下落すべき趨勢に在る以上は、是等の調節は如何なるものかと思ふ。幸ひに買上價格が昂騰を誘ふが如き傾向に至らなかつたが、戰前に比して高位に在る價格は依然として維持せられ一般生活を脅かす事となる。

（三）

國民各箇の生活狀態を緊縮して冗費を節約し、同時に物價政策を確立する必要がある。云ふ迄もなく奢侈は慾望を有する消費者の富力に對して、常に不權衡である。而も其慾望を滿足する爲めに要する費用と其結果とは到底一致するのでない。畢竟人間の虛飾、娯樂若くは放逸は殆ど無限に增進するものであ

るからである。之が爲め一家の經濟狀態は不安に陷り、家族の精神は亦質實穩健を缺くに至る。時に放逸惰情の如きは健康を害する事甚しい。單に一家の平和を害するのみならず社會的方面より見るも自然生產力の減少を來すの因となる。又衣服の如きも其適溫を保持し清潔を旨とし、普通の裝飾を程度とせざれば、收入の增加に伴ひ、異常の膨脹を爲すの傾向がある。玆に於て乎家計統計の必要を最も痛切に感ずるのである。所謂入るを圖て出づるを制すると云ふ私經濟的根本義に依り經費を節する基とする事である。畢竟生計調査の目的は私人の生活狀態を明瞭ならしむるにあるが、特に重大なる題目となつたのは所得の大小に應て消費の狀態が如何に變ずるかを知る點にある。加之國民の生活は各自の私經濟が集合して統一したる態様を現する。從て此統計あるが爲め救貧慈善等社會政策上の施設に對し正確なる解決を爲すを得るのである。何れにせよ國民が自覺して自家の生活上に於ける冗費を節約するを得るなれば、生活上の餘剩を得て幾分なりとも安易なる方面に轉ずる事を得る。次に現今に於は物價の昂騰が生活を脅威する事甚しい。昨年三月の恐慌以來卸物價と小賣の夫と値開きが特に著しい。物價指數は大正三年七月の指數を一〇〇とし、大正十年四月末は東京二〇〇倫敦一九二紐育一三一と云ふ最高位に在る。尤も物價全體としては戰時中の夫れに比して頗る下落して居るが、日銀の調査に依れば卸賣は戰時の一二五より最高四二五に上りたるもの現今二五一に下落し、小賣相場は戰前の一二八より最高四一七に昂騰たるもの現今三〇〇を示し兩者共に下落したるも、小賣相場の低落は卸賣に及ばず、畢竟日本人は歐米人以上の生活費を負擔する事となる。物價に就ては少なくも、戰後の變調を平調にならしむる方策を講ずるの必要がある。尤も戰前戰後とは經濟事情が相違するが、直ちに戰前の物價に歸せしむとは云はれぬが唯だ現今の變調をして平調なりと認むべき點までに之を調節すべきである。然るに事實は之に反して財政の著しき膨脹其他各種の財界救濟策の如き、金融緩漫の狀態を助長し、却て物價の下落を防ぐべき政策を執るは大いに反省すべきである。

（四）

世界を通じて都市膨脹と共に下層社會の住宅の缺乏は極めて重要なる問題となつた。一九二〇年の英國衛生省の調査に依れば、英蘭及びウエールスに於ては住宅の不足は五十萬戶に達す可、而も十年以前より之が不足を唱へられたりと。殊に戰後復員者の歸鄕に伴ひ益々之を感ずるに至つた。昨年四月十一日英國皇帝は宣して二十年前に父君が言はれた勞働者の住宅は現代

に於ける頗る重大なる社會的問題である。健全なる國民の發達は健全なる家庭に於て望む事を得る。隨て不安を滿足せしむ可家屋の供給は緊切なる手段である。之に對して極めて同情を以て事業の進行を圖らざるべからずと。之が爲め住宅問題は國家問題として高唱せらるに至つた。爾來英國政府は百萬戸の住宅を六十年間に百二十億圓を投じて建設するの計畫を樹てた。其結果從來の住宅法に大なる修正を加へ、各市町村の勞働者の住宅に國家が殆ど全部を補助して建設するに至つた。各國政府も亦之に倣ふて頻りに之に必要なる政策を設けて居る。翻て歐米に於ける住宅の狀態を見に其數量の増加方法として地域的に分散するか、空間的に擴張するか、二者何れかに岐れて居る。英米白に於ては專ら分布式である。而して一の建物に於ける實際の人員を見に、倫敦にては七八人其他の都市では四五人で在。米國にては紐育のマンハツタン二十人、フイラデルフイア、バルチモア五人、ボーストン、シカゴ、八人である。獨墺伊佛は之に反して集中式で在、ライプチ▼ヒ、ドレスデンは三十人、伯林は七十六人であつて、獨逸が集中式となつた原因は土地制度建築規定が土地家屋に對する投機心を煽つたが爲めである。兵營式の貸長屋を建築せしめる爲め、次第に高い建築となり、家賃も地代より騰つたのである。之が爲め風紀道德上の弊害は甚しく、殊に保健衛生上に著しい障害を見た。惡疫は流行し易く死亡率は增加する。隨て高層建築を禁じ、地代の騰貴を防ぐ爲め土地の所有に制限を加へんとする議論がある。之に反して英國の分布式は田園生活を喜びホームを娛む結果で國民性にも依るが前者の如き弊害はない。故に分布式の優る事は云ふ迄も無いが、唯だ之は交通機關の完備と相俟たねばならぬ。我國に於ける住宅の不足は内務省の調査に依れば全國を通じ十二萬二千八百戸内外にして最も多は大阪の二萬三千二百二十二戸東京の一萬七千七百九十五戸其他神奈川福岡・、兵庫及び長崎等である。遂に本年四月法律を以て住宅組合法を發布した。之は法人組織で地方長官、郡市長の監督の下に組合員に住宅供給を目的 するのである。云はゞ政府保護の下に俸給者階級が月賦方法に依つて家を所有する事の出來る樣にした。之に依つて幾分か住宅難の緩和が期待される事となつたが、當面の問題として俄かに間に合はぬ。此際富豪階級は進んで其邸宅を解放して地所を貸與するか、若くは家屋を建築して之に提供すべきである 最近此傾向が稍々著しくなつた事は喜ぶべき現象である。又一面には都市は其公有地を解放して簡易な屋の建築を爲て低廉に貸與する事即ち府營市營の必要がある。場合に依ては個人の空地を提供せしめて個人へ貸與せしむる仲介を爲す事も一の方法である。獨逸の如きに區役所が

明家明間の數を調べて公力を以て斡旋して居る。何れにせよ一般階級が住宅の困難を感ずる現代に在りては上下協力して之が救濟に務めねばならぬと思ふ。

（五）

現今の經濟社會に於ては國民生活は分業及び交換を基礎として其上に立つて居るが、之を支持するものは交通機關である。一般社會生活の向上發展の爲めに之を必要とする。殊に都市住宅難の今日に於ては距離を近接せしめて敷地の供給を增加し地價の騰貴を防ぐは高速度の交通機關に及ぶものはない。我東京の如き路面電車は短距離の往來には便利であるが、速力は頗る遲い。而も車輛の配給少き爲め雜沓甚しく、交通の安否さへ疑はれて居る。隨て市民自治的の公德心も要求せねばならぬが、車掌、運轉手の訓練も足らない。東京市民の增加率に對して餘りに施設の不充分から此結果になつたのである。殊に路面軌道は都市の發達に伴ふて益々走行の速度を減少して到底交通機關の充分なる任務を盡す事は出來ないのである。尤も待避線の增設に依り配車の調節を成し、若くは運轉系統の變更、乘換の整理等幾多改善の途はあるべきも、歐米の夫に比し及ばざる事遠しである。元來都市交通機關の發達は往來の迅速、愉快及び安全にあると云はるゝが、市電は之に反し常に神經を過勞して自衛的に氣分を緊張せねばならぬ。繁榮なる都市に於ては或程度までは止むを得ないが、今日の狀態は餘りに甚しい。殊に軌道なき乘合自働車が往來の人を脅かして居る。之は路面電車の補助機關として必要ではあるが、體面よりするも、危險よりするも時代に逆行するが如く思はれる、茲に於て乎益々交通機關の進歩改善を要求するのである。都市の發達に伴ひ土地の上下を利用する事は自然の趨勢であるから、高架線面より可なれども將來を豫想すれば地下鐵道を採ふべきである。東京の如き堀井戸さへ容易に掘鑿さるゝ所では倫敦の如く深きは地下百尺乃至百二三十尺を掘下げ得るかも知れない。紐育の如は地盤は頗る堅い岩石で在から、淺く開鑿した位で敷設し得も東京は倫敦と同じく鐵管を埋める必要なきか。唯困難なるは地下埋設物の取除けである。此地下線は西班牙のマドリッド、南米ヴヱノスアイレスさへも既に施設あり、米國の中央市にも計畫有と云ふ。地下線にせよ、高架線にせよ、是等の技術上の問題は專門家に俟つとして何れにせよ高速度鐵道の敷設する事を要求するのである。而も成べく縱横に連絡せられ、間斷なく住宅、工場公園等の往來を容易にする事が最も肝要である。倫敦、巴里、伯林等何れも約千丁程の鐵道線は連絡が付いて居るが、紐育、市俄古ボー

トンは地下道に依て連絡して居る。東京に於ても先頃地下鐵道會社の設立を見が、財界不況の爲、未だ工事にも着手しない。一日も早く之を敷設して都市住民の不便を除く事を急務とする。

（六）

都市計畫の施設により地域を擴大して交通機關を整備し、市民の物質的安定を圖り、都市の財政にして許すならば、若くは富豪の寄附に依り更に進んで文化的内容を充實して精神の向上に務め其幸福を增進すべきである。卽ち都市の中心機關として美術館、博物館を擴張し、增設し、其他各種の科學の講演會を開催し、社會教育の普及に務め市民密集地に於ては淸新なる公衆劇場音樂堂等の施設を爲して勞働施設と共に趣味の向上を圖り、又美術館は美術教育の效果を擧げる爲め勤勞者の休日を利用して講演により美術に關する知識を進め、其他遊園地、運動場、水泳場の整理擴張を行ひ、若くは兒童の圖書館、遊園地を設け娯樂機關とする必要がある。

如斯く物質的安定と相俟て精神的趣味の向上を期し、以て市民に淸淨なる文化的環境を創立し、市民生活と文化との接觸を圖り、其知識的、道德的社會的の精神方面の發達を促し、始めて國民生活本來の目的を達するものと信ずる。

都市の職能

工學博士　佐野利器

◇村落と都市

都市とは如何なる性質を有するか。村落が人と家とが分散して存在する所であるに比べて、都市は其の密集する所である。

此の密集なる性質の爲めに、都市には特有なる幾多の諸現象を發し、衞生上、保安上の諸問題、其他百般の社會問題を惹起し易い。從つて都市には是等に對應すべき諸種の施設經營の必要が伴ふ。村落は自然的であつて、都市は人工的である。精神は村

を造り、人は都市を造る』と云ふ諺があるさうだが、村の生活が自然的であるに比べて、町の生活は全く人工的である。此の反自然たる人工的と云ふ性質に基いて又特殊の問題が起り、特殊の施設經營をも要する事である。

又村落は農村と云ひ漁村と云ふが如く、主として食料品及び諸般の原料品の生產地であるに對して、都市は商業工業の地である。此の商業工業といふ職能の爲めに、都市には又特有なる諸問題があり、特有なる施設經營を要する。

村落は近親者の集合であるに反して、都市は知らざる者の集團である。而かも知らざる者が多數に複雜に相連關して營むところの共同生活である。此の知らざる者の共同生活と云ふ事の爲めに特に必要な行政組織もあり、財政組織もあり、更に市民として特に必要な公德の問題もある。更に又村落は變化が少いに比べて、都市は急速に成長する。卽ち人口が增加する。此の人口增加の急劇と云ふ事によつて　幾多の逼迫した問題を惹起する。之に對應する施設經營も亦特に重大なものがある。

村落の活動は其の性質が單純であるに比べて、都市は政治、行政、教育、藝術等に及んで其の性質が甚だ複雜である。卽ち村落は總括して國の基礎であると云はれる時に、都市は又總括して文化の中心なりと云はれる。此の文化の中心たる性質の半面には思想上、行爲上、風俗上忌まはしい事の中心地に墮り易い。また都市は村落に比して貧富の最も懸隔するところで、之れより起る諸種の問題も都市には伴ふ。是等の性質ある事に關して、都市には亦特有なる施設經營を必要とするのである。

之を要するに都市と村落との兩者は、何れを重しとし何れを輕しとすべきではなく、等しく國民數の重要なる部分を占め、共に國民生活上重要なる職能を分擔して居る。卽ち兩者の健全な發達は、相待つて等しく國運を支配するものである事を疑はない。とは雖も、正に村落と都市との間には、今述べたやうに、性質上の大差がある。職能上の大差がある。卽ち都市の性質上、職能上の大差に依つて特有な施設經營もあれば、また特に市民たる者に必要な知識、技能及び心得がなければならぬ筈である。從つて亦普通教育などの上にも差を見るが至當であらう。卽ち村落の健全なる發達を期せんが爲めには、國民教育と云ふ一定平等の教育に加ふるに、更に優良なる村民たるに必要なる知識、技能、心得の修得が必要であらうと同樣に、都市の健全なる發達を期せんが爲めには、國民たるの一定平等の教育に加ふるに、市民としての知識、技能、心得の教育無くんばあるべからざるやうに思はれる。

◇都市の急劇なる成長

嚮きに都市は急速に成長すると云つた。實に我國は農村の集合であると考へて居る間に、重要なる都會の數は近時著るしく増加したのである。尤も昔から人口の増加に伴つて、村落より都市が生れ、都市が更に膨脹するといふ現象はあつた事であるけれども、其の速度の急なるに至つては全く之れ近來の出來事である。我國に於ては都市の人口の總和は國民數中の小部分であつて、大部分は村民であると考へられつゝある間に、近時都市住民の數が著るしく増加して、全人口の著るしい部分をなすに至つた。斯くの如きは、我國は農を以つて基礎とすると一般に考へられつゝある間に、近時商業工業の著るしく勃興して來たことを示すに外ならないのである。

我國の本土人口は明治の初年には三千萬と謂はれた。明治廿六年には約四千二百萬になつたと云ふ事である。爾來年々約一・四乃至一・五%づゝ増加して、昨年行はれた國勢調査の成績に據れば正に五千六百萬を超えて居る。即ち近時は引續き年々約七十萬を増加する狀況である。斯くの如き全人口の増加は何を造りつゝあるのであるか。一方においては村落に自然に人口を増加して之を都市となし、又一方には既設の都市に村落から人口を移動して之を膨脹するといふ作用をなしつゝある。即ち一口に云へば是等人口の増加及び其の急速なる移動によつて都市を急劇に、成長せしめつゝあるのである。之を數の上で見ると、今人口一萬を以つて堺とし、人口一萬以下を村落と名稱け、人口一萬以上を集めた所を都市も假りに名稱けると、明治二十六年に於ける村落の人口は、全土人口四千二百萬中三千五百萬人に當り、即ち全土人口の八割四分を占めて居つた。當時の日本は故に未だ村落の日本と云つても差支へなかつた。然るに其の後三十年足らずにして昨年の國勢調査の際には、前に云つたやうに、全土人口五千六百萬となつたが、村落人口は其の中約三千九百萬人、全土人口の約七割にほか當らなくなつて來た。即ち明治二十六年以來全土人口は約三〇%を増加したに拘らず、村落の人口は約一〇%ほか増加して居ない。之を逆に都市の方から觀て云ふと、明治二十六年には都市住民は全土人口の一割六分ほかなかつたものが、三十年足らずにして昨年は遂に三割に達したといふ事になる。此の傾向を以つて進んだならば、大正三十年の頃には都市人口は全土人口の約五割に達すべき事を想像する事が出來よう。此の想像は假定ではなく、他にも根據を有する。但し此の現象を以つて農村の減退と考へるには及ばず、或は都市人口の集中によりて農村荒廢すといふ具合に

憂ふる人も無いではないが、農村は決して之が爲めに事實上荒廢する事はない。パーセントの減退は單に相對的であつて、農村人口其物は決して減じて居るのではない。即ち農の減退を意味するのではない。全土人口増加を何處に植民地として吐くかといふ心配の方が寧ろ正しいのであつて、農村に人の不足を訴ふる時代には決してなつて居ない。只都市人口の集中は、我國商業工業の隆盛を意味すると共に、却て憂ふべきは其の集中に依る都市其者の弊態である。

以上は全國としての都市の増加及び成長の狀況であるが、更に大都市の成長發達に至つては、速度の特に著しいものがある。明治二十六年には人口十萬以上の都市と云へば、東京、大阪、京都、神戸、横濱、名古屋の所謂六大都市に限られて居つた。其の人口總和と雖も今日の東京市一つに略ぼ似たものであつた。然るに今日は人口十萬以上の都市既に十六を算して居る。間も無く二十を超えようといふ趨勢になつて居る。其の人口總和も七百萬に近付いて來た。全土人口の一割を超える事遙かに多い。東京は明治の初年に比して人口正に四倍に垂んとし、大阪は既に四倍を超えて居る。

斯くの如き都市の急劇なる成長の現象は、日本のみの事かと云ふに決してさうではない。之は世界を通じての近代の特殊な現象であつて、日本こそつひ近頃の事であるが、歐米各國に於いては約百年以前から此の急劇なる傾向を表はして來た。百年以前の事を考へると、何處の國でも人口の大部分は村落民であつた事は、我國と異なる事がないのである。然るに其の當時から漸然都市人口の集中の現象を表はして來て、年々都市住民のパーセントを増大して、今日の歐米の事情を作つたのである。即ち今日に於いては人口一萬以上の都市に居住するものの總計割合といふものは、獨逸に於いても佛米に於いても、人口總和の七割に垂んとして居るし、英吉利の如く特に又早くから集中の現象を呈して來た國に於いては、正に八割に垂んとして居る狀況である。我國は現に三割に達した。今日から二十年後に於いて五割に達するであらうと想像する事は、我國の國勢より見て決して驚くべき數字ではないと思ふ。

◇現代都市の職能

斯くの如き都市人口増加の現象は何に由るか。實に現代都市の職能と因果關係を有するのである。又商業工業の組織の進化、即ち所謂産業革命に基因するのであつて、また都市人口集中を可能ならしめたる理由と結び付けて、更に其の奥を云ふならば、十九世紀以降の科學（サイアンス）の進歩に基く、と斯う云へるので

ある。即ち科學の進歩急劇なりしが爲めに、都市人口の增加も急劇になつたと云へるのである。

十九世紀以降の人類の生活は主として天産物其儘に依るの生活ではなくなつた。科學の進歩によつて製造工業の規模組織に大變革を見ると共に、凡ゆる物に加工し、凡ゆる物を變質變形して、而して是等の物を以つて生活するやうに人類がなつて來た。之れが交通運輸通信の技術の進歩と相待つて、人類の生活上に工業と商業といふ事が日一日と重要なる地位を占むるやうになつて來た。昔の生活は農だけでも可かつたらう。が、今日の生活は工業と商業とを其の重要なる部分としなければならなくなつた。而して是等の商工業は必然に人口の多數なる所に於いて行はれなければならない性質を有つて居る。即ち都市に於いて行はれるより外ない。都市に人口の集中し來つた所以は此處に在る。即ち科學の進歩に基いて商工業が重要となり、商工業が發達して人口を集中し、集中によつて亦た商工業が發達し、更に重要となるといふ因果關係を結んで進んで來たし、又進みつゝあるのである。

此の狀況によつて察する事を得るやうに、實に現代都市の職能は、主として商業工業である。往時の都市にも商業を主なる職能として存立して居つたものがあるにはあるけれども、多くは存立上他の要件を具有して居つた。即ち城下是れである。政治、軍事等は其の存立の要件であつて、此處に人が多く集まるが故に商業工業が併せ行はれたといふのであつた。即ち城下たる事が職能上主たる地位に在つて、商業工業は其の從たる關係に立つて居つた。斯ういふ具合で在から往時の都市を研究する者は、其の主たる職能から之を分類して、或は政治都市又は軍事都市と云ひ、教育都市、商業都市、工業都市、中には又見物の都市、溫泉別莊地など、都市の分類をして居る。併し現代都市は其の過去に於て如何なる性質を有つて居たに拘ず、發達の原動力は凡べて皆工業及び商業である。存立の要件も發達の要件も、今日に於いては商業工業が其の主たる地位にあつて、他の凡て、即ち政治でも敎育でも藝術でも、皆其の結果として從たる關係にある。それだから現代の都市は之を總括して凡べて經濟都市の種類として之を觀るべきである。日光、奈良、京都のやうな見物人を待つて居る都市は、若し相變らず見物人をのみ待つならば今後決して繁昌し得まい。存立が難しい。若し之を維持し得るならば、それは新たなる商業工業の力に賴らねばならぬ繁榮を圖らんと欲すれば、商業工業の施設經營に依らずしては能ふべきでない。別莊地であるの、溫泉地であるのと云ふ所は、數千人の人口を支ふるには足りようけれども、商業工

業に依らずして都市たるべき發達は決して期せられない。之に反して九州の八幡の如きは、製鐵工業によつて人口の稀薄な村落から今や人口十萬以上の大都となつた。呉は海軍工廠あるが爲めに、又さうなつて來た。此の間に昔から百萬石の城下で商業工業上施設經營の見るべきものがない爲めに、依然として百萬石の城下たるものがある。

然らば都市の商業工業は人爲的に之を昂進する事を得るや否や。斯う云ふ問題は丁度青年を捉へて人爲的に之を利巧にし壯健にする事を得るや否やと云ふ事と同一の問題である。其の可能なる事は今日は疑問には屬しまい。但、其の素質に應じて難易もあらう。其の能率よき方法をも異にしようと云ふだけの問題であり、其の途は實に商業工業上の施設經營及び市民の之に對する熱心といふ事に歸するであらう。更に其の途を細說するには經濟學者の手に委ぬべき多くの事項の存することではあるが、尙有力なる一つは一般市民殊に青年の商業上工業上の敎育である、又他の有力なる一は、都市の改良所謂都市計劃によつて商業工業の振興を誘致すべき施設經營を爲す事にあるを信じて疑はない。

◇都市計劃

都市計劃は商業工業の振興を誘致すべき有力なる施設經營であると云つたについて、都市計劃なるものに一言及んで此の稿の結びとしよう。都市計劃は歷史的に云ふと、いろ／＼な經過を經て居る。時代と共に其の理想とするところを變じて居る。十九世紀の初め頃に佛蘭西、墺太利等に於いて盛んに行はれたものは、貴族の都市計劃であつた。即ち貴族の邸宅を中心として、而して其の周圍から都市全體に及ぼして壯麗なるものを得ようとする計劃であつた。第二の時代たる十九世紀中葉以降の都市計劃は商工業の都市計劃であつた。即ち人で云へば貴族の都市計劃でなくして、資本家の都市計劃と云つて可からう。或は港を造り又は交通機關を整備し、工業地域商業地域を整備する等、悉く經濟的施設經營といふ事が其の主眼であつた。第三期即ち二十世紀の都市計劃は固より經濟的の施設經營を主とする點は第二期と變りはないが、更に民衆の保安衞生といふ事を同時に若くは離すべからざる關係のものとしての性質になつて來た。人を主體とすれば第三期は所謂民衆の都市計劃と云つて可からう。

我國に於いては明治廿年頃から市區改正條例が施行されてあつて、數年前に之が六大都市に擴張して施行される事になつた。併しそれは事實上單純な道路取擴げの事項の外に多く出で

ない。經濟的施設の方面から觀ても民衆生活の安寧といふ事から觀ても、極めて力の無いものであつた。遂に大正八年に都市計劃法なるものが編まれた。其の第一條には都市計劃といふものを能く定義して剩すところがない。之れによつても都市の職能は何か、及び其の職能を發揮し得るの途は何かと云ふ事を知る事が出來る。即ち其の文に曰く、本邦に於いて都市計劃と稱するは、交通、衞生、保安、經濟等に關し永久に公共の安寧を維持し、又は福利を增進する爲めの重要施設の計劃にして、市の區域内に於いて又は其の區域外に亙りて施行すべきものを云ふとある。是れ實に都市計畫の精神である。

都市と田園の經濟觀

法學博士　堀江歸一

田園の生活

經濟生活の發達の極めて幼稚であつた時代には、一國に都市とか、田園とか云ふものゝ區別がなかつたに相違ない。農業とか、牧畜業とか、林業とか云ふ樣なものが廣い面積の土地の上に行はれ、土地の面積を所業に投じるとの多い割合に、農業其他の生業に依つて、給養される人口の數は甚だ少なく、一平方哩に幾人と云ふ限られた數に止まつた。隨つて人の生活する所は總て田園であり、村落であつて、都市として見る可きものがなかつたのである。斯る場合に於ける人々の生活は如何なるものであつたであらうか。田園だけの生活であれば、生產される物資の種類は自ら少なく、分業や、交換の行はれる範圍も狹い譯であるから、人々は一家庭なり、一村落なりを單位として、其限られた領域内で、經濟生活を營むことゝ爲る。隨つて一家の家長は自分や、自分の家族と共同的に勞働に從つて、生產し得た物資に依つて、衣食の計を立て、時に他の家庭で生產された物資と自己の家庭で生產した物資と品質種類が違つてお れば、其間に交換を行つて、各自の需要を充すに止まるのであ

る。故に斯る生活に對しては、近代の人は一言に其れを原始的であり、未開的であると貶稱し去るのを常とする。固より斯る田園の生活に於ては、何等大なる慾望を起させる刺戟はなく、慾望を果さうとする努力もない、二六時中單調の生活を送るの外はないのである。

然し田園の生活には、生活の單調と生活程度の低いことゝに堪へたならば、生活の安全といふ一つの大なる保障がある。苟も人に相當の勞働力があり、又此勞働力を用ひて、生産上に働かせる意思がある以上は、農民として、樵夫として、將た又牧夫として、生活し得られる譯であつて、田園の生活に於ては今日吾人の見るが如き、社會問題や、生活問題には接觸する機會を得なかつたのである。

商工業者の生ずる所以

都市の生活は要するに資本制度の産物である。政治上の關係から云へば、國家は國の或る地點を定めて、政治上の中心地とする。此處には國の元首が宗住し、元首を中心として文武官僚が職務を執り、大小の官廳が設置され、其面積の大部分は物資を生産する働きを失ひ、他の場所から生産された物資を搬入して、之を消費することゝ爲る。斯る關係から一ツの場所が都會と爲り、又大都會と爲るのは、一に政治上の關係に基くものであつて、此都會が果して同時に一國經濟上の中心都市たるを得るや否やは自ら別個の問題としなければならぬ。

斯る政治上の關係を離れて、經濟上に於ける自然の發展に促されて、田園生活の行はれて居る間に、次第に都會が發達し、國民をして都市生活を營ましめるに至るのである。蓋し人の慾望なるものは、抑へんとして、抑へ難き一ツの性情である。田園生活は前に述べた通り、單調を以つて、其特色とする。然しながら其單調と云ふことは、總ての人が必ずしも同一の樣式を以つて、生活を營む意味ではない。人に天賦の能力に等差があり、世間に出て、働きつゝある間に於ても、能力に懸隔を生ずることの免かれ難きものである以上は、何時か田園に於て生活する人の間に於て、多くの土地を持ち、大なる規模に於て、農業其他の地方的事業を經營し、資本又は企業能力の働きに依つて、土地に産出される富の大部分を一身に吸收する階級を生ずるに至るであらう。而して斯る人が何時までも大地主として、農業にばかり從事して居るかと云へば、必ずしもさうではない。農業に從事して、爲めに得る利益には自ら限りあつて、其多きを期し得られない一方に、田園に於ても、時勢の進步と共に、段段欲望が增進し繁多と爲つて、種々の物資を需要するやうに爲

れば、地主階級で資本を蓄積した者は其資本を製造工業に卸して、斯く增加し來つた物質の需要に應じようとする。而して物資に對する需要と供給とを適合させるには、製造工業家と消費者との間に、商人と云ふ特殊の階級を生ずることゝ爲るのである。

商工業者の集中的趨勢

然らば商工業者は如何なる地をして、其業務を行ふであらうか。既に商工業である以上は、農業其他の抽出的事業(エキストラクチーヴ、インダストリース)と違つて、廣大なる土地を擁する必要はない、其産出する物資又は勤勞の價値に比較して、所要の土地は狹小なる面積を以て足りるであらう。然し其吸收し得る顧客は或る程度以上に多數でなければならぬ譯であるから、商工業は自ら人口の稠密である場所又は將來稠密に爲り得べき場所を選んで經營されることゝ爲る。即ち政治上の關係から、既に都市の中心點が出來、其處に多數の消費者階級が生活するやうに爲れば、必ず彼等の需要を充す爲めに、商工業が起り、商工業者が居住すれば、更に彼等の要求に應ずる爲めに、他の商工業が經營され、斯くて商工業の集中的趨勢を現出するに至るのである。

固より或る種類の商工業は原料品蒐集の自由であるとか、既製品販賣の便宜であるとか云ふやうな事情で、政治的中心點以外の場所に於て、經營されることもある。然し斯く商工業が或る規模の下に經營されるやうに爲れば、商工業に關係する供給衣食者なり、勞働者なりが必ず多數に住居し、彼等に對して、日常の必要品を供給する産業も起り、始めは一個の寒村であつた場所をして結局一個の商工業都市たらしめるに至るのである。

都會發達の要件

然らば都會として、一ツの場所の發達するには、如何なる要件を備へなければならないものであるか、私は其要件として、

第一、消費者階級の存在すること、

第二、其消費者階級は今後次第に增加する見込みのあること、

第三、相當の程度に於て、物資集散の便宜を備へて居ること、

の三點を擧げたいと思ふ。第一の條件があるので、商工業は大なる規模に於て行ひ得られる見込があり、第二の條件があるので、益々規模を擴張して、商工業に集中的趨勢を生ぜしめ得るし、第三の條件があるので、製造工業の産出した物資が低廉な

る價格で、消費者に供給されることを得るのである。左ればこそ、開港場などで、相當に船舶の出入に便利な場所でありながら、其背後に山岳を負ひ、多數の消費者を收容するだけの平地を持たない爲めに、都會殊に大都會としての發達を期し得られないこともあり、又一個の都會として發達す可き要素を備へながら、入市稅などを賦課して、殊更に第三の條件を蹂躙する爲めに、都會としての發達を沮害されるに至ることもあるのである。

前、第二、第三の條件は餘程深い關係を持つて居る。第三の條件で、相當の程度に於て、物資集散の便宜を必要とするのは、何故であるかと云へば、內外到る所の場所から、廉價で、原料品を蒐集し、之を材料として、製造品を產出し、更に此製造品を世界の到る所に頒布するに至らしめる爲めであつて、斯く製造工業が起つた曉に、始めて多數の人民に生活の方便を與へ、多々益々市民を吸收して、大都會の體裁を備へるに至るであらう。即ち第三の條件の下に、一の都會に製造工業が起る爲めに、第二の條件である消費者階級の增加に可能性を生ずるものと斷定しなければならぬ。商業が繁昌すれば、商業地をして都會たらしめるに難しとしないであらう。然しながら商業の繁榮に依つて、吸引し得る人民の數には自ら限りがあつて、其多きを期し得られない。固より商業と雖も、物の效用を增進する働きのあるのは勿論であるが、其效用の增進たる、物の地位を變換する爲めに生ずるものであつて、彼の工業が物の形狀を變換し、更に其地位を變換して、效用を著しく增すものに比較したならば、其大小は同日にして語るを得べきでない。大都會の發達は必ず其基礎を工業に置かなければならないのである。

斯の如く考へれば、我國大小の都市に於て、都會としての發達を期する爲めに、師團や旅團は勿論聯隊の設置をも希望する、大學は固より專門學校や、高等學校の設立をも必要とする。而して之を希望し、又必要とする餘り、地方選出の代議士を督勵して、中央政府に運動させたり、是等の設立を條件として、地方の有力者が政府當局に入說したり、設立に要する土地や、資金を地方で調達し、之を中央政府に寄附して本願を成就させうとするのである。詰り地方人士の方から見れば、是等の手段に依つて、其地方に消費者階級の增加を謀つたならば、都會としての發達を促すに至ると云ふ考を懷いて、斯る行動に出るものであらう。然し軍隊や學校を通じて、吸引し得る消費者階級の如き、其數から云つても、又其撒布する消費金の額から見ても、左ほどまでに大なるものではない、小資商業位は發達するかも知れないが、此以上に卸賣商業を盛にすると云ふやうな

ことは到底期し得られ可き次第でない、都會の發達は到底工業に依賴しなければならぬ。

都會の累積的發達

一つの場所が一個の都會として、相當の發達を遂げたからには、或る些細な變動に累せられて、遽に衰微するやうなことは滅多にない。例へば政治上の中心點として發達した都市が政治上の變革の爲めに、中央政廳の所在地を他の都市に奪はれたと云ふやうなことがあり、又一國の外國貿易上に於て主力を注いで居る販路が一方から他方に變り、貿易上の都市としての運命に打擊を蒙つたと云ふやうなことがあれば、都會の盛衰は直接に是等の事情に左右されざるを得ない。然し是等の變動は稀に起ることであり、又起つたとしても、他に之を緩和する新しい働きもあり、兎角大勢から云へば、一旦或る程度に發達した都會は益々累積的趨勢の下に發達を重ねるのである。蓋し都會生活に於ける一つの特色は所謂閑散階級なるものゝ勃興である。從來幾年かの間、活動に活動を續け、今や功成り、産を成した人であるとか、父祖の財産は相續するが、其家業を繼承するだけの能力を持たない人であるとか云ふやうな人々は純然たる消費者階級でなく、寧ろ閑散階級に屬するのである。彼等が生活上に於て爲さんとする所は所謂個人の趣味性を飽くまで滿足させやうとするのであつて、書畫骨董、俳諧茶道は勿論、衣服飲食に至るまで、財力と資力とのあるに任せて、數奇を凝らせる。而して閑散階級中の俗惡なる者や、富豪成金等で、現に社會に活動して居る者の如きは、精神なり、肉體なりに强烈の刺戟を受けて、耳目を樂ませ、其活動力を養はうと云ふ考へから、種々の娛樂を要求する爲めに、大都會には一方に頗る洗鍊された風流の起ると同時に、其一面には極めて俗惡なる、隨つて何人にも理解されて、其興味を惹くに足る娛樂の起ることと爲るのである。富は人材を吸收し、又美人を吸收すると云ふのは、昔から行はれて居る言葉であるが、必ずしも人材にも限らない、又美人にも限らない、富の在る所は必ず人の集まる所であつて、一旦或る數の人が集まれば、其集まつた人は更に他の人を誘ひ來り、斯くて都會の累積的發達を見るに至ることを以つて、自然の趨勢としなければならぬ。

都會と田園との對立

一國に如何ほど商業が發達し、工業が繁昌したとした所で、其國の到る所に悉く都會と爲つて、田園が總て消滅し去ると云ふやうな事實に接することは、到底望む可からざる勢である。

一國經濟の大勢から考へたならば、商工業の發達は一面に農業の衰微を招かざるを得ない。即ち上記の如く、商工業の發達と共に、人口が都會に集中する、一旦都會に集中した人民は都會の風俗好尚に憧憬して、二度と再び田園に歸農することを好まない。國家が軍隊や、學校を通じて、農家の青年を都會に召集し、幾年か都會生活を送らせた結果は如何であらうか。學生は學校を出れば、同時に都會に於て職業を求めようとし、歸休兵亦農家に復歸して、何年か前と同じように、鋤鍬を持つて、野良仕事をすることを好まない。即ち都會の發達は必ず田園に於ける農業勞働者の不足を甚だしからしめて、農業の衰微を招く一方に、國家が都會に於ける國民の生活を豐富ならしめる爲めに、價格の低廉なる食料品を外國から輸入する政策を取つたならば、益々田園に於ける農業は其競爭を蒙つて、衰微することを免かれない。

穀物を收穫することは、主要の農業である。此主穀農業は一方に農業勞働者の供給に不足を來し、他の一方に外國の廉價なる穀物の競爭を受け、兩者に挾擊されたならば、自ら衰微の外ないやうなものゝ、農業は必ずしも穀物の生産のみには限らない、家畜の飼養、花卉の栽培、蔬菜果實の培養の如きは、都會を圍繞する農村に於て、行はれ得る農業的事業であつて、交通機關さへ完備すればするだけ、是等事業の需用する物資の都會に運搬される區域は非常に廣い範圍に擴張されるのである。私は二十餘年前始めて英國に行つた時に、リヴアープール港に上陸し、同港から急行汽車で倫敦に直行したが、其際にリヴアープールから倫敦に至る百數十哩の間、全く耕作地のあるのを目擊しない。汽車の窓から、四方を見渡せば、到る所、放牧場であつて、羊や牛が悠々と遊んだり、憩つて居たり、倫敦に近づけば、溫室や、養鷄場があつて花卉蔬菜の類が栽培されたり、鷄が飼はれて居つた。而して倫敦の社交季節に爲れば、市を圍繞する田園の花畑から、日々幾ら花を買入れても、ホテル料理店又は私人の邸宅に於ける食堂を裝飾するに足らず、牛乳の如きも倫敦市を距る幾十哩の田園から、特別の裝置を持つた汽車で、日々規則正しく輸送されるものであると云ふことを確めた。斯る有樣であるとすれば、田園は都市の發達と共に荒廢する、兩者は共運命に於て兩立す可からざるものゝ如くにも見へるが、都會が發達して、富が集中すれば、其利益は自ら附近の田園を潤ほすに至ることは、論を俟たない、或る點に於て兩者の利害に調和す可き餘地を存するのである。

唯都市に集中した富が幾ら餘惠を田園に及ぼすとした所で、自ら限度がある。田園に於て最も有利であり、又多人數の勞働

を要求する主穀農業が衰微したならば、之に代つて幾ら牧畜園藝其他の事業が起つたとした所で、之に依つて多數の人口を豐富に給養することは、不可能と爲り、斯くて從來農業に從事して、田園に生活して居つた者は自分の意思に依つては勿論、生活上に加り來る壓迫に依つて、都會に移住し、新なる職業を求めたければならぬことゝ爲る。此變動は現在日本にても行はれて居ることゝ思はれる。現に最近數年間の好景氣時代に於て、東京でも、大阪でも大都會であれば、必ず住家が不足して市民に其棲息する所を與へることが出來なかつた。其一原因は人々の所得の豐なるに隨つて、從來下宿住いの者が一軒の家を望み、一軒の家に合宿して居つた者が其れ／＼獨立の住家を求める爲めであつたが、同時に從來農村で働き、田園で衣食して居つた人々が都會の好景氣に伴つて、都會で職業に就かうとし、爭つて都會に押寄せたことを以つて、重なる原因とする。而して今日の如く不景氣に襲はれた曉には、是等の人々は果して以前の鄕里に歸つて、田園生活に親しむであらうか。失業問題解決の一策として、失業者歸農論なるものは、昨年來隨分我國に於て唱道されたが、實際に幾何の效果を生じたであらうか。不景氣の色彩は昨年の恐慌襲來以後、今日に至つて次第に濃厚と爲るに拘らず、住家拂底の事實は毫も其趣を更めない、或は是れは人々が一旦生活程度を上進させた以上は、之を以前の狀態に引下げることの困難である事實に基くものとも云へるが、同時に好景氣時代に田園を棄てゝ、都會に來た人は不景氣と爲つて、職業を離れても、直に歸農しようとしない、歸農した所で、以前と同樣の根據に於て生活を營むのは困難であるから、同じ困難を忍ぶなら、大都會に於て、何か新生面を開拓するのが便利でもあり、又容易であるとし、斯くて都市に戀々たるに至らざるを得ない。即ち始めは、都市の生活なり、風物なりに憧憬して、都會に集まり、後には都市を戀ひ慕つて、之に離れることが出來ないとしたならば、都會が年と共に大を成すのは、當然の事實である。詰り一ツの都會を中心として、附近に若干の田園が存在し、其田園の境界を越へれば、他の都會を中心とした田園が現出するのであつて、都會と田園とは相互に對立すると云ふよりも、寧ろ後者の前者に附屬すると云ふ關係を認めるのを適當とする。

都市政策の必要

既に都市の生活に於ては、面積の割合に、多數の人口の住居することを以つて、其特色とする。密住は都會生活に離る可からざる事實である。密住が衛生上に、道德上に幾多の害惡を齎す

のは、爭う可からざる所であつて、密住者自身も亦之を不快とし不便とする、唯費用の點に於て、已むを得ず之を敢へてする者である以上は、吾人は都市政策に於て、一方に密住の弊を除くと共に、他の一方には都市に於て團體生活の行はれることを機會として、充分に團體生活の利益を發揮しなければならぬ。是れが都市政策の要點とす可き所である。換言すれば都會に住居する者に向つて、都會に住居しながら、尚ほ田園に住居すると同じ位の程度に於て、精神上の愉快や、肉體上の健康を享受せしめることが必要である。

是等の點から見て、我國の都會生活は果して其體を成して居ると稱され得るであらうか、都會生活の發達した結果として、住所と事務所又は營業所とが別々の場所に爲り、然も兩者の距離の隨分遠く爲るのは、當然であるが、是等兩所を往復するに、安全であり、低廉であり、又迅速である交通機關が市民に供給されて居るであらうか、(二)以前は中流以上の階級に居る人には自己の宅地內に庭園を持ち、趣味性の進んだ者は木石の布置を樂み、又子女をして自由に遊戲させることが出來たが、今日斯る事は中流階級の生活には望まれない。然らば之に代つて公園があつて、自由に行樂することが出來るか、將た又公共の運動場があつて、肉體上の遊戲を樂み得るかと云へば、其等の設備には甚だ乏しい、(三)都會の住民が燈火用に、熱用に瓦斯電氣を利用し、又水道に依つて、飲料水の供給されると云ふことは、其れだけ市民の生活を共同的にした所以であつて、各家庭に於て個々に洋燈を點じたり、薪炭を燃いたり、井戸を掘つたりした時代に比較したならば、手數費用の省略されることの幾何であるか、測り知れない譯であるが、冬季に爲ると瓦斯の噴出量が著しく減じたり、電氣は時に供給が斷絕したり、水道は盛夏の候には必ず何分止めと稱しと、市民を水攻めにするやうな狀態であつては、都市生活は到底完璧に達したものと稱されない、(四)否是等の供給の全からんことを望むのは、寧ろ贅澤の沙汰であつて、吾人をしてモツト根本的の註文を出させるならば、少なくとも人の步き得る道路が欲しい、耐火耐震の家屋が欲しいのである、(五)或は道路や、家屋は今日の儘であつても差支ない、今日の都會生活で、吾人が常に恐怖しつゝあるのは、生命に對する不斷の脅威であつて、腸窒扶斯、虎列拉、黑疫の如き、西洋諸國には近年殆と其跡を絕つに至つた危險なる流行病は絕へず我國の都會を襲つて、都市の生活を危殆ならしめて居る。而して社會衛生を脅かす源が下水道の不完全であり、又糞尿の處置の不備であることは分り切つた事實であるに拘はらず、其解決策は少しも講じられない。(六)當

市生活の明るかる可きものであるのは、當り前であるのに、我國の都市生活の暗いこと、恰も戰爭當時で飛行船の來襲を恐れて、燈火を滅した倫敦市と異ならないと評されゐ。(七)如何なる都會に於ても、住居區域と工業區域との間に、何等の區劃が設けられて居らず、都會の人家の參差たる所に設けられた工場で用ゆる燃料の種類に就ても、亦何等の制限も加へられて居らない、斯くて住家と工場とは入れ交りの姿であつて、少し大なる都會に爲れば、必ず同時に煙の都と爲り、埃の都と爲る。工場內で勞働する勞働者の衛生は工場法の下に、幾ら保護を加へたとした所で、工場其ものゝ發散する煙や、埃の爲めに、市民の健康の害されることの幾何であるか、吾人の想像に難しとせざる所である。啻に工場の煙りばかりではない、場所に依つては火葬場の煙まで吹き込み來ることゝのあるのは都市生活に於て、珍中の珍とするに足るであらう。(八)都會生活に於ては、田園に遠ざかることの結果として、新鮮なる魚介、獸鳥肉若しくは蔬菜の供給に不自由を感じるし、又供給にあつても、之を得るに就て、高價を負担しなければならぬ、殊に我國の大都會の如き、市場組織の不備である爲めに、是等の弊害を蒙り易い。現に私共が多年東京の生活で、實驗して居る如く、少しく雨が續くか、又は旱天が永引けば、東京市中の蔬菜は忽にして減少するし、不良の天候が一兩日重なければ魚河岸は休業で、全市に於ける魚の供給は殆ど其跡を絕つ。市民に常食とする物資の供給に斯る變動があ て、彼等は能く其生活に安定を得て居るのであらうか、一個の疑問である。

都市政策の下に、都市を發達させて、其生活を完全にすると云ふことは、要するに都市と田園と双方の有する長所ばかりを兼備した都會を造るのに外たらない。我國の都市の如きは、唯從來から都市に住居する人が繁殖する一方に、地方田園から新に移住する人 あるとすれば、多々益々是等の人々の生活し、住居して行くに任せ、住宅難を訴へようが、衛生の爲めに健康を害しようが、飲料水に缺乏しようが、火災で財産を失ひ、又生命を傷けようが、都市政策に於ては、何等の保護が加へられない、都市生活に於て自由放任を旨とすること、我國の如く甚だしきものは、他に其類を見ないのである。而して我國に於て都會生活の改良を當局者に要求すれば、必ず財源難を擧げて、改良を實行しない辯解に充てる。我國に於て、財源調達の難きことは、恰も仇討に出た者が親の仇きに廻り合うの難きと同樣である。然し事實は斯の如くであらうか。

私は本論に於ては、都會と田園との財政問題に深く觸れることを好まない。然し前論に於て述べた所を概括すれば、都會と田

園との間に於て、人々が移動し、多數の人が後者を去つて、前者に赴く場合に、移動するものは決して人ばかりではなく、人と共に富も移動する、少なくとも都會の富は田園の富よりも、急速の勢を以つて、增加するを常とする。而して都會に於ける富の增殖は必ず其獲得者の勤勉や、努力の結晶したものであるかと云へば、さうではなく、寧ろ四圍の狀況の結果として、生じたものが多い。市民の密住する爲めに、地價が昂進し、地代が騰貴する、住宅拂底の爲めに、自分の所有する家屋が建築後幾年かを經過した時に、建築當時の、又は其れよりも高い價格で賣却される。斯くて生ずる利益は經濟學の所謂不勞利得であり、偶成利益であつて、私人に所有させるよりも、社會公衆の有に移すことを以つて、正義に適つた處置であるとする。斯る目的物に課税しないで置いて、尙ほ都市の財政難を訴へるが如きは、當らざるの議論である。

　都市と田園との間に、大なる隔りの生じた今日、都會に住ゐながら、田園の長所を市民に與へることは、都市政策の理想でるとしても、尙ほ一個人が自己の力で、斯る生活法を行つたとしたならば、其れは甚だしき贅澤であり、又社會公衆の爲めに政府が爲す可きものを一個人だけで、專用し、獨占する嫌なきを得ない。例へば個人が都會の中心點なり、又中心點に近い處に、廣い庭園を築いたり、森林を構へて居つたり、建物に十數倍もする宅地を控へて居つたり、方々に控屋敷を持つて居つたりしたならば、是等は都會生活と田園生活とを混淆したものである。卽ち黃金に其萬能力を發揮させて、田園に始めて行はれ得る所を都會で强行するものであつて、之を行ふ本人には多少の愉快又は虛榮心の滿足が伴うとしても、社會の公益に反する故を以つて、之を制限しなければならぬ。此制限は都市政策の一要目たるを失はないのであらう。

何故に農村及農民問題を閑却するか

文學博士 三宅雪嶺

□

兩極端が相合ふといふのは、職業上最も著るしく農業に顯はれて居る。農業は最も重んぜられ、最も輕んぜられ、最も尊ばれ、最も卑められる。同一の人で、時として甚だしく重んじ、時として甚だしく輕んずる。昔から今日まで、產業に於ける農業の地位が種々變化し來りながら、此點に於いて變りが無く、實は農業の變化が何を意味するかも、深く注意を拂はれて居らぬらしい。一應昔農を主にし、漸く工商が盛んになり、遂に商業最も隆盛、士農工商と云ふたのを、商工農士と顚倒すべきであるとし、相當の理由あるかに聽え、或は近世の國家は農業立國より商工立國に移るにあると云ふたりする。併しいよいよ左うかと念を押す場合、躊躇するの餘儀なきに及ぶ。經濟學にて富を主にすれば、左う云へさう、あつて、富は何に基くかを尋ねれば、事が難しくなり、富を主にせぬとあつては、いよいよ難しい。暫く強兵は富國に出て、富國は商に出づるとし、生產の原料を何處に得るの意か。廣く他國より供給を得、之を妨げるものあらば、兵力を以つて擊ち拂ふべしとするが、之を保證する事が出來るか。之を保證するとして、斯くて國を立つるを標準とせば、他の國々も順次斯く成ると認むべきであり、世界を通じて悉く左う成るの曉、前に得た所の農產物を何處に得べきであるか。左ういふ事があるべきでないとするが、商工立國を是認せば、世界に向つて之を望むべき順序になる。自國のみ商工を以つて立ち、他國の長く農業國で居るを欲するのは、自分勝手の考とせねばならぬ。世界人類の上で考ふるとなつては、地球の面積に限あり、科學の進步に伴ひ、面積に比例して多大の收獲を得るやうになるとしても、遂に限りを認めずに居れず、やはり何時でも人類の生存に必要なるだけの農業を具へ置くを要する。但、國によつて農業に適するのがあり適せぬのがあるので、一樣に云へぬだけの事、商工を以つて必ず農業に優ると斷定しては、何處ぞで破綻を生ずるに極つて居る。

從來人口が増殖しつゝ、土地に窮する程にならぬ程で、先きは先きで何とかならうと思ふたが、今は先きをも考へねばならぬ。切迫といふ程でなけれど、捨て置く譯に行かぬ。之れも近年初まつた事でなく、かなり以前よりの事であり、實は遠い昔から疑問になつて居りながら、まだ〳〵と云ふやうな事で過ぎて來た。社會の上で調査し得るならば、事の簡單なるを覺えるが、過去及び現在の列國分立の狀態で、事が甚だ面倒になつて居る。或る國は地域狹く人多く。或る國は地域廣く人少く、それが互に便宜を圖り得ない事情がある。水の低きに就く如くにて、さまざまの事情で之を妨げ、近い將來に改め得さうもない。習慣だの意地だの、こだはりが多く、最も文明と稱し、又稱せらるゝ國々が、最もこだはるので都合が惡い。佛國革命以前貴族僧侶が全國の土地三分の二を占めて居つたとして、不都合を指摘された如く、白人が世界陸土の大部分を占め、他の之に入るを制限し、或は禁じようとする。同じく白人の國々に於いて、その勢ひがあり、世界戰役の原因となつて居る。文明國に於いて早く此邊に宜しきを圖つたならば、世界人類の幸福になるが、濫りに之を望むとも益が無い。英國の如く、太陽の沒せざる絕大領土を保つて居つても、本國は交通を遮斷されて乾干しになる恐れがあり、常に用意せねばならぬ。世界戰役に豫想した程の事もなかつたが、一時隨分心配した。今後とても全く憂慮が無いのでない。商工に重きを置き、以つて世界第一の富強國と成つて足らず、自給自足といふ程でなくても、いくらか自國で供給するの餘地を多くしたいとの希望がある。

□

一時農村より都會に移る勢ひの盛んであり、前世紀の初め十年毎に其數が目立つたが、後割合に目立たぬのは、種々の事情よりするものゝ、多少警戒するのも與つて居る。英國人の眼にはアングロ・サクソン、廣くしてチウトンは羅甸種族よりも田舍好きであり、其處に氣分の健全なる所あるを見る。佛國や伊國や西班牙や、都會に出でねば樂も何もなく、農村に居溜れぬ狀態であり、羅馬時代に農業關係の語は輕蔑を意味し、villain も其一とするが、アングロ・サクソン國の本家英國では、是等羅甸國よりも農業を重んぜず、農地を變じて牧場とし、甚だしきは羊を廢して鹿を飼つたりする。羅甸國でも農業が五割なのに、英國で三割以内に落ちて居る。それでも英人が田舍好きであるといふのは、全く跡形無い事でなく、都より離れて閑村にスヰートホームを作つて居るを蔽ふ事が出來ず、比較的であるが、田舍好きと云へる。耕作を廢めて馬を飼つたり、羊の代

りに鹿を飼つたりするのは、農業の害になつても、田舍氣分より出て居り、寧ろ農業以前の原始狀態に復らうとする所がある。鹿を飼ふは貴族富豪の消樂にせよ、天然を樂まうとする形があり、自由を好むと關係ないとせぬ。不生産的に程があると云ふので之を戒め、再び耕作を奬勵したが、變つても變らなくても、田舍氣分を失はぬ。都會と云へば、倫敦の如く七百萬人が集まり、大陸に類を見ぬが、それでも農村に特殊の趣味を覺え、閑暇あれば之に赴く。羅甸國に其事ないでなけれど、田舍に安んずるの氣分に乏しい。羅甸國が早く發達して文明に魁しながら、發達の漸く止らうとするは、自然界に自由の空氣を吸はうとする氣分の乏しいのに伴はぬとせぬ。米國は商工の進步し驚くべき發展を遂げつゝ、田舍氣分の打消すべからざるものがある。都會化する事を好むにしても、最も活動するものは田舍育ちであり、田舍丸出しなのが珍らしくない。refined gentleman を善い事としながら、餘りさう成らうと思はず、成れるならば成らぬでなく、骨折つてまで成るに及ばぬとして居る。リンカーンの如き、都會の人に嗤はれたが、嗤はれるだけ人望が多かつた。田舍風が好かれるのである。

□

併し農村より都會に移り、都會化するの勢あるは、全世界に見らるゝ事であつて、進步の著るしい國ほどいよいよ左うであり、田舍好きでも、飽くまで田園に止まらうとするのでない。表面に顯はれた文明は、農村より都會に移つる所に於いてし、いよいよ都會に移つていよいよ文明、農村は文明の不足と思惟される。アングロ・サクソンが田園好きで在とて、農村より都會に移る事羅甸よりも激しきを示す。進んで土地を開いて富を得るやうになれば、都會に逗まらずに居ようとて居れぬやうになる。田舍好きであつても、何故に農村に終始せねばならぬかを了解して居るのでなく、何處でも農村より都會へ移るのは、夏の蟲が燈に集るが如く、集まらずに居れぬとして可い。アングロ・サクソンは割合に都會に熱中せず、常に田舍を振返つて見るといふ位の所である。併し普通に所謂文明は都會に備はり、文明的事業は都會に始まり、都會を標準として事を爲し、進行に連れてそれで十分と思ひ、大いなる缺陷を氣附かなくなる。時々缺陷に注意するものがあつても、之に耳を傾けず、都會萬能を認めるとなしに、認むると同樣になつてしまふ。或る事變が起つて俄かに農産物が高價になれば、誰が耕作に從事するかと問ひ、其の忽せにすべからざるを云ふが、それも一時の事、何時しか忘れたやうになる。

□

世界戰役で直接の交戰國が痛切に食料品の缺乏を感じ、公園を變じて田地にし、庭園にポテトを植ゑたりし、今更らの如く農業を必要としたが、戰後何程の重きを置いて事を爲すか。兎も角も歐米で日本よりも注意を拂ふ所が多いと見える。我日本は之れまで農業を以つて立ち、今日でも人口の六割が農に屬し、最大政黨なる政友會は之を地盤にするに努めるが、農村及び農民が如何にして居るかは殆んど考へられて居らぬ。農は國の本と云ひ乍ら、農を卑しめずに居れぬ樣であり、士農工商と云ふても、德川時代に商を重んずるに傾き、明治に入つて此傾向の著しく盛んなるを見る。明治の初め地租が問題となり、竹槍騒ぎが多く、竹槍でちよいと突出す二分五厘といふ川柳が出たりしたが、農民は何の狀態であつて可いか、何時でも鍬を持ち、稗交りの米を食ふべきか、都會の人と何の關係になるのを適當とするか。農民が蝙蝠傘を差し初めた頃、百姓があれでは仕樣がないではないかと云ふ聲が高かつた。議會でも百姓が奢つて困ると云ふ事であつた。衆議院に農家關係の多いに拘らず、百姓が奢つて困るとの聲が絶えぬ。都會で何と云ふても、農家で都會の眞似し、或は附近の町に先んじたりする。百姓が奢つて困ると云ふて居る間、次第に米價が騰り、或は野菜が缺乏し、都會の人が困難するだけ、農家が裕福なやうであり、奢るも奢らぬもなく、金があるので買ひたいものを買ふのを當り前の事と見ねばならなくなつた。然し農家は地租問題に亡國視になれ、平時特別の事なく、米價が高ければ多く購買し、安ければ買上げを迫り、普通の相場なれば何事もない。

□

之れに反し世界戰役で勞働問題が熾んになるに伴ひ、日本でも其問題が喧しく、資本と勞働との關係を如何にするか。議論に次ぐに運動を以つてするか、農業勞働者が何程與つて居るか。問題にならぬでなければ、殆ど措いて問はず、住宅拂底の爲め、政府に於いて法律を作つても、農村に何の注意を拂ふなど至らぬ。農村は現代の狀態で可いとするのか。都會に接近する農家は地價騰貴の爲め、居ながら成金になり、一般農家も其可能性あるやうに見えても、普通の生活狀態は今尚ほ百姓と云ふて輕んじた時と多くの違ひがない。越後の市島とか、庄内の本間とか、大きな家が家風を守るのは別とし、普通に名主庄屋とする位の所、何時迄も百姓家に居るべきであるか。之れに附屬した茅葺きの内に小作人が棲まねばならぬか。住宅拂底に農村より都會に移るものの多いのが一つの原因になつて居るが、都會に建築を問題にし、農村を捨て置くべきか。農民の食衣住を如何にすべきか。前に百姓の生活と認めて來た所のものが當然であ

るか、地主と借地人及び小作人との關係を如何にすれば可いか。資本勞働問題と共通になつて居りながら、之を輕んずるの嫌ひないか。英國で商工業のますます熾んにならうとした時、農産物は植民地若しくは他國より得れば可いとしたが、其時農村の荒廢を歎じたのは、國民の健全なる精神及び體格が衰へると云ふにあつた。都會で立身出世するものは何代と續かず、必ず地方より間斷なく補はねばならぬ、農村が荒廢しては之を補ふに足らず。一朝事ある場合、兵役に堪へなくなるであらうと云ふた。初め憂へた程荒廢せず、戰役にも間に合つたが、今後何うであらうか。農村の健全と云ふのは當てになるか何うか。日本で選擧人に買收されるのは農村であり、都會はそれほどでないと知られて居り、百姓は常に百姓たるを免かれぬでないかと云はれる。併し其の買收されるのが、普通の所謂買收であるか。事を解せぬのみで惡意あるのでなく、事を解するに到つて、都會よりも賴もしくなりはせぬか。推測であつても、間違はぬ推測らしく思はれる。

□

今は多くの事、都會を標準にするけれど、農村を忘れては意外の珍事の起る事ないか。農民が靜かであるとて、之を棄てゝ置いては、何時か足許より鳥の立つに驚かねばなるまい。農民の利益に商人の利益と相一致せず、穀物が高ければ商が苦しみ、貨物が高ければ農が苦しむ事、昔よりの事であり、史記に「夫糶二十病レ農。九十病レ末。末病。則財不レ出。農病。則草不レ辟矣。上不レ過二八十一。下不レ減二三十一。則農末倶利。平レ糶齊レ物關市不レ乏。治レ國之道也。』とあり、燒打事件も其關係よりする。社會政策と云つてもとかく都會に偏し、商工業に偏しようとする。併し農は人類最初期の立場であり、ワシントンの如く、功成りて田園に退くは、高き性格の人の自然に考へ及ぶ所である。トルストイの思想に何の過誤あるにしても、農に無限の趣味を感じたのを察すべきである。トーマス・ハーディは曰ふ、『神は田舍に現れ、惡魔は都會に移る』と。全く根據ない事とせぬ。田園は麗はしいとして事實に之を認め難いのは、現代の狀態が宜しきを得ぬのであつて、耕作地が公園と同様に見らるるに至るを理想とし、如何にして之に近付くべきかを考ふべきである。別莊は農家の眞似をしたもので、今の農家は却て人が棲むを厭ふ。凡べての農家が別莊地に遊ぶやうになれば、なにほど幸福が増すであらうか。

都會文藝と田園文藝

——覺え書き——

本間久雄

都會生活と田園生活との對比はさまざ〳〵の方面から觀察されるであらうが、この二つが文藝上の題材としていかやうに取扱はれてゐるか、又は背景としていかやうに作品の中に織り込まれてゐるかといふことは可なり興味ある研究の對象であるに相違ない。しかし私は今これをする何の準備をも持つてゐない。たゞ文藝に現はれた都會生活と田園生活とについて、漫然と思ひ浮ぶまゝを漫然と書き記して見る。

都會呪咀の文學

都會は何と云つてもその時代の文明の中心であるだけ、善くも惡くもその時代の文明を代表してある。近代の都市が、物質文明を代表してゐるのは自然の理であるが、これに對して呪咀と讚美との相反した傾向を吾々は、容易に近代文學の中から求めることが出來る。

先年不慮の死を遂げたベルギーの詩人エミール・ヱルハアレンの詩に『火宅』と題するものがある。都會呪咀の一つの代表詩として擧げるに適はしいものであらう。故上田敏氏の譯を借りて左にその全文を錄して見る。

嗚呼爛壞せる黄金の毒に中りし大都會、
石は叫び烟舞ひのぼり、
驕慢の圓蓋よ、塔よ、直立の石柱よ。
虚空は震ひ、勞役のたぎち沸くを、
好むや、汝、この大畏怖を、叫喚を、あはれ旅人、
悲みて夢うつら離りて行くか、
濁世をつゝむ火焔の帶の停車場。
中空の山けたゝまし跳り過ぐる火輪の響。

なが胸を焦す早鐘、陰々と、とよもす音も、
この夕、都會に打ちぬ。炎上の焰、赤々、
千萬の火粉の光うちつけに面を照らす、
蟹黑きわめき、さけびは妄執の心の矢聲。
滿身すべて瀆聖の言葉に振れ、意志あへなくも狂瀾にのまれをはんぬ。
實に自らを衿りつゝ、將、叫びぬる、あはれ、人の世。

デリケートな、寧ろ病的と思はれるほど纖細な神經の所有者であるヱルハアレンのやうな近代人には、普通の人にはたゞ憎惡の的となつてゐる都會が恐怖と叫喚とを喚起する咒咀すべき一種の火宅として映じたといふのもあながち無理のないことであらう。

ヱルハアレンばかりでなく、例へば近代のデカダン派の詩人や高踏派の詩人などには、どちらかといへば、都會生活乃至都會そのものに對してかふいう咒咀的態度を採つたものが多いらしい。

尤も、ヱルハアレンを一圖に都會咒咀者と見るのは間違つてゐるであらう。彼れの有名な詩集『觸手ある都會』は、都會の悲慘な暗黑面を描くと共に、その中に更によりよき社會建設の可能についての信仰を裏づけてゐる點で、光明的な味ひを與へるものと云はれてゐる。しかし少くも上に擧げた『火宅』一篇の如きは都會咒咀の文學と見てもよいであらう。

永井荷風氏の作品

今のわが文壇で都會文明を咒咀したものを求めて、誰人も思ひ浮ぶのは永井荷風氏の藝術であらう。

荷風氏が咒咀の對象とした都會はいふまでもなく、「東京」である。明治文明の發源地であり且つその湊合地である東京の文化が、荷風氏の眼には、何等趣味の統一のない、氏の所謂「傳統の陶冶」のない粗野な、猥雜な、模倣文明に外ならなかつた。東京文明の結晶であるべき現代の建築にも、繪畫にも、文學にも、音樂にも一つとして、これが「日本」のものだといふ國民的獨自性の獨自の表現といふものが認められなかつた。この意味で荷風氏は、現在の東京文明を極端に憎惡し、極端に咒咀してゐる。

同時に、氏は、この亂雜無趣味な模倣的文明の雰圍氣の中にあつて、いかやうに吾れ自らを處理すべきか、言葉を換へて云へばいかにしてそこに安住の境地を展くべきかを思ひ惱んだ。思ひ惱んだその果てに、氏はついに現代文明に絶望した。そして現代文明に絶望した氏は、辛うじて過去の文化に安住の地を求めた。氏の作品に一貫してゐる過去尊重乃至過去偏重の傾向

はこゝから生れる。

氏の長篇小說『冷笑』は、最もよくこの間の消息を語るものでその主人公紅雨の苦悶と努力とは、作者自らが云つてゐるやうに、實に「現代の空氣の中に安住することの困難なるを嘆息し、併せてわが純良なる日本的特色の那邊にあるかを考究模索せんとした」ものに外ならなかつた。そしてこの場合の「純良なる日本的特色」なるものは、氏の「過去」の世界において求めたところのものであることいふまでもない。

荷風氏の過去尊重の傾向は氏の作物の隨所に現はれてゐる。その過去尊重に理論的根據を與へて「過去を重んぜよ。過去は常に未來を生む神秘の泉である。迷へる現在の道を照らす燈火である」と云ひ、「吾等の將來は、矢張吾等の過去よりしか發生しない」と云つてゐるが、いつの間にか氏はこの過去尊重の理論的根據を忘れて、たゞ〳〵過去のための過去尊重の傾向を深まゝにするやうになつた。そして氏が尊重の對象とした過去は、我が國過去の中で、最も技巧的な、アーテフィシアルな爛熟した德川のデカダンスの時代であつた。言葉を換へて云へば、頹廢した江戶の文明そのものであつた。從つて、荷風氏の過去尊重は、頹廢した江戶のデカダン文明そのものであつた。

荷風氏はこの頹廢した江戶のデカダン文明、言葉を換へて云へば、その江戶文明廢滅の詩味に限りなき渴仰の念を寄せてゐる。そしてさうすることの中に氏は「アングロサキソン人種が齎らした散文的實利的な文明に基いて、沒趣味なる薩長人の經營した明治の新時代」に對する憤懣と憎惡との念を遣つてゐる。

氏はその長篇『すみだ川』の由來を自ら說明して「荒廢の美を追求せんとする作者の止みがたき主觀的傾向」が江戶の名殘である隅田川といふ對象を得て、それによつて自然に發露したものであると云ひ、又、芝山內の靈廟を追懷してその詩趣を高調した『靈廟』と題する一篇において、フランスの詩人アンリイ・ド・レニエがヴェルサイユ宮殿の舊苑に追懷の涙をそゝいだのを羨望して、氏自身レニエに比較し、「その思想その詩才に於てはいふまでもなく天地雲泥の相違があらうとも、同じく生れて詩人となる。その滅びたる藝術を回顧する美的感銘の眞情に至つては、さして多くの差別があらうとは思はれぬ」と云ふて過去廢頹の詩趣に甚大の渴仰と讃嘆の情を寄せてゐる。

從つて荷風氏の過去廢滅の詩趣即ち江戶の都會文化に對する渴仰と讃嘆とには、西洋崇拜的な模倣的な、獨自性のない明治文化の粗野と猥雜とに對する猛烈なる反抗の念が裏づけられてゐる。この意味から見て、荷風氏の江戶文明讃美の藝術は、現

代のわが都會文化に對する呪咀であり、批評である。

私は必ずしも氏の呪咀、氏の批評に讃同するものではないが、しかしその呪咀的なところ、批評的なところ、そこにこそ詩人としての荷風氏の尊さがあると考へてゐる。

都會文藝としての助六劇

江戸の頽廢的文明は、吾々の詩的鑑賞の對象としては、或ひはここに汲んでも盡きない味ひがあるであらう。しかし吾々は見方を更へて、民衆本位の立場から見たなら、果してどうであらうか。

江戸の文化、今少し狹く云へば明和、安永から文化文政以後の所謂デカダンスの文化は、民衆本位に見るときには最も虐げられた文化である。一般民衆が爲政者を中心とした軍國主義的特權階級に抑壓されて、その民衆的精神を十分に發揮し得なかつた最も哀れな、又最も慘めな文化である。伸びるべきものが、伸び得ないで、中途で歪められたやうな文化である。江戸文化の基調をなしてゐるアーテフィシャリテーは、結局この歪められ、虐げられたところに生じた、畸形的特質に外ならない。そしてこの畸形的特質は又、實に江戸の都會文學の基調でもあり、背景でもあつたのである。

江戸文學の粹は歌舞伎劇に集められてゐる。そして吾々が更に江戸歌舞伎の粹を見ようと思ふならば例へば例の助六劇などを見るがよい。といふのは、助六劇は、當時の民衆、今少し、狹い意味で、所謂江戸ッ兒、即ち當時の都會の民衆の趣味好尚を最もよく現はしたものであるからである。

助六劇は、吉原といふ派手な遊廓を背景に、揚卷といふ遊女と助六といふ俠客との意氣地を中心として、これに武士對平民、富豪對平民、道徳對戀愛の葛藤を配したものであることは改めていふまでもない。そして、この劇の讃美者は、この劇に描かれた助六の俠氣に、武士に對する平民の反抗的氣分に、富者に對する貧者の反抗的氣分に、道徳に對する戀愛の高調に、その讃美の對象を置いてゐる。そしてそこにこそ、江戸ッ兒の町人道、即ち民衆的精神の現れがあると云つてゐる。

助六劇讃美者のこれらの説辭は、或る意味で確かに當つてゐる。しかし一歩進んで考へると、彼れの反抗に、どれだけ本當の民衆的氣魄があるであらうか。

「この五丁町へ脛をふみ込む野郎めらは、おれが名を聞いて置け、先づ第一におこりが落ちる。まだいゝことがある。大門をずつとくゞるとき、おれが名を手のひらへ三べんけえてなめろ、一生女郎にふられることがねえ。見かけは小

さた野郎だが肝が大きい。遠くは八王寺の炎燒ばいたんの悶つかけぢゞい、近くは山谷の古やりて、梅干ばゝあに至るまで、茶呑ばなしの喧嘩沙汰、男達の無盡の掛すて、つひじめ、ソーれや、はけ先のえゝ間からのぞいて見ろ。安房上總が浮繪のやうに見えるわ。相手がふえれば龍に水、金龍山の客殿から、目黑の不動の尊像まで御存知の大江戸八百八町にかくれのねえ、杏葉牡丹の紋付に櫻の匂ふ仲の町、花川戸の助六とも又揚卷の助六ともいふ若え者、まぢかくよつて面像拜み奉れエ」

これは助六の有名な臺辭である。當時の人氣役者が、この臺辭を云つて、大きく見得を切つたときに、當時の江戸ツ兒は恐らく何かしら溜飮の下るやうな痛快味を感じて、わけもなく喝采したことであらう。

しかし、これらの臺辭をよく嚙みわけて見ても、又は助六が舞臺の上でするさまざまの仕科を見ても、今日の吾々には、彼れの言動は全く無意味である。彼れの反抗は、徒らなる反抗のための反抗である。何等實質の力をも持たない空威張である。たゞ傍若無人に威張り散らすことによつて無意義な反抗を敢てしてゐる愚か者である。彼れは又前に擧げた彼れ自らの臺辭によつても明かであるやうに、常に輕快な警句と駄洒落とを弄んでゐる。そして彼れは彼れ自らのその輕快な駄洒落と警句との中に無限の快哉を感じて居る。無限の快哉を感じて得意滿面でゐる。いかにその反抗的精神の無意義であるかはこれによつても明かであらう。彼れには毫末も眞摯なところがない。すべてが遊戯的である。駄洒落的である。彼れは反抗をも戀愛をも義理をも人情をもすべて遊戯化してゐる。民衆的立場から見て、助六劇が、吾々の共鳴の多くを贏ち得ない所以はこゝにある。

しかし、一切を遊戯化し技巧化しなければ居られなかつた當時の社會にあつては、かくの如きは誠に止むを得ないことであつた。この點から云へば、都會文學としての助六劇は文化史的には可なり重大な位置を占めてゐることは爭はれない。

都會讃美の藝術

都會讃美の文藝として誰人も直ちに思ひ起すのはイタリイ未來派の運動である。

この運動は、詩、繪畫、彫刻等に亘つた運動であつて、詩人としても畫家としても、その先頭に立つたマリネッティが、矯激奇拔な「未來派の宣言」を書いたのは一九〇九年のことであるから、この運動は極めて新しい藝術運動であることといふまでも

ない。

　この運動の主眼としたところは、一切の傳襲から離れて全く新しくされた個々の感覺を以て自然を見ようとしたところにある。そして在來の傳統を離れた、更新的感覺を持つて事象に對するときには、それらの事象が靜的なものとしてゞはなく、動的なものとして映じて來る。普通に靜止してゐると思はれてゐるものでも、實際は動いてゐる。斷えず動いてゐる。吾々が、詩に、繪畫に、彫刻に、表現しなければならないのは個々の事象の内的勢力となつてゐるこの運動力(ダイナミズム)そのものである。

　これがこの運動の中心の提唱であつた。從つて最も動的なものは、彼等の藝術の題材として最も適はしいものであつた。同時に、彼等はその最も動的なものを二十世紀の物質文明科學文明の渦巻きの中に求めることの最も適切であることを知つた、そして一切の「過去」を排斥し、過去の文明を破壞しようとした。過去は傳統の蓄積に外ならないからである。

マリネッティの云つた言葉に

「愚か者を乘せて、漕ぐゴンドラを燒け。そして金屬の大きな橋の堅牢な幾何學と烟の浪をたゞよはせる工場とを空中高く建てよ。そして何處と云はず、活氣のない古い建築物を取除け。」

といふのがあるが、この簡單な言葉の中にも彼等未來派の藝術運動の如何なるものであるかは容易に推測し得るであらう。

　實際彼等は「すべての博物館を破壞せよ」とか「すべての古代遺物品を破棄せよ」とかいふことを公然と宣言して、一切の過去を棄てゝ、全く新しく生れた人間として一切の事象に對しようとした。その結果が、二十世紀の現在の文明並びに、暫くも停滯するところなく急速度に進展する將來の豫想乃至可能性に對して熱烈な渇仰を抱くのは當然のことである。そして二十世紀の文明は物質文明であり、又その物質文明が都會を燃點とすることはいふまでもないのであるから、彼等はその當然の歸結として、都會生活を讃美し、都會生活の諸相の中から彼等の所謂 "beauty of mechanism" を求めて、それを高調したのであつた。彼等の藝術が一面において都會生活の讃美である所以も亦こゝにある。

　彼等は二十世紀に適はしい情緒として、「鋼、嬌慢、熱、速さ」の情緒を描いたと云はれる。マリネッティの『破壞』と題する詩集などは、最もよくこれを證明してゐるといはれてゐる。『モダーニティース』の著者サミエル氏は、マリネッティのこの詩集の中から、次の一節を引いて、この矯激なる先覺者の詩が、いかに在來の詩的情緒と異つてゐるかを述べてゐる。序でなが

ら、左にそのまゝ錄して、從かう。

I bid ye pant your fury & your spleen,
I reck not the long roarings of your wrath,
O galloping Simoons of my ambition,
Who heavily the city's threshold paw,
Nor ever shall ye cross her sensual walls,
Ye neigh in vain in my stopped ears, already
With rosy murmurs steeped & stupefied
(And subterranean voices of the deep)
Like spells of freshness full of the sea's song.

ゾラの「巴里」

都會を背景とし又は題材とした作品の中で、ゾラの「巴里」などは見逃すことの出來ない世界的の名篇であらう。これなどを讀むと世界の大都市の一つであるパリ…、而も美と歡樂との世界であるらしく思はれてゐるパーリの、どん底に、いかに悲慘な生活が轉つてゐ、かといふことが、いかにも鮮かに、又いかにも力强く、吾々を感銘させる。そしてそこに流れてゐる作者の博大な人道的精神、熱烈な社會改造の精神に魅せられざるを得ない

この作の主人公である信仰の念の深い、ピエールといふ僧が都市生活に蟠つてゐるさま〲の罪惡を目睹するに及んで、これまで自分の信じてゐる神なるものゝ頼むに足りないことを悟る經路にも、更に科學の力によつて、よりよき社會が實現されなければならないことを悟る經路にも、吾々は十分に同感させられるが、特に私が、今の場合興味あるのは、作者ゾラの都會生活、とりわけその貧民窟の描寫である。

家とは名ばかりのむさくろしい破屋、而もさういふ破屋で一劃をなす狹い、汚ない、眞黑に煤けた町、そこにうよ〳〵と蠢いてゐる人間、人間か獸か一寸見てはわからないやうな汚ない人間、——さういふ悲慘な都會生活の一面を赤裸々に、微に入り細に亙つて、あるがまゝに描いてゐる。ブルジョア階級の紳士淑女は、恐らくこれに對して面を背けるであらう。安逸に馴れた彼等にはこれらの描寫は、餘りに恐ろしく、餘りに醜く、餘りに汚いであらう。或ひは、思ひ高ぶつてゐるブルジョア階級の彼等には、これらの描寫の對象となつた世界は、餘りに輕蔑に値するであらう。それほど生活の慘めさが如實に描かれてゐる。さてゾラが何故にかういふ悲慘相を如實に描いたか?

それは決して讀者の安價な、センチメンタルな涙を誘ふためではない。作者はさういふ如實な、赤裸々の描寫をすることに

よつて、隠れてゐた都會生活の醜惡面の一切を明るみに出し、かくして、よりよき新社會的環境の創造に資しようとしたからに外ならなかつた。こゝに作者たるゾラの理想主義的人生觀の一面がある。

それに、今の場合、この作を讀んで、殊更に感ずることは作者のゾラが、パリーを心から愛してゐることである。パリーのどん底の醜惡面を明るみに剔り出したのも、結局はパリーを愛するからであつた。愛するが故に惡むといふ心境からであつた。この愛があつてこそ、ゾラは『パリー』のやうな作を書き得たのであらう、と思はれる。

都會を題材として文藝の中で、都會を厭離し、呪咀し又は讃美し、渇仰したものに比べては、ゾラの『パリー』のやうに、パリーといふ一つの都會に對する人道的熱愛を基調として、靜かに觀察し、靜かに批評し、而も新しい、よりよい都會生活の狀態を暗示したゾラのこの作のやうなのを、私は最も優れた藝術と考へる。

田園文學としての『土』

ゾラが『パリー』に於て、試みたやうな描寫の態度を、田園生活に於て試みたものを我が國の文學から求めて、第一に思ひ浮ぶのは故長塚節氏の『土』であらう。

『土』の藝術的價値については、故夏目漱石氏の理解に富んだ序文が、最もよくこれを語つてゐる。

「『土』の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。敎育もなければ品格もなければ、たゞ、土の上に生みつけられて、土と共に生長した蛆同樣に憐れな百姓の生活である。長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活狀態を、一から十迄誠實にこの『土』の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無欲で強欲で、殆んど余等の想像にさへ上りがたい所を、ありありと眼に映るやうに描寫したのが『土』である。」

これは漱石氏の序文の一節である。實際『土』の人物は、全く人間か獸かわからないやうな慘めな生活を送つてゐる人間である。從つてこのやうな慘めな人物の如實に描かれてゐる作を讀むことは漱石も云つて居られるやうに、苦しむ爲に讀むやうなものであるが、そこにこそ此『土』の大きな價値があるのである。

一體これまでのわが國の田園文學―田園生活を取扱つた文學は、長塚氏の『土』とは全く趣きが違つてゐる。そこにはいつも都會生活と對比して、善い方面又は好ましい方面だけを力調した田園生活が描かれてゐた。言葉を換へて云へば都會生活の

喧騷に對して田園生活の靜寂、都會人の惡ずるいのに對して田舍人の質朴、都會の自然の溷濁に對して田園の自然の明澄、といふやうに、すべて田園を都會に比して理想化してよりよいものであるやうに描いたものが多い。長塚氏の『土』のやうに田園生活に潜む醜怪汚濁をそのまゝに描いたのは殆んどない。ゾラの『パリー』の貧民窟の描寫が都會生活の汚濁悲慘な生活の暴露ならば、長塚氏の『土』は、それにも增して醜怪陰慘な百姓生活の暴露である。この點で『土』はわが國の文學中ユニークであるばかりでなく、恐らく西洋の、例へばジョルヂ・サンドの數ある田園小說などに比べても、ユニークな位置を占むべきものであらう。

『パリー』の作者がパリーを熱愛したやうに『土』の作者は鬼怒川沿岸の田園を熱愛してゐる。そしてその熱愛からその田園に醸される悲慘な生活を如實に描出してゐる。

私は『パリー』の作者のパリー熱愛の氣持ちを尊いとするやうに、『土』の作者の田園熱愛の心持ちを非常に尊いと思つてゐる。

今一つ『土』を讀んで感ずることは、『土』の作者が飽くまでも田園人としての氣質の把持者であるといふことである。ロマンロオランにフランスの田園畫家ミレーを百姓の氣質の畫家であると云ひ、そこに田園藝術家としてのミレーに重大な意味を認めてゐるが、『土』の作者も、たしかに、同じ意味において重大視さるべき人である。

本當の田園文學は、結局からいふ百姓の氣質の人によつて作られなければならない。

田園畫家としての森田恒友氏

『土』の作者から、直ちに思ひおこされるのは田園畫家森田恒友氏の作品である。

森田氏に田園畫家といふ肩書きをつけることは、恐らく氏に取つて迷惑なことであらう。といふのは氏には田園畫家として以外に多くの領域があるからである。しかし、畫家としての氏を頭の中に思ひ浮べるとき、やはり田園畫家としての氏の面影が、一番鮮かに私には映じて來るから、こゝでは、特に田園畫家としての氏を考へたい。

田園畫家としての森田氏は、やはり、田園作家としての『土』の作者と同じやうた藝術的態度を以て、自然の事象に臨んでゐる。卽ち自然に對して何等の好惡を挿まず、又、自分の主觀から、强ひて自然を矯めたり、自然を修飾したりしてはゐない。

「氏は常 て「寫」といふ心」(「アラヽギ」所載)と題する

で「君は寫生をすべきか、すべからざるかといふことは言葉になるだけに止まり、實際は一人々々神樣の祝福を受けて生れた視覺を透して始めて自然が存在するのだから、凡庸多數の徒の自然が必ずしも自然でない。だが非凡を欲する無理と飾りとから個人の自然を作らうとするのも自然でない。不純な邪路である。近頃畫界一面の潮流に、この無理の押し合ひを識者は氣づいてゐること、思ふ」と云つてゐるが、實際今の自然派畫家には、氏の所謂不純な邪路に陷つてゐるものが多い、或ひは平凡單調な外的寫實主義かさもなければ氏の所謂非凡を欲する無理と飾りとから、强ひて自然の形態と色彩とを歪め僞つてゐるものが多い。これらは何れも本當の意味の愛を自然に對して感じてゐないからによること、云ふまでもない。

森田氏は自然の中でも特に田園を愛し平野を愛してゐる。田園を愛するといふのも、決して、それを都會と對比して、センチメンタルに愛するのではない、氏の田園愛慕には、ずつと深い根抵がある。氏はその『平野雜筆』（「中央美術」所載）の中で、これについての面白い感想を述べて次のやうに云つてゐる。

「お前の近年の仕事は、平野の仕事が主になつてゐるやうだ。お前はそんなに平野が好きなのか」と聞かれる。「私は平野が好きとも嫌ひとも、はつきりとは云はれません。それは唯私の勝手なので、唯そんな風に運命が廻り合せて來てゐるに過ぎないのです」と答へるより外に仕方がない。全く僕は平野についての好惡の情を、はつきり表明出來るやうな感激も衝動も持つては居ない。唯僕は平野の中から生れて來て、平野の上で死んで行く樣な運命になつてゐるのだらう。僕の心は平野を信ずるのだ。僕の情は平野を親愛するのだ。假令ば他家(よそ)の子でも好きな可愛い子供がいくらもある。それでも萬一其子等が、自分の子供と喧嘩をすれば、自分の子供に加擔するお袋の心と同じやうなものだらう。」

すなはち氏に取つて田園愛慕は一種運命的な愛慕である。又曰く

「僕は平野に生れた運命をよいとも惡いとも感ぜずにうけるだけだ。僕の體にくつついてゐる土の臭ひも、なまづのやうにのらくらした氣の永い性情も、みんな仕樣がない。平野に生ずる自然の現象の樣にも、平野の景色の、のんべんだらりとした低能さも、僕には面白いのでも可笑しいのでもない。唯あるがまゝを、あるがまゝに受け入れて唯信じて、其中で嬉んだり淋しがつたりしてゐるに過ぎない」

いかにも田園愛慕家としての氏の人間が髣髴として浮んで來る

ではないか。

森田氏は生れながらの田園畫家である。以上引いた氏の感想からも容易に推測し得られるやうに、他の多くの自然畫家のやうに田園の風光に特殊の感興を牽かれたがために描くのではない。言葉を換へて云へば描きたいから描くのではない。描かずには居られないから描くのである。描きたいから描くのと描かずに居られないで描くのとでは、言葉の上では一寸した違ひであるが、心持ちの上では非常な相違である。前者は感興的であり、後者は宿命的である。生れながらの田園人である森田氏が、この宿命的な氣持ちで、田園に對するといふことはいかにも自然なことであらう。

氏の畫から受ける吾々の印象も亦、上に引いた氏の感想から受ける味ひと同じである。氏の畫はいかなる小幅を見ても、その中に一種名狀しがたい平野の詩趣、大地の匂ひ又は土の息吹きとでもいふやうなものがゆたかに汲み取られる。

氏の畫は、又丁度吾々が、例へば武藏野の一隅に立つて、無關心に天地を眺めたときに、物云はず、語らない冷酷な天地が、吾々に、どうにもならないといふ一種虛無的な嘆を自ら發させることがある、さういふ虛無的な味ひを與へる。哲學的とも云つてよからう。もし氏の畫を其飄逸らしく見えるところから、卽興的な、遊戲的なものと見る人があるならば、それは非常な誤りである。氏の畫ほど、眞劍で、非遊戲的な畫は恐らくまたとあるまい。

氏の畫は一面に、淋しい、虛無的な畫である。それは氏が前に引いたやうな宿命的態度で田園に臨むからである。それでゐて又氏の畫は一面にあたゝかい、明るい、時として涙ぐましい感じを與へる畫である。これは氏が心から平野を親愛し信じてゐるからである。かういふ一面は淋しく、虛無的で、而も一面あたゝかく明るいといふやうな複雜な味ひを與へる繪畫は、恐らく他に類例がないであらう。

田園畫家としての森田恒友氏は、私の最も敬愛して措かない藝術家の一人である。

農村文明の建設

帝國農會幹事 我農生 山崎延吉

都と云へば何んとなく雅美を連想させ、田園と聞けば誰れでも詩歌を思起すと說くは、現代に於ては何んだか調子が合はぬ樣になつた。

然し進步せる國、文明の高き社會に於ては、必ず兩面の存在を見ることが出來る。寧ろ兩面の存在が明瞭になることが、國の進步を示し、社會の文明が高まる證據ではないかと思はする。故に吾輩は將に來るべき文明、今日何れの國民も理想とする文明は、一本足のものにあらずして二本足のものであり、一面のものに非ずして兩面のものであるとする。

既往の文明は都の文明であつた。人が憧憬する文明の利器は皆都市に集まつて居つた、何人も望むで得んとする文明生活も都市生活であつた。今も尙文明とは都に發達するものであり、文明の花は都會の地で咲くものゝ如く思ひ、文明人とは都の人だと考へ込むで居るものもある。

既に既往の文明は一本足である以上、片輪のものであるは勿論の事である。一面のものである以上、存在を許さぬは當然の事である。今や造りかへを叫び、建て直ほしを唱ふるに至る、抑も故ありと謂つべきである。

眞文明とは何んぞや、一本足の都市文明に更に農村文明の一本足を副へて二本足のものとすることである。都の文明の半面に田園文明の半面を加へたものでなければならぬのである。換言すれば市民文明と農民文明との並進が、眞文明であり、新文明でもある。

長い〳〵既往の爲政者、學者、識者は、茲處に着眼するものがなかつた。偶着眼するものがあつても、何時の間にか都入をして犬の遠吠の如き議論をしたに過ぎなかつた。中には相當の說を吐いた者もあるが、所謂空論に畢つて實行が出來なかつた。稀れには經綸を實行したものもあるが、相續者がなくて本の木阿彌にかへつた。之れ人文開けて三千年を經たる今日、今更の樣な改造を叫ぶ所以である。

都と田舎とは、見るものが違ふ。都市と農村とは事情が同一でない。街方と地方とは環境が異つて居る。故に何んとしても人心に於て、人情に於て人氣に於て、異なるものがあるべきである。

吾輩は都市文明の特徴は物質的であり、有形的であり、形而下であるとする。故に人の目に映ずる衣食住の如きは、年々歳々立派になる、所謂生活の美化は都會の花であるとも見らる。而も人の目に見へぬ心裡には、下らぬ煩悶があり、犬さへも喰はぬ煩惱がある。又た人の視線を惹く各種の機關は完備する、即ち學校あり、圖書館あり、電車あり、自動車あり、電話あり、電燈あり、病院あり、公園あり、運動場あり、上水あり、下水あり、寄席あり、劇場あり、活動の常設館あり、カフェーあり、レストランあり、壽司屋もあれば、牛肉屋もある。而も人心に醸生する各種の黴菌類は、群をなし、塊をなし、人を惡に誘ふ。されば息まぬが如しである。成程見た所は、商工其他の事業繁昌し、資本の運轉は滑かで、成金、儲金、簇出して景氣よく見ゆる。而も日に月に物質慾に眩惑して、臭穢の氣分が漲りつゝある。

都市文明は、確に便利を開發する、然し便利は人を虚弱に導くものなることを知らねばならぬ、又た華美を發達させる、然し華美は人を輕薄に誘ふものなることを思はねばならぬ。又た享樂は進歩する、然し享樂の境に在りて墮落せぬものは尠いと云ふことも考へねばならぬ。事實、既往の文明國に於て先進國を以て誇つて居た、歐洲の天地に不祥事件が起つた、有史以來の悲慘な出來事が生じた。而して既往の文明國を以て任ぜし國々が、申合はせた樣に夫れに參加した。此事實は、既往文明即ち都市文明が人類を虚弱にし、浮薄にし、墮落せしめた證據である。

故に吾輩は、一本足の都市文明は、國を危ふし、社會を墮落せしめ、人類を衰亡せしむる、不具不足の文明であるとする。

斯く說き來れば、或は都市文明を呪咀するものゝ如く思ふもあらん。中には吾輩を目して今日の都市文明に對し、一種の反感を有する者とするもあらんが、之は人の評に任かせて置く、吾輩は衷心、眞文明を謳歌するものであり、新文明を要求するものであり、同時に社會と國家とが、健全に發達せんことを希ひ、凡ゆる人類が自由と平和とを獲得せんことを祈るものである。

故に茲に農村文明の建設を高唱し、田園文化の樹立を絕叫するのである。

從來農村の爲めに、或は農村自治と云ひ、或は農村經營と謂ひ、或は地方改良と叫び、或は民力涵養と呼んで、農村の繁榮、

農民の向上、田園文化を計劃したものである。之れは左様せねばならず、やらねばならぬことではあるが、吾輩は眞文明に貢献する農村文明の建設が基礎となり、根本となり、源泉とならねばならぬとする。換言すれば、文明の改造には、新に農村文明の建設が必要である、斯文明建設の爲めに、農村自治の振興も大切であり、農村經營の進捗も大事であり、地方改良も斷行せねばならず、民力の涵養も必要とする、と云ふことにならねばならぬとするものである。

農村の文明は、特徴として精神的なるを要する、無形の方面に貴ぶべきものがあり、形而上に他の擬して及ぶべからざるものが存在せねばならぬ。若し都市文明を花とするならば、農村文明は目に見へぬ根であらねばならぬ、其根の生きてる間、其根の栄へる内は、花は不斷咲くべきであり、散りても再び咲くべきであると同様に、農村文明は都市文明に對し、生命の源泉であらねばならぬ。

農村文明の特徴として、吾輩は二三の叙説を試みねばならぬ。

其一、隣保團結である。市町村が自治體になつた當時の勅諭に曰く、

朕地方共同の利益を發達せしめ衆庶臣民の幸福を增進することを欲し隣保團結ノ舊慣を存重して益之を擴張し更に法律を以て都市及町村の權威を保護するの必要を認め玆に市制及町村制を裁可し之を公布せしむ

とある。然し隣保團結は都市に於ては徹底的でないが當り前である。即ち人家は櫛比してるが、人心は十里廿里の隔りがある。甚たしきは、隣人同志で何處より來りしや、何れに勤むるや、如何なる身分のものなりやを知らずして、數年に及ぶ例は決して珍らしいことではない。然し農村に於ては、其居は數十の隔あり、數十町の距離ありと雖も、人心は軒を並べて住めるが如く、苦樂を共にし、喜憂を分つのである。之れ人情美の發露であり、人氣の優にやさしき所以にあらずして何んぞや。玆處に農村の文明が認められねばならず、認めらるゝ程に人情美の光彩が放たれねばならぬ譯のものである。

今日の社會問題として何人も重要視するは、都市に於ては勞資間の問題であり、農村に於ては地主對小作の問題である。今の爲政者、學者、識者等は何れも、勞資問題に沒頭して、之が爲めには行政を講じ、政策を立て、其協調に努めつゝあるが、所謂淺見者流と吾輩は敢て非難するものである。今日の制度は都市本位であるから、都市には各種の機關が具つて居る、從つて取締るにも事が容易である。而して勞働者の自覺も早いから、

下らぬ扇動に乘ぜらるゝものでない、故に直接行動と謂つても、之れ程恐るゝに足りないのである。論より證據は、彼の足尾の騒擾や、神戸の三菱職工の示威運動などを見ても分るではないか。

反之、農村には取締りの機關がない、農民の多くは自覺する刺戟に接し難い、民衆的訓練が出來ない爲めに、動もすれば煽動に乘り易く、直に直接行動をとる。而も其勢の猛烈なると、其波及の迅速なることは、殷鑑は遠からず露國の瓦解に徵しても分る筈であり、近くは「レーニン」の政策も斷行すること能はずなりし事に考へても明瞭であらう。

上下力を合せて農村文明の建設に努め、農民の心裡を開發し、農民の人氣を美化することが出來れば、從來久敷活動した温情は、必ず時代化するに相違ないと吾輩は信ずる。人も知るが如く當年の地主對小作の關係は、宛然親子の間柄であつた。情誼が中心であつて打算的ではなかつた。親が子の成人を樂しむ如く、地主は小作の繁榮を誇りとして居たものである。故に人情の結果、小作は地主を主人の如く思ふて奉公の忠誠をすら盡くして滿足したものである。誰れか此の人情美を非議するものぞ、何人か人間本性の愛の發露を呪咀するものぞ、眞にわが好きは人に振舞ふことが出來、己の欲せざる所之を人に施すことなきに至らば、彼此の間何の差別を生ぜんや、分配に何んの不均等を見んやである。吾輩寡聞なれども、秋田縣の立山第四郎氏の如き、愛知縣の丹羽政美氏の如き、熊本縣の永田市次郎氏の如き、孰れも小作者の思想と智識との開發に工夫し、彼等の經濟的地位の向上に努力し、眞に親子間の温情を交換してるが故に、在るべからざる人格上の差別を認むることが出來ないで居る。されば農村文明の一として、眞に隣保團結の大義が上下の人に體現さるゝならば、即ち人間自然の愛敬が活動することになるならば、何の地に於てか騒々しき紛擾を見んやである。

愛は光明である、光明の前には黴菌は育たぬものである。故に農村文明が發達して、惟信惟義、醇厚爲俗の天地が開拓さるゝならば、小作者も訓錬し、向上せしむるの意義に於て、小作者の團結權を認むるもよく、小作組合を公認しても、何の恐れかあらんや、又た何の危險か之れあらんやである。

元來文字で見る地主は、二樣の讀み方が出來る。一は地の主であり、一は地が主である。其差は僅に「の」と「が」であるが、相距ること千里の隔りがある。地の主であれば、所謂地の主人公であるから、其土地の管理、經營、處分、改良は勿論、其土地に住する人、其土地に耕す人の統治、指導、訓錬は云ふ

迄もなく彼等の向上を計るべく世話をもなすべきである。恰も戸主が家族に對する權威のそれの如じでなければならぬ。若し不幸にして夫が地が主であれば、人は從たる譯であるから、土地の生産物や地代によつて養はれ、飼はれて居ると云ふに過ぎぬことになる。斯くなれば、勢小作料を八ケ間敷云はねばならぬことにもなり、明け暮れ地代のみ心配して、土地の改良や經營や乃至小作者の世話や彼等を向上せしむるとに氣がつかねことになる。農村文明の發達せぬ間は農村の地主は多くは地が主に屬するものが多くなる、從つて地の主に相當する地主が出來ぬ。是が今日簇出する地主對小作問題の紛々擾々を醸す所以である。

腹が減つて子は泣くものである、聖代の餘澤に浴することの少かりし小作者、地が主の連中に虐げられし小農の人々が、生活費や生業費の増加せし今日悲鳴を上ぐるは當然である。加之思想は漸次に開發され、智識は廣くなる、故に理由なき壓迫や習慣に囚はれたる差別的待遇に滿足せぬは當然である。故に地主は彼等の境遇に同情して、經濟的に安心の道を與へ、社會的に彼の地位向上に世話が屆くとになれば、彼等も亦人在で以上、彼等の履行すべき義務は立派につくさう、感恩報謝の辨も出るに違ないと吾輩は信ずる。

現在の農村は、自治體の數から云へば一萬餘りであらう。其中には所謂一村輯睦して、宛然淳風の醇醲たる家庭の如きがある。就中村治に成績の優良なるは優良町村として表彰もされて居る。而して如何にして如斯きを穿議すれば、十中の八九は中農者即自作農の多い箇所であり、其處には精神的に活動せる當局者有志者の居るが常である。故に農村の繁榮をはかり、農村の文化を興し、共同の利益を發達せしめ、衆庶の幸福を増進せんには、努めて自作農を多くすることであり、精神的活動の人物を殖すことであるは、自明の理である。

從來の自治體では、何れも月並式の行政ばかりであつて政策の見るべきものが尠いのが、恐らく通弊であらう。試みに町村の豫算に徴して見よ、其處には何等土地行政の見るべきものがない、經濟行政の見るべきものもない、生活行政の見るべきものもなければ娯樂行政もない。而して其等の政策に至つては、殆んど影だに見ることが出來ない。而も長い〳〵間府縣郡の上級監督廳が、知らずにか、知つて居てかは分らぬが、其邊に何等の注意も與へず、指導もせずに放置し居ることは、何んたることであらうか。

吾輩は故に謂ふ、一面隣保團結の意義が上下に徹底して、地主は小作の隆興をはかり、小作は努力して地位の向上に勵み、

一面自治體に於て、より進むだる行政と政策とが樹立され、着々施設經營が進捗せば、農村に於ては比較的差別を少くすることが出來樣、奉仕に志す人も多く出來るに相違ない。夫れ丈け農村の文明は開拓するに餘地があり、前途多望である、之れ吾輩が農村文明の建設を高唱し、農村の人と然らざるとを問はず、共鳴者を望むで止まぬ所以である。

其二、事業の共同である。目に見る所は粗末であつても、精神的に協力して各種の事業は立派に出來るのである。

産業組合法によつて、信用組合を作つて見る、事務所は役場の方隅で、見すぼらしくはあるが、一村の金融は愚かな事、一郡一縣の金融を便にすることが出來る。購買組合を作つて見よ、組織さへ健實であれば、一村は勿論數郡を一括して活動が出來るではないか、現に愛知縣の有恆會は六郡の注文を一にして、大々的の取引をして居る。販賣組合を出來して見よ。之亦一村は云ふまでもなく數郡、數縣までも一所にして、大市場に販路を擴張することが出來るではないか。生産組合は如何、加工製造を目的とする製造場や、動力をも容易に使用する工場が出來るではないか。

農業倉庫法によりて倉庫を經營せんか、組合員の精神的結合さへ確實なれば、中産以下の倉庫なき人は何れも倉庫を持つことが出來、都市の專門的倉庫業者に劣るべくもあらぬ、大倉庫も建てることが出來、共功德に浴することも出來る。

今少し農民が自覺して農會法を會得すれば、共同一致して凡ス農事改良は勿論、農民心裡の開發、智能の啓發、進むでは農民の意見を社會に發表し 農民の要求を立法府に輸すことも出來、國家をして農民の輿論に傾聽せしむることも出來るのである。未だ其効果は明瞭ではないが、政府をして食糧政策に一指を染めしめ、米穀法を發布せしめたのは、誰れも知る通り、農會の活動に因るのである。

共他農村には、青年會あり、在鄕軍人會あり、婦人會あり、自治會あり、斯民會あり、殆んど枚擧に暇あらずである、夫等の會は都會にもあるが、都會のは多く形式に流れて、成績の見るべきものが尠いと云ふは、獨り吾輩の言のみではないと信ずる。

幸に農村文明が高唱され、農村の人各自己の文明に醒めて、之が建設に努力せば、組合の普及と活動とは今日の類ではあるまい、農會の活動も今日の比ではあるまい、恐らく現在の府縣が當然の職務としてやりつゝ居る、多くの奬勵事業は盡く農會が任して行ふことにもなるべきである。多くの團體、會合は更に意義を闡明して、創立の目的に到達せでは止まぬことになる

であらう。

元來都市の見上るばかりの建造物、目もまばゆき美觀の建築物は皆資本の化物である、美服を着て通るもの、輕車を驅るものゝ多くは資本家である。農村では其美はない、其快はない、然し農村の事業は精神の結晶であり、民衆の力の塊である。其處に農村文明の特徴が存在する、これが農村文明の誇りであらねばならぬ。

實際農村の人が、物質的の果なきものなるを悟り、有形物の賴み少きに醒め、形而下の澤間敷事に氣がついて、精神的の無限なるに悟り、無形の貴きを知り、形而上の誇りを辨へなば、都にあるほどの機關は夫程物質を消費せず、空間を塞がずして出來るのである。而して不思議な程に大な仕事が容易く出來、不可解な程偉い事業が面白く成功する。現に石川縣は能美郡、吉田村に於ける農事の共同事績を見るが面白い。兵庫縣は津名郡、山田村の村民和樂の樣子を見て悟るもよい。福島縣は田村郡、大越村の貧乏退治の事績を調べて見るも一興であらう。夫れが舊慣の附性であらうと、所謂目醒めし新らしい所であらうとの區別なく、醇厚爲俗、夫華就實の訓練が行屆き、共同の功德を樂み、協力一致の成績に感謝してる所は、今日に於て物珍らしく思ふ許りに繁昌しつゝある、彌榮を現出して居る、文化の見るべきものがある。

然るに世に事を好むの徒があり、又た事を成す臆病者がある爲めに、徒に都の風を田舍に入れんとする、農村を都會化することが餘程進むだ者の樣に思ふて居るがある。爲めに農村を物質的にし、有形的に導き、形而下の事に馬鹿骨折をするものがある。而して農民に尙農村自身の文明あるに、氣付ず、又た斯文明を建設せん意氣もないので、動もすれば附和雷同せんとする傾向がある。一方に於ては何事も舊慣を尊重して、新らしき事は惡い事なりと解釋し、之が移入を防遏せんと徒勞を忍びつゝあるもある。夫等が渦を卷き、單調なる、純樸なる農民を騙つて迷惑の淵に陷んとしてるが、多くの農村に於ける現狀であると謂つてもよい、噫、危い哉である。

農村文明の建設は如上の意味に於て迅速を要するのである。一日後れは一日の禍を生じ、百年の悔を貽すことになるのである。

其三、勤勞の洗滌である。勤勞は生であり、懶怠は死である、生活權を叫ぶは文明人の常であると同時に、勤勞は文明人必然の要求であらねばならぬ。

勞働は神聖なりとは古い格言であつて、何時でも生命のある文句である。此意味が闡明さるゝことによりて、不勞所得により

て勝手な生活振りをなすものは、文明人よりして敵視さるゝのである。其形は粗なりと雖、、其風采は上がらずと雖も、勞働者の權威が日に〱加はり行くは當然なるとする。

云ふまでもなく、勤勞には三種ある。其一は精神的勤勞であり、其二は肉體的勤勞であり、其三は精神と肉體並行の勤勞である。而して文明は消費である以上、消費を補足する丈けの生産がなければならぬのは言ふまでもない事である。これには心身兩用の勤勞が大切であり、此の勤勞者が增加せねばならぬのである。之れ國家社會が教育を普及せんとする所以であり、勞働者が目醒め來れば修養講學の時間を要求する所以でもある。而も今日動もすれば、精神的勞働を貴いものゝ樣に解釋して、猫も杓子も學者となり役人となり指導者たらんとするものが多い。笑止な事には聊か新らしい思想を研究したとか、して居るとか云ふものにそれが多い。二宮尊德翁ではないが、學者の書いた豆は如何に字體がよくても、筆法が理屈に會つて居ても、馬は喰ふとしないものである。如何に學者が殖へ、役人が加はり、指導者が增しても、肉體を勞するものが伴はずば、一粒の米も出來ない、一本の附木も出來るものではない。道理で物價は昂騰する許りで、文明と謂ひつゝ生活難を叫んで居る。

加之階級打破を叫び、特種階級を認むるが惡いと唱へて居る連中が、切りに階級戰爭を挑みつゝあるは、何んたる矛盾であらうか。御陰で生産が多かるべき世に、消費に伴ふ生産が出來ずして、自他物價の騰貴に苦しむで居る、物好きにも程があると謂い度い、分らぬにも程があると言はざるを得ぬ。

中には某國は、日本の隆興を嫉み、且つ恐れて、出來べく限り日本の生産費を高めんと欲し、上海に本部を置き、巨額の金を使ふて本邦勞働者を煽動して、無暗に鬪爭氣分を助長し、罷工、サボリ、をやらせつゝありと說くものがある。頃日の新聞には門司あたりでは、上海行の怪しき人物を監視すること急なりとの通信もあつたが、彼と此とが連絡ありや否やは吾輩之を知らぬ。兎に角今日は資本對勞働の鬪爭が頻繁になつて來たのは事實である。資本家對勞働者の感情が阻隔し行くも事實である。吾輩は此處で其曲直を論ぜんとするのではない、又た論ずる必要も認めぬが、斯くの如くして生産機關の機能を減じ、生産能率を減退さする事の甚だしきを思はざるを得ぬ。同時にそれが一般民衆に尠からぬ迷惑を及ぼし、社會人の生活を脅威することの尠からざるを痛まざるを得ぬのである。

斯る現象が今や農村にも起りつゝある、急速に起るとになつて來たのである。それは虎列拉の傳染よりも、流感の普及より

も尙速かなるの感がある。或は都市勞働者の煽動によるとするもあれば、社會主義者が都市勞働者に排斥された辨償を農村に於てなさんとするによるとするもある。斯ることもあらんが、我農村に於ては寧しろ農民が經濟的に目醒めし結果と見るが、正當であり、事實であるとする。

實際、本邦農家は餘りに小面積を耕しつゝある、而して都市の影響を受くる所ほど、其感を深ふする。加ふるに現在農産物の價格は他の物價に比して低廉である、負担は重く、寄附は强制される。誰れが考へて見ても、勘定して見ても、引合ふものではない。其處で自作者は轉業する、小作者は地主に土地を返還するか、然らざれば掟米の減免要求と來らざるを得ぬのである。若し地主と小作者との分配が不公平であつたり、地主が地が主であつて地主當然の責務を盡くさない所に於ては、勢紛擾となり、同盟罷業となり、訴訟となり、示威運動となり、甚だしきは直接行動をし兼かねぬことにもなるは、亦止むを得ぬことでもある。而して都市よりも農村は廣い、勞働者よりも小農者が多い、彼よりも此は單純である。之れ丈け彼處此處に火の手が上る樣にみゆるのである。

農村に於ける此種社會問題は、今や明に農村の繁榮を脅威しつゝある、農村文化の發達を阻止しつゝある。此問題にして解決されざれば、農村の自治も振興せねば農事の改良も出來るものではない、又た地方の開發も望むで得べからざるものである。故に政府は特殊の制度を設けんとして居り、學者も亦論説を吐露するに至り、憂國の士は憤然起つて爲す所あらんとして居るも、亦當然なりと謂ふべきである。

然し吾輩は、都市の資本家と異つて農村の地主は、地の主なる者に自覺することさへ出來れば、小作者と平等の勤勞が出來るものであるを知る。古は實際、如何なる大地主と雖も、自作し得らるゝ面積の耕作は自らなしたものである、敬神家の如きは、神への供物は、決して他人の手を煩はさずして、地主自身か其家族の手に依て作つたものである。工業勞働は斯る譯には行かぬ、工場での仕事は專門的であるから斯ることは望むを得ぬ。吾輩は地主が報本反始の決心さへ出來れば、小作者と同一の勤勞が出來るものとする。地主の農田勤勞、地主が地主相當に農事にいそしむ事は、問題の解決に惜に有功なりとする。

今日の小作者境遇は餘りに慘じめなるが多い、故に制度の保護、地主の援助、共同經營の餘澤もなければならぬが、然し尙進歩發達の餘裕がないでもない。多くの小作者は餘りに無自覺であり、無意氣である。今少し求むる氣があれば、學理を聽くの機會もある、技術を錬る場合も得られる、利器の利用も出來

得る。それが出來ない爲めに、一般に思慮が足らず、能率が低い。故に彼等の智能が啓發され、肉的勤勞に進歩が出來れば、彼等の經濟的地位は必ず今日の儘ではないと信ずる。

農民の中で、尤も氣の毒な立場に在るは自作農であらう。多少なりとも土地が在る爲めに、小作者の如く轉業の自由が得られぬ。聊か自分がある點よりして、何んでも稼に出ると云ふ譯には往かぬ。其癖生活費は高む、負擔は多くなる、寄附は强ひられる、而も收入の之に伴はぬ結果は、破産倒産の厄にかゝるものもあれば、轉業の止むを得ぬものも出來る。之れが全國を通じ、年に七千六百有餘の自作農が漸減する所以である。然し其處にも尙改善の餘地はある、前途に開拓の望もある。何んとなれば、農業の組織は完全でない、農業の經濟法も滿足でない、且つ農業技術も拙なるが多いのである。故に之亦身心的勤勞の改良をなせば、能率も高め來つて、今日の境遇を逆にすることは必ず出來るものとする。

要之本邦農民は上下を通じて、精神的にも肉體的にも勤勞其ものに改善を要することになつて居る。而して其改善は、一面農村の繁榮を助長し、一面は農民の文化を向上することになるのである。故に吾輩は玆處に農村文明の建設を高唱するに當り特に勤勞の洗錬を絕叫する。

勤勞の洗錬には、少くも三要素ありと吾輩は提唱する。其一は勤勞に對する信仰、其二は、勤勞の向上身心兩面の、其三は、勤勞の藝術化趣味の進歩である。

勤勞に對する信仰は何を意味するや、此の理解を得るは勤勞の根本義である。吾輩は第一に勤勞は生なりの悟を開き、次に勤勞の功德に對する感謝の念が生じ、最後に勤勞を喜悅し欣快とするに至るを以て、卽ち勤勞に對する信仰を認むる。故に此信仰に入れば、利害を眼中に置かずして勤勞せねばならぬ氣分が生じて、古人の所謂勤勞を生役(いきやく)なりと解することが出來る。「勤勞の前に饑餓なく、勞働の中に衣食あり」を經驗するは勿論、孟子の所謂居二天下之廣居一、立二天下之正位一、行二天下之大道一、得レ志與レ民由レ之、不レ得レ志獨行二其道一、富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、之此謂二大丈夫一の境遇も勤勞によりて得べきであるを體驗すれば、何人か勤勞の功德に感謝せずして止むことが出來樣。而して自彊不息せば、遂に損得を超越して唯難有てたまらぬ心持になれる。貧富によりて行を二つにすることが出來ず、壯老によりて勤惰の別がなくなる。如斯は卽ち勤勞に對する信仰の姿であり、信仰の權化である。農民の勤勞に對する信仰が旺盛であり、其信仰あるのが農民の面目たるに至らば、恐らく農民自身を救ふのみにあらずして、天下の民衆を

救濟することが出來様。其處に農業勞働の權威があり、農的勤勞の價値があるとする。

勤勞の向上とは如何、一面は勤勞する者の智識が發達し、勞務に服するもの丶考察力が進むで、而して一面に於ては、技術手腕が巧妙にならねばならぬのである。文明が齎らす學理をよく理解し、世態時勢をよく洞察して、之に順應し對策する事が出來、腕を振へは草木よく服し、手を動かせは禽獸亦よく從ふに至り、聖代が賦與する動力を利用し、機械を使用してよく一騎當千の術を行ふを得ば、天を攻し地を服するも何の難きとか之あらんやである。されば瓦を變じて金とし、土を化して寶となすも亦容易である。現に智能の啓發尚未だ普及せずと雖も、品種は當年の品種にあらず、耕種の術亦當年の比にあらず、從つて反當りの收穫を增し、收穫物の品質は良好となりつ丶あるに非ずや。若しそれ賣買の法に數步を進め、消費の方面に巧智を用ゆるを得ば、農業の利益何ぞ商工に劣るの理あらんやである。現在農村に安んじて靜に產を治め、財を積み、世の所謂[illegible]の徒を笑ひ、迷惑の雛を脫むで居る農民が、彼處此處に居るではないか。智の前には疑なく、能の前には澁滯なしである。今にして農民の勤勞が、心的に肉的に發達進步せば、誰れか農業の薄利を嘆ずるの愚を學ぶものがあらうか。吾輩は農民の智能が今日尚低級なるを思ふて、益前途の光明を感ずるものである。

勤勞の藝術化とは如何、幸にして勤勞に對する信仰が生ぜば、勞働の忌避は夢の如く消失する筈である。勤勞の向上が出來れば、思ふ事ならざるはなく、成すこと功を奏せざるはなしと云ふことになるだらう。斯如して誰か勤勞に趣味を感ぜざるものやある。何人か勤勞を好愛せずに居られやう。特に農業は自然を相手にするものであり、天地に中在してなすべき業である以上、雪月花は求めずして見られ、春夏秋冬の變調は體驗が出來る。敢て一茶翁の勸農詞を讀まぬでも、宗安の勸農辭を唱へぬでも、農業には他業の擬して得べからざる趣味の存することが會得せられやうと思ふ。古來、世の進步に後れたる所と相場が定まり、鄙と侮る農村に於て優にやさしき田園文學の發達したるは、其偶然非にらざるを知るべきである。獨り文學に於てのみならず、今こそ頽敗して見る影もなくなつたが、當年田舍の田夫野郎がなしたる劇、即ち芝居は今日の劇の元祖ならずとせぬやである。今は西洋舶來の「ダンス」が流行して居るが當年の盆踊の優雅なるには及ぶべくもない。聲樂家は肉聲を以て誇りとし、獨唱して都人士を魅するもあるが、昔も今も田舍には喉自慢の連中は澤山あつて、木石を動かすもある。農民が

眞に農村に安んじて、農業を樂しめば、其語は自ら歌をなし、其聲は自ら天籟の響となる筈である、之れ即ち農業勞働の藝術化にあらずして何ぞや。吾輩は玆に農村文化の特徴を認め、斯文化の光彩が、現代社會文化の進歩に貢獻する所多かるべきを切望して止む能はざるものである。

信仰を根柢とし、高き能率を柱とし、貴き趣味の理解を肉とする勤勞は、吾輩の所謂勤勞の洗練である。或は洗練されたる勤勞といふが適當かも知れず、本氣の勤勞、眞正の勤勞と云ふが分り易いかも知れぬ。要は利害を超過し、損得を脫却したる勤勞は我農業勤勞でなければならず、之が農業勤勞の特徴であつて、其處に我農村文明が輝かねばならぬとする。

過まれる文明、偏りたる文明、所謂一本足の文明は、人を矛盾に導き、虛僞に陷るものなることは、多くの例の存する所であるが、吾輩は特に勤勞に就て其著しきを感ぜざるを得ぬ。何んとなれば、生存慾が高み、生活慾が進むで、而も勞働を忌避するの風潮は、都鄙を分たずして浸潤する。勞働は神聖なりと叫びつゝ、動もすればサボらんとする。加之、金錢で打算せんとする。之れ程の矛盾は何處にあらうか、之れ位の錯誤は何物の上に存するだらうか。

勤勞は、何れの國に於ても、何れの時に於ても、汗で洗練さるゝ勤勞でなくば、繁榮、購ふべからずであり、甘水を掬する的の勤勞でなくば、文化は求むべからざるものなることを信ずるものである。

農村は時勢の進步に伴れて必ず發達する、農民の自覺によりても今日よりもより進むだる環境を作る筈のものである。然し如何しても生活の美化は都市の之れと匹敵するものではなく、機關の完備も亦然りである、而して資本の運轉亦職業の性質上よりして、都市のそれと同等であるは望むべくもない。而も便利は人の欲する所であり、繁華も人の好む所であり、享樂も亦人の望む所である。故に都市文明は必ず人を憧憬たらしめ、誘惑する。之れ近時我も彼も都市に入り、流れ込み、所謂都會熱なる變態を生ずる原因の一である。

乍去、吾等は靜に諦觀をせねばならぬ、落付て究極する所を察せねばならぬ。比較的農村が不便であると云ふことは、人を剛健にする所以であり、比較的寂寞であることは、自他を着實ならしむる理由であつて、而して苦勞の多い事は、即ち彼我を耐忍ならしむる原因ではないか。夫れ剛健、着實、忍耐の素質は人とすれば立身の因であり、家に於ては繁榮の根本であり國家社會にすればそれ等は隆興の基礎である。古往今來、國家の大事に當るものは殆んど農村出の人にあらざるはなく、

を動かし國威を發揚する勢力亦農村出の人にあらざるなきの事實は、如上を立證して餘りありと謂ふべきである。

又た既往の文明は資本主義であると同時に都會主義であり、都民本位であつた爲めに、世を擧げて今日は惰弱の風に犯され、輕佻浮薄の嵐に惱まされ、墮落の潮流に押し流され、殆んど救ふべからざるの狀況に在るも亦因つて來る所が明々白々ではあるまいか。

故に敢て言ふ、一本足の文明は徒勞に屬するものである。平和を希ふて鬪爭を發起し、幸福を求めて不幸を招來し、繁榮を欲して衰亡を輸致するの大矛盾を來たす時、何等の得る所なきものなるかを。之れ吾輩が農村文明の建設を高唱し、其樹立を絕叫する所以である。

農村文明の建設は、舊慣である隣保團結の意義を擴充し、其功德を闡明する事。益協力一致して各種事業の共同をはかり、其進展を期する事。勞働神聖の信仰を根底に、巧智を磨き鐵腕を振ひ、勤勞の藝術化をなす事業によりて得らるべきである。而も之れには國家權力の發動も必要であり、社會民衆の援助も大切であり、學者や識者の指導もなければならぬが、吾輩は先づ第一に農村人の共處に目醒むることの必要を叫び、次で其建設事業は農民の自治で出來ねばならぬとし、之れには我農民の洗練的勤勞即ち奮鬪努力が必要なりとする。

吾輩は其方法手段は別に論議するがよいと思ふ、何故なれば玆處では其程の餘裕もない。故に僅に「ヒント」を示したに過ぎないのは、吾輩の遺憾とする所であるが、之れは讀者の寬容を希ふ。

吾輩は今の人、餘りに神經過敏ではあるまいかと思ふ。徒に目前の問題にのみ囚はれ、焦眉的の事件にのみ熱中して、往々大局を逸し、根本に立入るとの餘裕なきを悲しむものである。且つ何事も海外の思想に押され、外人の議論に制せられ、他人の發明に眩惑し、彼のなすがまゝに動かされつゝあるのを痛嘆する。

皇國は豈に唯に國史の古きを以て誇るべきものではない、斯る中には他の擬して及ばぬものがある。

天皇の政治を以て異彩ありと已ぬ惚れるものではない、個中に或る偉大なるものが存在して居る。世界の民が求めて得べからず、探して發見し得ざるものがある筈である。何故に我國民は自己の研究を後にするや、自己の模索を從とするや。何んぞ進むで新文明の建設に貢獻し、眞文明の樹立に範を示すの意氣なきや。

農村文明さへ建設さるれば、豈に獨り農村の繁榮や文化の向

上のみならんやである。吾輩は世界人類の永遠の平和と幸福との爲めに敢て農村文明の建設を高唱する。

農政の本位を改むる時代

——大地主本位より小作人本位へ——

永井柳太郎

（一）

佛蘭西革命は歐洲に於ける封建制度を顚覆し、貴族僧侶の特權を打破して、一塊にして平民を解放した。我國に於ける王政維新も亦封建制度を破壊し、當時の特權階級たりし武家の專權を奪ふて、新に四民平等の原則を確認した事に於て同じである。然るに歐洲に於ても亦我國にても、此一度政治的に解放せられたる多數の平民は、産業革命の出現に逢ふて、圖らずも再び其生活の獨立を奪はれ、經濟的に又々奴隷の如くならざるを得ざるに至つた。此點に於ては歐羅巴の平民も我國の平民も、共に同じ運命の捕虜となつたのであるが、只農民丈けは同じ運命の捕虜となつたとしても、歐洲の農民と我國の農民との間には其經路に於て多少の相違がある。蓋し歐洲農民を最も苦めたものは機械工業の勃興よりも寧ろ交通機關の發達であつたが、我國の農民を苦むる根本の原因は交通機關の發達よりも寧ろ機械工業の勃興と農民自身の地理的環境とである。

歐洲に於ては十九世紀に於ける水陸交通の發達と共に、米國や、濠洲や、印度や、露西亞等の如き大農業國の廉價なる農産物が滔々として輸入する事となつたので、歐洲の農民は之れと競爭する必要上在來の穀價を維持する事が出來なくなつた。當時歐洲に於ける穀類の下落が如何に甚だしかつたかと云ふ事は、英國に於て小麥一クオーターの代價が千八百四十一年乃至千八百五十一年に於て。平均五十一志二片であつたのが。千八百九十一年乃至千九百一年に至り平均二十八志一片となり、約半

世紀間に約二分の一となつたのでも分る。此結果歐洲に於ける農民の收入は激減した。そして佛蘭西革命に依り一度自由の世界を見た彼等は、再び産業革命のために其經濟上の自由を失はざるべからざるに至つた。即ち土地を擔保として資金を融通したる者の如きは、約束の期限に約束の利息を支拂ふ能はずして大地主に兼併せられ、多數の農民は相率いて小作人となり、農業勞働者と變じ、辛じて其生活を營む事となつた。キオザ・マネーは其著「貧富論」（リッチェス・エンド・パヴァテー）に於て、産業革命の結果英國の農民が如何に生活の困難に陷入れられかを說明し、「今や英國の農民にして土地を所有する者は總數の五分の一に充たず、全面積の過半は僅かに二千五百人の地主の手に集中せらる、而て之等の土地に小作する農民の生活の困難に至つては都市勞働者の比に非ず、現に女王ビクトリアの治世のみに於ても、農民にして飢餓の爲めに死亡したる者約百二十五萬五千人に達したり」と云ふて居る程である。

我國の農民に至つては、交通機關の發達のために直接の損害を受くる事歐洲の農民の如くではない。全體日本人は日本米に對して特殊の執着心を持つて居る。或は凶作のため、或は金融上の理由に依りて、米價昂騰する場合に、止むを得ず一時外國米を口にする事があるけれども、それらの原因が消滅し、米價稍々舊に復すれば直ちに日本人は日本米に返り、外國米に對する需要が減退すると云ふ程日本人は日本米に對して強烈なる嗜好を持ち、深刻なる執着心を有するのであるから、假令交通機關が發達しても、日本米は、歐洲産の小麥の如く、他國から輸入せらるゝものゝために壓倒せらるゝ危險がない。從つて歐洲に於ける小麥の價格は交通機關の發達に伴ふて著しく下落したるに反し、日本米の價格は過去半世紀の中に十倍以上となつたのである。然かしそれにも拘はらず、我國に於ても亦農民の生活は次第に困難となり、土地兼併は行はれ、歐洲に於けると同じやうに、土地が小數者の手に集中するのは何故か。

（二）

惟ふに我國に於ける農家の生活が困難を加へ恰も歐洲に於けると同樣の移動を生じつゝあるは、第一に耕地面積に對し農民の數が過剩である事と、第二に機械工業の發達に從ひ農家の副業を都會に奪はれた事と、この二つが最も重大なる原因であらねばならぬ。我國は歐米に於ける農業國の如く土地が平坦でない、國内には無數の山嶽が縱橫して居るから、之れを開墾して田畑とする事は容易でない。今試みに各國の總面積に對する農用地（田畑、牧場、葡萄園及び花園の類を含む）の面積を比較

するに、其比例は次の如きものがある。

	總面積に對する農用地の比例	人口一人に對する農用地の反別
英國(一九一三年)	七七・二〇%	三反二畝二十三歩
佛蘭西(一九一二年)	六九・五三	九反　畝二十六歩
伊太利(一九一三年)	七六・二五	六反二畝四歩
獨逸(一九〇〇年)	六四・八四	五反四畝二十三歩
墺太利匈牙利(一九一二年)	五三・五四	六反六畝八歩
北米合衆國(一九一〇年)	二五・五四	二町　反四畝二十歩

然るに我國を見ると總面積に對する農用地面積(牧場を含まず)の比例は頗る少く、平均一四・一%に過ぎぬ。我國の府縣中最も開墾の行き屆きたる埼玉縣と雖も、尙其比例は四〇・三%を出でず、北海道の如きに至つては僅かに一・三%である。從つて人口一人に對する耕地反別の如きも僅かに一反二畝二歩に過ぎない。斯くの如き狀態であるから我國の農用地は到底多數の農民を收容する力がないに拘はらず、我國の農民は全人口中の約六割に當り、其比例の大なる事他に匹儔を見ない程であるから、我國の農家は勢ひ其耕作する土地が狹隘とならざるを得ない。土地には所謂報酬遞減の法則が行はるゝので、無限の集約を許さぬから、耕地が狹隘に過ぐれば、勢ひ其收益は減少する。今試みに農商務省の統計に依り大正三年末に於ける我々の耕地所有者數を見るに、次の如く驚くべきものがある、

耕地の種類	所有者數	全數に對する百分比例
五反未滿	二・三六七・五〇〇	四八・二一
五反以上	一・二二一・七八三	二四・九三
一町以上	八八三・四四一	一八・〇三
三町以上	二五九・六九九	五・三〇
五町以上	一二二・四二七	二・五〇
十町以上	四一・五五五	〇・八五
五十町以上	三・四〇五	〇・〇七

之れに依つて見ると全體耕地所有者の四割八分以上は五反未滿の小地主である事が分る。若し夫れ一町歩以下の所有者を合算すれば、優に全數の七割三分を超ゆる。凡そ文明國の中斯くの如く小農の多數なるものはない。佛蘭西は小農の多數なるを以て有名なる國であるが、夫れでも其農民の大部分は一町歩以上の所有者であつて、一町歩以下に生活する者は僅かに總數の三割五分に過ぎぬ。獨逸も小農の多い國であるけれども、尙一ヘクタール(我一町二十五歩に當る)以下の所有者は四割七分、一ヘクタール乃至十ヘクタールの所有者は四割一分、十ヘクタール以上の所有者が一割二分と云ふ割合であると聞く。若し夫れ英國に至つては二町歩以下の土地を耕作して生活する者僅かに總數

二割三分である。此等の事實に照して見ても我國の農民の大多數が如何に狹隘なる土地を耕作し、如何に僅少なる收益に依て生活しつゝあるかを想像するに難くない。蓋し五反未滿の反別は之れを法定地價に換算すれば平均二百二三十圓に過ぎない。實買地價に見積るも恐らく平均六倍乃至七倍を超へないであらう。若し六倍とせば千二三百圓、七倍とするも千五六百圓を出でぬ。而てこの千二三百圓乃至千五六百圓の土地こそは、彼等小農民の唯一の財產たると共に又資本である。今假りに此資本に對して農家自身の勞力に對する報酬を含めて約二割の利殖ありとしても、其金額は僅二三百圓を出でざるべく、年一割の利殖とすれば僅かに百五十圓内外である。而も實際に於ては農業に依りて年一割に當る利益を得る事すらなか／＼容易ではないのであるから、彼等の收益の如何に僅少なる事は明白と云はねばならぬ。曩に大阪府農會の調査した大正三年度の農家經濟を見るに、平均田地一反歩の收入は三十五圓九十二錢であり、支出三十二圓七十錢であつて、差引三圓二十一錢の利得となつて居る。然るに右一反歩の賣買價格は四百五十圓と云ふことであるから、資本に對する利子歩合は僅かに七厘一毛にしか當らぬ。尤も右支出中には農家自らの勞賃十三圓九十八錢を含んで居るから、實際農家の收得したる利益金は十七圓十九錢となるのであるが、併し十七圓十九錢の利益金としても、猶ほ資本に對する利子歩合は三分八厘を出でぬ。大正三年度に比ぶれば、今日は米價も、勞賃も、共に約二倍して居るから、今日の利益金は大正三年度のそれに比べて倍加したとしても、尙且つ其利子歩合は七分六厘に當り、一割に達せざる事遠い。自ら土地を所有し、其全收穫を手にし得る自作農と雖も、斯くの如くであるから、自ら土地を所有せず、其僅少なる收入の中から猶ほ小作米を控除せざるべからざる小作人の生活の困難に至つては、實に想像に餘りある。玆に於て彼等は田畑の收穫の外に猶ほ諸種の副業を營むの必要が起るのであるけれども、今や其副業も亦工業の發達と共に次第に都會に奪はれ、副業より生ずる收入も近來著く減少した。蓋し產業の尙未だ幼稚なる時代に於ては、農業と工業との間に截然たる區別なく、農民は其田畑に於て穀物及び原料の生產に從事する傍ら、又其家内に於て之れ等の原料に加工し、之れを副業となし得たのであるけれども、產業が發達し、分業の推歩すると共に、農業と工業との區別が明白になるのは免れないことであつて、今や農民が自家の副業としたる製粉、製絲、織物、酒造、莚席、麥桿細工等の如きものは次第に都會の工場に奪はれ、農業の範圍は啻に天然物の培養にのみ局限せらるゝ事となつたから、たゞさへ困難であつた農家の生活は

此の産業革命の襲來に出逢ふて、愈々其根柢を覆されんとするに至り、多數の小農民は今や殆んど自立し能はさるが如き窮境に陷入つた、世間では「稼ぐに追つく貧乏なし。」と云ふけれども、それは我國の小農民に對しては嘘である。

（三）

農村に於ける生活の困難より延て我國の社會問題上最も注意しなければならぬ出來事は、土地兼併の傾向である。我國最近の農事統計を見れば、何人と雖も此土地兼併の傾向の顯著たるに驚かざるを得まい。土地兼併の趨勢の疑ふべからざる證據は、自作農と小作農との割合の變遷である。今明治四十一年より大正三年に亘る十箇年間に於て小地主の數が如何に減じ、大地主の數が如何に增加したかを見るに、次の如きものがある。

	明治四十一年	大正三年	增減
五反以下の地主	二・二〇八・三二七	二・二九七・五一〇	八九・一八三增
五反以上一町以下の地主	一・三六八・九七六	一・三〇一・七八三	六七・一九三減
一町以上三町以下の地主	九二五・九三〇	八八二・四四一	四三・四八九減
三町以上五町以下の地主	二七九・一〇〇	二五九・六九九	一九・四〇一減
十町以上五十町以下の地主	三九・七四六	四一・五五五	一・八〇九增
五十町以上の地主	二・五七四	三・四〇五	八三一增

（註）五反歩以下の土地所有者の數は、多少增加して居る。然かし五反歩以下の土地所有者の增加は、中小農民の次三男の分家の增加した結果であつて、實は農村に於ける人口過剩を語るものである。決して大地主の所有地の分割を意味するものでない。

此統計を大觀するに、我國に於ては過去十年間に於て五反歩以上、五町歩以下の土地を所有する所謂中小農は合計十二萬八千九百八十三人を減じたに反し、十町歩以上の土地を有する大地主は同じ年間に二千六百四十人を增加し、多數の小地主の土地が小數なる大地主に兼併されつゝある實狀を指すが如く明白である。斯くの如くにして我國に於ても農業は次第に少數の大資本家に集中せらるゝの傾向を生じ、從來獨立農夫として其生計を營たる中小農は減少して、只さへ多數なる小作人が愈々增加しつゝある。元來我國の農夫は小作農が大部分を占めて居る。西洋では、英國の如き土地兼併の弊害が極度に達した國は例外であるけれども、概して尚自作農が農民の大部分を占めて居り、政府も亦之を助長するを方針として居る。然るに我國では農民の大部分が小作農であつて、西洋に於ける如く自ら土地を所有し、其土地を自ら耕作し、其收穫したる物を全部自ら賣買して獨立の生計を營む所謂自作農なる者は全農民中僅かに三

割に過ぎぬ。其他は全部小作農又は自作兼小作農である。殊に此傾向は近年土地兼併の行はるゝと共に愈々甚だしくなり、最近十年間に次の如き數字を示した。

	明治四十一年	大正三年	增減
自作農	一・七九九・六一七	一・七二八・六九二	七〇・九二五減
小作農	一・四九六・七三三	一・五一七・五二〇	二五・七八七增
自作兼小作農	二・一一七・〇一三	二・二〇二・〇八〇	八五・〇六七增

斯くの如く小作農及び自作農兼小作農が約十一万を增加したに反して、自作農其者は約七万を減じた。之れ等の事實に依れば土地兼併の趨勢の顯著なる事は爭ふ事が出來ないのであるが、玆に於て我等の特に注意すべきは、如何なる者が主として土地を兼併しつゝありやと云ふ事である。惟ふに土地を兼併しつゝある者は、大體に於て、之れを二種に分つ事が出來る。其一は地方に於ける大地主である事云ふも俟たぬ。此等の大地主は或は自己の資力に依り、或は自己が地方の金融機關を左右し得る地位に在るを利用して、生活の困難に陷り、金策に苦んで居る中小農を見付けて、之に高利の資金を融通し、彼等が約束の期限に約束の債務を履行し能はざるや、直ちに其土地を併呑するのであるが、然かし之れよりも更に恐るべきは、都會に於ける大資本家の土地兼併である。同じ土地兼併でも、地方に於ける大地主が土地兼併をした場合は未だ大地主と小作人とが直ちに接觸して多少親密なる關係を結ぶ機會があるけれども、都會に於ける資本家の土地兼併に至つては、恰も會社の株主が永久に其使用人と親密なる關係を結ぶ機會なきが如く、其土地に勞作する農民との間に親密なる友誼關係を結ぶ事能はざるのみならず、農業に關する智識も亦乏しいのであるから、地主對小作人の衝突を惹起し易く、農村社會問題の上より之を見れば、實に重大なる危險を包含するのである。

（四）

農民の生活難は、一方に於て土地兼併の趨勢を促し、資本家的地主と小作人との間に、都會の工場に於けるに異ならざる階級的衝突を惹起しつゝあると同時に、他方に於ては又地方農民の都市集中を馴致し、都會に於ける社會問題を激成するのである。固より地方農民の都市集中は獨り我國に限られたる現象でない。彼のカール・ビーヘルが其著「產業進化論」に於て云ふて居る通り、地方農民の都市集中は、羅馬時代・昔既に之れを見たのであつて、決して近世文明の特色ではないけれども、併し其趨勢が一般的となり、又經濟問題となつたのは、恐らく產業革命以後の事である。我國に於て、西洋諸國に見るが如き斷然で

はないけれども、最近其趨勢が著るしくなつた事は、大に注目に値する。人口五万以上の都會は明治二十六年末に於て僅かに十八に過ぎず、其人口は合計約三百三十萬に過ぎずして、未だ全人口の七分八厘を占むるに過ぎなかつたのであるが、大正七年末に於ては五萬以上の都會合計四十六に達し、其總人口九百五十七萬人を算し、正に全人口の一割六分四厘以上を占むる事となかつた。今試みに明治二十六年より大正七年に至る間に於ける、五萬以上の都會人口の全人口に對する百分比例及び増加率を見るに、左の如きものがある。

	五萬以上の都會人口の總人口に對する百分比例	増加率
明治二十六年	七・八八%	—
同　三十一年	九・四〇	一・五四%
同　三十六年	一一・四三	二・〇三
同　四十一年	一三・三一	一・八八
大正　二年	一四・一三	〇・八二
同　七年	一六・四八	二・三五

斯くの如く都市は迅速に膨張しつゝあるのであるが、之れは即ち地方農民が各其農村を去つて都會に集りつゝある證據である。固より地方農民の都市集中の原因は單純でない。キオザ・マネー氏は英國に於ける農民の都市集中を以て大部分は機械を應用した結果であると云ふて居る。ピーヘル氏は都會生活其ものが、其賃金の高き事に於て、運命を開拓する機會の多き事に於て、又生活を享樂する範圍の其はれる事に於て、地方民を憧憬せしむる獨得の引力ある事を認めて居る。此等は孰れも地方農民の都市集中を促がす原因となるべき事疑なしと雖も、我國に於ては耕地が狹隘であつて、今でさへ生計維持が困難なのに、其上次男、三男が生れても、到底土地を分割するの餘裕なく、從て次男、三男は止むを得ずして都會に其運命を開拓する機會を求むると云ふ事と、次男、三男でなくても、生計に窮し、土地を逐はれた小農民が、地方に居る事が出來なくなつて、都會へ抑出されると云ふ事とが其大なる原因をなして居ると思ふ。全體工業の如き生産業にありては其發達に際限なく、資本を増加すると共に勞力に對する需要を増大する事必ずしも不可能にあらずと雖も、農業に至りては土地を基礎とする故に其發達に制限あり、加ふるに報酬遞減の法則ありて無限の集約を許さず、玆に於て農業に生活する者は、或程度に達すれば、到底増加し得ないのであるが、今や我國に於ては既に農民か全部農村に止まり能はさる程度に其人口が過剩して居る。今日我國の農政を論ずる者の中には稍ゝもすれば地方農民の都會へ集中を以て一種の病的現象なるが如く考へ、之れを非難し、甚しきは之れ

を罪惡の如く云ふ者があるけれども、地方農民の都市集中は、恰も自然のまゝなる水が高きより低きに流れざれば止まざるが如く、生活の必要上止むに止まれずして起り來つた現象であつて、恐らくは農村に於ける勞作に對する報酬と都會に於ける勞働に對する報酬とが其水準を得るまで斷じて止まる事がないであらう。故に今日の急務は如何にして農村に於ける生活の安定を得せしめ其勞働に對する報酬をして都會に於ける勞働の報酬に匹敵せしむべきかと云ふ事でなければならぬ。

（五）

斯くの如くにして農村問題は今や我國に於ける社會問題中の重大問題たる性質を帶びて來たに拘はらず、社會問題を論ずる人が唯都會に於ける勞働問題にのみに重きを置きて、農村問題を閑却する傾向あるは遺憾である。而して偶々農村問題を論ずる人があつても、其議論が多く大地主本位であつて、農業の最も多數を占むる小地主及び小作人を本位として居ない。今日所謂農業政策を說く者は、只如何にして米價を騰貴せしむべきやとか、或は如何にして農業資金の供給を豐富ならしむべきやとか、或は外米課税とか或は地租の輕減とか、さう云ふ事のみを中心として議論して居るけれども、此等の論者の多數は、小數なる土地は所有して居るけれども、自分では鋤鍬を取つた事のない大地主階級の利益を代表する者であつて、大多數の自ら額に汗して勞作しつゝある小農民階級の利益とは沒交涉である事を知らねばならぬ。今日迄世に行はれた農業保護說の如きは、多く大地主保護論であり、田舍繁昌論も亦、多く大地主繁昌論であつた。而して此等の農業保護論や田舍繁昌論は、我農民の六七割を占むる貧弱なる小地主及び小作人とは決して利害關係の一致して居るものでないのみならず、時としては其貧弱なる小地主及び小作人を犧牲にしなければ其目的を達し能はぬものであつた。

第一に大地主即ち農業的資本家は、米を賣つて生活する者であるけれども、大多數の小農民は寧ろ米を買ふて生活するのである。我國の小農民中には自分の勞働して得た上等の日本米は之を賣つて、其賣上代金の中から下等な外國米を買ふて、それで自分の口を糊する者が多いのであつて、自分の作つた日本米を自分で食ふ事すら出來ないのである。從つて農業的資本家は或は米穀買上げとか、或は外米課税とかに依て、米價の騰貴を計劃するけれども、小農民は米價の騰貴を見込んで米の賣出しを手控へする餘裕もなく、外米の課税も却て苦痛である。第二に大地主は米價の騰貴を望むけれども、米の增收は敢て望ま

ぬ。寧ろ米が不作でそれ丈米價が騰貴する方が自分等に取つては收入の增加となるのであるからそれを希望すると云ふ狀態であるけれども、大多數の小作人に至つてはさうでない。米が不作ならば小作料を收めて後、手に殘る所は減少するから、少し許り米價が騰貴しても結局損失である。從て小作人は豐作でなければ生活が立ち行かぬのであつて、此點に於ても自ら勞作せず、唯座して約束の小作米を徵して利殖を計る農業的資本家と、自ら勞作しても其收穫の全部を自己の手に收むる能はず、年の豐凶を問はず一定の小作米を上納した殘りの部分だけに依て辛ふじて生活する農業的勞働者との間には、重大なる利害の衝突ある事が分かる。第三に、此頃頻りに唱へらるゝ產米改良の獎勵の如きも好い事には相違ないけれども、之れは或意味から云ふと大地主のみには利益であつて、小作人には少しも利益とならぬ。何となれば我國に於ては小作料は米納めする習慣であるから、產米の良否を問はず、一定の分量だけ納めなくてはならぬ。假りに一反步當り四斗俵五俵取れるとすれば、それが一等米たると二等米たるとを問はず、其中から三俵を上納すると云ふ風に定つて居るのである。然るに地主の方では同じ三俵を受取るにしても、一等米を受け取ると二等米、又は三等米を受け取るのとは、之れを賣つた場合に非常な利益の相違がなるのであるから、頻りに小作人を鞭撻して產米獎勵を矢釜敷云ふが、小作人としては地主のために働くやうなものである。斯う云ふ點に於ても兩者の利害關係が一致して居ない。第四に金融機關にしても勸業銀行や農工銀行が各府縣に設けられ、農業資金の融通を目的として營業して居るけれども、斯くの如き金融機關の恩惠に浴する者は比較的大なる土地を有し、銀行から見て比較的大なる信用を有する大地主丈けに過ぎぬのであつて、所謂五反百姓や大多數の小作人の如きは到底其恩惠に浴する事能はず、結局中小農の縋る所は高利貸の外にないのである。甚だしい地方になると大地主が、或は自分の信用あるに任せ、或は自分が其重役を左右し得る地位に在るに乘じて、農工銀行其他の金融機關から出來得る限り多額の金を借り出し、之れを法外の高利で、直接銀行から金を借り得ざる如き小農民に貸付け、自分は其中間に在りて利鞘を取るのみならず、其金を貸付けた先の小農民が若し約束の期限に約束の返金が出來なければ、直ちに之れを口實として土地兼併の欲望を遂げやうと云ふやうな貪慾な者も頗る多いのである。斯くの如き者のために地方の小農民は只さへ困窮せる生活が更に大なる困窮に陥るのであつて、今日まで政府が所謂農民保護の名に於て試みたる種々の施設は、啻も日本の農民の大多數に利益を與へず、只少數なる大地主を利益せ

に止まり、其結果土地兼併の趨勢は愈々深まり、農村の疲弊は其骨髄に徹すると云ふ有様である。今や我國は農政の本位を一變し、大地主本位より小作人本位へ、小數の耕作する事を知らざる農業的資本家本位より多數の額に汗して日夜勞作しつゝある水吞百姓本位へと一大改造を行はねば、日本農村の復活は殆んど絶望であつて、農村の復活が絶望であれば農村夫れ自身に於ても、亦都會に於ても、そこに大なる社會的の危險が生を避ける事は出來まい。私は日本國民が此現實なる大事實の前に立つて、其眞髄に徹底する農政の大改革を遂ぐるの急務を悟らん事を切望する。

都市の自然化

法學博士 渡邊鐵藏

(一)都市の自然化

昔の都市も、今日の都市も其政治、經濟、文化の中樞地であるといふ概括的の使命には大差は無いのであるが、十八世紀の後半以來頻りに發明發見行はれ、遂にかの産業革命の一大轉機を生みて工場に於ける機械力による大企模生産の方法が普及し、且つ同時に交通機關の發達によつて國內のみならず國際的の財貨交換が旺盛となると共に、都市の經濟的使命が愈々重大となり大企模生産大企模取引に便利な都市は急激な膨脹を遂げ、又新に此種の經濟的都市が發達するようになつた。そして一地方の政治、經濟の中樞地であつた都市も廣く一國更に國際的の經濟上の中樞地となり、相互に世界的に生産し取引するようになつた。その結果として昔は王侯の宮殿城廓や寺院が多くの都市の徵象であり誇りであつたが、今日は大企模生産、世界的取引の機關である工場や、倉庫や、店舖や、埠頭や、交通機關が多くの都市の外觀の特徵を形作ることになつた。このようにして近世の都市はその使命と外觀の特徵の上に著しい變化を見たのであるが、その內に住む市民の生活には當然之に伴ふ一大變化が生

じた。從來は暖い家庭の内に氣樂に仕事をして居つた者や、長閑な田園に自由に耕作して居つた者が陸續として大きな工場や店舗に群集して時間と規則と監督の眼に束縛され驅使されて横眼も振らずに孜々として働かねばならぬようになつた。そして家庭の談笑や、田園の清淨な大氣の代りに石炭の煙、瓦斯の臭、白熱の火氣、鐵の廻轉する響き、打撃、響などの中に終日激しい、時には頗る不愉快な勞働に從かひ、或ひは又殺風景な事務室の一隅に終日天日を見ずして計算や記入に腦髓を驅使せねばならぬ。而して一度び街路に出れば車馬、自働車、電車等が盛んに大音、奇響を發し黄塵を上げ馳驅し、不愉快、危險なことは極まり無い。身心を安むべき住居と雖も多くは密集、群居のために汚濁した空氣と、不潔な周圍と、市街の雜沓とのために仕事に疲勞した心身を休養する途も無い。此樣に近代の都市に住む者は常に生活難に追はれながら絶えず緊張した精神、身體の勞働に過勞し、且つ惡空氣、雜閙の内に身心を損耗せねばならぬ。殊に都市に住む兒童に至つては親の職業のために雜閙の巷に生長して、四時都市の惡空氣と雜閙のために其纎弱な身體と神經とを惱まされ街に出で遊ばんとすれば電車や自働車に威嚇され、驅逐され、其上都市に潜む種々の誘惑は常に彼等を誘惑せむとしてをる。夏の夕方狹い小路の門口に僅に數尺の地を守つて辛じて嬉戯してをる都市の兒童を見る者にして心あらば必ず彼等のために憐愍の情を起すに相違あるまい。廣々とした田園の木蔭に鍬持つ手をしばし休めて常に煙草の火を弄ぶ農夫と、薄暗い事務室や窮屈な工場の一隅に血眼で仕事をしてをる若者とを想像し、又森に走り川に遊んでをる田舍の子供と、食膳で戸外に遊戯することの危險を教へられてをる都市の子供とを想像して、其の顔色と體格とを比較して考へて見れば何人と雖もつくづくと感ずる所があるに違いない。蒼白の顔色、蒲柳の體質、胃弱、神經衰弱、肺結核等は都市に住む多數の者の有する喜ばしくない特徴である。是等は經濟的に急激に發展した都市に住む者の當然受くべき損害である。これが都市に住まねばならぬことは先づ以つて人の不幸と看做さねばならぬ。然しながら此の不幸を減滅するの途は必しも無いことは無い。しかもそれは理論上は至て簡單である。都市に住む者にとつて其缺けたる閑靜な自然と新鮮な空氣とを彼等に與へればよいのである。

近代の都市は益々重要さを加へて來る其の經濟的使命の勢力に支配されて愈々自然に離反して行く。住宅は壞されて商店となり、庭園は潰されて住宅地となり、田園は姿を改めて工場地となり、沼澤は變じて遊樂地となる。生産と交換の集中的傾向の甚しきに從つて人口の都市集中の勢は益々激しく、都市は無限に

而して多くは無計畫に附近の田園を破壞して殺風景な加工生産と交換の雜沓に變つて行く。かくして近代都市は日々其の附近の自然を征服して行くのであるが其代償として其の都市の住民は自ら征服した自然の祟りを受けて、自然に離反したことに對して重い制裁を受けねばならぬ。昔は夏の夕べ涼風を樂むだ川邊には柳の代りに倉庫の白壁や亞鉛(トタン)板塀が建並むでをる。一瓢を携へて爛漫の櫻を眺めた風流な小山には殺風景な俄普請の家が充滿してをる。桑の花や蓮華の花の間を縫ふて蝶子を捕へたり、夜露に袖を濡して螢を追つた近郊には無趣味な鐵筋「コンクリート」造や煉瓦造の工場が一面に擴がつて毒々しい烟を吐いてをる。美しい、樂しい自然を容捨なく破壞した都人は今になつて自然の恩惠を思出して頻りに懷かしがつて居る。そして彼等は食後靜かに心地よく散歩し得る場所や、子供が安全に嬉戯し得る場所や、土曜日の半日や日曜日、休日の一日を一家揃つて自由な閑靜な自然に親しむで心ゆくばかり清新な大氣を吸ひ晴れやかな日光を全身に浴びて潑溂として濶歩し悠として休息し得るような場所を求め探ねるようになつた。街路に並樹を植ゑたり、川緣に芝生を造つたり角地に小園を設けたり、都市の内外に公園や運動場を設けたり、公園式の散歩道路を設けたりするとは皆な此必要に基いて起つたとである。そして醫者に都市の密集生活より生ずる衛生上の弊害を高調して諸種の施設を促進して居るが、其の或者は醫藥よりも空氣と日光による療養の有效なことを說くに至り、教育者の中には田園や林間教育の效果を唱へる者が生じた。都人は益々都人を避けて自然に親まむと欲し、土曜日より日曜日へかけての週末(ウヰークエンド)の小旅行が盛んになり、海水浴、山岳旅行が流行し、或者は都市の中心より退却して、近郊田園に居を定めるようになる。日曜日に公園や近郊に潮の如く流れ行く群集、海水浴場の繁盛、近郊住宅の激增等の現象を注目する者は如何に痛切に都人が自然に憧れをるかを窺ひ知るに相違ない。總べて是等の現象は産業革命以來向見ずに自然に離反した都人が、今日に至つて其の結果の悲慘なことに氣付いて、急に自然の偉大な恩惠を身に滲みて覺えて、これを懷かしがるようになつたせいである。

近代の都市は燈火、暖房、交通等に就いて文明的の設備をすることに汲々として居るが、他方に衛生的の見地から上水、下水の設備に巨費を投ずることを惜まない。是等の設備は都市の文明的價値を齎し一都市生活を便宜幸福ならしめるのに缺くことの出來ぬものであるが、更に都市に生活する者をして自然の恩惠に接觸する機會を多からしめることも亦都市生活を幸福たらしめるため若くは少とも之に甚く不幸を減殺するために必

要なヿである。即ち近代の都市は之を文明化すると共に自然化するヿを忘れてはならぬのである。近代の都市に新式の經濟的機關と文明生活の設備を完備せしめむとする者は必ず同時に之に新鮮な空氣と美しい自然とを保持せしむるヿを忘れてはならぬ。都市生活の幸福は都市の文明化と自然化が相調和して始めて完きを得るのである。歐米に於ける急激に發生した都市は單純なると經濟的の利用のみを急いだゝめに、其の文明化は割合に早く實現したのであるが、今や其の文明化を計畫的、理想的にすると共に其見捨てたり破壞した自然を恢復するために汲々としてをる。近年盛んに行はるゝ都市計畫、地域制度、公園系統等の事業は即ち此の目的に到達せんとする手段である。我國の都市は近年何れも急速な發達を遂げたのであるが其の經濟的の利用も未だ充分でなく、從つて都市の文明設備も未だ甚だ不充分であるが、都市の內外の貴い自然は既に無謀に短見に破壞されたものが多い。即ち我國の都市は文明化が未だ充分でないに拘らず自然は可成りの程度まで蹂躙されて居る。我國の都市は一個の經濟の機關としては可成り文明的の發達を遂げて居るが生活の舞臺としては文明的の發達未だ遲々たるのみならず寧ろ其の弊害の方面を多く現はしてをるようである。吾人は歐米都市の覆轍に顧みて一面我國の都市の經濟的利用を合理的にし文明的設備を完全に理想的にするに共に、他面都市が不知の間に見來てむとする自然の恩惠に接觸する機會を保持することを決して忘れてはならぬ。理想的の都市計畫は一定の計畫の下に都市を理想的に文明化すると同時に必要なる程度に於いて之を自然化するものでなくてはならぬ。文明都市といふ言葉を廣く新式に解すれば一定の理想と計畫の下に都市の文明的設備を完成すると共に、都市生活の健康と幸福に必要なる自然を支配し得る設備と手段を備へたる都市を指すものと言ふべきである。理想的の文明都市の完成は頗る難事業と言はねばならぬ。

(二) 都市の人口密集の弊害

・近代都市の經濟的使命の重要となるに從つて之に人口の集中する傾向のあることは最著明の事實である。殊に産業の發達の急激な國の都市に於いて甚しい。我國の諸都市も其の産業の發達に連れて人口の都市集中の傾向著しく、日本統計年鑑によつて市區と町村の人口の割合を比較するときは明瞭に其の形勢が現はれる。

	明治二十一年	同三十一年	同四十一年	大正九年
市區人口	九・六%	一一・七%	一六・〇%	一八・〇%
町村人口	九〇・四%	八八・三%	八四・〇%	八二・〇%

註、大正九年度は第一回國勢調査速報世帶及人口第四圖に依る計算

米國の如き產業の發達の急速なる國に於いては其の都市は殆ど總て經濟的使命に基いて發生し發達したのであるからその人口集中の傾向の如きも頗る注目すべきものがある。米國は十年に一回國勢調査を行つておるが其の千八百八十年の第十回國勢調査から千九百二十年の第十四回國勢調査までの結果を比較しても人口の都市に集中する傾向は頗る著明である。

	一八八〇年	一八九〇年	一九〇〇年	一九一〇年	一九二〇年
都市人口	二九・五%	三六・一%	四〇・五%	四六・三%	五一・九%
田舍人口	七〇・五%	六三・九%	五九・五%	五三・七%	四八・一%

但右の統計に依る都市といふのは人口二千五百人以上のものをいふのであるから我國の町程度のものまでを包含してをることになる。然しながら千九百二十年の國勢調査の結果によると、千九百十年の國勢調査の結果に比較して人口二千五百人乃至一萬人の都市は人口一八・八%を增加し、人口一萬乃至五萬の都市は人口二六・七%を增加し、人口五萬以上の都市は人口二六・四%を增加してをる。之によつて見れば我國の町程度のものより市程度以上のものに於て人口增加の著しいことが知れる。

各個の都市に就いて見ても倫敦、紐育、巴里、市俄古、伯林、費府等の世界第一流の都市が產業革命以來殊に最近數十年間に目醒しい人口の激增を來たしたことは實に驚異すべきほどで、其外各國の首府や、漢堡、「リヴァープール」「グラスゴウ」「マンチェスター」等の商工業市や米國の與路易、「ボストン」「クリーブランド」「バルチモア」「ピッツバーク」「デトロイト」等の諸都市の人口增加の速力も目醒ましいものである。殊に紐育、市俄古、費府の三大都市に於ける人口增加の速度は異常であつて費府は千八百年頃には人口僅に六七千に過ぎぬ小都市であり、紐育及市俄古は更に遙に之よりも人口の少い小都市であつたが何れも僅に百餘年にして現在の如き大都市となり紐育市の如きは現在六百萬の人口を包擁する狀態である。

我國に於いては東京、大阪を始めとし神戶、名古屋、横濱下関では、長崎、廣島、函館、吳の諸市は異常の發達をなし、殊に吳、八幡、大牟田の諸市の人口增加の速度は驚くべきものである。

各個の都市に就いて觀察すれば人口　貨物の集散地、製造工業地として適當する諸都市に集中する傾向が最著しい。但工業の發達するためには燃料、原料、勞力、運輸等の程度まで地方的に制限される條件がある故、純然たる工業都市は、業的に發達する傾向があつて、一流の大都市となるとは無く、現在にかい

ても人口五十萬程に止まるが、之に異つて商業及び交通の中心として發達せる都市は殆んど無限の膨脹力を有し、殊に其の近郊に各種の工業が發達するに及んでは益々其の膨脹力を大にするのである。各國間の國際的取引が增加すると共に此種の大都市が益々其の大さを加ふることは當然の勢である。

都市に人口が集中するときは其の都市は外部に向つて膨脹もするが一定の面積に收容される人口も自然に增加する。都市に人口が集中することゝ、其の人口の密度が增加するとゝは必ず相隨伴する現象である。英國でも、米國でも、獨逸でも、國勢調査の度每に都市の人口密度が一般に增加して來る。但し倫敦市及び伯林市の中心の一部の如く多少人口密度の減少を示す部分もあるが、是等は其の部分の人口稠密の程度が極點に達して最早や其の弊に堪へず、且つ市の內外を連絡する高速度交通機關の出來たために自から市の外廓に逃れ去る者が生じたゝめであつて、市全體としてはやはり人口の密度が增加してをるのである。我國の都市も年々人口密度を加へてをるので今六大都市に就いて見れば左の如くである。

人口密度（千坪に付き）

	明治三十年	同四十年	大正六年	大正九年 千坪に付	大正九年 一「エーカー」に付
東京市	四七人	六〇	七八	九一	一一一
大阪市	四三人	六六	八八	七一	八七
神戸市	一七〃	三三	五〇	三一	三九
京都市	三一〃	三八	五三	五四	六五
名古屋市	二〇〃	二九	三四	三四	四二
横濱市	一七〃	三四	四一	三七	四五

註、東京市は警視廳其他は府縣の統計により、大正九年度は國勢調査の人口と當時の市面積より計算す。

右の表によれば六大都市何れも人口密度を增加して行つてをるが、大正九年度は國勢調査の結果を基礎として計算したゝめ、國勢調査の人口が何れも從來の人口より少なかつたことゝ、大正六年以後隣接町村を併合したものゝあることのために從來の人口密度と保合か又は減少したことになつてもをる。東京市のみは警視廳調査の人口が內輪であつたゝめに九年度に於いて大いに人口密度が增加してをるのである。兎に角國勢調査の結果として我國の都市の人口密度を正確に知ることが出來たのである。

この樣に都市の人口密度は年每に稠密に成り行くのであるが、都市生活に伴ふ弊害は必ずしも人口の都市に集中することによつて直ちに生ずるものでは無い。人口の集中には必ず人口密度の增加が伴ふために種々の弊害が生ずるのである。人口が

あまりに稠密であるときは空氣が汚濁するため、又汚物の處置に困難なるために絶えず住民の心身を害するのみならず病菌を傳播する處が甚多い。此弊害を除去するためには上水、下水の設備其他必要なる衛生設備を完全にし且つ適宜の手段を採つて傳染病の豫防並びに一般的の保健に資することを得るが、空氣の汚濁と過度の密居より生ずる直接の損害を救ふの道は更に別に之を講ぜねばならぬ。その方法として、都市計畫法、建築物法及び住居法の一部分に於いて建築及び住居の方法に關して過度の密居を防止するの方法を講じ、密居地を整理し他方に公園及び類似の空地を保持して都市の空氣の清淨を圖り且つ自然に接するの機會を作り、更に高速度交通機關によつて一市内外の直通連絡を圖つて郊外居住に便し、或ひは進んで郊外に田園都市を設けることによつて市の中心部に於ける過度の密居を緩和するの方法を採るべきである。即ち根本的に過度の人口の密集を生ぜしめざる方法を講ずると共に現在の密居地を整理し且つ密居狀態を緩和する方法を採るのである。從來あまりに經濟的の利用、しかも不合理、無計畫の經濟的の利用のみに盲進してをつた都市をして大いに省慮せしめて、都市生活の完全な且つ永久的の幸福の根柢を築かしむるためには必ず此種の根本策を講ぜねばならぬ。要するに都市をしてあまりに自然を無視せしめず、且つ都市と田園との連絡を一層密接ならしめ、一言にして言へば都市を自然化することを忘れてはならぬ。それでこそ始めて理想的の文明都市である。

千九百二十年の國勢調査によれば米國の人口密度は一平方哩について三十五人半であるが、同年の我國の國勢調査によれば日本の人口密度は一平方哩について三百七十六人に當る。國として日本の人口密度は米國の十倍強に當るが、其上世界一の山岳國であるから僅かばかりの山間の平野に成立し、都市に人口の集積するのは自然の勢である。人口密度が十倍であるといふことは、他の方面から言へば一人の十分の一の土地しか持たぬといふことである。日本人は一人當十倍しかも内容の頗る豐富な土地を占有する米國人を羨やましいと思ふ。少くとも米國人から天然に恵まれざる日本人に對して一片の同情を寄せて貰ひたいと思ふ。此事は日本の國民經濟の根本の問題に觸れ、又國の政策の大方針に關聯することである。此所に論ずべき範圍で無い。然しながら右の比較の一例に見ても國民經濟涵養の第一基礎の貧弱なる我國に於ては都市の文明化、都市の自然化と言ふことは資本の點からも土地の點からも中々容易に解決し得べき問題ではないといふことはこゝに認識して置かねばならぬ。理想的の文明都市を獲ることは我國民に取つて特別に困難な問題

である。況んや市民に此問題に關する理解がなく、努力がない時には理想の到達は頗る遼遠である。

（三）公園の必要

都市を自然化せしめ、都市生活を田園生活化せしめる手段は色々あるが第一に又最も一般的に大切なるものは公園である。自然に反いた都市の住民にとつては繁激な仕事の後に少時なりとも自然の風趣に接して清淨な大氣を思ふさま呑吐するほど心地よいことはない。都市が膨張すればするほど自然と離れることが甚しくなるのであるから、大都市ほど其區域の内又は近接地に自然を保存して置くことの必要が大きくなる。自己の住む家に大きな庭園を持ち得る人は數ふるほどしか無い。郊外の住居や田園都市より市内に通勤するにしても自から限度がある、大多數は市内で仕事に從事すると同時に市内に居住するのであるから一般的の都市の自然化の手段としては公園が最も大切である。市民の保健の上から殊に虐げられて將に萎縮せんとしてをる憐むべき都市の兒童の保健上から公園は最重要な直接の救護者となるのである。

此意味に於いて近代都市は夫れ夫れ相當な面積の公園を保持するために種々の努力をしてをるが、米國の諸都市は從來あまりに短見無方針な經濟的利用にのみ盲進した非を悟つて最近十數年來都市の自然化に熱中して今や既に可成りの成果を舉げてをる。凡そ一の都市が如何なる程度に於いて豐富に公園を有してをるかを知るためには其の市の總面積に對する公園面積の割合を見ることも一つの方法であるが、各都市の人口密度の厚薄に大差がある故此割合のみでは市民各個人に對して幾何の公園が存在するかを知ることが出來ぬのであるから、通常公園面積一「エーカー」に對する人口の密度を求めて以つて市民の有する公園の多少を測る標準とするのである。今是等の見地より參考のために米國の諸都市が如何なる程度の公園を有してをるかを調べて見よう。

米國諸都市内部の公園（千九百十六年）

	公園面積「エーカー」	市總面積に對する%	公園一「エーカー」に對する人口密度	公園内車道哩	公園人道及騎路哩數
第一級都市（人口五十萬以上）	二九、五三一	五・二	四〇七	三二	一〇七
第二級都市（人口三十萬乃至五十萬）	一九、一六六	三・一	二二二	一六六	三六八
第三級都市（人口十萬乃至三十萬）	三〇、二四九	三・九	三三一	二六八	一〇七
第四級都市（人口五萬乃至十萬）	一三、八九九	二・四	三一九	一七二	三六八

第五級都市（人口三萬乃至五萬）	一三、七六三	二・五	三六	二九	一
總計	一〇五、七二七	三・四	三〇五	一、一四八	四二

（三・四、三〇五は平均）

米國第一級都市（人口五十萬以上）内部の公園（千九百十六年）

	公園面積「エーカー」	市總面積に對する%	公園一「エーカー」に對する人口密度	公園内乘車道哩數	聯絡公園式道路哩數
紐育	七、七四〇	四・二	七〇六	五五	三八
市俄古	三、八七〇	三・一	六三二	五〇	六三
費府	五、五〇〇	六・五	三〇六	五〇	—
聖路易	二、四七九	六・三	三〇二	三四	—
ボストン	三、六四〇	一二・〇	二〇五	一四	三二
クリブランド	一、七〇二	五・〇	三八六	四三	一二
バルチモア	二、二七八	一一・二	二五七	二五	三
ピッツバー	一、四一六	五・三	四〇四	二〇	八
デトロイト	八八四	三・三	六三七	二九	一二

註、一「エーカー」は千二百二十四坪。

右の表に就て見れば米國の人口三萬以上の都市は總體の平均として市の總面積に對して三・四%の割合の市内所々の公園を有し、公園面積一「エーカー」に對する人口密度は平均三百〇五人であつて、人口五十萬以上の第一級の都市は市の總面積に對して平均五・二%の割合の市内公園を有し、公園面積一「エーカー」に對する人口密度は平均四百五十七人である。大都市になるほど郊外に出ることが不便になるから市内に於いて割合に大きな面積の公園を持つ必要があることは言ふまでも無い。それでも大都市は市の面積に對する人口の密度が小都市よりも遥かに高いために一單位の公園面積に對する人口密度は最高い狀態になつてをる。而して第一級の大都市中に於いても大なるものほど市の面積に對する人口密度が高いために紐育は公園面積一「エーカー」に對する人口密度七百〇六人、市俄古は同上六百三十二人といふ最高い數字を現はしてをる。「ボストン」及び「バルチモア」は共に公園面積の割合高く、公園面積に對する人口密度低く最も理想的であるが、就中「ボストン」は此外に三十二哩の公園式道路（パークウエイ）を有し、更に此以外に「マサチユーセッツ」州首府公園系統に屬する市外所在の豐富な公園及び公園式道路を有してをつて公園の發達せる點に於いては米國に於いても有數の都市である。右の表中の公園内乘車道（ドライヴウエー）は自働車馬車等の散策道で先づ贅澤なものであるから小都市には少い。公園式道路については後に別に述べる。第二級の都市中に於いて首府華盛頓は「ランファン」氏の理想的の都市計設計案によつて建設せら

れただけあつて其の理想的の道路系統と公館區域と共に公園の企模配置に於いても亦理想的であつて、市總面積に對する公園面積は八・四%で、公園面積一「エーカー」に對する人口密度は僅に九十七・八である。しかし之は世界一の富裕國が其首府を經費を惜まず建設したものであるから他の國の都市が容易に之を眞似ることは出來まい。しかし「チャーレス、レイ」氏は千九百十四年の紐育州の市長會議の席上に於いて人口十萬の都市を標準とすれば自然式公園（ワイルド、パーク）、田園式公園（ルーラル、パーク）、小公園、運動場、廣場等で總計千五百「エーカー」、市の總面積に對して一二・五%を理想的としてをるが、そうすれば市の人口密度は八・三、公園面積一「エーカー」に對する人口密度は六六・六となる。もし斯の如き標準に從ふとすれば人口數十萬若くは數百萬の大都市に於いては驚くべく巨大なる面積の公園を有せねばならぬことになる。

次に第一流の世界的大都市の有する公園面積を見ると、左の如くである。

	公園面積「エーカー」	市面積に對する%	公園一「エーカー」に對する人口密度
大倫敦	一五、九〇一	四	四五六
倫敦(行政區)	六、六七五	九	六七七
巴里	五、〇一四	二六	五五四
伯林	一、〇三四	七	二、〇一四
漢堡	八〇八	三	一、二四六

註、倫敦及び巴里は千九百十一年、伯林は千九百十三年、漢堡は千九百十二年の數字「リユウイス」氏に據る。

此表によれば大倫敦は市面積に對する公園面積の割合は紐育と殆んど同じく、公園一「エーカー」に對する人口密度は米國の第一級都市の平均と同一であり、倫敦行政區の後者は紐育のそれに近い。巴里は二六%といふ飛離れて多い公園面積を有するが其の人口密度が頗る高く一「エーカー」に付き百四十八人であるために、公園一「エーカー」に對する人口密度は可なり高くなつて居る。伯林も其の人口密度が高く百三十三人であるために公園一「エーカー」に對する人口密度は二千〇十四人といふ飛離れて高い數字を示してをる。而して此點に關して吾人の知り得る範圍に於いては「マルセイユ」の二千五百六十二といふのが歐羅巴の大都市で最高の密度であつて、米國に於いては其の第一級第二級の都市中に於いては前掲の紐育の七百〇六人が最高であり、第三級　都市中に於いては「デイトン」(人口十二萬五千)の二千六百五十九人といふのが最高の密度である。更にそれより小都市になれば必ずしも市内に大公園を有することを必要とせざる故一層高い密度のものがあることは勿論である。

之を我國の大都市に就いて見れば次の様な有様である。

	公園面積「千坪」	市面積に對する%	公園千坪に對する人口	公園一「エーカー」に對する人口
東京	五〇〇	二・一	四、三四六	五、三二〇
大阪	五八	〇・三	二六、〇〇〇	三一、八二四
神戸	五六	〇・五	九、四四八	一一、五六〇
京都	五五	〇・二	三、三六〇	四、一一二
名古屋	七四	〇・六	五、四六〇	六、六八三

註、東京は大正九年の計算、其他は大正五年度の調査、一「エーカー」は千二百二十四坪。

右の内東京市は名義上の公園面積は六十二萬坪あるのであるが淺草公園の大部分芝公園の一部分の如く、公園の目的の正反對の用途又は之に合せざる用途に充てられたる部分がある故其等を精査して十二萬坪を差引いたのである。偖て右の五大都市の狀態を見るに公園面積の割合も公園面積に對する人口密度も之を歐米の諸國と比較する時は數字の上に於いては實に慘憺たるものである。是等の五都市は何れも其人口に於いては米國の第一級の大都市に位するか若くは最もそれに近い程度の大都市である。而して米國の第一級大都市の一「エーカー」の公園に對する人口は既記の如く平均四百五十七人であるが東京、京都、名古屋はその十倍前後の密度となり大阪、神戸に至つては數十倍の密度となる。驚くの外無い。

但右の數字を直ちに外國の都市の數字と比較して無條件に我國の大都市に於ける公園の不足並びに其の保健上に及ぼす影響を判斷することは早計に失する嫌がある。我國の大都市に於いては個人の住宅に多少の庭園を有するものも多く東京市の如きは特に著しく多いようである。從つて公園の必要の程度は幾分か減少する。又是等の都市は海邊に位する者多く殊に神戸及び横濱は海邊に直接する故市全體の汚濁せる空氣を比較的迅速に交換する效果があらう。然しながら更に考ふれば庭園の附屬してをるほどの住宅に住む者の數は割合に少く、殊に大阪市の如きは個人住宅の庭園も亦頗る僅少である。從つて右の計算の割合で我國の大都市が公園を増設する必要は尠くとも少くとも大阪市は現在の十數倍、東京市其他は現在の數倍の公園を増加するの必要があらう。大阪市民殊に兒童の蒼白なる顏色、虛弱なる體格は明かに密集生活運動不足の悪結果を語るものと言ふべく、近時大阪市民が他の都市の者の想像し得ざるほど熱心に南海、阪神間、北郊等の方面に出遊するは誠に必要に迫られたる自然の現象と言ひ得く。然しながら郊外に出る時と金とを有たない大多數の者はやはりあの狹苦しい殆んど青空を見ることの出來ない町の陰氣な家の中に鮨壽司のように押合つて汚れ切つた空

氣を吸へながらぢつと座つて居ねば無らぬ。喧騒を寄せずして何としよう。東京市にても日曜日の日比谷公園。春の上野の芋を洗ふ様な人出の様を見れば公園の不足なことは忽にして證驗が出來る。混雜を恐れて外出せざる者が尚ほ無數に控えて居るのである。東京市も何とかして公園を増設することを考へねばなるまい。公園は適宜に之を散在せしめたいと、遊ぶために電車に乗る金を持たない者もあれば暇を持たぬ者もある故、充分に利用し得ないことになる。東京市は江東にも山の手にも適當な公園を持たないのは頗る市民の苦痛とする所である。早く適宜の候補地を物色するの必要があらう。

(四)　大公園の起源

近代都市は何れも大小種々の公園を以つて居るが、多くは之を一定の計畫の下に築造したのでもなければ又最初から公園として有つて居つたものでもない、近年都市の膨脹の激しきに連れて私有の庭園が公園として開放され或ひはその地を改良して公園とし、或ひは特に已を得ざる必要のある所では既住宅地を整理して公園を築造する等其の場合の必要に應じて漸次に都市の膨脹と市民の需要に適合するように自然的に發達して來たのであつて、決して多數の豫定敷地の上に公園が計畫的に築造されたのでは無い。然しながら現在既に都市の自然化を必要とする都市にあつて、且つ將來の人口増殖の大なることを豫想される都市にあつては之を理想的の近代都市とするためには都市の自然化殊に公園の増設に關して熟慮したる計畫を建てねばならぬ。

古代の希臘、羅馬等の都市や中世紀に起つた歐羅巴の都市などにも公共の建物や寺院の前などに廣場があつて市場や、彫像や、花卉を以つて飾られ公衆の休息又は社交の場所となつて居つて今日の小公園ともいふべきものであるが、十七、八世紀頃から歐羅巴諸國の帝王貴族は其の首都に大きな庭園を築造し、大きな池や、噴泉や、壯大な建物や、優雅なる樹木や、緑の芝生や、美しい花卉を以つて之を飾り華麗の美を誇つたのである、今日の公園に等しい技術的の設備は是等の大庭園にあるのみならず、公園そのものゝ起源も亦こゝにある。最初の王侯の大庭園は後世に至つて、都市の發達すると共に公衆のために開放せられ或ひは人民の共有物となつたものが多く、歐羅巴諸國の大都市にある公園にして此種の經歷を有するものが頗る多い。國王の宮殿が美術館となり或ひは博物館となつたものがあるが、それは主として、政治上の大變化に基くものであるが、一般の大庭園が市民の公園となつたことは主として近代都市の發展が

應し市民の幸福を增進せんとする所有者の好意に由來するのである。

例へば倫敦市の大公園の中で最有名な「ハイド、パーク」(三百六十四「エーカー」)や「セントゼームス、パーク」「グリーンパーク」及び「テームス」河畔の「キュウ、ガーデン」「ハムプトン、コート」等即ち倫敦市にある大公園の大部分は皇室の御料地であるが公衆のために全然自由に開放されてある。又巴里の二大公園の一である「ボア・ド・ブーロニュ」(二千百「エーカー」)は國有の大森林の一部分であつたが千八百五十二年に之を近世式公園に改造すべき條件の下に巴里市に下附し、加之其の改良のために要せる經費一千四百萬法の大部分は國が補償したのである。巴里の他の大公園である「ボア・ド・ヴアンサン」(二千三百「エーカー」)も亦國より市に下附したものであつて、且つ市は國の同意を得て下附地の一部分を賣却し之によつて此の公園の築造費二千四百萬法の半額以上を補塡することが出來た。又伯林市內唯一の大公園である、「チーアガルテン」(六百三十「エーカー」)も從來皇室の私有財產であつたが其當時より通常の公園と同じく全然自由に開放され伯林郊外の「グリユネワルド」(一萬千三百五十「エーカー」)の廣漠たる皇室所有の林野も同樣であつた。同じく伯林の近郊にある「ポツダム」の離宮所屬の壯麗なる大庭園「サンスーシー」も亦常に開放されてあつた。是等の大公園は吾々が歐洲に在つた時に常に好んで散策した所であつて殊に日曜日には是等の大都市の市民が雲霞の如くに集り來つて一日の淸遊を樂むのである。

我國の都市の公園も其の有名なるものは多く皇室の御料地であるか、舊大名の邸園であつたものである。東京市最大の公園である上野公園は宮內省の御用地であり、金澤、水戶、岡山、高松、熊本の公園等は何れも舊藩主の邸園であつた。過日東京市內の芝離宮及び濱離宮御開放の議が傳はつたが事實であれば至極喜ばしいことである。彼の陸軍が砲兵工廠內に占領する後樂園の如きは疾くに市民のために開放すべき筈のものである。

(五) 公園式道路(パークウエイ)及公園系統(パークシステム)

近來米國の都市では公園を孤立的のものとして置くことは公園の效果を充分に發揮せしむるものでないとして是等の公園と公園の間を並木や、灌木や、芝生や、花で飾つた美しい公園式(パーク)の道路(ウエイ)を以つて連絡せしむることを努めて居る。公園式の道路(又は散步道路)は巴里や維納にある城廓を撤發した後に出來た圓周並木道に其の源を發するのである。公園式道路があれば不愉快な電車に乘らずとも愉快に散步しながら公園に行かれる、そ

こから更に他の公園へも行かれる。又公園式道路が普及して居れば公園まで行かずとも一寸家を出て此の公園式道路を散歩して濟ますことも出來る。至極愉快で、便利である。此公園式道路は完全なものになると路分路幅が廣く四十間の路幅を有するものがある。前掲の米國諸都市の公園面積表に其の有する公園式道路の哩數が掲げてあるが、第一級の都市は何れも可なり長い哩數を持つてをる。第二級の都市では「バッファロ」「ミネアポリス」第三級の都市では「カンサス、シチイ」「インデアナポリス」「デンヴァー」「セント、ポール」「トレドー」「スポケン」「ダラス」等が何れも二十哩内外の公園式道路を持つてをる。是等の公園式道路は勿論都市によつて其の内容に大に優劣の差がある。

數個の公園を公園式道路を以て連絡した總體を公園系統（パークシステム）と云ふ。此の公園系統は市内の公園のみを公園式道路を以つて連絡して成立する場合もあるが近來は各地に於いて市内の公園を公園式道路を以つて連絡するに止まらず市の外部に於いて諸方に適當なる公園を求め、之を市の内部と公園式道路を以つて連絡して一の大なる公園系統を作ることが盛である。

「カンサス、シチー」は約三十年前より始めて漸次に各方面に公園を増設し之を美しい公園式道路を以つて連絡して現在の市公園系統を形成した。

然るに「ボストン」は更に大規模に其の附近にある市町村と共同の公園系統を作成せんとし、千八百九十三年「マサチューセッツ」州の法律を以つて首府公園區域を定め、五名の委員より成る首府公園委員會を設立し其地方の住民のために『運動、休養に必要なる空地を獲得し、維持し且つ利用し得る如くする』の權限を與へた。其後種々の權限を増し、此委員會の活動によつて千九百十五年迄に其事業のために投資した金額は二千萬弗に及び、なほ還債基金、利子、繼續公債費及維持費等のために毎年の經費として百五十萬弗を要する。而して是等の經費は極めて小部分は州の一般會計から支出されるのであるが、其他は總べて特別委員の決定によつて公園系統内にある市町村に分擔せしめる。此の首府公園系統は「ボストン」市を始めとして「ボストン」市にある州廳を中心として半徑十五哩以内にある三十八の市及び町を包括してをる。

右の外千九百〇四年の州法によつて「プロヴィデンス」公園組合を設立し、次いで千九百〇七年首府公園委員會を設け首府「プロヴィデンス」其他四市の市長、七ケ町の町長、大學總長、美術學校長、「プロヴィデンス」商業會議所會頭、同く美術倶樂部會長、建築學會々頭を委員として「ロードアイランド」首府、

園系統の作成を企て、千九百〇八年より公園地の獲得を開始し千九百十六年には既に千百「エーカー」の公園と一萬二千「エーカー」の公園敷地とを有し三十六哩の聯絡公園式道路を有してをる。其の經費は三名の特別委員の決定に從つて公園系統内にある市及び町が之を分擔し州税として之を州に納付する。而して支出は公債によつて之を支辨し、之を保證するために毎年課せらるゝ州税を以つて還債基金を設けて置くのである。

右の外「エセックス」縣公園系統「ハドソン」縣公園系統、「ミルウオキー」縣公園系統、「パリセード」州間公園系統等は何れも千八百九十年代より前後して發達し右と殆ど類似の方法を以つて公園系統の完成に努めて居る。

公園、公園式道路、公園系統が完全すれば始めて都市は完全に自然化されることになる。我國に於いても近時公園の問題が輿論の注目する所となつたのは喜ぶべき現象であるが完全なる公園系統の作成は前途遼遠なりと雖もせめて公園に配するに幾條かの公園式道路を以つてする程度には早く進歩させ度いものである。(完)

補角としての都市生活と田園生活

田中王堂

『中央公論』記者足下

人間が文化生活を創始して以來、わたくし共が、今日、都市と呼び、田園と呼ぶところのものは、或る形に於て、隨分久しい間彼等に依つて營まれて居ました。隨つて、兩者の關係を、若しくは、兩者の相對的價値を考察した論者の數も決して尠なくはありません。然し、獨り、わたくしが怪訝の念に禁えないことは、事實さうであるに拘はらず、兩者の關係の眞相も、又は、兩者の相對的價値の眞義も、すこしも明らかにされて居らないことであります。是れは、主として、兩者は、もと〳〵補角的のものであるのに、彼等は擧つて其れを一向に對立的のも

のと想像して來たからであります。

田園生活と都會生活とが、對立せしめられた時、若しくは、反襯せしめられた時、實行に於ては兎に角、理論と修辭とに於ては、いつでも評判の善いのは田園生活であつて、評判の悪いなの都市生活でありました。清淨、新鮮、淳朴等は田園生活の象徴であつて、汚濁、敗頽、猾黠等は都市生活の象徴でありました。あの有名な諺を籍りて言へば、『田園は神の仕業であつて、都市は惡魔の仕業である』のであります。斯くの如き見解は啻に殆と總べての詩人たちに依つて抱かれたものであるのみならず、亦、大數の哲學者たちに依つて抱かれたものであります。

然し、新開地の部落の發展に於てわたくし共が常に見る如く、如何に簡單であつても、一團の個人の中に、或る程度に於ける、或る種の協同生活が成り立ち、そこに個人の間に貨幣、其の他の媒介物を通して彼等の仕事の結果が交換され、彼等の全體の上に政治的制裁が行はれる必要が生じて來ると、爲政者や、法律の顧問や、物貨交換媒介者は一つの地方に於ける或る便宜な一致點に集合することが、その協同生活を圓滑にし、敏捷にする道であるため、こゝに都市と田園とは分化するのであります。して見ると、社會經濟に從つて、生活の向上を圖るために理性のはたらく經過の中に現はれる産物であるといふ意味に於て、都市も田園も等しく合理的であります。それが合理的であるから、又、極めて自然的であり、一般的あります。勿論、生活に其の要求があつて始めて分化したものでありますから、都市の生活には一つの特徴があり、田園の生活には他の一つの特徴があります。然しながら、事實から言つても、又は、理屈から言つても、一方が惡魔の仕事として擯斥されて居るのに、他の一方が神の仕事として讃美を受ける理由は大してないやうに思はれます。然し、一部の情熱から物を評價する詩人に依つてのみならず、冷静に、『永久の見地から』物を判斷なることを標榜する哲學者に依つてもさうされて來ました。是れは、一體、どういふわけでありませうか。

人間の種類は大まかに、實行に依つて生活を改造して行く者と、理論、若しくは想像力に依つて其れを統一して行く者との二つに分けますと、理論、若しくは、創造力に依つて生活の統一を圖つて行く者の或るものは、實行に依つて生活の改造を圖つて行く者の概して有たない考へ方、物の見方を傳統的に養つて來ました。其れは、神秘的、超越的、乃至（或る學者の用ゐた稱呼を用ゆるならば、）合理後的（post-rational）と呼ばれ得るものであります。それは、趣味に關しても、道徳に關しても、政治に關しても、其の中に彼等が醜とか、不正とか、罪惡とか

見做すものが見出された場合には、彼等に其等の現存の組織を改整することに依つて、是等の缺陷を匡正する苦心と手數とを取らうとしないで、其等のものを全然救濟すべからざる程度にまで墮落しきつたものと想像し、其等の組織を根柢より否定して、全然新らしい、しかも至高、至醇の原理に依つて、其等のものの立て直しを企てるところにあるのであります、彼等は、事實、其等の原理の崇嚴に感激して居ります。さうして、彼等は、何處に、どうして、そんなものが見出だされたかに就いては、尠しも反省しないのであります。然し、よくよく吟味して見ると、其等の原理なるものは、何も尠しも新らしいものでもなく、又、至高、至醇のものでもなく、現に其等の組織を形作る要素の一つを彼等が狭い理會と、偏執な理想とからして、勝手に抽象したに過ぎません。されば、其等がますます高いそんなものを發見して居ると想像して居る時に、其の實は、ますます低く生活の混沌状態に落ちて行つて居るのであります。

元來、自然のはたらきなるものは、主觀の努力に依つて洗練され、統一されて、始めて法則にまで醇化されるのでありますが、古來、主觀の努力に依つて整頓された結果を、自然のはたらきの中に讀み込み、そして、其等を自然の法則その物と思惟して來た嫌がありますから、彼等の空想に依つて生活の實際の方針の中に自然の法則を見出だしました。斯くして、或る種の改革家に取つては、『自然に還れ』が最も有力な合言葉の一つとなりました。そして、いつの時代に於ても、改革家の非難の對象となつたものは、主として、其の當時の文化の中心であつた都市生活の種々相でありましたがために、彼等に依つて事實相よりも幾層も相違すると想像された田園生活と都市生活とは常に反襯させられ、都市生活に含まれ大缺陷が見出さるれば見出ださるゝほど、田園生活は其等の缺陷より免かれたものと速了されるのでありました。

然し、如何なる場合に於ても、改革と名付け得らるべき改革、即ち、正當にして、有効なる改革には、或る種の還元は必須であります。それは、決して無制限に、自然に還元することでもなく、又其れに近い田園生活に還元することでもなくして、現存の缺陷を匡正するに適切なる程度に、現存の缺陷を生じた趣味や、道德や、政治が因つて分れた岐點にまで還元することであります。それであるから、堅固はどうであつても、實際、あらゆる時代に於けるあるゆる正當にして、有効なる改革の標準となるものは、都市生活の産した文化でなければなりません。

都市を以て惡魔の仕業とすることに觀念上の誤謬が含まれて居るやうに、田園を以て神の仕業とすることには想像上の誤謬が

含まれて居ます。從來田園生活の讃美者は悉く都人士でありありました。田園生活は都市生活に比して單純であり、粗野であり、不正確であるがために、彼等は、共れがおのれの生活と異なる點を誇張し、理想化して、おのれ等の生活より逃れ去つた自由と、純潔と、愉樂とは豐富に其中に見出だされると想像したのであります。然し是れは、わたくし共が胡蝶や小鳥の生活の中にも、それぞれ、必然に生活に伴なふ闘爭もあり、危險も含まれて居るのを忘れて、たゞ、彼等の飛ぶ樣や、鳴き振りに對して、傍觀者たる人間の立場より感傷上の誤謬を犯して居ると同樣なものであります。迷信や、嫉妬や、貪欲や、殘酷性が田園生活を支配して居ることは、都市生活を支配して居ると尠しも變りはありません。

わたくし共は風光明媚な田舍に旅行して、そこに生活する田舍人の豊かな天寵に浴するのを羨みます。然し、其等の山河は誰れに對してさう美しいのですか。誕生より終焉に至るまでそこにはたらく樵夫や、漁夫は全く其の美に對して無感覺であります。それは、彼等が餘りに多く其の美に慣れて居るといふよりも、共れを鑑賞するに必要なる修養や聯想を缺くためであります。風景の美は（無論、あらゆる他の種の美も同樣であるが）何人にも一樣に鑑賞され得るやうに固定の樣式を以て自然界に横はつて居るものではありません。共れを鑑賞するためには、共れを組織する成分を分析し、醇化し、改整する活動と、さう爲し得る修養とが假定されねばなりません。

然し、田園生活に對して、公平ならんがために、田園生活に特有なる美點を一つ擧げなければなりません。そして、共れは、我が國に於ても大工業の發達するにつれて、都市生活がますます壓迫せられる今日に於ては、實に特筆大書すべき美點であります。共れは他ではありません。一家揃つて自足の產業に從事するの遺風の猶ほ見るべきもののあることであります。昔は着物も、米も、酒も、自家の畑で產する原料を用ゐて一家族の者は共等を最後のものに仕上げるまでそれぞれ、自分の能に應じて悉く共れに勞力を貢献したものです。彼等はさうして居る間に、相互に尊敬し、信頼するの德を養ひ得ました。今は、分業の傾向は田園へまで浸入して來て、この一家團欒、獨立した產業を營む美風は段々に狹められましたが、まだ、その形體は全く滅びたのではありません。この一事は、確かに、田園生活の都市生活に向つて誇りとするに足るものであると思ひます。

ラテン型のあらゆる國語が示す如く、文明、若しくは文化は都市生活の中に發展したものであります。是れまでの處、學問も藝術も、社交も、趣味も流行も、獨り都市生活の作り得る

境に於てのみ發芽し、生長するものでありました。都市生活の特徴と云つたら、人爲に依つて自然を支配する點にあります。然し、是れは都市生活の長所で同時に、短所ともなるものであります。

人間の活動の舞臺は地球であります。されば、究竟するところ、産業や政治や、道德は無論のこと、詩や宗教に至るまで、悉く、地球の上に見出ださる丶材料を出來るだけ、よくおのれの生活に役立たせる目的を以て工夫されたものと謂つても宜いと思ひます。然し自然を利用する方法に於て都市と田園との間には相違があります。田園の人は面と向つて自然を直接に利用して居りますが、都市の人は人間の作爲の媒介を通つた後、間接に是れを利用して居ります。この事實の當然の結果として都市生活には二つの弊害が見出だされます。(前に申しました通り)自然は、決してわたくし共人間に生活の方針を指示しはいたしませんが、確かに其れの無意識より無窮に新らしい刺激と暗示とを送つて、無限にわたくし共の生活の更改を促して居ります。然し都市の人は人間の作爲の一膜を隔てゝのみ自然を利用する結果として、彼等の感官の受くる印象は、常に灰色の加工物であり、彼等の心身は常に全一と、彈力性とを失はんとする危機に瀕して居ります。彼等の知覺の常套化と、彼等の心身の枯淡化とを救ふの道は、獨り大自然に親炙し、其れの驚くべき復活力を呼吸して、彼等の感官のはたらきを爽新にし、彼等の心身の狀態を穩健にすることにあります。

もと、都市と田園とは協同生活を必要とする人間が、彼れの理性の發達するに從つて、自然に分化して來たものでありますから、この分化は、猶ほ、無期限の未來に向つて殘つて行くであらうと考へられます。然し、健全なる生活に必須なる條件の何であるべきかの知悉された今日に於ては、從來の如く、都市生活と田園生活との全然の分離は決して善いことでないことを覺へて來ました。眞に理想とさるべきものは、都市生活からするならば其れを田園化し、田園生活からするならば其れを都市化して、自然を征服しながら其れを離れず、自然に親しみながら其れに支配されず、詩と、科學と、産業とを渾和したものでなければなりません。

後藤男の東京市經營振りを評す

岐路に迷ひ易き後藤男

文學博士　三宅雪嶺

□

後藤男は東京市長の適役と認められ、大騒ぎでやつとの事に承諾を得たと云ふ程であり、誂ひ向きと云へるが、自ら何程まで踏み込んで居る心得であるか。東京市長も面白からうと思つたにしても、市長になるまで政治界が何とか變化して現れまいかと望んだらう。寺内内閣で副首相の格、原首相の後に可能性の潜んで居るのを考へずに居れぬ。暫時原の代理を勤めると云ふのも氣が利かず、去りとて政友會の力を假らねば位置が得難く、政黨改造も出來るやうで出來ず、大きな調査會でも興して機會を待たうとする所に市長問題が起り、それも好からうと云ふので任に就いたのであつて、何時まで勤めるか自ら分らず、人はいよいよ分らぬ。六十五才とあつては、晩年を東京市政に委ねるに少しく早く、市政に腕を揮ひ刷新の實を擧げ、更に政界の渦中に飛び込まうとするに少しく遲く、聊か思案橋に彳むの形がある。東京市長としては種々の候補者中一二の指折りであるが、望み得んならば、現在市長の下に高級助役たるに越した事なく、それならば何とか希望を達する事が出來る。

□

後藤男は行政の才無いでなけれど、一種の策の能を具へ、次から次ぎと策が出て、自ら選擇するに惑ひ、何れも行はずに終るの恐れがある。兒玉伯の如き人ありて之を選擇し、十分に行へ、伯が責任に當ると云へば思ひ切つて事を爲し、目醒しい事が無いと限らぬ。兒玉自ら策の選擇に迷ふ方であり、時として隨分心配したが、後藤は之に勵まされ、奮發して働くを辭せぬ。後ろ立てが確かと見れば、同じ働きが何倍の功能あるやうになる。自分で選擇し、失敗しては一大事と云ふ懸念あつては、同じく働いても縮んで了ひ、折角の策も功能無きに終る。

元から調査すべきであり、調査も可い事であるに相違ないが、調査も仕様次第であつて、行ふやうに調査するのと、行はぬやう、或は行はなくても可いやうに調査するのがある。監督者の手加減で分れるが、後藤男自ら行ふの意か、行はぬの意か、無論行ふ心算と云はうか、心底を割つて見れば何うか。間違ひないに定まつて居れば行ふけれど、誰が反對の持上らぬを保障するか。調査委員が保障して呉れたとて、當てになつたものでなく、案が成るにしても自分で其責任を負はねばならぬ。後藤男は責任を回避する方でなくても、自ら反對を排除して斷行するに躊躇する。今は何と云ふても一枚看板になり、自ら責任を負はねばならず、まかり間違へば生涯の失敗となるので、成るべく怪我の無いやうにと考へるに傾く。

□

調査もいろいろするであらう。計劃もいろいろ立てるであらう。案に成りさうな大風呂敷を擴げる事もあらう。而していよいよと云ふ所で、何程の事を爲すか。爲せば爲すべき事が限りなく、大きな事でも幾つもある。七億圓どころか幾億懸けても際限が無い。而して大阪市程の成績を擧げ難いのは、市の來歴の違ふに由る。大阪市民は大阪　自ら生存すべき處と心得て居るが、東京市民は東京に止宿し、都合に由つて何處に行くかも知れぬと思ふて居る。舊大名が集まつて居るけれど、命令で集まつたのであり、官吏及び御用商人が中心を形成り、都合に由つて何處へでも行かねばならぬ。土着の市民即ち舊江戸つ兒は、薩長土肥の田舍武士に對し戰敗者の形になつて居り、自ら意識するとなしに、進んで立ち働かうとせず、時勢で仕方が無いと諦めたやうになつて居る。市で働かうと云ふ連中で若干の特志者を除き、市の利益を思ふよりも自らの利益を思ひ、市を害しても自ら得取らうとする。何處でも或る時期の間かゝる者が飛出し、跋扈する事になつて居るが、東京市は大きいだけ其の改まるのが遲く、最も働く者は最も市の爲めに不忠實といふ奇異なる狀態を呈する。似而非なるものが多いにしても、市の爲めに助力しさうに振舞ふもの程甚だしいのが少からう。何とも話にならぬ手合である。疑獄事件で幾らか擊滅する事になつたが、今後何程革るであらうか。

□

貴族富豪が出來るだけ脫稅するとあつては、頗る始末が惡い。一般に眞似するといふ譯でもないが、眞面目に働くのは業腹のやうに感じたりする。貧乏人は正直と、惡るい意味で嗤はれる事を恐れる。住居してさへ居れば可いのであつて、人の事に手出しまいと云ふやうになる。何うして斯くなつたか、詮議立

てすれば、明治の初めから要路者を貶めねばならず、勳功を以つて爵を授つたものゝ中、以ての外の徒輩多く、二代も經れば市に落着が出來、眞面目に市の爲めに働くものが增さうが、今の所何處から手を着けるが可いか、碌な事を爲ぬのは、能力の足らぬのにも由るが、碌な事の出來ぬやうになつて居るにもよる。それでも後藤市長は仕合せ者であり、疑獄事件が起り、一日十里かゝる處を二三十里も早く行ける所がある。此機會に乘じ刷新を促せば、確かに刷新の時機を早める事が出來る。市制を變革するにも好い時機である。二百數十萬の大都を二萬五千の小市と同樣に扱ふなど、大抵にして止めねばならぬ。形式上でも警視總監と府知事とに從ふやうでは何程の事が出來るか。それでさへ疑獄事件が起るのに、市長が更に權能を增しては、市政紊亂、何うなるか分らぬと云はうが、之れ日本國民を保護しての話であり、保護したが爲め、破廉罪を犯しても平氣なのである。奴隷に德義ないと同じく、自敬しないものに正義の認識を望む事が出來ぬ。」

□

後藤市長は市政刷新の上で大いに働き得る筈であるが、自ら共處まで斬つて出るか。大抵の事は調査に待たうと云ひ、英國皇太子白耳義皇太子を迎へ奉るとか、博覽會を賑かにするとか何とか祭り騷ぎして、他に飛び出さうと云ふやうな事がないか。賓客の歡迎にしても、設備を整へる困る。せめて設備に取掛り中と云ふを明かにし得るまでに事を搬ばねば申譯が無い。前市長田尻子は名前負けして退くに終り、現市長又名前負けするとあつては影響する所少くない。一層の事政界に打つて出るのを斷念し、全力を東京市に注いでは何うか。それとも餘り思はしくないと思ふならば、或る要務を帶びて外國に赴く事にし、市長を他に讓るべきである。好い加減にして腰掛けて居るのは市の爲めにならず、自分の爲めにもならぬ。失望のなくなるのは自ら地位を高める所以であると共に、賴りを失ふ所以である。此處で深く思慮し、何とか決斷するを肝要とする。

後藤男に對する私の希望

田川大吉郎

後藤男の東京市に對する態度は本氣である、決して浮き腰で無いと思ふ、或はさうで無い、男は、一時間でも、じつとしてゐられない性質だから、東京市に飛び込んだので、ものゝ一年とは落ち着くまい、現にその態度はそは〳〵してゐる、絶えず

ぐ一方で、一向しんみりした趣が無いでは無いかと評する者もあるが、私はこの觀察には與みしない方で、私の眼につく種々の方面からは、後藤男の腰は存外落ち着いてゐるやうである、後藤男は多分しつかり東京市のために腰を据へて働いて下さるだらうと思ふてゐる。

東京市のためには、何よりも此の落ち着いて働いて下さる人が大切である。此の決心、此の覺悟の人を得れば、東京市は先づ以て安心しても宜しいので、種々の事業はそれからである。その種々の事業はその時々の計劃と批判に任すべきである。幸に今後藤男が、往くとして可ならざるなき縱横の手腕と經驗を抱いて、みつちり、腰を落ち着けて、東京市のため働かんとしてゐられるのだから、東京市も亦靜に顧念して、躁急の評論、手前勝手の要求希望を戒め、充分の信頼、充分の期待を以て、その爲さんとせらるゝ所を爲さるゝの日を待つべきであると思ふのが、今日に於ての私の所見である。

然らば私は今日の東京市に何の注文する所は無いかと言へば、それは有る、この紛々たる複雜の世の中である、固より一と通りや二通りの注文はある。

第一に、私は、後藤男が東京市役所を内務省の出張所に泥化されないやうにと祈つてゐる、何と申しても今日までの内務省は官僚式であつて、古典的な格式な所である。文章で申せば、純然たる漢文式ではないまでも、明治初年の論文見たやうな准漢文式な所があつて、今日風の言文一致體で無い、こんなやうなお役所風を今日の市役所に持ち込まれては困る、これを持ち込まないやうに、後藤男に細心の考慮を願ひたい、後藤男その人は誠に平民的な、手輕にして、快活な性格そぶりの人である、その流儀を、市役所の隅々までも徹底せしめるやう、油斷の無い御注意を願ひたい、東京市としては、この流儀、この氣風、この思想、この精神を普及せしめ、作興せしむることが必要である、これが自治の根本義である、この根本義を無くして、何の規律、何の效果、何の改良、何の事業があらう、私として考ふれば、この根本義を失はないことが、東京市の最大の義務である、どうぞ、從來の内務省以外、外務省以外、滿鐵以外、臺灣總督府以外の、平民的な態度、質素、親切、快活の一流をこゝに開いて、日本人民にも亦所謂平民的氣風の確然たる要求並に根柢のあるといふことを、善く明かに表示せられたい。

第二には東京市民は、從來自治の能力が無い者のやうな非難を中外に受けてゐる、私はこれは東京市の爲に寃であると思ふ、どうか東京市民のために此の寃を解いて貰ひたい、どうするかと言へば、十五區の自治權を完全に認めて、市民をして區

を主體とし中心としたる自治に親ましむることである、これは無論内務省の爲すべき事であるが、東京市長にして、殊に後藤男にして、これを爲すことを可しと思ひ、かくしたいと思はるゝなら、これを進捗せしむるためには種々の便宜があられる、どうぞ、區を自治體とする、區をしてその必要な事業を、自ら立案し、計畫し得せしむる、區の獨立のために、區の發展のために、後藤男に大いに斡旋していたゞきたい、今日の東京市のやうな茫漠たる範圍に、二百二十餘萬の多數が、何等の連絡なき雜駁な生活を營んでゐる者を、法制上の自治體の名を以て、その結束を強ゐてゐるのは抑も無理である、市民としての共同觀念、協同生活は、區の如き小じんまり纒まつた區域からして初めて起るのである。

かくすれば今日の東京市役所の事業は大に減ずるであらう。それは當然なことである。是非とも減ぜしめるやうに致したい、然し乍ら市電は引き續いて市の手に殘らなくてはならない、上水道もさうである。下水道もさうである。或程度までの道路もさうである。港灣の管理經營もさうで無くてはならない。東京市役所の事業は決して少いと爲さない、若し私の多年主張してゐる所の普通教育の全部を市の手に統一することとなれば、さすれば尚更少きを患へない、これらの事業を專門に取り扱ふこととなれば、東京市及び東京市會の働き振は、又從來と頗る異なつた面目を發揮せねばならない、これは頗る新しい事である、その新しい仕事の初めを、後藤男に始めて貰ひたい。その基礎を堅實に、又有效に据へつけて貰ひたい。

私の思ふ所では、東京市は内務省のやうなもので、十五區は府縣のやうなものである。然も東京市は勿論内務省よりの一層活動的な所である。且その調子が前段に述べた通り、平民的であらねばならない。この點に於て後藤男は最もその性格に適した新經驗をこゝに試みらるゝ譯である。

第三に東京市に對する政府の關係をもつと親密にし、東京市を政府の目にもつと重く視さするやうに仕向けていたゞきたい。例へば各種の市の事業に對する政府の補助である、政府は東京市をも、大阪市をも、京都市をも、一所くたに見て、大阪市にも費用の三分の一を補助すれば、京都市にも三分の一を補助する。その如く東京市にも三分の一を補助するといふことにして、その間に差別を設けず、總て同一の割合を以て、同等に補助してゐるのであるが。私は東京市を此の如く他の市と同等に視、同等に取り扱ふとは、道理上の根據が無いと思ふ、東京は帝都である。帝都として、帝國に一あつて二なき特別の都として、他の市よりは特別の設備、特別の經營を要する所である。

それは譬へば家を作るやうなもので、玄關もあり、奧座敷もあり、椽側もあり、床の間もあり、臺所もあり、食堂もあり、寢室もあり、應接間もある、その目的に由つて、使ひ方に由つて、作り方は自然に異なる、奧座敷と臺所とを一樣に作る人の無い如く、寢室と應接の間を一樣に作る人も無いわけである。それと同じ道理で、帝國の奧座敷であり、若くば大玄關である東京市を、他の市と同樣に設備し經營するといふことは無い、その如く東京市に對する補助を他の市と同樣にするといふことも無い譯である。他の市に三分の一を補助するなら、東京市には特別に二分の一を補助するとか、一層奮發して三分の二を補助するとか（私はこの程度までは希望してゐないが）必ず他の市に異なつた、他の市の上に飛び拔けた、特別の取り扱ひを要すべきである、然るに從來の政府はこれを怠つてゐた。從來の東京市はこれを要求し得ずにゐた。要求してもこれを貫徹し得ずにゐたから、後藤男はこの時に於てこれを貫徹し、以て此の方面に於ても一新例を開き、將來のため善き模範を示すと共に、東京市の基礎を確實に築き上げらるべきである。

　私は兎に角、此の如き希望を、東京市のため、後藤男並に政府に抱いてゐる。その他、東京市のやりかけてゐる實地の仕事に就ては、最初に申述べたやうな微意に於て、この際に言及することを避ける、私は衿を正うして後藤男の爲さるゝ所を諦視してゐる一人である。（七月七日）



これならば都會でも田園でもどちらでもいい

―アメリカの都會生活と田園生活―

佐々木指月

二階のついてゐる乗合自働車と、だしぬけに云つたのでは、見たことのない人たちには、どんなものだかわかるまいから一寸、それを説明する。

乗合自働車のうしろに、ぐるりとまはつた梯子がついてゐて、その天井へ上がれるやうになつてゐる。但し二階には天井がない。あつてもそれは夜るならば星の見える青天井である。

その乗合自働車は、下に乗つても、上に乗つても、片道ならば、僅(オンリイ)十仙(テンセンツ)。往復でも割り引きにはならない。

夏の暑い晩方に、十仙(テンセンツ)出して、あれに乗つて、ニウヨルクならば、華盛頓公園(ワシントンスクエヤ)から、ハドソン河畔を一と廻りして歸つてくると、それでいい涼みになる。尤もそれは私の新案ではない。あの都會の人が、誰れでもやつてることだ。

それ故、暑い晩なぞは、なかなか乗り手があつて、終點から乗らうとすると、もう二階は一ぱいになつてゐて乗れない。乗れないはずだ。終點に近い五六丁さきから、みんな終點まで、十仙(テンセンツ)だして乗つてきて、そこで卸りずに、また十仙(テンセンツ)だして、今度はいよいよ目的の、ハドソン河畔へ乗りつゞける。さうしてまた歸りにも、十仙(テンセンツ)だして、都合二十仙(ツルテセンツ)。それで二時間あまりの涼みが出來ると思へば、安いものである。

東京の乗合自働車では、そんな眞似は出來ない。立てばあたまがつかへるし、腰かければ、ふぐのやうな女車掌の、おなかで顔をなぜられる。乗り合つた女の髮につけた油の臭ひと、男

たちの汗のくささと、あれでは、涼みをするために、乗らうと云ふ気にならない。それに二哩間も乗つたら、大變高いものになる。

○乗合自働車のある都市は、アメリカでは、ニウヨルクに限られてゐる。この乗合自働車の通る通りは、ニウヨルクでは、みな目貫きの街である。

華盛頓街角と云ふ、それは丁度、四丁目にあたるが、夏は青い葉をつけた老樹の間に、アークランプが立つてゐて、中央に噴水のある、さうして入口には、花崗石の凱旋門の立つてゐるなか〳〵いい、一寸、古風な公園だが、そこからこのオムニバスは出發して、一方は、フエフスアヴエニウをまつすぐに、フオート、セントニコラスと云ふ、二百丁目近くにある丘陵の上まで行く。他の一方は、五十七丁目から左へ曲つて、シツキスアヴエニウの高架線の下をくゞつて、ブロードウエーへ出て、それを右にのぼつて、七十二丁目からまた左へ曲つて、つきあたつてリヴアサイドドライヴへ出る。それからまた右に今度は河を左に見ながら、やはり、二百丁目近くまで行く。まだこの外にも線があるが、涼みに用のないところだから畧しておく。

フオート、セントニコラスへ行くバスは、五十丁目から、百十丁目までの、五十街區の間、左りには中央公園の樹々の緑をながめ、右には、建ちならんでゐる富豪の邸宅を見ながら走るのである。五十八丁目と五十九丁目の間にある、プラザホテルと云ふ世界でも有名なホテルの前には、女の裸體像を高く中央に頂いた大噴水があつて、水は、まはるい水盤から、水晶のすだれのやうにくだつてゐる。また八十丁目に近くには、有名なメトロポリタンミユーゼアムが、その大理石の建物を、翠色のしたゝる間に見せてゐる。樹の葉に暗い夜の公園を見ながらバスの走るときは、全くいい心持ちだ。樹の下の腰掛からは涼みに來てゐる人たちの聲がきこえてくる。

リヴアサイドドライヴを通るバスは、ハドソン河の川風にふかれる。

ハドソン河と云のは、一等戰闘艦がはひつてくるやうな大きな河だ。幅さから云つてもかなりひろい。橋なぞはかけたくもかけられないほど廣すぎる。

對岸を望むと、水の面がやゝまるく見える。河岸なぞは、水平線下に沒して、水から直ぐに建物が立つてゐるやうに見える。さうしてその背景として、プレシデオの絶壁が、日暮れ方なぞは濃い藍の陰をやどして、水面にはニウジアージイの入り日がうつる。こちらはニウヨルク州、向ふ岸はニウジアージ

一州で州が違ふ。

夜るは、夜るでうつくしい。まつくらな水面を横切つてくるフエーリーボートの赤い灯(ひ)や、青い灯(ひ)や、ホボケンの夜(よ)の遊園地(ルナパーク)の、イルミネーションが、星をあざむくばかりに空(そら)をかざつてゐる。ホボケンと云ふのは、ニウジアージーの都會の名である。

こちらの岸はづつと公園(パーク)になつてゐる。列樹のうしろには歩道があつて、歩道のうしろには木立(こだ)ちがあつて、木立ちのうしろは公園で、その公園は河の方に斜めに段々になつてさがつて、青芝の生えてるその下にはまた木立ちがあつて、木立ちの下には崖があつて、その下にはハドソンラインの汽車の軌道が敷かれてゐる。汽車は無烟炭をつかつてゐるから、公園のところどころに立つてゐる大理石(マアブル)の塔(タワー)なぞをよごすやうなことはない。

このリヴアサイドの公園は、河に沿(そ)ふて、約三十街區(ブロツク)ほどつらなつてゐる。水色の光を放つ街燈は、列樹にまざつて立つてゐる。右側は、ニウヨルクでも有名な貴族的な住宅區域で、建物はみな趣を凝らしてゐる。市街電車(トローリーカア)なぞは通らない。たゞこのバスが通るだけだ。車道(ブレヴアード)は鏡のやうである。

東京の隅田川の兩岸は、往來にこそなつてるが、公園なんかはありやしない、川の水は、どぶどろ臭いし、建つてゐる家には美觀もなんにもないし、電車の音は騒々しいし、だしぬけに國技館のイルミネーションが光つてゐたつて、面白くもへんともない。とても涼み場所にはならない。駄目だねエ！貧乏な國の都會はしかたがない。

○

屋上園(ルーフガーデン)と云ふものも、夏はたしかに工合がいい。

それも、二階や三階の上に出來てる屋上園では面白くないが、十何階、廿何階と云ふ建物の上に出來てる屋上園だと、高く都會の空氣をぬいて、銀河が、すぐあたまの上に見えるから夏の晩なぞはたしかにいい氣持ちだ。

屋上園も、たゞ、屋根の上に土があつて、草花が植はつてゐるだけでは致し方もない。そこに、夜の燈火の花がつらねられて、音樂がきけたり、美人が見られたり、食事も出來れば、アイスクリームもたべられるから、屋上園は、都會の夏を涼らす人には、なくてはならないものになつてくる。

ニウヨルクのマデソン街園に屋上園のあつた頃は、私はあすこにゐなかつた。私のゐた頃には、ホテル、ペンシルヴアニアの上に、一番贅澤な屋上園(ルーフガーデン)があつた。

なにしろニウヨルクと云ふ都會は、建物が高いから、往來から空を見ると、空は、その一部分しか見えて來ない。夜るなぞ

は、とても星宿の全體としての壯觀を眺めると云ふやうなことは出來ない。あすこの都會で生れた子に、銀河はどんなものだと聞くと、まだ見たことがないと云ふくらゐだ。それが高いペンシルヴアニアホテルの屋上園へ上つて見ると、北斗七星、天狼星、大熊星と、あらゆる空の十二宮の星の世界が、すつかり見える。その下で、古風なハープの音を聞きながら、晩餐をやらうと云ふのだから、敢て美人を作たつてゐないまでも、愉快でないとは云へない。

その代り、たべものに、なか〱高い。地の上で廿五仙でたべられるサンデイツチが、そこの屋上園では、一弗廿五仙もした。ウエータアに、廿五仙のテープをやつて、サンデイツチをたべて、珈琲を呑んで、アイスクリームでもとると、二人で行つて、三弗七十五仙はかゝつた。

然し、どんた暑い晩でも、そこに上つてゐると、さすがに暑さは感じなかつた。煖爐のなかにはひつたやうな、蒸し暑い一日がすぎさつて、夕立の來たあとなぞは、實によかつた。月のある晩には、ことさらに電燈を少なくして、白磁の皿の上に、青い月影が、どうかするとうつつてくる程だつた。

風の吹きまはしでは、そこいらの便所の、石油乳劑の、へんな臭ひがしてくる東京には、あんなしやれたところはない。これも貧乏國に生まれ合した因果だと、あきらめるよりほかはない。だが、この廣い東京だから、どこかに、屋上園の一つぐらゐは、ありさうなものだが。

○

公園と云つても、米國には色々の公園がある。市外公園もあれば、市內公園もある。また國立公園と云ふのもあつて、四五十哩四方の面積を持つてゐるやうな大きなのもある。ヤロウストンパアクだとか、グレシヤパアクだとか、グラドキアンニヨンだとか、ロツキイマウンテンパークだとか云ふのは、みなそれである。

これ等のパアクのなかには、ホテルもあれば、交通機關もあつて夏は避暑客が都會からやつてくる。玉ころがしから見世物まで、そ・等の避暑客を目あてにして集つてくる。そのうちでもヤロウストンパークなぞは、モンタナ、アイダホ、ワイオミングの三州に亘つてゐて、鳥もめつたに行き來せぬ大荒野のなかにある。中央に大きな湖水があつて、その湖水から、ヤロウストン河が發してゐる。丁度ロツキイ山の麓にあたつてゐて、別に景色がいいと云ふのではないが、ワイルドウエストの氣分を味はふのには充分である。都會の暮しに倦きた人たちが、一と夏の野の生活をしやうと云ふには丁度いゝ。公園は、五月か

らはじまつて、九月一ぱい明いてゐる。金に不自由のない新婚の夫婦なぞは、わざ〳〵ここへ、天幕生活をやりにくる。かれらは原始生活の雛形を、その森や、岩や、水のあひだでやつて見る。

日本にも、函根や、日光や、伊香保や、さうしたいい避暑地は澤山あるにはあるが、若夫婦に天幕生活をさせるやうな設備がしてあるかどうか。あつたにしたところで、とても日本の花嫁では、原始人の眞似をしやうなぞと云ふ、そんな勇氣はないだらう。きまりわるがつてばかりゐて。また新郎は、岩の根を踏み水を渉り越してまでも、花嫁のために最寄りのホテルまで食料をとりにくるほど勤勉ではあるまい。

市外公園と云ふのはおもに森林公園である。その都市がまだなかつた時代からの森林を保存してそれを公園にしたか、或ひは、新しく樹を植ゑつけて、そこを公園にしたか、どちらかである。アメリカでは、都會のあるところには、必ずこの森林公園がある。私のゐたセヤトルには澤山の森林公園があつた。ワシントン湖と云ふ周圍七十餘哩の湖水をめぐつて茂つてゐた昔ながらのシーダの森は、大方は切りひらかれてしまつたが、まだところどころに殘つてゐて、十人で腕をつないで抱へるやうな大木が立ゝ列んでゐる。湖水のまはりには自働車道が出來てゐて、晩餐後や、日曜の午后なぞは、快速力で、その七十餘哩を一とまはりすることが出來るやうになつてゐる。雪の日には、日本の富士より高いレニヤ山の眺望がよかつた。月の晩には、ビューゼウトサウンドの彼方にあるオリンピツク山系が、その山なみをそばだて湖水のおもに映つて來た。

サンフランシスコには、ゴールデンゲートパアクと云ふのがあつた。市内公園と、森林公園と、海水浴場とを一緒にしたやうな公園だつた。太平洋の海水は、その公園の渚の岸を洗つてゐた。

ニウヨルクには、ヴアンコートランドトパークと、それからブロンクスパークと云ふ二つの森林公園があつた。

アメリカの人は、よくピクニツクと云ふことをやる。ピクニツクと云ふのは、日本で云へば野外運動會だ。パイをこしらへたり、サンデイツチをこしらへたりして、細君も娘も子供も、みなぞろ〳〵と出て行く。それは、多くは、この森林公園へくるのである。森林公園のなかには、ところどころに板づくりのテーブルがこしらへてある。それをピクニツクテーブルと云ふ。その上へ、みんなは御馳走をひろげてたべる。月のいい晩には月光運動會、卽ち、ムウンライトピクニツクと云ふのをやる。渾閑とした月光の森へ來て、秋のはじめの宵なぞは、人々は遊

び更かす。それがそちらにも一團、こちらにも一團、ピクニックに來てゐるから、寂しいうちにも賑やかだ。林間劇場(りんかんげきぢやう)の演劇は、さう云ふ晩にあるのだ。いづれも森林を背景としたフェリーテルスのやうな劇が演ぜられる。

東京で云へば、上野公園は、丁度その森林公園にあたるのだが、森林と云ふ氣分は少しもない。月光運動會なぞ、とてもあすこでやることは出來ない。第一、外國のどこの公園にも必ずある、露台(ベンチ)と云ふものが上野公園にはない。尤も日本では、あんなものを備いたら擔いで行かれるかも知れない。公德心のない人間の住んでゐる國だから。

然し、昔は、どこかにベンチがあつたやうに覺えてゐる。私は十八九の時、よく實母と一緒に、夜(よる)の上野公園を歩いたものだ。私の實母と私とは、たつた十七しか年がちがはなかつたし、それに實母は華美者(はでしや)で若作(わかづく)りだつたものだから、どうかすると、私たちは、年のちがつたスヰートハートぐらゐに人から思はれた。或る夜、鶯谷へおりやうと云ふ右側の樹の蔭にあつたベンチに二人腰を掛けて、あすこから見える淺草邊の灯など、はるかに眺めてゐたところを巡査に咎められて、遂に二人は下谷警察へひつぱられたことがあつた。

だが、アメリカの森林公園では、たとへ男女が、エンブレースしてゐたつて、巡査がそれを咎めるやうなことはない。森林公園は或る意味に於てはそのために出來てゐるものとも考へられる。尤も日本には、西洋各國にない種類の公園が昔から作られてゐる。あのセツキスの赤い花が、金糸(きんし)銀糸(ぎんし)の袂のかげに、咲き並んでゐる公園だ。いくら、ムウンライトピクニックだつて、西洋のは、あすこ迄は徹底しない。

市内公園(シテーパーク)には色々ある。トリアングル、サアクル、スコエヤなぞと、その名はいろ〳〵違つてゐるが、街の辻なぞのところどころに青芝(グラス)を植ゑて、中央には一寸した噴水(ファウンテン)があつて、周圍には露臺(ベンチ)が置いてある。往來の人が、ちよいと休んで、卷煙草(シガレット)でも吸ひつけることが出來る。三つ辻が、入り違つたまんなかに、殘されたグラウンドだから、トリアングルと云ふ。

サアクルと云ふのは、輻輳してくる澤山の辻々の、中心にあたつてまはるく殘されてゐるグラウンドだ。中央にはやつぱり噴泉(ファウンテン)なぞがあつて、花壇なぞが、その噴泉(ファウンテン)をかこんでゐる。露臺(ベンチ)は必ずそこにある。往來で、ひよつくり出逢つて立ち話しでもしやうとする人は、先づそこへかけて、往來を眺めながら話せる。また自分の乘る電車(カー)を待つてゐる人も、そこへ腰をおろしてゐることが出來る。ニウヨルクの、五十九丁(フエフチナインス)と、ブロードウエイと、エースアヴエニウとが集つてくるところにあるコ

ロンバスサアクルには、大理石の群像が立つてゐて、そこの噴水を飾つてゐた。

角園と云ふのには、重に樹木が植ゑてある。これは繁華な市街のまつたゞなかにあつて、花や、芝や、彫像や、噴泉や、音樂堂や、夏ならば濃藍色の樹の蔭や、それらのなかに澤山の露臺が置きめぐらしてある。私の住んでゐた家の窓から見えた華盛頓角園と云ふのは、横が三丁、竪が二丁あつた。マデソン角園に、竪が二丁横が一丁あつた。ニウヨルクには、また、アーヴンイグプレースだとか、グラマシイパークだとか、チヤサムスコエヤだとか、ユニオンスコエヤだとか、バツタリープレースなぞと云ふ、澤山の市内公園があつて、緑の色に飢えてゐる市民の眼を悦ばせてゐる。市内公園は、市内熱鬧の間に、その水や、その芝を見せてゐるから尊い。

東京には日比谷公園があつて、やゝ外國の市内公園の模様を寫してゐるが、噴泉からは水が出てゐないし、芝は赤く枯れてゐるし、花にかけた肥料の臭ひはしてくるし、ベンチの數は少ない。公園のなかの道路は、塵が立つし、なつちやゐない。さうし その外に東京には、どこに市内公園があるのだい。日本橋、京橋邊には、そんなものは影も形もないぢやないか。だめだね。

○一歩踏み込めば山林の境に入り、一歩踏み出せば、都會のまんなかへ出ると云ふのは、全く、市内にある森林公園のありさまである。

ニウヨルクの中央公園はまさにそれだ。市のまんなかに森林があり、泉水があり、岩石があり、野があり、丘があり、ブレヴアードがあるかと思へば、二人で並んで歩けない小徑があると云ふありさまだ。

竪が、前にも話した通り、五十街區もあつて、横は、フエフスアヴエニウから、エイスアヴエニウに亘つてゐる。ニウヨルクの横の街區は、竪の街區の三倍もあるから、約九街區にあたるわけだ。左樣さなあ、一街區と云ふと、丁度、淺草の仲見世の通りぐらゐな長さがある。だから九街區と云つても、ちよつと歩きでがある。まして五十街區となれば、誰れも來かうと思ふものもない。

池には、白い鵝鳥が浮いてる。樹には茶色の栗鼠がとまつている。栗鼠も人に馴れてゐて、なにかやると、それを手に頂いて大切な寶石でも捧げてゐるやうな格好をする。鵝鳥も人になれてゐて、手を出すと、その長い頸をまげて人の手相でも見るやうに考へる。池をめぐつて徑がある。徑には、ホンの木の間

のなかへはひつてゆく、暗いところには、必ずベンチが置いてあつて、若い人たちが、戀愛を語るのに都合のいいやうに出來てゐる。そのどこ迄も、人間と云ふものを本位にして、公園の美を形づくつてゐるところがうれしい。公園を作るのに道徳なんか本位にされてたまるものか。暗い小徑を出て行くと、乘馬の人の馬を走らす路がある。若い女がブリーチーズをはいて、男にまさつて、愛馬に乘つて馳けてゐる。さうかと思ふとその外には、芝原があつて、よく手入れの行きとゞいてゐる芝は、青い絨氈を敷いたやうに、ほどよく繁つてゐる。そのなかで、男女は肘を枕にしてごろりと寢ころがつてゐる。橋の上へかゝる道。橋の下をぬける道。大理石の階段を卸りつくしたところには、大噴水があつて、噴水の水は、池に流れて漣の輪をひろげてゐる。池には大理石の橋がかゝつてゐる。その橋には彫刻がしてある。橋を渡ると向ふは丘になつてゐて、丘の上には料理店がある。音樂堂をめぐつては、三千人の聽衆がかけられる露臺がある。その奥は杜で、ほそみちは、岩の間を縫つたり谷の底を通つたりしてゐる。どこへ行つたつて五十歩ゆけば、必ず露臺がある。百歩ゆけば、必ず鐵の水盤に、飲用水がまはるいその玉を押し上げてゐる。

春から、秋の終りにかけて、どんな晩でも戀の男女の來てゐないことはない。夏の夜なぞは、こちらも女のつれがなければ、氣恥しくつてとても通れないほどである。あれが若し日本だつたらば、それこそすぐに、餓鬼道畜生道をまのあたり現はすのであるけれども、流石に公德心のある國民は、キツスするぐらゐが頂上で、その上の亂れた行ひは先づしない。尤も、夏は、毎晩、五百人のパークガード、この公園へ入り込んで、道し道のないところへまぎれ込んだ男女があるとすぐそれをとめる。また、露臺でないところへ腰をかけてゐる男女があるとそれをことはると云ふことだ。そのパークガードは平服で、やつぱり凉みに來たやうな顏をして、自分のうけ持ちの區域だけを見張つてゐるのださうである。ニウヨルクのある道德家が、風紀の廢頽を慨嘆して、毎夜、發光寫眞器を持つて來て、暗いところに腰かけてゐる若い男女の寫眞をとつて歩いたが、ある晩、その道德家がいつもの如く、或る岩陰でさゝやき合つてゐる二人の前へ、急にスナツプシヤツトをさしむけて、だしぬけに發光した。はずみに道德家は、うしろへひつくりかへた。道德家は額に一擊のボツクスを喰つて、寫眞器械から光が出るのと、自分の目から火の出るのと同時だつた。のみならず寫眞器械はこはされた。翌日の新聞に、その道德家が顏に繃帶をしてゐる寫眞が出てゐて、その見出しに曰く『エー、パウブ、フー

キアンラブ、ノーモーアー！』としてあつた。『もはや戀愛の出來ないおとゝつあん！』と云ふことだ。若い人たちは、みんな痛快がつて笑つた。人間の自由を尊ぶアメリカに面白い。あれがもし日本であつたとしたら、さしあたりその道德家は、市の當局から表彰されたであらう。

公園で接吻したと云つては巡査に蹴られ、手を握つたと云つてはうしろから來る人に笑はれ、抱き合つたと云つては警察の留置所へ泊らせられ、それはまだいいとしても私のやうに、母親と話したと云つては警部のお目だまを頂戴するやうでは、公園なぞは、人間が行くのには適さない。神樣でも悟つた神樣ならば行きはしない。

○

住宅區域(レシデンスセクション)と、營業區域(ビジネスセクション)との、はつきりと分れてゐるアメリカでは、都會もそれがためにどのくらゐ住みごゝちがいいか知れない。

住宅區域(レシデンスセクション)の氣持のいいのは、ニウヨルクと云ふやうな大都會よりも、三流、四流の小都會の方がましだ。色々な、チャーミングな、またグロテスクな形をした住宅が、建ち並んでゐる住宅區域(レシデンスセクション)を持つた都會は、東部よりも、新らしくひらけた西部の太平洋沿岸に多い。セヤトルなぞは、その點に於ては、アメリカ中にも澤山にない都市(シティー)である。海に面した斷崖の上にある住宅街や、前は湖水、後ろは森林になつてゐる住宅街や、それはみな、丘陵の斜面の上に建てられてゐて、雨が降れば塵も殘さず洗はれる。

メープルの列樹は街の左右にある。列樹の下には芝がある。それからサイドヲークがある。そこへは、もうすぐ、ローズやチユーリツプや、ポピーが咲いて光つてゐる。露にたわんでサイドヲークにうなだれてゐる花を、踏んでゆく人は勿論(もちろん)ないが摘んでゆく人は無論(むろん)ない。サイドヲークから、住宅のフロントポーチまでは、青芝(グリンガラス)のガーデンだ、ガーデンは家(ハウス)のまはりをめぐつてゐる。さうして水は、その上へ毎夕景にそゝがれる。芝は常に刈り込まれて、花壇は常に手入れされて、家の窓には窓掛けのレースがいつもさがつてゐるし、それで別に上流の住宅と云ふのではない。その日を、たつぷりに暮して行くだけの家庭でも、そのくらゐな住宅は持つてゐる。

住宅には、軒別(けんべつ)に、家居番號(ハウスナムバア)が記し出されてゐるより他(ほか)に、その家の姓(ネーム)なぞは出てゐない。アメリカ人は、人間は、スミスと呼ばれたつて、ブラウンと呼ばれたつて、同じことだと思つてゐる。日本人のやうに、あんまり見えにもならない姓名を、天下(てんか)の一人者(いちにんしや)の如く門口(かどぐち)にはり出すのは、どう云ふつもりか、

誰れにだつてわかるまい。

さうして、向ふの、その住宅區域の近邊には、きつと小さな町がある。八百屋に、肉屋に、藥種屋に、洗濯屋。運送人の家では、石炭と、氷を賣つてゐる。靴直人か極く小さい見世を持てば、烟草屋が、新らしく出來やうと云ふ町である。同じ商賣をしてゐる家は二軒とはない。つまりその近邊の住宅を相手にやつてる商賣である。

然し、住宅區域の人々は、大きい買物はそこではしない。みんな電車に乘つて行つて、下町でする。下町と云ふのは、營業區域のことである。

營業區域にも色々ある。商賣街もあれば、事務所街もある。工場街もあれば、娛樂街もある。その區域はおのづから異なつてゐる。大都會になればなるほど、その區別ははつきりしてゐる。

ニウヨルクならば、あの、例の摩天樓ばかり立ち並んでゐる極く下町の、ローア、ブロードウエイから、パークロウ、それから相場街で名の高いヲールストリート、あれはみんな事務所街で、それから上へのぼつて來て、少しばかり工場街がある。支那街がある。猶太人街がある。伊太利人街がある。それからまたのぼつてくると、華盛頓角園の近邊に藝術家町がある。それから、フエフスアヴエニウで、マデソン角園まで卸問屋街。然もこれは猶太人ばかりがあつまつてゐるところだ。マデソン角園から上は商業街。それも目貫の大商店の並んでゐるのは四十二丁目から、五十八丁目までだ。こんな事を話してゐると、しまひにはニウヨルクの地圖を持ち出さなければならないからよして置く。マデソンアヴエニウは第二流の商業町。シツキスアヴエニウは第三流の商業町。ブロードウエイはお名染みの劇場町。それから序だから話して置くが、グレート、ノーザンホテルと云ふ、中央公園の前で、シツキスと、セヴンスアヴエニウの間にあるあのホテルが、ニウヨルクで一番その、やはらかい、然もハイトーンな、それでゐて、ライトの低いホテルだ。行つたらあすこへ泊ると、一寸あの都會の享樂氣分を味ふことが出來る。

ニウヨルクの、市内にある、住宅區域は、私はあんまり好きでない。あの眞つ四角な赤い煉瓦のアパートメントを見せられると、人間はあゝしても都會に住まなければならないものかと思はせられる。然し、一寸ひねれば湯が出るし、一寸押せば水が出る。電話は寢てゐてかけられるし、下へ訪問者が來たことは、十階の上にゐてちやんと知れるし、ボタンを押せば、迎ひに出て行く事もなく、その人が、昇降機で上つてくる。冬にな

れば、放溫器（レヂエーテア）に蒸氣（スチーム）が來て、それで室（ルーム）内は溫まる。夏は少々閉口するが、便所の臭ひがするぢやなし、蚊がくるぢやなし、蚤がくるぢやなし、南京虫（ベッドバッグ）は下等なところでない限りは決して出ない。げぢげぢや、わらぢ虫や、はさみ虫や、みゝずなぞは、見たいとて、見られやしない。外へ出れば、泥のない往來があつて、電車へ乘ればとて、磨きたての靴の先を、むざ〳〵と踏まれやしない。地下線（サブウエー）にも、高架線（エレヴエテツト）にも、ローカルと、エツキスプレスとあつて、ローカルは、ちよいちよいとまるが、エツキスプレスは急行だ。ところどころへとまる。市街電車（トローリーカー）でも日本のよりは大きくつて幅もひろい。膝をかさねてかけてゐても、車掌（カンダクタア）の通るたびに、それをひつこませなくてもいいくらゐだ。

だが、私は、ニウヨルクの住宅區域（レジデンスセクシヨン）は好きでない。あのパークアヴエニウや、セントラルパアークイーストや、リヴアサイドのやうな富豪の邸宅のあるところは或ひはいいかも知れないが、私は、住んで見ないからわからない。マクドガルアレーにある金持の美術家連の建築長屋（ステユデオビルヂング）も、さう住み心地がよささうにも見えなかつた。

○

自働車（オートモビルス）と云ふものは、いそがしい都會の生活をするにしても、また行き來に時間のかゝる田園の生活をするにしても、極めて必要なものである。

アメリカで、ごく安い自働車は、新らしいので二百五十弗ぐらゐなものだ。それが日本で買ふと千二三百圓はする。それで輕油（ギヤソリン）と、車輛税に、修繕費とで、自分が運轉するとしても、日に平均五圓づゝはかかる。ことに日本の道路では、タイヤも何もたまらない。それではとても普通の人の常用には適しない。それに田園に生活してゐる人はともかく、都會に生活してゐる人では、廣い邸内でも持つてゐない限り、自働車を仕舞つて置くところもない。

アメリカの都會には、四五丁内に必ず一軒づゝ、ギヤラーヂと云ふものがあつて、自働車の持ち主は、夜分、このギヤラーヂへ自分の車を預ける。一軒と云ふと小さいやうだが、さうでない。その一軒が、五階建ての大きな建物（ビルヂング）で、預ける車の持ち主は、車をそのギヤラーヂのなかへ乘り棄てると、そこに大きな昇降機が卸りてゐて、自働車は、そのまんま、二階三階四階、或ひは五階の大きな車庫へ運ばれる。

明朝になつて來て見ると、自働車は、一と晩のうちに洗ひ清められて、ぴか〳〵光つて、揮發油（ガソリン）まで、ちやんと入れてある。持ち主はそれへ乘つて、グルパイとも何んとも云はずに白い

をあとへ殘して出て行く。さうして、また晩になれば歸つて來てそこへ預けるまでのことだ。何んにも手數はかゝらない。だが日本には之れがない。

また、田園に住んでゐる向ふの人は、自働車は大抵、自分の住居(レジデンス)へ、一寸しやれた自働車置場をこしらへてそれへ入れてある。晩餐後の運動(エキササイズ)に、それの掃除をするのであるが、都會の近邊の田園ならば必ず水道が來てゐるし、水道のないところでも、水槽小屋(タンクハウス)が必ずあつて、風車(ウインドミル)で井戸の水を、斷えずこの小屋(ハウス)の上の貯水槽(ウオータータンク)へ汲み上げて置くやうな仕掛けになつてゐて、その水槽(タンク)からパイプを通じて、水を引いてあるから、ホーツをかけさへすれば、壓力のある水は下つてくる。その水で、自動車は、綺麗に洗つてしまはれる。日本のやうに雜巾で自働車を拭きまはしてゐるやうではとてもしかたがない。手桶に汲んだ手仕事の水なぞでは、自働車の掃除は出來るものではない。

また、日本の田舍の道では、とても自働車を快速力で走らせることも出來まい。アメリカでは、どんな片田舍へ行つても、ちやんと自働車道(ブレヴアード)と云ふものが出來てゐて、雨が降つても決してぬからないやうになつてゐる。さうして、その處々には、輕油の供給所があつて、廿五仙の銀貨を入れゝば、自働的(オートマチツク)に、それだけの輕油(ギヤソリン)が出て來るやうになつてゐるところもある。完全したものだ。

若し、都會に住んでゐる人に自働車がなかつたら、夕景の散歩などには、とても新鮮な空氣のある郊外へは、ちよつと行けない。また、田園に住んでゐる人が自働車を持たなければ、毎日都會へ通ふのに、それは大變だ。電車や汽車がいくら發達してゐても、誰れだつて、汗臭い下等勞働者の群れと一緒に、然も、朝夕の忙しい時間(ラツシユアワア)に同乘しなければならないのでは、さうその人の生活(ライフ)が幸福(ハツピイ)だとは云へない。ことに田園に住んでる人の妻なぞは大事だ。都會へ出て來るのが、おつくうなやうではしかたがなく、晩の時間に、一寸、都會の劇場(セアタア)へ來ることさへも出來ないでは、自然世間におくれて行く。都會の人が田園にひつこんで、田舍人(ピーザント)になつてしまつてはしかたがない。

自動車(オートモビルス)は、實際、都會の生活と、田園とを、入れ違ひに結び合せる、たつた一つの機關である。先づこの文明の時代のなかに活きてゐて、人並みの生活をしやうと云ふのには、自働車の一臺ぐらゐは、どうしても持つてゐなければならない。それも高い金がいると云ふのではなし、一時に百弗を拂ひ込めば、あとは月々十弗ぐらゐな月賦で、それが自分の手に入るのは、アメリカで、月に三百弗取る人だつたら、樂に出來ることだ。一週間七十五弗の收入と云へば、あの國では、勞働者でも取つて

ゐる。

それが日本へ來るとどうだ。地面から、二呎か三呎高いところへ乘つかつて、走ることが出來ると思つて、乘つたものは反り身になる。乘らないものは意固地になる。なんだ子供らしい。なにかい。まだ日本ぢや、自働車を自國で作ることが出來ないのかい、出來ても向ふからセコンドハンドを仕入れる方が安からう。殘念でもしかたがない。

○

田園のありさまと云ふものは、アメリカ中どこへ行つても大抵は同じであるが、都會に近い田園には、なか／＼しやれた小村落がある。村落一つが一つの綺麗なガーデンで、赤い瓦に白い壁、緑の芝生。一軒だつて、他とちがつた色をしてゐる家はない。汽車のつく停車場も、その村落の一部分で、やつぱり、赤い瓦に白い壁をしてゐる。プラットフオームの階段を卸りると、赤い屋根のヴエランダーが通じてゐて、それはまつすぐに、その村への訪問者を宿泊させるホテルへど續いてゐる。村落の中央には花壇がある、花壇の中央には噴水がある。その噴水を中央にして、白いコンクリートの往來は、花瓣のやうに開いてゐる。正面のつきあたりには、塔のある教會堂が立つてゐる。右に學校、左に病院、あとは、皆、住宅で、自働車の通る道は輪を劃いて、その住宅をめぐつてゐる。よくまあ人間が氣を揃へて、一つの家が、村全體の風致を思ひ、村全體が一つの家の風致をあゝまで思つたものだ。白樺の樹や、楓は高くそびえてゐる。菩提樹は軒にその葉を重ねてゐる。赤い花や白い花は、窓框からこぼれるやうに咲いてゐる。しかし、あゝまで、きちんときまつてしまつては、活きてゐる人間が住むのにはあんまり、コンフオテブルではないだらうかと私は思つた。お人形さんが住むのには丁度いいかも知れないが、などと、私は、よく惡口を云つたものだ。

その村のホテルと云ふものは、色々な意味に於て使はれてゐた。ホテルには行商人が來た。また日用品はホテルのなかで賣つて居た。村の事務を執る室もそのホテルにあつた。ホテルのなかには電話交換局もあつた。倶樂部もあつた。食堂には、まはりに新印象派の繪畫や、また歐羅巴の新らしい掛毛氈などがかけてあつた。この村落は、ニウヨルクから、イーストリヴアのチューブを通つて、チューブと云ふのは、汽車の線路が、河底の鐵管のなかを通つてゐるのだが、それに乘つて一時間ばかり走るとゆけるところにあつた。

キユウガーデンだとか、フオレストヒルだとか、シークリッフだとか、グレンコーヴだとか、ローカストヴアレーだとか、

さうした綺麗な小村落は、あの邊には、丘をへだて、杜をへだてゝ散在してゐた。これは、ロンングアイランドと云ふ島のなかにある村落で、いづれも、ニウヨルクの金持ちが、そこに田園の住宅を構へてゐるのである。向ふの田園は都會に近いほど貧しい人が住んでゐるが、都會を離れるほど富んだ人が住んでゐると云ふありさまだ。

また、これは、都會の人が田園のなかに來て住んでゐると云ふのではなしに、田園の人が都會に程近く住んでゐると云ふ意味の村落は、これは、よく、ニユージアジー州なぞに、その模範的なのがある。村の有様は、整つてゐるとは云へないが、まことに豐に見える。往來は、夏なぞは、全く、緑色のトンネルである。メープルの樹は、籬のやうにならんでゐる。秋は全く火のトンネルをくぐるやうだ。その道が、ゆるいカーヴをもつてゐて、自働車に乘つてる人は、少しづゝハンドフイールをまはしながら走つてゐる。チヤーチは古く、その村の由緒の古さを語つてゐる。人々は都會のやうに忙しくは歩いてゐない。どことなくのんびりとして、人々の表情はその村の空氣にしつくりと調和してゐる。だから都から來てゐる人はすぐ見わけがつく、綺麗な小さい停車場があつて、プレヴアドは、そこからすぐ村の彼方へ續いてゐる。娘たちは、白や、水色の夏着をつけて人を停車場に待つてゐる姿もうつくしい。

私の友人が、あるとき、さうした村落の家を借りて住んだことがあつたが、どう云ふものか、村の人が交際してくれない。彼れは、若い男だつたので淋しく思つた。ある時、村の子供に戯れに、一緒に遊んでくれないかと、云つたらば、村の子供の云ふのには、お前は、日曜でも、教會へ來ないから、うちのパパーが、あの日本人とは懇意にしてはいけないと、うちの姉に話してゐたと云つたさうだ、そこで彼れは、氣がついて、はじめてチヤーチへ行きはじめたところが、その後に、皆んなが交際してくれたばかりか色々と深切にしてくれたさうである。ニウヨルクからハドソン河を渡り越した向ふには、さうした村が澤山ある。イーストオレンヂ、サウスオレンヂ、ミルバアーン。或ひは、ブルームフイルド、モンテクレアなぞ、みなさうした村落である、水道は無論ある。電氣もくれば、瓦斯もくる。

さうしてあの邊は、澗の水も清くつて、森の樹も丈高く、ことに、地には、巖や、大きな石が多く、風景もなか〳〵いい。田園生活と云ふことは、向ふの人に云はせれば、人間が自然に近く住むと云ふことで、決して未開を好むと云ふ意味ではない。ネーチユアと、ワイルドとは違つてゐる。人間が、自然のために困らせられるやうでは、ほんとうの田園生活の意味はそこに

生じてゐない。水を汲むのに汗をかき、薪を割るのに手を痛め、家のまはりを歩くのに、下駄をとられて、片足でダンスしなければならないやうな田園生活はまつぴらだ。

○

陸續きで迂回すれば手間のかゝる對岸も、船へ乘つて横切れば直ぐ行けると云ふやうなところは、田園生活者にとつては申し分のない場所である。それは島でもかまはない。都會に近い大きな島は、若しそこに完全な渡船(フェリー)があれば、住むのには極く都合がいい。

渡船と云つても小さいボートではない。それは水上の浮き御殿も同樣で、上甲板(アッパーデッキ)は、丁度、屋上園のやうだ。中甲板(ミッドルデッキ)は廣いパアラーになつてゐて、音樂堂まである。食堂の設備のあるのもある。下甲板(カーゴデッキ)は、船が岸を離れる時にも、船が對岸へ着くときにも、その部分はすぐ往來に接續して、自働車も馬車も、往來からすぐ船のなかへ這入れ、船のなかゝらすぐ往來へ出られるやうになつてゐる。

アメリカで、フェリーと云へば、みなその式の船である。サンフランシスコから、對岸のオークランド、ララメダ、バークレーへ行く人たちは、海上三哩餘をたつた十五分間で横切つて乙姫が住んでると云ふ龍宮の門のやうな海上のピーアにつく。

そのピーアからこん度は、大型な電氣列車(エレクトリックトレーン)に乘り換へて、二十哩餘の棧橋をたつた六分で渡り切つて、それから、市街を通りぬけて、郊外の終點まで行く。そこから今度は、遠く三十哩、或ひは五十哩の田園へ、またほかの電氣列車(エレクトレーン)で行くのである。

東京にしたところが、若し、このフエリーシステムが完備したならば、隅田川の河口から、千葉、習志野、木更津邊へ、僅かの時間で行くことが出來る。對岸は遠淺だから、海上にピーアを建てゝそこから棧橋で、電車を通ずれば何でもないことだ。さうしたら姉ケ崎から、五井、八幡にかけた、あの袖ケ浦の一帶は、いゝ田園の住宅地になるわけだ。少し、アメリカの、バフエローや、デトロイトや、シカゴあたりのフエリーシステムを見て來たら、東京灣のやうな内海(うちうみ)で、海上十哩あるかなしのところを渡して、對岸を、都會人の住宅地に加へることが出來ないと云ふことはないわけだと、誰しも思ふだらう。荷馬車でも自働車でも、馬のまんま、乘つたまゝで對岸へ渡ることの出來る、フエリーが、日本のどこかにあるかい。ないだらう。どうせ貧乏國のことだから。

夏と都會勞働者

内藤辰雄

一

夏になると、都市に居住する勞働者は、工場と屋外とを問はず悦ぶ。勞働者を非常に慘酷に取扱ふ冬が辭し去つて、中立者の春が豫言してゐた通り、友達の味方である夏が來たのだ、と。

何故、暑い〱夏が、そんなに友達に悦ばれるかといふに、二つの根本的の理由があるからである。一つは、手から口へ、飲み物や食ひ物をはこぶことが十分出來出すから、使用人は、なるべく、冬の中は被使用人をきりつめて使ふといふのは、冬の中は、使つたつて、彼等――手足を持つて何百となき商品を造り出す、或は擔ぎ、或は運搬する人間が、兎角ずるけるからである。先づ仕事を前にして、火を圍んで一あたりする。始業汽笛位の、ことではいふことを諾かない。で自分や自分の代りをしてゐる人間に小言をいはすと、ふてる、あくたいを吐く、それ位ならまだいゝが、ちつと見張りをして、眼で强要してゐないと、焚火と雜談の誘惑から、仕事へ向いて何時迄も歩まうとしない、何しろ儲けるために買入れる人間であるから、そんな風では、工場等でも、冬から春へかけては、職工募集の木の札を門に架けるのが稀である。すると、一波が千波を生むで、それが勞働階級に非常に影響を及ぼすのである。先づ商人が製品材料の買込みが、からなくなる。すると、運輸業者に從屬した勞働階級の仕事がひまになる。利益がある場合には、製品材料を入るべき倉庫の增築も自然と殖へるわけであるが、買込み買込みがなければ商人も其企劃を放擲するやうになる。からなると又、建築業に從屬した勞働階級の仕事が尠くなる。それが夏になると、いゝ方の一波千波となるのである。

小さいことだが、市でも夏になると撒水夫の數を增す。冬の中休業同樣の凡ての飲料工場が多數の勞働者を使用し出す。從つて、この需用と供給で價格付けられる人間の一般値段に上つ

て來る。すると、根が貯蓄心のない人間のことゝて、取れば取る丈ばつぱと使つてしまふ。卽ち多くを消費すれば、多くの生産が要るわけで、而して、生産は凡て勞働階級の手でやるのだから、夏は、まつたく、勞働階級――手から直ちに口へ――の人々の共稼ぎ時で、共嬉しさうな顏は、街頭に、居酒屋に充滿するのである。

いま一つ、友達が、「俺達の世界が來た」といふ言葉裏から、私は、彼等が、彼等の肉體の繁榮に就いて、如何に矜持を持つてゐるかを窺ふことが出來る。寒い時分には、人間は主として、服裝とか居住――卽ち技巧本位の生活をしたがるものである。そんな時には、勞働階級の人々は、他の階級の人々と競ふべく、なんにも持つてゐないからつまらない。閉ざゝれた扉の後ろ――暖爐の傍らに友人を集めて、高尙な智的の會話を交換するべく智識も持つてゐなければ……第一、そんなひまも、そんな居宅も持合せぬのだから意氣地がない。美しい飾りをするどころか、多は温かく著る丈けのことでも、仕事がひまで出來はしない。しかし、暑い時分になれば、人間は兎角、肉體――筋肉の活動――卽ち内容を現はしたがる。夏になると、いままでは、人間が、肉體を藝術的な衣服で包もう〳〵としてゐたものが、殊にさういふ風に敎へ付けられてゐる紳士諸君でも裸體になりたがる。實際、夏は、皆んなが衣服を纏ふことを、厄介た顏をし出す。かうなつて來ると、いくら他の階級の人々が威張つたつて、友達のやうな筋骨隆々たる肉を持つてゐないのだから駄目である。

夏は勞働者の天下だ！

寒い時は、二重にも三重にも身體を包んで纎弱怯懦な肉體を胡魔化してゐられるけれど、暑い時はさうは行かない。技巧本位に出來た他の階級の人々は、この時分になると、哀れにも墮るさうな顏をして、煽風器に吹かれたり、戸外に出るのを恐れて、室の中に、芋虫みたいにごろ〳〵してゐるか、さもなくば金力に助勢を求めて避暑に行つちまふ。則ち、力と肉體の時代は、勞働階級にあ―あ―る―ん―だ。

暑い〳〵といひながらも、勞働階級の面々に取つては、夏は悦ばれる。よく社會主義者等が、三伏の炎暑を浴びて、勞働者が眞黒になつて働いてゐるのに、金持ちは、海に、山に、妻妾を連れて避暑に出掛けて遊んでゐると呪つてゐるが、私はそれを取らない。尠くとも私丈はそれを取らない。何故なら、私は苦痛主義者？だから……私はさうした人々を羨望するよりか、自分達の耐忍力を悦ぶ心――明日の人としての最も着目されなければならぬ資格――を、自分の中に認めることが先に立つ

て、それを羨望する心は、正しくない社會が投げ掛ける誘惑にしか過ぎないからである。しかし、私は夏を好まない。どちらかいふと苦痛多き冬の方が好きである。

どうも夏になると、友達が、動物的狀態に滿足して、人間への役を忘れ、享樂的方面に走るやうになつていけない。友達は夏になるとあまりに安價な享樂的方面に走る。冬の中思つてゐたこと——こゝではいけないこんどは夏場うんと稼いで冬の中に飢えないやうにしなければいけないとか(これは枝葉の問題だが)、使ふ人間と使はれる人間とあるからこんな風になるんだとかいふ理想を、安酒や、女郎や、淫賣のために忘れてしまふからである。冬の中は、自由に手から口へ運べないから、それに技巧本位になり易い生活には向かないため、前いつたやうなことを考へ出すのだが、夏になるとけろりと忘れてしまふ。冬の中は、使はれる人の慘めさや、つまらなさを痛感して、仕事から投げ出された反抗心を、パンを搾取された反抗心を、全世界に抱いて、飢えれば飢える程、從つていゝ考案を持つのだが夏になれば、其反抗心をも、いゝ考案をも忘れてしまふ。夏になつて、あつちからも、こつちからも、使用人達が、腹黒き使用人達が秋波を送ると、せいぐ\自分を高く買つて貰ふには違いないが、最もそれに誘惑されて、自分の胃袋へ一斤のパンが這入つた時、使用人の食糧倉庫へ、永遠に弱き者と闘ふべき百斤のパンが納入されることを忘れ、つい數ケ月以前、自分を苛めて行つた冬が、又數ケ月後には來るといふことを忘れてしまふ。

冬の中は百斤のパンを與へて一斤のパンを貰ふ。それが一斤半になつたといふて、「もうこつちとらの世界だ、もうどつこへ行つても威張つたものだ! 工場糞でも喰へだ、親方糞でも喰へだ、拾方(被使用人)様の世界が來たんだ!」なんかといつて威張つてゐる様は、慘めにも、可愛ゆくも、又哀れでもある。日が暮れると、仕事の忙しさはそれ丈使用人が武裝するためだといふことを忘れ(もつともそこへは氣が付くまいが)双肌脱いで、大胡坐で晩酌を傾けるか、でない奴は、あつちこつちにぶらつき歩いて、喚めき叫び、罵り騒いでゐる。殊に勞働者街の夏の夜は、甚だしく、私を傷付ける。

かうして友達は、日中は、夕暮方の酒を眼に招んで働き、夕暮れから夜更け迄は、翌日の日中の苦痛を思ふて、動物的な暴飲暴食の快を事とするのである。

日中の都市勞働者の苦痛は、實際宇野浩二ぢやあないが(苦の世界)である。共に(力の世界)でゝもある。私は十年間ばかり種々雜多な勞働をしてゐるが、しかしまだ勞働者が、馬車馬や兵隊みたいに打つ仆れた場所をも、話をも、見も、聽きもし

ないが、しかし、仆れはしまいかと苦しんでゐる姿は、河岸の小揚人足が、身に纏つた襦衣、股引はいふも更なり、腰に下げた手拭迄ぐつしより濡らして船から陸へ貨物を運搬してゐるのを見ても、車力が顔一面に、大小の汗の玉を浮べて、橋や坂を梶棒を前に下げて上つてゐるのを見ても、蒸し暑い工場内で働いてゐる勞働者を見てもそれが覗はれる。

私一箇のことをいつても、こんなことを書いてゐるときは冷汗を出してゐるが、朝になつて私が梶棒を採り、晩になつて、それを放す間の私といつたら、まるで熱汗そのものである。苦痛そのものである。巡査は、私が、電車の軌道に車を挽き込みはしまいか、自働車や、電車や、又は小僧の自轉車に衝突しはしまいか、どこかの令嬢の足でも轢きはしまいかと、鵜の眼、鷹の眼で私を物色してゐる。友達は私をナメテ怒鳴り散らす。自働車の運轉手はぶうぶうと私をラッパで嘲笑して過ぎ、電車の中からは、多くの乘客が、世の中を自らおン出てやつた私を、世の中から追ひ出された、不幸な墮落者のやうに見てゐる。撒水車の人夫は、民衆を思ふといはんばかりに水を無暗に撒いて而して私が滑つて、車が挽けやうが挽けまいが、そんなことを思ふんぢゃあない。あたまを太陽の炎熱の中に突込み、足は泥海のやうな地上の上に滑らかして、車力さんは車を挽くのである。でなければ地上は何時も埃だらけだ！埃のために私は眼をくらまされ、足には灰色の毛を植ゑて、天道様に黒焦げにされて車を挽くのである。

たまさか、青いものが見えたつて、そこは世の中から追出された人が集つてゐる公園で、汚ない服裝をした、生活に用の無い人間で埋つて、息詰るやうな胸苦しさを與へる、暑いからといつて水道の鑵でも持つてゐなければ、「ちよつと、すみませんが水をいつぱいよんでおくんなさい。」と、おかみさんに水を御馳走になるほか、……氷水を飲んでゐたんぢやア、晩の日當の三分の一位はフイになるのだからいけない。

何といつても、都會の日中は、勞働者に取つては苦の世界！

しかし苦の世界に忍從するのは、私に取つては愉快だ。如是閑ぢやアないが、「勞働運動とは勞働の苦痛から逃出す運動ぢやアなくて、（何故なら人間はいまのところ働かずに食へないのだから）もつとも苦痛な仕事である勞働に從事してゐる階級を、最も有力に認めさす運動が出來れば尚更愉快だが、私はそんなことは拔きにしても、苦痛に忍從してゐることが愉快だ。

よくブルジョアヂイの安隨な生活を思ふて、たとへていへば車の横に金魚のやうに著飾つた藝者や、令嬢等を見る時、ヘンナ氣持ちになるのも嘘ぢやアないが、殊に夏は、女の肉體が露

を透かして見えるので、つい鑄掛松のやり口を思つたりするが、しかし私の車は徒らに廻轉してゐるのぢやアないやうな氣がして、あれも一生、これも一生なら、而して一生がほんのちよんのまなら、そんな商人的の他の苦痛を思はない、享樂を得たにしたつて、やつぱり死んぢまうんだから、やつぱりそれでは皆と共に苦しみ皆と共によりよい明日の人の資格を作るべく心掛けやうと努めるのである。話が横にそれだが、日中は私に限らず、皆んなだが、天道様と、他の階級の人々に苦しめられるのだが夜になると……

二

夏の都會の夜は、友達にもやはり歡樂の夜である。多くの私の友達は、なんにも能が無いのだから、苦痛な仕事から放れると、やはり、求められる以内に於て、賣女や、安酒を求め出すのである。

すこし、安直向きの居酒屋——こんなバーはたいては醬油樽なんかに腰を掛けて酒を飲むか、でなければ一枚の板の上に、印半纏や、職工服の臀を竝べるのである——の女中や、小僧は汗と襤褸の臭ひのぷんぷんする、友達の傍へ近づいて、コップへ辛い酒を盛つて……翌日の汗を搾るべく彼等は忙しい。安煙草の煙が煤けた天井裏から、蚊のまぶれた電燈の邊りを漂ひ流れ、下では獸が餌にあり付いたやうに、友達が夢我夢中でコップ酒を傾けて、食ひ且つ話してゐる。そこでは賭博と、漁色と三面記事の話しか聽かれない。廢頽的な罵り聲が汗の臭ひと共に場内に充ちてゐる。而して、すこし醉うて來ると、妙に排他的に異つた仕事をしてゐる者を侮蔑して喧嘩を吹掛けるやうな性の人もゐるかと見れば、ふと、こんな場所で顏を見合せた人に話を求めて、「まア私の話を聽いて下さい——ほんのちよんのまでいゝから、あまり暇を取らしやアしないから——私の身の上話……」と方々で見て來た人生を話し合つたりするのである。

それよりすこし上等な、安西洋料理店では、安直な居酒屋に集つた人々の勞働に寄生し、其上に自分でも働いてゐるやうな連中——友達のあたまを刎ねてゐる友達——勞働請負業者や、其下仕事をしてゐる者や、熟練職工、職人達が集つて、さうした搾取した金を、淫賣婦まがひの女ボーイさんのいろ目に使つてゐる。何も皆ンなと一緒に飲めばいゝに、わざと氣の利いた眞似をしてゐる。おきまり文句と、意味ありげな眼の代價として、「お釣錢……。」「いゝよ——」といつて出てくる。彼等は暑くてならないから、そこを出ても眞直ぐには歸らない。

微風が森でない夜の森を通して、うつとり醉つた眼に當た

り、そこ、こゝに、浴衣を着て、彼等に手を觸るゝことを許さない、娘や、おかみさんや、お令嬢や、異様の曲線的に歩く、淫蕩的な姿が當たると、居酒屋の連中は主として、食ひ氣、醉ひ氣以上を欲しないが、欲してもさうは燒いた物(金)が許さないのだが、これはそれを通過した色氣の連中であるから引込んではゐられない。一人、二人、三人、或は五人と隊を組んで、友達の未見の友達の娘か、姉妹か、何だか知らないが、さつした女が生きてゐなければならないから、さうして生き行くにはそんなことをするよりほか知らないのか、白い頸や、顔を魔窟に見せてゐるのを見に行くのである。友達は友達を淫猥な言葉で辱めたり、重荷ある身體で背めるのである。而してとどの詰りがひつかゝつてしまふか、夜遅くなつて、長屋や、他家の二階や、安下宿に歸つて動物的にぐうぐう鼾聲を立てゐる。やりきれない氣分で寢るのである。

夜と少年勞働者はどうかといふに、やつぱり晝間が五十歩百歩であるから、夜も兄哥株と五十歩百歩である。これは本當に可愛らしいが、しかし、そこにも兄哥にしこまれた趣味が惡く、私を、兄哥株を、又はおやぢ株を見るやうないらいらした情けない暗い氣分に突落す。少年達が自分の腕で得た金だから、何とも文句は無いことはないのだけれど、私は何故か注文を持つ

者である。少年の多くは小使錢さへあると、活動寫眞見物に行く。何を好んで見るかといふに、たいてい松之助物か――もつとも其主人公は義俠心のある英雄や、忠臣や、烈婦の傳等であるからして、彼等もよりよき人間としての可能性はあるが、しかし下卑た滑稽な場面など、拍手喝采する等をするから情けなくなる――であるとか、西洋探偵物である。少年の多くは下等な遊戲場に大人と交つて……殊に工場町にあつては空氣銃がよく流行る。十錢のもとで敷島を二個落したことに就いても、其技術を能誇するのではなくて、二十錢の不正利得に喜んでゐる――それは如何にも慘めな生活者だからもつとものことだが――金持ちの子供にはこんな子供は少ない――それを見た時、私はいへなく勞働者とか賃銀制度に就いて考へさせられる。同時に習慣とか、感化とか時間とか、空間とかの偉大な力に怖れずにはゐられない。こんな享樂的心理狀態は夏の夜に於いて最も挑發されるのである。それはお腹の饑じい冬より、お腹のふくれた夏に於いて見られ得べきことである。殊に、私が惡虫と、暑さに苦しめられて、戶外に多く出步くから冬の中より餘計眼に付くせいもあらう。

しかし夏になればお腹がふくれるので友達が、そんな風にだらしがなくなるから、夏は好かないからといつて、ではさうで

なかつたらといつた時は、私は、夏は好くんである。解放的な赤裸々な、男性的な夏だもの！　而して、私は前いつたやうなことを決して不自然だとは思はない。むしろ、私の注文が不自然であるかもわからないのである。冬の中、天候と、仕事と、パンの侮辱のため虐げ通されて來た友達が、「こつちとらの世界」が來たんだから、口に手に忙しいのは當然であり、人間的なことである。共享樂を控へよ、人間に復歸するべく心得よといふ私の方が無理かも知れない――私はたゞ、日中は天道樣に眞黑にされて、風と埃に、汗になつた身體をあべ川餅みたいにして働き、或は雨天の時等は、どろ／＼になつた汁粉のやうな泥濘に、足を取られて働いてゐる屋外勞働者や、むしやくしやしたあたま――尖つた神經を、機械場の騷音に餘計尖んがらかして、終日機械狀態で暮す工場勞働者の、お父さんや、お母さんが、彼等を教育すべく出來なかつた勞働者であつたこと、及び酒や、飲食物を怨んで置けばいゝのかわからない。

からは書いて來たものゝ……でにこれ以外に勞働者は無いかといふに（筋肉勞働者は）さうではない。さうして、この書き殘して置いた勞働者は、夏でも冬でもおんなじである。これは明日の世界を形創る勞働者の生活狀態であるが、Kといふ私の友人――賢い、豐かな額と、御愁の果のなつてゐる眼を持つた若者――は、日中は時計工場に雜役夫として通つてゐて、夜は、大島町勞働會館の夜學部――文化講塾――へ行くか、私のところへ散歩に誘ひに來る。これと私と、夏の夜の散歩をする時になると、どこといふあてもなく、人通りの尠ない――といつてすつかり無いのもいけないが、――暗い路を、足が棒になる迄歩くのである。時には、此氣分は素敵だ、といふて、二人沈默して、周圍に神秘的な、嚴肅な闇を感じ、闇の中から絶え間なく起つて來る、個性の異つた下駄の音を聽くことに無上な愉快を感じ、時には、女や藝術の話に、先驅者としての苦しみや、悅ばしさを談じながら、うつとりしたり、昂奮したり、謠謠を弄したりしながら歩くのである。これは冬では味へない氣分――味である。かうした時はしとりでに闇の中に、「有島は」とか、「如是閑」はとか、「吉野なんかア」とかいふ聲が出て居る。これも夏の解放的氣分がさせるわざである。も一人のKといふ男はリム製造所の職工であるが、これは、惡虫と子供の泣聲に責められながら、晝間機械に喰付いてゐたと同じ格好をして机に嚙り付いてゐる、而して薄つぺらい雜誌か、よく思ひ切つて買つたもんだといふやうな單行本をよく讀んでゐる。すくなくとも三度行けば、二度迄はそんな苦學狀態が見受けられる。それから小指の一本無い鐵工のWは綿や、近代文學に就いて私とよく

話すが、而してどつちも生噛りだが、しかし好きで、わざ〲龜戸邊から、東京は神田の神保町邊の、古本屋や額椽店を素見しに行くのである。これは何しろ十五錢の電車賃が要ることなので……しかし私達は好んでやる。何しろ無料で、ミレイや、セザンヌやマチスの版畫が見られるといふことは、私達に取つては、活動寫眞や、芝居見物以上なのである。二人とも何時の間にか、ミレイや、セザンヌがわかる――といふよりは感ぜられるやうになつて、夏の夜はたいて一週に一度多い時は二度も、神保町邊に行くか、銀ブラして、さうした店の前に、襤褸姿を曝して、不能的な食指を動かしてゐるのである。其他私等と會をやつてゐる連中は、たいてい勞働者であるが、彼等は夏の夜、もつとも何を好んでするかといふに、やはり日中の勞苦に繼ぐに夜分は身を削るやうな勉强か、前いつたやうな散歩か、實際運動に就いての會合か、研究であるらしい。以前には縁日等へ行つてぶら〲するのを好いてゐたやうであるが、いまはもう明日の世界が見え初めたゝめに、實際運動や、教養に忙しくてそんな暇を欠いでゐる。或一人の私の友人が、或一人の私の友人に、都會の夏の夜の縁日に就いて話して、アセチリンガスのにほひや、植木屋の打水や幸福さうな灯を見たいなア、といつたら、それはブルジョアの氣持ちだといつて、とうたうそれからといふものは縁日の傍を通つても二人は寄りはしなくなつた。(偶にそこを通り過ぎないこともないが)

三

だいたい、夏の都會に於ける勞働者の、日夜の生活は書いたやうだが、いま一つ友達の居宅に就いていつて見れば、そこはたいてい場末か市の中にあつてもたいていぢめ〲したところで、家の内外が不潔だから、下水から蚊がたくさん湧き、柱の中や、疊の裏からは、それから襤褸の縫目などからは、蚤や南京蟲が出て來て、もろ〲彼等を休めはしない。それに風通しのよくない家ばかりだから、たいてい身に一尺の布も纒はずに寢るやうな者が多いのだが、それでも暑くつて寢られないといつては苦しんでゐる。まつたく私でも、疲れゝばこそこんな汚ない二階に眠られるのだといふやうな氣がする。一人の者はそれでもまだいゝが、一家族五六人もが、たつた一つの胴穴のやう家の中で、一枚のもう暇をやつてもいゝ蚊帳の中に、足と足とを交叉したり、あたまとあたまを喰付けたりして寢てゐる樣は、まつたく慘めなものである。

日中はどうかといふに、屋根が低い上に、古道具屋が店を並べたやうな狹い家の中のことだから、一つは屋根から、一つ

は溝からと、一つは家の中から暑さに責められる。だから茶碗などで水をがぶ〳〵飲んでは、コレラに罹るのである。素裸體になつてゐてはお巡査さんに目玉を貰つたり、罰金を取られたりするのである。何といつても金持ちの家は廣いし、門があるから裸體になつてゐてもわからないが、勞働者の家は路ばたにあつて、通りがてら直ぐ穴が覗けるのだかと駄目である。金持ちには水道もあれば、泉水もあれば煽風器もあるからいゝけれど、貧乏人、わけても勞働者の棲むやうな家はたいてい庭が無く（あつても庭木なんかありやアしない）水は共同水道で、煽風器は團扇で、家のある位置といつたら、擂鉢の底のやうなところにあるのだからやり切れない。

それでも都會に住む勞働者は夏を悦こぶ。夏は仕事が多くあつて、飯に飢ゑないからである。夏は素裸體になれるからである。夏は着物を買ふにも安く買へるし、損料蒲團だつて、下を一枚借りて、その上に肉體の鉄のやうに轉つてゐればすむからである。夏は工場主や、親方が、大事に、機嫌を損ぜぬ様取扱つて呉れるからである。田舎の勞働者――主として百姓――は秋收獲をすまして、冬、室内にまどひ、行火の愉快があるか知らないが、都會の勞働者は、夏に於て最も幸福を思ふのである。

○

こんなことを終日車力を挽いて、夜になると、創作の傍ら書いてゐると、牛込の方の友人から夜、神樂坂を散歩に來てはどうかとハガキで誘つて來た。で私は、去年小石川の鐵道新聞といふ下らない新聞社に勤めてゐた時分のことを思ひ出して、何だかあの坂が懐しくなつて來た。夏時分であつたから、夜になると、私は同僚の共記者と散歩したものだ、あすこの項上から、だんだら斜面を昇つたり降つたりしてゐる、美いく着飾つた山の手の男や女の群と、灯と、柳の木を瞰下す夏の夜は幸福であつたかのやうに覺える。又夕暮方、江戸川で貸船を漕いだことも、初夏の微風に吹かれながら雀町のKの二階で隱やかに話たことも思出されて、それが都會の夏を最も代表するものだと思つたが、しかし私はもうさうした生活に緣を斷つた勞働者だからといつて斷つてしまつた。……でも牛込邊の夜はまつたくいゝものである。いま、加藤武雄氏等と同氏の宅でやつてゐる創作批評會等に亀戸邊から出て行くと殊に此感が深い。各自が朗讀と批評で昂奮した顔を、戸外に出て微風に吹かれながら坂を下つて行く感じつたらない。でもさうした人々とか、そこには力はないやうだ。新しき明日を生むことばかりを考へるに新

しい者は、享樂的な夜の夏より、苦痛多き晝の夏に、或はより多くの、幸福感にひたるかもわからない。

兎も角も、夏は勞働者の天下で、夏は、男性と、力と、勇氣と赤裸々と、をシンボライズしたものである。田園に住む人に取つてもさうであらうが、都會に住む人に取つても夏はいろんな活動に面白い時である。（オシマイ）

水上の生活・山上の生活

田中貢太郎

燃えるやうな夏が來た。人は皆山巓水涯を思ふ季節となつた。天空開豁、一望遮る物のない洋上から吹いて來る風に浴し、碧[illegible]に游泳して、暑を忘れる海邊の遊行も面白ければ、深山幽谷の地にあつて、山谷を跋渉し、疲れては、卷舒する雲と飛泉に對して、悠悠讀書し瞑想するのも面白い。それは各人の趣味と體質の如何によつて、海を選び、山を選ぶのであるが、しかし、この山水の遊行は、夏に限つたものでない。春でも、秋でも、冬でも、その季節季節によつて、それぞれ特種な趣がある。それを山水の遊行が夏季と限られるやうに思ふのは、都會生活者の病的な神經の致す所である。

私はこの山水の遊行と云ふことから、山上の生活と水上の生活とを考へて見た。水上の方から云ふと、日本では地形の關係上、海であれ、湖であれ、河であれ、其所を自分の世界にして永久に生活して居ると云ふやうな者はあまりない。船員などは、ある意味から水上の生活者といふことになつてゐるが、その實家庭を陸上に持つてゐて、時間の長短こそあるが、要するに陸上の生活に用する物資を水上の勤務で得ると云ふに過ぎない。最近問題となつた、東京市に沿ふた河海で荷物を運搬して生活してゐる勞働者の一團に、船の中に家庭を持つてゐる者があるらしいが、それも最近は極く尠くなつてゐる。そこになると、支那の揚子江あたりに生活してゐる者は、父祖代代水の上を世界にして、純然たる水上の生活を營んでゐる者が多い。そ

の船の中には、雞を飼ひ、豚を飼ひ、野菜まで作つてある。船の中に野菜を作ると云ふことは、日本にも幕末頃まであつたことで、敢て珍らしいことでもない。滿鮮地方を遊行した者が、鴨綠江を降る筏の中に、やはり豚を飼ひ、雞を飼ひ、野菜を作り、まだその上に馬まで飼つてあるのを見て、非常に驚いてゐる者があるが、ふた月もみ月もかゝる筏の中では、風流でも奇拔でもない、必要缺くべからざるもので、これが自然に恐るべき壞血病などを防いでゐるだらう。

話がちと傍道へそれたから、これから元へかへつて話さう。

今も云つたやうに、日本では水の上を世界にして、父祖代代生活を續けてゐたと云ふ者はないが、瀨戸內海の多島海の島嶼に根據地を置いてゐた海賊や、足利氏の末から德川氏の初にかけて、朝鮮支那の海岸を荒らした倭寇などは、ややその色彩を帶びてゐたやうに思はれる。

神武記に鹽飽海峽に惡神ありなどと出てゐるのが、その瀨戸內海の海賊だ。歷史で有名な藤原純友も、元は政府の役人で、海賊を討伐に行つてゐたものが、その方が好いと思つたので、急に內寶替へをした者だ。土佐日記で名高い紀貫之も、土佐の國司として、その海賊討伐の功があつた。もつとも貫之が土佐の國司になつたと云ふことと、土佐日記が貫之の著書であると云ふことは、私としては大に異議があるが、なにしろ瀨戸內海の海賊は、長い間、畿內政府の一大敵國であつた。その結果、船の上で劍戟を執る勇士は、海賊衆と云ふあまり有難くない名を貰つた。吾妻鏡などにも海賊衆の名が見えてゐるが、それは皆海軍の勇士のことで、決して盜賊あぶれの者のことでない。今なら東郷平八郎君、財部彪君、島村速雄君、加藤友三郎君などもその海賊衆だ。その海賊衆で聞えてゐたのは、伊豫の能島氏、來島氏、因島氏、備後の梶原氏。駿河の間宮氏、小濱氏、向井氏、伊丹氏、岡部氏などであつたが、向井氏は武田氏が亡んだ後は、德川氏に仕へた。その向井氏の水練術の書や、能島氏の兵法に關する書などは今に傳はつてゐる。

倭寇のことは、足利義滿が明に諂つて壓伏に力を盡したことは有名な話だ。倭寇の中には、八幡大菩薩の幟を立ててゐたので、八幡船とも云はれた。また胡蝶軍と云ふ風流な名も貰つてゐた。異稱日本傳に載せた武備志にも、「倭夷蝴蝶の陣を爲すに慣る。陣に臨むに扇を揮ふを以て號と爲す。一人扇を揮へば、衆皆刀を舞はして起ち、空に向つて揮霍す。我兵倉皇、首を仰ぐれば則ち下より砍り來る。又長蛇の陣を爲す。前に百脚旗を耀し、次を以て魚貫して行く。最强を鋒と爲し、最强を殿と爲す。中皆勇怯相參る。賊每日雞鳴して起き、地に蟠りて會食

す。食畢れば夷酋高に據りて坐す。衆皆令を聽き冊を挾みて展視す。今日某處を劫す。某、長となり、某、隊となる。隊三十人に過ぎず、隊毎に相去る一二里、海螺を吹きて號となす。相聞けば即ち合して救援す。亦二三人一隊となる者有り、刀を舞はして横行す。倭奴即ち返る。各其の劫する所の財物を獻ず。敢て匿すなし。夷酋其多寡を較べて之を賞賜す。婦女を擄にする毎に、夜必ず酒色酣睡す。劫掠將に終らんとすれば、之に縱ち以て焚く。烟燄天を燭す。人方に此酷烈に投る。而して賊則ち抽き去る』などと、倭寇跳梁の容を細叙してある。山田長政などもその倭寇を智的に行つた者だ。

海賊倭寇の外に、水の生活者の色彩を帶びてゐた者に『くぐつ』と云ふ者がある。漢字には傀儡と書いてある。この傀儡は、人形を歌にあはせて踊らす一種の人形芝居で、それは後に操り人形となつた物であるが、その人形を踊らしてゐた者が、水邊に生活してゐた上に、その女房や娘などが、客に接したと云ふ所から、遊女の異稱となつてゐる。古い日本の港町にゐた遊女、堺の龍神、大阪の江口、室ノ津の遊女などは、支那朝鮮あたりの海から海をさまようてゐた、その傀儡の一種だらうと云ふやうな氣がする。傀儡に關しては、資治通鑑綱目にも『木偶人なり。世傳ふ、傀儡は漢の高祖平城の圍に、陳平の計を用ゐ、木を刻みて美人と爲し、城上に立て、以て冒頓閼氏を詐るに起る。後人此に因て傀儡と爲す』と云ふやうな文句があるのを見ても、その傀儡が日本傳來の物でないことが分るし、もしかすると、その『くぐつ』と云ふ言葉は、さうした意味を帶びた外國語かも判らない。

しかしこの『くぐつ』が、陸上の生活者であつたか、水上の生活者であつたかと云ふことには、非常に議論のあることで、傀儡は、山野驛宿に客を待ち、遊女は、河海のほとりで旅人と馴れるもので、遊女と一所に見るのはいけないと云ふ者もある。傀儡子記と云ふ書には『男は則ち皆弓馬を使ひ、狩獵を以て事となし、或は雙劍を跳して七丸を弄し、或は木人を舞はして鬪挑す。』又『砂石を變じて金錢と爲し、草木を化して鳥獸と爲す。女は則ち愁眉啼粧折腰歩齲齒咲を爲し、朱を施し、粉を傅へ倡歌淫樂』とあつて、宿場女郎のやうにも思はれる。西宮の夷下も、小補櫃のやうな箱に人形をいれて、それを背に負ひ、腰鼓をたたいて人形を舞はしてゐた江戸の山ねこも、それに連絡があるらしいが、私は矢張り水上生活者として研究してみたい。

山の生活と云へば、山國に棲む者は、皆その生活者である。

私達が山の中に遊行するのは、山を見、谷を見、そして、それ等の人々の素朴な生活を見るためであるが、あまりに深山幽谷の奥深く生活してゐる者は、都會人と人情風俗の懸隔が甚だしいので、往々にして鬼怪視することがある。從つて、鬼、天狗、山男などの話が生じて來る。橘南谿の東西遊記の中にも、山女と山童の話が乘つてゐる。山女は日向國飫肥の山中にしかけてあつた猪道弓と云ふ物にかかつて死んでゐたものであつた。南谿はそれを說明して、『總身女の形にして色殊の外に白く、黑き髮長くして赤裸なり。人に似て人にあらず、獵人も是を見て大に驚きあやしみ、人に尋けるに、山の神なりと言ふにぞ、後のたたりもおそろしく取すてもせず、其まゝにして捨て置ぬ。見る人もなくて腐り果けるが、何のたよりもなかりしとなり』と云つてゐる。山童は薩摩の山の寺と云ふ所に居ると云つて、『其の形大なる猿のごとくにして、常に人の如く立つて步行く、毛の色甚黑し。此寺などには每度來りて食物を盜みくらう。然れども鹽氣有るものを甚嫌へり。杣人など山深く入りて、木の大なるを切り出す時に、峯を越え谷を渡らざれば出しがたくて、出しなやめる時には、此の山わらに握り飯をあたへて賴めば、いかなる大木といへども輕々と引かたげて、よく谷峯を越し杣人のたすけとなる。人と同じく大木を運ぶ時に必ずうしろの方に立つて、人より先に立ち行く事を嫌ふ。めしをあたへて是をつかへば日々來り手傳ふ。先き使ひ、終に飯をあたふ。はじめに少々にても、飯をあたふれば、飯を食し終りて逃げ去る』とその生活を書いてある。

想山著聞奇集にも山男のことが書いてある。木曾の御獄の南の玉瀧山の中で山男に逢つたことを書いて、それと一所に『予が竹馬の友何某、先年木曾方にて在勤をなし、年々深山へ入りたる時、山男の草鞋と云ひ傳ふる物の捨あるを二度見たり。藁にてはなく、藤の皮にて造りたる物にて、珍らしき品なり。今ならば拾ひ來り人にも見せ申すべきに、若き節ゆゑ、心なく見捨來りしは殘念とのことなり。其の大さ佛足にはき給ふて宜しかるべき程に見請しといへり』と山男の履物のことを書いてある。

諸國周遊奇談にも、備前の中津領の山の中に、山男と山女が棲んでゐたが、女の方は木の皮をこまかくさいたやうな物で筵のやうな物を織つて、それを身につけてゐた、色は青白く、男の方よりも脊が低くて、瘦せてゐたと云つてある。これに似た話は北越雪譜にもある。

何時か私の讀んだ物の中に、山の中へ這入つて仕事をしてゐる樵夫が、山男の好く木を圍爐裡で燒くと、山男がその匂を嗅ぎつけてやつて來た。ある時來たのは女であつたから、夫婦の

かたらひをしたところが、普通の人間の女とすこしも變つてゐなかつたと書いてあつたやうに思ふが、果してどの本であつたか記憶がない。

山男の話などはさらにあつて、珍らしくも何ともないが、最近その山男を外國から漂流して來た者の子孫だとか、古代民族の殘存者だとか云ふ者がある。あるひはそんなものもあるかも判らないが、多くは皆長い間、外界と交通を絶つた深山幽谷の中に生活してゐたために、退化して言葉までも忘れてしまひ、それが偽に別種族のやうに思はれた者であらう。昨年國勢調査の際にも、信州あたりの山奥に、言語の通じない、同胞を見て逃げ隠れた邊土の民がゐたといふやうなことが新聞に見えてゐたが、あれなども、昔なら當然山男の部に入れられるところだ。東京附近で强盗殺人のあつた時に、よく引き合に出される山窩なども、さうした眼で見れば、別種族のやうに見えるが、しかし彼等は、長い間の歴史を持つた國內の非人乞食の一團である。

山男と關聯して異様な感じを與へる物は、人跡未踏の地に生活してゐる窮谷の民の部落である。支那では、武陵桃源の話が有名である。それは武陵の漁師が、ある日、谷川を溯つて魚を取り行つてゐて、山の奥の奥で見付けた村落で、其所の住民は、秦の亂をさけて隠れてゐた者の子孫だと云つて、その時世のことは少しも知らなかつた。日本ではさうした窮谷の民は、多く平氏の子孫といふことになつてゐる。その中で、肥後の五ヶ村などは有名で、五家傳記、閑田耕筆、乘穂錄、諸國周遊奇談、東西遊記、五箇庄紀行などに精しく書いてある。五ヶ村は一に五ヶ庄とも云つて、肥後八代郡に屬してゐる。「足利の末にや、太閤の始にや當りけん、川上より椀の流れ來れるをふと見付けて、此の山奥に人住けりと知りて、やうやうに尋ね入りて、始て此五ヶ村の人此世に通ぜり、彼方の人の世間へ出初めて人交りをせしことは、元和寛永の頃にもや、此のあたりにては隈本名家なれば、此手に屬したきよし申立て、公にも其山間開けられ、肥後の支配と仕給ひたれど、本國の外たれば何方の領分といふにもあらず、唯支配といふのみなり。それより此方多年隈本より鹽幾十俵を賜ふ。彼方よりは五人の頭分のもの替り替り年始の禮詞をつとむる爲に、隈本に出るなり。熊の皮數十枚、禮物として年毎に獻上す。むかしより彼地に五人の頭分あり。故に其地を五つにわけて、各一ケ村づつ是を司り保つ、此故に世間より五ヶ村といふ。其人皆質朴にして武をはげみ、男子皆長き大小を横たふ。みつから平家高貴の人の御末なりと高ぶりて、世の人を輕んず。其地鹽なし、近ごろまでは、數百年が間、彼地の人は一人も鹽氣を食ふものなかりしが、近頃隈本より賜

はる鹽をわかちて食す』。これは東西游記の文章だ。

東海道の濱松から、天龍川に沿ふて十四五里行つた所にも、京丸と云ふ所があつて、濱松の宿屋に奉公してゐた物好きの下男が、人の噂を聞いて行つて見ると、四五軒の家があつて、稗に小豆を交へた物を食物にしてゐた。下男の行つた家は、その村の頭のやうな家で、其所はお寺のやうになつてゐた。一向宗の眞向光明の彌陀のやうた佛畫をかけてあつて、それに食物を供へ、松を燃して燈明にしてあつた。男も女も皆縮髮で、着物は麻の荒く織つた物へ尾花や蒲の穗などを綿の代りに入れてあつた。下男は數日逗留して、そのあたりを見物した後に歸つたが、歸る時錢を少し出して置かうとすると、『ここでは、そんな物は用がないから持つて行くが好い、その代り、もし便があつたら、米を少し送つてくれ』と云つた。其所の溪川には、五六十間もある藤蔓の棧(かけはし)があつた。主人は其所まで送つて來て、『さすつて行け、さすつて行け』と云つたが、下男にはその意味が分らなかつた。これは柳澤淇園の雲萍雜誌の話だ。

水神

洞庭湖には種々傳説がある。水神の娘を助けた柳毅と云ふ書生が、遂にその湖の神となつたことや、水神が時々洞庭湖を往來する船へ來て遊興すると云ふやうなことは、洞庭湖を往來する者の直ぐ思ひ出す傳説である。

そして水神が船へ來るには、空中に音樂が聞えて、船繋りしてゐる船の纜がひとりでに解けて、人の搖るやうに彼方此方と動き出す。そんな場合には客も船頭も、船の底へ隱れたり、その間のない者は、眼をつむつて隅つこの方へ蹲んでゐるが、遊びが終ると、船は元の所へ行つて、ひとりでに止まるのであつた。

柳と云ふ書生が、文官試驗を受けに行つたが、合格しなかつたので、不平滿々で歸つて來た。そして洞庭湖まで歸つて來たところで、ある日どつさり酒を飮んで船の上に寢てしまつた。と、何所からともなく笙と鼓の音が聞えて來て、船の纜が解けた。

『それ、神樣のお出ましだ、隱れろ、隱れろ』客も船頭も周章てふためいて、船の中へ這入りかけたが、寢てゐる柳生に氣がついたので、船頭の一人はその傍へ行つて、柳生を搖り起した。

『大變だ、大變だ、書生さん、神樣がお出ましになつた、起きな、起きな』

好い氣持になつて、ぐつすり寢てゐる柳生は起きなかつた。音樂はもう闇の間から聞えて來て、姿は見えないが、大勢のゐるやうな物々しい氣配がしてゐた。船頭はまごまごしてゐて、神の怒に觸れてはならないと思つたので、柳生をうちやらかし

てをいて睡れてしまつた。

柳生は好い氣持で、ぐうぐうと眠つてゐた。と、何者かゞ來で柳生の手をひつつかん　力まかせに引き起さうとしたが、それでも柳生は眼が覺めなかつた。柳生の手を摑んでゐた者は、その手を放してしまつた。柳生の手は崩れるやうに、船板の上に落ちた。

笛や鼓や笙や太鼓や、さうした樂器の音が耳元でがんがん鳴り出した。柳生はとうとう眼を覺ましてしまつた。蘭麝の香が鼻にしみた。柳生は薄目を開けて見た。若い綺麗な女が澤山並んでゐた。柳生はびつくりして眼をつむつた。

『織成さん、』

『織成さん、』

二三の口で誰かの名を呼ぶ聲がした。柳生はそつとまた眼を開けて見た。柳生はその時、仰向加減に寢てゐた。若い女が自分の傍に立つて、小さな足に穿いた羅の襪が顏にさはるやうになつてゐた。襪は紅かつた。可愛いその足許に眼がつくと、柳生はそつと口を出して、その襪を嚙んだ。

向ふの方には一段高くなつた座席があつて、冠をつけ、束帶した國王のやうな者が坐つてゐた。柳生は、直ぐ洞庭の神であると思つた。柳生に襪を嚙まれた女がその方へ歩いて行つた。と、どうした拍子にか、その女がよろよろとした。

『その方の襪はどうしたと云ふのだ、不思議な齒形がついてゐるぢやないか』

洞庭君の傍にゐた者が云つた。

『あそこに寢てをります人間が嚙みました、』

『不屆な奴だ、誅戮を加へるが好い、』

柳生の醉は一時に覺めてしまつた。恐れて顫へてゐると、長い劍をさした武士がやつて來て、襟髮を摑んで引き起した。柳生は引きづられながら云つた。

『洞庭君も柳氏であると云ふことを聞いてをりますが、私も柳氏であります。それに洞庭君も試驗に落第せられてをり、私も落第してをります。洞庭君と私とは、氏も境遇も似てをります。ところで、洞庭君は神になり、私は一人の女に、ちよつと冗談をしたと云ふ位で殺されるとは、情ないではありませんか。』

洞庭君は柳生をひつ立てて行かうとする武士を呼び止めた。

『待て、待て、その者に用事がある。此所へ連れて來い。』

武士は、柳生を洞庭君の前へひつ立てて行つた。洞庭君は柳生を見て云つた。

『お前は、俺の出す題で文章が作れるか、』

柳生は襄陽の名士で學問文章には自信があつた。

『なんでも作ります。』

筆と紙とが柳生の前に來た。

『風髮霧發の賦を作れ、』

柳生は、筆を持つて考へたが、直ぐは思想が纏まらなかつた。

『どうだ、出來ないぢやないか、出來てゐるなら早く書くが好いだらう、』

柳生は筆を置いて云つた。

『三都の賦は十年かかりました。文章は巧に作るのが目的で、早く作るのは目的ではありません。』

洞庭君は笑ひ出した。

『では、巧な文章を作つて見よ、』

朝の辰時から午時までかかつて、一つの文章が出來た。柳生はそれを洞庭君の前へ出した。

『うまい、その方は眞の名士だ。』

柳生の前には珍しい酒と珍しい肴が出て來た。數人の女が來て給仕をした。柳生は進められるままに酒を飮んでゐた。

何所からともなく一人の使者がやつて來て、手にした帳簿を捧げた。

『溺死人の數がきまりました。』

『幾人だ。』

『一百二十八人でございます。』

『簽差した者は誰だ。』

『毛將軍と南將軍とでございます。』

洞庭君と使者との問答を聞いてゐた柳生は、あまり長居をしては良くなからうから歸らうと思ひ出した。

『お暇を戴きたうございます。』

洞庭君は頷付いた。

『よし、では、その方にとらする物がある。』

黄金が十枚と、別に一握位ある水晶の玉が柳生の前に來た。

『その玉を持つてをれば、水の災難を脱れることが出來る。』

羽蓋や乘輿を持つた者を先にして、澤山の人が水の上に現れた。洞庭君はそれを見ると、腰をあげて、その方へと歩いて行つた。傍にゐた者は男も女もその後から付いて行つた。洞庭君の體は乘輿の中に見えた。と、煙が消えるやうに人も乘物も消えてしまつた。

柳生は呆然としてゐた。船は靜かな水の上に浮いてゐた。客や船頭が船の底から這ひ出して來た。柳生はやつと自分に返つた。十枚の黄金と水晶の玉とは、依然としてその手の中にあつた。

船頭達はそのまま船を北に向けた。激しい風が向ふから吹い

て來た。靑鼠の色をした氣味惡い雲が空に飛ぶのが見えた。水の上は一面に波立つて來た。その四邊に浮いてゐた船が風のために漂はされはじめた。船頭達は皆あはてふためいた。鐵錨のやうな物が船の向ふに浮んだ。

『毛將軍が出た。』

『毛將軍だ。』

客も船頭も恐れて船の上につつ伏した。

一本の木がまた水の中から出た。

『南將軍だ。』

『南將軍。』

大きな山のやうな波が起つて來て、それが空を撫でるやうに見えた。

四邊に見えてゐた船は、もう一艘も見えなくなつた。

柳生は水晶の玉を握り締めてゐた。

柳生は武昌へ行つてゐた。その時ある人の話に、崔と云ふ婆さんがゐて、若い綺麗な娘を持つてゐるが、千金を出さうと云ふ者があつても娘をやらうとは云はない。が、その婆さんは、一つの水晶の玉を持つてゐて、これと同じ玉を持つてゐる者があるなら、娘をやらうと云つてゐるといふことを聞いた。柳生は幸に彼の水晶の玉を持つてゐた。彼はついすると娘が貰えるかも判らないと云ふ好奇心が起つたので、ある日、その婆さんを尋ねて行つた。

崔の老婆は柳生を室へあげてから娘を呼んだ。十五六の可愛らしい小娘が出て來た。柳生は一目見て、魂の戰慄を感じた。女はちよとお辭儀してからひつ込んで行つた。

『私は水晶の玉のことを聞いてまいりましたが、』

柳生は懷に入れてゐた玉を出した。

『さうでございますか、それでは見せて戴きませう、』

老婆はそれを受け取つて、掌に乘せてぢつと見た後に、自分の懷からも一つの玉を出して、それを並べて置いた。形も色も寸分違はない一對の物であつた。老婆は嬉んだ。

『これだ、これだ、この玉だ。この玉をお持ちなら、娘を差上げませう、あんたは何所の方ですか。』

私は襄陽の者です。』

柳生は自分の身分から宿屋の名、乘つて來てゐる船のことまでも話した。

『それでは、日を選んで娘を差し上げます。それまで、約束の印に、この玉を私にあづけて下さい。』

柳生は騙されて玉を取られはしないかと云ふ懸念が起つた。

柳生は躊躇した。

『あんたは氣が小さいですね、こんな玉位騙しはしませんよ。』

老婆は笑ひ出した、柳生は仕方なく玉をそのまゝにして出た。出口には自分が雇ふて來た籠が待つてゐた。柳生はその籠へ乘つて歸りかけたが、玉のことが不安でたまらない。娘を囮にして、玉を騙取する者であつたら、馬鹿を見ねばならないと思つた。彼は籠を後へもどした。籠はまた椎家の門口へ行つた。

柳生は籠からおりて入口へ行つた。戸が締つてひつそりしてゐた。

『もし、もし。』

柳生は戸をこつこつと叩いたが、返事もなければ人の出て來さうな氣配もない。で今度は力を入れて戸を押して見た。戸は直ぐ開いた。柳生は中へつかつかと這入つた。室の中には誰もゐなかつた。娘が引込んで行つた室の扉が見えてゐた。柳生はその扉を開けて見た。其所にも人の影がなかつた。柳生はあはてて外へ出て來た。右隣の門口に一人の男が立つてゐた。柳生はその前へと行つた。

『ちよとお訪ね致しますが、この隣の者は、今何處かへ出かけたでせうか。』

『お隣つて、其所には誰もゐないですよ。』

柳生は驚いてその左隣の家へと行つた。戸を敲くと女の聲で返事をした。

『この隣の者は、何所へ出かけて行つたでせうか。』

『隣つて、そのお隣は、空家ですよ、誰も居りませんよ。』

夕陽がその屋根を照してゐた。柳生は詐僞漢の手にかかつて玉を奪はれたものだと思つた。彼は仕方なしに籠へ乘つて宿の方へと歸つて來た。向ふから一挺の籠が來た。すれ違ひさうになると、向ふから來た籠の窓の垂れがあがつた。

『柳さん、遲いぢやありませんか、』

柳生は窓の垂れを捲いた。椎の老婆が顏を出してゐた。

『何所へ行つてました。』

『玉をあづかつてると、あんたが安心が出來まいと思ひ出しましたから、玉を返さうと思ひましたが、宿屋がはつきり判りませんから、ついでに娘をあげやうと思ひまして、あんたの船が判つてをりましたから娘を連れてつて、船へ置いてきました。早く行つてやつて下さい。』

柳生の籠は船のある方へとあはただしく行つた。柳生は船の中へ急いではいつた。

椎家の娘が女中を連れて坐つてゐた。娘は笑つて柳生を迎へた。その娘の容子が如何にも打ち解けた風であるので、柳生は不

審に思つた。その柳生の眼に靑い裓が見えた。それにはいつかの齒の跡があつた。

『貴女は織成さんぢやないか、』

女は口に手をやつて笑ひ聲を出した。

『織成さんだらう、本當のことを云つて下さい、』

柳生は、居住ひをなほした。

『織成でございます、神樣があなたの文章に感心なすつて、私をあなたに下されることになりましたが、私は王妃から可愛がられて居りますから、王妃に相談をして、王妃の命で參りました。』

柳生は手を洗ひ、香を燒いて、洞庭湖の神をまつり、織成を連れて故鄕へと歸つた。

柳生はまた武昌へと來ることが出來た。織成も一緒に行つて洞庭を渡りたいと云つた。で、一所に船に乘せた。

柳生の船は洞庭湖の中程に來た。柳生と並んでゐた織成は、頭にさした釵を拔いて水の中へ投げた。と、一艘の小舟が水の中から浮いて出た。織成はその小舟の中へ飛び乘つた。織成が乘ると小舟は鳥の飛ぶやうに何所かへ行つてしまつた。

柳生はあつけに取られてゐた。檣のある大きな船が向ふの方からやつて來た。傍へ來ると船の窓が開いた。それと一所に綺麗な一羽の鳥が柳生の船へ飛んで來た。それは織成であつた。船の窓の中から、金や織物やその他いろ〳〵な珍らしい物が飛んで來て、柳生と織成との前へ積みあげられた。

その金帛珍物は皆王妃からの賜物であつた。柳生と織成とはそれをはじめにして、每年一二回洞庭湖へやつて來たが、來る度に王妃からの賜物があつて、その家は年々に富んで行つた。

（聊齋志異）

虎妖

明の末の話である。中州に焦彌と云ふ書生があつて、友達と一緒に汴の上河へ行つたが、その内に淸明の季節となつた。その日は家々で墓參をする日であるから、若い男達は、その日を待ちかねてゐて、外へ出て來る若い女達を見て歩いた。焦生も友達と一緒に外へ出て、若い女を見ながら歩いてゐたが、人家はづれの廣場に人だかりがしてゐるので、何事だらうと思つて行つて見ると、一匹の虎を連れた興行師がゐて、檻の中で藝をさしてゐた。

それは斑紋のあざやかなたくましい虎であつたが、片方の眼が小さく眇になつてゐた。年老つた興行師の一人は、禿げた

を虎の口元へ持つて行つて、甜らしたり、鬚をひつ張つて見たり、虎の背の下へもぐつて行つて、背腹の間から首を出して見たり、さうかと思ふと、脊の上に飛び乘つて、首につけてある鎖を手綱がはりに持つて馬を走らすやうに、柵の中を走らした。その自由自在な、犬の子をあつかふやうな興行師のはれ術を見て、見物人は感歎の聲を立てながら錢を投げた。

曇り日の陰鬱な日であつた。焦生も友達と肩を並べて、それを見てゐたが、見てゐる中に大きな雨が降つて來た。見物人は雨に驚いて逃げ出した。興行師は傍に置いてあつた大きな木の箱を持つて來て、虎をその中へ追ひ込んでしまつた。

焦生と友達とは雨にびしよ濡れになつて宿へ歸つた。二人はその晩いつものやうに酒を飲みながら種々の話をはじめた。虎の話が出ると酒に眼元を染めてゐた焦生が慨然として云つた。

『あんな猛獸でもああなつては仕方がないな、英雄豪傑の運命も皆あんなものさ。』

これを聞く友達が笑ひながら云つた。

『そんな同情があるなら、買ひ取つて逃してやつたらどうだ、』

『無論買つてくれるなら、買つて逃してやるよ、』

酒の後で二人は榻を並べて寢た。焦生は直く眠られないので壁の虎のことを考へてゐた。と、寢室の扉を荒々しく開けて、赤い冠をつけ、白い着物を着た老人が這入つて來た。老人は焦生を見て長揖した。焦生は老人の顏に注意した。片方の眼が眇になつてゐる老人であつた。

『私の災難を救うて下さい。私は仙界に呼ばれて居るものでございます。あんたが私を救ふて下されて、山の中へ歸して下さるなら、あんたは美しい奥さんが出來て、災難を脱れることが出來ます。』

焦生にはその老人が何者であるかと云ふことが判つた。

『あの興行師が、あなたを手放すでせうか、』

『明日は手放す機會をこしらえます、來て買ひ取つて下さい。』

『好いとも、買ひ取つてあげよう。』

翌日焦生は一人で虎の興行所へ行つた。もう澤山な見物人が集つて、開場を告げる鉦が鳴つてゐた。焦生が柵の傍へ行つた時には昨日の興行師が虎に乘つて柵の中を走らしてゐた。

やがて興行師は、柵の眞中頃へ行つて虎からおりて、鬚をひつぱり出した。焦生は不思議な老人の云つた機會とはどんなことであらうかと考へてゐた。興行師が鬚をひつ張ることを止めると、その禿頭を虎の口へと持つて行つた。と、見る間に、虎の吟聲が聞えて、老人の顏に眞赤な血がかかつた。見物人は驚きの聲をあげて柵を放れて逃げた。

柵の中では頭をびしやびしやに嚙み潰された老人の死骸が横はつて、刀を持つた二人の若い男が虎に迫つてゐた。焦生はこれを見ると、逃げまどふ見物人の間を潜つて、柵の方へ行つて、柵の上にかきあがつた。

『おい、その虎をどうする。』

一人の若い男が振り返つた。

『この畜生、爺を嚙み殺したから、殺す所だ。』

『さうか、それは氣の毒だが、お父さんを殺された上に、虎を殺したら、大損ぢやないか、それよりか、俺に賣れ、その賣つた金でお父さんの弔ひをしたらどうだ。』

虎はもう眼をつむるやうにして二人の前に立つてゐた。焦生に言葉をかけた男は、傍に居るも一人の男の所へ行つて、話をはじめた。焦生は二人の話の結果を待つてゐた。

二人の話はしばらく續いた。そして、話のきまりがついたと見えて、はじめの男がひつ返して來た。

『どうする、賣つてくれるか。』

『錢十萬なら、賣りませう。』

『よし、買つた。錢を渡すから、誰か一人、一緒に來てくれ。』

『私が參ります。』

焦生はその男を連れて、宿へ歸り、十萬錢の金を渡して、興業師と一緒に再び虎の所へひつ返した。

『それでは、この虎を放してくれ。』

『ここへ放すと、またどんなことになるかも判りません、あんたに賣つたから、あんたが山の中へ連れてつて放して下さい。』

虎は柵の隅の方に寢てゐた。焦生は柵の中へ這入つて行つて、鎖を持つてひつ張つた。虎は飼ひ犬のやうにのつそりと體を起した。

焦生はその虎を連れて山の方へと行つた。そして、溪川の縁に沿ふて暫く登つて行つて、鎖を解いた。と、烈しい風が起つて木の枝が鳴り、小石が飛んだ。焦生は驚いて風に吹き倒されまいとした。虎はその隙に何所へか行つてしまつた。

焦生はその秋試驗にと出かけて行つた。彼は馬に乘り、一人の下男を連れてゐた。道は燕趙の間の山間にかかつてゐたが、ある日、宿を取り損つて、行つてゐる内に岩の聳え立つた谷の間へ這入つてしまつた。もう眞黑に暮れてゐて、あはただしさうに雲の飛んでゐた空から覗いてゐる二つ三つの星が、傍の岩角をほつかりと見せてゐるばかりで、すこしの明りもないので前へも後へも行けなくなつた。

焦生と下男とは途方に暮れてしまつた。二人は仕方なしに、

何所かそのあたりで野宿に好い場所を見付けて寝ることにした。焦生は馬からおりて、野宿によい場所を見付けるつもりで、先に立つて、そろそろと歩き出した。短い雜木の林が來た。小さな道はその中へと行つてゐた。林の木は風に動いてゐた。焦生はその中へと行つた。其處には小さな溪川が冷たい音を立てて流れてゐ。た林の木に覆はれた大きな岩があつた。焦生は其所の風陰を野宿の場所にしやうと思つた。彼は足元に注意しながら岩のはなを廻つて行つた。眼の前に火の光が見えて來た。その火の焰のはしに家の軒が見えた。

『家がある、おお、家がある。』

焦生が先に立つて、その家の門口へと行つた。脊の高い大きな老人が顏を出した。老人は焦生を客室へあげ、下男にも別に一室を與へた。

老人は聲の荒い眇の男であつた。焦生は老人に自分の素性を話してゐた。痩せてはゐるが矢張り老人のやうに脊の高い老婆が、茶を持つて來た。老人は老婆の方をちよと見た。

『これが私の家内ですよ。』

焦生は老婆に向つて挨拶をして、泊めて貰つた禮を云つた。老婆と焦生とがまだ挨拶をしてゐる時であつた。老人は後の方にあつた戸張の方を見返つて荒い聲を出した。

『珊瑚、お客さんに御挨拶に來るが好いよ。』

焦生が元の座に戻つた所で、十五六の綺麗な女の子が出て來た。老人は女の子の肩へ手をかけた。

『これが私の娘でございます、どうかお見知りおきを願ひます。』

老人はそれから老婆に御馳走の支度をさした。老婆は室を出たり入つたりして、酒や肴を持つて來た。

支度が出來ると老人はそれを焦生に進めた。女の子は母の傍に坐つてゐた。若い焦生は女の子の方に心をやつてゐた。

『お客さんは、疲勞れてお出でだらうから、床を取つてあげるが好い。』

老人が女の子の顏を見ると、女の子はにつと笑ひながら、その室の片方に付いた寢室へと行つて、床をとりはじめた。

老人と老婆とは、いつの間にか室を出て行つて、焦生一人うつとりとなつてゐた。床を取つてしまつた女の子は、そつと傍へ寄つて來て、焦生の縋つてゐる卓を不意にがたがたと動かした。焦生はびつくりして眼を開けた。

『もう、お休みなさいよ。』

『有難う、あんたは幾つ。』

『十六よ。』

『もう、お婿さんがきまつておりますか、』
女の子は怒るやうな口元をして笑つて見せた。焦生は紅い女の袖を[illegible]まふとした。女の子は後に飛びのいた。焦生は仕方なしに笑つて、寝室の方へと歩いた。
焦生は女の子のことを考へてゐる内に眠つてしまつた。そして、咽喉がほてつて苦しくなつたので眼を覺した。
『茶を持つて來い、茶を持つて來い。』
焦生はいつも下男を呼びつける言葉を習慣的に出して、後でしまつたと思つた。女の子が茶を持つて直ぐやつて來た。
『いや、どうもすみません、下男を呼びつけてゐるもんだからついうつかり云ひました。』
『好いのよ、お茶を召しあがるだらうと思つて、拵えてあつたんですよ。』
女の子はさう云ひ云ひ枕頭へ茶椀を置いた。焦生はその手をつと握つた。
『いやよ。』
女の子は逃げやうともせずに口元で笑つてゐた。
老婆の聲が次の室でした。女の子は焦生の手を振り放して出て行つた。
焦生はきまりが悪くなつたので、茶を飲むことも忘れて後悔してゐた。その内に夜が明けて來た。焦生は彼方此方に寝がへりしてゐた。
『眠つてるの、今日は雪よ』
焦生は眼を開けた。女の子が傍へ來て笑つてゐた。
『貴女はひどい方ね。』
焦生はもう大膽になつてゐた。彼は直ぐ女の子の手を握つた。
『何がひどひの。』
『ひどいのよ。』
二人は顔を見合して笑つてゐた。女の子は何か云はうとしかけたが、耳を赤くしただけで何も云はなかつた。
『貴女のお婿さんは、どうなつて居ります。』
『あなたは奥さんを貰ふの。』
『貰ひますとも。』
老人が大きな聲をしながら這入つて來た。女の子は急いで出て行つた。焦生は起きた。
『大雪ですよ。』
焦生は窓の所へ行つて戸を開けて見た。綿をひきちぎつたやうな大雪が紛々と降つて、世界が眞白になつて見えた。
『なる程大雪だ。』
『とても、二三日は出發せられませんよ、ゆつくり御逗留しな

さい。』

焦生が老人と向き合つて卓に寄りかゝると、老婆と女の子とが、御馳走を拵えて持つて來た。

焦生は老人と二人で酒を飲みながら、その御馳走に箸をつけた。

『甚だ失禮ですが、お宅のお孃さんは、何所かへ、もう、緣談がおきまりになつて居りますか。』

『まだきまつては居りません、何所か貰つてくれる方があれば、好いがと思つて居りますが、まださうした家が見付りません。』

『甚だ失禮ですが、私にくださいますまいか。』

『本當にあなたが貰つてくださるなら、喜んでさしあげます。』

焦生はその夜珊瑚と結婚したが、翌日になると珊瑚を馬に乘せ、自分達二人は徒歩で出發した。

やがて目ざす都へ行つて、其所で家を借りて落ちつき、進士の試驗を受けてみると、旨く及第して、會稽の令に任ぜられた。で、珊瑚を連れて赴任したが、非常に成績があがつたので、翌年には、錢塘の太守となつた。さうなると、焦生の許へは澤山の客が來るやうになつた。客の中には焦生を利用して、私腹を肥やさうとする者もあつた。珊瑚はそんな客を家の中へ入れないやうにした。客の方では珊瑚を邪魔者にして、金を集めて窈娘と云ふ妖婦を購ふて焦生に獻上した。焦生は窈娘の愛に溺れて、珊瑚を顧なくなると共に、政事も怠り出した。

窈娘は焦生を自分の者にしたものの、珊瑚が傍にゐては邪魔になるので、それをのけやうとした。其所で窈娘は、飲物の中へ毒を入れて待つてゐた。何も知らない焦生は、窈娘の室へ來て見ると、旨さうな酥酪があるので、一口飲まうとした。窈娘は急いでその手をおさへた。

『少し待つてください、どうも少し怪しいことがありますから。』

窈娘はその飲物を取つて、庭先に遊んでゐる犬の前へ捨てた。犬は喜んでそれをぺろぺろと嘗めはじめたが、皆まで嘗めない内に、唸聲を立てながら、ひつくり返つて死んでしまつた。

『これは、奥さんのやつたことですよ。』

焦生は珊瑚を惡魔のやうに思ひ出したが、直ぐ放逐する譯にも行かなかつた。その内に、焦生の惡政が中央へ知れて、今にも罪を得さうになつて來た。焦生は腹心の客と相談して、權力のある中央の大官に賄賂を入れてその罪を遁れやうとした。そこで、莫大の金を出して、玉鼎と冬貂とを買ひ入れたが、買つた晩に鼎が破れ、裘が燒けてしまつた。窈娘はそれを珊瑚の仕業だと云つた。焦生は狂人のやうになつて、杖で珊瑚を打ち

叩いた後に、外へ突き出してしまつた。

賄賂が行かなかつたために、焦生は罪を得て、雲南軍の卒伍の中へ追へやられることになつた。三人の監者が焦生を送つて、鳳凰廳下の萬山と云ふ山の中まで行つた。もう長いこと道を歩いたことのない焦生は、それがために兩足が腫れあがつて動けなくなつた。監者達はびしびしと叩いて歩かせやうとしたが、とても歩けさうにもない。で、いつそ殺してしまつて、雲南へ行く勞を逃れやうとした。

監者の一人は刀を拔いて、焦生の首に持つて行つた。一匹の虎が何所からともなく出て來て、その監者をはじめ三人の者を食ひ殺した。死人のやうになつて意識を失うてゐた焦生は、耳許で女の聲がするので恐る恐る眼を開けて見た。其所には珊珊が立つてゐた。

『私は、本當は人間ではありません、あなたにお父さんが助けられましたから、その御恩返しに、あなたのお傍にゐて、いろいろ災難を防いであげました。』

世の中に身の置き所の無くなつた焦生は、珊珊に連れられてその家へと行つた。それは見覺のある彼の家であつた。小さな乳呑兒が寢臺の上に寢てゐた。

『これはあなたの子供ですよ。』

焦生夫婦は、後に上昇したのであつた。『夜雨秋燈錄』

畫舫

沈は獨身者の老軍人であつた。彼は嚴格で潔癖で、若い時から婦女を近付けたこともなかつた。其所の珠江は、脂粉の鄉で、水の上には晝も夜も畫舫が浮んで、船毎に數人の若い綺麗な女がゐて、客を待つてゐた。沈翁はそれを無賴の樓家のやうに思ふて、それを見ることさへ潔としなかつた。それがために、同僚からは憚られ、後進からは畏れられてゐた。

沈翁は素行に嚴格なばかりでなく、經濟にも嚴格で、蓄財に心を用ゐたから、何時の間にか數萬の金が出來た。彼は宜興の生れであつた。そこで彼は故鄉の宜興へ歸つて、良田を買ひ、邸宅を新築してから、老後を安らかに送らうと思ひ出した。

彼は財産を取り纒め、不用な物は賣り拂つて、船を雇ふて出發することにしたが、船と云へば畫舫を聯想して不安でたまらない。で、荷物を運んだ後に、念のためにその船へ檢査に行つて見たが、艙は備も何もないあつさりとした船であつた。

沈翁はすつかり安心して、同僚や知己の者に見送られて船に乗つた。風の靜な日であつた。船は天鵞絨を敷いたやうな、水の上をすべつて行つた。沈翁は船の窓に凭れて、見送人の方を見てゐたが、船が間もなくそのあたりに出つ張つてゐた土手に沿うて折れ曲つて、もう見えなくなつてしまつたので、窓から離れやうとしてゐた。と、直ぐ艫の船艙の小窓が開いて、若い女が半身を見せ、白い兩手の先を水に浸して洗つた。その拍子に、女の腕にかけてゐた腕飾がちりりと鳴つた。黒いつやつやした髪と白い襟首とに艶めかしさがあつた。沈翁はそれを見ると怒がこみあげて來た。彼は不屆な女を川の中へ投り込んでしまひたいやうに思つた。

『おおい、おい、』

彼は激しい聲で次の室に居る下男を呼んだ。ところで、下男の返事はなかつた。直ぐ傍の櫓の上に船頭がゐた。

『おい、船頭、』

船頭はびつくりしたやうな顏をして下を覗いた。

『この船に、女が乗つてゐるやうだが、あれは、どうした者だ、』

船頭は顏色を變へてしまつた。そして、おづおづと下へおりて來た。沈翁は右の手に拳をこしらえてゐた。

艫の船艙へ通じた戸張を明けて、若い女がやつて來た。女は船板の上につくばつた。

『どうかお許しくださいまし、私が船頭さんに無理にお頼みして、この船に乗つたものでございます。』

『その方は何者だ、何のためにこの船へ乘つた、』

『私は宜興の者で、小玉と申す者でございますが、小さい時に、お父さんに從いて、この粤に參りまして、居る内に、悪い男に緣付いて、持つて行つた道具まで、すつかり賭博のために無くせられ、その上、男に死なれまして、またお父さんの所へ歸つて居る内、お父さんとお母さんとに、一度に亡くなられまして、たよる所もなくなりましたから、故郷の姨の所へ歸らう思ひましたが、船を雇ふ金はありませんし、それかと云つて、うつかりした人に乘せて行つて貰ひましては、どんな眼に會ふかも判らないと思ひまして、それも出來ずに困つてをりますと、旦那樣が宜興へお歸りになると云ふことを聞きましたから、船頭さんを知つてをりましたから、悪いとは知りながら、隱れて乘つて居りました。どうかお許しを願ひます。』

女はもう涙聲になつてゐた。沈翁の怒も薄らいでゐた。

『では、仕方がない、乘つて行くが好い。が、艫から出ることはならんよ。』

『有難うございます、決してお言葉は反きません。』
『では、直ぐ行くが好い。』
女は立つて行つた。女の後に立つてゐた船頭は、それと一緒に腰をかがめた。
『まことに有難うございます、あまり氣の毒な者でございますから、ついこんな事を致しました。』
『あの女の云つたことは、本當か、』
『決して噓ではありません、あの通りでございます。』
女のお經を讀む聲が微かに聞えて來た。
間もなく食事の時が來て、下男と船頭とが食物を運んで來た。沈翁はとても船の中の料理であるから、食べるものはなからうと思つてゐた。それでも箸を取つてみると、非常に旨かつた。氣を付けて見ると、料理の具合も手際よく出來てゐた。
『この料理は、誰がしたんだ。』
『お口にあひませうか、』と船頭が云つた。
『お前か、旨いな。』
『私ではありません、彼の女の子がこしらえました。』
『さうか、上手だな。』
『旦那様のお口にあひますなら、これからも、あれにさせませう。』
『さうか。』
船の中にはじめての夜が明けた。沈翁は空腹で仕方がないので、下男を起して食物をこしらえさせやうと思つた。
『おい、おい、まだ起きないのか。』
下男は返事をしなかつた。沈翁はもう一度下男を呼ばうと思つて、聲を出しかけた。と、船頭が皿に入れた食物を持つて來た
『ああ、もう出來たのか。』
『あの女の子が陸へあがつて、こんな物を買つて來ました。』
それは出來たての麵餅であつた。
寒い朝が來た。沈翁が起きあがつたところで、何か水の中へ落ち込んだやうな大きな水音がした。と、棚の上で船頭の笑ふ聲がした。
『小玉さんがおつこちた、あげてやれ、あげてやれ。』
沈翁はびつくりして窓の戸を開けた。女が水の中から顏ばかり出してもがいてゐる傍に、買つて來た物であらう、餅や菓子などが下手に浮いてゐた。
三つ四つの船頭の嚴丈の手が水の中へ出て、女の肩のあたりにかかつた。藍色の着物を着たぐしよ濡れになつた女の體は、

續いて船の上にあがつた。

『寒いだらう、早く着物を脫ぐが好い、橋板を踏みそこなつたものだね。』

『何所も打ちはしなかつたかな、早く脫ぐが好い、寒いだらう。』

『困つたな、小玉さんは、着たまんまで、代りの着物がないから。』

沈翁は窓から艫の方を延び上がるやうに見て居た。

『俺の所に、何か着る物がある、此所へ連れて來い。』

女の傍に立つてゐた二三人の船頭は、沈翁の方をちよと振り返つて見た後に、何か自分達で小聲で云ひ出した。沈翁は自分へ遠慮して何か相談してゐるだらうと思つた。

『好いよ、遠慮はいらない、連れておいで、可愛想だ。』

船頭達は手をかして上着を脫がし、下男のゐる室の前を通つて女を連れて來た。沈翁は行李の中から派手な自分の着替を出して待つてゐた。

『これを着せるが好いだらう。』

船頭の一人は沈翁の手からそれを受け取つて、室の隅で女に着替をさした。白い綺麗な肌の肉が沈翁の眼についた。

『どうして水へ落ちたんだ。』

『旦那にあげるものを買ひに行つて、橋板を踏はづしたんですよ。』

女は着替をしてしまふと、恥しさうに沈翁に拜をしてから次の室へと行つた。沈翁はなんだか殘り惜しいやうな氣がした。

鼠が荒れて眠れない夜があつた。下男が灯をつけて起きて來た。鼠は次の室で盛に齒の音をさしてゐた。沈翁は下男と一緒に、艫の船艙へ行く戸張を捲つて、次の室へと行つた。女は綺麗な顏を斜に見せて眠つてゐた。沈翁は女が起きてゐるなら聲をかけたいと思つたが、眠つてゐて覺める風がないので、もの足りなさを感じた。

ある晩、風が出て船が搖れ出した。風につれて烈しい雨が降つて來た。雨は寢床の中へも落ちるやうになつた。沈翁は寢床を雨の漏らない所へ移さうと思つて、大聲で下男を呼んだが、眠つてゐるのか、それとも横着をきめこんでゐるのか、さつぱり返事をしなかつた。

女が片手に灯を持ち、片手に雜巾代りの着物を持つて這入つて來た。女は沈翁の寢床の上の雨漏を見付けると、沈翁の横になつてゐるものも眼に入らな風で、いきなり沈翁の體をまたいで、雨漏の所へ手にしてゐた着物を當てた。

その内に雨が止んで雨漏がしなくなつた。沈翁は歡な氣持になつてゐた。

『もう結構、結構、それで好いから、此所へお坐りよ。』

沈翁はその肩に自分の手をかけたいやうに思つたが、それは出來なかつた。

『では、お寢みなさいまし。』

女はそのまゝ出て行つた。沈翁は淋しかつた。その夜遲くから、沈翁は腸に故障が起つて、翌日になつても起きられなかつた。腸の苦しみは夜に入つても收まらなかつた。なまけ者の下男は、主人の病氣などはおかまひなしに、宵から寢てしまつた。

いつの間にか沈翁の枕元へ、彼の女が坐つて、藥を煮てゐた。四五日して沈翁の病氣は癒つてしまつた。それでも女は沈翁の枕元に坐つてゐた。それは非常に寒い晩であつた。沈翁は綺麗な女の顏をじつと見てゐた。

『寒いだらう、わしは老人だ、一所に這入つたらどうだ。』

女は何も言はずに老人の顏を見た。

沈翁と女とは夫婦になつてしまつた。沈翁は荷物の鍵を女に渡して、生れてはじめての幸福に浸つてゐた。そして氣がついて見ると、下男がゐなくなつてゐた。沈翁は見向きもしなかつた。

ある日、銀貨を入れてある函を開けた女がびつくりして叫んだ。ぎつしり詰めてあつた銀貨が影も形も無くなつてゐたのであつた。それに氣が付いて、着物を入れてあつた函を開けて見た。その函も皆空になつてゐた。沈翁はそれでもあまり驚かなかつた。

間もなく船が目的地へ着いたと云つて、船頭共の喜ぶ聲が聞えた。沈翁が船へ乘つてからもう八ケ月ばかりになつてゐた。沈翁は女を連れて船からあがらうとした。

『お錢も何もないのに、あがつた所で、困るではありませんか。それよりか、私の姨の家がありますから、其所へ參りませう、私が裁縫をしてなりと、御恩報じを致します。』

沈翁は始めて夢から覺めたやうになつた。彼は仕方なしに女に從いて船からあがつた。

女は直ぐ近くにある一軒の家へと行つた。其所は水に臨んだ綺麗な家で、數人の若い女がゐた。沈翁はその家の一室へ這入つた。女は時々傍へやつて來たが、夜になると何所へか行つてしまつた。

その家はしよつちう男の客が出入して、其所にゐる女を相手にして酒を飲んだ。沈翁は不審に思つたが、別に聞かうと

なかつた。

二三日して沈翁は其所の入口に立つてゐた。三人ばかりの男がやつて來た。それは皆母の知合の男であつた。

『やあ、何しに此所へ來たんです。』

向ふの方でも驚いた顔をした。

『私達より、あんたは、もう、歸つたんですか。』

『いや、私は、二三日前に、やつと船からあがつたばかりだ。』

『船からあがつたつて、それでは、宜興へは歸らなかつたんですか。』

『此所が宜興ですよ。』

『母ですよ、あんたはどうかしてゐますね。』

沈翁は母の名妓の小玉に、呼ばれてゐたのであつた。『夜雨秋燈錄』

――中央公論――

清淨境

三峰は秩父の仙鄕である。秩父は昔の秩父國荒川の谷間に掌のやうな平地を見るだけで、他は連山が波濤の如く重疊した山上國である。今は、埼玉縣秩父郡、北は蕪菁川の谷を隔てて荒船、妙義の諸山に對し、西は八ケ嶽、茅ケ嶽に接し、南は桂、笛吹兩川の谷に堺せられて、その間に〇り立つた雲採、白岩、妙法の三峰の內で、妙法山の支脈となつたのが三峰山である。秩父町―元の大宮町―から六里　秩父鐵道終點の影森から五里、その內で三十丁が頂上への登り道になつてゐる。麓へまで郡道が通じて、その二里手前の强石まで馬車も自動車もあり、人力車なら山の麓に架した登龍橋の袂まで行くことが出來る。

本年の六月七日、私はその三峰山へと行つた。影森で汽車ををり、武甲山の麓になつた橋立の鍾乳洞を見て、荒川の谷を奥へ奥へと步いた。平地には、桑の綠と、それに狹まつて麥が黄に熟してゐた。暑い日で、道には白い土埃が立つてゐた。古い紀行文で『蜚は街道の埃にまぎれ』と書いた文句を讀んだことがある。私はそれを思ひ出して、『こんな句があるんですよ、』と云つて、一緒に步いてゐる先輩に話しかけた。その先輩も、もう一人の連れの男も、皆旅行服を着、ゲートルを付け、脚には ズックの旅行袋を見せてゐたが、私一人は、ネルの上に袷羽織を着たのを尻端折り、脚絆をつけ、洋傘を杖にしてゐた。その私の脚絆にも、土埃が眞白になつてゐた。

はじめ二里ばかりの間は、道が荒川の本流と離れてゐたが、荒川橋を渡つてから本流に沿ふやうになつた。丁度　暦の五月の二日で、人家のある所には、ところどころ鯉幟が立ててあつた。

鯉幟は谷風に斜にあがつてゐた。木炭や板を積んだ車力、客を一つぱい積んだ乘合馬車、自動車も一二臺すれ違つた。荒川橋の下では、筏師がばらばらに流した材木の岩にかかるのを、其所此所で鳶口に引つかけて突き流してゐた。突きやられた材木は、流の中へ出て、上から流れて來た朋輩と一緒になつて、手を組みあふやうにして下へ下へと流れて行つた。耳を澄ますと河鹿の聲が聞えた。振り返ると武甲山の尖が見える。

贄川は道の兩側に人家の並んだ小驛であつた。部落の入口に三峰神社の一の鳥居があつて、三時頃の夕陽がかかつてゐた。兩岩に聳えた青い山が狹まつて來て、溪川の流れは目の下に見えて來た。

贄川から强石までは一里位あつた。强石はその附近の都會であつた。一軒の小さな宿屋の土間に、女中とも何ともつかない髮の毛の薄い女が二人立つて、旅人をぢつと見てゐるのを見た。其所には水力電氣の發電所があつて、山の上から來た二つの黑い大きな鐵管が、蛇のやうに溪川の岸へと行つてゐた。その水電の坑夫であらう、五六人の者が道線に泥を入れてゐた。崖になつた方の椒の上に、眼の碧い日本人らしくない洋服の男が腰をかけて、その仕事をぢつと見てゐた。

老樹に黑く蔽はれた三峰の山が上流に見えて、その上に夕陽が落ちかけてゐた。石の隧道が來て、それを拔けると、出口に溪川の崖の上につき出した小さな茶店があつた。私達は、その茶店に這入つた。前岸の山へは手が屆きさうになつてゐた。四十位の氣の好いお神さんがゐた。お神さんはだんべ言葉をよく使つた。秩父莊司重忠も「鎌倉さ行くだんべ」などと云つたらうと思ふと、おかしくなつて來た。その茶店は、元その山の上の街道にあつたが、最近新道が出來て、三峰詣の客が街道を通らなくなつたので、下へ移つて來たばかりのところであつた。その棧道にも下の棧道の三倍位ある長い棧道があると云つた。

荒川の本流になつた大洞川に架けた登龍橋の朱塗の欄干が見えた。橋の袂の右側の宿屋に、五六人の若い旅人が腰をかけてゐて、それが肌拔になつて白いシャツを見せてゐるのを見い見い橋を渡つた。二の鳥居と云ふのが其所にあつた。鳥居の傍にも一軒の茶店があつた。山上まで、五十二丁と云ふ石標が立つてゐたが、それは實際の里程ではなかつた。私達は暮れない内にと路を急いだ。

はじめ四五丁の間は溪川に沿ふてあがり、それからきつい坂路を上へ上へと登つた。杉、檜、樅、などの巨木が森々と茂つてゐた。老人と十二三の少年とが、後から來るのを見た。老人は苦しさうに足を動かしてゐた。人のゐない茶店があつて、そ

の前に腰掛が二つあつた。私達は其所で一服した。老人と少年とがやつて來た。きいきいと鳴く鳥の聲が頭の上になつた高い木の梢で聞えた。落ちたと思つた門が木の間から見えた。

小さな瀧が來て、瀧の落口に橋が架つてゐた。淸淨瀧と云ふ名が石に刻んであつた。〃の向ふに一軒の茶店があつて、老婆が一人ゐた。私達は其所を素通りにした。新しい鳥居が其所にあつた。二十一丁目の石標が見えてゐた。

時鳥の聲が二聲ばかり聞えた。東京に住んでゐる者には、時鳥の聲は珍らしかつた 私達は時鳥のことを話しながら歩いた。茶店に來て、其所から正面に妙法ヶ嶽が見あげられた。高く僂り立つた山の頂が二つに分れて、一方の峯を立てたやうな樹木の茂つたところが、三峰神社の奥の院のある所であつた。左の方に岩の尖が見えた。それは大日岩と云ふらしい。薄い霧のかかつたやうに見える眼の下の谷間で、時鳥が後から後からと鳴いた。私達の腰をかけた腰掛を置いてある崖の下は、菜園畑になつて、あぎた五月菜が瑕を見せてゐた。

日が暮れて暗くなつて來た。二階建の玄關構の家が來た。私達はその前を通りながら暗い中で筧の水音を聞いた。其所は、社掌の舍宅であると先輩が云つた。二丁ばかり行つた所で、電燈の點つた一軒の家が見えた。私達はその直ぐ先から右手に登つてゐる本道から離れて小さな坂を登つた。一丁餘りも行くと、其道は本道に繋つてゐた。

二の鳥居らしい鳥居が山の肩の所にぼんやりと見えた。道はだらだらと向ふへおりてゐた。道の右側の杜に電燈が一つ點いて大きな隨神門がその向ふに眞黑い姿をして立つてゐた。隨神門を拔けると、道が平になつた。其所は社の馬場先になつてゐて、其所を行つて 右の石段を登ると、鳥居の左右．木燈籠と水舍のある社の下の段に出るが、私達はそれを行かずに、右斜に登つて、直ぐ下の段へと出た。丈高い大きな杉の幹が燈籠の火を受けて薄赤く見えてゐた。私達は其所から數段の石段を登つて、上の段に聳えた本社の拜殿へと行つた。燈明の火が正面に立てた八咫鏡に反射して、神々しい感じを與へた。

紀念館の堂々とした建物が社の左の方に黑く聳えてゐた。二つ三つの星がその銅瓦葺の棟の上に光つてゐた。其所は下の段の正面の見付けになつてゐた。私達はその暗い建物の中へ這入つて土間を拔けた。廣い庭があつて、眞中に建てた電柱に火が點いてゐた。庭を圍んで大きな建物が四方に見えてゐた。その右の方の建物の入口には、電燈が他よりも明るく點いて、五六人の顔が見えてゐた。よく見ると、二箇所に机に縋つた者がゐて、假面のやうな物を控えてゐた。其所が社務所であつた。左

側は參籠所で、二階にも下にも小さく仕切つた室が澤山見えて二階に二所、下に一所、障子が開いて參籠人の頭が見えてゐた。社務所から折曲つたやうになつた正面の建物にも、火が明く射して人の氣配がしてゐた。其所は講堂であつた。參籠所と講堂の間は廊下で繋がつてゐて、その間を一人の男が拔けて裏庭の方へと行つてゐた。その庭の奧にも大きな屋根が見えてゐた 私達は社務所の方へと行つた。何所かで三味線の音がしてゐた。

私達は右側の机の前へと行つた。その机には書生風の若い男が坐つてゐた。

『御參詣ばかりですか、お泊りになりますか。』

私達は先達の名刺へ一緒に住所氏名を書き入れて、それを持つてゐた。私達はその名刺を出して一泊したいと云つた。

『一圓五十錢と、二圓と、三圓とありますが、どれに致します。』

私は三峰山は三十錢と五十錢と一圓の參籠料があつて、參籠人には、その山で釀造する酒をいくらでも飲ますが、三十錢と五十錢には、飯の後で出し、一圓の方には、飯の前に出すと云ふことを聞いてゐた。私はかうした仙郷でも、物貨騰貴の影響を免れることが出來ないなと思つておかしかつた。

『三圓の方に。』

と云ふと、

『それでは、お金を戴きます。』

私達が金を拂ふ傍で、一緒になつて來た老人がその書生風の男に向つて何か云ひ出すと、その男は筆を持つたなりに、左側の机の方に指をさした。

『それは彼方へ。』

老人と少年とは、そのまま左の机の方へと行つた。私達は庭を横切つて、參籠所の方へ歩いた。そして昇口へ行つて、踏んで草鞋を解てゐると、廊下傳ひに袢天を着て股引を穿いた男がやつて來た。

『草鞋と足袋を一緒にしてをきなさい。』

私達はその袢天を着た男に導かれて、二階の一間へ通つた。汗と埃にまみれた着物を脱いでゐると、小がらな商家の店員らしい男が褞袍を重ねた寢卷を持つて來た。その寢卷を着て參籠所の下にある湯に這入つて來た。高足の膳に油上げの汁や、蒟蒻や豆腐などでこしらえた精進料理の椀を並べてあつた。その膳には梨の實の切つたのも付けてあつた。寢卷を持つて來た小がらの男は、自分の前に置いた盃臺の盃を持つて、

『お祝儀を申します。』

こう云つて頭をさげ、傍の大きな燗鍋を執つて酒を移して、

味をした後に、その燗鍋を持つて來て、皆の盃へ順々に注いだ。

私達は道で買つて來た牛肉の罐詰を、給仕に來てゐる少年に開けてこさして、それを肴にした。燗鍋の酒は間もなくなくなつた。

『當節は、一人前二合と云ふことにしてあります。』

小がらな男がまた頭をさげた。私はしまつたと思つたが、口にも出せないので、飯の茶椀を持つた。正月の元日に燒きはじめて、一年中燒いてゐると云ふ味噌汁を小鍋に入れて持つて來て、それを椀に入れてくれた。

社務所の方で三味線の音がして、女の子の義太夫を語る聲が聞えて來た。

『義太夫があるんですね。』

其所では四方から集つて來る藝人には、それぞれ得意の藝を奉納さして、宿泊料を取らない上に、金まで與へてゐた。

『東京から女義太夫が來てをります、今のは連れて來てをる小供でございます。』

飯の後で、私達は廊下傳ひに社務所の方へ行つた。もう九時近くなつてゐた。若い男が机を置いてゐた室の向ふに、高い臺をこしらへて、その上に赤い綺麗な見臺をすえ、十二三に見える女の子が、口を一ツばいに開けて大聲を出してゐた。その後には幕を張つてあつた。幕には竹本駒龍と云ふ大きな文字が見えてゐた。それがその女の子の師匠さんの名であらう、女の子の義太夫に合せた三味線が、幕の内から聞えてゐた。

高座の向ふには、二十人ばかりの者が坐つてゐた。その大半は社務所にゐる事務員や、勞働者らしいものであつた。十人ばかりの男女の群が紀念館の土間を拔けてやつて來た。その人々も庭に立つて、女の子の方を見出した。

袢天を着て股引を穿いた男が腰へ提灯をさして、庭先へ出て來た。それは火の番であつた。彼は思ひ出したやうに拍子木を打ちながら、講堂と參籠所の間を拔けて行つた。

女の子の義太夫が終ると、三十位の太つた女が高座に登つた。それは自分で三味線を引いた。語りまする藝題は壺坂靈驗記。

草臥れがあつて眠い上に、空氣がばかに冷いので、一段の終を待ちかねて、皆で室へと歸つた。先輩を尊敬してゐる社掌が挨拶にやつて來た。顏の小さな穏かな中老人であつた。社掌の話で來る道にあつた二階立玄關構の家が、その住居だと云ふことが判つた。其所の二階から見下す谷間の眺望がよくて、春先には躑躅が燃え、秋は紅葉に時雨がかかるとも云つた。社掌は先輩の前へ四五枚の短冊を置いて行つた。

綿の厚い掛蒲團を二枚重ねても冷々として寒かつた。もう四時頃でもあらう、太鼓の音が耳に入つたので、頭をあげ、片手を伸して、廊下の方の障子を開けた。障子以外に戸締りもしないので庭の方が一眼に見えた。もう五六人の者が庭先を歩いてゐた。太鼓は思ひ出したやうに聞えて來た。それは朝の務めに本社で打ち鳴す太鼓の音であつた。太鼓の音は山の木立に木魂を返した。

先輩と一人の連とは、妙法ヶ嶽の奥の院を參拜して、雲採を越えて甲州の方へ行くことになつてゐた。六時頃に起きたところで、社掌が來て、先輩のために酒を出して、その相手になつてくれた。先輩は寢床で書いた和歌の短冊を社掌に渡しなどした。

背に雇ふてあつた案内者がやつて來た。先輩と連の男は身拵えをして下へおりて行つた。社掌は二人が出發しない前に見せる物があると云つて、社務所と講堂との偶になつた小座敷へつれて行つた。室の中には十二枚の古い屛風が立ててあつた。

『これは天覽に供した物ですよ。』

と、社掌が云つた。それは十二ヶ月の人事を書いた物であつた。それは浮世又兵衛の筆であつた。

畠山重忠の願文だと云ふ軸があつた。その他にも二つ三つの軸があつた。

『他にまだ澤山ありますから、御暇になるなら、後でお眼にかけます。』

社掌は私を返り見て云つた。

先輩と連の男は、講堂の縁側へ腰を掛けて草鞋を穿いた。道案内の男は、腰へ鉈をさして待つてゐた。

紀念館は新築中で、内部の雜作がまだ仕上りになつてゐなかつた。十間の右側の室では一人二人の大工が來て木に鉋をかけてゐた。社掌と私とは、出發する人を見送つて行つた。紀念館の出口には、焼き火をしてあつた。高い杉の梢の其所此所で、しんちき、りん、りん、と云ふやうな、澄んだ耳に立つ聲で鳥が鳴いてゐた。

『あれは何ですか。』

『鷽ですよ。』

と、社掌が敎へてくれた。私と社掌は、隨神門の先を右に折れて行く小路の傍まで行つて、一行と別れて歸つて來た。

講堂と參籠所との間を拔けて行つた庭の先に、大書院の玄關が見えてゐた。其所は特別な客を入れる所になつてゐた。十時頃になつて、私はその書院の北向の室に通された。其所は講堂の椽側から廊下を傳つて行けるやうになつてゐた。庭の先には

小さな門があつた。門の左右の塀は古びた黑塀であつた。廳の右側は庭になつて、二三本の梅の木が生えてゐた。その建物は左の方へ鍵の手に折れ曲つてゐた。その椽側に付いた流柵の傍で、痩せた事務員のやうな男が、小さな色のある硝子を洗つてゐた。間もなくその男は、引札のやうな物を持つて私の所へやつて來た。東京から來て此所の一間を借り、參詣人を相手に寫眞を撮る男であつた。

社掌の持つて來た短冊が机の上に置いてあつた。一人になると、私はその短冊に書く俳句を考へて見たが、氣に入つた句が出來ないので、庭におりて建物に從いて南の庭へと廻つて行つた。塀の傍に植えた小さな櫻の葉の中に、散り殘りの白い花びらが殘つてゐた。薄紅い石南花の花も見えた。格子の入つた室がとつつきにあつて、さつきの寫眞師が机へ向つて、せつせと種板の修正をやつてゐた。

『あなたの商賣は、面白い御商賣ですね、』

と、云ふと、寫眞師は薄髭を生やした顔を見せた。

『私は體が弱いし、東京では落伍者ですから、山に來るんです。此所は四月から參詣人の多い間來てゐますが、この二十日には引きあげて、東京へ歸つて、富士山が山開きになつたら、富士へ行つて、また其所で二ケ月位をります。』

私はその寫眞師に教へられて、裏門を出て北の方へと歩いた。杉の木立の間から見ると、山の下の方に五六軒の人家が見えた。木立が直ぐなくなつて草山になつた。右の上になつた山の脊の方を見ると、白ペンキ塗の森林測候所があつた。風信機と風力計とが屋根の上にくるくる廻いてゐた。時鳥の聲が續けて聞えた。

道が二つに分れて來た。右に登つて行けば測候所で、左の道は低い小松の林の中に消えてゐた。此所には瓦屋根の小さな建物があつた。多分測候所員の住宅であらう、私は右の道を登つて行つた。此所には特設電話があつて、公衆の便利を計つてゐた。

脊の高い痩せた男と、十七八に見える少年とが、硝子戸の中に頭を見せてゐた。三峰の森林は眼の下になつて、その向ふに妙法ケ嶽が峙つてゐた。左の方には荒川の谷が展けて、昨日通つて來た強石の手前の道が、黄ろく手に取るやうに見えた。私は山の名が知りたいので、少年に聲をかけた。少年は窓から首を出して、妙法の向ふから西寄に聳えた、大きな山に指をさして、

『あれが、白岩で、その南の方に見えるのが、雲採ですよ、』

雲採は白岩から遠く南に當つて、天を支へて見えた。これに

は霧雲がかかつてゐた。大洞川はその手前の谷間を流れて、三峰の後を廻つてゐた。西の方になつた直ぐ谷の向ふの山は、白石山だと少年が云つた。脊の高い男が、測候所の裏手へ出て、其所な芝生の上に設けてある硝子張の箱のやうな物をいじり出した。それが其所の所長であつた。所長は私に妙法ケ嶽の東に見える大きな山脈を、熊倉たらうと云つて教へてくれた。熊倉の東の肩の所に尖つた遠山が覗いてゐた。それは武甲山であつた。その左手にも澤山の山脈が見えてゐたが、皆霧にぼかされて、輪廓が判らなかつた。

足許には薊の花が淋しさうに咲いてゐた。私はとうとう測候所の中へあがり込んだ。少年の汲んでくれた茶を啜つて、十二時頃まで話して歸つた。宵に給仕に來てゐた少年が、待ちかねてゐたと云ふやうに飯を持つて來た。

飯の後でまた俳句を考へて見たが、どうも纏らないので、また庭におり、門口から右手の崖へと通じた道を登つて行つた。直ぐ崖の上の段には、四棟か五棟かの土藏が建ち並んでゐた。その中には、寶藏、酒藏、米藏、味噌藏など、全山に要する物資が其所に收めてあつた。とつつきの土藏の裏手の所に、大きな桐の木があつて、藤紫の花を一めんにつけてゐた。私はも一つ上の段へとあがつた。材木小屋があつて、二三人の職人が仕事をしてゐた。桶屋のゐるやうな長屋式の建物があつて、庭先には、棒にした木を澤山干してあつた。さうした長屋は他にも一二軒見えてゐた。

鐘樓が直ぐ其所にあつた。其所は山の脊になつてゐた。殿々の屋根も社務所の屋根も、眼の下に見えた。その傍には裏山にある小學校へ行く道があつた。その道を行くと、社務所へ水を送つてゐる井戸や發電所などがあつたが、行つて見る氣にはなれなかつた。

暑い陽が照つて、今年になつて一番暑い日だと云つて、事務員達は羽織を脱いでゐたが、室の中は冷たかつた。私は草疲れた體をながながと横へて晝寝をした。そして晝寝から覺めると五枚の短冊に拙い句を書いた。

朝、書を見た小座敷の入口にある賣店へ、繪葉書を買ひに行つて、講堂の廊下を歩いてゐると、昨夜の義太夫の女の子が出て來た。賣店の座敷では蓄音機が鳴つてゐた。少女の後からお師匠さんの女がやつて來た。二人は蓄音機を聞きに來た者と見える。

私が賣店の前に立つと、昨夜左の方の机にゐた事務員が來て、繪葉書をくれた後に、私を自分の机の傍に連れて行つた。私はその事務員から秩父暴動の話をきかされた。

朝測候所の方へ行く時に、山の下に見付けてあつた五六軒の人家のある方へとおりて行つたが、四五丁行つて、苦しくなつたので引返したが、室へは這入らずに、外の崖の下を通つて本社の前の石段の下へ出た。その時、私は木燈臺と水舎を精しく見た。木燈臺は高さが二丈位で、八ツ棟木製の一面に緻密な彫刻を施した物であつた。水舎は雨樋唐破風造りで、これも、四隅の柱にも欄間にも、一面に彫刻がしてあつた。白木の神樂殿がその右の隅にあつた。本社の左側の社務所に近い方には、國常立神社の社があり、右には澤山の末社が並んでゐた。社の四方には、數百年を經たと思はれる杉や檜の大木が、長い大きな幹を見せてゐた。黒鶫が彼方此方で鳴くのが聞えた。鶯の聲も谷の下の方で聞えてゐた。

紀念館の口に立つて、頭の上の杉の木で四十雀の鳴く聲を聞いてゐた。社務所と紀念館の間から、さつき私と話をした事務員が杖を振りながらやつて來た。

『今、甲州から二人參りましたが、雲採の上で、先生達と會つたさうですよ。』

雲採は駒鳥の名所で、人が通ると蟲を踏み出すので、駒鳥が人の後を追つかけるやうにして鳴くとも言つた。

もう夕陽が落ちかけてゐた。赤い血の色をした夕陽が、霧雲に薄すりと包まれながら木立の間から覗いてゐた。その夕陽の光は、本社の棟についた金めつきの菊の紋を染めてゐた。夕陽の光は杉の幹にも赤々とかかつて見えた。

參籠所の湯殿には、昨夜と違つて新しい湯が沸いてゐた。若い請願巡査と、長いこと警官をしてゐたと云ふ髭の白い、もう八十近い老人と一緒に、その湯に這入つた。湯の後でまた外へ出て、鐘楼のある所へと登つて行つた。大工らしい老人が其所へやつて來た。私は白石山の向ふに大きな山の線を見付けたので、老人に聽いて見た。

『あれが、大洞ですか。』

老人は雲採から右になだれた霧の中に、幽かに見える山の線に指をさした。

『大洞は、あれですよ。』

脊の高い赤ら顔の男がやつて來て、鐘楼にあがつて鐘を撞き出した。その鐘の音はゆるく靜に山の空氣を振はした。

その夜もまた義太夫があつた。私は社務所の椽側に腰をかけて聞いてゐた。二人の車夫に一人づつ子供を負ぶはして、洋服を着た會社員らしい男が、夫婦で提灯をつけて這入つて來た。私は聞くのが嫌になつたので、直ぐ歸つて寢た。私の室へは五六十人からの團體が來ることになつてゐたので、寫眞師の隣へ

移つてゐた。眠りかけたところで、隣の室へ澤山な人が騒がしくやつて來た。

朝六時頃に私は出發した。本社にはまだ火が點いて、五六人の者が拜殿に坐り、青い裝束をつけた神職の一人が祝詞をあげてゐた。杉の上ではもう黑鶫が鳴いてゐた。

海嶋

小舟は岸の石垣を離れた。和船や漁船や、沿岸通ひの小汽船が這入つて來る小溝のやうな港の、北の隅から私達の舟は出たのであつた。港の周圍には青い山があつて、人家は狹い岸の上に、ごたごたと並んでゐた。

舟の中には、私の先輩とその土地に開業してゐるドクトルと、愛知縣の中學校に奉職してゐると言ふ若い教師と、神戸の商業學校に行つてゐる學生との五人が乘つてゐた。暑い斜陽が射してゐたが、海の風はさすがに涼しかつた。舟は東の方へと進んで行つた。港の水が左に折れた土手の端に、枝を矢鱈に張つた大きな樟があつて、その下に社の屋根が見えてゐた。それが土地の氏神であつた。油蟲のやうな船蟲が黒くなつて、その下の石垣を這つてゐるのが見えた。二三艘の帆前船が、左に折れて行つた水のその折れ口の所に船繋りしてゐた。

外海へ出る港口は、そこから右へ鍵の手のやうに折れ曲つてゐた。空には怪しい湯氣のやうな雲が飛んで、水にはやがて來やうとする暴風雨を思はすやうな皺りがあつて、いつもは碧く澄んでゐる水が、薄白く濁つてゐた。港の口は狹ばまつて、きつい山の線がその左右にあつた。

その港は二重になつてゐて、その狹い港口を出ると、又入江になつて、その入江の先が本當の港口になつてゐた。其所は土佐の東はづれになつた甲浦の港であつた。樟島と言ふ島山が、港の口に横はつてゐた。島山の磯の岩には、白い波が絡つて、一二羽の白鷗がそのまはりを飛んでゐた。その港口の右側を土佐口と言ひ、左側を京口と言つてゐた。土佐口の方へは、右から小さな半島が突き出てゐて、その上におもちやのやうな燈臺があつた。京口の方へは、竹島と云ふ大きな島山が出て來てゐたが、その竹島はもう阿波分で、一方の陸地に接した所は、一丁にも足りなかつた。その間は渡船で連絡してゐるとドクトルが話した。

潮の水は眠れたやうになつて、沖には潮霧がかかつてゐた。半島の陸へと寄つて行つた。磯の水は赤濁がして、それが一間位も引いて行つたり、引いて行くかと思ふと、だぶだぶと言つて盛りあがつて滿ちて來た。そのしぶきが磯に生えた水引草

どにかかつた。水引草の花に交つて、小さな菫の花も見えてゐた。私達はその磯へ莚を敷いて、舟へ積んであつた酒をおろして飲んだ。白い襦袢を着てゐた舟頭は、陸へあがらずに舟を半丁位沖へ出して碇を入れて待つてゐた。

波のしぶきが莚の上へも降つて來た。船蟲が恐しさうに莚の傍を這ふて行つて、石と石との間へちよろちよろと這入つて行つた。私達は水引草や船蟲などを入れて俳句を考へた。それは無邪氣な高踏的な遊びであつた。

『竹島へ行かうぢやないか。』

誰が云ふともなしに云ひ出した。私達は船頭を呼んで舟へと乘つた。斜陽が赤々と射した竹島の磯には、一團の人家が見えてゐた、五十軒足ずのその部落では、昔から一定の戸數を限つてあつて、それ以上に増加することを許さないとドクトルが云つた。

舟は竹島に近くなつた。島が二つに分れたやうに見える低い平地の所が人家のある所で、その前の磯がちよと灣曲して、漁船の風陰になるやうになつてゐた。その右側の山の出つ張つた所に、榊などの生え茂つた所があつた。

『この神樣の祭禮の時には、御輿が出ますが、時々その御輿が、海の中へ這入つて行つて、いくらやるまいとしても、どうしても止らないと言ひますよ、』

ドクトルはこんなことも言つた。人家の左はづれに小さな小學校があつた。

『此所の先生は、向ふの村から通ふてをりますが、本當の敎育は、いつも子供と一緒にゐないと出來んと思ひますが。』

ドクトルは、その學校の敎師が漁高の分割を貰つてゐるとも話した。

海が荒れてゐるので漁に行かない漁船が澤山繫いであつた。私達は學校の下へ舟を着けて、陸へあがつて行つた。陸には北所此所に畑があつて、實をもがれた唐黍の葉が、淋しさうに風に動いてゐた。陽の中には赤い蜻蛉も五つ三つ飛んでゐた。

狹い小さな家の中では、裸になつた男が横になつてゐたり、家の前の地べたにしやがんで、釣竿にする竹を弄つてゐたりした。その人々は私達の姿を不思議さうにぢろぢろ見てゐた。私達はその狹い人家の間を通つて、人家の後になつた向ふの海岸へ出た。左手に續いた阿波の海岸は、湖靄に包まれて、白い波がところどころに見えてゐた。

私達は引返して、榊に覆はれた社の方へと行つた。山の麓から甲の浦石として知られてゐる砥石になる自然石を築いてあつた。上り口の左側に谷の淸水の落ちる水溜があつた。それが竹島の住民の飲料水で、年老つた女が二人その水を汲んでゐた。

私も一口その水を飲んだ。冷たい氷のやうな清水であつた。
小さな社が直ぐやつて來た。社の左側に筵を敷いて、小さな老婆を中心にして、二十歳位の若衆と、他に二三人男の子や女の子が坐つてゐた。若衆は寢ころんでゐた。其所には食物を入れてあるらしい重箱の重ねがあつた。その前に焚火をして、傍に眞黑に煤けた土瓶を据えてあつた。小柄な眼の光る四十前後に見える男が、その火の傍に立つてゐた。私の先輩がその男に向つて話しかけた。
『この神様は、天神七代の內の神様だ。』
小柄な男はこんなことを云つて、その邊を威張つて歩いた。
『この島では、家を今からふやさんやうになつてをるさうなが、本當ですか、』
『ふやされんことはないが、この邊の奴は、腦味噌が足らんけに、ふやせませんよ、今の子供が大きうなつたら、どうかなりますよ』
ドクトルは傍の石に腰をかけて、無關心な容をしてゐた。
もう陽が落ちてゐた。私達は石段をおりながら、山の上の男の噂をしはじめた。それは長さんと言ふ男であつた。ドクトルは長さんの話をよく知つてゐた。きかぬ氣の長さんは、島の人を向ふへ廻していつも鬪つてゐた。島の者の中で、暴風雨のあがりに流木を拾つた者があつた。敵の隙を狙つてゐた長さんは、早速宍喰の警察へやつて行つた。流木を拾つた者は、それがために數珠つなぎになつた。島の人は長さんを厄病神視してゐるが、どうすることも出來なかつた。島の祭の日に若衆が娘を思ひ思ひに連れて行つた。娘の親達が心配して、やつと娘を連れて來て、その相手の若衆に向つて交渉をはじめた。それを知つた長さんが、道で行き合つたその若衆の一人を罵倒した。
『人の娘をかどわかすとは、けしからん奴ぢや、』
罵倒せられた若衆は、朋輩の集つてゐる所へ行つて、その話をした。
『けしからん奴ぢや、長を呼んで來い、』
若衆の一人二人が長の所へ行つた。
『何、俺に來い、小便臭いくせに、俺を呼ぶとは何んだ、用事があるなら俺の所へ來い、』
若衆の團體は長の所へ押しかけて行つた。長はそれを見ると、圍爐裡の傍にあつた薪をばらばらと投げた。若衆は進めなかつた。長はその暇に裏口から飛び出して、海を泳ぎ渡つて警察へと行つた。
『若衆が徒黨を組んで、私を殺しに來ました、』
巡査は仕方なしに竹島へとやつて來た。そんなことで、長に

は長さんの女房になる者もない。從つて仕事の手助をする者もないので、捨兒を拾つて來て育てた。

『あの、山の上にをつた子供は、皆拾つて來た奴ですよ、彼の若衆もさうです、も一人若衆がゐたが、それは逃げて行きました。』と、ドクトルが云つて笑つた。

海の上が暗くなつて來た。私達の舟は内へ這入つて、氏神のある岸の下へと來た。空が怪しくなつて、海の方から强い風が吹いて來。港の中の船は、皆岸へ深山の網を張つて、暴風雨の用意をしてゐた。傍にかかつてゐる帆前船のデッキの上で、若い女の聲がした。航海ランプの光に、白粉をつけた顏と、その赤い湯卷の裾を見せた。私達はまだ酒を飮んでゐた。

『おい姐さん、あまりかせいぢやいかんよ、』

私達の舟からからかふ者があつた。風は刻一刻と募つて來た。船の中に點けてあつた角燈の火が消えさうにちらちらした。私達の船はやがて、その傍に纜繫りしてゐる和船の舳へ繋がれた。

私達は順々に歌を歌ひ出した。歌の聲は風のために後から後からと飛ばされた。それでも私達は平氣で歌つてゐた。

田園雜記

相馬御風

□

俳諧寺一茶の物類集詞と題した文章の中に、『朝夕心をとめて打むかふ茶種の花は井出の山吹よりも好もしく、麥の穗の色は、牡丹、芍藥より見ごたへあるかと覺ゆ。朝顏より夕顏こそよけれ。萩、菊よりも芋、牛蒡に味あり。』と云ふやうなことがしつこく書きならべてある。自然の風物に對するかうした趣味の相異を、これまでに風雅と對立させて見るのはどうかと思ふが、しかしただ「朝夕心をとめて打むかふ」と云ふ一語に力を入れた一茶の心持には、深く感じさせられる。

田園生活者の感ずる自然美のたまものは、外界の目さましい變化のおかげであるよりも、一茶の所謂「朝夕心をとめてうち向ふ」心のおかげによるところが多い。「朝夕心をとめて打ちむかふ」者にとりては、名も知れぬ一葉の雜草にさへ味はひ盡せぬ美しさがある。

□

總じてその名の知れ渡つた天下の名勝と云つたやうな所よりも、旅行家などが汽車の窓に背中を向けて通るやうな平凡な土地に、却てしみ〴〵と自然の美しさの感じられる場合が多いと云ふやうな事を、私はしばしば思つたことがあつた。

田舍にながく暮らして見ると、おのづから「朝夕に心をとめて打むかふ」手近かな自然に深い愛着が生じて來る。そこに又田園生活の根づよさもあるのであらう。

□

茶の花、大根の花、豌豆の花、胡瓜の花、茄子の花、ささげの花……春から夏へかけて畑に咲く疏菜の花の美しさは、一茶をまねるではないが、時としては庭につくり、鉢に養ふ花のそれよりも、はるかになつかしく思はれる。黍や玉蜀黍の葉にさらさらと風のわたる音、芋の葉の上を銀色の露の玉のころがるさま——夏の朝の畑の快さには、年ごとに離れがたい愛着をおぼえる。

□

田園や、海濱に住む人達は、妙に火を焚くことを好む。それは必ずしも暖をとる爲めではなくて、むしろ火そのものを好むと云つた風である。

　夕されば濱のをちこち火を焚きて裸の人等群れ涼む見ゆ

夏の漁村には到るところに、かうした光景に接することが出來る。

　みこしぢの久比伎の原野秋をふかみかしこにここに野火せる見ゆ

　秋の野の焚火は、わけてなつかしみがある、

　初冬の晴れたる朝の磯濱のところどころに燃えのこる焚火

　焚きすてゝ沖へいでゆきしいさりをも常にや見む磯の焚火を

　朝の磯焚火ぞもゆるそこにここにあたる人なみさみしくぞ燃ゆる

　たきすてられ風のまにまに燃えあがりかつもえほそる火を

見ればさびし

焚きすてられたまま燃えほそつて行く火のさびしさは、まつたく云ひやうなく心ぼそいものである。

總じて野でも山でも海岸でも、焚火をした跡を見たり、焚火をしてゐるのを遠くから眺めたりすることは、不思議に原始的な感じを與へるものである。田舍の人の焚火を愛する氣持も、たしかに原始的な氣持である。

□

エマスンの『自然論』の中の左の如き一節の記憶は、時々私の胸によみがへつて來て、私にさまざまなことを想はせる。

「今朝私の見た愛すべき風景は、無論二三十ほどの農園を引くるめたものである。その中にはミラーの所有にかかる畑もあり、ロックの所有する畑もあり、またマニングの所有する森林もある。しかし、彼等のうち誰一人其の風景を所有してゐるものはないのである。何となれば、地平線内には、あらゆる部分を一體として統合して觀ることの出來る眼をもつた者の他には、いかなる人も所有しない財產があるからである。その財產を所有し得る人は即ち詩人である。而してその財產ここの三人の農園にあつて最も優れたものであるにも拘らず、彼等の所有證明書は、その財產に對しては何等の權利をも彼等に與へないのである。」

まことに身にしみる言葉である。

けれども、私達は往々にしてその兩者をあはせ所有する幸福な人々を、草深い農村の處々に見出し得て、たまらない懷しさを覺えるのである。默々として耕し、默々として蒔き、默々として刈りつつ、土塊の如く生き且死んで行く人々のうちに、如何に多くの語らざる哲人、歌はざる詩人があることだらう。而してかゝる人達こそ本當に土を愛し、土を所有する人々であり、且その富は金錢上の打算を超越した貴い富である。

□

豌豆が莢を出しはじめる頃のことであつた。或日私は畑中の徑で、次のやうな會話を耳にした。會話者は二人の農夫であつた。

「これ見やつしやれ。もう豌豆が手を出して柴を立てゝくれるのを待つとるだないかの。」

かう一人が情味のこもつた調子で云つた。

「ほんとだ。かわいいもんだつてこと。」

かう他の一人が答へた。

話はこれだけであつた。しかし、この二人の短い會話のうちに何と云ふ深い情愛のこもつてゐることだらう――さう思つて私はしばらく其の二人の婆さんの様子を、深い感激を以て眺めずには居られなかつた。

□

此の三四年の好景氣で、材木の値の暴騰は全く豫想以上であつた。随ていたるところの山村で樹木の濫伐されたことも亦實に驚くべきものであつた。しかも、それによつて得られた金錢の大部分は、果して如何なる目的の爲めに費されたといふのか。そしてそれに農村の人々の生活上に如何なる効果をもたらしたと云ふのか。

それにも拘らず、あちこちの農村には、そんな結果に少しも頓着せずに、今なほ默々として山を開き、苗を植ゑて、殖林にいそしみつつある忠實な働き手が少なからずある。自分の一生のうちに伐ることが出來るか出來ないか、自分の死んだ後で誰がその木を伐つてどんな目的にその金をつかつてしまふか、そんな事は少しも考へたことがないと云つたやうな安らかな態度で、徒勞にひたすら苗を植ゑ育てることに眞劍な努力をつゞけてゐる。

かうした光景は見方によつては、皮肉に感じられるかも知れない。しかし、眞にその苗を植ゑる人々の心に立ち入つて考へると、そこには實に嚴肅な或るものがある。木を賣つた金は何の爲めに費されようと、木そのものは決して無駄には費されない。苗を植ゑる人の樂しみは、利己的打算を出でゝいつしかそれを超越してゐるのである。そこには自然に對する本當の愛がある。生命の伸長に對する本當の歡びがある。そして其の愛と其の歡びこそ、土を耕しつつ生きる人の本當の富である。

□

どこの農村へ行つても、第一に目につく大きな建物は小學校である。どこの村へ行つても年々に嵩む村費の大部分は學校費である。どこの村へ行つても手足に泥をつけずに暮してゐるのは學校の先生である。

どこの農村でも小學校の生徒の大部分は、將來その村の土を耕さなければならぬ人々である。しかも、どこの村でもこれら多くの少年少女達の教育は、大部分土を耕す職業を厭ひ嫌つて月給取となつた教師達の手にゆだねられてゐるのである。

□

「太陽は大人にはその眼のみを照らすに止まるけれども、小兒にはその眼と共にその心をも照らす。自然を愛する人は、內心と外部との感覺が變りなく眞に調和してゐる人である。成人の時期に至つても幼兒の精神を失はない人である」とエマスンも云つてゐる如く、自然を愛する心は少年少女に於て最も豐かにめぐまれてゐる。農村や漁村に於ける兒童の敎育は、なぜ此の自然に對する兒童の豐かな愛を基礎とすることが出來ないのであるか。

□

土地の所有者は必ずしも風景の所有者でない、風景を所有し得る者が眞に最も富める土地の所有者であると云ふ意味のエマスンの言葉のありがたさは前にも述べた。しかし、それと同時に私達は自然に對する本當の愛は、單に眺める爲めの自然に對してのそれのみでなくして、自然界の生命に對する愛をも含まなくてはならぬことを、考へずには居られぬ。

たとへ一本の小草でも、自ら蒔き、自ら培ひ、自ら育てる者にして、はじめて眞にその美しさを感ずることが出來る。たとへ一本の小草でも、眞にそれを愛し育てる苦勞を知る者にして、はじめて自然が與へる眞の歡びを味ふことが出來る。

單に開花の美を眺めたいだけならば、花の咲いた頃に植木屋から買つて來るのが一番便利である。しかし、さうすることによつて眞に花の全き美を感じ得ると思ふのは、大きなまちがひである。

□

稻の正條植が勵行されるやうになつてから田植唄といふものが聞かれなくなつたのは、いかにもさびしいが、それでも川草取にはあちこちで唄聲が起る。私達の地方の田植唄は極めて單純であるところに、却て獨特な妙味がある。

『前の櫻花ザクザク咲いたいの――』

これで一つの唄である。

『白馬をば俵へあーげた』

これでもうたふのを聞けば、立派に一つの唄をなしてゐる。

『酒まいらしよーや、さがり苺のさかなで』

これらはやや歌らしいが、うたつてゐるのをきくと、前者の方が却て面白い。

秋になると夜おそくまで臼挽唄のはれやかな聲が、村々できかれる。

『臼すりや辛苦と見える、前の小棲がうしろへ行こば、なぜに

小樓をとめなんだ」前の小樓をとめたいけんど、わしに小樓は稼がない。』
『俺は重たい臼だ――、山に三年河原に二年、ごろり五年とねたゝすだ』
これらは相當に技巧の跡があるが、左の一首に至つては驚嘆すべき自然味が溢れてゐる。
『おら嬶をんな、俺が男で、しあはせだ』

私はこの唄がたまらなくすきである。『俺の嬶は女だ、俺は男だ、そして仕合せだ！』――何と云ふ單純さであらう。しかも此の馬鹿々々しいほどの單純な言葉が、臼の廻轉に伴うて一種のメロディーを以て唄はれる時、そこには何とも云ひあらはしがたい妙味が出て來て人々の勞苦を快くする。
かうしたことを思ふと、唄の作はない勞働はあまりに淋しい氣がする。

都會憧憬の心と田園を懷しむ心

石丸梧平

□

人生の目的は何であるか――それは何千年の昔から多くの思想家によつて叫ばれた聲だが、私はこゝで簡單に一言、それに答へやう。
「幸福であることが、人間の生きて居る唯一の目的であり、意義である」と。

人間は誰れの爲めに作られたものでもない。――人間の出現は解くことの出來ない不思議ではあるが、生存して居る以上は人間は、人間自身の幸福の爲めに生きて好い譯である。

□

人間の生活を幸福ならしめる爲めに、人間の智力がいろ〳〵のことを考へ出した。それが所謂文明なるものである。文明は

もともと〳〵人間の幸福を増す爲めの、人間自身の努力によつたものであるから、文明が不幸を生むわけはない筈なのだが、いつの間にかそれが文明の爲めの文明、產業の爲めの文明になつて居て初めは自分の手で作つて置きながら、おしまひにはどうすることもならないものになつてしまふ。そこで、がらりと一回轉して、複雜から單純への要求が例の如く湧いて來る。文明の反省、また都會人が田園を慕ふ心がそれである。

それならば田園は幸福かといふに、さうとは限らない。殊に一旦都會の便利と歡樂とを味つたものに取つては、田舍の生活は不便であり、單調である。單純がいつまでも單純のまゝでは我慢し切れない。退屈である。もつと複雜であり刺戟がありたい。田舍に住む人の都會憧憬の心はそこから起つて來る。

都會憧憬の心と田園を懷しむ心と――惱ましい都會生活と退屈な田園生活と、この二つの對立は、幸福を求めつゝ生きて居る人間の心に大きい矛盾をなして居る。同時にそれは矛盾ではなく變化であるとも云ひ得る。

□

海や山や、それから靜かな田園の生活、私はいくつかのさうしたなつかしい思ひ出を持つて居る。私は、さう云ふところへ出かけて行つた時の、その時の自分の心持をなつかしむ。何と云つても「自然」は好い、自然はやはり人間のほんとうの落ちつくべきふところではなからうか。さう思ひつめて私は都會をさつて行つた。そして幾ケ月かの、たま幾年かの生活が田園で營まれた。

けれどもやはり人間がなつかしいのである。人間の對手の少い田園の生活は、またいつの間にか苦しい退屈になつて居た。それが退屈だと感じ出してはもうとても辛棒がし切れなくなる。そしてまた都會に歸つて來る。だが――あかるい都會で、人間の作つた多くの歡樂を追ひながら、苦しい生活をつゞけるとき、私はまたきつと、物慾の生活のあさましさをつく〴〵考へる。

都會の生活と田舍の生活とを幾度となく繰り返して私の若い日が過ぎやうとして居る。――生存は惱ましい。この一語によつて私の若い日の人生觀は說きて居た。

□

煩惱即人生を實行して居た若い日の生活。
煩惱を絶ち切るところに涅槃があると云ふ宗教。
煩惱をそのまゝ認めて、それを整理し統一し、人間の生存を

、より正しく、より完全なものにして行くところに人生があるのだと云ふ新倫理觀。

いろ／＼の心の動搖が都會から田園へ、田園から都會へと、私の生活を移して行つた。

×

中央公論から「都市と田園」に對する感想を求められたとき、私はすぐに以上のことが考へられた。都市の生活と田園の生活とは、私に取つては、半生の大きい惱みだつたのである。そこには若い日のいろ／＼の問題が含まれて居た。名聲地位、金、歡樂、さうした世間的慾望を以て唯一の幸福と考へて居た若い時代には、田舍の生活は何よりも物憂いつまらないものであつた。私は大阪を故郷として居るが、私の生れたのは大阪の町から三里ばかり隔つた田舍である。私はそこで百姓の長男に生れた。舊い傳統の中に生きて居た私の家は、長男たる私に、當然その百姓の主人たることを強いた。父は私を愛しては居たが、私を自由に他郷へ出すことを欲しなかつた。父は多少漢學の造詣はあつたが、私に新しい學問をさせることさへも欲しなかた。

私は淋しい單調な田舍生活に倦み切つて、たうとう／＼逃げるやうに東京へ學問する爲めに上つた。それは私の十九歳の秋であつた。私は五年間東京で學生々活をした。そして一層田舍がいやになつてゐた。それにも係らず父は、私が學校を卒業するとすぐにも田舍に歸つて來るやうに促した。だが、私は容易に歸らうとはしなかつた。私は東京に住んで居たかつたのである。

けれどもとう／＼父の要求の一半を入れなければならぬことになつた。せめて京都まで歸つて來いと云ふ父の切望なのである。私は京都ならばまだ好いと思つた。私にその頃まだ學問をして自分の野心を遂げやうと考へて居た時代であつた。

私は京都で二年ばかり教員をしながら或る研究をつゞけて居た。ところが明治四十三年の夏と秋に、母と父とがつゞいて亡くなつたのである。で、私はまた、京都からも引き揚げて故郷の田舍へ歸らねばならぬことになつたのである。

戀も名も酒も逝きける靜ごゝろ思ふことなき價すことなき日

八時鳴れば炬燵に入りて夢を見る事なき日なり白き夢見る

その頃私は初めて歌と云ふものをよんで見た。退屈でたまらなかつたのである。第一の歌は如何にも沈滯した靜かな境地を詠んで居るやうにも一寸思はれるが、決して靜かなところでなく、野心に燃えながら、煩悶になやまされたから、不滿不平で田舍に居たのである。その頃、京都での一種の戀が破れたかなしみ

この歌によつてその退屈さを詠んで居る。

□

こゝに「都市と田園」の生活を書くに當つて、私は先輩S君のことを考へないでは居られない。S君は今は北國の郷里に引退しては居るが、私が京都から田舎に歸つて淋しい不滿な生活をして居た頃は——あゝ、それはもう十年の昔にもなるが——S君は文壇の流行兒であつた。私は毎月S君によつて書かれる論文や感想文にどれだけの共鳴を感じたか知れない。S君の本が出た或る時など、私は「新生活と哲學」と題して新聞に長い感想を書いてS君のその「自我生活の高潮」に贊同した。ところが、それから間もなくであつた。

私はその頃、時々S君に手紙で田舎の生活を訴へて居たのだが、或る日のこと、私が書いた長い手紙に對して、S君からも長い返事が來た。——私は文壇の流行兒たるS君から斯うした親しい手紙を受けたことが何よりも嬉しかつたが、しかし書かれて居る内容に就ては、私は少からず驚いた。

それはS君が郷里に引退するよりも、ずつと以前のことだが、S君の心の中にはもうかうした芽がぐんぐん伸びてゐたのであつた。後年S君がいよいよ隱退した時、私はその時更に驚いたと共に、私はS君が、自分の生活をほんとうに見つめて、眞直に行つたその勇敢さに、多大の敬意を拂つたのであつた。——S君のその時の手紙の一部をこゝに掲げて見る。都會生活者が、如何に強く田園の生活をなつかしむで居るかと云ふことを痛切に思はせる。

□

つい二三日前のことでした。久しぶりで郊外へ出て、近づきつゝある春のおとづれに耳傾けたのは。

梢の色がほんのりと紫色を帶びて來た武藏野の雜木林を幾つとなくくぐり拔けて鬼子母神の近くの田畝の中へ出ました。そして土の中に居ながら、既にもう目ざめて居る蛙の啼聲を聞きました。

冬眠！蛙や蛇の冬眠と云ふことくらゐ私にとつて羨ましいものはありません。日の光の暖かい間、彼等は自由にそれを浴びて、寒い風が吹き初めると「生きた永い眠」に入る。そして又、暖かい風が吹き初めると眼覺める。何と云ふ幸福な大自然でせう。

ですけれど私は思ひます。何故彼等は醒めなくても好い眠りからさめるのか。日の光が慕はしいのか、戀の歌が歌ひたいの

か。何故安らかな眠りのまゝに土に化してしまふことが出來ないのか。苦しみもない、樂しみもない、ただただ安らかな眠り─何故その眠りを捨てゝ働かねば生きて行けない世界へ出て來るのか。私はつく〴〵と自然の心そのものを羨ひました。

先日のお手紙は近頃になく私の心に賑ひを與へたものでした。貴兄からこのやうな消息を洩して貰はうとは全く思ひもかけなかつたことです。私は非常に嬉しく思ひました。殊に去年の秋からこの方の私の心は、お手紙のやうな心持をどんなにどんなに望んで居ることでせう。

沈默して、人生が見たい。私の目下の望みはこれだけです。複雜のまゝ單一にした心の狀態になつて、ジツと生活のどん底に座つて見たい。動を容れた靜の裡に居たい。私はそればかりを望んで居ます。

死か、死にあらず。生か、生にあらず。私のあこがれて居る境地は、私自身にはわかりません。死んだらば死んだらばと云ふ想像が無暗に湧き起ります。しかし私は到底死ねるなんか出來る人間ではありません。兄の送つて居られるやうな生活！私はなぜ一思ひにその中へ入つて行けないのでせう。

兄よ、願くば兄の靜かな心持の空氣を私にも吸はして下さい。自然に對して敬虔な心持を私にも傳へて下さい。兄が今靜かにこらへて居られるその心持を私にも──私の亂れた心にも吹き込んで下さい。

都會生活！ 人間生活の刺戟は私を殺さうとして居ます。私はあらゆるものに責められて居ます。あゝ何もしないでゐたい。何も考へないで居たい。

無爲！ なつかしき無爲よ！ あらゆるものを收めた無爲の心よ。

□

私は も、このS君の手紙をよみながら思つた。S君と云ふ人はどこまでも眞劍に自己のほんとうの生活と云ふことを考へて居る人だ。この手紙にも見える通り、この頃のS君は隨分忙しい生活をして居たに違ひない。田舍の人間が長い手紙を書いたからとて、よくこんなに眞劍に返事など書いて居られたものだと思ふ。今日の忙しい文壇の人なら果してどうであらう。S君をしてこの手紙を書かせたのは、義務や禮儀で書かせたのでないことは無論である。私はその時、どんなことを書き送つたかはよく覺えて居ないが、どうせ隙だから、そして東京で活して居るS君の生活が羨ましいから、何かと書きつられて居たのだと思ふ。それに田舍のことで何も云ふことがないので自分

の生活のことなど語つて居たのだと思ふ。

それにしても私の方では、退屈で仕方がないのでいろんなことを云つてやつたのだらうが、S君からかう云はれて見ると私は一寸くすぐつたい氣がした。可なり皮肉にも感じられ、又、都會生活にあこがれて居る一靑年に對して、どうせ都會もつまらないのだから、そのまゝに居るが好い――と、さとし敎へて居るやうにも聞えたが、しかしS君としては眞劍の言葉だつたことは無論である。

□

私はその後また暫らく敎員をして居たが、私の若い心は、いつまでもさうした單調な生活には堪えられなかつた。そしてとう〳〵敎員をもやめて、住居を大阪市内に移し、二三の會社に關係したり、雜誌をやつたりした。――そして凡ては見事失敗した。

久しく田舍に居て、都會の生活、名譽や金や歡樂にあこがれて居た私が、五年の都會生活によつて、その頃どんな風に變つて居たか――それはもう大阪の生活を止めて何とか轉換しようと悶えて居たころのことである。

□

×月×日

今日の宴會の幹事は、今夜はこゝで宿らせる計畫を初めから立てゝ居たらしい。酒の好きな仲間はいつまでも〳〵飲んで唄つて居た。若い人たちはひそ〳〵と席を遁れて女と二人づゝ靜かな休み場所へ行つたりした。私はその何れをも欲しなかつた。

私は酒は可なり好きだが、夜通し飲むことによつて、また苦しい病氣に惱まされねばならぬことを恐れた。また私は、美しい女と話すことはきらひではないが、その爲めにやはり私の健康を害することを、これまでの經驗で凝り〳〵して居る。

でも私はすぐ家に歸るにはまだ名殘りが盡きなかつた。で、私は宴會の榮えて居る室のすぐ隣りの小間で、やわらかい赤い蒲團を敷いて貰つて、そこに一人靜かに寢ころがりながら、美しい女の聲と、三味の音とを聞いて居た。

×月×日

彼れの方がよつぽど徹底して居るのだ。さすがに純粹の大阪人だ。功利即道德なのだ。それがほんたうなのかも知れない。私もこの頃は可なり商賣がわかつて來た。けれどもまだ〳〵不

徹底に違ひない。
　だが、商賣をして居るが爲めに、だん〴〵さうした極端な功利主義にならねばならぬと云ふことは、私にはまだ何だか悲しい。――けれども人間の本心には、何人だつて、さうした功利的分子のあることを否定するわけにはいかぬではないか。あゝ、だが、その分子のみを發達させることが商賣なら、私がいつまでも商賣人として生きて行くことは悲しい。

×月×日（京の寺に來て）

　あの頃の私の生活には潤ひがあつた。それは私の一生を通じてもう再び歸つて來ないなつかしさである。
　初秋の曇り空の或る月曜日を、少年Kと二人、萩の小花の咲き亂れて居る疏水のほとりを遡つて、逢坂山から琵琶湖畔に出たことがあつた。あのいぢらしい萩の花を、私は秋風に吹かれながら涙ぐむで眺めたことを覺えて居る。
　それはつまらないことかもしれない。この頃の私なら、少くとも今日こんなお寺に來なかつたら、私の一生にはこんなことを思ひ出すことさへもないくらゐであらう。大阪で商賣をして居るなら、十年前の追憶はおろか、たとへ昨日訪ねて來た人のことでも、お金儲けに關係がなければすぐ忘れてしまふ。この頃の私に取つては今日こんなことを思ひ出す機會を與へられたそのことが嬉しいことであつた。私の今日のかうした心持を友人たちは笑ふかも知れない。けれどもそれはまだほんとうの大阪の商賣人の生活がわからぬからだ。私はこゝで藝術や人生を論じやうと云ふのではない。が、斯うした大阪に於ける生活は、まるで何ものをも反省する隙がない。恐らく、何百萬の財產を持つて居る主人でも、丁稚小僧と同じやうに、塵まみれの肉體で働いて居る。性慾を感ずればすぐにその道へ遊ぶし、お腹が空けば甘いものを食ひに行く。その間に考へる隙がない。
「好いなあ、こんな寺にでも引つ込んで、ほんとうに自分を見つめて、何か書いて行きたいものだ！」

□

　結局私は思つた。一人の人間の幸福は、何と云つても自己の眞實性を追ふて、僞りのない生活をすることなのだ。私には以前から私の書齋に「全晋眞」といふ額を掲げて居た。で、私はこの時いよ〴〵生活を改革することに決心したのである。
　けれどもいよ〴〵となると、どう云ふ風に進んで行つて好いかと云ふことが具體的にはわからなかつた。「小說を書いて行きたい。」と云ふのが願ひではあつたが、さて小說を書いて生活が出來るものかと云ふことはまだ自分でもわからなかつた。私は

恐ろしい氣がした。けれどもその時、ある先輩の言葉を思ひ出した。

「凡そ世の中で、何が一番困難だと云つても、それは、太陽の下に人間が餓死することだ。」

それはまあ好いと決心した。しかし、もつとほんとうに、一人の人間が生活を移して行く心境を知りたいものだと思つた。

その時に思ひ出したのが、またS君のことであつた。S君は、その頃はいよ／＼東京の生活を切り上げて郷里に隱退して居たのである。私は商賣をして居る間は暫らく讀書もしなかつたので、その後S君がいよ／＼隱退した頃の感想を讀んで居なかつた。で、すぐに思ひ立つてその夜S君の「還元錄」と云ふ本を求める爲めに町をあるいた。

けれども二三の本屋にはもう「還元錄」はなかつた。そしてその後S君が書かれた「田園春秋」と云ふ本があつた。私はそれをともかく買つて來た。そして貪るやうにその夜讀み耽つた。――そこに書かれて居る思想は、S君が東京で活躍して居た頃に出版された「自我生活と文學」や「第一歩」に漲つて居た積極的思想とは、よほど變つて居た。どちらかといふと消極的であり、隱遁的であつた。都會藝術に對して田園文學であつた。その點は爭はれない。けれども今度の著作が前の著作と全然異つたものだとは決して云へない。ほんとうの自己を追ふて行つた人間の、當然に行くべき思想だつたのである。つまり前著の上に更に眞實性を加へ、純一になつたのであつた。

私はこゝで、S君のやうに都會生活から田園生活に入ることを、人間の行くべき道だと云ふのでは決してない。現に私は、その時、「田園春秋」を讀むことによつて多くの感動を受けたが、私は決して田園に退かうと考へたのではなかつた。つまりは自己の生活をもつと純一にすることであつた。眞實に生きたいと云ふことであつた。そして私は、いろ／＼まつはつて居る郷里の情實を排して敢然として東京に出ることにしたのであつた。

その夜私はS君に長い手紙を書いた。――すると間もなくS君から返事が來たのであつた。無論北國の郷里からである。

□

お手紙をしみ／＼拜見しました。先頃から貴下の動搖して居られる大體の御様子はお書きになつたものや何かでおぼろげには御察しして居ましたが、かうも早く決然たる態度に出られやうとは豫期しませんでした。繁雜な仕事を止められることは、あなたの爲めにもあなたの御家庭の爲めにも結構なことだと存

じます。たゞあなたが今度執られる新な道が、あなたをどう云ふ方向へ誘ふかと云ふことが問題なのですが、しかしそれは今にして云々すべき問題ではなくて、むしろそれよりも當面のあなたの心機轉向を喜ぶべきだと存じます。どうぞ今回の新しいお企てによつて本當に貴兄の求めて居られるやうな心境を掴まれることを切に祈念致します。

しかしかうは申すもの丶、前へ進まれる貴兄に比べると、まるで反對の方向へ退きつ丶ある僕が、さうした貴兄の生活更新に對して、かれこれ云ふ資格はないのです。僕としては正直に申せば、むしろずつと以前のあなた——熊野田の地主さんとしてのあなたこそ、靜かにほんとうの生活が出來るのではなかつたかと思はれるのです。けれども身未だ地主と名のつくほどの境遇に居たことのない僕には、或はさう思ふことが單なる夢想なのかも知れません。物心ついてからこの方、絶えず前へ〱と追はれつゞけて來た自分の生活を、根本から不安に思ひ出した僕には、今のところ物質的にも精神的にも、自分の故郷と云ふものをしつかりと定めると云ふことが唯一の、最大の願望なのです。

貴兄は新しき世界、未知の世界を求めて行かれる人、僕は古き世界、出發點へ歸らうとする人間、——さうではないでせうか。

いづれにしても、まだ〱私達はお互ひに旅人、さびしい旅人に外ならないと思ひます。或は一生旅をして終るのかも知れません。たゞ、しかし、お互ひに急がずにゆつくりと行きませう、人生は徒歩競爭ではありますまいから——。

あなたの新なる旅程に輝きと幸福との豐かならんことを祈ります。

口

S君の言葉の通り、私たちは一生旅をして居るのだ。

S君は東京の生活から靜かな郷里へ、それから私は、郷里から大阪市内へ、またつゞいて東京へ移らうとして居たのだ。田園から都會へ、都會から田園へ、私たちの心はいつも動搖してゐる。

しかしそのうちにはいつの間にか歳月(としつき)が流れた。人間の思想感情と云ふものは、そんな年齢なるものによつて、非常に變つて來る。旺盛なる肉體力がだん〱靜まつて來るにつけて烈しい煩惱(ぼんのう)もやゝ下火になる。世間と云ふものを知るにつけて自分の行くべき大體の見當もつく。更に經驗が生活を整理し統一する。そしてより多く精神に生き、内部的滿足に生きることと

る。形體は従となる。都會に住むことも田園に住むことも大した問題ではなくなる。

私自身の若い半生も、もう終りを告げた。名譽や金や享樂やたゞさうしたもののみに悩んで居た日が過ぎて、静かに果を結ばうとする時が來た。小さければ小さいまゝで好い。力一ぱいの充實したものを結ばうと云ふ心持がして居る。

人間から受けるもの、自然から受けるもの、それをぢつと味ひ観照しようとして居る。時たま動揺が來ても、もうあせるほどのことはない。

けれども、これからもやはり動揺は來るとは思ふ。來ても好い。來るのがあたりまへだ。同じやうなことを幾度もぐる〳〵と廻つて居るのだ。しかし全然同じではない。外から見れば同じに見えるかも知れないが、その道を歩んで居る本人に取つては決して同じではない。一つ一つ皮を脱いで居るのだ。

東海道五十三次

笹川臨風

一

振出しの日本橋、上りは京、一つ餘れば大津へ戻る、島田金谷は川の間、間の上山雨が降つて、いづれもお休みの道中双六。名物は府中の安部川餅、小夜の中山飴の餅、日坂の蕨餅、鞠子のとろゝ汁、草津の姥ケ餅。百三十里の長亭短驛、參覲交替の大名路、東に箱根八里の険あつて、大井・天龍・荒井の渡し、交通機關は駕籠に輕尻馬、川越しは、蓮臺・肩車と相場が極まつて、おじやれ、飯盛に旅の憂さを晴らす翌くる夜は老いたる六部順禮との合宿に、有爲轉變の哀々苦々を偲び、胡麻の蠅に取りつかれてはどうして巻かうかと胸算段並々ならず、雲助の無心、足弱の道伴、長雨の川止、下宿の蚤蚊なんどは、固より食堂付寝臺列車で煙草ふかしながら、雲煙過眼視する今日の夢想し得る所ではないが、金紋先箱の大名行列に、奴が振る毛槍の

穂が春風に靡いた太平の現象は又なきよい圖畫であつた。本陣脇本陣の夕暮の賑ひ、往き行く人の心も長閑に、十三泊の十四日入りで、行く先々の名所舊蹟を探りながら、名物に旨い物なし・とは云へ、富田の燒蛤に舌鼓を打ち、岡崎女郎衆に片敷く袖の情を賞するは、所謂往時の東海道情調であつたらう。松並木の街道ゆるやかに、お泊りならば、泊らんせの聲喧しき宿場々々の繁昌は、春風秋雨三百年、海内交通大動脈の光景であつた。

東關紀行、海道記の昔はさて置き、江戸時代に於ける東海道道しるべの最初の重なるものは、東海道名所記である。此書は淺井了意の作と傳へられてゐて、一九の膝栗毛に少からぬヒントを與へたものである。元祿版増補書籍目錄に、了意の作と記してあるは、疑しき所があるのであらう。萬治元年の作になつたことは、坂の下の條下に、「このかみは坂の下に川流れて、宿は川端よりつゞきてありけるを、九ケ年以前庚寅のとし、打續き大雨降り、山崩れて、家を埋み人多く損したり」とあり、庚寅の歳は慶安三年のことで、それより九年目は萬治元年に當つてゐるので明白である。

萬治と云ふと、四代將軍家綱の時で、德川初世に屬する。從つて東海道も後世の如く十分に開けて居らぬ時代だけに、諸事便利ではなかつたらう。旅には第一、藥をたしなみ、煩ひを防ぐを肝要とす、殊に冷水むさとしたる食物を愼むべし、夏旅の霍亂は多くは食傷より起るなり、怪しき人に道づれして、一つ宿に泊りて荷物をすり替へられ、寢たる間に、取逃げに逢ふことあり夜深く宿を出でぬれば、山だち追切の氣遣ひあり、宿につきては家の勝手間道の要害見置くべし、座敷の壁に荷物を寄せかけて置くべからず、疊の落込みて、柔かなる所あらば、疊を上げて是を見よ、蚊帳の内よりはかたわきに立より、壁に添うて臥すべし、夜盜入て、釣手を切り、押包む時の用心なり、背に寢たる所をば、わきへ替て寢直れ、太刀は柄口を我が身に添へて置くべし、遊女に戲れて金銀を盜まるゝな、例令ひ呼ぶとも心許すな、さて第一の用心には、堪忍にまさるものなし、船頭馬方牛遣などは、口がましく惡態しう、我儘なる者たれば是に負けじとする時は、必ず大事の基となる、金錢二三文を高く貪へば、萬事早く調ふなり、陣笠巾着も高き所に置くべからず、忘れ易きものなり、旅籠錢は宵に渡すべからず、朝立つときに渡すべし、錢を替るには金銀を手放し、人を賴みて替にしぬれば惡しき銀にすりかへらるゝ事あり、しるしを見せて、錢を取寄せ、其後に渡すべし、道の左右に神や佛の堂社あらば、手を合せ心に念じて通るべし、守りの神となり給ふなり」

旅行の用心を說く程に物騷であつた。必ずしも萬治頃がしかく警戒を要したのみではない、江戸時代を通じて、斯る戒心を旅行に於ける必須事件としたのであらう。萬治頃の東海道では、馬の少い所が隨處にあつた。品川・原・蒲原・江尻などは、いづれも、馬少しとあり、殊に原は道中一番のあしき所なりと云ひ、蒲原にては「こゝは、甚だ馬の不自由なる所なり、殊に乘掛の旅人には、宿を貸さず、たとひ宿かせども旅籠錢他所より一倍高し、其故に、宿のうちに馬なし、若し馬を借らんといへば、やどより宿の問屋に案內をいふて、問屋の手形をとり、一里も二里も、わき在郷へ馬を借りに行く故に、むづかしがるなりこれ問屋の惡しき故なりと、所の者云ふなり」と記してゐる。佐夜の中山には深夜の旅行を戒め、酒匂には「追剝多し、夜深に出づべからず」とある。鈴ケ森でも「用心わろき道なれば夜深く行くを愼むべし」と注意するほどに江戸近くはあつたが危險區域であつた。白井權八が腕の冴えた「お若けいの、お待ちなせへ」と幡隨院長兵衛が飛び出したのは、强ちに狂言作家の想像のみではなかつた。

同じ書に「旅籠屋の遠き所には店屋の餅團子、茶屋の燒餅、其外在所により宿によりて、國の名物酒肴、煮賣燒賣色々ありて」とあるが、其頃の東海道の名物は何であつたらうか、一寸取調べて見よう。品川にて「色赤く、形鷄冠苔のちいさき」品川海苔は土地の名產と云ふだけであるから、此類のものは姑く措き、程ケ谷の町はづれ、坂の下なる燒餅、畑村の鮎鮓、うなぎ島が原の饅の燒賣・芋餅、新田の鰻の蒲燒、宇都の山の十團子、岡部の燒豆腐、藤枝の瀨戸の染飯、日坂の蕨餅、見附の溫飩蕎麥切、猿が馬場の柏餅、杖衝坂の饅頭、生野の煎じ飴、土山の溫飩蕎麥切、水口の鮒汁、草津の姥ケ餅などが、旅人を惡むる土地々々の名物であつた。「富士の山川白酒をこちや姉さん出しかけ蒲原へ」と歌はれた如く、富士の山川白酒も亦近世有名であつたことを附け加へねばならぬ。

昔から此道ばかり盛であつたものは、遊女窩娼の徒である。鎌倉時代にも、大磯・橋本・手越・黃瀨川・池田、いづれも遊女の巢窟として知られてゐたが、東海道名所記に見えたる此等の名物は、品川宿の遊女、沼津の比丘尼、江尻の遊女、あべ川の遊女、日坂の飯盛、御油赤坂の遊女などである。岡崎女郞衆のことは見えぬ。けれど此等は單に其十が一に過ぎないのであらう。東海道名所圖繪にも、關に泊して招妓を買ふとあるが如く、五十三次到る處に、此旅の憂さ晴らしは存在してゐたのであつた。

東海道五十三次に關する古往今來の書籍圖畫は其數を知らさ

るほどに多いが、どうしても廣重畫の五十三次と一九の膝栗毛とに止めを刺すと云はねばならぬ。廣重と云へば、五十三次を連想させ、五十三次と云へば廣重を思ひ出させる。一九と云へば東海道中膝栗毛、東海道中膝栗毛と云へば一九と云はれるほどにいづれも高名のものである。

廣重一生の描く所は非常に多數であるが、其うち傑作の畫集としては、近江八景と、江戸近郊八景と、それから東海道五十三次との三者を推すべきである。五十三次にも、隷書東海道あり、行書東海道あり、折本東海道あり、半折横繪の東海道（狂歌入東海道）あり、半折立繪の東海道あり、五十三次名所圖繪あり、其他にも十數種あるが、傑作とすべきは、最初になつた竹内保永堂版の分である。小島烏水氏は、其の浮世繪と風景畫に於いて之を天保五年の版としてゐるが、信憑すべきである。

東海道名所圖繪の刊行せられたのは、寛政九年で、十返舍一九が始めて膝栗毛を出したのは、享和二年である。東海道に關する智識と興趣とは餘程行き渡つて來た。かてゝ加へて、寶永年度を初めとして明和八年より流行しかゝつたお蔭參りは文政十一年十二年十三年に渉りて非常な勢となつた。其初は西國筋のものが多かつたが、後には關東邊までにも傳染して、拔參りするもの引きも切らず、文政十二年伊勢大神宮正遷宮の折の參詣者は百十八萬餘人であつたと云ふ。同十三年の三月中旬頃からは六七歳の子供どもが阿波の國より拔參りをしたのを手始めとして、四國南海のものども競つて之に倣ひ、老いも若きも、子や孫を引連れての拔參り、其の甚しきになると、井戸端にて米をといでゐた下婢が着のみ着のまゝの拔け參り、四十ばかりの女の、乳呑兒を懷に、三歳ばかりのを背に負ひ、七つばかりの子の帶に紐つけて、我が帶に括りつけての拔參り。御祓の降ること處々にあつて、奇瑞々々と囃し立てたれば、拔參りの流行はいやが上にも甚しくなつた。尤も此所謂奇瑞は手品同樣なもので大坂の道頓堀邊に降つたのは、糸の片端に御祓を括りつけ、一方には油揚を括りつけてあつたと云ふので、大抵其種は判明になる。鳶や烏に攫はせて、空中から降らせようとする宣傳法であつたのである。文政十三年御蔭耳目に「七月廿七日、徳山家中小川庄大夫江戸より歸り來り、是が咄には、此節關東筋御蔭參り益々盛ると、道中も殊の外群集をなし、施行處々に在り、其外施行馬、施行駕籠など、毛氈・縮緬等にて飾りを爲し、男女の差別なく相應に衣服を飾りて人を擔げ廻る事、上方筋の三四月頃の有樣に異ならず」と云へりとあるから、關東地方の拔參り、即御蔭參りは此頃盛であつたと見える。東海道旅行の氣運はもう民衆的であつた。

二

天保元年廣重は御馬進獻の役人に從つて親しく東海道を旅行し、歸つて後始め　東海道五十三次に筆を執つたのである。膝栗毛や山東京傳等の東海道指南に刺戟されたことは云ふまでもないが、彼は從來東都名所、江戸名所、江都名所、江都勝景等描くに名木等に拠つてゐた筆を轉じて羈旅の情景に自然の面目を寫し出さんとしたのであつた。

廣重の東海道初版の出版に與つて江湖の歡迎を受けて、夥しく刷り出したのである。其後彼れは屢々東海道を旅行し、又四方を漫遊して山水を寫したが、前に好評を博した結果は又幾種の東海道となつて、現はれたのである。しかし最初の保永堂版が、最も傑作で、落款で、用筆と用心とがあり、けれんも細工もなかつたのに及ぶものはない。此版には後年改刻したものが數種ある。日本橋も改刻の分には大々的の四行師が描き出されてゐるが、初版の分には、橋上の行列先供と擔ぐ魚屋と狗兒とのみである。川崎六郷の渡も、初版には筏の上に筏士が佇んでゐるが、後の分には之を省いてゐる。戸塚の茶店では旅客が馬から下りるのと上るとの相違があつて、下りる方が初めの版である。大津の走井茶店の背景に山をぼかしたのは初めの版で、後の分になると、金谷山を描いてない。摺にしても初摺と後摺りには相違がある。蒲原の夜の雪で上部に黒く一抹を刷してゐる方が初摺で、普通は屋根の上が黒くぼかしてある。濱松の冬枯れ道芝に俳諧をかけたのは初摺で、後摺になると、此俳諧が刻る位置か若しくは省いてある。此竹内保永堂版も其初は竹内保永堂と仙鶴堂との合刊に成つたもので、日本橋、品川、川崎、保土ケ谷、戸塚、平塚、興津、鞠子、藤枝、日坂、袋井などの諸図には保永堂、仙鶴堂若しくは鶴喜、竹保の合印が押してある。しかし御油の宿屋には彫工治郎兵衛摺師平兵衛、一立斎の看板とともに竹之内板と明に大書してあり、庄野の白雨には竹のうちと云ふ番傘をさゝせてゐるから、此頃にはもう竹内保永堂一軒の出版となつたと見える。

保永堂版の五十三次は彼の出世作たると同時に、彼を不朽ならしむる傑作で、廣重と五十三次との間に切つても切れぬ連鎖を作つてゐる。此五十三次に於いて廣重は得意の自然現象を屢々取扱つてゐる。其うち最も優れたものは、庄野の白雨と蒲原の夜の雪とであるが、其他にも土山の春雨、大磯の虎の雨、龜山の雪晴、三島の朝霧、見附の天龍川、沼津の黄昏などがある。庄野の白雨は豪快なる筆致で、斜に降り注ぐ夕立の線は圖一面となつて、雨勢に傾く竹林の遠きは淡く、中なるは黒く、

近きは、竹藪を黜じて、緑の色も濃い。自然が盡く鳴動する中を、人は右往左往に走つて、蓑着た男はいづれも輕げに、傘さした男と、駕籠舁きとは行き惱んでゐる。廣重は自然現象を巧に取り扱ふ名人であるから其傑作中に雨と雪と、霧と夜景とが多いのは、當然である。しかし雨にも種類がある。春雨は靜に、時雨は淋しく、夕立は慌しく、五月雨は鬱陶しい。廣重が描いた壯快な雨には庄野の白雨と京都名所中の糺森の雷雨と、横綸近江八景中の唐崎の夜雨と名所江戸百景中の大橋あたけの夕立とがある。同じく夕立にしても、庄野の白雨は驛路の寂しいうちの慌しさを語り、糺森の雷雨と大橋あたけの夕立とは都會の驟雨情調を描いたのだ。唐崎の夜雨になると、一大老松を圍んで沛然たる直線的大雨が畫面全體に降り瀉いで、雨聲以外に何ものもなく、大自然は沈默の間に活躍してゐるばかりである。土山の春雨は絹の目のやうに降る雨の中を默々として赤合羽青合羽の行列が板橋を踏んで驛に入らうとしてゐるので、青葉の水との諧調が春雨にふさはしい。間の土山雨が降るの俗謠は春雨に於いて最も詩趣を發揮してゐるが、廣重は此詩趣を巧に具體化したのであつた。大磯の虎の雨は蕭々たる細雨の中を人や馬やがしよぼぬれながらに行く。沖には波の上漕ぐ舟が二つ三つ見える。松並木の此方には高麗山が黒く聳えて、藍色

の濱邊には、磯馴松が參差として淋しく、稻田はもう刈り取られて、稻叢の色も薄く黄ばんでゐる。蒲原の夜の雪は、沈々たる驛路の夜冷く、龜山の朝晴に城壁を仰ぎながらの行列は、心地清々しく、朝暾の薄紅は山の端を染めて、瑠璃紺青の大空と相映えてゐる。廣重は好んで雪を畫いた。火のやうに雜踏する都會をも又都會の近郊をも一白の雪に埋めて之を美化する技倆と才幹とがあつた。名所江戸百景中にも淺草觀音あり、十萬坪あり、深川の木場あり、目黒太鼓橋夕日の岡あり、藪小路ありて、いづれも此畫集中の優秀なるものである。其他東都名所江都勝景等にも雪を畫題としたものが少くない。眞崎・三囲・神田明神・湯島天神・日本橋・増上寺・井頭池など、算へ立てると盡きぬほどあつて、いづれも其色彩に於いて其配合に於いて、畫圖の美しさは、目覺めるばかりである。特に彼が雪景の名作としては、五十三次の蒲原と横綸近江八景中の比良の暮雪とを推さねばならぬ。都會の雪はどこやらに暖か味があるが、寒村荒驛の雪は流石に冷い。江戸近郊八景中の吾嬬杜夜雨と、飛鳥山の暮雪とは拔群の好畫圖であるが、飛鳥山の暮雪と比良の暮雪とを比すると、比良と飛鳥山との大小高低が異るが如く、雪の感じに於いても相違がある。飛鳥山には近郊の春があつて、比良には蕭條たる山里の氣分がしんみりと深い。

三島の朝霧は三島神社の鳥居や、石燈籠や玉垣や森や民家や道行く人やらを朦朧たる霧中に幻の如く漂はせて、朝發の旅人を前景に配置したのである。其旅人にも歩行あり、馬あり、駕籠ありて一團となつて此宿を離れようとしてゐる。見附の天龍川では川向ひの森や小山やが夢のやうに浮いて、河岸には出る舟もあり、着く舟もあり、川原には舟待つ一群の旅人もゐる。近景の小舟には啣へ煙管の船頭が舷に佇んで、蹲踞んだ船頭は竿を握つてゐる。霧では木曾街道六十九次の宮越と長久保とが山村の荒涼たる氣分を現して、淋しさが身にしみ〲と浸み渡るやうである。三島や見附では、やがて其霧も霽れて麗かな日の光がさし來るだらうが、宮の越長久保では、次第に霧の底に沈んで、やがては暗の夜の裡に葬られてしまふであらう。

沼津の黄昏は月が並木にかゝつて、驛路の宿を急ぐ旅人の足元には疲勞が見えてゐる。月夜の美しさを畫いたものには江戸近郊八景の玉川の秋月の清婉なると、横繪近江八景の石山の秋月とが際立つて優れてゐる。石山では一つの生物もなく、沈々たる一輪の明月は石山の月見寮を照らし、石山の石を照らし、石山寺を照らし、瀬田川を照して、其下には瀬田の長橋と繋いだ舟とが眠るが如く横はつてゐる。萬籟は死の如く靜に、耳を傾けて聽かば流水の音のみが、眠を誘ふ子守唄のやうに響くであらう。自然の靜寂の莊嚴なるには思はず襟を正させる。

東海道五十三次は江戸の日本橋から始まつて京の三條大橋で終る。其間に程ケ谷の新町橋、戸塚の元町橋、藤澤の遊行寺前の橋、吉田で豐川橋があり、岡崎に矢矧橋があり、掛川の土橋あり、四日市三重川の板橋あり、土山の鈴鹿橋がある。渡には川崎の六郷の渡、小田原の酒匂川、興津の興津川、府中の安部川、島田・金谷の大井川、見附の天龍川、荒井の渡し、桑名の七里渡がある。橋が十ケ所に、渡が九ケ所の計算になる。廣重は之をどう書き分けたか。試に仔細點撿して見よう。

日本橋では大名の先供が橋の上にさしかゝつて、之から東海道に發足しやうとするのであるが、三條の大橋では、東海道中の旅を恙なく畢つて、行列が蹴上粟田口を過ぎて今方に京都に到着したのである。橋の上には被衣を被つた京上臈も見える。茶筅賣も見える。日傘さしかけたお家さんも見える。欄干に凭りかゝつて河原を俯瞰する閑人もある。繩手の家々から八坂の塔、清水の觀音堂、將軍塚のあたりまで一目に收まつて、京の日は長閑である。吉田の豐川橋では寸人豆馬の行列を橋の足場から人足が小手かざして打望んでゐる。藍を溶した水の上には荷足船が悠揚として流れてゐる。岡崎の矢矧橋では行列が岡崎の宿へ入らうとする、その行手には岡崎城が巍然として聳えて

ゐる。今宵の泊りを心に描きながら、一行の足も輕げに見える。程ケ谷の新町橋には虚無僧が點じ、戸塚の元町橋には老いたる旅人の姿も心細げに、藤澤の遊行寺前の橋には大山石尊參り、按摩の一行、掛川の土橋では一僕を伴ひたる円合羽着、腰の曲つた婆様、綱を離れた風船球の行手に秋葉山が峙ッてゐる。四日市の板橋には海手から吹く潮風强く、笠を飛ばして追ひかける旅人の姿に滑稽味があり。六郷の渡では女を乘せた渡舟に春風吹いて、現今とは違つて、此邊でももう旅らしい氣分がある。酒匂川、島田金谷の大井川はいづれも人物を小さく配して、全局を觀せると云ふ手法であるが、興津川では頑丈な角力取の川渡り、安部川では華車な女の輦臺渡し、荒井では定紋打つたる幕引廻しての御座船は大名の威光を見せたのであらう。此方の舟では大口開いて欠伸をするものもあれば、居睡りするものもある。桑名の七里の渡では、首尾善く安着とあつて、船は帆を卷き下して、旅人の顔も嬉し氣である。

神奈川の宿は出女の旅人を無理止めするのに、旅の可笑味あるが、御油になると、一層之が露骨で遠慮なく客引情調が現はれてゐる。赤坂の旅籠は名物招婦の夕化粧、湯上りの旅人もあれば、寢轉んで煙草ふかす旅人もある。夕餐の膳は運ばれて、按摩は如何さまと御門を伺つてゐる。隸書東海道の同じ宿も旅宿の光景であるが、保永堂版が一部を描いたのとは違つて、外面よりの光景を寫して、彼此參照すると、一段の妙味を覺える。關では本陣に大名の泊りいかめしく、定紋付の大幕打つた旅館の門前には高札を掲げて出入の光景も物々しい。江戸時代の戯作本に最も善く廣告の宣傳をする仙女香、此でも白粉美艶仙女香とともに、何々守殿の札と並んでゐるのは、此畫集の發行よかつたことを立證させる。

名物として此畫集に出てゐるものは、鞠子のとろゝ汁の茶屋があり、二川猿ケ馬場のかしは餅屋あり、鳴海の有松絞では婦人の旅姿を點綴して其色映となし、水口では名物干瓢の製造を示し、石部には目川の菜飯をきかせ、草津には姥ケ餅屋の呼ひ大津には走井餅の茶屋を描いてゐる。其他特殊の名物を描いたものには、池鯉鮒に馬市あり、宮に熱田の神事がある。原の富士、日坂の佐夜中山夜啼石などは江尻の三保松原とともに、當然なくてはならぬ景物である。

保永堂版の五十三次中、雨雪を除いて、名作と思はれるのは石藥師である。東海道名所圖絵を按ずるに「高富山瑠璃光院石藥師寺、石藥師驛の西にあり、眞言宗」とありて「本尊石佛藥師如來、長七尺五寸、相傳ふ弘法大師感得の靈像なり、葛西石をもつて彫刻す」と記し、此本尊の靈驗いやちこたるを述べて、

「此驛の舊號を高富といひしを、自然と[illegible]を質して石藥師と呼び、山號を高富といふ」とある。それほど此驛と石藥師寺とは緣が深い。名所圖繪の石藥師にも門前に驛路が通じて、門より眞直に田間の小路があり、右には疎林があつて其間に民家が隱見し、背後に山脈が重疊してゐる實景を描いてあるが廣重は恰も此處を畫いてゐる。行書東海道では寺の石藥師で、畫集中の傑作であるが、保永堂版の石藥師は雨でなく雪でなく、晴の石藥師で、落寞たる初冬の淋しさがしみ〲と畫面に漂ふ。馬背に腰打掛けて驛路を辿る旅人も杖つきながらとぼ〲と歩む道行く人も何となくうら悲しく見える。刈取られた稻田のあとを鋤く百姓の傍には稻叢が堆高い。藥師寺門前の小路には荷を擔ぐ男の足にも霜月頃の風が冷かであらう。前なる山は青く、中なる山は黑く、遠きは藍色にぼかしてある。何と云ふ巧みさであらう。南蘋の支那臭くなく、四條の京風なく、狩野の型に陷つたのとは違つて、廣重獨得の畫境である。

冬の日の冷く淋しきは、又濱松の冬枯に現はれてゐる。遠見には濱松城ありて、此は、宿外れの街道である。代赭に色彩どつた芝生に、霜枯の蕭條たるさまを思はせ、大杉の下で焚火にあたる雲助のさま〲なる風情、落葉を掃く子守、一吹ふかしながら焚火を羨しげに立ち去り兼ねる旅人、さゝんさの松風も

定めし哀く身に泌みることゝ思はれる。隷書東海道の濱松は奇拔な彼の筆法で海畔の旅人を描いて其畫集中の傑作であるが、五十三次の旅愁は冬枯に一段と痛切である。袋井の出茶屋に旅の情緒は茶屋の藥罐から立ち上る湯氣を中心として巧に表現されてゐるが、二川の猿ケ馬場で三味線を手に背に流浪ひ行く瞽女の姿は又なく悲痛である。

一九は其の膝栗毛に於いて、東海道の殷賑を說いて「はや諸家の回勤往來の貴賤櫛の齒を挽くが如く問屋鶴首をかけり、小荷駄馬飛んで走る街道のにぎはひいさましく」と叙してゐるほどに、近世日本交通の大動脈なる東海道の往來は頻繁であつた。若し上つ滑りの、皮相的觀察を以て描寫したならば、唯に往き來るさの賑ひのみを寫して能事としたであらう。けれど廣重の態度は飽くまでも眞面目であつた。彼は能く內部の省察をした。羈旅の情を捕捉して、情と景と並び到る處を描き出した。さま〲の旅人を配して、旅の眞味を心ゆくまで味はつて見ようとしたのである。彼には誇大の手法も衒奇の筆致もなかつた。よし先輩の感化はあつたにしろ、それは描法の末技のみで、彼が自然を觀る方法や自然を描き出す方法やらは彼自ら獨得のものであつた。

北齋に宗因の談林風がありとすれば、廣重は芭蕉の正風であ

る。芭蕉が羈旅詩人たりしが如く、廣重も羈旅畫家であつた。芭蕉が自然の同情ある觀察者であり、自然の摯實なる研究者でありしが如く、廣重も亦同樣であつた。五十三次は自然の同情ある觀察者自然の眞摯なる研究者としての廣重が最初の產物であつた。從來都會情調のみに嘆美の眼を睜つた彼は、一轉して旅行情緒の詠歎者となつたのである。

三

保永堂版の五十三次は五十三驛の旅行に於ける彼が第一印象を描き出したものである。隷書東海道になると、彼の觀察は鋭くなりたるとともに、彼の筆致も細かになつてゐる。行書東海道は拾遺補闕の感がないではない。狂歌入東海道はスケツチ流の處に山椒小粒の味がある。其他の東海道になると、寧ろ描かんが爲めに描いたもので、湧き來る感興を抑へ切れずに筆を揮つた保永堂板と相去ること甚だ遠しと云ふべきである。保永堂板の眞價は極めて眞面目で大まかで、五十三次に漲つたそれ〲の精神氣分を善く捉へた點にある。板も摺も大まかに、けばけばしいのを避けて、極めて質滋(じみ)なところに無限の價がある。保永堂板が同種の諸版に對して、優れた所以は此に在るのだ。

大まかと云ふは必ずしも粗略と云ふ義ではない。金澤八景は三八景の一として名高くあるが、極めて粗略省筆である。粗筆必ずしも藝術味の乏しいわけではないが、其うちに價の高いのがあるは、必ずしも一概に名作と云ふ所以でもなく、蓋し世間に傳はることが少い理由の爲めもある。立繪二枚續きの猿橋は廣重作品中の最高價格のものであるが、其筆は寧ろ粗略で、又非常の傑作とは稱し難い。然るに其價格が現時五千金にも上るのは、品が極めて稀れだからである。しかし稀少なるが故に藝術味が乏しいと云ふのでもなく、夥多であるが故に藝術味が豐かだと云ふこともない。寫樂の似顏畫は俗受けのよくない爲に當時に容れられなかつた、從つて現存するものが割合に乏しいところから非常な高値である。けれど其藝術味は甚だ僅かである。廣重は江戸情調の讃美者で、又其紹介者であり、宣傳者であつた。江戸の風景で彼の筆に上らないものは殆んどなからう。彼は根氣よく、江戸の隅から隅まで、猶進んで江戸を繞れる郊外の風景をも物色して其筆に上せた。隅田川の沿岸は彼の絕愛する所で、幾多の名品を殘してゐる。江戸繁華の中心なる、東海道の出發點なる日本橋に就いても、或は晴天を描き、或は雪中を描き、其觀察のしかたをいろ〱に變へて畫いてゐる。兩國の花火の如き、高輪の海岸の如き、新吉原の遊廓の如き彼は好んで、筆を異にして描寫してゐる。御府內備考・江戸砂

江戸名所圖繪・江戸鹿子・東都歳事記等の典籍は江戸の故事來歴を後世に傳へるものであるが、具體的に江戸のありし面影を永遠に表現するものは廣重の江戸名所の各種錦繪である。或は坂盡しとなり、或は橋づくしとなり、舊跡盡となり、高名會亭盡となり、中板となり、半折となり、小板形となり、短冊形となり、三枚續となり、横繪となり、縱繪となり、或は八景となり十二景となり、見立となり、年中行事となり、百景となり、或は美人取合せとなり、狂句合せとなり、狂歌入となり、スケツチの江戸土産となり、江戸めぐりとなつた。而して其集大成したるものは名所江戸百景であらう。廣重掉尾の大畫集で、竹内板の東海道五十三次を彼の出世作とすれば、魚榮板の江戸百景は、方に彼の最後を飾るべき記念碑であらう。盛名を馳せた彼の大作であつたから、一枚出づる毎に世間の喝采を博し、商行も極めてよかつた。如何にも構圖に思ひ切つたところがあつて、名品も少くないではない。永代橋の橋桁を大きく見せて、下弦の月に滿天の星斗輝く夕、白魚取の篝火が赤く映えた佃の風景、猫が蹲踞ふ櫺子窓のあなたに遠く淺草反圃を絡繹として往き交ふ酉の市詣での群集を見せて、疊の上にお酉樣の土産を點じた技巧、繁華の巷を白皚々の雪で美化した淺草觀音の仲店、直線の巧みた配合にて畫面の諧調と緊張味とを見せ、殊に手近い番傘と狗兒との曲線を以て、總べてが直線的で成り立つてゐる單調を破つたところに作家の非凡な構圖的技能を現した深川木場の雪景、對岸に黑よりも黑く、其裡に火見櫓や、尾の棟、樹立やらを見せて、橋上には馬の背を分ける驟雨に男女が慌てふためいて驅け走す、其下には大川の水緩やかなる中をゆつたりと筏が流れ行く大橋あたけの夕立、或は月白き竹河岸の夕、或は燕飛び交ふ鎧の渡し、愛宕下藪小路の雪に雀の群の羽ばたきせる、目黑夕日の岡太鼓橋の降り積む雪の中を行人の歩みかねたる、東雲の明け行く空を嫖客の歸り行く、それを見送つて後朝の別れをする遊女のだらしなき新吉原の曉、月冴えし夜に人影の婆娑たるを寫した猿若町の夜など、とり／＼に面白いが、之を概するに、此畫集には凡作を少しとせぬ。讀者に任せて書き擲つた餘勢は北齋張りの手品を用ひたもの丶多いに反感と厭味とを起させる。特に内藤新宿に馬の尻を大きく描いて馬糞を散らしたる、羽根田辨天の社の舟夫の艪を漕ぐ太腕と毛脛とを畫面大に現はしたるが如きは、凡作と云はんよりは寧ろ駄作惡作である。斯ほどまでに劣惡ならざるも、屋根舟を近く大きく寫して見たり、燕子花の二三輪を全幅に描き出したり、月の輪の松から不忍池をのぞかせたり、櫻の花と幹とを大きく畫いたり、紅葉の間から遠見に風景を見せたりして、北齋が好ん

で富嶽百景に用ひた白痴をどしの手法を到る處に濫發してゐる。隷書東海道などにも大きく紙鳶を虚空に飛揚させて遠景をパノラマ式に展開させたのもあるが、名所江戸百景ほどにあくどいものではなかつた。一つ二つは奇巧も目先が變つてよい。打擴げた網の中には水の涼味がさつと迸しる。雪の白きに對して雷神門の大提灯は紅(くれなゐ)と映えてゐる。此等の構圖は作家の多技を思はせるのであるが、名所江戸百景の樣に、引き切りなしの詭計には殆ど飽き／＼せざるを得ない。のみならず西洋繪具を用ひたが爲にけば／＼しくなりて畫の風致を損ねること少からず、そのうちにも赤色の如きは既に變色してしまつてゐる。淺草觀音の大提灯、眞間・國府の臺の紅葉、兩國の花火、王子の狐火の如きは黑ずんだ色に變じて、切角の效果を無駄に歸してゐるのである。であるから名所江戸百景は彼が最後を飾るべき記念碑ではあつたが、賣行きはよかつたにしろ、其中の十數枚を除いては、餘興附全部百二十枚の多數は寧ろ彼の爲に光榮ある作ではなかつた。此點に於いて富士三十六景の如きは、更に一段と失敗の作と云はねばならぬ。しかし多作の彼として、殊に名聲隆々たりし彼として、濫作の弊に陷つたのは必ずしも無理でない。諸國六十餘州名所圖繪にしたところで、其中には伯耆大野の大山の遠望、出雲大社の霧、備後阿[illegible]の月夜

壹岐志作の雪景などの佳作もないではないが他の名作揃ひの畫集に比すると遥に價値の少いものである。之を要するに竪行のよかつたものでも必ずしも藝術味の優れたものとは云へぬ。

一幽齋廣重畫とある東都名所は、彼の作中最も古きものゝ一であらう。最古と云ふ點から珍重せられて、大揃十枚の價値は頗る不廉であるが、畫面にのんびりした所が乏しく筆つきも固くて、大した名品とは思はれぬ。喜鶴堂板の江都名所には幽齋の印章がある(神田明神東坂の如き)から、之も江戸名所中の古いものであらうが、構圖が十分なりとは思はれないものが少くない。山庄板の江戸名所坂づくしは稀品に屬するが、筆致やゝ硬くして、敢て佳作と目すべきものでない。しかし歳とともに彼の技は精熟し、自然を觀察するに鋭利となつて、江戸の風致と江戸の情調とは、殆ど擧げて彼の筆に上つた。江戸時代を通じて廣重ほど善く江戸の面影を傳へたものはない。江戸名所のスケッチなる繪本江戸土産七冊は今日でも江戸を畫かんとする畫家に取りての玉手箱であり、江戸研究者に取りても、江戸を偲ばんとするものに取りても、無二の好指針である。

繪本江戸土産は、西村重長曾て之を著し、次に鈴木春信も之を描いた。廣重は其書名を襲いで、極めて瀟洒輕妙の筆致を以て江戸及其近郊のスケッチを作つたので、錦繪類とは又別種の

趣があつて面白い。蘆荻生ひ茂る中に白帆を浮べて、山谷堀より待乳山の聖天堂を樹立深き中に見せたる、水神の森に雨蕭々たる、雪は木母寺に白く、柳島に柔艫軋々たる、いづれも棄て難い風情がある。吾嬬の森は近郊八景と同工にして、彼は雨に、此は晴の異趣を有し、木下川の水畔に柳絲長くして、引舟の長閑けさは南畫の景致がある。逆井の渡、利根川のばら／＼松彼に渡船の雅趣ありて、此に網舟の風流がある。國府の臺は名所江戸百景の原圖であるが、百景よりもすぐれてゐる。深川木場・永代橋・佃の夜景は、いづれも百景中での名作が出たのも偶然でないことを思はせる。羽田辨財天社は近郊八景に落雁を畫いた場所で、畫趣掬すべく、江戸見坂の月夜は、坂づくしの同圖よりも一段と詩味がある。多摩川は近郊八景に秋月を描いて、畫集中の傑作であるが、繪本の多摩川も、堤の柳嫋々として、清淺の水に云ひ知れぬ凉趣が溢る。四つ谷大木戸内藤新宿は上々の佳作で、廣重はなぜ名所江戸百景中に此圖柄を採らなかつたであらうかと疑はれる。**山吹の里姿見橋は篇中名作の一に數へよう。**御茶の水・水道橋・根岸の里・今戸瓦竈・千住大橋・淺草田圃・新吉原の夜景などいづれも面白いが、衣紋坂・辨天山の雪景はとりわけ佳品である。日本堤・初音の馬場・竹河岸はいづれも江戸百景の模本で、雷神門の大提灯は、彼に雪にして、此に雨である。首尾の松に於ける屋根舟の舳に立つた藝者の姿は婀娜に、小梅堤の土橋に往き來ふ田夫村婦の風俗は野趣横溢してゐる。四つ木の曳舟・新宿の渡し場・目黒の元不二・大井の原は近郊の風流今日の前に見るやうで、目黒の太鼓橋夕日の岡は百景と同じく雪景である。

廣重江戸土産は第七篇で終つてゐる。しかし此草紙の發行よかりしが爲めに、第八より第十に至るまで續刊された。第四第六の二篇を除いて他の諸篇は人情本作家の松亭金水が序文を書いてゐるが、第八篇にも序して「一立齋廣重子は、故豐廣の高弟にて、所謂浮世畫師なりしが、一たび畫風を更め 、山水及び花鳥の風景に描くことを得しより、一時雷名を轟かしゝも、嗚呼天此人に壽を假さず、まだこよろぎの五十ぢあまり、終に沒故して黄泉に到る、こゝにこの江都土産は、彌の年より彼人の、筆に就りて都鄙遠近これを賞ばざるものなし、稍に編を嗣てもて、八編になるに及び、既に古人の紀念となりぬ、しかはあれどもこの次々も猶染筆の遺れるあれば、發行の日近きにあり、冀くは愛顧の君子、書厨に收めて四季折々に慰み給へと伏而申す」とある。しかし其實は二世廣重の筆に成つてゐる。廣重の死は安政五年であるが此八篇は文久元年に梓行された。初篇二篇の再刊は嘉永三年、三篇四篇の刊行も同年である

から、廣重晩年の作であつた。のみならず、名所江戸百景の最後の分も、まだ梓行されないうちに廣重は物故したのである。彼の一生は江戸情調と終始してゐる。

四

「箱根八里の長持唄には猛き率領の心を和らげ、竹に雀の馬士唄ては鬼殺を燗せしむ、是その歌の徳利酒、春めや謡の旅衣都をさして行きがけの駄賃帳を繰返し、筆の建場に雲助の息杖をしてゑいやらやつと書き綴たる東海道五十三次の紀行」と、一九は膝栗毛に序して、彌次郎兵衛喜多八の兩人を江戸から鹿島立ちさせた。東海道名所記の樂阿彌は吉原の傾城町に歎息し、沼津の比丘尼に慟哭して、其の處々に詠じた狂歌も自から教訓的であつたが、江戸全盛時代に生れた彌次郎兵衛喜多八は輕快なる、隨處に駄洒落を吐き散らす、口ばかり達者の江戸つ子であつた。されば一部の膝栗毛は、太平的氣分を漂はせた諧謔滑稽のもので、眞率に靜に東海道情調を味はせ、旅の眞味を會得させるものではなかつた。彌次喜多と云ふ剽輕者の面目は躍如としてゐるが、旅のはかなき、やるせなき淋しさなどは遂に見る由がなかつた。固より膝栗毛に對して之を責め之を求めようとするのは酷である。人生の旅をも浮いた〱で過さうとするのは、江戸つ子の理想で、又一九の人世觀であつた。浮世は夢の如し、歡をなす幾許ぞと云ふ感じは、江戸全盛時代に於いて、太平の享樂的氣分を有した江戸つ子の共有する概念であつた。彌次喜多が持つてゐた觀念は即ち一九の觀念であつた。

廣重の東海道を觀た感じが之に異つてゐることは前にも述べた如くである。彼には眞率があつた、彼には熱があつた。彼は表面を流るゝ驛路の繁昌を描かずに、内容の中に包まれたる淋しさを寫した。此感じは獨り東海道に於いてのみでない、彼が描いた總ての地方情調に現はれてゐる。否寧ろ彼の畫全體を通じての感じであつたらう。江戸の景物を描くにしても、彼の畫は其繁盛を畫いたものよりか、淋しい靜かな處を描いたものに傑作を殘してゐる。彼は其角でなくして、どうしても芭蕉であつた。動の畫家でなくして、寧ろ靜の畫家であつた。雨や雪や霧や夜景に於いて彼が優れて成功してゐるのも此所以であらう。彼の人物は師たる豐廣の感化を受けてゐるが、其割合に線が動く、從つて、柔味に乏しい。されば、風景にあしらふに大きな人物を以てしたよりは小人物を配した方が適してゐた。彼は人物畫家ではなくして、どこまでも風景畫家であつた。又同じ人物をあしらふにしても女性よりは男性に於いて配合の妙を觀た。東海道名所圖繪に於いて、彼は上部に五十三次各驛の風

景を描き、下部に美人の諸態を配した。しかし之は彼の道樂であつて、固より彼の本領ではなかつた。東海道の人物も原に於ける美人の行旅などよりも、雲助、駕籠舁、馬士、飛脚の徂徠が似合つてゐる。之れ必ずしも貴重の人物の線が勁き爲めに、女性に適さないと云ふばかりでなく、旅の寂しみを描き出すに於いて、色彩の華やかな色白の美人よりも、じみな赤銅色のくすんだ男性の方が適してゐるからである。江の島詣の如きは、土地柄だけに美人の配合が似合はしい。

今日の東海道はもうもとの東海道でない。東海道五十三次の光景は日に凋落して、僅に處々にそれかと思ふものを殘すばかりだ。それももう長くはなく、全く舊觀を一掃してしまふ時があらう。本陣脇本陣も無くなり、並木の松も次第に枯れ果て又切倒されんとしてゐる。東海道本線の沿路に當る所は避暑地として別莊地として新しく榮えて行くが、沿路に遠い所は其地に特殊の發達事情のない限り多く敗殘の地とならうとしてゐる。相模駿河遠江の宿驛は鐵道の線路に沿ひ、伊勢近江の宿驛は關西線東海線近江線路に沿うてゐるが、遠州の一部と三河の宿驛とは線路と離れてゐる。名所舊蹟は存在してゐるが、汽車で經過しては、之を顧みるものもなからう。興津の清見寺、舞坂荒井の濱名湖畔、大磯の鴫立澤、藤澤の遊行寺などは、避暑地若しくは遊覽地であるから、舊時に比すると、之を訪ふものも多くなつたが、夜啼石で聞えた佐夜の中山も、蔦の細道で名高い宇津の山も、宗長の舊蹟ある柴屋寺も、池田の宿の熊野の墳墓も菊川も八橋も之を過ぎるものは稀れであらう。名物も草津の姥ケ餅のみは榮えてゐるが、其他に至りては、所謂告朔の餼羊に過ぎないものが多い。それでも流石に興津江尻間の松並木、三河路などを歩むと、猶東海道の古ひ香が搖曳するかに感ぜられる。

東海道を五十三次と定めたのは、やはり黃山谷の鬼門關外莫道遠、五十三驛是皐州と云ふ詩に基いたのであらう。黃山谷の詩は蘇東坡の詩とともに足利時代から德川初世にかけてはもてはやされて、五山禪僧の愛誦したものであるから、東海道の宿驛を定めるに就いては、多分之に依據したのであらう。之を偶然の暗合などと臆測してゐるのは、時代を解し得ない誤りである。各驛間の里程については、姑く東海道名所記の駄賃付に依り、後年調査のもの丶異れる分だけを括弧内に註して置く。

日本橋――品川　二里
品川――川崎　二里半
川崎――神奈川　二里半
神奈川――程ケ谷　一里　(一里九丁)

程ケ谷——戸塚　二里　(二里九丁)
戸塚——藤澤　二里　(一里三十丁)
藤澤——平塚　三里　(三里半)
平塚——大磯　二十町　(二十七丁)
大磯——小田原　四里
小田原——箱根　四里　(四里八丁)
箱根——三島　三里二十八町
三島——沼津　一里半
沼津——原　一里半
原——吉原　三里半　(三里六丁)
吉原——蒲原　三里　(二里三十丁)
蒲原——由井　一里
由井——興津　二里　(二里十二丁)
興津——江尻　一里二町　(一里三丁)
江尻——府中　二里二十丁　(二里二十七丁)
府中——鞠子　一里半
鞠子——岡部　二里
岡部——藤枝　一里二十六町　(一里二十九丁)
藤枝——島田　二里　(二里八丁)
島田——金谷　一里

金谷——日坂　一里二十四町　(一里二十九丁)
掛川——袋井　二里十六町
袋井——見附　一里半
見附——濱松　三里七町　(四里八丁)
濱松——舞坂　一里十町　(二里三十丁)
舞坂——荒井　二十三町　(舟渡)(一里)
荒井——白須賀　一里十町　(一里二十六丁)
白須賀——二川　二里六町　(二里)
二川——吉田　一里半四町　(一里半)
吉田——御油　二里半四町
御油——赤坂　十六町
赤坂——藤川　二里九町
藤川——岡崎　一里七町　(一里半)
岡崎——池鯉鮒　三里八町　(三里三十町)
池鯉鮒——鳴海　二里半十町　(二里三十丁)
鳴海——宮　一里半
宮——桑名　七里　(舟渡し)
桑名——四日市　三里八町
四日市——石薬師　二里半七町　(二里二十七丁)
石薬師——庄野　二十五町　(二十七丁)

庄野──龜山	二里	
龜山──關	一里半	
關　──坂の下	一里半六町	（一里半）
坂ノ下──土山	二里半	
土山──水口	二里半七町	（二里二十九丁）
水口──石部	三里半	（三里十二丁）
石部──草津	二里十六町	（二里二十五丁）
草津──大津	三里半六町	
大津──京	三里	
江戸──京	合計行程　百二十六里四町	

其のうち最も短距離なのが、御油赤坂間の十六町で、最も長いのが七里の渡を除いては大磯小田原間及小田原箱根間の四里である。武藏・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・近江・山城の十州に渉り、蜿蜒として長蛇の如くあつた。

東海道の旅行を筆初として、廣重は諸國を行脚した。或は木曾街道に、或は甲州に、或は總房に、猶進んでは京坂以西にも及んだらしい。六十餘州圖繪に於ても遠江にては館山寺を選び、三河にては鳳來寺山を描くが如く、街道以外の形勝の地にも巡歷したのであつた。六十餘州圖繪を盡く彼が踏査の實寫したりと云はんは如何なれども、又之を以て多く粉本ありとするも恐らくは云ひ過ぎであらう。彼は案外多く實地に臨んでゐたらしく思はれる。

浪華名所圖繪にはさしたる名作はない。大阪の繁華は彼の筆に向かないのでもあらうか。京都名所では糺森の雨祇園の雪の外に、淀川の三十石船のうちで月に啼く杜鵑を聽くの圖があり、嵐山の藍と流るゝ大堰川のほとりに枝もたはゝに咲く櫻花の圖があり、いづれも佳作と認むべきである。近江八景は彼の好物と見えて、其畫集十餘にも上るが、保永堂榮久堂合板の横繪に優るものがない。江戸近郊八景及金澤八景と併せて三八景と云はれて、廣重の傑作と推稱さるゝものであるが、前にも述べた通り金澤八景はやゝ粗筆に流れ過ぎて風味に乏しい。近江八景は江戸近郊と相並んでの名品で、近郊は優雅を以て勝り、近江は雄渾を以て勝つてゐる。流石に江戸と東海道と琵琶湖とは彼が最も愛好憧憬して居ただけに此三者に於いて傑作を殘したのであつた。

江戸は破壞されたが故に、其近郊の勝地も殆んど遺影を留めないほどに變り果てた。東海道も時勢の潮に推流された。唯それ琵琶湖の大觀だけは、自然の形勝なるが故に、人事の技工を以て之を改めるわけにはゆかぬ。廣重の近江八景と現時の近江八景との間に大差はない。

亡び行く東海道五十三次の俤は、廣重の筆と一九の記述とに依りて、永遠に殘るであらう。しかも駄洒落の東海道でなくして、眞面目の東海道は、唯廣重が之を傳へる。

五

風景畫の獨立が比較的後れてゐることは、總ての國の藝術史が之を證據立てゝゐる。伊太利の文藝復興期に於て風景はたゞ人物の背景に過ぎなかつた。ダ、ヴインチのモナ、リサにしても、ラフアエロのマドンナにしても、チ、アノの聖カテリンの結婚にしても、人物のあしらひに風景を遠見にしてゐる。モナ、リサが謎の微笑をしてゐる背後には、森あり岡あり湖あり、流ありて、橋さへに架つてゐる。同じ人の巖窟の聖母は聖母と其群を繞りて巖峙ち美しい花が咲いてゐる。最後の聖餐には、窓を通して丘陵の起伏が見られる。ラフアエロの聖母の背後には、丈高き樹木や建築物や山や湖水やらが描いてある。チ、アノの聖カテリンの結婚には、樹蔭に牛、羊の群、森に山に雲に水に、それらが青に綠、に、代赭色に彩どられとある。同じ畫家のウルビノ公爵夫人肖像は小窓のあなたに、紫がゝつた雲、野は綠に、森は濃い青色である。同じ人の神聖なる愛にては、猶賦彩が麗しい。左の背後には輪奐の美しい建物が岡の上に聳えて、白馬に鞭打つ人は岡の邊の道を急いでゐる。黑ずんだ大樹のあなた右には湖面が青藍色を湛へて、金色に映えた雲は其上に漂つてゐる。森のこなたには、羊の群が息ふ。ボチチエリーの聖母戴冠にしても、フラ、フイリツポの聖母にしてもジランダジオの訪問にしても、ペルボノの聖母にしてもジオツトオの埃及落にしても、いづれも遠見の風景をあしらつて、人物を引立させてゐるが、獨立した風景畫は無かつた。風景畫が獨立發達したのはフレミツシユ派及和蘭派の力であつた。フレシツシユ派のブリユーゲルスの如き、ソイツトの如き、和蘭派のブリルの如き、ヴアン、ゴーエンの如き、サロモン、ヴアン、ルイスデーイの如き、モーリンの如き、ワイナンツの如き、ジヤコブ、ワアンルイスデールの如き、ホツベマの如きは、獨立したる風景畫家であつた。斯くて後年、フランスにコローが出で、ルウソオが出で、イギリスにコンステーブルが出で、ターナーが出づるやうになつて、風景畫は、畫界の領域を三分し、其一を保つほどに勢力あるものとなつた。

支那の古代に於いても繪畫は多く形象を描いてゐた。戰國の世に敬君なるもの畫を善くして、其妻の像を描いたと云ひ、秦の烈裔等は龍獸を描いたと云ひ、漢の毛延壽は照君を畫いたので名高く、陳敞・劉白・龔寬は牛馬を畫くに工みであつた。後漢の

趙岐は季札、子産、晏嬰、叔向の四人を畫き、又自畫像をも畫き劉褒は雲漢圖を描き、張衡は怪獸を寫した。魏の徐邈は魚を畫き、吳の曹不興は蠅を描き、又赤龍を寫した。晋に入りて明帝は佛畫を善くし、荀勗は祖父の像を畫き、衞協は七佛を圖し、王廙は孔子の十弟子を畫き、顧愷之は帝相の列像を寫し、妙一時を極めたと云はれてゐる。王摩詰を瓦棺寺の北小殿に描いて、其色彩目を輝かすこと數日なりし由は歷代名畫記に見えてゐるボストン博物館にある顧愷之の畫も女工を描いてゐる。顧愷之の畫論に「凡そ人を畫く最も難く、次に山水、次に狗馬」とあり、又歷代名畫記に「魏晋以降、名迹の人間に在るもの皆之れあり、其畫山水は、則ち群峰の勢細飾犀櫛の如く、或は水泛ぶを容るさず或は人山より大に、率ね皆附するに樹石を以て映帶し、其地列植の狀は則ち臂を伸べ指を布くが如し」とあつて、魏晋以後、山水畫は之れなしではなかつたが、どうも獨立したやうには見えぬ、やはり背景畫として取扱はれてゐたやうである。其山水畫が獨立するに至つたのは、唐からであつた。唐の王陁子は山水を善くし、幽致峰巒極めて佳なりと云はれ、吳道玄は蜀道の山水を寫すに因りて、始めて山水の體を創めた。山水畫は是に至りて全く獨立したのである。李思訓は山水樹石を畫くに筆格遒勁、湍瀨は潺湲たり、雲霞は縹緲たりと云はれた。其子昭道は海圖の妙を創め、世上其父を大李將軍、其子を小李將軍と唱へた。王維は山水を畫くに工にして、體古今に涉つた後に李思訓を北宗畫の祖とし、王維を南宗畫の宗と稱してゐる王維に山水訣ありて、後世山水の畫論は畫論中でも最も盛に提唱されることになつた。其中でも最も名高いのは宋の郭熙の「三遠說で「山に三遠あり、山下よりして山巓を仰ぐ、之を高遠と謂ひ、山前よりして山後を窺む、之を深遠と謂ひ、近山よりして遠山を望む、之を平遠と謂ふ、高遠の色は淸明、深遠の色は重晦、平遠の色は明あり晦あり、高遠の勢は突兀、深遠の意は重疊、平遠の意は沖融にして縹縹緲緲、其人物の三遠に在るや、高遠は明瞭、深遠は細碎、平遠は沖澹、明瞭は短ならず、細碎は長ならず、沖澹は大ならず、此れ三遠なり」と云ふが如く、微細に山水描畫の要を說くことが流行することゝなつた。

我邦古代の繪畫は佛畫を主としたが爲に、山水畫のやゝ獨立しかけたのは、平安朝初期であらう。花鳥餘情に雅兼卿記を引いて、「金岡(巨勢)は山を疊むこと十五重、廣高(金岡の裔)は五六重」とある今現に那智瀧布圖が傳はつて、(舊、赤星鐵馬氏藏、今、根津嘉一郎氏藏)之を金岡の筆と云ひ傳へてゐるが、其確證はない。但し巨勢派の畫であつた此圖の如きは純然たる山水畫であるが、土佐派の繪卷物などにも山水風景は多く背景

に用ひられて、山水畫だけの圖卷は見當らない。足利時代に入りて、宋元の畫が將來されてから、山水畫は全く獨立して、畫と云へば山水畫若しくは道釋人物畫となつた。

しかし東山時代の宋元風の畫と云ひ江戸時代の南畫と云ひ、其山水はいづれも支那の山水で日本の山水ではない。竹田の山水にしろ、蕪村大雅の山水にしろ、崋山靄厓玉堂竹洞對山の流れに至るまで其の畫くところの山水は宛然支那畫に見る山水である。僅に崋山などが其スケッチに於いて日本山水を描寫してゐる位である。唯圓山四條派になると、好んで京畿の山水を畫いたが爲めに、之は日本の山水風景であつた。谷文晁は名山圖繪であるとか、富士の風景であるとかを畫いて、日本の山水風景の特色を發揮してゐた。此等を除いて、土佐派の背景に京畿の山水を描いた以外、日本の山水風景に觸れた畫家はなかつたのである。

浮世畫に於いても、山水風景は背景として久して用ひられた。鈴木春信の如きは、間々獨立したる風景畫を描かないではないが、其の多くは美人畫の背景であつた。しかし山水風景畫獨立の氣運は既に熟さんとしてゐたのであつた。此傾向は殊に繪本類に於いて認められる。例令へば、春信の繪本八千代草などを顧みると、隅田河畔の雪景を描き、或は暮色蒼々たる風景を寫し、驟雨の川舟を寫し、青柳のほとりなる渡船を畫くの類一再にしてとゞまらない。清長にしろ、春潮にしろ、俊滿、榮之の如き、歌麿、豐國の如き、いづれも背景に相當の力を盡してゐたが、美人畫を主として、風景畫の獨立には意を注がなかつた。

其の風景畫を獨立させて、一躍浮世繪中の重要なるものとしたばかりでなく、日本の山水風景を始めて作り出して我が畫史中に異彩を放ち、世界の藝術界を驚倒せしめたものは全く北齋と廣重との力である。北齋の特色は其手法の勁拔にして生氣あると、其想像力の偉大なるとにある。しかし其弊は誇大に失して、含蓄の乏しいところに存する。殊に其の描いた人物はどこやらにか支那臭い所があつて、筆に軟か味がない。北齋の畫は久しく凝視してゐるうちに厭味の湧くことを禁じ得ない。

廣重になると之に異る。彼は自然現象を多く取入れて、巧に之を配合してゐるから、含蓄餘情は豐かである。見入れば見入るほど彼の畫は人を深みへ引入れる。北齋の畫は自己の想化であるが、廣重の圖は他人をして想化せしめずんば已まぬ。我が畫家中、世界的なるは、前に光琳あり、後に北齋廣重あるが、廣重の影響は特に偉大であつた。ピニオン曰く、「現時テート畫廊にある、バッテルミー橋の如き圖に於いて、ウイスラーは廣重の意匠と、猶且つ描圖の法さへも採りて、之を彼れ自らの幻像

にゝてを翻譯してゐる。廣重は日本畫家のすべての中にて、西洋畫に最も博き影響を與へたる一人である」(ビニオン氏の極東畫二五三頁)と。フエノロサは云ふ「月光、雪霧、雨の如き特殊の大氣現象に於いては、希臘及現代の歐州藝術が曾つて知らざりし結果の種々相を成就した。彼はモネー以前の印象派である」(フエノロサ氏支那及日本藝術の各時代第二卷)二百四頁とストレンジは、彼を稱して全世界畫家中の偉大なるもの(ストレンジ氏日本の錦繪五十五頁)と讃してゐるが、其他ザイドリッツハツパーを始め彼に就いて多くの西洋評論家が加へた贊辭は今更此に事新しく羅列するにも及ぶまい。

しかし我等現代に活き、及後世に生れる日本人として殊に廣重に對して感謝せねばならぬは、廣重が近世日本の俤を永く傳てくれたことである。浮世繪に現はれた美人は當時の風俗を寫したにしろ、多くは現實のものでなくて理想美のものであつた。華車なる春信の艶姿も、肉附よき清長の美形も、官能的なる歌麿の麗容も、畫家の理想が表現されたので、近代美人の現實を語るものではなかつた。北齋の富士三十六景、諸國瀧廻りは、北齋藝術の最高潮を示すもので、彼の詩歌寫眞鏡とともに、彼の傑作たることに就いて更に異議はないが、多くは彼の大膽なる理想力に依りて、現實を想化したものである。廣重の諸作は彼の溫雅な詩趣的意匠を以て自然現象を巧に配して、市井の有樣や田舍の情調やらを美化してゐるが、彼の基礎はスケッチの寫生で、當時の現實を離れてはゐない。江戸の名所は當時の都會の現實であつて、東海道五十三次は當時の宿驛の光景であつた。我等は此等の繪畫に對して廣重の藝術美を謳歌するとともに、當時の實際の光景を今の世に眼のあたり見得ることを深く歡喜せねばならぬ。

東海道五十三次。其聲を聞くだに長閑な、太平の氣象煕々たるを懷ひ起す。廣重畫くところの五十三次の畫集は、前後二十五種以上に上ると云ふことである。水越の改革で、役者繪美人畫が法度になつた結果として風景畫のもてはやされたに依るではあらうが、廣重の東海道物も亦異常と云はねばならぬ。江戸名所が彼の生命の一半であれば、東海道は其他の一半である。東海道は彼に依りて盡く畫き出されたと云つて差支がない。廣重の東海道を歷觀しようとならば、先づ保永堂板を第一とし、隷書東海道より行書東海道、狂歌入東海道に及ぶべきである。神田乃武氏は廣重肉筆の五十三次を藏してゐるが沼津雪景は最も出色の作である。廣重の東海道を眺め行くと、身は頓に旅の人となつて、五十三次を逐次或は春風に吹かれながら、或は夕立に濡れそぼちながら、或は秋の夕に或は雪の夜に旅泊する

思がする。そこには汽車もなく、自働車もなく、電線も郵便もない。唯繼立人足のわめき聲、鈴懸馬の嘶く音、出女のかしましさ、馬子唄の鄙びたのが聞えるばかりであらう。廣重以前に東海道の氣分を畫いたものなく、廣重以後に五十三次の情調を巧に寫し出したものはない。廣重あつての東海道、東海道あつての廣重、東海道と廣重。廣重と東海道とは一にして二ならず永久に離るべからざるものである。よし東海道五十三次は、全く舊觀を一變するとも、廣重の藝術は金剛不壞の藝術であつて、盡未來までも江戸時代の五十三次を眼前に現出するであらう。尊むべき藝術、そこには不斷の泉が湧いて流れる。

郊外生活から見た大阪人

長谷川如是閑

一

十二三年前に始めて大阪を見た時に、私は大阪の生活と東京の生活との對照の甚しいのに驚いた。第一に梅田の停車場に降りて、大阪言葉を耳にした時には、男の咽喉から何うしてあの女らしいアクセントの言葉が出るだらうと不思議に思つたが、それが爲めに、女ばかりの國に來てしまつたやうな心細さを感じて、同行の友人に、いきなり其事を話したのを覺えてゐる。

　通常地方的氣分の相違を『空氣が違ふ』といふが、私は實際始めて大阪の空氣を吸つた時に、あゝいふ言葉の波動を傳へてゐる空氣は確かに違ふ空氣だと思つた。而して、その空氣の外に私の吸ふ空氣は別にないのだと思ふと心細そかつた。

　梅田に着いたばかりで、私は同行の友人に『歸りたくなつた』と云つて笑はれた。然かも、此感じは、私が大阪にゐた間、私の氣分から去らなかつた。

　『空氣が違ふ。』私は何かといふと、さう感じた。これを、私の東京人である思郷心からだといふ人もあつたが、私はさうは思はなかつた。

　私は、隨分方々を歩いたつもりだが、遂ひぞ大阪に始めて行

つた時位、外國へ行つたといふ強い感じのしたことはなかつた。言葉にも習慣にも通じない外國に始めて着いた時でも、私は、大阪についた時ほど外國へ來たとは感じなかつた。言葉も何もわからない伯林にいきなり汽車から抛り出された時でも、何もわからなかつたゞけ、外國であるといふことも解らなかつたらしかつた。英國へ行かうとしてドーヴアーを渡る時に、船の中の英人に何か話しかけられた時には、大阪へ行く汽車の中に關西人士を見出した時ほど、外國人に逢つたやうな氣はしなかつた。殊にその話しかけた人が倫敦行の汽車の中で、自分の名前を云つてくれたのを聽くと、私がその人の著書を讀んだことのある人だつたので、私は一層外國人に逢つた氣はしなかつた。大阪で始めて見た人達の方が、私にはもつとずつと外國人だつた。

私は元來子供の時分から豐臣秀吉が大好きで、中學で日本外史を教はつた時、――その前から太閤記と眞田三代記は最も愛讀してゐたが――家康が秀頼をいぢめるところを、先生が慷慨悲憤の口調で講釋するのを聽いて泣いてしまつた位で、家康の城下だつた東京の人間の癖に、それほど家康が嫌ひで、從つて德川氏が大嫌ひだつた私――尤も滅亡した時の德川氏には私は打つて變つて大に同情してゐるが――は決して大阪に對して先天的偏見を持つてゐたことは少しもなく、寧ろその豐太閤の城下であつた大阪に對して大なる期待を持つてゐた。――殊にそんな期待を持つたことがあつたのではないが、何方かといへば好意で想像してゐた――梅田驛で降りた私は、恐らくこの好意の想像が極端に裏切られたことを悲觀したのであらう。

二

さう思つて大阪の事物を觀察――といふ程でもなく、たゞ觀て見ても――期待が裏切られ通しで、すべてのものが頓間〳〵さうして無理解に見える。

十年後の今日では、それは大概改められてしまつたが、私の始めて見た當時の大阪の事物の頓間でさうして無理解であつたことは嘘のやうである。一つ二つの例を擧げて見るとかうだ。

大阪は東京より時候が暖い筈だのに、その頃の人力車夫は、冬は大抵厚ぼつたい毛糸の襟卷をダブ〳〵と頸にまきつけて走つたものだ。それが老人か何かなら知らぬこと、東京の所謂イナセのあにいが、それにふさわしい色合の襟卷をグル〳〵卷きつけてゐる。さうして草履を穿いてバタ〳〵と走つてゐるものが大分あつた。その姿を見ると、私などは乘る氣には到底ならなかつたが、乘つて見て驚いたのは、その車が極めて猛烈に走ることだ。東京の以前の車夫も、何か特別の場合猛烈に驅け聲を

出して隨分烈く走つたものだが、大阪の車夫は支那人の車夫と同じで、何の附け景氣も必要ないところでイヤに猛烈に驅け出すのだ。さうして先方へ着きかけると愈早くなつて、玄關先へ來ると、その餘勢で、梶棒を空の方へ高く差し上げる。乘つてゐるものは後ろへそつくり返へる。と思ふと直ぐに其高く差し上げた梶棒を猛烈な勢で地面へタ、キつける。乘手は危ぶなく前へつんのめる。これが極めて威勢の好い車夫の態度だといふから、如何にその威勢の好さが頓間なるかを想はせるに足りる。

郊外生活のことをいふのに前ぶれが長くなり過ぎましたが、然し序だからも少し云はして貰ひます。

人力車に次いで、私の目についたのは、荷車だ。これは、今は市中では禁止されたので姿を沒してしまつたが、それは長い長い梶棒が車の中心から先の方へ反りを打つて突き出してゐるので、車力は、それを小脇に抱へて引張るのである。馬が引く場合には、その梶棒とは沒交渉に車體から長い綱で、先きの方へ馬を繋ぐ。さうして馬方が、車力の場合と同じく梶棒を小脇に抱へて、自分も車を引きながら、馬を後ろから御するのである。東京の馬力から見ると大に人道的だが、間の拔けた形であることは申分ない。然かも車力は、雨のふる日には大抵足駄を穿いてゐる。車力が足駄をはいて荷車を引張るのは、恐らく大阪にだけ見られることであらう。此の車に馬をつけることが禁じられたのは、餘りに車の全長が長過ぎて、梶棒で往來の人を後ろから突いたり、曲り角で往來止めをしたりするので、危險の虞ありと認められたのである。何しろ馬をつけた時には、馬の首先きから車の後部までは、四五間の長さになるのである。これはつまり、市中の往來が狹くて、車體の幅を廣く作ることが出來ない爲め、幅は狹くて長さの長い車を作る必要があつて產れた畸形に外ならない。

大阪の往來の狹いことについて、後に大阪人から聽いたのであるが、一つの原因がある。それは元來餘り廣い往來ではなかつたのであるけれども、その上年と共に狹くなつたのであるといふことだ。それが亦大阪氣質を說明する一つの事實なのだ。大阪では、幕府時代から、家屋の庇を出すことを比較的寬大にしたのださうである。これは今でも大阪の往來には双方の家の同意で往來全體に日蔽を作る習慣があるのでわかるが、炎暑を避けるに庇を長く出すのも一法であつたかららしい。所が、そこが大阪式で、庇を往來に差し出して、數年間そのまゝに默許されてゐると、次ぎに、その庇の下に、家を押し進めて行つたものである。だから三尺庇を出して、何年か經つと、二尺五寸ほどその下に家を建て擴げて、今度はその家から又三尺庇を出

す。數年にして、その庇の下に又家を押し出す。といふのだから往來は狹くならざるを得ない。いかに大阪人でも、無限にそんなことをやつたら往來が絲のやうになるにきまつてゐるから、或る程度で自制したのであらうが、然し私が大阪にゐた間にも、市から、庇切取りを命じられた町もあつた位であるから、右の方法は、太閤以來今日まで續けてゐたらしい。

三

大阪の家の特徴は、誰もいふ通り、棟の低いことと、内部の暗いことで、これは、『明い家は金が逃げる』といふ信仰から來たといふものもあるが、然し封建的支配とそれに對する防禦から來たことは疑ひない。つまり外見富有と見ゆることは禁物で、又徳川政府の町人に對する階級的若しくは社會政策的禁令は、町家の構造にいろ〳〵の制限を加へて、一方で階級的區別を明らかにすると同時に他方に町人の生活の奢多を禁じたものである。その爲めに、町家の構造は、外見を質素にして、内密で隨分の數奇を盡すといふことをやるに至つた。それの極端の現はれが大阪の町家の建築となつたのである。

で二階のやうな頭の出る構造は此目的に適しないので、二階は物置同然のものになつて、物置でない二階も外見は物置然としてゐる。入口の如きは如何なる大家も、全然内部の見えない、木戸口のやうな構造で、それには常に錠が下りてゐて、客は内部から明けて貰つて始めて入ることが出來る。その入口も、東京のは如何に狹い戸口でも三尺は開く、便所の引戸でも二尺は開くことになつてゐるが、大阪のは、その三尺を更に二分した一尺五寸の潜り戸になつてゐる。肥つた人は、こゝから入いれるか知ら、と考へ込むのである。たゞ東京のに勝る點は、東京では、普通の家は、間數を柱の中心から取るので疊一疊が、六尺に五寸程足りないことになつてゐるが、木材の豐富な關西では、東京の所謂京間といふ計算で、柱の内のりを六尺に取る。十間について五尺ほど、東京の家より大きい譯である。これがつまらない貸家でも何でもさうなつてゐる。その代り、可なり堂々たる家でも、東京で田舍普請と稱してゐる土臺石の上に直接柱を建てる遣り方である。これは最近府の建築規則で禁じられたやうに思ふが、果してどうであつたか。尤も柱は、大抵三尺毎に建るので、東京の一間毎よりは多い譯である。

大阪の郊外で、東京人の目につくことは、右のやうな大阪式の家が、丁度大阪を切り離して持つて來たやうに、郊外に出來てゐることとである。

その意味で、今から十年程前の大阪人は、郊外生活といふ生

活様式について全く無知で、無經驗だつたのである。元來郊外生活はその性質上主として中流階級の縄張内であるが、大阪の以前の郊外生活は、大金持と極貧者との天地であつた。

　その大金持は何ういふ風な郊外生活を營んでゐたかといふに、僅か全市で二三の巨商が、規模の大きい下邸風の別莊を營んでゐる外、多數は、たゞ大阪の生活を郊外に持つて行つたに過ぎない。その風は所謂郊外生活が鼓吹されて、猫も杓子も郊外に行くといふことになつてからも、依然として改められなかつた。それは理由のあることで、郊外生活の主張され出したのは、學生上りの他國人が、夥しく大阪に入り込んでからのことであつて、その人々は、東京などでやつてゐた下宿風の生活をしやうとしても、大阪には、學生風の紳士を收容する本郷邊の高級下宿のやうな下宿屋といふものは十年前までは一軒もなかつた。でその人達は、普通の家の間借りをするより外仕方がなかつたが、大阪市中の煤煙と、陰鬱な家とは、到底空氣と光線とを要求する青年紳士の堪えるところでない。でさういふ人々の間から郊外生活の要求が發生した譯であつた。然るに、その要求に應じて郊外に貸家などを建築するものは純大阪人であつたので、その建築思想は、大阪市中の家屋の思想から何うしても脱することが出來なかつたのは當り前である。で郊外に、市中にあると同じやうな高塀のついた猫の額ほどしかない庭のついた家が續々建てられたのである。而して偶々自分の本邸や別莊を郊外に建てる大阪紳士は、態々郊外へ持つ行つて、石や木材を濫用した市中の邸宅を建てゝ、庭の如きも、その石や煉瓦の高塀の中に、狹い貴重な地面のうちに、高い金を投ずる市中での方法を、依然として應用したものである。でその附近にも同じ樣式の家が建つと云ふ譯で、大阪の郊外の所謂別莊地なるものは、久しからずして、市中の山の手――東京の山の手よりももつと市中的な――が出來上つてしまうのである。然かもそれは上等の方で、郊外の貸家區域になると、まるで市中の長屋の組織と全く同じな、空氣に乏しく、空間に乏しく、光線に乏しい部落が、忽ち郊外に出來上るのである。

四

大阪の郊外で、今の意味でいふ郊外生活の最も早く開けたのは天下茶屋であるが、その天下茶屋たるや、右にいつた、切り離された大阪が、郊外に建設されたに過ぎなかつた。その次ぎは、今は大分東京の郊外式になつた兵庫縣の御影が、大阪の勢力範圍の郊外生活地になつたのであるが、神戸にも近く、且つ主として成功した他國人の經營になる大別莊に端を開いたの

で、やゝ大阪のカケラたるを脱れたが、それでも一等地と稱して、最も繁昌してゐる方面は、主として貸家區域である爲めに、大阪式長屋で塡充されて、見る影もない郊内地になつてしまつてゐる。

今でも比較的最も郊外生活の意義に適した樣式を保つてゐるのは、同じく兵庫縣の蘆屋であるが、こゝも、私が七八年前に始めてそこに住ゐした頃から見ると、大阪化してしまつたことは驚くべきものである。然しこゝの幸福なことは、比較的遲く開けた爲めに、大阪人も、漸く郊外生活といふ意味は、大阪のカケラを郊外に持つて行くことではないといふことを知り出して後の發達なので、大阪人の所謂東京風と稱する家屋なり構えなりを大分その邊に作るやうになつたのである。殊に純大阪人が、子弟を盛に海外に出すことの競爭を始めたのは、此の十年この方であつて、郊外の生活の開けかゝつた頃には、その子弟の海外から歸つて來るものが相次ぐといふ譯で、俄仕込みのハイカラが、可なり旺盛な郊外生活心を以て、郊外に邸宅や庭園を構へるものゝ増加したことは、大阪の郊外生活が、最近長足の進歩を遂げた所以である。さうして彼等は今頃は、大阪のケカラが郊外到る所に散在してゐることを忌々しがり、それを作つたもののうちにも多少後悔してゐるものもあるかも知れないが、然し大多數が覺醒してゐるとは思はれない。何となれば、さういふ大阪式を採つた爲めに、郊外の地價は、土地に對する人口の密度に應じて、都會の地價ほどに騰貴してしまつてゐるからである。それが何よりも一番郊外生活の支配者を滿足させることに違ひない。私のゐた蘆屋で、大正七年に村有地（堤防の一部）を公入札に附した時に、一坪九十圓に落札したのである。大正七年といへば、かの馬鹿景氣以前なのであるから、その後の同地の地價は大抵想像するに足りる。大阪を六七里も離れた郊外地の地價が、そんな風であるから、東京の郊外生活と大阪のそれとの意味の如何に異なるかゞ想はれる。

五

大阪の郊外地の發達が、何故に、右のやうに東京と異つて、大阪そのものゝ飛地となつたかといふことは研究ものだが、私はそれには地文上の理由と、人文上の理由とがあると思ふ。

地文上の理由といふのは、大阪の郊外生活地は、汽車で通つてもわかる通り、大阪を中心として四圍に發達したものではなく、全く離れて發達したものである。大阪の市の膨脹と見るべき郊外地はたゞ天王寺天下茶屋方面だけで、その他は皆、大阪とは別な町村や（昔では市になつたものもある）部落に發達した

のである。尼ヶ崎や西ノ宮や伊丹や堺等が即ち町の發達であり御影や住吉や寶塚や濱寺や蘆屋やは村や字の發達したものである。即ち大阪の郊外地は、東京のそれと違つて、所謂『大大阪』を構成すべき性質のそれではなく、離れた獨立市町村である。その結果、郊外地が單なる郊外地として發達したのは、右のうちの字の發達したものだけで、あとは獨立の市町村が、——遠くの大阪の御蔭を蒙つて、大阪人の住居地として——發達したといふ形を取る。これが大都市に附隨する郊外地即ち東京附近の郊外地のやうな發達を見ることの出來ない一つの理由である。

尙地文上の理由としては、天然の形勢も大分關係があると思ふ。汽車で通つても、大阪附近の天然は、武藏野の原野たる東京附近とは大分感觸が違うが、その最も顯しく感ずることは、樹木の少ないことゝ、大洋のうねりのやうな波狀を持つた、東京近附のそれのやうな平野を見ないことゝである。此の樹木と平野のあることは、東京人をして、自然と空間を鑑賞する趣味を抱かしめるに至つたものであるが、さういふものゝない大阪附近に育つた人は、空間といふものを、極めて索漠たるものゝやうに感ずる。その代りに土地の山岳狀に突起したのは、東京附近には滅多に見られないが、大阪附近では、到る所に目に觸れる——といふよりは、目を遮る。即ち大阪人の環境は、空間を鑑賞する趣味性を與へられる因緣に乏しいのである。だから彼等は郊外へ行つても、市中にゐると同じやうに、少しも空間を利用する必要を感じないで、依然として、建築物で目を遮ぎつたやうな住居を作つてしまうのである。

空間に對して、右のやうな事情から、極めて鈍感となつた大阪人は、從つて彼れ等の經濟心で空間を評價する時に、空間の價を吝に見積るのである。その結果彼等の郊外生活は一層惡化する。即ち彼等は、家を借りる場合ですら、その家に空間の附隨してゐることを借手の利益とも何とも思はない。家を作る方でも需要供給の法則に從つて、空間の需要が乏しく、その代價も吝なので、借家に空間を多く附隨せしめることは、誰れに取つても意義がないといふことになる。そこで空間の豐富な郊外に家を建てる場合でも、家に附隨する空間は出來るだけ少なくるといふ結果を生ずる。

東京人や西洋人やは、その點では正反對で、空間に經濟價を認める。多くの空間を作つた家の家賃が、空間の少ない家よりも高いことを承認する。眺望が一種の財産權を構成するといふ東京人や西洋人の心理は、大阪人の理解し得ざる所である。空地條令なる法律を有する倫敦人の心理の如きは、大阪人には、

經濟此上もない間の當る心理と思はれるであらう。

樹木に對する大阪人の鈍感も、樹木に乏しい天然の影響に違ひない。大阪の郊外には、京都や東京に於けるやうな新綠の雲を漂はすやうな樹木の美觀は殆んど見られない。樹といへば、誰れかから亡國呼ばりをされた赤松黑松の類のみである。東京附近の夏は、殆んど綠樹の海で、田家の如きは、僅かにその樹木の底に隱見してゐるに止まる。そんな綠の海は、大阪人の想像するだも難い景觀である。田舍は大抵夏の炎天に裸のまゝで、僅にポプラーの箒のやうなのを、家の一邊に列べてあるのは寧ろ優れた景色である。

かく樹木に對して鈍感であることは、大阪地方の文化が早く開けて、附近の山が皆禿山で樹木の鮮ないことも責任がある。大阪の附近の土地が花崗岩からなつてゐるので、雜木の繁茂に不便で、濫伐したあとは、赤白く禿るのみで、發生するものは松かつゝじ類だけといふことになつて、綠色の感じに乏しいこと甚しい。そこで自然大阪人は樹木との親密を失つた譯だが、その上又地質と氣候の關係上樹木に對して手のかゝることは東京附近の比ではない。生垣なんてものは、東京では世話のない園ひの隨一とされてゐるが、大阪附近では反對に手のかゝること夥しい。夏になれば、日に一度つゝ水でもやらなければ持ちが六かしい。郊外にも、生垣が極めて稀なのは、その理由が大分助けてゐる。かなめ垣は往々に見るが、努力の點から確かに贅澤品の部類に屬する。私は天下茶屋にゐた時、隣の別莊で毎日庭の芝に水を撒いてゐるのを見て驚いたが、それが必要已むを得ないことであるとすると、綠色は、東京人にとつては世話の燒けない好い友達であるが、大阪人には、隨分手數のかゝる厄介者なのである。郊外地に綠色に乏しいのも、多少の理由がある。

六

次ぎに大阪の郊外地が、あのやうな形を取つた人文上の理由は、大阪附近の町村が、東京附近のそれよりも早く發達した故か、その構成上頗る古風の特徴を備へてゐることである。それは大阪の市街が既にさうであるが、大阪の中心地の繁華の方面でさへ町幅の狹いことは全國稀に見るほどで、全面石を敷つめた所は、ポンペイに似てゐて町幅もやゝそれに近いが、それでもまだ大阪の方が狹いのである。で附近の町村も、大抵寧ろ大阪以前の發達なので一層狹く、村落も古風な集合式で、道路は農家の間に一間位な幅で作られてゐるのが多い。やゝ大きい町村でも、それに少し廣い位である。大阪の郊外生活が、かういふ町

村に密着して發達したことは、自からその現在の樣式に影響することを脱れない譯である。

東京附近は右に反して、村落そのものが散在式で、近代的特徴を帶びてゐる。田家は一軒〳〵自分の區劃を有して、その間の聯絡は不完全だが、その代り、密集した窮屈さから自由にされてゐる。さういふ村落で發達した郊外生活は、初から同じ樣式を取つて、散在式であることは自然で、東京附近の郊外生活はそれがため、今日のやうな樣式を取つたといつて好い。尤も東京附近の樣式も、最近は經濟心の勝つた設計のために却つて大阪式に近いものを産むやうになつたが、それは大阪人が漸く氣付いた弊所に、東京人がこれからはいり込むことで、馬鹿〳〵しい過誤といはざるを得ない。

七

郊外生活にして特別の設計の下に成つたのを、大阪人は「新市街」と呼んでゐるが、それは、東京の此頃の府營住宅と同じやうに、甚だ郊外的意義に乏しい設計のものが多い。さうでないもの丶唯一の例は住吉の觀音林で、やゝ田園都市式であるが、これは小規模で、全く好事的のおもちや式のものに過ぎない。寶塚附近の中山は、貴族的に失してゐるし、岡町は、府營住宅式で、阪神沿線の鳴尾は全く失敗に終つた。京阪沿線にも一つ二つあるがいふに足りない。英國で盛な田園都市運動のやうな運動は、大阪の洋行歸りのハイカラ紳士が唱へ出し相で中々唱へ出さないのは、日本人の生活趣味が個人的で、協同的生活樣式に慣れないことが原因を爲してゐると思はれるが、田園都市の必要は東京に於けるよりも大阪の方に多い理由がある。都會生活の殺風景なこと丶、都會の自然の膨脹としての郊外地を持たないこと丶は、田園都市を一層必要としなければならないのである。

大阪人が田園都市運動を起して、それを實現する場合に、最も必要なことは、その趣味性の改造である。生活趣味の大阪式特徴は、すべて田園都市の構成に正反對にして有害なものばかりであることは、以上私の記した點だけでも推想されるのである。即ち空間、樹木、自然的景觀に對する感覺をもつと鋭敏にして、それを尊重した狀態を根據とすることである。英國人などは、可なりその點の感じは發達してゐて、倫敦のハムステッドヒースの如きは、自然の――人工の加はらない――景觀を保存するに可なり苦心してゐるし、又何百萬圓を投じて、エッピングフオレストといふ大森林の殘り――といつて延長十哩に近い大森林を倫敦市が天然保存のために購入するといふやうな

とまでして生活と自然との關係を重視してゐる。その郷英人の田園都市の構成は餘りに人工的に傾いてゐるやうだが、これは西洋人の美的感觸の東洋人と異なる點で、模様が、西洋の幾何模様と日本の自由模様とに分れる所以で致し方がないのである

大阪人は、幾何にも自由にも自然を模様化する人間的趣味を缺いてゐるやうに思はれる。これは自然のうちに生活するに一番不適任の人間である。さうして結局最も殺風景にして不幸なる文化を建設する運命にある人間である。それを改めて貰ひたいのは、敢て郊外生活に關してのみの話ではない。

ロシヤの都市とロシヤの田園

小野俊一

都市と田園なる題にかこつけて、何くれとなく、ロシヤ及びロシヤ人に對する自分日頃の感想や印象を述べやうと思ふ。話が都市や田園を離れてあちこちの岐路に入ると自分でも始から承知してをるので實は別の題に直さうかとも思つたのであつたが、富み且つ華かな都の景色と、暗く沈んで貧窮其のものゝ様な農村の有様とが、凡ての事物の極端の集合であり混在であるロシヤといふ國を如何にもよく衷徴する様に思はれたので之を題とし、而かも其の題に拘泥することなしに書き綴ることゝした。其れが結局ロシヤの都市と田園とを論ずる所謂だとも考へられる。

一　ロシヤといふ國は子供であるか？大人であるか？

人に就て論ずる場合には、其の人の年齢といふことがいつでも可成りに重大な問題となる。「いゝ年をして……」と云つて非難の理由となることもあれば、「まだ鬼に角小さいのだから………」と寛大にされることもあり、或ひは「もう何分年が年だから……」などと云つて非観の種にされる場合もある。さて然ら

ば、今ロシヤといふ國を論ずるに當つても、先づ其の年齢を考慮し、判斷して置く事が必要ではなからうか。

例へばお隣りの支那の如きも其の將來を推測せむが爲めにいつも國の年齢といふ事が問題にされる。日本に於ける多數の人々は支那の歴史そのものの長さを直ちに今の支那國民の年齢であると見、また一つには自分等が主として日頃交渉を持つてをる彼の國の官吏、軍人、商人等の社會の腐敗、加減を論據として(何故なれば現時日本で支那に關係を持つて居る人もやはり主として、官吏か軍人か實業家側の人間のみであるから)支那を二度と再びもう起き上る力のない老衰國であると斷定してをる樣だが、一方にはまた、身親しく此の頃の支那の青年、例へば北京大學の少壯教授を中心として集まれる雜誌「新青年」及び「新潮」等の團體などに接してをる人々の中で「新しき支那」てふものゝ勃興の可能なるを堅く信じてをる人も決して少くはない樣である。

さて、然らばロシヤの年齢はどうかと考へて見るに、成程、ロシヤといふ國の建てられた歴史は決してそれ程新しいものではなく、リューリックの時から數へれば既に一千年を超え、ロマノフ家の帝政だけでさへ三百年の上續いたのであるが、然し歴史を見ても、國家といふものゝ壽命や其の成熟に要するまでの時間といふものに、丁度、動植物が種類の異なるに從つて其の生涯にも千差萬別がある樣にやはり國の境情によつて種々まち〳〵なもので、自分は兎に角、後段に述ぶる如き各種の理由に基いて、ロシヤといふ國をまだ〳〵育ちかけたばかりの國であると考へる者である。目下の狀態は暫く論ぜず、少くも今度の革命の起る前までロシヤは、(たとひ並み〳〵の子供ではなかつたにせよ、)要するにまだ子供の時代を脱せぬ國家であつた、人間も子供であり、土地も子供であり、さうして國全體としてもまた子供であつた。

日露戰爭の頃まで、我々日本人は、ロシヤを一大文明國として畏れてゐた。少くも、自分等の國より(ヨーロッパ文明といふ立場から見れば)一二歩先きへ進んだ國だと思つて、止むにやまれず戰ひは始めたものゝ内心大いに不安なきわけでなかつた。また之は何も我々が日本ばかりで考へてゐた事だけではなく、他の歐米諸國も、それ以前から引き續いてロシヤ帝國なるものを所謂「列强」中の尤なるものとして五指の一つに數へあげ、餘り尊敬はしなかつたかも知れぬが、何れも、多少ながら之を頭痛の種に感じて、フランスは之と同盟し、ドイツは自國からの機械材料と技術者とを供給してシベリヤ鐵道を完成させ、極東に要塞を築かせ(結局は煽てゝ日本との戰爭までさせて)

共の精力を専ら東亞細亞に振り向けさせむ事を努め、之に反しイギリスは共の印度に南下し來らむ事を怖れて、此の頃丁度スツタモンダの眞最中である日英同盟をも自ら進んで締結した樣たわけであつた。

　戰爭で勝つて日本の人間は幾分ロシヤの實力を侮る樣になつた氣味はあつたが、然し、依然ロシヤは我々のこわいもの丶一つであり、現に我々はシベリヤ鐵道の複線になることなどをも、復讐戰をやる準備ではないかと一時は内々迷惑に考へてゐた次第であつた。日露戰爭の結果は、それ以前の日本の價値を見くびつてゐただけ、それだけ他の列強も事の以外に驚いたであらうが、然し其の後とてもロシヤはやはり皆のものからこわがられ、ドイツが、着々として成功してをつた、移住と商品の販路擴張とによる平和戰を見限つて、一九一四年に斷然あの大戰をぶつぱじめたのも、其主なる原因の一つは、ロシヤがそれ以前から年々歳々行ひつゝあつた軍備擴張が年一年と完成し行かむ事を氣に病んだからであつた、イギリスも日露戰爭後我が國との同盟の繩をゆるめなかつたばかりではなく、東の方で其れによつてロシヤを壓へて置き乍ら、西の方では更らに三國協商といふ樣な名のもとにフランス共々好言令色を以てロシヤ自身の手を握りに行つてゐた。要するに此の大戰以前のロシヤは列國のうちでも立役者の一人であり、大きな顏をしてヨーロツパの所謂一等國の間に立ち混つてゐたのである。然し之等は確かに或る意味に於て、列國がロシヤなるものを高く買ひかぶつてゐた結果であつた。日本は自ら危險を踏んで戰場で彼れと相見えねばならなかつたので、多少は對敵たる彼れの正體をも察してゐた樣であるが、然し餘りに用心堅固に大事をとつた爲めか、今から考へれば國として當時のロシヤが持つてゐた弱味の大いさを遙かに小さく見過ぎてゐた。列國が立派に一人前の國であると思つて、大人同志のつきあひをしてゐた、ロシヤは實はまだ乳の香も充分には取れ切れぬ樣な子供だつたのである。子供といつても勿論普通一遍の凡童ではなく、云はゞ神童とも稱す可き才能ある子供ではあつたが。其のロシヤといふ子供は生れてから後、自分より遙かに年長だつた（或ひは早熟した所の）外の西ヨーロツパの人間達を遊び相手にして育つたので元來、馬鹿でもなく、そして敗けぎらひの彼れは何時の間にか頭の中に一人前の大人らしい知識を取り入れ、或る點では却つて大人を凌駕する樣な考へまで出す樣になり、生來の大兵を幸ひ、天晴れ自分も分別ある一人前の男である樣な顏をして今日迄も列强の間に伍して來た次第であつた。然し乍ら實際は何といつてもまだほんの子供なのであるから如何に頭の一方に於てマセたる

考へを持つてゐたにせよ、其の大きいだけに發育の遲いからだの方にはまだ〱幾多の重要なる缺陷が殘つてをるのであつた。

自分は今、其の缺陷なるものを一々玆に列擧するつもりはない。たゞ然し其の中の最も主なるものと思はれるのを一つだけ書いて見ると、其れは純ロシヤ人ばかりの問題であつて、其のロシヤ人自身の間に存じてゐた極めて原始的な、殆ど未開時代其のまゝとも云ふ可き、（而も牢固な根底ある一つの立派な國家として立たうなどゝ云ふ爲めには實に不自然にして不合理なる）階級制度の仕組みである。

二　此の革命前までロシヤに見られた階級制度

つひ此の間の革命に到る迄、ロシヤでは法律によつて、大ざつぱに云つただけても、純粹のロシヤ人が次ぎの四階級に分たれてゐた、（他の異人種は同じく露國民でも、また此の階級以外に置かれてゐた。）

(1)はドヴァリャンストヴォ(Dvoryanstvo)といつて丁度日本の士族と華族とを包含する樣な階級（假りに貴族階級とでも譯したらよからうか）

(2)はドホヴェンストヴォ(Duchovenstvo)といつて僧侶の階級。

(3)はメッシチャンストヴォ(Metschanstvo)と稱し商工民の階級（之は先づ日本で昔云つた町人といふのに當る）それから、

(4)はクレスチィヤンストヴォ(Krestyanstvo)と云ふ農民階級。

さうして之等各階級に屬する人間の數の比はどんなものかと云ふと、フィンランドを除くロシヤ各地方の平均では農民千人に對して下層なる商工（メッシチャニン）民の數が約百四十人、それから同じくメッシチャニンではあるが、富裕にして特別に准ドヴァリャニンの待遇を與へられて居る商人等が六人半、僧侶の數が同じく六人半で、貴（ドヴァリャニン）族が十九人半と云ふ樣な割合である。

もし之が今日の我が國に於ける「士族」、「平民」といふ如き前時代の遺物であるところの形式上のみの名稱、區分に過ぎなかつたならば勿論其の數の割合ひなどはたとひどうであらうと別に大した問題ではないのだが、ロシヤに於てはつひ此の間まで此の貴（ドヴァリャニン）族に對する商工（メッシチャニン）民及び農（クレスチィヤニン）民の區分が決して單なる空文ではなかつたのである。

所謂貴族階級の中で日本の華族に相當するものには公爵（クニャズ）(Knyaz)、伯爵（グラーフ）及び男爵（バロン）の三つがある伯爵（グラーフ）の一部及び公爵（クニャズ）は昔の封建時代からの特別の家柄であり、男爵（バロン）といふのは殆ど其全部がバルチック沿岸地方の獨逸系の地主である。（一）公爵（クニャーズ）

(及び無爵のドヴァリャニンの)中には昔、所謂藩主(ボヤーリン)としてロマノフ家と對等のつきあひをなし、或ひは却つて後の三百年間主權者として立つたロマノフ家自身よりも古く、且つ、より遙かに純露西亞系統なるものも可成りにあつたのであつて、其あるものゝ如きは今度の革命の初期、丁度ニコライ二世が位を去り、また弟のアレクセイ大公も其後繼者たることを辭した頃、「もし將來、憲法會議を開いて見た上で、ロシヤには共和政よりも帝政の方がよいと云ふことに決したならば、皇室としては、家の名ばかりは殘つてゐても實は全部獨逸系の血ばかりで、まるで爪のさき程もロシヤの血は入つてをらぬ今のロマノフ家などよりも外の正統なるロシヤ系の家柄を選んだ方がよい……』などと一部の國民の間には新たなる帝室の候補者として眞面目に考慮されてゐた位なのであつた。さういふ事情であるから、上記公爵、伯爵(グラーフ)、併びに無爵ドヴァリャニン中の或るもの(爵がなくつて却つて家柄の偉いものもある)は本來日本の大名、小名にたとふ可きもの、またロマノフ家なる皇室は最初國の統治者として選ばれた時の事情に多少の相違こそあれ、徳川將軍家及び其の所謂御親藩なるものに較ぶべきものである。男爵(バロン)は獨逸の血統が多いバルチック沿岸地方の小名及び豪族達である。

以上三つの華族階級も、また無爵ドヴァリャニンの多數のものも其の本來の性質上、常則としては各々自分の領地なるものを持つて居る。最も大なる土地の所有者は皇室であつて、例へば森林の如き、戰前のロシヤの人口を内輪に見つもつて一億七千萬と考へれば、農民の數は少くも一億三千萬位であるが、其農民が私有ではなく組合ひ等の方法によつて共産的に使用し得る面積千〇五十三萬五千町歩なるに對し參億五千四百四拾七萬五千町歩以上の國有林以外、單に皇帝の私有財産として千・百八拾萬六千七百九拾四町歩の良林が占有されてをつた。(註二)

貴族及び富豪の所有地にも、國が廣いだけに森林と耕地とを合せれば何萬何町歩といふ樣な大きなものが少くない。今試みにヨーロッパロシヤ五十縣内の個人による所有地の面積を比較して見ると、總計八千五百九十五萬六千六百六十六町歩の中、貴族の所有地は五千參百拾六萬九千〇八町歩を占めてゐ、僧侶階級の所有が參十參萬七千貳百〇六町歩、商人及び一般の商工民階級が千貳百九十萬六千七百九十五町歩、都市の住民に屬する市街宅地等が參百七拾六萬參千八百貳拾貳町歩、外國人參十五萬貳千四百參十八町歩、其の他の私有地が貳百貳拾壹萬參千參百七十二町歩、さうして農民に屬する部分は貴族領の約四分の一に過ぎぬ千參百貳十一萬四千〇貳拾五町歩である。

尤も之以外に、農民には、千八百六十一年の農奴解放に際し

て分け與へられたのと、また千九百五年日露戰爭後の革命の時に土地騷動を起した結果、地主から讓つてもらつたのとを合せて百拾參萬町歩ばかりの土地があり、また個人の有でなく種々なる組合、會社等の所有に屬する千五百七拾七萬八千六百七拾七町歩の土地即ち約半數の八百參拾八萬參千參百五十八町歩といふものは農民が組合ひを作つて共產的に使用して居る土地である。然し、帝室其の他の官有地、寺院、修道院、地方官廳等の附屬地、併びに軍用地等はヨーロッパ、ロシヤだけで一億五千四百六拾九萬五千町歩以上を占めて居つた。

上に述べた私有地の大部分は、（現今では貴族以外の人間に屬してをるものでも）もとはみな貴族ばかりの領他だつたのであつて、或ひは封建時代から直ちに傳承されたものであるか、乃至はまた其の後のある時代に皇室或ひは他の領主から賜られたり授けられたりした樣なものである。中には歷代の皇帝や女帝などが其の寵臣に與へられたもので「永久免稅」などゝ云ふ國家に取つては誠に不都合な御墨付きのものなども今日まで可成りに殘つてゐた。

さういふ貴族の領地は恐らく時代が昔に溯れば溯る程其の單位が大きなものであつたにちがひない。封建時代群雄割居の際の有樣は日本に於ける其の時代のことを考へればわかる。其の後國內が統一されたロマノフ朝の時代には、非常に大きな領主（藩とも云ふ可きもの）がなくなつて日本の士族に當る樣な階級が家每に其の身分に比例して種々なる大いさの領他を持つてをつたと考へればよい。彼れ等は各々其の領土內の農民を支配して自分の土地を耕作せしめてゐた。農民は始めは全々自由な民であつたのだが、小作人自然の心理からしてやゝもすれば一つの領地から他の領地へと度び／＼移住して歩きたがることが使ふ方の特族階級の人間には極めて不便に感ぜられた爲め、十六世紀の終末、イヨアン雷帝の沒後を承けて帝位についた彼のバリス、ゴドノフの時に、はじめて農奴制を設けて農民を土地の（從つて其の土地の所有者の）附屬物としてしまつたのである。さうして此の制度は一八六一年、アレクサンドル二世の解放令が出る迄、約二百五十年の間續いてゐた。

丁度日本の士族の身分が石高によつて呼ばれてゐた樣に其の頃のロシヤの貴族の身分は其の領して居る非閔（イーニェ）の農奴の頭數によつて人に知られた。茲では「頭」といふ字を「アタマ」と讀むよりも恐ら「トウ」と讀む方が適當であらう、何故なれば、勿論領主の性質によつて例外の場合はあつたにせよ、世間一般の其の當時の觀念では農奴の頭數も牛馬の頭數も殆ど同じ樣に考へてゐたのであるから。此等の農奴はもう文字そのまゝの意味

於て彼等が所屬を記錄されて居る地主の所有物であつた。だから地主は自由に、自分の持つて居る農奴を賣る事も讓ることも、乃至は質に入れて金を借りることも出來た。實に無法な極めてけしからぬ制度である。さうして其の惡制度の爲めに幾多の悲慘なることが多く起つたといふことは勿論言ふまでもない。

然し乍らイギリス人やスペイン人等が土人を狩する爲めにアフリカの各地を襲ひ、役に立たぬ樣な老人や病弱者は之を其の場で虐殺し、强壯な男女、子供などを鐵鎖につないでアメリカまで持つて來て、日を定めて立つ奴隷市で、一人々々のものを裸體のまゝ臺に乘せ、親子、兄弟、夫婦……何等の考慮もなく別々に競にかけて賣り飛したに較べれば、また其れを買つて勞苦に使驅した處の當時のアメリカの地主たちの所行に較べれば、ロシヤに於ける農奴制はまだ／＼悲慘の度が少なく、極めて變則なる例外の場合を除けば一般に可成りに溫かさも和ぎもあつたものゝ樣に見える。或る程度までは、ロシヤ其の頃の貴族對農民關係と、日本の武家時代に於ける士族對平民の關係との間に類似せる所がないとも云はれない。貴族や役人階級の庶民百姓に對する壓迫とか暴虐とか云ふならば日本の方でも佐倉宗五郎や國定忠次の樣な人間の出なければならぬ原因がなかつたわけではない。「百姓、町人」といつて丸腰のものと見れば他人の生命を鴻毛よりも輕しと考へて直に刀に錆をつける樣な似而非武士も決して少くはなかつた、「辻斬り」などゝ云ふことも今から考へれば隨分無茶なはなしである。人身賣買に到つては、不幸にして何處の「文明國」も未だに大きな顏をしてロシヤの農奴制時代を責めるわけに行くまい――表面上の形が變つたゞけで、內容の同じ樣なことはまだいくらも行はれてをるのであるから。惡いことだけを數へたてたなら、日本の武家時代の制度にも惡いことは幾らもあつた――そして實際惡かつたから兎に角、其の制度は維持し樣としても維持出來ず廢されたのである、然し乍ら、一方で其の樣に幾多の缺點や弊害があつた間にも他方に於てはなほ、言ふに言はれず捨て難い其の當時の特色や美風がなかつたわけでは決してない。一般の爲めに云へば制度は勿論いつも出來るだけ其れを良い樣に改めて行かねばならぬ。けれども制度といふものは元來死物である。一休和尙の狂歌だと云ふのに「心よりくびにかけたる傀儡師」と云ふのがあるが實際、「鬼を出さうと佛ださうと」制度は之を運用する人の心根一つである。國家としてロシヤが偉大なる發達を完成せむが爲めには、ロシヤに近年まで採用せられて居つた階級制度、及び其の根源となつた昔の農奴組織は成程、極めて好まし

からぬ悪制度であつて、之ありしが爲めにロシヤてふ子供は折角、大きく伸び得可き天稟の素質を具へてゐ乍ら今迄あの程度以上に發達することが出來ず、徒らに頭の一部が進んだのみで全體としてのからだはいつまでも子供の域を脱することが出來なかつたのであつたが、然し「國家將來の發達」なんと云ふことを頭に置かずして考へれば、其の昔、其の制度が行はれてゐた時には何も彼も悪いことばかりであつたと云ふわけではない。殊に主權者、服從者共に人間味の濃い、ロシヤ人であつた場合であるから。

ロシヤに新しき西ヨーロッパの文明なるものが輸入されはじめたのは恐らくイヨアン四世(雷帝)の朝、(十六世紀の中)頃からのことで其の頃モスクヷなどにも西の方の建築家の手ではじめて石造の建物が出來たのであつたが、之れより約一世紀を隔て、既にロマノフ家の朝、ピヨトル一世の父に當るアレクセイ、ミハイロヸッチの頃には、もう國中の貴族階級が可成り西ヨーロッパにかぶれてゐた。其のすぐ後に例のきかぬ氣のピヨトル(所謂大帝)が出て來て、其の動機や眞意は果して何であつたか知らぬが、「何でもかんでも西のものでなければならぬ、ロシヤ從來のものなどは皆構はずにたゝきこわしてしまへ」と云ふ様な極端なる西歐心醉政策を强壓的に振りまわしたものであるから、最初こそ、それを不平不服に思ふ人間も多かつたものゝ、さらぬだに長いものには巻かれ、舊きを忘れて新きに走り勝ちなるロシヤ人のことゝて、其の内に國中が殆ど狂氣の様になり、我れを忘れてたゞもう西のものを〳〵とひたすらに索し求めたのであつた。

土地は廣く、地味は肥えてをる。たとひ農業の方法はまだ極めて幼稚なものであつたにしても、また冬が長くて畠を利用し得る期分は短くとも、賃銀不用の農奴を多數に使役して其れを耕作させてゐた貴族階級の經濟は多くの場合極めて餘裕あるものであつた。

日本の田舍では、こちらの森の傍ら、あちらの丘の中腹、……といふ工合に耕作に從事する百姓の住み家が一つ〳〵散在してをる場合が多いが、ロシヤでは今日に到つても、昔し農奴制時代の名殘りとして大抵百姓の家は幾つかづゝ塊りとなり、集團となつて建てられてゐる。それは決して一軒一軒の百姓家が自分等自身の生活上の便宜や經濟の爲めに寄り集まつて形成した、普通の場合の「村」といふものではなくて、地主（パメシチク）が自分の所有して居る農奴達を使役し監督して行く上の便宜の爲めにつくつたものである。(戸數が相當あればロシヤ語ではやはり「村」（デレヴニヤ）といふ字を使ふけれども。)

領地が廣ければ其の諸所方々にかう云ふ部落や村が作られてゐるのだか、また其の外に領主自身の住む所謂「御館（ベルスキイ・ドーム）」の傍らに「御み仕へ（ドヴアローヴイ）」の農奴達を住ませる爲めの家や長屋が立並んでゐる。

特に由緒ある藩主などはまた別として、普通、立派な領主とか地主とか云はれるものでは土地の廣さかまづ六七千町歩以上、また持つてゐる農奴の數も千の上に出てゐたであらうか、然しかういふ貴族だとて男の子が多ければ土地と、農奴とを分けて分家させねばならず、娘を嫁入らすにも付けてやる土地が小さく、農奴の數が少なければ親も娘も巾がきかぬので、はじめ大きかつた莊園も世を經ると共に幾つかの小さなものに別れる場合も多く、さうかと思へばまた一方では緣組、或ひは血屬のものからの遺産の繼承等によつて一人の貴族で國內の諸所方々に大小數ケの莊園を持つてをる樣な場合も多かつた。莊園にはみんないろ／＼の名がつけられてゐて、人は普通領主の姓を呼ばずして其れの住む莊園の名を代用したから、後には其れが、そのまゝ土地の名となつてゐる所も多い。

昔は土地を千町歩以上、農奴の數の二三百も持つてゐなければ地主として餘り大きな顏は出來なかつた。然し小さなのになると「二十人」「三十人」といふ樣な貧弱な地主もあつた。農奴といつたとて何も其の全てのものが畠仕事ばかりをさせられてゐたわけではない。大きな地主になれば其領地は殆ど一つの王國みた樣なもので、其の中に使はれてゐた所謂「農奴」の間に可成り複雜な程度にまで分業的の組織がついてゐて殆ど全ての事が自給自足出來る樣な狀態にあつたのである。領主の住居する「御館」などでも、未だ西ヨーロッパ風の建築が用ゐられなかつた頃では農奴の中の樵夫が領地の森から伐り出して來た材木を同じく農奴のなかの木挽きがひき、そして農奴の大工が建て上げた所の、大きくはあるか極めて粗朴なロシヤ風の丸木小屋であつた。

家具などはまたお抱への建具師が作つた、木工や鍛冶工は農具をつくり、馬車や荷車をつくり、馬の蹄鐵を打つた。家畜や家禽の世話をするものもあり、革を鞣すもの、羊毛からロシヤ流の頑丈な毛氈を作るもの、肉を鹽にしたり燻したりするもの、乳からスリフキ（クリーム）をつくり、マースロ（バタ）をつくり、また各種のスィル（チーズ）やスミターン（クリームを酸敗させたもの）などをつくるもの、蜜蜂を飼ふもの、野から果物を集めてヴァレニエ（ジャム）を煮るもの……と云ふ樣な工合にたとひ誰にでも一通りは出來る樣な仕事にしても、大抵な場合には「特に誰それが上手だから」と云ふ人間を選んでそれに其の方の事

をうけ持せてやらしたものだときいた。女はまた麻を紡ぎ、機を織り、或る者は裁ち且つ縫ひ、或る者は刺繍しまた或る者は洗ひ濯ぎのみを職務とした。玄關番でも給仕でも或ひは女中でも料理人でも馭者でも誰れでも、皆何れも所屬してをる老若男女の農奴の中から「これ」と思はしい適當なものを選んでそれ〴〵の役目を勤めさせたので、多少難しい職務となれば幼い時から見習はせもし或ひは遠く何所かの都會にまで送つて其のことを修業させたものである。（註三）

だからもし領主さへ惡辣な人間でなく、そして其が相當に餘裕のある領地であつた場合にはたとひ、特別に取柄のない人間たちは野良仕事ばかりをさせられたのではあるが、ロシヤの農奴の制度といふものは決してアメリカに於ける黑人の奴隷制度の如くそれ程殘酷なものではなかつた。餘り酷しからぬ地主から使役せられて、可成りに悲慘なる境遇にあつた樣な場合にさへ、農民等は恰かも、本能的に自分等の運命に對するあきらめを持てゐたかの如く、不平も抱かず各々其分に安んじて働きもし眠りもした。其の當時の彼等は、なまじいに「權利」とか「平等」とか云ふ言葉を耳に吹き入れられて、解らぬ乍らに心の平安を攪き亂された後年の農民達よりも或る意味に於ては確かに幸福であつた樣に見える。以下に說くが如く一八六一年の農奴解放てふ事に對してもまた一般にロシヤに於ける近世の自由運動の中にも、農民自身の意志とか希望とかゞ直接に其の主因となり原動力となつて現れたと云ふことは極めて近年に到るまで殆ど一つもなかつたと云つてよい。自由運動の發明人となり、革命の張本人となつたものはいつも必ず、上に立つてゐた貴族階級地主階級それ自身の中から現れた、其の外にもう一つの大きな要素としては猶太人を舉げる必要があるのであるが、然し其れ等の事に關してはもう少し後段に到つて述べることゝする。

上段に述べたロシヤ貴族階級の西歐化はまづ其の外面から初つて次第に心の內方にまで及んで行つた。

生來、毛深いロシヤの男子は、みな容易に立派な總ヒゲを生やし得る。ピョトル帝（一六七二――一七二五年）の以前にあつては何も身分高き男子はみな、身には一面に金銀の刺繡あり、（時には其の上に寶玉、眞珠などをも數知れず鏤りばめた）小袖のカフタンを着け、豐かな總ヒゲを男の寶とばかり胸に波打たせて誠に男々しくも堂々とロシヤの大名氣分を發揮させてゐたものなのであるが、徹底的に歐化主義を唱導したる彼れピョトルは嚴罰と强制とを以て無慘にも其のヒゲを剃り落させ、其のカフタンを剝ぎ取つて之れに見慣れぬ獨逸式の燕尾服を着せたのである。些細の事の樣であるが、英斷と云へば實に大英斷で

ある。一時に人心を新たにせむが爲めには先づ最も人の目につき易い外貌に革新を與へることが何よりも極めて必要なのであらう。然し其の時は、大の男がみな髯を立てゝ泣いたものだと云ふ。試みにロマノフ家歷代の帝王の容貌を考へてみても、ピヨトルの父なるアレクセイ、ミハイロヴィッチまではまだロシヤ流の總ヒゲがあるが、ピヨトル一世をはじめ其れ以後の代になると以れもみな西ヨーロッパ式のヒゲだけであつて只纔かにアレクサンドル三世に到つて其の性格も多少ロシヤ式だつた事を表はす其の總ヒゲを認めるのみのである。之は何も帝ばかりの顏にあらはれた現象ではなく、如何なる人物の肖像を見ても大體その顏の作りで其の當時の世間の氣風を察する事が出來る、例へば今度の大戰にドイツが敗けたのでまう今後當分の間は、恐らくカイゼルまがひのヒゲを立てる樣な物好きの男は出現せず、その代り、イギリス流儀のヒゲ無しか、アメリカ式の毛蟲ヒゲが暫くは天下を横行し跋扈することであらう。

男がカフタンをぬがせられたと同じ樣に女もまた同じく一面に刺繡の彩模樣美いロシヤ固有のサラファンをぬぎすてゝフランス流の衣裳をつけさせられた。さうして其れと同時に、其當時までロシヤ貴族階級の女は、家の內ばかりに引き籠つてゐて殆ど公の客の席などには出なかつた慣はしであつたのを、ピヨトルは自らの主張で屢々宮殿內に催した各種の公の集まりにやはり嚴命的に夫人令孃同伴を命じて茲でも歐化主義の宣傳を徹底的に行つた。

主人と家族とが同時に西歐主義の信者になつたのであるから物事の改まり方も勿論頗る早い。

それに一方ではまたロシヤの此の歐化的新機運に乘じて、オランダ、ドイツ、フランス、或ひはイタリー、チエッヒ、ボーランドといふ樣な西ヨーロッパの國々の人間が續々として國內に入り込んで來た。西歐心醉の中心であつた宮中では素よりあらむ限りの歡待優遇を以て之等の移住者を迎へ、彼等の多くは屢々帝室から前に述べた永久無稅の領土といふ樣な、特別な恩典をも授けられたのであつた。此れ等の移住者の中には其の當時、自分等の生れ故國に於て志を得なかつた學者や藝術家も多く、其れ等の人々はロシヤに來て、（殊にエカテリーナ女帝の時代などには）其處に、思ひのまゝに自己の才能を發展さす可き天地を見出し、兎にも角にも其の後のロシヤの新しい學術や文藝の土臺となるものを、其れ等の人々の努力が築き上げたのであつた。

同じくさういふ西の國からの建築家により、またそれから數へしこまれたロシヤの建築家によつて、主なる都市には數多く

ヨーロッパ風の大きな建物が營まれた。

今迄ずつと述べて來た地方の領主なるものは決して單に地主として其の片田舍の土地に引込んでばかりをつたわけではない。ロシヤでは凡ゆる國家の組織制度の上で少しでも重要なる地位と云ふものは一つとして此れ等貴族階級の人間でなければ占める事が出來ず、さうして此れ等の貴族たちは大抵は皆種々なる目的の爲めに何か各自の官職を持つてゐたものなのである。彼れ等は其の身分相當の邸宅を、或ひはペテルブルグ、モスクヴァの都に、或ひは各地方の中心となつてをる他の都會に持つてゐて、一年の一部は其處で送り、また他の殘りは自分の領地に歸つて暮す……と云ふ様な生活を續けてゐた。だから

大きな都會の模様が次第にヨーロッパ風になつて行つたと同時に、此れ等貴族の地方に於ける邸宅もまた自然とヨーロッパ風に變つて行つた、今日でもまだ、汽車を乘りすて、十里も二十里も奥にはいらねばならぬ様な片田舍の、其の四周の平原にはあちらこちらに三四百年前其まゝのみそぼらしい百姓小屋の部落が散在して居るばかりである様な處に、彼れ等は屢々石造三階建ての菓子の様に美しい、邸宅をたて、其家具から給仕、玄關番の服裝までもみなフランス直輸入のものにして喜んでゐた。

エカテリーナ女帝(在位一七六二——一七九六年)はドイツ生れの人間ではあつたが其の當時の例に洩れず非常なるフランス文華の心醉者でヴォルテールやデドローを崇拜して彼れ等と日頃親しく交際もしまた物質上の手厚い庇護をも加へてゐた位であつた。一つにはそんな事も手傳つてフランスの文華はフランスの言葉其のものと共に次第にロシヤの上流社會に行きわたつて來、其の結果として上流の社會ではもうロシヤ人同志の自分等の家庭に於ける内輪の會話にもフランス語ばかりを使ふ様になり、甚しきに到つては宮中などではロシヤ語を知らぬロシヤの人間も多く出て來、苟も上流の席上ではロシヤ語を口に出すさへ思ひもよらず、まして地方の農民のはなしなどはオクビに出すさへ恥と思ふ様な有様とまでなつてしまつた。

かふ云ふ様な傾向が地主と農奴との主從關係を一般的に悪化させたといふ事は言はずと知れる。獵官と社交界に於ける享樂とに熱中する様な地主は、多くは都或ひは時には西ヨーロッパの遊山場などに住まひがちで、故郷の領地は腹の黒いドイツ人か、さうでなくともやはり一クセある様な人物の管理人に預けぱなしにして、只之を自己の贅澤費を産み出す金穴位と心得る様になつた。

貴族の家庭では外のものは兎に角、外國の言葉だけは、上流の人間として立つのには、出來るだけよくやれなければならぬ

からと云ふので、子供の小さい時から佛、獨、或ひはイギリス人の中ひとりか二人かを家庭教師につける様な通則になつてきた。多くの場合には振れ込みばかりの紳士や淑女で、實は本國で食ひつめた何處の馬の骨ともわからぬ様な人物が鐵面皮に乘り込んできて、子供の爲めには寧ろ害の方が多いのであつたらう。それでも親は附けないよりはましだと思つてゐる。それからさきは男の子なら皇帝の常住地ツァルスコエ、セロやペテルブルクにある學習院（リツエー）に入れて、將來役人にするか、乃至は陸海軍の幼年學校に入れて士官にする、此れ等の學校はみな、勿論貴族の子弟でなければはいる事が出來ず、其の代り貴族の子弟で此處を出て置けば頭などは多少薄のろくとも手蔓次第で如何なる重要な地位にもありつくことが出來たのである。要するに此れ等。貴族の若き子弟中の多數の者が通常歩みてをり、また、其の兩親なども同じく希望してゐた所は、トルストイが彼れの回想の中に、ある時叔母から眞面目になつて受けた忠告だと云つて書つて居る如く「運よく、大きな領地や身分ある家の娘でも後家さんをでも見付けて結婚し、いろ〳〵の手蔓をだどつて要領よく高位高官に登りつく」といふ事なのであつた。

女の子の方もペテルブルグやモスクヴァ等には貴族だけの子女を預つて教育する、學校が數ケ所ある。例へば、ケレンスキイ内閣の頃ボルシェヴィキが革命後はじめて公然と顏を出して來た時、彼れ等はスモルヌイ女學院なる建物を占領して其處に本部を据ゑたのであつたが、此のスモルヌイ女學院なるものは、皇太后マリヤ、フェオドロヴナを頭に戴いて居た學習院の様な學校である。貴族の子弟の方に前述の如き不良分子の多いのを氣遣つてか、此の方はまた文字通りに世間見ずの箱入娘をつくる様な制度となつてをり、牆壁は監獄のそれの如く高く、外出する時も門の内部から窓を堅く閉したる箱馬車に、監督の老女史と同乘して出ると云ふ有様、教育それ自身も勿論極めて舊式であり、許可されたる月並みの書物以外には何も讀ませず、只語學ばかりは、こゝでも上流の人間には必要此の上なきものだと云ふので一週間の日を佛、獨、英、露に割當てゝ、其の一日中は定まつた一ケ國の言葉以外は話す事を嚴禁して教へるのだとかきいた。かう云ふ學校を出た貴族の娘の中で親が榮達を望み、自分も虚榮心に乏しくないのが、みなロシヤでは歷代宮中に入つて女官を勤めたのである。

以上は事の順序として先づ悪い方面の事だけを述べて見たのであるが、かう云ふ事實があつたからと云つて、何もロシヤの貴族階級、地主階級の全てが、同じ様に腐敗してしまつたと云ふのではない。貴族、地主の階級にも昔から立派な人が決して少

ないわけではなかつた、國家が採用してをる農奴制度の罪惡を自分の心に堪え忍ぶ事が出來ず、さればといつて自分一個の力では國法を如何ともすることが出來ぬので、農奴の中の才あるものには何等か一人前の技藝を修業させた上で之を自由にして町に送り、また取柄もなき農奴には少しづゝの土地を分け與へて同じく之を自由の民とした樣な人も決して極めて稀ではなかつた。前の樣にされた農奴は町に出て商工民の中に加はり、腕に覺えた靴屋なり、鍛冶屋なり、或ひは女ならば仕立屋なり、刺繍屋なりを職として生計を立て、また第二の樣にされたる農奴は所謂「一軒百姓」となつて之また獨立して暮して行けるわけなのである。然しこんな心掛けの主人である場合には平生自分の農奴に對する態度も決して惡い筈がないのであるから折角自由にしてやつても農奴はまた直きに元の古巣に戻つて來、現に其の後愈々農奴解放令の發布されたる時にも如何にしても農奴が（殊に所謂「御家仕へ」のものでは）屋敷を去ることをも、また、今迄とちがひ主人から給料をもらふ事をも肯んじなかつたと云ふ樣な美談が諸處の領地できかれた。之等の心ある人達の身になつてみれば此の解放令の意味もまるでわからず、主人から給料をもらふなど云ふ事は世の中に有り得可からざる事の樣に信じて居る農民等の頭の狀態を見るにつけても、つらつら當時の國の制度の不法さ、怖しさを感じ私かに暗涙に咽んだこととなのであらう。

然し乍らかう云ふ心の持主である貴族、地主等の存在は、勿論一般の貴族及び地主階級に取つて非常なる恐畏であり、災難であつたから彼等は利害を相同うする皇帝を上に戴きあらゆる注意と方法とを講じて嚴しく、此の如き分子の壓迫と其の殲滅とに努めた事言ふまでもない。けれども一度び、西歐文明との交涉によつて、眼界を廣くせられ智的併びに心的に覺醒しはじめたる汚れなき青年達の激し憤つて發する叫びと力とは日に〳〵其の強さを増すばかりで、終ひに之を如何ともすることが出來なかつた。茲にはじめて、後年ロシヤだけで使ひ用ひられた樣な特殊の意味に於ける智識階級、（所謂「インテリゲンツィア」）の發生を見た。即ちインテリゲンツィアなるものは世界的智識の上に立つてロシヤのみの習慣に囚はれずより敏感なる良心を持つてをつた所の貴族（地主）の階級が出てき、其の後次第に生れは貴族であるが生活上の境遇は無産階級に近く、然し同じ樣に覺醒したる心を持つた所の分子も其れに加はつて來たのである。ロシヤ最初の革命思想は實に、自分が上に述べた樣な學習院或ひは陸海軍の幼年、士官學校に學んだ貴族青年の少數者の中に興つたのである。陸軍士官だつた詩人レルモントフに

の忌諱に觸れて遠く高架索に謫せられ終に年若きまゝ其の地で殺された。同じくロシヤにての詩聖と呼ばるゝプシュキンもまた當局者の憎しみを受けて一時は其の所有にかゝる領地の一つ內に幽閉せられ、結局官僚派の陰謀により故意に企てられたる決鬪に於て其の若き生命をおとした。一八二一年には十二月十四日ニコラス一世の即位に際して何れも青年貴族なる五人の近衞士官に指揮せられて、所謂「十二月黨（デカブリスト）」の叛亂がペテルブルグの王殿のすぐ足もとに企てられたのであつたが不幸にして機未だ熟せず一たまりもなく鎭壓せられ同志のものは或いは絞罪に處せられ或ひは西比利に流されたりした。然し革命の志ある人々（之れは必ずしも年若き所謂青年ばかりには限らなかつた）が同志相聚めて組織する秘密結社の數は年と共に增加し、其の當時既にモスクヴァの大學の如きも、もう革命思想を抱く學生の巣窟となつてゐた。政府が文部大臣の職に閑員中、最も保守的、官僚的にして辣腕の「譽れ」ある人物を歴代必ず据ゑるといふ方針は實に此の際のウヴァロフの任命に始まつてさうして今度の大戰の半に一代惡名を遺して死んだ文相カツソーまで續いたのである。此の約一世紀の間、いつも歴代の文相が努めたる如く、此の時のウヴァロフも日夜「如何にせばロシヤの教育が退嬰し衰微するであらうか？」「如何にせば今、國內に勃興し行きつゝある自由思想を鎭壓し得るであらうか？」といふ事のみにひたすら心を惱したのであつた。ロシヤの皇帝にとつては其れが忠實なる文部大臣たる所以だつた。政府はまた警察の制度を擴張し「完備」せしめまた特に設けたる檢閱委員をして殆ど狂的までに出版及び言論の嚴しき取締りをなさしめた。要するにニコライ一世の政府は自己が用い得る策のあらむ限りを盡して「彼れ等の國家」に對し「危險なる」分子と認めた有識階級（インテリゲンツィア）全部に對してあらゆる壓迫を加へたのであつた。其の壓迫の下にあつて、心は如何にはやるも、時機の未だ到らざる間、憂國の士は何とも策の施し樣がなかつた。彼れ等の中の一部は、せめてもと其の悲憤の情を字句の裡に潛ませ、物語りや小說に筆をとつたのであるが、やはり何れも當局者の眼を逃れ其の惡しみを免るゝ事が出來ず或ひは投獄せられ或ひは國外に放逐せられ或ひはまたシベリヤに流された。我等が大文豪として知るゴーゴリ、ツルギィエーニェフ、ドストイェヴスキー等の人々もまた皆其の仲間である。我等が今日驚嘆に堪へさる偉大なるロシヤの文學は、決して所謂文士なるものが暇潰しの筆のすさびに書いた樣なものではない、どれも之れも其の作者が、暴虐なる其の當時の權勢に對し、無法なる社會の制度に對して抱いた憤慨の情を、劍に訴へて立たむには其の時機未だ來らず、止むを得ず之

を文事に託して世に訴へた、赤心からの血と涙との結晶なのである、さうして、それはまた實際、生命懸けの仕事であつたのだ。

一八五三年にトルコとの戰ひがはじまり、其の戰役によつて政府は實に遺憾なきまでに自己の、腐敗せる内情を國民の前に暴露し從來身方だつた社會の保守派に屬する人々からさへ全然信用を失墜するに至つた。其の危期に際してニコライ一世は沒し戰爭は全く失敗に終つて、皇太子であつたアレクサンドル二世の代となつたが、此の政府失敗の機に乘じ 革命黨は國内の各地に農奴制撤廢の騷擾を起したので流行に頑冥なるロマノフ政府も終ひに之を容るゝ外、致し方ない立場に陷り一八六一年はじめて知識階級多年の理想であり宿願であつた農奴解放令の發布を見たのであつた。

前述の如く、「解放」の意味すらも解し兼ねたる其の當時の農奴自身からは一時何等の反響もしきこえなかつたが、如何に其の時知識階級の人々は喜び且つ滿足したか!!!

彼れ等は從來永年の惡しみをも忘れ一聲にアンクサンドル二世の德を謳歌した位であつた。

然し悲しい哉、之は彼れ等がまだ、官僚派の惡辣さが如何程までに根強いかと云ふことを知つてゐなかつたからであつた。

政府は暫く己れの危地を救はむが爲めに國民が久しく叫び求めた所の農奴解放令といふものを投げ與へたのであつたが、其れは殆ど其の實を伴はぬ空文に過ぎなかつた。成程農奴と云ふ名稱は廢せられた、然し乍ら農民の社會上の位置は畢竟するに北の後もやはり貴族階級の家畜の如きものであつた。

其れ等の農民の生活の悲慘なる方面のことは例へばクロポトキンの「革命家の手記」であるとか、革命のおばあさんと云はれたブレシュコ、ブレシュコヴスカヤの自叙傳であるとか、其の他、凡そ革命家として生命を賭して働いた人々の回想錄の中には何れも詳しく記されて居る、ゴーゴリの「死せる頭數」(ミョルトゥイヤドウシ)(英語で"Dead Souls"といふもの) またツルギィエーニェフの「獵人日記」(ザピスキ、アホツトニカ)なども實に彼れ等が悲慘なる農民の位置を高上せしめ、同時にまた貴族階級の墮落をも救はむとして世に投じたる爆烈彈の如きものであつたのだ。

かくして再び知識階級と政府との間に長い爭鬪の年月が續いて、終ひに一九〇四――五年の日露戰役に到つた。あゝ其の間に抑々、幾何の義人の血と涙とが空しく流されたことか!!! 苟も國家の良くならむ事を希ひ、民衆の福祉を望むものは皆、危險なる人物として、或ひは殺され、或ひは流され、或ひはまた投獄せられた。有識階級の人々は、彼れ等の愛する同胞が、また

極めて極めて無智であり、（註四）從つて非常なる獸性に富んでをることをよく承知してをつた。彼れ等は彼れ等が最後の勝利を得、其の理想を實現せむが爲めには、劍や、爆彈の途によらず、暫く隱忍して、農民の教育に努力するのが最も賢明にしてまた速かなる方法であることをもよく承知してゐた。「ゼムストヴォ」と稱せらるゝロシヤの地方田園の自治團體は一八六四年卽ち農奴解放令の發布されたる殆ど直ぐあとではじめて組織されたもので各郡のゼムストヴォは約六〇乃至六五の議員から成つてをり、其の半數は郡に於ける地主貴族階級の人間で、さうして殘りの半數は町の代表者として送られた三四人の商人を除けば全部みな農民である。貴族と商工民（メシチャニン）とは（選擧人の數が少いから）直接選擧によつて其の代表者を出すか、農民の中からは間接選擧法によつて其の議員を選ぶ。郡のゼムストヴォは其の一郡に關する件のみを自治的に處理して行く機關であるが、各郡のゼムストヴォからは更らにまた代表者を選んで、もう一段大きい「縣のゼムストヴォ」を組織し、同じ縣内にある數郡の事柄を總括的に處理する。此の方の議員は自然、殆ど貴族階級のものばかりから成つてをる。各ゼムストヴォの事務は俸給をもらつて若干の常務員が勤め會議は年一回約十五日間開かれる。

ロマノフ家治下のロシヤに取つて現に而此のゼムストヴォ程國民全般の幸福の爲めに働きの出來た機關は少なかつた。既に上述の組織でもわかる樣に、玆でも貴族階級が優超なる權力を與へられてゐたのであつたが、然し、ゼムストヴォに參與してをつた貴族達は、政府の中央及び地方官廳内を獨占してをつた所の官僚的なる貴族の分子とはちがひ、はじめからさう云ふ方面には出る氣のない、自由思想を抱き國を憂ひて居る人々が多かつた。

實にゼムストヴォは知識階級のものと、それが子供の樣に思つて居る農民とが、公々然と會つてお互ひの考へを交換し合ひ一致協同して共に仕事し得る唯一の場所であり機會であつた。少しばかり參與して居る商工民の階級はやはり農民に同情する身方であつた、さうしてこゝには、官僚と利害を共にして常に知識階級を敵としてをつた僧侶の階級が、まるで關係してゐなかつた。

然し常識で考へても、さういふ性質のものを官僚がだまつて放置しておくはづはない。先づ第一に、「ゼムストヴォは勝手に如何なる決議をすることも出來る」が然し政府から任命されてをる「縣の知事には其の決議の中で氣に入らぬものは何でも握り潰し得る全權」が與へられてゐた。また「ゼムストヴォは勝

手に如何なる理想的計畫をでも立てることは出來る」が、然し「其の經費は其の郡内の年收總額の百分の三を超えてはならぬ」と限定されてあつた。勿論此の第二の故障は同志の貴族や商人達が自身自腹を切ることによつて政府の與をかく事も出來たのであつたが、第一の法律は之を如何ともすることが出來なかつた。年々歳々ゼムストヴォが自分自ら資金其の他の準備を既に完成した上で、設立を願出た學校とか、圖書館とか、其の他の民衆的設備の數は實に夥しいものであつたが、教育が進み、國民が蒙昧の狀態を脱することを何よりも恐れ怖がつた官僚政府け僅かに、只申し譯け的に其の數十分の一をいやく許すに過ぎず、官僚と利害を同じくし、國民の知識の啓發されむ事を身の破滅と心得て居つた僧侶の階級もまた陰に陽に政府を助けた。彼の杜翁が教會から破門された事の如きもまた其の現象の一つたるに過ぎない。さうして世界の手前、杜翁にだけは遠慮したのであらうが、杜翁と同じ様な心を持ち、杜翁と同じ様に農民の爲めに心配した貴族で政府の忌むところとなりシベリア送りとなつた人間がいくらあるかわからない。單に農民階級ばかりの教育ではなく、官僚的理窟から云つて當然一段高かる可き貴族階級の教育に關しても、政府のとつた政策は既に前に述べた通りであつたが、更らに其の方針を徹底せしめむが爲クサンドル二世は、名は同じくトルストイ乍ら非常なる惡玉であつたドミトリー、トルストイなるものを文部大臣として根本的に中學（ギムナジア）の制度を改惡せしめた。さうして茲でもまた教會は政府とグルになつてゐたのだ。「自然科學など云ふものをやるとどうも人間が生意氣になり、やゝもすれば、神樣や王樣なんぞを恐れなくなる」と云ふので動植物學とか物理とか化學とか云ふ樣なものは中學時代には極めて幼稚な其の梗概だけを教へるに止めさせた。「地理も外國の樣子などがわかるからいけない」と云ふのでやはり上つ面（つら）ばかりしきや教へない。歷史も「よその國の事を知ると自分の國がいやになつたり、またまねがし度くならぬとも限らぬ、フランス革命なんていふものもある、桑原々々」とグット簡單にやらせることにした。自國の歷史は、自分等に都合よき樣書き綴つたものを教へさせた事勿論である。外國語も從來の經驗にこりて、近代の言葉は、とてもこれならば外國の物騒な本など（たとひ嚴しい税關の眼をくゞつて萬一輸入される樣な場合かあつたとしても）讀んでわからぬと思つて安心出來る位に貧弱な程度より學校では教へなかつた。さらすると勿論中學校では暇が出來すぎてこまるので、其の埋め合せにラテンやギリシヤの古い、「之ならばいくらやらせても心配はない」と思ふ言葉をうんとやらせ、（ドイツ語フラス語等が

一週七級のもので四時間づつ位なるにラテン語などに八九時間もやらされた）其の外にまた坊さんをつれて來て「神樣の掟」と稱し舊新兩約聖書や教會の歷史、儀式の法則なんぞに關する手前味噌の講義をさせ、やはり試驗もすれば點數もつけた。

知識階級の或るものは其結果となつて所謂「實科學校」の制度を設けて之に對抗し、此處では古語を廢して、一週十數時間新しい外國語をやらせ、また物理、化學、動植物、地理、歷史等の學課をも大學教育前の學校として必要なるだけに教授したのであつて、卒業した學生は、たとひ修學年かか普通の中學に比し一ケ年短かい七年ではあるけれども一般的に云つて遙かに實力があるのであるが、其の存在を好まぬ政府や教會からの制裁として、かう云ふ實際學校で中學教育を受けたものは、ラテン語（とそれから確か「神の掟」と）に就て入學試驗を受けて合格した上でなければ大學程度の諸官立學校へは入學を許さない。豫め準備して置いてさういふ學校から大學などへ試驗を受けて入學する生徒の數も可成りにはあるが、また兎に角、面倒な、意地の惡い話しなので、然らばそんな政府の立てゝゐる大學などの御世話にはならぬとドイツなどへ勉強に出掛ける連中も男女共に隨分と多かつた。〔戰前ドイツで勉强された經驗のある人々などは必ず知る機會を持たれたことゝ思ふが、かう云ふ連中は自然、革命思想の強い分子であつた。

教育併びに學術に對する政府の根本策が上述の如きものであつた爲め、たとひ自分では何も「革命」などゝ云ふ突き進んだところまで考へなかつた人でも、苟も實際に學者であり教育家である人々は誰でも政府のことをよく思ふ筈がなかつた。此の事情は政府もよく承知してゐた。さらぬだに青年はみな自由思想に驅られて居る危險分子であり、もし之を危險人物ばかりに教育させられては實に一大事であると思つてゐた。世の中は都合のよいもので學者や教育家のお面はかぶつてゐても、其の頭や心はまるで正反對（と云つても一寸何の事だかわからぬが）兎に角、學者にあるまじく、教育者にもあるまじき行爲を位階や勳章などゝ交換に平氣でやつてのける人間も多い。さう云ふ御用學者を政府は漏れなく、全ての大學其の他に入り込ませて置いて政府の手さきにもし、探偵にもし、また學生の間にも「アカデミスト」と稱する探偵犬を在學させておいて學界の內部の隅からすみへ（決して完全なものではなかつたが）兎も角も抑壓、制裁の網を張つてゐるのであつた。此の外に、學界の外部を包む、もつと力強い網が存在してゐたのだが、これは即ち檢閱官と警官と憲兵及び軍隊から成りたつてゐる點でも

る。

一寸話したことなどが直ちに災厄の原因となつて大學を放逐された教授の數も多い。例へば日本などでも其の著「長生論」の爲めに可成りよく一般に知られてゐた死んだメチニコフの如きも其の晩年に出した長生論の價値は兎も角とし、實際、ロシヤが其の生れ出た事を世界に向つて誇り得可き偉大なる生物學者なのであるが、やはり一寸危險な意見を吐いたとか云ふので當局の忌諱に觸れオデッサ大學から追はれて、パリイのパストール研究所にはいつたのであつた。（ロシヤ人でノーベル賞を取つたのは彼れが一番早かつた）。また之はずつーと後に起つたはなしだがついでに書いて置くと一番悪辣だつた文相カッソーの時代にモスクヴア大學の總長マヌイーロフが（革命後第一に出來た內閣の文相になつた人）平生から睨まれてゐたので一寸した事を口實に免職せられたが、その時、當局者の餘りの橫暴さを憤つて、多少とも骨のある敎職員は教授、助教授、助手……の論なく全部で百八十何名一時に大學を去つて終つたため、其の後今度の大戰に到る頃までモスクヴア大學は、體裁こそは可成りなれ、實は蟬の脫け殼も同樣なものであつた。去つた教授の中には世界的の學者も多く、ケンブリッジ、オックスフォードなど外國の大學に招かれて行つた人もあつたが、また中には憤激の餘り死んだ人もあつた。俠氣に富むモズクヴァの商人シェニヤヴスキイといふ人は莫大な金を出してモスクヴァ大學を去つた人々の大部分を招聘して、同じ其のまちに「民衆大學」（ナロードヌイ・ウニヴエルシテート）なるものを創立した。「民衆大學」とは各種の事情の爲め正式に中等教育が受けられなかつた等の原因で、能力もあり、また學問がしたいと思ふ希望の切なる者があるにも拘らず、窮屈な規則の爲めに何處の大學へもはいれぬ樣な人達に大學教育を授ける場所である。また正式の大學の課程以外、もつと程度の低い爲めに中等科の樣な者もあり、また晝間職を持つてゐる人の爲めに夜學の設もあり、また度び〳〵各種の題目を定めて一般聽講希望者の爲めに其の方面の專門家が課外の講演などもやる。自分が專門の動物學の方などは、教授の學識人物から云つてもまた其の設備から云つても、モスクヴァ大學の研究室はとても此の民衆大學のそれに及ばなかつたが、此の革命前には更らに其の生物學教室の爲めは百五十萬ルーブルの寄附があつたときいた。單に此のシェニヤヴスキイの場合のみでなく純ロシヤ血統の商人には出してやるねうちがあるとさへ思へば、思ひ切つて學問、藝術の爲め金を出す事、よその國の人間である自分などが見たゞけでさへも實に氣持ちよく思はれた。然しこんな場合にでも以前の官僚政府はやはり私かににがい顏をしてゐたのである。

日露の戰端が開かれた時に、一般の知識階級の人間が、日本及び日本人といふものに就て持つてゐた智識は極めて貧弱なものであつた。豈んや農民其の他の庶民に於てをやである。自分の親しい友人であるペトログラード大學の一教授は或る時、開戰當時のことを追憶してかうはなした。

「朝丁度實驗室にボクとRとそれからMと三人でゐた時にいよ〳〵戰爭だとわかつた、ボクとRとは「戲談ぢやあない、小さなニボちやん氣でもちがつたんぢやあないか、かわいさうだがすぐに壓し潰れちまうぜ」と云つたらMが「馬鹿云つちやいけない」つて云つて、ムキになつて、其れから半日ばかりボクら二人に滔々と君の國の事情とこちらの事情とを比較して「決して敗けやしない。まあ見てゐて御覽よ、今度こそは奴等も必度辛い目にあはされるから」と云つて日本が必ず勝つと云ふ事を斷言した。

するとまだ宣戰の布告も出さないうちに仁川で例のヴァリヤークとコレーツの二つをやられたらう、政府は「日本といふ國はこれ此の通り國際法も何も無視する野蠻國だ」といつて宣傳し、新聞も筆をそろへて盛んに日本を罵倒したものだから、世間の人間もその時はみんな日本を怪しからぬ奴等だと思つて一時憤慨したわけだが、然し後になつて實は君の方からよこした最後通牒には、はじめに自分の方の要求する所を書いたあとで「もし來る何月何日の何時までに之に對し確たる御返事がなければ自分等の方では不幸にしてもう話し合ふ餘地のないものと見て、直ちに戰時行動にはいるから左様豫め御承知を願ふ」と云ふ事が書いてあつたんださうだが、その通牒を受取つた外務大臣の奴が、まだ開けて見もしないで机の上に置いたまゝだつたかポケットへ入れたまゝだつたか、兎に角、讀まないで友人のうちか、何處かへ遊びに行つてノンキに茶など飲んでゐて、やられてからはじめて開けてみて愕いたんだとわかつたんだ。「人を馬鹿にするにも程がある」と云つてまたみんなが政府を攻撃したものだ、それからさきは御承知の通りさ。新しい報道のある毎にMが「それ見ろ、おれの言つた通りだ、然し可哀相に日本の奴も骨が折れるだらう」といふ、ロシヤの新聞ぢやあほんとの事がよくわからないつて云ふのでMなどはドイツの新聞までを友達に送つてもらつて、もつて來たものだ。みじめな境遇さ、もう少し〳〵と思つて戰爭に敗け、自分達の同胞の殺され方の多いのを喜んでしばらく時の來るのを待つてゐたんだから。然し「ツシーマ」の戰ひの時にはそのあまりに結果の恐ろしいのに流石のボクらでも沈み切つてしまつた。ボクのよく知つてゐる昔からの知合ひの家でおやぢさんと男の子二人一時にや

られたのなどもあつた。だからはじめからよせばよかつたんだあの二度目に後からやつた船たんぞはみんな古い上罐みた様なやくざなものだつたんだからね、みんなこちではきつと不幸な結果が起るつて云つて其の時、噂してゐたんだ、……云々」

今更、日露戦爭の沿革でもないが、あの戰爭が我が國に取つては、（少くもロシヤにあの時の様な官僚主義帝國主義の朝廷と政府との存在が續いて行つた限り）實際祖國の危急存亡であつたに反し、ロシヤ側に於ては單に其の時鴨緑江一帶の森林採伐權を得様としてゐた一部の資本家と、それから從來傳統的に帝國主義を領土併合主義を發揮してゐた官僚政府及び軍事當局者だけの利害問題たるに過ぎなかつた。それ以外に内々大いに會心の笑を禁じ得なかつたものは確かにドイツとそれから多少心配はしたらうがやはり我が同盟國のイギリスであつたらう。ロシヤの一般國民生活の幸福といふことの爲めにはロシアの政府が南滿を占領したり朝鮮をとつたりすると云ふことは全然何等の必要もなかつた。政府以外に一部の人民が時に多少の利益を感ずる様な事はあつたかも知れないが其れが爲めに殘りの大多數のものは苦しまねばならなかつた。日本では當局者は勿論もう國民全體の心が眞劍になつてゐた、小さな子供まで（樺島をゆすり取られたと云ふ昔しの事や三國干渉の時の事などを十二分にきかされた爲めもあり）みんな心のどん底から「ロシヤはにくい、ロシヤは負さねばならぬ」と思つてゐた。自分は丁度、その時の春小學校から中學へ入つたのだつたが、今考へて見ても實にまはりの社會一般の空氣が如何に緊張してゐたかと云ふことを覺えてゐるばかりでなく、自分自身が小さな胸の裡に其の時どんなにロシヤといふ國を憎み戰爭の結果を心配し、さうして自分の國の大勝利を祈つて居たか、今でもまざ〳〵と覺えてゐる。講和條件の決つた號外が出て其の「不滿足」な結果を父親になじつた時父親から「大勝利を得たには得たけれども、談判と云ふものは中々、いろ〳〵の事情もあつて、さうこつちの思ふ通りにはならぬものさ、まあ小村さんでなく外の誰々が出かけて行つても結局こんなところで納つたんだらう」などゝ説明された時、自分から見れば餘りに冷靜だつた父親の態度をうらめしく思ひ、その號外を手に持つたまゝ、一人で二階に上つて、口惜し泣きに泣いたものだつた。談判に行つた奴等なんぞ揃ひも揃つて腰の弱い實にケシカラヌ奴等ばかりだと思つた。そして馬鹿々々しいはなしだが、自分は必ず後に立派な外交官となつて此の恥辱を取りかへしてやらうとまで考へたものだつた。もと日本のものだつた樺太を半分だけしきや取り返せぬなどゝ云つて之が屈辱でなくて何であらうと思つた。

騷擾が起つて東京でも一部の民衆が警察や近處の交番などを燒打した時にはもし家で「危いから日比谷などへ行つてはならぬ」ととめられさへしなかつたなら自分は必ず群集に混つて燒打ち運動に參加してゐたにちがひない。心では實に痛快だと思つてゐた。

ロシヤでは、はなしがまるで別であつた。戰爭がはじまつても地方などでは多くの人はまるで其の事を知らなかつた。其の中に動員令がこちらの誰のムスコ、あちらの誰それの弟へと云ふ樣に農民の間に屆いたが、字が讀めずまた多少讀めるものでも公文書の文體ではその意味がわからぬので何のことかと一同ボンヤリしてをる樣なところへ、役人や士官が來て、まるでわけのわからぬ若者共に「黄色い鬼を殺しにゆくんぢや」位の說明を與へたばかりでグズ〱云へば横つらの一つ二つも張りとばして列をつくらしてつれて行つたと云ふ樣な調子だつた。ペテルブルグ、モスクヴァの樣な中央の大都市や極東に通ずる鐵道沿線の町々などでは勿論、多少の戰爭氣分を感ずることが出來たが、其の他の國內の大部分では殆ど何者にも『國が現に戰をはじめてゐる』といふ樣子は少しも現はれてをらなかつた。自分は後に此の事を只單に自分のロシヤ人の友達からきいたばかりでなく、其の以前からもロシヤに住んでをり、またあの戰役中もずつとロシヤに滯在してをつた、二三のイギリス人からもきかされた。これは、其の當時のロシヤの國情を考へ、またロシヤの一般の國民に對するあの戰爭の意味を考へ、さうしてヨーロツパロシヤの中心から、この時、戰ひの戰はれた滿洲までの距りを考へたならば、其處に少しの不思議もなく、實際さうある可き、ほんとうであると云ふことがわかる。ペトログラードやモスクヴァから假りに我々の下關特急の樣な列車を一分の停車することもなしに飛ばし續けに飛ばして見たとして、ウラルを超えてシベリアに出るのは、どんなにしてもやはり三日目である。それから、まるでまた人手のついてをらぬ樣な大森林や涯のない原野の、只其の處々、鐵道に沿ふた一帶の土地の中に人口稀薄なる町や村が散在してをるに過ぎぬシベリヤを横切つて滿洲にはいるのに、いくら早くとも五日はかゝる。三年前自分がペトログラードから歸つた時には別に之と云ふ支障や停滯もなく、兎に角、汽車を乘り續けにして、なほハルピンに達するのにまる十、日間かゝつた。此れが戰時の輸送頻繁なる場合殊にバイカルの湖もまだ汽船で兩岸を連絡して居つた日露戰役の當時にあつては、たとひ露軍が東に到着した車輛全部を燒き棄てゝ決して後送する事がなかつたとするも、なほ本國にあつた軍隊が其の本來の所在地を出發し、愈々列車に乘り込んでか

ら之れが戰の舞臺裏であつたハルビン、乃至は長春あたりの土を踏むに到るまでには、途中の土地に駐屯することなく、只列車のみの乘り續けて非常に急行したる場合に於てさへまる一と月、普通の場合にあつて恐らく二三ケ月乃至半ケ年位を要したことであらうと思ふ。ロシヤ人から其の當時の打明け談しをきくまでもなく出征軍人の家族等は例外として、あの當時ロシヤ本國に於ける一般國民の戰爭に對する感じが、つい此のあいだ、我々日本政府のシベリヤ出兵の際、浦鹽の奥或ひはチタ乃至イルクーツク附近で現に我々の同胞が血を流し、屍を曝して戰つてをるのだと、耳に聞きゝ、新聞に見、またさうであることを實際に信じて、然かもなほピツタリとはだうしても心臓に喰ひ入り得なかつた樣な、「戰時氣分」であり「敵愾心」であり「眞劍さ」であつたと云ふて其處に何等の不思議があらう。豈んや彼れ等の中の覺醒せる社會分子は却つて其の仇敵たる自己の政府の失敗せむ事を衷心より願ひ、内亂を企つ可き時機の來らむ事を鶴首して待つてゐたのであるから。

我々大和民族が、もし終局に於て其の一大民族たる可き自己の發達を完成しやうと云ふならば、我々はいつも、出來得る限り、四圍の事物の眞相を直視して眞相のみを眞相とし知つて居らねばならずまた、其の時、其の時の自己の實力の眞價を出來得るだけ、掛け引きなく知る樣に努力せねばならぬ。自惚れや偏見がなくては生きてをるのに心細く、將來に對する大望が抱けぬと云ふ樣な意氣地のないことでは、それこそとても行末の望みがないわけである。

日露戰爭は日本とロシヤの戰爭ではなかつた。あれは我々日本國民と、ロシヤに於て、異國の血統に屬するロマノフ家なるものを頭目として約三百年間、國民の九割八分を奴隷の境遇に呻吟せしめて飽くことを知らず常に隣邦の領土を取つて食としてをつた官僚軍閥政府なる怪物との鬪ひであつたのである。云はゞ素戔嗚命が八岐の大蛇を退治した形である。劍をとつた手柄は素より確かに大きな手柄にちがひないが、然し自ら殺した殊勳者以外にも、酒を用意して豫め大蛇を醉ひ潰させた翁や媼や、またじつと正面に靜坐してゐて大蛇をだました姫や……命をして勝たしめた原因が全く外になかつたわけでは決してなかつた。手柄を手柄とするのはよいが眞相を誤り傳へてはならない。

擧國一致と稱し得た我が國の方にも、往々、時と場合とを辨へず、つひ平生の癖が出て罐詰に石を入れた樣な不一致分子も混て居たのであつたが、之をロシヤ側に起つた事實に較ぶれば、眞に言ふにも足らぬ些細事なのであつて、例へばペトログラー

ドから兵器彈藥、糧食及び病院材料等を滿載した百輛の列車が出たとして、其れがオムスタ、イルクーツクあたりについた時を見ると、まういつの間にか五十輛だけになつて居り、ハルビンに達する頃には三十輛となつて、然かも貨物と貨物との間には到る處に空隙があるといふ様な有様であつた事。苟も戰爭であれば先づ第一に軍隊が供給を受けねばならぬのは兵器彈藥であり兵員の被服でありまた糧食である。負傷したり、病氣に罹つたりして苦しみ且つ死にかゝつてゐる者の爲めに藥品、繃帶……其の他の醫療設備も常に不足ない様に取り揃へて置かねばならぬ、嗜好品の種類に屬す可きものも勿論士氣を阻喪させぬ爲めに多少はなければならぬであらうが、然しそれは第二の問題である事云ふまでもない。然るに露軍では殆ど其の正反對の事が行はれてゐた。砲彈の代りに將校の飲料として莫大なる量のシャンパン葡萄酒……等が取寄せられた、次ぎには男ばかりで飲んでも面白くないと云ふわけで看護婦の代りに、或ひは其の名目のもとに低級なる女優や其の他の如何はしき女が續々とロシャ本國から呼び寄せらて來て、極東は殆ど露國士官の一大歡樂場たるの觀を呈した。之等の女達の要求する巴里仕込みの衣裳や靴や帽子や香水など云ふ様なものゝ包みは傷病兵の爲めの醫藥や繃帶よりも「急を要す」とあつて先廻しにして屆けられた。本國の兵站部などにも同じ様な心理狀態の指令官が腰を据ゑてゐたのであつたならこんな時の意志の疏通は極めて容易に行はれた。將校によつてから云ふ種類のゼイタクが行はれても、もし戰に勝つて軍隊が前の方へ進んで行つたのならば、また多少話しも別であるが、何人も知る如く、終始一貫、豫定の退却を行つて、然かもそれが多くの場合には豫定は豫定でも荷物を持つて行く時間や餘裕はない軍事行動であつたから、不本意乍ら、いつも兵器や彈藥や糧食などには火を放ち、女だけを除いたゼイタク品は全て我が軍への進物として置いてゆかざるを得なかつた。さてまた新しい戰線に少々腰が落付けば、上に述べた百輛送つて約三十輛屆く様な輸送能率であつた、「警備付き」のシベリヤ鐵道で更らに各種ゼイタク品の新しい供給を要求するのであつた。勿論これだけではじめからまるで戰爭は出來ず、兵器や糧食等も晝夜の別たく、絶えず送つて來てゐた事は來てゐたにちがひないのであるが、然しこの様な事情の爲めに其れが非常に防害されたと云ふ事は事實である。から云ふ様な露軍の內情は、(旅順などでも隨分ひどかつた様であるから) 實際彼れ等と鬪つた日本軍中の人々に可成りよく知られて居る可き道理で、また事實、時に凱旋された人々の口から類似のはなしをきかされた事がないではないが、然し戰後ロシャ

人に失體となる事を遠慮したのだか乃至は餘りに敵の缺陷の大きかつた事を廣告すれば折角の手柄の價値が下ると考へた爲めか、兎に角、餘り世間でも話されず、またさう云ふ事情が今日に到る迄まだ一般に廣くは知れわたつてゐない樣だ。

今度の世界大戰に際しては、例外が出來たが、日露戰役當時のは、（陸軍でもまた海軍でも）陸軍中のコザックの如き全然特殊のものは別とし貴族階級出の士官と、農民、或ひは商工民、階級からの兵卒とで出來てゐた、また兵卒の中には露國の爲めに曾て暴力を以て征服されたポーランド、小露西亞（ウクライナ）……等の諸民族もはいつてゐ、また國家觀念の全然ない猶太人の樣な分子も混つてゐたわけである。かう云ふ事柄を吟味しはじめると限りながら止めるとして、同じ大ロシヤ人の間でも士官と兵卒との間には、不幸にして既に前に詳しく述べたやうな、歷史的、傳統的、本質的なる非常な差別が頭の中にもまた心の裡にも存在してゐた。宿舍を取つてねむる時、士官と兵卒とが、同じ一間にはいるなどゝ云ふ事は夢にも思へず、また如何なる場合にも恐らく行はれたことがないであらう。士官が馬の傍らに横はつて馬と一緒にねむることがあつてもそれは決して不自然でない。然し兵卒とともに雜魚寢するなど云ふ事は、士官の心理を以てしても、また兵卒の心で考へても極めて不自然の事であり、不可能である。兵卒は馬ではなくて「豚（スヴィンニヤ）」であるから。

勿論士官の中にも、よくわけのわかつた立派な人々がなかつたわけでは決してないに相違ない。さういふ人々は、如何に心の中に大なる苦悶を抱いてゐたことであらう？　我が軍に向つて身を以て勇敢に突進して來た勇敢な靑年士官などの中には必ず、生きて周圍の醜狀を眺めてをらむよりは一刻も早く死んだ方がよいと希つて居つた樣な人が多かつたにちがひない。

兵卒共は彼れ等が一體何の爲めに日本人と戰はねばならぬのかを知らなかつた。「日本の奴等がおれ達の此の土地を奪ひ取らうとするからさ」と士官が云へば後を向き、遠く故鄕のある空と思ふ方を眺めて、「士官殿ロシヤにまた土地が足りねえつておつしやるですかい？　そんなに土地ばかりふやして一體どうしようつて云はつしやるんでがす？」と云ふ樣なわけであるし、「神樣の敎會を邪敎徒から守る爲めだ」と云へば「それでもこの滿洲にやあちつとも敎會はありましねえ」と云ふ。恐らく士官達は、日本人は何の豫告もなくワリヤーク、コレーツ二艦を擊沈して我々の兄弟共を鏖しした仇敵であるとか、早く奴等を追ひ拂つて、ポルト、アルトールに圍まれてゐる兄弟たちを救、出さねばならぬとか、或ひはいつ何處で日本の奴等はこゝ

酷な思い事を行つたとか……半分以上捏造と誇張とを加へて日本人の悪口を度びく繰返し兵卒共の敵愾心を煽り立てる必要があつたであらう。

之等の事情を思ふ時、我々は故乃木將軍も再三嘆稱せられた事であるときくが、寧ろロシヤの兵卒達がよくもあれ迄勇敢に且つ頑强に戰つたかを訝かしく思はぬわけにゆかぬ。

一つは無智蒙昧と云ふ事の爲めだつたかも知れない。其の結果野獸性に富んでをるといふ事の爲めだつたかも知れない。或ひはいざ戰ひとなつた時以後は戰場特獨の群集心理に支配される爲かも知れない。數百年來發ばれて來た、貴族階級に對する服從性によるのかも知れない。けれど恐くはやはり其れ等の諸原因にも勝つて彼れ等が皇帝(ツァール)に對し抱いて居つた忠良の念を其の主な原因に擧げないわけにゆくまい。

「無智」であるからロシヤの百姓には迷信が多い。「ロシヤ農民の宗教」といふ樣な問題は今後のロシヤの運命を考察する上にも一應吟味 研究し置く可き重大なことなのであらうと思ふけれども、自分にはそんな問題を詳しく論ずる資格もないことだし長い文句はぬきにして書く。多くの場合、無條件付きの盲信であるから、たとへ「迷信」にしても其の迷ひのさめぬ間は他の利巧な人達に取つては如何にそれが馬鹿々々しく見える樣とも、信じてをる百姓それ自身にとつては自ら直覺し得る絕對の眞理であり實在であり、從つて大なる力である。たしかドストイェヴスキイの小說「白痴(イディオート)」の中に挿話として書いてあつたと思ふが「はじめて見た懷中時計といふものがどうしてもほしくて堪らず、泣いて跪いて神樣に祈つたあとで、其時計の持主であつた旅人を殺してそれをとつた……」と云ふ百姓の信仰の中にある神樣は、時には相場もやり兼ねないと云ふ樣なアメリカの宣教師などの說いてくれる神樣よりもいくら力强くまた有難いかわからない。ツアールに對する農民等の信仰も恐らくやつぱりさう云つた樣なものだらう。

長い間インテリゲンツィアから斷えず根氣よく吹きこまれた結果、近年に到つては農民達も、農奴解放令の出る前或ひは其の當時などとは大分ちがひ、自分等の境遇に關する不滿といふ事も次第にハツキリと知る樣になり、之れと同時に役人併びに地主等に對する憎惡の念をも抱く樣になつてゐたのであつたが彼れ等のツァールに對する美しい考へは之れが爲めに少しも變らなかつた。彼れ等は、皆確く信じてゐた、「神樣が御選びになつた(ロシヤ皇帝は歷代ギリシヤ正敎の盟主と云ふ事になつてゐたから)おれ達のツアール樣はいつでもほんとに心からおれ達の事を心配してゐて下さるんだ、成程役人や地主の中には惡

い事をしておれ達を苦しめる奴も多いが、然しこれはツアール様が一向御承知になつてをらねえからでもし役人たちの事やおれ達の困つてゐる様子が一旦御耳に入らうものならどうして〳〵決してそのまゝにやしておかれやしねえ、必度すぐに役人や何かをひどく罰しておれ達を救けて下さるにちがいない……」。

之に對しインテリゲンツィア中の革命家達は、「いや〳〵決してさうではない。君達を苦めるあの役人や地主たちはみんなツアールの手下なんだ、ツアールは何も彼も百も承知なんだ。あの役人達や惡地主のやることなぞは實はみんなツアールが奴等に命令を出してやらせてゐるんだ」などゝ大いに説明に努めた事勿論であるが、然し(其の後都會に出て勞働者となつた様な分子を除き)一般農民のツアールに對して抱いて居つた信頼敬慕の念は愈々今度の大革命が勃發する少し前位まで殆ど大して變つてをらなかつたものゝ様に考へられる。惡いことがあれば彼れ等はいつも其れをツアールと彼れ自身との間に介在する役人の階級、ツアールの任命をうけながら少しも其の責任を全して居らぬ大臣たち、ツアールを取り圍んでをる近從者……等の罪に歸して、未だ曾て心の中にツアール自身を責めたことはなかつた。さうして或る意味に於て、實際これは農民の方がインテリゲンツィア中の革命家などよりも考へが正しかつたかもわからない。後になつて、全ての宮中のカラクリがわかつて見れば、前には眞劍にツアールの事をけしからぬと考へて憤つてゐた様な人達でも「あんなに複雜な制度や方法で、まはりの惡人共から出來るだけ馬鹿になる様に〳〵と斷えず包圍されてをられたのでは、よほどの大聖賢か大英雄かでなければ中々國民に満足を與へて君臨者たるの責務を完うして行くことは出來るものでない」と、殊にニコライ二世などには、死なれてからあとで大いに同情の涙を灑いだ人も多かつた。「あゝ云ふ高い身分に生れられたといふことが御自身に取つては實に何と云ふ不幸であつたらう!!! もし普通の家に生れられたのだつたら、あれ程、人から惡まれて終ひにあんな殺され方などされるといふ程の惡い方では決してなかつたであつたのに……」と心に感じた人必ずしも以前の王黨の人ばかりではなかつた様である。

日露の戰ひが始つた一九〇四年の末頃からロシヤは次第に其の本國の方が騷しくなつた。戰ひによつて暴露されたる國の内部の醜體を坐視するに忍びず、且つまた斷え間なき戰場よりの敗報に流石の當局者にも既に多少の困憊の色があることを先づゼムストヴォの連中が見て取つた爲めである、有識階級に屬する全ての團體は素より、鐵道、電氣、軍需品、織工業等に從事

る勞働者の階級もまた直ちに之に呼應して立ち、彼等が積年の希望たる國政改革案を提げて之を政府當局者に迫つた。けれども長年の專制政治にまだ未練のあつた政府は中々さうすぐ急には要求に應ぜず、いつも一時脱れの約束のみを與へて之をあしらひ乍ら、一方では却つて暴虐なる（官僚魂の權化とも稱す可き）トレポフ將軍に極度の權限を與へて高壓的に之等の民衆運動を鎭定せしめむとした。

翌一九〇五年と云ふ年にはロシヤは其の本國の方も殆ど第二の戰場と化してゐた。全國の學校てふ學校は悉く閉鎖せられ、各工場はストライキを續發し有識階級及び勞働者の殆ど全部は革命の爲めに熱狂し、而して國の端から隅まで斷えず流血の慘劇が演ぜられた。

鐵道從業者の罷業によつて市から市への連絡は斷たれ、物資の輸送も止つた。市には電燈のともらぬ暗黒の夜が長く續いた。さうして只に國内のみに於てゞはなく、ポーランド、フィランドの如き屬領の地もまた此の機に乘じ劍を抜つて其の獨立の爲めに立つた。さて然らば一方滿洲の戰場は如何にと見れば、本國が斯くの如き騷亂に陷りたる際、其の形勢の振ふ可きはづはなく、敗戰に次ぐ敗戰の上に、まのあたりに見せつけられた士官等の不行績、また一つには內亂の勃發による給與品の缺乏等により、さらぬだに戰爭の何の故たるかを解し得なかつた兵卒等は終ひに戰意を失つて士官の命に從はさるに到つた。戰線のこゝかしこで丁度今次の革命に際しロシヤ戰線に於て、獨、墺兵との間に行はれたる如き所謂「兄弟つきあひ（ブラタニエ）」が次第に頻繁に行はれ出した。（之が旅順などで行はれた事はよく日本にも知られてゐた事であるが要するに敵と身方とが退屈まぎれに一時撃ち合ひを中止して順番に相手の塹壕內へお客になつて行き談笑し饗應し合ふことである。）さうして愈々沙河の大敗となつた頃には、もう全く兵が、士官の存在を認めぬ樣になり、續々と兵器をすて、自分ら兵卒のみで汽車を運轉してヨーロッパ本國の方へ脱走してゆくことになつた、苟も之を阻止するものは兵卒の爲めに殺された。シベリヤ沿道、到る處列車の車輛もまた停車場もこの脱走兵の群れで一ぱいになつてゐた。もう階級の上下などは勿論なかつた。兵卒等が士官用なる一等二等の客車に悠然と座を占めてをる時、士官等は貨車の隅に鼠の樣になつて押し込まれてゐた。また兵卒等が到る處の驛の食堂で自由に食事を命じて腹をつくつた時、士官等は殆どパンの一片をも手に入れることが出來なかつた。シベリヤの鐵路の上を來る汽車はどれも〳〵東から西に向つて、たゞ本國の方へ本國の方へと走つて行つた。國内の到る處に起つた叛亂の指揮者には何れも有識階

のものが立つてゐたわけであつたが、然し此の頃は農民達の心も、ある可成りに荒んで居たので何れの地方に於ても自らさきに立つて平素うらみ惡んでゐた地主の邸宅を襲ふた。然し永の年月、彼れ等を蒙昧なるまゝに捨て置いて顧なかつた官僚政府の罪が此の時はじめて實に見るも悲慘なるまでに實證せられた。無智暗愚なる彼れ等農民は啻に自分等年來の仇敵であつた地主たちを襲ふたばかりでなく、また或る地方に於ては歷々自分等の慈父とも稱す可き、（自分等の福祉の爲めに財をも身をも生命をもをしまず、また政府の手によつての投獄をも流謫をもおそれずして盡してくれた）厚恩ある地主をも襲ふて其處でもあらゆる獸性を逞しくした。彼れ等は自己の利害に關しても只「土地」といふ事の外は全く無智の極みであつた。邸宅は其の內部の家具財寶と共に燒き拂つた、何一つ自ら私するところもなかつた代りに、實に貴重にして完備して居つた數千卷の圖書などをもそのまゝ灰燼に化してしまつた、森林も何等利用せずして只之に火を放つた、麥の畠の、既に實つて收穫を待つてをるものをさへ、之を刈り入れはせずして燒き拂つた、けれども土地だけは占領して、之が各自のものにする希望であつた。

戰地からの歸つた兵の一部も革命側に加はつたわけであつたが、然し幸か不幸か國民一般が鬼の如くに恐怖して居つたコザックの兵の全部が政府に對し忠節を捧げて切りに其の爲めに働いたので、はじめは燎原の火を想はせたる如き全國に亘る騷擾も案外に脆く其の鎭靜を見た。

またポーランド、フィンランド等の叛亂も、止みては起り、起つてはまた止んだが結局力足らず中央政府の與へたる種々なる約束だけに甘んじて手をさめなければならなかつた。

斯くして革命戰爭其のものゝ結果は決して反政府黨なるインテリゲンツィアの勝利ではなかつたけれども、政府は憲法の制定國會の開設等をはじめ凡そインテリゲンツィアが從來多年の間望み求めてゐた條項の殆ど全てを容るゝ樣な約束を與へたので國民は皆前途の光明を夢みて革命の成功したことを祝したのであつた。

然し乍ら其の後の事實は、此の時の政府の宣言なるものも、やはり其の苦しき危期を一時糊塗し免れむとして歷代慣用して來た、奧の手に過ぎなかつたことを敎へた。

丁度以前、トルコとの戰敗の危期に際し、アレクサンドル二世が、殆ど名のみにして實なき農奴解放令を發布して一時革命派の鋭鋒を挫いた樣に、日露戰役の危期に際したるニコライ二世の政府もまた有名無實なる所謂「國會」（Dooma）なるものを國民に與へて有識階級の意氣をゆるめさせ、自ら少しく休息する時を得むと欲したに過ぎなかつた。さうして、餘りに理想的の議論のみに耽り、政府の本心を吟味するだけの注意心と洗練さとを欠いてをつた有識階級は再び巧みに政府の策略にのせられて功を一簣に缺いたのである。

憲法は發布せられ、國會また召集せられたけれども、此の時までに既に十分の休養を得たる政府は、忽ち其の本心を現はし

比の第一に召集されたる國會の已れの爲めに不利益なるを見るや直ちに之に解散を命じた。さうして憲法もまた已れの都合よき樣に之を改竄した。再び新たなる制度に選ばれたる第二の議會もまた其の任を果さぬうちに解散せられ、其の後更らに第三の骨拔き案をつくる事によつて、はじてあの今次の革命當時まで繼續したる「國會」てふ制度の存在が漸々乍らも政府から許されてゐたのであつた。

其の後、今次の世界大戰に到るまでもロシアに於ける智識階級對政府の爭ひは寸時の休む暇もなく繼續せられた、さうして國内に於ける工業の勃興と共に次第に輪廓を明かにして發達して來つた勞働者の階級はいつも前者の味方に加はつて行動した、けれども國に何等の事變もなく、政府は日露敗戰の痛傷(イタデ)も癒えし終はり、新たに英佛との協商をも取り結んで、革命憂國の士が乘ず可き隙は中々に見出し得可くもなかつた。また一九〇五年の革命によつて農民階級の與へられたるものは結局殆ど無にも等しく、足一度び田園に入れば人はなほ三世紀以前の農奴制を眼前に親しく見得る有樣であつたが、然し其の當時社會の敗北者たりし此れ等三階級の生活のうちに近き將來に來る可きロシアの國家としての變態の準備が日夜着々として完成せられつゝあつたのである。(世界戰爭前までにて擱筆)

(註一) ロシヤでは日本などとは異ひ、かう云ふ華族の稱號を保持する權利が單に嗣子にばかりではなくて子供全部に平等にある。(但し娘は他家へ嫁げば特別に皇帝の勅許か何かがない限りは生家の名や稱號を手離さればならぬ。)それ故、昔しは如何に由緒ある家柄であつたにせよ、また大きな領地などがあつて富裕だつたにもせよ、長い間には必然の結果として稱號の方で赤面に堪へぬ樣な公爵閣下が出來てくるのが道理でロシヤの小說の中に(例へばドストイエースキイのものにしても)よく公爵(クニーヂ)といふ名がどうも其の人物の行動と調和せず耳ざわりである樣な公爵閣下のをられるのは、全くこの總体的襲爵制度のある爲めである、男爵の方も同樣であるが、之は單に「男爵」のみに過ぎぬので たとひ零落しても其れ程目に付かず、また何れもドイツの血が混つてゐる爲めだかさう非常に脫線するのは少き樣である。伯爵は右の兩者に比して遙かに數も少く、但し公、男二爵が既に過去の稱號にして其の後は一回も新たに授けられざるに反し此れのみは「勳功偉大なり」とツアールから認められた人間ならば極めて稀に新しく賜るがあるのであるが、然し爵位を辱しめ小說種になる樣な子孫が出てはと賢くも心配されたのか、家を嗣ぐ可き子供のある人間には決してやらぬ内規であるとかで現にニコライ二世の治世中、新たにこの伯爵の位を授けられた例の講和大使のウイッテにしても、またコヽフツオフ(大藏大臣で立派な仕事をした人)、にしてもゴレムイキン(開戰當時の首相だつた)にしても皆男の子もなくまた娘はあつても既に他へ嫁した後のことであつた。

(註二) ロシヤの土地の單位はデシヤチーナ(Dissintin)と云ひ我が國の約壹町壹段四步八分に當る、玆には單に町步としておいた。

(註三) 後に西ヨーロッパの文明を取り入れてからは、富裕なる地主の中には家に小劇場を備へて農奴中からの俳優に演じさせ、或ひは農奴から成り立つ自家專屬のオルケストルなどを持つ樣なものも出て來た。

(註四) 九歲以上の男女でまるで讀み書きの出來ないものが、ヨーロッパロシヤの樣な都會にも多く、兎に角、知識階級的分子を傍らに含んで居るところで平均千人の中七百人に達して居る、シベリヤなどとなれば勿論更らに甚しく實に千人中で八百四十人に及ぶ。

私の觀た日本及び世界の各都市の印象と記憶

工學博士　佐藤功一

私の今の住家は白山臺の中腹にある、此の邊は樹木が繁りあつて、二階の窓から見まはした所は一寸東京といふ感じとは別な趣がある。指ケ谷町の停車場から二丁程上つた蓮華寺の裏坂の欅、それは私の書齋から一丁許り南に當つて、ちやうど鷄頭花のやうな輪郭を以て枝を四方に開いた、秋風は蓮華寺坂の欅の木其の稍より吹きそめにけり、などと暑いにつけ寒いにつけ私の貧しい詩情を刺激する、其の欅の木の下をたどつて曙小校の方へ行くあたりは、昔の江戸の近郊をしのばしめる趣のないではないが、西側の窓から見上げた景色は一面に鬱蒼とした常綠の森の間に、家々がほんの屋根の頂を出して居るだけで、ちよつと見には森がどこ迄深く續いて居るか果てしがつきかねる程である。更に北の方製圖室の窓硝子には、隣家の大銀杏から段々上りに白山神社の森がうつり、東は指ケ谷の谷間の町家の甍を隔てゝ、どこかの長い塀を裏から見るやうに、本郷臺が遠くは菊坂附近まで一望のうちにある。毛虫の背のやうに長く延びた此の臺地の傾斜の全面を被ふ樹々、其の樹木の上に投げられた夕陽の輝きを眺めながら、今私は椅子に倚つて、昔し見た都會の印象を辿つて居る。見馴れた景色ながら、時々ゴロ／＼と響いて來る電車の音さへなかつたなら、どこかの別莊地にでも居るやうで、都會の中に居る氣持はどうしてもしない。

私が初めて東京に出たのは十八の時であつた。其時代には今の此住居あたりは殆んど畑地であつて、柳町あたりには田があつた。其頃私は丁度眞砂町の右京ケ原の下の所に下宿をして居たが、此高臺の下には小さな水溜などがあつて、冬の日などには小鴨が浮いて居るのをよく見かけたものである。夕方此高臺に上ると、何處からともなく雜然とした物の響がガヤ／＼と一種のどよめきを作つて耳を打つのを聞いた。初めは何の物音であるか疑つたがそれは家々からの話聲が風につれて方々から集つて聞えて來るのである事が分つた。自分は大都會の響といふも

のを初めて聞いたやうな氣がした。

今から考へると東京に於ける印象と云ふやうなものは殆んど全くないと云つても好い位である。たゞ初めて櫻田門の附近の裁判所、司法省、海軍省などの宏壯な建物が並んで居るのを見た時に何となく「大都市」と云ふやうな感じに打たれた。殊に海軍省の建築が非常に好きであつた。それは如何にも嚴丈に、恰度鎧兜で固めたと云ふやうな感じを持つたからであらう。今日では建築に對して餘りにいろ〳〵な事を知り過ぎたそのために、本當に純眞な眼を以て建築其物を見る事が出來なくなつてしまつた。

私が初めて街と云ふものを見たのは栃木町であつた。私共の村の人は主な買物をするために三里の路を此の町まで行つたものである。栃木の萬町あたり、これは商業街として初めから計畫されたものであつたらう、其時分の私の眼には一面が丁度砥のやうに見えた。そして此廣い道路の兩側には三尺程の溝があつて石で疊まれ、そこには渦川から引かれた透き通るやうな水が速い勢で流て居り、その向ふには大きな土藏造りの商家が並んで居た。其の間に料理店などがあつて、若い女や肝大な爺た男などがよく川で物を洗つて居るのを見かけることがあつたが、高臺の畑ばかり連つて居る村に育つた私の眼にはそれが非常な驚異として映つたものであつた。

十五の歳に宇都宮の中學に學んだ。宇都宮は城下町であるから、栃木のやうなさうした情趣は見られないが、八幡前の廣場に立つ露店はのんびりとした地方色を浮かばせて居た。宇都宮に於て私の眼に最も強く映つて來るものは、縣廳前の極めてさゝやかな場所ではあつたが近代都市（モダーンシテイ）の適（アマリケーシヨン）用であつた。それは明治十五六年頃當時の知事であつた三島通庸氏の計畫したもので、縣廳前から池上町にぬける大通り、車道步道が整然と區別され、街路樹としては櫻が植ゑられてあつた。縣廳の左には師範學校、附屬小學、下野新聞社などの洋風の建物があり、右手には中學校、巡査教習所、郵便局といふやうな建築が並んで居る所であつた。

高等學校時代三年を仙臺で暮らしたが、仙臺ではよく向ふ山に上つて、眼下に廣瀬川を見下し、更に段々上りに仙臺の市街を俯瞰した景色、之れは恐らくは永久に忘れ得ぬ印象であらう。日本造りの甍の間に所々に高く見える西洋風の建築、中に聳え立つ教會堂の屋根があり、其間々に森の綠色が點綴して居る。朝鮮の京城の南山から其の市街の俯瞰圖はこれの稍大きなものでそして更に變化の多いものであつた。瑞西も同じやうな景色に屢々出會つた事がある。高い所から低い所を見下す時

には神のやうな氣持になつて、どんなに親みのある人が通つても非常に可愛い者に見えると云ふ事を多分エマーソンが云つたやうに記憶するが、見下しの景色と云ふものは都市全體の布置を隅々まで一眸の下に收め得ると云ふ事が非常な愉快を覺えさせるものである。京都では下加茂から糺の森あたりの靜かな景色も惡くはないが、淸水の臺から京都市街を見る時が私に取つては一番美しい。それはまはりを圍だ山々の遠景にもあるが、其主要な點は京都の街の屋根瓦が皆銀色に光り輝いて居ると云ふ事にある。東京は日本の大都市でありながら三越あたりの屋上から眺めた所ではそれ程見事な感じを起させない。それは一つは東京の屋根瓦が如何にも粗末で、それに埃がかゝつて殊にどす黑い色を呈して居るからであらう。

伊太利の街俯瞰では大寺(カテドラル)の鐘樓(カンパニール)、それは總ての建物を拔きん出て特に空に聳え、そのカンパニールを圍んで其周圍に街が集つて居るので、如何にもカテドラルを中心として街が組織的に開展されて居ると云ふ樣子が見える。市街の高い丘の上に昇つてこれを眺めた時、殊に夕方ならばカンパニールから響き渡る鐘の音があたりに廣く漂ふて、白鳩の群れが夕日に照らされながら其周圍を廻り飛んでゐるといふやうな景色は到底日本などでは見られない圖である。

仙臺では向ふ山の眺めの次には、芭蕉ケ辻の市街が深く記憶に存して居る。それは其當時の都市の中心として計畫されたものであつて、整然として直角に交る此辻の四隅には、多分三階建だつたと思ふ、白壁の嚴丈な家が建てられてあつた。そして其屋根には大きな龍の這ふた形の棟瓦が付いて居たやうに思ふが、此家の間から靑葉城の城門を見た景色が、今から考へると文藝復興時代の大家だちの習作によく見る市街地の透視圖にある形であつた。私が見た日本の計畫されたる城下街で、こんなにいゝと思つたものはない。ひよつとすると正宗が支那か西洋かの街のプランニングを取入れたものではなからうか。

學校を卒業してからは、長く伊勢に居たが、津の町と云ふものはダラ、ダラに長い丈けで私には何等の强い印象が殘つて居ないのである。併し此ダラ、ダラに長いと云ふ事が、伊勢の參宮街道の町の特性であつて、それは動物の腸が食物の營養分を充分に吸收するために長く出來て居るゝ同じく、參宮道者連の財布をねこそげ絞るために斯う云ふ風に出來て居るのではなからうか。殊に其長い街の兩端に廓が置かれてあると云ふ事は益々此感じを深くさせる。

關西の街の家は擔先きに木で造つた燈籠のやうなものが下り、隣家の二階との間は土塗りの壁が突き出して居て、一方か

ら他方が見えないやうに出來て居ると云ふ事が特質である。山田の町家が神宮が平入であると云ふ事に遠慮して、總て妻入で出來て居ると云ふ事は一つの特色である。分り易く云へば他所では屋根の三角形が側面に置かれるのに對して街に向つて三角形が並ぶと云ふ行き方である。名古屋の街を初めて見たのは大學の學生時代であつたが、その折は既に相當立派に計畫されて居つた。停車場前から縣廳前に至る道路、そこには東京よりも早く既に電車が引かれてあつた。それを長く縣廳前に出ると其所には、日清戰役の大紀念の塔が、道路の中央に置かれてあると云ふ事が、假令それが今日交通上邪魔になるとしても兎に角其當時のヨーロッパの街のプランニングの採用であつた。

大阪は心齋橋通りの細い通り、それは兩側に小賣店が並んで非常な繁昌と賑ひを呈して居る。夏は此方の家から彼方の家に針金を渡して其間を帆木綿で日覆を掛けて、其涼しい日陰にショッピングの人々が往き來をして居る、これは一寸東京では見られぬものである。京都の錦小路が此の方は荒物其の他の雜貨の様に記憶するがまた同じ様に市場式のものであつた。

大阪の中の島の夜の景色、堂島川と土佐堀川の兩岸に並んだ町家の灯の水に映つた涼しい影、提灯に灯を入れた船が川の間を緒のやうに走つてゆ、とこみなども、また今の東京では味はれぬ情調である。

舊い商業市街の様子を見るには中國筋の港々に就いてするがよからう。明治以前に於て最も賑ひを極めたこれらの町々の、白壁造り本瓦葺きの巖丈な建築、船着き場の底から高く石で疊まれた岸壁、街の所々には敷石を布いた處もある。明治になつてから發展が止まつた是等の港は反つて昔の様子を殘して居るのである。船着場近くの茶屋の二階の欄干からの眺め、其所には千石船が林の如く帆柱を連ねて碇泊して居つたらう、そうして荷揚人足や、商人の往き來、其間を色どる遊女達の様子など、例へ廣重流の彩筆の殘れるものがなくとも、其の當時を想像して恍惚を充分ならしむる丈けの形を存して居る。

長崎の街こそ殊に其情緒を唆るものである。こゝこそ古くから路面が石で疊まれ、川に架せられた十幾つかの橋梁は悉く石造の眼鏡橋である。其當時の異國文化の只一つの入口、此の時代に於ては或は和蘭陀屋敷よりも唐人屋敷の方が重要であつたかも知れぬ。和蘭陀文化には國禁にふれるものが餘りに多くあつたが、支那の文化は殆ど總てが公の歡迎する所であつた。あの舗道も石橋も、これ等はたしかに南支那からの影響である。福濟寺、興福寺、崇福寺の所謂唐三ケ寺は言はずもがな、南京さんは墳墓にすらそれは素晴らしいものを殘して居

る。德川も末期に近く、蘭學の勃興から此地に災を負ふものが多くなつた。我々の知識を求めに洋行するやうに、昔の人の長崎に行つた喜び、蓋しこれはどんなに強いものであつたろうか。

越後の町に於ける雁木(がんぎ)は全く他所に見られぬものである。雁木とは家の店先きから步道に沿ふて突き出されて、柱を以て支へられた深い廂である。雪が殆んど廂まで積つて、往來の步行が困難になると、人々は此下を潜つて通行するのである、向ふ側に行くためには雁木から雁木に雪のトンネルが作られる。新潟は大火の後で此雁木が通風の役目をするため、火災の傳播を速かならしめると云ふ事で、縣令に依つて全部切り取られてしまつたから、今日昔の樣子を見る事は出來ぬが、之れを見やうとする人は高田に行くがよい。高田の街は本市街が殆んど此形式の儘に存して居る。雁木の形式、之れは古くギリシヤ、ローマの市場を取圍んだストアがそれである。起原に於ては或は別なものかも知れぬが、形式に於ては全く同一である。ストアの傳統は歐洲の古い街の兩側のアーケード或はコロネードとなつて居る。伊太利ではボロニヤ市の全部や、ゼノア市の海岸通りの古い街の部分、その他各地に此のアーケードを見、瑞西でもベルン市の殆ど全部に渡つてこれがあり、どんな雨雪の日にでも傘なしで買物に出掛ける事が出來る。そして其のアーケードの間には所々に丁度帳場格子のやうなものが鐵で作られてあつて、其中で小さい露店などを開き得るやうに出來て居る。

英吉利のチェスターの古い街、それは總て木造であるが、此所では二階にも此の形式になつて居る。そして一方の二階から隣り隣りと順々に買物をする事が出來るのである。其の他歐洲の到る所、都の古い市場、それは澤山の露店の立つ市の廣場、其の四角な廣場を圍んだ建物には多くこれが付いて居る。

私は初めて此のアーケードを香港に於て見た、次に錫蘭島のコロンボに見た。埃及のポートサイドのは木造で立つたがこれが煉瓦造の建物から突き出されて居つた。是等の地方は孰れも暑い所であるから、光線を避けながら街を歩く事の出來るやうに、英吉利人が殖民の一つの政策として工夫したものと許り思ふて居つたのである。事實其の目的は同じであり作ら實はこれは希臘の市場なるアゴラや、次では羅馬の市場なるフォーラムの周圍をかこんだストアから來たものであるといふ事が後で分つた。

日本のやうに雨が多く、それに夏の日光の割合に強烈な所では、都市計畫に於て其の新市街の商業區域の或る部分に、此種の方法を採用すると云ふ事はよいことではあるまいか。

話は新潟にもどつて、新潟市の情調と云へば、市街にあらく碁盤の目のやうに通じて居る濠に存する。之れは其の部分に於ては濠が主なる通りであつて、其兩岸が石で積まれ、其の兩側が歩道を形作り、其歩道の向ふは居家である。歩道から段々と石段が水の中に沈んで行つて、そこに船をつけたり、或はそこで洗ひ物などをする事が出來るやうになつて居る。昔は船で物を賣つて歩いたものであるさうだが、今日では信濃川の河床が隆起したゝめに、此濠の水位が上つて、船で此の橋下を潜る事が不可能になつて來たために、殆んど昔の役立をしないが、兩岸に茂つて居る柳木の枝の低く垂れた邊りに船をつけて物賣が好い聲で叫んで居た樣子が想像されて面白いではないか。

同じやうな形式は和蘭陀のアムスターダム市で見る事が出來る。アムスターダムの街は十八世紀に於て最も隆盛を極めたが、今日では殆んど繁昌が止つて居るから、此街では川の向ふに街路樹を通して建並んだ赤い煉瓦の、軽るくバロック式の影響のある十八世紀式の建ちの高い家々が昔ながらに其儘眺める事が出來る。また同じやうな景色を蘇州に於ても見た。之れは兩側の家が白壁か黒塗壁で、岸が高く、下を船を通すために橋が弓形にむくり上つて居り、人はこれを渡るに石段に依つて上つて更に、石段に依つて向ふ側に下りるのである。私の見たのは蘇州だけであるが、此南支那の水郷には此式の街が澤山存在するものであらう。

ベニスの橋は此式と全く同一であるが、カナルの形式はこれとは違つて居る。何故と云ふに、カナルの兩側には歩道と云ふものはないので、カナルから直ちに家に上るやうになつて居るのである。そして此カナルに面する街には居家はなく、多くは貴族の住宅である。ベニスに關しては昔友人に同地から送つた手紙の一章があるから今こゝに掲げて見ることにしやう。

――大和繪の千鳥の形、此町のそれに似たれば、吾れ此れを千鳥ケ島と云ふ、ベネチヤの景色ばかり、吾心をチヤームせしものはあらず。數ある運河其中を巽より乾、千鳥の尾より頭のかた、S字なりに貫くをカナル、グランデとは云ふなり、吾が宿は此汀に立てり。海と海とを連ねたるものなれば、もとより音立つる瀬もなく、渦をなす淵もなし。只溶々として満へ、溶々として汐の流るゝあるのみ。之れを懐ける兩岸は水より高き事二尺、並びて立てる數多の宮殿（パラツソー）、古きは十一世紀のビザンチン式より、新らしきもルネサンスの初期を出でず、家々の前に立て連ねたる船繋ぎの杭は、黄に赤に色どられて、やさし姿を水に映せる、冬の日の影ゆるふ、きら／＼と水にきらめくさゞ波に、ゴンドラの相伴いて並びつゝ、櫓の音ゆるく漕ぎなが

ら、何を笑ひ語りて行くにやあらん、寺々よりの組鐘（カロリン）の諸調に、暮色漸く水面を閉ざせば、不可思議の河房もとより轍の響も聞えず、窓もるゝ爽燈淋しげに、闇のたゞ沈々として、水のなど錯々たるもをかし。若しそれ黄帆弛みたれて沖の船動かず、春の日の霞みかゝる、或は風薫るバルコンに夏の眺めを知るを得ば其興更に深かるべし。岸に立てる家々のうち、パラツソオー、カドオロとし、ひどき鄙びたれど華燈樓とも云ふべくや、黄金の宮との意にして、誠に女性の小宮殿なり。其の形の優にやさしき、花の姿の天津乙女の、袂かさねてうち笑みつゝ、汀に立てるになぞらうべくや。秀麗なるクレスチニグは、額ぎはをかざるかざしの花とも見つべし。壁の紅白のマーブルもて被はれたる、所々に刻まれたる模様の凡ならぬ、柱のたゞずまひ、ウインドヴ、トレセリーの調ひたる、誠にゴシック粹にして、世にくらぶるものなしとぞ見えし。次によしと見しはツエッカなり、その晉我國の雪花に似通ふ。サンマルコ、コイブラリーの脇、ローヤル、ガーデンとの間に立てる純白の建物之れなり、十六世紀復古式のアーキテクト、サンソビノの手に成れるもの、デテールの備にして、而も形の端麗なる、前者に對して降準紅脣の若人の、凛々しき武者振にも比すべくや。サンマルコ大寺のモザイク、バラツソオー、ドーチのフアサードは云はずもがな、サンタマリヤ、デルラ、サルーテの遠景、ビヤセタの夜の眺め、孰れか美しからぬ。其他ローマネスク、ゴシック、近きはルネサンスの麗はしき家々の數許多なるを知らず。河に渡せる三百七十八個の橋梁、亦一として其形面白からぬはなし。更に輕舟に貸して、此千島の島の友島なる。ムラノ、ブラノ、トルチエルロー等の島々をさぺらば、ビザンホン期の遺跡また少なからず。わきて島々よりアルプスの眺め、絶景筆に盡し難し。我れ此地に止まる事既に二旬、斯くの如くにしてたほ未だベネチヤを去る能はざるなり。――

斯うしてベニスを去る事が出來なくて、忙しい旅なのに一ケ月も滯在したのであつた。私の宿屋には墺太利の貴族が侍女を伴れて滯在して居た。それは老夫人で病人らしかつた。よく私はいろんな戯畫を描いて食後に二人の人と笑ひ興じたものであつた。出發の時に此老夫人が維納に居る息子さんに紹介狀を吳れた。番地も何も書いてなかつたから、番地と職業とを聞いた所が、そんなものは要らないと云ふ事であつた。それに依つて見ると相當維納に於て名を知られだものらしい。尤も其手紙は遂に息子さんに手渡しはしなかつた。よく此老夫人につれられて、サンマルコの前のピアッツアー（廣場）のカッフエー、フロリアンへ行つた事を思起す。此のカッフエーは誠に上品に

來て居つて室が細く仕切られて、それが皆アラビヤ風に綺麗に裝飾されたものであつた。此處に行つてカッフエーを飲みながら、此教養ある老夫人と歴史や藝術の話をする事がまたなく愉快なものであつた。此ピアッツアーの周圍は前に云つたアーケードで取卷かれて居て、其アーケードに向つてタッフエーや貴金屬商の店が開かれて居る。サンマルコ寺院の正反對の狹い門を這入ると、此廣場に出るのであつて、廣場には一面に敷石が敷詰められてあつた。そして正面にサンマルコの壁がずつと聳り立つて、その頂上の妻の所が金と藍と、緑と紅の美しいモザイクで、聖者や使徒だちの事蹟が畫かれて居る。そのキラ〳〵光るモザイグの後に、辣韮形の圓頂屋(ドーム)が中央の大きなのを取卷いて小さいのが四つ、孰れも黝んだ鈍色(にぶいろ)を呈してむくり上つて居る。これは同じ希臘教の寺でもモスクワの寺院が、其所には多の日が二百日も續いて、厚い雪が森も野も道も街も家々の屋根をも、單調に被せて居る土地である爲めに、大陽の照つた日に容を賑はすきら〳〵した物を欲しづがる當然の理由からして、あの屋上にニヨキ〳〵突きつ立た圓頂(ドーム)上が或は兜のやうに條を持つたり或はねじり模様になつて居たり、或はまた鳳梨(パイナップル)の皮を見るやうに刻まれたりして、此の上が全部金色に鍍金されて居るのと好い對照を持つて居る。

サンマルコ大寺の前には礎盤(ベース)に美しい彫刻を持つた二本の大きな旗竿が立つて居て、其旗竿の向つて右手の手前の角に鐘塔(カンパニレ)が建つて居る。そして此の鐘塔の向ふを曲つた左側がピヤセタ(小廣場)で、その左手にサンマルコと隣つて下から上まで薄赤いマーブルで外側の壁を貼つた三階の建物がドーチの宮殿である。ドーチの宮殿の前がサンマルコ、ライブラリーで、之れと接してピアッツアの方に入口を持つたのがパラッツソ・リアレである。多分其入口がカフエー、フロリアンの隣であつたやうに思ふ。

話は後に戻つてドーチ宮殿を左にし圖書館を右手にして、ピアッツアーの端が直ちに大カナルの底から積み上げられた岸壁になつて居る。そこには何時もゴドンラが澤山碇泊して遊覽の客を呼んで居る。その岸壁から少し手前に、二本の大きな花崗石の柱がピアセタの敷石から高まつて、一方にはベニスの象徴である獅子が片脚を開かれたる書物の上にのせた彫刻が戴り、他方にはサシタ・テオドルの像が載つて居る。聞く所に依ると昔此下で處刑が行はれたのださうである。そしてドーチの宮殿の二階の窓の中、赤いマーブルの中にたゞ一ケ所白いマーブルで縁を取つた窓があつて、そこからドーチが宣告文讀をみ上げたと云ふ事である。

ベニス滯在中の日課は午後三時頃迄を各寺院、宮殿、博物館などの研究に當て、其の後を此邊のそゞろ歩きで費したのであつた。明日愈々ベニスを立たうとする晩に、如何にも名殘の惜まれてこゝの廣場に來た事を思ひ出す。それは丁度二月の末であつたが、其晩は雨が降つて居つてたいへん暖かゝつた、斯う云ふ時にはたぶんシロッコと呼ばれた南風、それは水分含んだ暖かい風が吹いて來て、敷石の上にしつとりと露を置く。此露のためにアーケードの舗石が滑るものであるから、上に一面に鋸屑が撒き散らされてあつた。日曜であつたゝめにピアッツアーには電燈が晝のやうに明くついて居たが、雨降りの事とて一人の人も見えない。只カフエーの中から人の話聲が聞えて來る丈けであつた。丁度初めてベニスに着いた晩は宿屋に荷物を置くや否や直ちに此ピアッツアーを見舞つたのであつたが、其時は今日と同にやうに一面に電燈がついて居て、恰もカーニバルの時であつたから大分賑はつて居た。廣場の中央に奏樂臺が設けられて、これを圍んで假面を冠つた人がキャツ〳〵と騒ぎ廻り、其間を綺麗に着飾つた男女が往き來して居た。それは三十日程前の事だが、其折はなか〳〵寒かつたが僅かの間に大分暖かくなつたものである。

漸やかに降り注いで居る雨のなかに旗竿の頂の金色の玉が濡れ色の光に輝いて居る。カンパニールの頂上までは光がとゞかないので、塔は遠目にはたゞ黑い巨人のやうに突立つて居た。アーケードをパラッツォ、リアレの方にあるく、カフエー、フロリアンの窓の中を覗いて見たら、何時も私共の占領したその氣の利いた腰かけには三四人の男が何やら高らかに笑ひ興じて居た。パラッツォ、リアレの前には番兵が嚴めしく劍を持つて突つ立つて居た。夜會の歸りか、盛裝した婦人が侍女らしい老婆と少年を伴れて出て來た。私は塔の下を通つてピアセタに出た、カナルの方を見ると只眞黑な暗の中に船の灯が幾つも瞬いて居る。二本の花崗石の柱は下から上の方に黑くぼかされて、上の獅子の顔が微かに見えて居た。眼をサンマルコの方に轉ずるとドーヂ宮殿の方に向いた妻の間に、小さい一つの燈明がチラ〳〵として居る。此の燈明には斯う云ふ因緣がある。それば昔此土地に殺人事件があつた時、或男が劍の鞘を拾つて屆け出た所が、下手人が遂に不明であつたがために、結局其男が無實の罪を被て處刑せられた。柱の下で今刑人の刀が首の所に落ちんとする時、實際の犯人が心に咎めて自訴して出たが、併し驅けつける前に首は既に落ちて居た。其無實の人の冥福を祈るために、嘗て夜間灯を入れた事のない此大寺に、これだけは例外として燈明をとぼすのださうである。獅子の像のある柱の下に

つて、小さい燈明のまばたきや、ドーチ宮殿の宣告文を讀んだ窓を見る時、餘りにそれが目並なドラマではあるが、其時の光景を浮べて一種の感を引起さしめた。況んやドヂー宮殿の裏には古い牢屋があり、そこの牢屋の前へ出る爲には宮殿の側から牢屋と宮殿とを貫いて大カナルに出て居る滾割に「嘆息の橋」といふ橋があつて、それが柱の下から遠く雨に光つて見えるのであつたから。やがて歩を返して其間無數の鳩の遊んで居るピアッツアーを横切つてもとの入口を潛るとき、丁度其の外の活動寫眞は今一區切ついた所と見えてそこからぞろ／＼と人が出て來た。下宿の側の橋の所に來た時に、向ふからポンチの叔母さんがやつて來た。これは橋の向ふ側に店を持つて居る小さい居酒屋の婆さんで、ホットポンチを賣つて居り主に勞働者などの行く所であつた。引弛んだ黄色い顏、鼻の下の薄髭、何處を見詰めて居るともない細い目、何となく大悟徹底したと云ふ顏付、百雷前に落つるとも吾れ關せずと云ふ樣子、其樣子と勞働者達の集まりが面白いのでよく私はそこに行つたもので、其の都度例の老夫人に笑はれたものである。今しも橋の前へかゝると、例のダブ／＼した黑い衣物を着てまじ／＼と私を見て行き過ぎた、もう叔母さんとも、別れだと思ふと淋しかつた。

こんなに私はベニスに執着を持つて居たのである。ベニスが旅客の眼を喜ばす重なる點は一、つは水の街である事、一つは中世紀から文藝復興期にかけての大商業國で、アドリアチック海から黑海に至るまで各地に殖民地を有して盛に東洋貿易をしたゝめに、歐羅巴にありながら建築其他に於て大いに東洋風の味ら見られる事、一つは、喜望峰を廻る印度行の航路が開けてから全く街の發展が止まつたために古い建築を昔のまゝに見得る事、も一つは此の地特有の風俗をした婦人に存する、それは東方から奴隸を多く輸入したゝめに、是等の混血兒が美しい姿を殘したのであるといはれる。今でも恐らくはそうであらうが、此の土地の婦人達ちは、睫毛の長い大きな目、赤い唇の濕つた薔薇色の顏、黑い髮の頭には帽子も冠らず、冬ではよつたが足に垂るゝ大きなショールにくるまつて、木底・つツかけ靴で舖石の上を歩いて居る。此 地方で中流以下の人のはく靴は大抵、底であつて。男のには編上げのもあるが、女のはスリツパの樣な日本で醫者が車で往診に行く時よくはく樣なあの形である。ムラノやブラノあたりの島々に行くと、こういふ風をした女たちが二三人で、入口の前の舖道の上に腰を下ろして刺繍に餘念のない、有樣をよく見かける事であつた。ほんとうの美は取り締はぬ所に存する。西歐羅馬の女と比べるとたゞ少し背が低いやうに思はれた、概して伊太利人は北方チウトン人より

は足が短いのではあるまいか。人は巴里の美人をいふ、私は滯在が短かゝつた爲めか、人の集まる所に出なかつた爲めか、殆ど其の感を起さなかつた。これに反して倫敦に於ては洗練された上品の婦人が目についた、伊太利風のブルネツトタイプのものよりは、結局淡栗色の髪に蠟細工のやうな顔、そして澄んだ海のやうに青い眼の玉、それ等から私はいつも北歐神話の妖女を思起す、斯ういふやうなブロンドタイプの婦人の方が心に深く永い印象をきざみつける。英吉利の中流の婦人、それは腕環や耳環を用ひるといふ事をしない、指環すらはめて居るものが少ない。そして多け黑ずんだ服に、夏は純白の麻のものを用ゐる。とこういふ中流階級の婦人が、其の周圍の變化の多い街の家々を背景として美しさを感ぜしめるものである。

倫敦の市街は一定の計畫の下に造られた近代都市ではない。街衢は蜿りくねつて狹く、其兩側に建ち並ぶ家屋は、間口が比較的小さく、黑ひく〳〵に或は赤煉瓦、或は石、或は黄色なテラコッタ、そして其の意匠も或はクラシツクがゝつたもの、或はローマネスクやゴシツクなどの自由手法。街路に妻を見せたものもあれば、賑やかに持送や小塔で飾つた平を見せたものもある。變化はあるが雜然として居らぬでもない、どこまでも中世紀の傳統がぬけ切つて居らぬ。これに反して巴里のものは間口の大きな家々が一定の規律の下に統一せられて、何れも石造や擬石塗りで、窓や檐先きはきちんと揃ふて居る。しかも街の交式點には廣場が巧みに按配せられて、立像が立ち、噴水があり、廣場に面した家屋の隅角の壁などに〃龕が設けられて其内に立像がおかれたり、或は其の下から噴水が迸る。

倫敦は複雜な變化の多い街衢に雜然として統一された服裝の人が歩いて居たやうに思はれるし、巴里の方は整然と統一された街衢に千姿萬態の服裝の人が歩いて居たやうに思はれる。巴里では支那服のまゝの支那人、土耳古風のまゝの土耳古人をよく見かけたし、中には木を刳りぬいた靴を穿つた田舎の人を見かける事も多くあつた。これ等は其の當時の倫敦に於て　られぬ圖であつた。

倫敦の到る所には小さい公園があるが、是等の小公園は、孰れも數寄屋橋公園のやうに中に這入つて見てこそ種々の設備も分るが外からは只木の生へた場所としか見えない。倫敦の公衆便所が殆んど悉とく地下室に作られ、清潔さを持つて居るに對して、パリの辻々にある個所が日本の四い郵便箱の大きなものゝやうな形で、そこから臭氣が紛々として起つて來るのはこれが世界の美術の大都會とも思はれぬのである。巴里の到る所の廣場の噴水、それは羅馬を直似たものであらう。羅馬では水を

ふんだんに街路に噴出せしめて居る、其の贅澤さは驚くべきものである。之れは古代に於て羅馬帝國が大水道を經營した其餘德を今日までも受けて居るのである。

現今大博物館となつて居る彼の巴里のルーブル宮は、古くは十六世紀のフランソア一世から、近くは十九世紀のナポレオン三世に至る迄、各時代の王に依つて漸次に增築されたものである。そして西に向つて開けたる大中庭を持つて居る。其の中庭からチユイルリーの公園、次ぎがコンコルドの廣場、これ等を貫いて大凱旋門の方へ一直線に走つて居るのが四十二間のシヤンゼリゼーの大通りである。斯う立派に計畫せられてしまつては、此の大噴水とオベリスクと女神達の大彫像との華麗極まるコンコルドの大廣場を、嘗ては路易十六世と其の一族や多數の貴族たち、更に間もなく革命黨の領袖ロベースピール迄が、斷頭臺に身首所を異にした場所と誰れが思はう。更にシヤンゼリゼーの大通、長さ一哩三分の一、其所には繁りあつた並木を越して近く遠く兩側に各種の名建築が見られ、往きかう男女の色どりと、砥のやうな路面を音もあく走る紅や黑の自働車の整然たる列。石で作られたものも血のめぐつて居るものも、大きなものも小さなものも、靜止して居るものも動いて居るものも、空も舞飛ぶ埃も、皆悉くがその樣に計劃せられたページエントのモーチーフだとしか思はれない。佛蘭西藝術はどこからどこまでも婉曲で少しも角張つた所がない。それは私に取つては余りに、紅、黃、白、靑、緣の絲卷をたぐり亂した迷路(メーズ)だ。太くはないがしなやかで強すぎる此國の藝術は到底私のものではない。

倫敦の日曜日は火の消えたやうに淋しい。商店も、博物館も、郵便局すらも戶を閉して、夜と朝との汽車より外は運轉を休止して居る。巴里では何れも週日の通りで、公園などの散策にはまた一入の趣きがある。巴里に於て殊に面白く見られるのはカツヘエーである。それは人道の上までテーブルを並べて人々が往來を眺めながら新聞などを讀みつゝ一杯のカフエーを徐かに啜りつゝあることである。或友人が私を案內しながら斯う云ふ話をした。元來フランク人と云ふものは浮はついた賑かなことが好きであつて、往來の出來事を眺めることを好む。それであるから獨逸のフランクフルト地方に於ては百姓家はみな往來に向つて、大きな窓が開かれ、表を眺め得るやうに出來て居る。巴里の建築が、往來に面した總ての窓にはバルコニーがつき、そこに出て眺めらるゝことになつて居る事や、カフエーの此有樣たどは皆これに原因するものである、といふ事であつたが、伊太利あたりでも古く羅馬時代から、春から秋にかけ

て氣候の良い時には庭に出で食事を取る風習がある。

巴里のカツフエーの不思議は冬期に存する。それは雪の降る寒い日でも、人道にのぞんだその外のテーブルの間に摺煖爐を置いて、體を溫め乍ら呑氣に外をながめ得る樣に出來て居る事である。冬の巴里の街では人道で燒栗を賣つて居つた、その一袋を買つてポツ／＼食べ乍ら步いた心持は、學生時代に仙臺の一番町の通りの芝居の立見の歸りを思起させた。然し高い建物のたてつらなつた裏通りに、月に更け行く大路から遙かに消えて行く馬車の蹄轍の音が聞えて來る事などは又別の感じを引き起さす。

ブラツセルの街は全く巴里風であつた。こゝでは特に取立て云ふ程の事もない。ヘーグの街が全部殆んど赤煉瓦の低い建物から出來て居るのか、お隣りのアントワープやブラツセルの灰色の擬石塗なのに對して面白い對象である。アムスターダムの赤煉瓦の話は既に前に述べた。

淸潔なのは伯林の街であつた。家屋の總てがユニフオームを着たやうに整然と並び道路には塵一つ落ちて居ず、馬が糞を落すや一分との猶豫もをかず、何處からか道路工夫が出て來て取り除ける。夜半には重な路面が悉く水道 水で洗はれる、此きれいに洗滌されて居るアスフアルトの路面は雨天でなくとも鏡のやうに人や馬車の影を映じて居る。

伯林の市街はキチンと現代文化に依つて統一されてあつた。如何にも几帳面に纏つて居つた、然し其所には詩がなかつた樣に思はれる。これを建築師の製作にたとへて見れば、巴里人はなだらかに粘り氣のある曲線を使ふやうに神から教へられた、伯林人は本能的に角度のキチンと合ふ樣に直線定木を用ゐる、曲線に對する研究が淺いはけではないが、其れは理智的に取り做はれる。こういふ行き方で伯林市が出來ては居まいか。其所にこういふ話がある、西洋人が東京へ來た、彼は既に繪畫や旅行者の書いたものから東京の市街の大略の樣子を知らぬわけではなかつたが、來て見て初めてそれが尨大な村であるのに驚いた、市(シテイ)の中心に出ようとして南の端からだんだん北の方へ步いて行つた、やうやく賑やかになりかけ家並も相當な所へ出て來たから、やがてシテーに出る事と思つたら、何の事だもう北の端へ出る途上にあつたのだと。伯林は東京の樣に尨大には廣がつて居ない。それは整然と緻密な組立とを以て居るが。街衢が余りに同質的(ホモジニアス)で、東京と同じく中心がない。

建築と農業とは天然の地表を變化させる技術である、と誰やらがいふた、一つは植物を以つて一つは石と煉瓦とコンクリートを以て。都市は全體として一つの大建築がある可き筈だ、こ

う見ると日本の都市殊に東京は余りに天然そのものが多すぎる。

惜むらくは私は西班牙と南佛蘭西の都市を見なかつた。

南米ベノスアイレスの市、此の近代的市には富者階級と勞働者階級とより外はない、富者階級は常に享樂に耽つて居る、勞働者階級は折々スイライキをやる、住宅の女中連の間にすら組合が出來て居る。そして雇主との間に勞銀や時間に關して意見の一致點を見出せぬ時には、女中連が總ストライキをやる、それがほんとうに理性的に事務的に行はれるので、意見が一致した後はまた平常の如く笑ひながら家事に携はる。この話には或は無意識に誇張せられた所がないでもなからうが、私に此の話しを聞かして呉れた南米からの歸朝者があつた。此の狀態の喜ぶべきものであるか悲しむべきものであるかは暫く置いて、なんだかそういふ都市へ行つて見たい樣な氣がする。

私の海外に遊んだ時は、最も多く北伊太利の小さな市街を見て歩いた。小さな市街の印象記は直ちに書き得るものであるが。それが大きな都市になると、其所には訪れたけれどならぬ日本人も居る事や、長く滯在すると云ふ安心や、見るべきものが澤山あると云ふ事や、そんな事が心の統一を破つて割合に全體の印象を得難いものである。日記を見ても小さい街の所は精しく書いであるが、大きな都市の箇所は其儘白紙で飛ばしてある。尤大なゝ都市はどうしても偏數である、ロンドン、モニエメント（拙ない設計の大柱）の上から塔橋の見下ろし、ロンドン、ブリッヂからセントポール大寺の遠景、ウエスト、ミンスター橋から議事堂の眺めなど忘れ得ぬ景色ではあるが、前にも述べた樣に街衢はさながらに中世紀の配布で、現代都市として擧げる事は出來ぬであらう。しかも五十尺？の地下を貫いて居るとかいふ地下鐵道は便利に分散せられてある。地下電車は場末に用ゐらるゝ丈けで、市中の地上交通は全く乘合自働車に依る、此の自働車が顔ぶ大きな二階付きのもので、雨天には二階の人は各自が蝙蝠傘をさす、此の二階に陣取つて市街の見物は他所では見られぬものである。

冬の霧、其れはメキシコの灣流の温い潮が英國海峽に流れ入つて、其れからの水分が冷氣にふれて霧となり、これが各戸のストーブから立ち上る煙と混じて、眞に窒せかへる黄霧となつて市街をたちこめる。此の深い霧に遇つては、馬車も自働車もピタリと交通を止めてしまう日もあるといふ事だ。

高架鐵道に依つて市街の家屋を見下ろし乍ら初めての市街に這入つて行く心持と云ふものは定にストライキングなものである。今でもロンドンを思ふ時、そこにはアルバート、ドツクか

らフエンチヤーチ街の停車場に這入つた時の、鐵道の兩側に並んだ勞働者の家屋の屋根の上に突き出て居る一望何萬とも知れない土管の煙突を思ひ出す。

大都市に這入る時には灯ともし頃が殊に味のあるものである。それは薄暗い朧ろな闇の中に、都市に近つくに從つて段々と灯の數を增して行き、やがて幾萬とも知れぬキラ〳〵と灯の輝き渡つて居る大都市の中心近くに達するのである、總ての細部が闇に包まれて朧に、明日の前に明白に展開されゝ都市がどんなものであるかと云ふ事を深く想像させる。

交通機關の良く整つて居るのは紐育市である。其所には地下と地上と高架との三つの交通機關が、整然と直角に交る街衢に沿ふて、便利に布設せられてある、この近代都市の偉觀は殊に其の高層建築にある、私は嘗て書物や寫眞に依つて十分知り拔いて居た事ではあるが、船がハドリン。リバーに這入つて行つた時に朝のもやの間に右側に林立して並立つて居た何れも數十階の建物の偉大さには驚いたのであつた。之れは此の市の土地が限られ、地價の高いために、斯くの如き高層建築を起したのは一面の原因ではあるが、一つは廣告のためになされたものと見てよかろう、一つの建築物の中に普通と急行の別ある數十箇の昇降器（エレベーター）は或意味に於て上下に走る電車であり各階が各街、各室が家々を意味しし居るのである。一例を舉ぐればウールオース、ビルディングが、高さ五十五階、建坪千五百坪、延坪四萬坪、昇降機の二十八臺が一度上下すると全部で四哩を動いた事になる。外部の窓硝子が千五百坪、電燈線の長さが八十七哩と云ふ事に依つて其の大きい樣子を知る事が出來やう。

羅馬に於ては私はその全部を、殆んど古代羅馬の廣場であつたフオーラム、政廳であつたカピタリノ、王宮であつたパラチノ、其他大浴場、大競技場、大裁判所、などの遺跡、是等の遺跡は殆ど廢墟となつて居るが、其所には大理石の敷石の間から一寸程の若草が一面に萌いて、小さな白や黄の花をつけて居つた、春の日の遊びには此上ない所だつた、其の舊跡の研究に費さしてしまつたで羅馬と云ふと自分には之れ等の廢墟と書物から得た智識とで頭の中に打・建てられた古代羅馬の都市が浮ぶ丈けで、彼の美しい法王宮、シスチン殿堂の內部、ミケランジエロやラフーエルの傑作である其室內裝飾の如きは第二段として浮び來る丈けである。乍併私はピンチオ公園の側の友人の住居に滯在して居つたものであるから、此高臺からの羅馬の俯瞰が何かの拍子によく思ひ出される。シモンズの羅馬の書き起しにも此公園の火事のやうな夕燒けの景色を叙して居る。私の此の地に滯在した時は、三月の末だといふに日本の夏よりも强

い光線であつた。しかも澄み切つた空氣に遠景の輪廓がはつきりと見え乍ら、微細な粉末を空中にまき散らしたといはうか、丁度イリデスセンスを受けた陶釉を見る様な感じであつた。白いベールに包まれた様な白晝の光景を見るのもよいが、それは、今觸れて居るものと心とを別け離す、と誰やらのいふた星の夜の孤獨を、此所で味ふに最も適して居る。然し、羅馬には至る所に廣場があり、其所には大抵噴水に水があふれて居り乍ら、倚つて眺む可きベンチといふものが殆どない。それは人氣の悪るい伊太利の事であれば人が持ち去るためにそうしてあるのか、それならば此の國至る所に産するマーブルで作つてもよからう。それとも人をカッフエーに引く手段としてか、或はまた貧しい財政がかくあらしめるのか。私の行つた時には此のピンチオ公園にもそれがなかつたやうに思ふ。

海に臨んだ都市、それは何と云つてもナポリには及ぶものはなからう。ヴィヴィイラ、デイ、キアイア海の上から漸次に高まつて居る別莊地、其處からヴイルラ、ナチオナーレの公園を見下した景色、綠の樹木、殊に伊太利特有の、頂上丈けこんもりと茂つた松の木振り、其間から透いて見える白堊の壁、岸から急に深くなつて居る澄んだ淡綠の水、それは希臘神話のパルテノーペのサイレンを偲ばせる靜かな海の色、遠く向ふに霞んだベスビオ山、其上に廣がる伊太利藍(イタリアンブリュー)の空。北米シャトルにも丁度同じやうな所があるが、到底ナポリの敵ではない。埃及のアレキサンドリアの海岸は余りに波が荒い。君府(コンスタンチノープル)のダーダネルスの海峽は、高く突つ立つた両岸の樹木の間に赤瓦の建物が點綴する有様や、ガラタの塔から數限りもなく並んだ回教寺(モスク)の圓頂屋(ドーム)を越しての眺めは、殊に古い希臘の殖民時代から、東羅馬の全盛時代、東方人種との接觸などの古い歴史を背景として、コンスタンチン大帝があの整つた羅馬を捨て、世界一の形勝の地といはれる此の地に移つたといふ、それほども重要なる此の地勢を考ふる時、そこには又別な感想が胸に充つる。

君府は現在は金角灣に依つて土耳古人の住域と歐洲の住域とが別れて居る。其の歐洲住域の高地にあるガラタの塔に上つて金角灣の對岸を見下ろした時に、サンタ、ソフヤを初めとして幾多の大伽藍の圓頂屋(ドーム)が、先きにも述べた通り、椀を伏さた様に民家の間に盛り上つて、其の伽藍の四隅には回教寺のシンボルである所の細い塔が、針のやうに突き立つて居る。其樣如何に是れ宗教建築の都市なりといふ感を深くせしむる。これは宗教建築ではないがこれと同じやな感を北京が與へる。北京に遊んで宮城の北海の丘上に立つて、足下の宮城の屋蓋から始めて、廣く遠方を見渡した景色、幾重にも取圍まれた城壁、其

要所々々に開かれたる城門、其間を織つて整然と配置された宮殿、官衙、悉く黄色い瓦を以て被はれた其の光景を見るときは、如何にも壯大なるに驚かされる。唐詩選の詩に誰れやらの句に、宮城の壯を見ずんば誰れか天子の尊きを知らんや、とふ云事があつたが、寔に其通りで、いかに建築が支那に於て專制政治の手段として用ひられたかと云ふ事が分る。私は宗教建築の君府に對して、北京を政　建築の北京と呼ぶ。そして之れに對してまた紐育を商業建築の紐育と呼ばう。

土耳古では私は土耳古風呂に入浴を試みた、それは根原を羅馬に發する。カラカラ浴場や、デオクレシアン浴場は廣大のもので一時に五千人の浴者を收容する事を得るほどのものであつた。羅馬の浴場は北方蠻族に依つて羅馬が滅亡してしまつてから、歐洲に於ては永く忘れられて居つた、たゞ東帝國の支配地に丈け殘つて居つたものである。されば土耳古浴即ち羅馬浴といふてよい。近代になつては歐洲の各地に建設せられたが、私の今入らうとするものは、それは古い土耳古の浴場である、東羅馬時代にあつた基敎寺院の小さなもので、土耳古時代になつて浴場に模樣替せれたもので、現今市中に存するものが二三ある。私の取つたのはそれほど古いものではなかつた、先づ二階に上つて衣類を脫すると、男が大きなタオルで裸體を包んでくれる、そして階下の浴場へと導く、其所が羅馬浴の即ちテピダリウムで床の一方に溫水がたゝへられ、室内の空氣がむつと溫い。此の溫い空氣はカリダリウムの方から來るのである、よい加減に溫つた所で隣りのカリダリウムに行く、其所の床下では所謂ハイポコーストの方法で燃料に依つて空氣が熱せられ、その四方の壁の小孔から室内へ入つて來るのである、既にテピリウダムにあつて汗ばんだ體は、此の室に入ると漸次に發汗を增して來て、遂には總の毛孔が弛み開いて有りたけの水分が體外におし出さうとするように、だく／＼と汗の大きな玉が流れ頭ので髮さへびつしよりになる、時分を見計らつて男が來て、更に元のテピタリウムに導いて其所にバケツに一ぱいに作つた石鹼水を用ゐて按摩をしながら全身を洗つて呉れる、これが終るとほんとうに體のどこにも塵木の垢もない。そこで寒い室なるフリジタリウムに入つて茲で冷水をあびて、再びタオルに包まつて二階に上つて緩臺へ横臥した、ほどへて持來たされたビールの一盃は誠に快いものであつた。

古い樣子の殘つて居る市街をも少し擧げて見ればそれは英吉利のチエスター、もう一つは今は現其の大學地である所の南獨のニルンベルグ、是等の都市には例訓文藝復興時代迄の建築が其儘殘つて居る。そして之れらの遊覽所では市が家を作るにして

も新らしい式の家を許さないであらう。城壁内の建築は今建てるものでも皆古い式に依るのである。ニルンベルグを貫いて流る丶河の様子、それは所々に水車がかけられ、鵞鳥や白鳥の北下に緩やかに遊んで居る樣は、餘りに人工が加へられずに寧ろ村落の風景である。市中の河の流れでは獨逸ライン河畔の都市の光景は雄大であり、漢口の漢江と揚子江との合流するあたりもよい。巴里のセーヌの流れが人工に依つて大に美觀を與へて居る事は誰れしも感ずる事であらうが、セーヌ河程の變化はなくとも伊太利フロレンスのアルノの流れがまた同じようである。この方は一直線に變化はないが水面迄の崖が高く整然と石で築かれて、水が綺麗で河底が淺く殆ど淀んで居る樣に靜かである。飯田橋から關口に至る江戸川が、も少し心して計畫されたら、たしかに小アルノの觀を與へる事か出來たであらう。十五、十六の兩世にかけて西の雅典（アゼンス）と呼ばれた此のフロレンスの市街は、私に話させたら、それはうるさい程の建築的の術語を使はねばならぬから、先づやめて置かうと思ふ。

希臘の雅典は私の行つた時は丁度市區改正で雜然として居た。古代の卜市であつたアクロポリスは餘りに廢頽して只涕を催さしむる丈けであつた。しかもこ丶から數哩向ふのピレウスの港に一朝有事の時に備へるために時の政治家ペリクレスが、山を越へ谷を埋めて作つた大路の跡を偲ぶ時、パルテノン殿堂の壯麗と相俟つて往古の偉觀を偲ばしめる。

先に都市の街路に付てシヤンゼリゼーの話をしたが之に次ぐものはウインナのリングストラーセ、ベルリンのウンターデンリンデンストラーセであらう。孰れも一面並木を持つて居る。冬枯れの色も夏の景色も又なく美しいものである。殊にリングストラーセの並木を越えてのクラシツク風の純白な國會議事堂や、其背後に聳ゆる市廳舍の高い尖塔の背景は、また自然と人工との良き調和を示すものである。

ブダペストのドナウ河に沿ふた街より、對岸の王宮のある丘を眺めた景色は、維納のリングストラーセに對して寧ろ優るとも劣るまじき壯觀である。蘇蘭土エジンバラの市街は平地から隆りに上つた地形で、其中心に古城が聳へ、それを圍んでうち建てられたもので、前の二者と同樣にそれは仰瞰の美を形造る。

私は餘りに多く、建築や市街の光景などを說きすぎた、この邊で少し芝居や音樂の話しをして見よう。

音樂は私には全く分らない。たゞ強い印象の殘つて居るものだけを話そう、北の一つはカイロの最初の朝、宿屋の窓の下に流して來た門付けのスツリートオルガンからのコンコロコロと

云ふやうな強い調子の響きに依つて目醒めた事であつた。フロレンスでは朝飯を濟した頃に何時も窓の下に母子の乞食が來て、母がマンドリーヌをひくと小供が鈴のついた豆太鼓のやうなものを振り鳴らして、早い調子で、トンレッテッターと云ふような節の面白い歌を唱ふのを聞いた事である。夕がた倫敦のハムステッドのパーラメントヒルの阪道を下から四十許りの女が高いソプラノの聲で歌を唱つて來たのを感傷的に聞いた、そして門邊に出て更に一曲を所望したる事がある。コンスタンチノープルで對岸のアジヤの土地までダーダネルス海峽を大きな外車の渡船で渡つたる事がある。ギタラひきが乘り込んで居つて、首にハンケチを卷いた、チョッキのボタンを明け放して、ダブダブのズボンを穿いた、髮の毛の長い男がギタラをひいて皆から金を集めた光景が今でも眼に浮ぶ。私が倫敦に滯在して居た頃は、丁度メリウイドーの曲の流行時代で、公園のバンドや劇場の幕合に必ず之れをやるのが定法であつて、公園を散歩する人などがラーラ、ラーラ、ラーラと或は小聲に或は口笛によく口吟むのを聞いた。エチンバラに行つた頃は、丁度此地の出身であるハリーローダーのアイ、ラバ、ラッシーと云ふ音樂が到る所で聞かれた。ロンドンではよく劇場や寄席へ行つた。踊りで何と云ふ踊か知らぬがドガの繪に見るやうな純白な服裝で腰丈けの衣を着た踊り子の一人が、月の光を浴びてバイオリンとクラリヲネットの伴奏につれて高くつまさきを立てつゝ靜かに踊つた樣子が今でも目の前に浮ぶ。石器時代から現代に至るまでの踊りを一幕で見せたものがあつたが、餘りに知識的で趣味がなかつた。ロンドンには多分年に一同アーミイ、ページエントと云ふ興行がある。それは廣い野外劇場で、古代から現代に至るまでの歷史上の戰爭を見せるもので、槍が閃めき、鐵砲が打出され、大砲が轟き、騎兵が突喊する。丁度ヴォートルローの戰爭の最中に烈しい驟雨があつた。それにもかまわず興行を進めて、騎士が飛來つた銃丸に落馬して泥濘の中に打つ伏せに體を横へた演法などは、寧ろ滑稽であつた。巴里のグランオペラを見た時には丁度グノのファウストのオペラが興行されて居た。私には村の人が凱旋をして城門から石段に依つて廣場に下りて來る時、其廣場には村の娘や妻君達が手を擧げて之れを歡迎する樣子、丁度武者振勇ましく若者達が石階段をだんだんに下りて來る調子に合せて、例のターン、タン、タン、タ、タ、タ、ターンタタンと云ふソルヂヤースマーチの大バンドのコーラスの響きをよい氣持に聞いた。

支那の劇場がまた面白かつた。曲は分らぬながらも、北京の天壇の方へ行く路の廣場に幾つも小屋掛りがしてあつてドンチ

ヤン／＼芝居を打つて居る其前を通ると、這入つて見ねば氣がすまなかつた。

巴里のループル博物館の陳列の立派である事は誰れもが口にする所である、茲では古代のものではバビロニヤ、アッシリヤの大きな彫刻が見られる、倫敦の大英博物館には埃及や希臘良い作物がならび、バビロニヤ、アッシリヤのものにも亦大きな蒐集があるが、此の點に於てはループルに及ばない。これは誰れでも同じであらうが、ループルでは、ミロのビヌスが例へ希臘藝術の衰頽期に屬する物にしても、豐滿な肉付きと妖艶なる容貌は、記憶に殘る一つであらう。世界的に既に有名なるものだが、レオナルド、ダ、ビンチのジョコンダがまた不思議の魅力を持つ。私の歐洲に遊んだ頃はまだ極端に新しい繪の流派がなかつた。

私の好きであつたのはラファエル以前の伊太利派か、ベラスケスなどの西班牙派であつた。彫刻ではドナテルロあたりの作好きであつた。北伊太利パドバ市の大寺の側の馬上の將軍ガタメルタの像の如きは此の人の作であるが私にとつては何物にも代へる事の出來ない程の良い彫刻であると思はれた。ベニスのスクオラ、デイ、サンマルコの前の廣場にあるアンドレア、ベロッキオ作の騎馬の將軍バトロメオ、コレオニの像は極めて良い作ではあるが、それはあまりに威風的で、私には前者の方か遙かに良いと思はれる。ドナテルローの群像ではバドーバの大寺の中の銅のレリーフであらう。

巴里パンテオンの前の「考へる人」を見たとき、先きに富本憲吉君からロダン雪隠の場と云ふ冗談を聞いて居たために、ロダンの傑作と云ふよりも富本君の譬への巧いのが頭を占めてしまつた事であつた。倫敦のサウスケンシントンの博物館でペルシヤ陶器のよいものを見た、歐洲の至る所の博物館に見られる希臘まり過ぎたものである。臘の壺は、私に取つては餘りに宮殿では評判に聞いて居つたやうなものは見當らなかつた、外觀のよいものはあつた、内部のこれぞといふものはなかつた。

學校では古いのにも新らしいのにも心をひかれたものが多くあつた。

寺院に付ては、巴里のノートル、ダム大寺、それは多くの旅行者に讃美せられる。また巴里人の御自慢であらうが、私に取つてはあの押し狹められたやうな正面、スッパリと平らに切られた塔の屋根、壁面の重苦しい細部（デテール）、是等は私に只壓迫を感じさせる許りであつて、テームス河畔のウエストミンスター・アベーのやうな美しい情緒を起さしめない。併しノートルダムの

裏側の圓筒壁から放射狀に走つて丁度石で作つた弓を斜めに立て掛けたやうな控(バットレス)への輕快さ、それを對岸から見た時の規則立つた錯綜、之れには繪のやうにと云ふ言葉は冠し兼ねるが、血の通つて居る幾何學的の美とでも云はうか。また内部から見たステインドグラスの濃い紫と、ルビーのやうな赤と、橙色との硝子を通して薄暗い室に放げられた光線は美しいものであつた。光線の巧みな利用ではオテル・デ・ザンバリツドのナポレオンの墳墓を推さねばなるまい。入口を這入ると階段は直ちに二階に運ぶ。二階の窓は一面に淡葡萄鼠の硝子が張られて、丁度人を彼の世へでも運んで行くやうな靜かな〳〵氣持を引き起させる。二階から奥を望むと墳墓の祭壇があつて、其祭壇の上から祭壇丈けに黄色い光線を投げかけて居る。これは前の淡葡萄鼠ほどの効果はないが、それにしても如何にも晴々と、天國にでも行つたやうな氣持ちを起させる。寺の古い所では餘り大きた建築ではないが、羅馬のサンクレメンテ寺がよかつた、それは十一世紀に建て直ほされたものであるが、内部はもとの五世紀時代のものを用ゐて前の通りに配置したものである。床の幾何學的の嵌石細工と、聖壇の上のモザイツクが殊に良い。下つてビザンチン期のものでは君府のサンタ、ソフイアやヴェニスのサン・マルコなどは見のがし難いものであらう。サンマルコの内部の美に付ては、ラスキンは、これを壁や柱に見られる微妙なる彫刻と、透明のアラバスター、磨かれたる大理石、それから輝ける金、などが集まつて生ずる神秘的な眼をくらます樣な感銘的な色から來る、といふて居る。孰れも奇異(ファンタスチック)な彫刻の形と幻想的なモザイツクの色を指したものである。ローマネスク期の寺の外觀ではライン河畔のウォームスとマインツの大寺のものが外觀が整ふて居つた。内部のよいものは頗ろ外觀のまとまらぬ寺にあつた。ゴシツク期のもの〻外觀では英吉利のエリーとダラムとの大寺がよかつた。エリーのものが、段々に緩く盛り上つた岡の頂上に建てられて天に聳えた高い塔、其前の廣場の柔かな緑の芝地の上に體を横へながら、夕日を受けた塔の頂を飛びかやう鵲のやうな聲を出して群れ飛ぶ鳥を眺めた。溪流を隔て〻見るためでもあるか、ダラムのもの〻背面がよい形であつた。内部は英吉利のもの〻孰れもか淡暗く、壁や柱に何等の色彩がなく外部と全く同じやうに石がむき出しになつて居つて、たゞ大きな窓のステーンド、グラスから錯綜した色を投げて居るのを頗る神秘的に感じた。ルネサンスの寺院は餘りに明る過ぎて且つ理智的である、殊に伊太利のジェスヰツト派のものは餘りに金ピカにそして人間味が多すぎる。

私は日本にも其所へ日曜日ごとに行つてよい說教と音樂

明いて、週日の間に汚れすさんだ心を清めおちつかする様な寺院が欲しい。私は基教信者ではないが、時折こういふ光景に浸る事は良い事だと思ふ、良い事といふよりも實は殆ど本能的に我々の靈が要求して居る事ではあるまいか。それには余りに明るい建物よりも英吉利のゴシク式のやうたのがよいと思ふ、そして兩側の窓からは靈妙なステーンド、グラスの光が差し込んで、聖壇の上には金と紺とのモザイツクか輝くといふやうなのがよい。中世紀に於て寺院は、町のたゞ一つの教育場で音樂堂で歴史博物館で美術館であつた。現代に於てもそれは靈を清める所として適當に考慮されたる寺院が必要である。それは繪畫的で音樂的でなはればならぬ。星の空を眺める事は寧ろ人を哲學に導く、それよりも壁と屋根とで限られたる所謂神の家で、美の恍惚から入つて行かねばならぬ様に思ふ。日本の在來の佛寺のやうに横に廣い建物であづてはよい效果は得られない、それは奥へ／＼と深い建物でなけれげならぬ。日本のものでも信濃の善光寺は縦に長い唯一つの異例である、そして基教のな院の様に交必もして居つた様に思ふ。

寺院の法悦に對して歐洲のバアやカツフエーは餘りに歡樂のちまたである。

奇妙な間取は倫敦のバーであつた、それはパブリツク、バーと、プライベート、バーと、ザルーン、バーとの三室に別れて、他から覗見る事の出來ぬ様になつて居るにかゝはらず、バーテンダーの居る所は一つで孰れもそこから酒を得るのである。そして同じビールでもパブリツク、バーで飲むのが最も安いのである。カツフエーには三つの種類がある、一つは眞に渇や飢を醫すための生活の直接の必要として存するもの、一つは上品にそこでリフレツシユするためのもの、これには勿論遊びの氣分がないでもないが、決して廢頽的のものではない。他の一つはそれは眞に歡樂的のものである、それは角や圓の大理石のテーブルが所狹まき迄並べられた大廣場、時としては二階が同じやうに設備される。そして其所には或隅の方でオーケストラが奏でられ、千姿萬態に着飾つた婦人が右往左往して居る、バイオリンからの心をそゝるやうなメロデー、濛々たる煙草の烟　强烈なる酒の香、サラ／＼と絹のさゝやき、栓をぬく音と外の雑鬧との錯雜。然し斯ういふ光景は寧ろ私を憂鬱に導く、私は趣味としては寧ろ、文化の進んだ國よりも半開の國、新しき都市よりも古い都市、强い歡樂よりも靜かな冥想、赤よりも薄い灰鼠の色が好きである。私が田舍を取らずした都會の題目を撰んだのは誤りであつた様に思はれてならぬ。（終）

郊外生活者の感想

私の郊外生活

阿部次郎

私が中野に越して來たのは、世界大戰が始まつた年の、世界大戰が始まつた月である。その前年の暮に生れた娘がもう九つになつてゐるから、轉居以來滿七年となる譯である。その當時私の家は櫻山の奧の一軒家だつた、東中野（當時の柏木）の停車場から中野の本通りへ通ずる道路と私の家との間には、ただ畑があるだけだつた。自分は眞直に畑を踏んで道から二丁ほど離れた自分の家の門前に出ることが出來た。さうして西と南とは杉の木立に境された○氏の畑で、北は大きい八重櫻が幾本も植ゑてあつて八重椿の蔽りの盛んな庭園だつたので、結局自分の家には二丁四方ほどの間殆んど隣といふものがなかつたのである。それが間もなく近所に家が建ち始めて、一年ほどの間には道路と自宅との間の畑はすつかり占領されてしまふやうになつた。露を踏みながら草葉をわけながら眞直に通ふことの出來た路は、郊外でも特に無挺だと思はれるほど妙に迂回しなければならぬ路になつた。北隣の廢園はその後暫くその儘になつてゐて、二階の高窓からこれを覗くのは、夕立の時などには特に壯快で、自分はいつも筆觸の粗く勁く盛んなゴーホの果樹園の繪を想ひ浮べるのだつたが、それも三四年來すつかり模樣が變つて、今は大きい家の庭園として取圍はれてしまつた。こんなにして何時の間にか近所は住宅地の一廓となつて、今はもう新築の餘地もないやうになつたが、それは私のうちの近所のみではない。私が春や秋には特に好んで散歩する農事試驗場までの

丘や田圃や畑にも續々新しい家が出來て、間もなく中野と東中野との間の線路は兩側が家で續いてしまひさうな形勢を見せてゐるのである。

併し多くなるのは家だけで便宜は殆んど七年以前と變りがない。此處に郊外生活の不便や滑稽や古代なことなどを數へあげるのは、決してそれを呪ふ意味ではないが、これも現代の文化生活の一つの縮圖であらうから、輕い氣持で二三の面白い話を書いて見たい。いづれは　んな狀態も過ぎ去つてしまつて、七年前の門前の畑のやうになくなるだらうから、書いて置くなら今のうちとでも云ふべきだらうと思ふ。

いつか津田青楓が漱石とその門下生と題する屏風をかくといつて私の顏を寫生に來たことがある。その歸りに隣り屋敷との間の狹い路に迷ひ込んでグル／＼廻つたと見えて、あとで手紙をよこして幾度歩いても同じところに出る、不思議な道だ、といつてよこしたことがあつたが、さう云ふ不規則な道が多いのだから、道案内の地圖が停車場附近に出されてあることは誰し　希望するところだが、それが土地の人によつて企てられずに、これを喰ひ物にしようとする他處者によつて企てられるのだから、呑氣といへば呑氣、滑稽といへば滑稽である。最初に踏切を越して向ふ側に、多分誰かの好意で掲示されたのがあつたが、紙だつたのでそのうち消えたり剝げたりしてしまつた。その後油汚れた白服を着た肥つた男が、何とか自治會といふ名刺を持つて道案内を金屬版で掲示するからと云つて寄附を貰ひに來た。その時にはこちらもまだだまされる方の修業が積んでゐなかつたので、直に信用して若干の寄附をした。併しいつまでたつてもその掲示が出ないところを見ると彼奴はあの金を橫領しやがつたのだなと思つてゐると、その後一年餘もたつてから、今度は夏羽織を着た二三人の男がやつて來て、又　案内の掲示を出すから寄附をしてくれといふ。きけば今度も他の土地の者だつたので、暇潰しに大の男が二三人も一塊になつて戸別訪問をしてあるくなんて、御親切にも程があると思ひながら、もう寄附してありますよといふと、私共のはそれとは又別ですといふ。馬鹿にしてゐるから、貴君方のは信用が出來るのでせうが、一度だまされてゐるからもう御免ですといつて斷つてやつた。その後又一年餘りもたつたらうと思ふが、そんな話はもうすつかり忘れてしまつて一日他から歸つて來ると、近所の奧さんが來て勝手元で妻と話してゐる。きけば日外の道案内の掲示が出來て見せに來たが、御宅やうちの名前が餘り小さくて見つともないから、御宅ではいくら寄附したかきゝに來たのだといふ。その奧さんのうちでは出來たら五圓寄附する約

束にして、まづ五十錢だけやつて置いたのださうだ。宅ではちつとも寄附しませんでしたといつたら、さうですかと云つて歸つて行つたが、その後停車場からの歸りに車屋の筋向ふを見ると、果して錫版みたいなものに道案内の掲示がある。大きい字で名前まで書いたのと小さい字で姓だけ書いたのと色々あつて、私のうちや近所の某博士のうちの名は小さく迷惑さうに書いてあるうちに、その奥さんのうちの名は小さく書いたのを削つて大きく書きなほして、而もその削りあとがあり／＼と見えるので、吹き出しさうになつてしまつた。世話役諸君は最初に五十錢分だけの大きさに名前を書いておいたのが、出來たらといふ約束の殘りの四圓五十錢を出されたので、恐縮して大きく書きなほしたものと見える。併し仕事が出來てしまつたあとではたつた四圓五十錢を世話役諸君がどう始末したかは多分誰にも報告がなかつたらうと思ふ。兎に角、一文も出さずに宅の所在を書き出して貰つた私共は、近所の奥さんの前に恐縮した世話役諸君以上に恐縮して、大にその恩惠を謝せなければならないのだらう。社會聯帶のお蔭によつて、かう云ふ得の仕やうも出來るといふことを、私は始めて悟つたやうな氣がする。同時に、郊外道案内掲示版周旋業といふ商賣往來にない商賣が、眞面目に働く氣のない人間に儲け口を提供してゐるのも、今日の文化にとつて象徴的意義を持つと見らるべきであらう。(見れば市内にも同樣の掲示版があるやうだが、それが郊外と同樣のプロセツスで出來たのかどうか、私は知らない)。

郊外生活でもう一つ困るのは、百姓や出入の人達の約束が、あてにならないことである。明後日來てくれといへば、ハイ來ますといふ。それで一月も二月も來ないで、催促に催促を重ねて漸く來るのだから大變である。催促をして明後日こそ屹度來て下さいよといふと、ハイ屹度行きますといふ。さうして明後日は愚か四日たつても五日たつても來ないので、あてにしてもまるであてにならない。尤も百姓や職人の場合には、さうして催促されて漸く來ても、惡い顏もせずに平氣でゐるからまだしも可愛らしい。併し郡部に來ると此等の時間を超越した人達と同化する譯でもないだらうに、瓦斯のやうな公共的の仕事さへこの流儀を繰返してゐるのには腹が立つ。私のところでは、隣の杉木立に日光を遮られて日當りが惡くなつたので、去年の秋に四五間家を北の方にひつぱつたが、そのために從來の瓦斯管の位置を變更する必要があつた。最初瓦斯會社では臺所の位置がきまり次第直に來て呉れるやうなことを云つて居た。實際その後間もなく設計に來て一二週間中に工事にかゝるやうな約束をして歸つたことも事實である。然るにこれから一月あまり

何の音沙汰もなく、どうしたのかと思つてゐると、或日誰も知らぬ間に臺所に瓦斯の料金を書いた紙がほおり込んであつた。見ると會社の瓦斯管やメートルをみんな持つて歸つてからあと一ケ月の瓦斯代を書いてあるので呆れてしまつた。多少でもその月に入つてから使つたのなら見誤りといふこともあるだらうが、メートルを持ち歸つてしまつてからの使用量は一體何を根據として計算したのかわからないので、集金人にその旨を話したら、調べて見ますといつて歸つたまゝ、其後何とも云つて來ない。これを見ると、あの料金調書が向ふの方でも根據のないものだつたのに相違あるまいが、一體誰がこんな出鱈目な調書を書くのだらうと平生のことさへ不安にならない譯に行かなかつた。併しその出鱈目の瓦斯代でも拂つて置けば會社とこちらとの關係が多少は繋がつてゐたのかも知れない、それからあとは金をとりにも來なければ瓦斯の工事にも來ず、その後半年餘私のところではまだ瓦斯なしである。電話で二三度催促はしたが一週間内に行くといふやうな返事をするのみでちつともやつて來ない。遂にはこちらで根負けをして面倒臭いから棄てて置けといふ氣になつてしまつた。妻は今でも去年の秋の普請の時に殘つた木屑や鉋屑で飯をたいてゐるから、もう木屑も盡きるだらうが瓦斯がなくて困るだらうといふと、庭の木の枝や生垣をきつた切枝をたくと大抵一年の燃料はありますと呑氣なことを云つてゐる。會社の方から云へば、僕のうちのやうな使用量の少いところにかけるのは間に合はないのかも知れないし、或ひは「有力な人」をたよる「運動」がないから棄てて置くのかも知れないが、それならば一週間後にひくの二週間後にひくのといふ空約束はやめたらよささうなものである。場末で利益の上らないところは前に敷設した鐵管を外して持つて行くことさへあつたといふ話であるが、それほど財政の苦しい會社が、正直な計數ではなくて何百萬圓の買收費によつて値上をはかつたといふのも不思議である。この不親切とこの背約とがさういふ暗中飛躍と同時に行はれてゐることを考へると、これは百姓の明後日と同じ意味ではとても容せない代物であるが、それでもこれを對手にして爭つてゐるのは面倒臭い、そんなことをするより木屑をたいてもさつぱりした氣持になつてゐたい――こんなに考へるのが自分達の惡いところで、結局は會社も吾々のさう云ふ投げ遣りなところにつけ込んで横着をしてゐるのかも知れない。かうなると瓦斯會社も吾々も一緒になつて郊外生活の不便を拵へてゐるやうなもので、甚だ恐縮な次第である。

それから公共機關でもう一つ困るのは郵便である。中野は三等局で請負ひだといふ話であるが、正月の延着などは御話にな

らない。一月の消印のが十日頃になつて漸く配達されることさへある。それも兎に角日附の古いのは早く着き、それから順繰りに後れて來るのだつたら、手不足といふ理由でまだしも同情することが出來るが、その順序さへ前後轉倒定まりないのだから閉口である。素人考へで想像するとかう云ふことになつてゐるのではないかとさへ思はれる――元日に澤山の郵便物が到着する、それを悉く部わけして配達に渡すことが出來ないから何千枚かをあとに殘す、二日にまた新しい郵便物が到着する、一日の殘りを下積みにしてその上に新しい分をあけて、上の方から手の屆く限り配達に渡して行く、かうして下積みになつた古い分が新しい分より後れて前後轉倒して配達されるのではあるまいかと。實際素人としてはさうでも考へるより外ないほど配達が亂調である。併しそれは年始狀位だからまあ我慢するにしても、平生迷惑をするのは速達である。中野のやうな新しく發展したところは、もう速達區域に入れて與れてもよささうに思ふが、それはまだ手配りが屆かないなら仕方がないとしても、不都合なのは市内の郵便局で中野行の速達を受付けることである。新宿まで速達で來て、此處からは速達區域外だから普通郵便にするといふ附箋付で配達されたことが幾十回あつたかわからない、出した方では速達で屆いたつもりでゐると、僕の方には翌日間に合はなくなつてから悠然として普通便と一緒に到着する。言ふまでもなく速達は急用の時に使ふのが原則なので、これには迷惑を感ずることが格別に多い。中野は速達區域外だと郵便局で云つてくれれば、電報でも使ひでもよこすだらうから、せめてそれだけの事はしてほしい。東京市内の郵便局員はせめて郡部の何處まで速達が屆くか位は知つてゐて貰ひたい。併しこれも一つは、さう云ふ不都合を見逃しにして默つて來た私達が惡いには違ひない。やかましく云ふのは面倒臭いから多少のことは我慢して辛棒してゐようと思ふのが、市民としての抑もの心得違ひだと云はれれば全く一言もない次第である。併しこれからは心を入れかへて、何でもやかましく云ふ氣かと問ひかへされると、どうも即坐にさうも答へにくい。實際のところ自分には依然としてそんなことに深く拘泥してゐるのは五月蠅い。そんな話は、お前の郊外生活の話をきかせろと云はれた時でもないと、改めて口にするのは面倒臭い。だから願くは、中央公論の威力によつて、この一文だけで瓦斯會社や遞信省や郵便局を反省させる充分の刺戟とならむことを。

併し無精者が平生の無精を破つて抗議を申込んでも梨の礫の音沙汰なしにおはることもあるのだから仕方がない。郊外に居を定める者の不平は隣りの空地に何時如何なる者がおしかけ

て來るかも知れないといふことであるが、就中蛇蝎の如く恐ろしいのは工場である。自分のすぐ隣近所には幸ひにしてさう云ふものもないが、直徑五六町を距てた淀橋川の左右には幾つかの小工場が建つて、風の工合によつて多少の煤煙が流れて來ない限りでもない。先年近所に咽喉の惡い人がゐて、工場の濫設を防ぐため請願書を出したいから調印せよとの話だつたので、お隣の前農商務大臣○氏なども仲間にはひつて一同署名して請願したことがあつたが、その後工場が少くなつた模樣もないところを見ると、あれは御採用にならなかつたらしい。若し多少でも減少したとすれば、それはお上の力ではなくて不景氣の力であつたらうと思はれる。

併しかう云ふ色々の古代めいた不便があるとはいへ、自分のやうに郊外の生活に馴れた者は、もう市内の狹苦しい生活には堪へ得まいと思はれる。周圍の一廓はもうすつかり住宅になつてしまつたと云つても、西と南と北とは隣家の廣い畠と廣い庭とだから、つまりこの三方は林中と云つてもいゝ位である。東側の半分には隣家が見えるが、その半分は矢張その家の畠で、その畠の南に又一隣家の背中が見える。自分の家は結局は隣が二軒しかない丘上樹間の家のやうなものである。汽車の音はきこえるが、それが多くの木立の間を通つて遙かにきこえて來るのをきいてゐると、時として避暑地に行つてゐるやうな幻覺を催して來る。野菜を作つたり花をつくつたりする多少の空地があつて、土と自然との親しみも決して妨げられるにはいたらない。春の初めには杉木立に鶯が來る。花が散れば蛙の鳴音が早くも鄕愁を誘ふことを忘れない。螢は近來大に乏しくなつたが、今年はどう云ふ廻り合せか杜鵑の聲が頻りにきこえてゐる。秋になれば百舌や小鳥の啼音をきくに便りを缺かない。東京のやうな大都會の郊外にゐて、これほどの閑寂と自然とを領することが出來るのに、まだ不足を云ふのはすまないやうにも思はれる。かくて要するに自分は郊外の生活が好きである。現在の不便をそのまゝに我慢をしても、現在の靜かさは失ひたくないと思ふ。但し現在の靜かさをそのまゝにして現在の不便がなくなるのは更に好もしい。この意味で自分は二三の小さい不平をも並べて見たのである（六月十九日記）

田端

小杉未醒

人を呼ぶに姓を云はず、居る處の名を云ふのは、日本ばかりではなく、支那にもある習慣のやうに思ふ。茅町と云へば、仲間では直ぐに大觀老と通じ、代々木と云へば、我等の間に恒友君となり、乃至文學者の方には花袋氏ともならうか。私の代名詞も、田端と云はれてから久しくなつた。

藤村操と云ふ青年が、日光の華嚴の瀧投身の元祖となつた頃、操の叔父の那珂博士の持ち家が、田端に一軒あつた。廣い庭に只一棟ポツリと立つて、十疊と八疊だけ、十疊は天井高く、八疊は晝も暗く、寺の一部を持つて來たらしい家の作りであつた。此家で獨居自炊して、何をして居たか、今になつて見ると漠然として居る。繪も餘り勉强しなかつたやうだし本もさして讀んだやうでもなし、酒が飲みたくなつた時は、螢澤の岸を下つて行つて、石橋の袂の八百屋から、濁酒を取つて來た。蓋し諸白に三德あり。醉ひ、腹の足しになり、眠くなる。醉ふ事は乃ち佳、腹が滿ちたり眠くなつては、即今の酒興には添はぬけれど、其頃の生活では、第二德就中尤も頌すべきであつたと思ふ。クロパトキン大將が、滿洲に頑張つて、日露戰爭の幕が開かうと云ふ時、身體强健なる若い從軍記者を求むる處があつて、私は親の呉れた手丈夫な軀を元手にして、奉公口に有りついて、此の蕭散たる孤屋に別れを告げた。從軍の仕度料から八百屋の酒債も償ひ得た。

田端は植木屋兼業の農家ばかりであつた。村は木の中にあつたから、新綠の頃殊に靜閑の趣が多かつた。戰爭から歸つて來て、私は復た此の村の木の中に一軒の家を借りて住んだ。以前の孤屋には、高村眞夫君の新夫婦が、空庭に花を植ゑ雞を飼つて居た。私の家主は「大統領閣下」であつた。親の遺した若干の資産に安住して、好き健康とのんきなる性質とで、毎日泰然として無爲に暮すが故に、植木屋の衆が斯く渾名し奉つたのである。其内私は家を建てた。昔は「大統領」の持ち地であつたと云ふ畑を、三百坪ばかり借りた。庭には久しい間、畠の畦な

跡が殘り、隅の方から、茗荷が出たり、芋が芽を吹いたりする外は、一本の植木もなかつたから、地方の友人にポプラの若枝を送つて貰つて、籬に沿ふて挿し、庭にはコスモスの種を播いた。畠の肥料の殘留の爲に、草花は三四年肥料の手數なしに育つ。コスモスが滿開の時の月夜は、さて中々風情のあるものである。ポプラの挿木が見る見る大きくなる。挿した時に生れた兒が、十歳になる頃には、ポプラの幹は其兒の胴より餘程太くなつて居た。コスモスとか、ポプラとか云ふ草木は、彼れは一體、殖民地的、新開地的のものである。新たに家をなした人の、庭の好みは、年と共に老いて行つて、コスモスからはダリヤになり、牡丹となり、ポプラからは花木となり、常盤木となり、庭石に目をつけ、石燈籠を並べるに到つて止む。翻つて尙一片山林と野草との氣を失はざるものは、稍々話せる親爺であり、之れ無きものは恩給に萎びる。

前は一面の田圃、春先きには其處にも此處にも、蛙の三つ四つが一塊となり、泥中に雌を爭ひ、螢澤の流れの中にも、家の庭の池にも、氣味の惡い紐のやうな卵を曳く。やがておたまじやくしの初夏となり、やがて青田に彼等のコーラスが響き亙る。夜は螢澤の名に負ふ螢が、庭を越して、明け放した家の中まで迷つて來る。螢も減つて、草の中に光つて居るのを、いや螢だ、いや蛇の目玉だと疑ふ頃は、虫の聲家をめぐつて秋の近々を知らしむる。一年家族を夏休みに故郷へ歸して、一人の甥と暮した事がある。朝起きて、青田に霧の消ゆる頃、庭の隅に、竹竿に手拭ひを結んだのを立てしめると、是が合圖で、田圃を隔てた、神明町の裏長屋に居る、甥の老婆が、枝をついて露の徑を飲炊きに來て吳れる。是等の事も遠い昔の如く想はれるほどに、東京近郊の變轉が、時の間に激しくなつた。家の周圍の麥畑にも茶畠にも、手斧の音鋸の響きが起る。隣りの二階から覗かれる事を厭ふから、常盤木をも特に交へねばならず、垣根も生籬では間にも合ずなる。前の田圃に市の塵車が通ひ初めると、大雨毎に一面の沼になつた平地が、少しづゝ高くなつて、彼方に一軒此方に一軒、算ふるひまもなくヒシヒシと立ち並ぶ。見て居ると其處に堀つた、深さ四五尺の井戸から、日用の水を汲んで居るが、地揚げに使つた市中の塵埃を想ひ出すと、氣味が善くない。衞生衞生と、やかましさうに申さるゝが、隨分亂暴な事をするものである。

家は次第に殖える。木は次第に少なくなる。若葉にも落葉にも見處のあつた、槻の大木共が何時の間にか影も形もなくなり行く。春先きには六阿彌陀詣で、乃至は彼岸の彼岸參り、それらの古江戸式の散步服は、門口に立つて見る私をして、笠森お仙

が田端生れであつた、と云ふ話を何の事ともつかず思ひ起さしめた。そんな連中の歩きの外は、農人と仕事師とのみが、朝夕に見えた王子街道も、今は幾多な人が、皆知らぬ顔で通り過ぎ行き違つて去り、農人は多く地主となり家主と納まり、町會議員となり學務委員と變化してしまつた。帶を搖いだ腿骨の老人と、バケツと花とを提げた二三人の銘仙羽織のグループを、彼れ必ず大龍寺の、正岡子規の墓參りの連中だ、と呑氣な推定を誇つたのも、昔の夢である。友人が下谷へ新に家を建てゝ、庭の植木に、私の處に遊びに來た時見て置いた、然澤の岸の椎の老木を、手を廻して買はふと云ふ。いや彼れを持つて行かれては、出入りの道すがら甚だ風情を損ずる、此して呉れと云つて留めた事があつたが、此頃それも伐られしまつた。伐られる程なら、友人の庭を飾らせたかつた。さて、いろいろ懷古の感傷めいた事を並べてしまつたが、こんな事は大體、村の長者の息子が、家退轉して國を出で、五六十年も過ぎて歸つて見ての愚痴であらねばならぬ。それを東京府下の、半分は旅のやうな假住居で呟いて居るのも、變なものながら、それほどに此の不規則な都市の發展が迅いのでもあらう。其内モ少し電車の終點から遠い處に、復た新たな麥畠茶畠の郊外を見付けねばと思つて此頃は居る。

自然と人間の交錯

河井醉茗

私が好んで郊外生活ばかりしてゐるのは、自然を愛するからだといふより外に理由はないやうだ。早稻田――原宿――落合――雜司ケ谷と郊外にばかり移り住んで來た。でもたつた一度市中へ出たことがある。

原宿に居た頃だ。何かの動機で移轉することになつた、餘り市中へ出たくはなかつたのだが、幸ひ近くの青山の通りに小綺麗な家が空いてゐたので、偶には市中へ出て見るのもよからうと思ひ切つて移轉した。

周圍には染物屋だの鍛冶屋だのがあつて可なり窮屈な思ひをしてゐたが、お座敷がきれいだから好いと安心して納まつてゐると、その家主たるや甚だ干渉好きな家主で、よくそれとなく樣子を見に來るので、うるさい奴だと思つてゐると果然半年もたゝない間に店立を喰つた。家族の者が住みますからといふのだが、それは嘘だ。きつと子供があばれるので唐木の床柱や違い棚にでも傷でもつけられたらと思つたのだらう、此方もうるさいから出てやらうと思つてゐた矢さきだから別に抗議も申込まなかつた。

そのうちに或る日、うちの子供が大通りの向側へ菓子か何か買ひに行つて、電車路を踏み越えて駈けて歸るはづみに救助網に引つかゝつた、近所の人達が多勢走つて行くやら大騷ぎを演じた。ちやうど私は留守だつたが、歸つてからその話をきいて、こりや愈よ逃避することにきめやうと、早速あきらめをつけて元の原宿へ逆戻り。後にも先にも市中生活をしたのはその時だけだ。

×

これも原宿に住まつて居た頃のことだが、日露戰爭の當時で大きな家がいくらでも空いてゐて、家主の方でも借り手さへあればといふので家賃などは問題にしなかつたから、人數に比して大きい家に居た。門構へも玄關も立派で、庭には大きな櫻樹もあつた。

湯屋が近かつたので入浴には出かけることにしてゐた。或る日の夕方、頓て私も勤め先から歸つて來る時刻なので、家族の者が皆づれで湯に行かうとしてゐた。「手拭はこれを持つて行きませう」とか、「石鹸は何處にある」とか妹が大きな聲で話してゐたといふから、その聲は外にも聞えてゐたらう。何でも家内中が湯に出かける支度をしてゐるやうに思はれたに違ひない。「下駄はこゝにあつたか知ら」と妹は何氣なくランプを持つて玄關へ出てみた、すると一人の男が玄關の隅に小さくなつてうづくまつてゐた。別に驚いた樣子もなく顏を暗い方に向けてじつとしてゐ。「誰ですか」とかん走つた聲で咎めた。無斷訪問者は默つて起上つて、ノソリノソリ草履を引きずりながら開いてある門を出て行つた。駈出しもしなかつたと云つて妹は憤慨したが、それは無論着手してゐないんだから何ふもおちついてゐたのだ。

大きい家もよしあしだといふので、それから又家賃を高く出して小さい家へ引越したが、矢張門の鈴に紙をつめ込んであつたり、物干竿に干してある足袋を持つて行かれたり、足袋がなかつたり、度々物騒な思ひをした。

×

また落合にゐた頃近い火事にも遭つた。何でもお正月で、寒い晩だつた。夜明の四時頃に「大事です。火事です」といふ聲に起されて、フト眼をあけると硝子戸越しに隣りの屋根が燃えてゐる。私の家は雨戸代りに硝子戸だつたので、寢てゐて月も星も見えたが火事も見えたのだ。隣だと思つたのは一軒おいて隣だつた。

妹は逸早く嬰兒をおんぶしてゐる。家内は蒲團をたゝみ出した。小學校へ行つてる子供には學校のお道具を持たせた。私はかういふ時にもシャツを着、ヅボン下をはき、足袋をはかないと活動ができない。それから形の如く簞笥をかつぎ出した。本箱を持出した。凡てかういふ道具を手當りばつたり緣側へ持出した。それから庭の空地へ運ぶつもりだ。

火事は盛んに燃えてゐるが、此日は珍しく無風で、そよとの風もない。火事が空中高く直立してゐる。のみならずその家と私の家との間には一筋の細い道がある。隣りへ移らない以上私の家は安全だ。

その隣りの家が又何うしたものか、ひつそりかんとして雨戸も窓も一寸もあけない。まさか眠つてゐるのではなからうが、まるで空家のやうにしめきつたまゝガタリとも物音がしない。あとで聞いてみると、家族の親子四人が結束して大事なものだけをしかと一まとめに結ひつけて、愈よとなればそれだけ持つて立退くつもりだつたさうだ。成程それも賢い仕方だ。私の家のやうにガラクタ道具を緣側へつみあげた處で、火がついたら十五分か二十分で家は燃えてしまふ。手取早く大事なものだけ持つて逃る方が利口かも知れない。郊外生活に馴れると事大げさになつて却つて機を失する。

火事は幸ひに一軒だけで濟んだ。畳んだ蒲團を敷きなほしたものゝ寢るまもなく夜が明けてきた。

方々を開け放して曉の寒氣が室内に襲來したので、折角溫室咲きを大事にしてゐたベコニアの花がすつかり萎んでしまつた。

×

Hさんは私を便つて上京してきたのだが、人を世話することなぞに執着力の薄い私は、Hさんがいろ／＼苦勞するのを見ながら傍て何うするといふことも出來なかつた。そのうちにHさんに戀愛問題が持ち上つた。五六度交通しただけで、まだ對手の人を知らないから、よかつたら私の宅で會見させて貰ひたいとHさんが打明けて話した。その頃はまだ婦人解放問題などが今日のやうに堂々と行はれてゐなかつたけれど、私は無論贊

した。で對手の男も雜誌屋の店頭でHさんの書いたものを讀んで感心したのが動機だといふ。

雪の降り出した晩だつた、約束の時間にHさんとI君が相前後して私の四疊半の書齋に現れた。お茶を飲みながら三人はぽつり／＼話した。二人の郷里の話などが主な話題だつた。戀愛問題の話などは一言も出なかつた、I君は言葉數の少いまだ若々しい學生だつた。

一時間も話してゐるうちに雪がだいぶ積つたやうだ。I君が歸るといふと、Hさんも一緒にそこまでと云つて二人は歸つて行つた。

私は雪の降る夜更などによく郊外の自分の家へ歸つてくると、まるで違つた家のやうな氣がして、途も垣根 雪に埋れてゐるのを面白く感じた。今夜は初めて會つた二人の若い人達が、雪の郊外から市街の方へ歸つて行つた。その人達の歸る途にも、家の表にも雪は白く積つてゐるだらうかなど〻思ひながら、私は机に凭れて雪の降る音を聞いてゐた。

その後、I君とHさんは同棲した、今も無論同棲してゐる。I君はなか／＼勉强をする人で、今は詩も作り文章も書く青年文士の一人として知られてゐる。

×

たみやは東北の馬の産地で育つた女の子だつた。私の家へ女中に來るにはその田舍の友達が紹介して寄越したのだ。

幼い時から博勞の境遇にゐたたみやは、まだ七つか八つの時に、馬を引かされたので馬に蹴られて脚を怪我したことなど話した。うぶな少女だつたからよく面倒をみてやりさへすれば、相互にいゝことだと思つてゐた。

私の家では殆ど女中を置かない主義だつたが、餘り家の中にさま／＼な事件のつゞいた年で、家族も困憊してゐたので、友達の紹介を信じ たみやを置くことになつたのだ。

年齢に似合はず御飯も一人で炊けるので、朝の支度は任してあつた。ある朝、家内が少し早く起きてみると、もう御飯が出來てゐて、湯氣のホヤ／＼と立つのをお茶碗に山盛によそつてあつた。勿論たみや自身のお茶碗の中に――。

田舍に居て麥飯ばかり食べてゐた者が、白い米の御飯に前後を忘れて食慾を傾倒するのは無理もないことだが、內證でやるのは彼女の爲にもならないから、朝は家の者も早く起きて、さういふ癖をつけさせないやうに氣を附けることにした。

それから間もなくたみやの姉といふのが尋ねてきた。姉のあることは聞いてゐたが、何うして尋ねてきたものか、たみやが私の家に居ることがよく分つたものだと思つた。一度來て、ま

た二三日たつて二度目に來た時はたみやも半日ばかり暇をくれと云つて二人で出かけた。また二日ほどたつと何とか彼とか用事を口實にして連立つて行つた。すると其翌日姉はたみやの暇をもらひに來た、一寸した荷物など皆取りまとめて行つた。「たみは當分四五日私の家にゐて又國へ返します」と姉は云つた。

恐らく姉の云つた四五日はいつまでもといふ事だつたらう。姉は下町の蕎麥屋に奉公してゐるのだつた。働きの辛いことなどは未だたみやには分らなかつた、貰ひものがあるとか、氣儘に働けるとかいふこと位で誘惑されたのだらう。山の手の淋しい郊外の家から、晝も夜も賑かに、浮々とくらされる下町の生活に移つて行つたたみやの將來を私達は掛念した。早速國許の方と、友達とに手紙を出して置いた。それきり後は何うなつたか分らない。

※

郊外生活と云つても、自然の脅威もあれば、人間の擾亂もある。市中の空氣は塵埃が一ぱい交つてゐて絶えず渦捲いてゐるやうで、郊外の空氣は清らかに徐に靜止してゐるやうに思ふとは確かだが、それだけ刺戟に感動する度も強いやうで、ほんたうのものを表はさうとする進んだ選擇と、靜かな絶叫とは郊外生活者の間からも出るものではなからうか。

郊外生活の眞味

上司小劍

石井鶴三さんの板橋在中丸のアトリヱを訪ふて、郊外生活も此處まで來れば徹底してゐると思つた。これではもう郊外生活の範圍を離れて、田園生活に入つてゐると感心した。森と畑と蒼い空と、それよりほかに何もない。あるものはアトリヱと、それに附屬した應接室と日本流の茶の間と、たゞそればかりだ。隣家が一軒あるが、それはこのアトリヱの附屬物のやうに見える）農家の棟が青く繁つた防風林の隙間からチラと見えてゐる。

奧さんが紅茶をもつて來られたが、『不便』だといふことを一つも口にしられなかつたのに、いよ〳〵感心した。『便利だ』と喜び、『不便だ』と肩を顰める人間が私は一番嫌ひだ。『便利』と

いふことはいゝことでない。『便利は人類墮落の始めだ』と誰れかゞ言つた。

『郵便が東京から三日かゝりますよ。新聞も前日のを持つて來るんですから面白いですよ。』と、主人の石井さんは、いゝ顎の鬚を掻かして笑つて居られた。『不便で困る』といふやうな言葉が一つも出ないのを、私はどんなに嬉しく思つたか知れない。

私はよく大阪へ行くが、東京とは正味二日あれば書信の往復が出來る。夕方に出した手紙は、翌日の正午までに必ず着く。新聞も兎に角其の日の日附けのを其の日の午前中に讀める。それでゐて、東京の中心から直徑にすれば五里とは距つてゐない石井さんのお宅では、郵便が三日かゝつて、新聞が翌日になる。さうしてまた人間が行くとなると、大阪へは早くとも十二時間(停車場から停車場まで)かゝつて、石井さんのお宅へは歩いたつて半日で行かれる。急げば一時間かゝらない。かうしたことを考へると、人の世の便利とか不便とかいふことも隨分滑稽なものだ。

石井さんのアトリエの窓から見てゐると、茄子の花が咲き、胡瓜が莖にぶらさがつてゐる。菜食家の石井さんはそれを喰べて、藝術に精進して居られるのだ。石井さんの身體には、清い血が流れて、魂魄(たましひ)が常に澄み切つた肉體の中に泳いでゐるやうな氣がした。さうして、私たちの理想境がこゝに其の片鱗を見せてゐると思つた。

肉食を食つたり、氷菓を求めたり、芝居を見たり、たまには貸し自働車に乘つたりして、變な門構への家に住んで、郊外生活だなぞと言つてゐるものゝ醜惡さが、石井さんのほんたうに清らかな田園生活を見て、馬鹿々々しくなつた。

私は芭蕉の枯淡な生活を羨みながら、あゝいふことは、あの時代だから出來たのだ。著作家組合が起つたり、小說家協會が出來たりして、文人墨客が錢金の勘定に忙しい世の中では、芭蕉も芽を出すことが出來まいと思つてゐる。せめては石井さんのやうな郊外生活をしてみたい。私たちの郊外生活は、都市生活と殆んど變らない。何んでも其の日の新聞が其の日に見られない程度のところへ住まなければいけないのだ。世間の出來事を一日早く知つたとて、おそく知つたとて、或は全く知らなかつたとて、我々には殆んど關係のないことばかりだ。それでも同盟罷業、工場管理の記事だけは見たいが、(一日二日おくれて見た方が、新聞記事にはしツとりと懐かしみがつくものだ)米國がどうしたとか、議會(日本の)がかうしたとかいふ記事は、永久に見たくない。號外賣りの來ないだけが、せめて私の程度の郊外生活者に附隨した特典だ。

世界の大都・舊都の壯觀・美觀

モスクワ景物の偲ひ出

山本鼎

畫家の眼にモスクワは美しい都です。巴里から倫敦、クリスチアニヤ、ストックホルムなどを通つて露都に入り、次いでモスクワへ着いた時、東洋へ來たな、といふ感じがしました。家並は低く、街路は狹く、電車や馬車のむさくろしいのを見て、半野蠻國へ來たな、と思ひました。

モスクワ停車場へ降りるとすぐ構内の雜貨賣場へいつてモスクワ市の地圖を求めましたが無いので、停車場前の廣場へ出で四方を眺めました。廣場は盆地のやうになつて居て、中央に灌木の繁つた公園があり、其右手の斜面を電車が降りて來て、停車場からあふれ出る旅客を滿載しては左方の斜面を登つてゆくのです。私は其電車路へついて商家のつゞいて居さうな街の入口を搜しましたが、工場や倉庫や學校のやうな、取ツつきばのない建物ばかりで、荒物屋本屋は影も見えず、あぐねて辻馬車をよびました。そして停車場へひつかへして荷物を受取ると、其馬車を遠くモスクワ河の近くにある日本領事館へ馳らせた事でした。

當時の事はもはや記憶に朧氣となりました。唯あの日、明るい空に細い雨が降りつゞいて居た事と、頭の上に挾竹桃の花が咲いて居た事を覺えて居ます。頭の上とは、地圖をたづねあぐんで、とある横町でしばらく往來を眺めて佇んで居た其頭の上にです。

×

伊太利亞のフロレンスも街の間に澤山に寺院がありますが、モスクワにはかなはない。クレムリン宮殿を中心に蛛手に擴がつたといふ、百四十八萬の人煙のなかに、大小無數の寺が撒かれて、美しい冠──黄金色、紫、緑、代赭、鼠色などの擬寶珠の高く甍をぬいて青空を彩どる其町屋遠見はまるでお伽噺の都のやうに珍らしく思はせました。

モスクワ河の岸にある聖救世主寺の巨大なる黃金色の冠に最も私に親しいものでした。秋の陽を浴びて悲しく澄むだ此寺を、又、雪あがりの空に鐘の音を顫はしながら、ばら色の煙霞のなかに消え去らうとする其寺を、或は遠見に、或は目近に、赤樺のひよろ高い幹を前景にとつたり、黑に金字の看板を出した商家の軒の曲折をとり入れたりして油繪に描いた事でした。

名を忘れてしまいましたが、クレムリン北門外にある有名なお寺、――其建築家は異常な創造力を示したために却つて暴帝に嫉まれ、建築の成ると共に、捕はれて眼玉を刳られちまつたといふ深酷な傳說を有つあのお寺、――其樣式は、とんと葱を七つ束ねたやうで、尖塔の一つ〱に大小それ〱の擬寶珠をつけ、朱と、金と、綠と、黑と、紫紺とで全身を飾られたあの不思議なお寺も描いて見ました。

それはもはや十一月初旬の雪の小やみした日、零下十度の寒天でしたが、かまぼこなりに緩い斜面となつて居る大廣場の隅のフラターヌの枯並木に寄つて畫架をたてたのです。

雪が降つてそれと感じた事でしたが、モスクワは冬こそ立派です。色彩的な寺々はむろんの事、町の家々も巴里のやうな灰色一式ではなくて、淡黃、淡綠、淡紫、或は緋、丹などに塗られて居ますから、銀世界にそれの照り榮える價は油繪畫家をして唖をのましむるものであります。

家ばかりでなく、行人も美事になります。男も女も毛衣を着太つて、其佳いシルエットのポーズを雪の路上に繪描きます。よく手入れした宗犬を放ち短い皮の鞭を手にした令孃、婦人を伴つた老紳士、唱歌しながら來る青年連れ、スケートをやりながらゆく小學生なんか皆寒氣にのぼせた他の季節には見られない情味を帶びた顏をして、並木道を往き來して居ます。私におなじみな並木道――それは町家に挾まれ、鐵柵で電車路と堺された何處までも續くプラットホームのやうな散歩路なのですが、十丁もゆくと四つ辻の廣場へ出ます。其處には寺と對ひ合に實にいゝポーズで立つて居るプーシキンの銅像があります。プーシキンの前を東西に貫く通りは、カフエ、踊り場、活動寫眞、一時間寫眞、鍍金の裝身具を賣る店などが點綴する明るい賑かな商店通りで、夜になると、たとへ雪の晩でも盛んに所謂、マダム、ツルトワールが去來して居るのです、マダムとは云へど、友人のそれと知らせるのをふりかへつて見ると、たいていは女學校二三年位の小娘でした。――モスクワ邊の娘は總じて小柄で、色が白く、髮の毛はブロンドで、そして二重腮に

なりさうな丸顔です。

×

ポリショイテヤートルは立派なプラスを前に扣へた宏壯な見つきで、なる程國立劇場だけある、と首肯せますが、有名な藝術座が、狹い平凡な町家の間にはさまつて極く小ぽけな寄席でもあるかのやうな見かけだつたのは意外でした。併し内へはいつて見ると、是れある哉、と思はせるのです。金ぴかの裝飾を絕廢したアスフアルト色の澁い木造りで廣い廊廓がとつてあり、其處にはスタニスラウスキイ以下の各俳優の生面或は舞臺姿の立派な寫眞が額にして懸けてありました。鈴で幕明きが告げられ、ドアを閉ちれば絕對に出入は許されず、どんな場合にも拍手も話聲もせず、極めて靜かに觀劇する習慣なのです。蓋し、こういふ風習は持に藝術座だけに見られる處かも知れません。

冬の夜、橇を驅つて劇場へ赴く位娛しい事はありません。雪が上つて朧な月がのぞき、其まわりに木目のやうな雲をぼんやり照し出して居た事がありました。

又、風が雪の粉を吹き捲くつて橇の行く手に霧をつくり、其處に吾々の姿が海坊主のやうに映つた事がありました。

毛衣を男奴に渡して茶の間にゆき、熱いサモワールを御馳走になりながら、見て來た芝居の感動を語る——あの神經の疲れた一種の甘さは又得がたいものでした。

×

モスクワの西北に當る丘陵、それは有名な雀ケ岡です。ナポレオンが炎上するモスクワを俯瞰したといふ其岡は、今市民の好むで杖を曳く市外公園になつて居ます。其處は私の宿からわりに近かつたので、よくそちらへ脚をむけました。商買の軒に續く大通りをしばらくゆくと官衙やスケート場や、工場などになり、埋地のやうな原に續いて居ます。其處に、これも名は忘れましたが、著名の尼寺があります。市内に見る寺々とまるで變つた結構で、赤い高塀をめぐらした城塞のやうな一廓なんです。指を立てたやうに赤い塔があちこち聳えて居て、其尖に黃金の十字架が光つて居ました。——午後四時頃、雀ケ岡の彼方に沈まうとする秋の陽が此尼寺の尖塔を、煙塵に霞むだ市の空をバツクにして蜃氣樓のやうに中空に顯耀するのを、遠くのキヤベツ畑からよく眺め入つた事でした。

キヤベツ畑には驚きました。小さいのでも四斗樽程のキヤベツなんです。——あゝ、あのキヤベツ畑で、いつも聽いた和讃のやうな唱歌、それは十六七の雀斑だらけの顏をした百姓の娘の唄ふものであつたが、あの悲しいばかりに澄むだ露西亞の

秋の空に細く滲み徹つては又彼の女の情緒に旋つて來るあの哀調、それは巴里で初夏の夜々耳なれた辻興行師のだるい舞曲と共にいつも旅愁を回顧せしむるものなんです（七月九日夜）

支那の都市――北京

工學博士　伊東忠太

一、支那都市の概說

凡そ支那の個人の邸宅は必ず敷地を牆壁にて圍み、第一門を入れば更に第二門あり、地位愈々高ければその門を重ぬること益多く、房室は左右同形に配置される。この通則は太古より今日に至るまで大體に於て變化することなく、都市の計畫も亦この主義より割り出されて居るのは頗る興味ある現象である。一家眷族が繁殖して數戶となり數十戶となるときは、往々この一族が一集團を作り、牆壁を周圍に繞らして宛然一城廓の觀をなすものがある。斯くて民庶群居の一邑一村は又必ず牆壁を其周匝に繞らすので、邑即ち城、城即ち都邑である。なほ進んで大都市となれば、其の牆壁は益堅牢にして高厚である。蓋し支那にあつては太古より個人主義發達し、自家自衛の風ありしと同時に、民庶に對する官憲の保護殆んど絕無なりし爲め、自ら牆を高くして盜賊又は敵寇防禦するの必要があつたのである。堯の時既に「鑿レ井而飮、耕レ田而食、帝力何有ニ於我一哉」と百姓が呼んで居る。之を理想的天下泰平の徵象とした支那人の心理狀態は實に古今一貫して居るのである。斯くて支那の都市は、他の多くの古代民族に於ても見る如く、必ず牆壁を以て圍繞せられ、城の體裁を備へたのであるが、その因襲が最近まで持續されて殆ど進步發達しなかつたのは奇蹟である。その城の輪廓は土地の事情に由て相異るが、大體に於て方形が標準となる。若も事情が許すならばその方形の四邊は正しく天の四方、即ち東西南北に向ふのである。周代に於て既に王城の制が規定されて居るが、夫は天の方位に順つた正方形で、方九里、四方各三門を開き、各門は三道で、中央は車道とし、女は左、男は右の通路に由つたとある。漢以降長安と洛陽が帝都となつたが、其規模は舊來の方針を踏襲したものである。其美觀は文選の西京賦東都賦に誇張的に謳はれて居る。唐の長安城は即ち今の陝西省の西安で今もその一部を想像し得るが、我が奈良の都、平安京の模範となつたもので、條坊の制に由て街路は碁盤の目の如くに直角形に區劃した尨大なる都市であつた。即ち亦た古來の方針に

基いて設計されたものであつた。宋の汴京即ち今の河南省の開封府は今は餘程變化して居るが尚ほ大體に於て古式の俤を存して居る。南宋の臨安即ち今の浙江省の杭州府は山に倚り水に臨む土地の關係から餘程自由な設計に成つて居る。元の大都は、遼、金の都城を繼承して之を改竄したものであつたのを、明が更に擴張し、古式を復興して計畫を立てたのが即ち今日の北京である。清は明の首府を其の儘引き繼いで今日に至つたのである。

帝都以外の都市は其土地の狀態に由て必しも同一の規模ではない、が大體の方針は一貫して共通なるものがある。次にその主要なる特色を述べて見よう。

二、支那都市の特色

前陳の如く支那の都市は極めて特殊なる歷史を有するものであるが、今試にその主要なる性質を擧げて見よう。

一、周圍の牆壁。牆壁は寒村僻邑に在ては簡單なる土塀であるが、縣城、府城、省城と程度を上るに從て甎造の高厚なるものとなる。其輪廓は地形に由て異なる。或は非常に不規則なる曲線より成るもあるが、原則としては方形に近いものである。大都城に在ては防備の目的を以て雉と稱する支壁を本壁から直角に外に突出せしめる。城壁の外に濠を備ふるものもある。

二、城門。小都市では四方に各一個の門を開く例である。四川省の成都の如きは東西約三十町南北約二十四町の大都城であるが、門は四方各一個であるから非常に出入に不便である。國道筋に中る小邑ならば其兩端に各一門を開くを普通とする。大都城の門の前には曲城又は月城と稱する多くは半圓狀の突出せる部分がある。これは防備の目的に出づるので我が見付の桝形と同じ意味である。

三、敵樓戰櫓の設備。城門の上には單層、重層、時としては重層以上の樓が聳へ立つのが即ち敵樓であり、城の隅々や要所に配置せらるゝ高樓が即ち戰櫓であると思ふ。敵樓戰櫓の區別は我輩未だ明瞭に知悉しない。

四、城門から城門に通ずる大路。若干の除外例はあるが、原則としては一の城門を入れば主要道路が曲折して他の城門に連なる。二つの反對の側の城門は普通正しく相對して居らぬので、一直線に大路を以て連絡されぬのである。假令一直線に連絡し得る關係に在ても故意に連絡を斷つたものもある。現に角城の門から門に通ずる路が城內の最主要なる街路であり、その他は即ち小路である。

五、鼓樓鐘樓の設備。普通主要道路の交叉點に鼓樓及鐘樓があり、多くは樓の下が通路になつて居る。古へ鼓鐘を鳴らして城門の開閉の時刻を報じ、又は外敵の襲來等の非常を警告する爲に用ゐられたのである

六、城内の空地。支那の城には往々民家を以て充滿されずして、廣大なる空地を存し、田畝や沼池や樹林等を包擁するものがある。これは或は民家が廢滅して空地となつたのもあるが、又始めより充分の地積を取り込んだのもある。それは一旦敵の重圍に陷つたとき、城内の市民が長時の籠城に堪ゆる爲に田畝等の餘地を存したのである。此種の類例は内地の交通不便な邊陬の地に多い。

七、街路の組織。街路は大都市に在ては大體に於て條坊の制に由て碁盤の目の形に直角形に配置するを原則として居る樣であるが除外例も亦少くない。一漁村が一大港市に發達したり、一寒村が一大工業市に發達した樣なものは極めて自由に不規則な形になつて居る。併しこれは支那人固有の理想から出た支那趣味の街路ではない。

八、袋町。支那の市街には袋町が澤山ある。尤もこれは東洋各地に普通に見る現象であるが、支那に於て著しく見える。我輩の知る範圍では南から北に向て行き留る袋町が最も多く、東西に向ふものが之に次ぎ、南に向ふものが最少ない樣である。

九、建設物。支那都城の市街を形づくる建設物の主要なるものは大體に於て四種に區別し得る、一は官衙であり、之が常に重要なる位置を占める。二は廟祠で、就中城隍廟は絶對に缺くべからざる鎭守の神祠である。其の他多數の寺觀や淫祠の類が隨所に散在する。三は民家及店舖で、大都市の主要路に面する店舖は往々甚しく誇張された外觀を有し、二層以上三四層に達するものもある。四は公共建築で、例之ば戯臺、會館、の類である。大都市には相當の遊園地もある。之は寥々稀である。文明的施設の全然缺けて居ることは云ふ迄もない。總じて市街の不潔汚穢なること、道路の極惡なることは既に周知の事實である。

三、北京の沿革

さて支那の都市の實例として北京を擧げるのである。北京は戰國時代の燕の時から既に都市をなして居たが、こゝに帝都の築造されたのは遼の時からで、即ち遼の南京となつたのである。この都城は廣さ方三十六里、城壁の高さ三丈、敵樓戰櫓を設

け、四方に八門を開いた。城の南隅に皇城の一區があり、又その内に内裡の一區があつた。即ち三重の區劃に成つて居たのであるが内裡、皇城が城の中央又は北端に在らずして南端に在ると云ふことが、普通の場合と異なつて居た。

金が遼に代つて、遼の南京を中都とし、更に之を改修した、但しこれは宋の汴京を摸したものであると考へられる。其大さは周圍七十五里、四方に十二門を開き、城の中央に皇城を置いた。皇城は周圍九里三十歩殿門九重三十六、皆碧瓦を以て之を覆ひ、其正門を應天門と云ひ、其正殿を大安殿と云つた。

元は金及南宋を滅ぼし、支那を統一して、金の中都を改修し、之を大都と稱して帝城としたのである。但この帝城の位置は金の中都よりは北方三里に移動して居る。城の大さ方六十里、二百四十歩、四方に十一門を開き、中央に皇城があつた。皇城の大さは周圍九里三十歩六門を開き、其中に内裡があつて、其正殿を大明殿と云つた。建物の莊麗華美なることは前朝よりも更に勝れて居た。

明は元を亡ぼして、南京に都したが、永樂帝の時南北兩京を立て永樂十五年元の故都を改築して北京と名けた。その周圍四十里、九門を開き、南を正陽、崇文、宣武と云ひ、東を朝陽、東直と云ひ、西を阜成、西直と云ひ、北を安定、德勝と云ひ、城の大さは東面一千七百八十六丈九尺三寸、西面一千五百六十四丈五尺二寸、南面二千二百九十五丈九尺三寸、北面二千二百三十二丈四尺五寸、この面積一千五十四萬二百坪で、之を我が延暦の平安城の七百三十四萬三千百坪に比すれば約五割大である。(延暦の大尺は今の曲尺九寸七分八厘に當る。明の營造尺は我が一尺二分强に當り、明の木匠尺は九寸三分弱に當る。茲には假に彼我共に現今の曲尺に均しとして概算したのである)。

明の嘉靖卅二年に京城の南に包城を築いた。即ち今の外城で、其延長二十八里、南に永定、左安、右安の三門あり、東に廣渠、東便の兩門、西に廣寧、西便の兩門がある。城の南面二千四百五十四丈四尺七寸、東面一千八十五丈一尺、西面一千九十三丈二尺である。

皇城は内城の内に在て其外周三千二百二十五丈九尺四寸、更にその内に紫禁城があり、所謂九重の殿門が具備して居たのである。

淸は明の都城を改竄することなくして其の儘に之を襲用したので、只街路や建物の配置が或る程度に於て變化したに過ぎない。淸朝亡びて民國となつても、大體の體裁に變化はない。只街路や建物の面目が或る程度に於て改められたに過ぎない。即ち今日の北京は依然として古への北京の特色を保存して居る。

で、支那固有の都市の最屈竟なる實例である。

四、北京城は天子の邸宅。

我儕は未だ最近の北京の現狀を見ないのであるが、民國のまだ興らない時分、即ち清朝の最後に至る迄は、北京城の全都市は即ち天子私有の一大邸宅の如き氣分であつた。

北京城即ち天子の邸宅は正しく南面して牆壁を以て圍まれて居る。外城の壁は高さ二丈、垜口四尺、厚さは下で二丈、上で一丈四尺ある。內城の方は高さ三丈五寸、垜口五尺八寸、厚さは下で六丈二尺、上で五丈と云ふ驚くべき堅實なものである。昔しのバビロン城が若もストラボやヘロドトスの說くが如くであつたら其偉大なることは北京の比ではないが、今日現存して居る城の中では北京の如く壯大なものは世界に無い。若も北京の城壁が悉く甎で充實して居ると假定すれば、北京の內外城を築くに要する甎を以て高一丈、厚一尺の壁を作れば、その壁の延長は一千四百廿二里に達する。即ちカムチヤトカ半島の南端から臺灣の南端に至るよりも更に三百里長いことになる。

外城の南面中央の永定門から北に向て一直線に進むと、內城の南面の正門正陽門に達する。夫から皇城の正門大淸門を經、天安門、端門、を通過して紫禁城の正門なる午門に達する。午門からなほ一直線に北進すれば、大和門、大和殿、中和殿、保和殿、乾淸門、乾淸宮、交泰殿、坤寧宮、坤寧門と正しく中軸を保つて順列して居るのである。即ち天子の正殿なる大和殿は、外城の入口から七つの門を通過して一直線に約一里九町の距離に置かれて居るのである。庶民の家は一門、普通の高等官吏の家は二門、更に高級の官吏の家は三門以上を具へて居るが、流石は天子丈けに七門を具て居る。

紫禁城の一劃は即ち我內裡に相當するので、天子の宮室の在る處である。皇城は即ち我大內裡に相當する處で、皇室に屬する衙門や庭園のある所である。內城は淸朝時代には八區に分ちて八旗を配したので即ち滿洲の士族屋敷であり、城の東南を正藍旗。西南を鑲藍旗。西北を正黃旗。東北を鑲黃旗。鑲黃と正藍の間の北を正白、南を鑲白。正黃と鑲藍の間の北を正紅、南を鑲紅とした。外城は町家に屬する部分である。一般に內城を韃靼街、外城を支那街と呼び來つたものである。

要するに北京城の計畫の方針は、城內數十萬の市民を本位としたものでは無く、何處迄も天子個人を本位としたものである。彼の幾重の牆壁、彼の堅固偉大なる牆壁は即ち市民保護の爲めと云ふよりは寧ろ天子一人の尊嚴を保ち、その安全を保護する爲である。內城外城を合せて約一千八百萬坪の邸宅の中に住つ

て居た明清の天子の生活は世界の他の國に於て見ることの出來ない特殊なものであつた。

五、北京の市街計畫

北京の市街のプランは前陳の如く紫禁城を中心とした計畫であるが、その現狀の要領を述ぶれば先づ內城の中央に紫禁城及皇城を置き、南の中央なる正陽門から之に向て大路が通ぜられる。正陽門の東西なる崇文門及宣武門から北に向て東西四牌樓の大路が全市を貫通して北の城壁まで達して居る。これは今日では中央に車道、其左右に荷馬車及荷車道、その又左右に步道があつて、五帶に分たれた堂々たる大街であるが、昔日も中央の車道と左右の步道とを備へた大街であつた。東の朝陽門及東直門、西の阜成門及西直門から、各內方に向て大街が開かれて居るが、これは中央に皇城があるから相直通することが出來ない。或は東西四牌樓の大街を貫通して延て皇城に達し、或は四牌樓街に突き當つて止まつて居る。北方得勝門及安定門より南に向ふ大街は、一は皇城で止まり、一は長く南に延びて居るが、全市を貫通せずして途中で曲折して居る。この外皇城の前通りが主要なる大街となつて居る。

さて北京市街の計畫の方針を考ふるに矢張り古への條坊の制に由たものと思はれる。大體に於て內城に縱に九條の主要街路を貫通して十區に分つたもの丶如くである、即ち紫禁城の中心を中央とし、東西各四條の縱街が配置されて居る。東西四牌樓街は即ち中央から數へて各第四の街である。安定門及得勝門は東西の端から數へて各第四の街に當る。各條の間隔は今は甚だ不統一であるが平均約一清里である。斯くて內城の東西は十清里となるのである。

東西即ち橫の條は甚だ不明瞭であるが、大體に於て十二區に分たれた計畫であらうと想像さるゝ。即ち南から數へれば正陽門から天安門までが二區、天安門から地安門まで即ち皇城の長さが六區、地安門から北の城壁までが四區で、一區の廣さは丁度一清里の三分の二に當り、十二區の全長が八清里となる。朝陽門阜成門は丁度その中央に當り、東直門及西直門は北から第二區の線に配置されて居ることを發見するのである。

斯くて北京の內城は、東西十清里南北八清里の地を、縱に十分し橫に十二分して街路を配置した形となる。即ち全市は百二十の坊から成り立つことゝなり、一坊の形は東西一に對する南北三分の二と云ふ橫に長い長方形となる。唐の長安城の町割りなども坊の形は東西一に對する南北二分一の部分と四分三の部分とがあり、古來必しも正方形ではなかつたのである。

一坊の中には又橫に小路を取つた。夫は丁度我平安京の如く

であつたらしい。その遺跡は今も內城の東北部に於て考査することが出來る處があるが、概して今は著しく變化して居る。殊に西南部に於て甚しい。

外城の設計方針は內城のプランを受けて同工異曲であるから、玆に之を詳述することを見合せる。

六、支那都市の類例

北京以外の支那の重要都市は何れも各省の省城である。勿論上海、漢口、天津の如きはその通商貿易等の關係や、文明的施設の點や、都市の美觀や繁榮の程度等から見て支那第一流の重要都市で兼て第一流の大都市であるが、支那特有の都市を代表するものでないから自ら別問題である。支那特有の顯著なる都市は、滿洲の奉天、山東の濟南、江蘇の南京及蘇州、浙江の杭州、福建の福州、廣東の廣州、河南の開封、安徽の安慶、江西の南昌、湖北の武昌、湖南の長沙、四川の成都及重慶、雲南の雲南府であらう。これ等は何れも大同小異の方針に由て構成されて居るから、一々之を叙說するの必要もないと思ふが、試に一二の注意すべき點を擧げて見よう。

總じて北清の都市は何處となく寛濶で迫らない所がある。街路なども比較的に幅が廣く、人口の割合に地積が廣いが、南清の都市は著しく窮屈で紛糾して居る。街路も甚だ狹い。廣州府城の如き人口百萬に近い大都でも北第一の大街路の幅が漸く十二尺位に過ぎない。路次へ入ると路幅僅かに六尺、若くは四五尺、最も狹いのは三尺と云ふのがある。しかも夫が甚しく曲折して居る。人家は密集して居る。街路は多く石敷となつて居る。袋町が至る處にある。往來の雜沓、喧囂實に名狀すべからざるものがある。北清の悠々たる氣分と南清の焦燥なる氣分とは好個の反照であるが、これは北清は文化遲々として何時迄古代の俤を存し、南清は急激に發達するが爲めでもあるが、また氣候風土から感化された南北人の心理狀態の相違を具體的に示したものである。

今試に二三の支那都市の面積と人口とを擧げて何等かの參考に供して見よう。面積は主として支那官憲調製の圖に基て算出した。人口は到底正確なる數を知り難いが、一部は支那官憲の調査や案內記等に據り、一部は我輩の實地踏査の觀測である。在來の地理書に擧げてある數字は殆ど當てにならぬと思ふ。

都市名	城壁內の面積(平方哩)	城壁內の人口	一平方哩の人口	備考
北京	三三、二六	七六四、六五七	二三、九九九	大正七年以前調査
西安	三、五	八〇、〇〇〇	[illegible]	地積に人口百萬と稱す(明治三十六年調査)

成都	五、四〇	三五三、三四七	六五、四三八	（地理書に人口六十萬と稱す）光緒二十八年の調査
廣州※	五、二五	※一、〇〇〇、〇〇〇	一九〇、四七六	※隣接市街を合算す（鐵道院案內記）
杭州	五、五〇	五五〇・〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	概測（鐵道院案內記）
大阪市	三、五七	一、二五二、九七二	三五、〇七〇	大正十年調査
神戸市	一四、二九	六〇八、六二八	四二、五九〇	同

この表に由て吾人は北淸の都市が概して人口稀薄であり、南淸に於て稠密であることを知るのである。一平方哩の人口が北京西安に於て二三萬に過ぎないのに、成都では六萬以上、杭州では十萬、廣州では十九萬と云ふ數になるのである。（了）

倫敦のバッキンガム宮殿

田川大吉郎

一

世界に廣がるその領土の上には、曾て太陽の沒する隙が無いと稱へらるゝ英國の倫敦である、その倫敦に在る宮殿である、バッキンガム宮殿の名が特に世界に名高く持て囃さるゝのは偶然で無い。

然し乍らそのバッキンガム宮殿は、必ずしも人目を驚かす程の宏壯の建物で無い、一九一三年、今より約八年の前であつた、私が初めて倫敦に遊んだのは、その歳の八月の初めであつた、一友人は早くバッキンガム宮殿を見て置くがいゝ、今までの宮殿は、あまりに見窄らしくて、英帝國の恥になるから、これを建て增すといふので、議會は既にその增築の費用を可決し、近々工事に着手する筈である、或は既に着手して居るかも知れないが、兎に角、その未だ增築せられない舊宮殿の有樣を見て置くが宜しい、早い方がいゝ、今日でもいい、早く往つて見て置き玉へと注意してくれたことがある、それで私は一日も早くと思つて、急に見物に往つたことがある。

但、見物といつても、此の宮殿は中に入つて見物することを許されない、案內記等で宮殿內部の間取の工合や、裝飾、模樣などを、隨分細かに記述したものはあるが、一般公衆に開放的に見せしめられることとには爲つてゐない。公衆はその表門近くに近寄つて、鐵柵の外から仰ぎ上げるのみであるが、さうして見物して居る者は稀では無い、私もその一人と爲つたのである。

日本になぞらへれば、先づ四谷目附外の新東宮御所を仰ぐや

うたものであらう、あすこの邸は鐵柵で中に看透し得られ、その建物は遠く深く柵外から奥まつた土地に建てられてあるが、私の當時に眺めたバッキンガム宮殿の位地は、あの新東宮御所の位地ほど奥まつてゐなかつたと思ふ、それでその色は根が灰色で、本來冴えない色の上に、既に幾十年、大部分は幾百年の風打雨蝕を經てゐるのだから、どうしても美くしい建物、天晴れ立派な構へであるといふ感じは泛ばなかつた、これ位ゐの建物よりも、壯麗な建物は、他にも幾つもあると思つた、成る程これでは狹い、これでは見窄らしいといふ感じの泛ぶ筈だと思つた、その建物と鐵柵との間に建て增すのである、さすれば宮殿は益鐵柵に近くなる、それだけ柵外の公路に近くなる。

私はそれを見物して、種々な事を考へるとは無しに考へさせられ、徘徊顧望して去つた、それから約二ケ月の後である、私は大陸の遊びを終へて、パリーの客舍に暫く悠遊して居た時、揣らずも倫敦の新聞を手にして、その一節にかねて增築中の新宮殿は既に出來て、昨夜はその關係の職人等六百餘名を、某旗亭に招き、慰勞の宴を賜はつた、陛下はそこに臨席されなかつたけれど、特に侍從を遣はして慇懃なる御挨拶があつたといふ記事に目を惹かれ、さてはあの增築の工事は既に出來上つたのであらう、爾來僅に八十日經つか經たない間に早くも出來上つたのであると、感心して此の記事を讀んだのである。

以てバッキンガムの宮殿を思ふ、バッキンガムの宮殿は、決して世にも驚くべき宏壯にして華麗な宮殿では無い、獨りバッキンガム宮殿のみならず、その近くに總理大臣大藏大臣の官舍もある、この建物は棟續きである、即ち二軒であるけれどもその實は一軒である、洵に小さい、洵に低い、決して嚴めしくない、見よ、此の官舍を見よ、來つて英國の首相官舍の如何に小さいかを見よといふ、如何にもその通り、これは割合に大きくないと思つた、この時私は猛然としてブライアンの言を思ひ起した、ブライアンが日本に來て、議會を見物した時、案內者は御覽の如く家が小さくて、粗末で、耻かしいと申したら、ブライアンは家はどうでも、その中に居る人である、人が第一であると答へた、この宮殿を見、この官舍を見るに、彼等英國人は正しくブライアンの言の如く、宮殿にあらずして人なりといふ感じを以て居るのであると思つた、バッキンガムの宮殿は此の如く、私には壯麗無比といふ感じを殆んど與へなかつた。

二

さりながらバッキンガムの宮殿は、セントゼームスといふ公園の中にある、それだけ一の四圍の光景は喧鬧にして居るのど

かである、この公園は路一と重を隔てゝ、ハイドパークに接し、そのハイドパークは、ケンシントンパークに接してゐる、從つてこの三公園を併せたら、凡そ百萬坪以上の廣さになるであらう、その中に在るバッキンガム宮殿、それらの公園的設備の間に在る宮殿であるから、宮殿そのものゝ建築は、たとへ宏壯でない、華麗でないにしても、その邊一帶の風光の麗はしい、温かい感じは何とも言へない、バッキンガム宮殿に至る者は、自然に此のやうの感じに、得も言はれぬ、和かな、懷かしい感じに撲たるゝのである。

その入り口に海軍門といふのがある（アドミラリテーアーチ）これは流石に宏壯で、立派である、この門から入つてバッキンガム宮殿の正門まで何百間あるか、その間數を知らないが、かなりに遠くして、路幅が廣く壯、快、雄大な感じを覺える、その兩側は無論公園的設備の、のどかしにして、晴れ〳〵しい、氣持のいゝ眺めである。大した大木は無いが、四時の花草に富んで、芬香の鼻を撲つ工合、西洋の花草は、どうしてこんなに香氣が強いのかと思ふ程である。その花草の外に、常に緑りなる芝生にも目の着くことは申す迄も無い、西洋へ往く者は、誰しも、いつも、この綠漫々たる芝生の眺めに心を奪はるゝのである、宮殿の正門の前には、故ヴイクトリヤ女王の大理石像が屹立してゐる、それに沿ふて右側を進めば、即ち前に申したハイドパークに至るのであるが、その出口には綠園門といふのがある。その附近の小高い所を憲法丘といふ、この綠園門も亦稀しい、海軍門ほど雄大では無いが、かなり技巧的であつて、高いし、大きいし、目を惹かれる、總じてこの邊一帶の感じは、ゆるやかにしていゝ、成る程、これらを王者の庭といふのであらう。大きい所があり、上品な所があり、のどかな所があり、往き來ふ人々の面上に、和いだ、寛ろいだ色彩が浮いてゐる。私は幾度往いても飽かず、幾十度この邊を歩いたか知れない。

英國の事を直に日本に當て嵌めやうと思ふのでは無いが、私は今日の馬場先門跡に、何物をか欲しいと思ふ、從前の馬場先門を取り壞されたことに就ては私は何をも申さないが、たゞ取り壞された跡をあの儘に、今日のやうに何もしない、無げなしの儘にして置かるゝのは、如何にも惜しい、物足りないやうに思ふ、あすこには倫敦の海軍門の如き、若くばパリーに在る凱旋門の如き、何等か宏壯なる新樣の設備が欲しいのである、あすこで先づそのやうな門をくゞつて、そこで一種の氣を新にして、二重橋に進んで、更に宮城の高さを仰ぐことになると、一層結構であると思ふ、これは私の持論の一であるが、是非今の時に誰かに由つて之を實行して貰ひたいと希望するのであ

る。

櫻田門乃至大手門も、今のまゝでいゝかは、私としては問題である、然し乍らこゝにはそれを申さない、私は第一の必要事として、專らこの事のみを提唱いたして置く。

その馬場先門跡を入つて、二重橋に進み兩側の園、その園の中の小松である、あの小松も多年の後には參天の古木と爲るであらうが、一體松は日本の特徴を代表する、特色ある木の一種でにあらうけれども、あすこにあれが適當であらうかは尙問題であらう、又あの園をあのやうに設備して往くことにも、問題が無いではあるまい、

私はあすこの途を更に見事に舗設すると共に、路の兩側に、明治の功臣の像を林立せしめたら至極結構であらうと思ふてゐる、無論それは丁寧に立派なものを作らねばならない、先年私は伯林に遊んで、その有名な帝國議事堂のほとりの大路、公園の中に、獨逸の歷代帝王の大理石像、その後ろに歷代功臣の諸像の建設しあるのを見て、これは洵に用意の行き屆いた、善い計畫であると感じた。同時にその工事の幾分粗末にして、粗製濫造の跡、現に歷然として指摘すべきものあるを見て、同行の五來素川氏を顧み、これではならない、この龜裂でこぼこの跡を御覽なさい、獨逸の文明はまだ堅實でありませんよと評したことがある、どうかそんな批評の起る際の無いやうに注意して作られたいものである。

序ゆゑ申して置くが、右セントゼームスの公園と、綠の園と、ハイドパークとの三公園の昨年の經費は六十一萬一千四百二十圓であつて、ケンシントンガーデンの經費は九萬八千六百八十圓に爲つてゐる。これらは世に謂ふ王室の庭園であるが、此の如く國費を以て經營せられ、一般市民の行樂の用に供されてゐる、此の如きも亦參考せらるべき一であらう。

三

私は英國の宮殿、特にバッキンガム宮殿に就ては、略ぼ此の如き觀を爲すので、前に申した通り、格別壯麗だ、偉觀だといふ感じを有つてゐない。

その一番深く、たのしく感ぜしめられたのは、宮殿を取り巻いての、四邊の穩かなる眺めであつたが、然も私は半藏門附近よりして三宅坂、參謀本部の下へ、それより櫻田門へかゝり、左り手にお濠の水と、御苑の土堤と、その上の石垣、石垣の上の松、その層々たる綠の色と、毛氈の茵の如き柔かい若草とを眺めて下る時の感じは、何とも言ひやうの無い美しさを感ずる、繪にも、筆にも、夢にも盡し難い美しさを感ずる、加ふるに一種

の氣高さを感ずる。私は我が宮城の美を、世界に稀なる、世界に得難い、形勝の地を占めて居らるゝやうに思ふ、それに就ては別に說く人の有られることと信ずるから、たゞ一端だけをこゝに言及いたして置くに止める。

英國のバッキンガム宮殿は、もとバッキンガム公爵家の所有で、今から約二百二十年前の昔に建てられたものである、それを買上げられたのは、その約六十年の後であつたが、たまに住はるゝのみ、多くは顧みずにあられた、前の女王ヴイクトリヤ陛下の御宇に至つて、こゝを倫敦に於ける常住の附と定め玉ふたのである、日本に於ても德川氏の建てた城である、その城跡を今日の宮城にあて給ふたる事、東西の史實は、期せずして一致の跡があるやうである。

巴里の印象

吉江孤雁

フランス人は或る場合には非常な破壞性を表はすことがある。けれど、その根本にはいつも保守性が橫はつてゐる。保守とは、フランス人の場合には、保存性を意味す。自分等の生活、自己の精力の保存を意味す。フランス人が非常 するといふことも、如何なる小さな記念(スウブニィル)でも大切にするといふことも、みなこの同じ性質から出て來る。

巴里が藝術の都として、過去が現在の中に生き、現在が過去の一部の中へたへず繰り込まれて行くといふことも同じ性質の表現せられ る現象である。けれど、この保守性と最一つ大切なることは、フランス人の表現性である。

表現はフランス人にとつては命である。言語に行爲に、自分等の考へを、計畫を、思想を、感情を、明瞭に的確に表現する。フランス人にとつては、思考と言動との間に深い越え難いギャップはない。思考感情を極めて敏速に言語に行動に翻譯し具體化する。そしてその表現の明瞭的確を何より大切なものに考へる。

そこで、この二つの性質、表現性と保守性とが結び付くときに、彼等は、個人生活また集合生活の的確なる表現としての藝術を尊重し保存するといふ特色が浮んで來るのである。この特色のもつともよく現はれてゐるのが即ち巴里である。

巴里の公園と墓地とは無盡の美術館である。純粹のフランス式の公園は均整ある樹林と、その樹林の中に、或は芝生に圍まれ、或は青葉に包まれて立つ詩人、音樂者の立像とで、天然物

と藝術品との調和を見せ、マロニエの並木路の果てに大噴水をおどらせ、石階の下に一大水盤をたゝえて、いづこにも大きな諧調を見せてゐる。

公園は、巴里の縮圖でなり、世界市の面影である。有ゆる人種が見られる。有ゆる職業の人に逢える。黒い大きなクラヴァトをした、頭髪の長い詩人ポォル、フォルに逢ひたいと思へば、家へ訪ねるより、夕方の四五時頃、ルクサンブウルへ行くがよい。美しい夫人と搖車に載せた小兒の側に、大きなマロニエが紅色い花をつける公園の一角、サント、ブウブの胸像のある一隅から程遠からぬ、リセ、モンテスキュへ面した方角に、共同椅子の上に、毎日その人を見出すであらう。

少くも半日を公園で送つてゐる子供連れの主婦等がゐる。八時間働いての歸るさを暫く共同椅子で身をやすめてゐる人々がゐる。學生も、軍人も、教授連も、主として子供も、兼くこの公園美術館を享樂してゐる。

青葉の陰に憂れはしげな眉をしたショパンがゐる。悩ましげなチュリップの花の咲き充ちた中に永久の悶えと救ひとを苦痛の面に彫んだヴェルレェヌがゐる。この前では、毎年一月八日に同人が集つて小さなフェトが行はれる。優麗な姿をしたサンド夫人の近くに昨年スタンダァルの胸像が据えられた。林の出端れにギリシャの女神等がおごそかに立ち、カルタゴの市が絶滅の苦痛の姿を見せてゐる。ロマンティックの怪獣の姿は芝生の中に跳躍する。

アナトオル、フランスは此處にそのかみの少年時の姿を見た。レミイ、ド、グルモンは美しい幻をとらえた。暮れおそき巴里の夏の夜は、林の奥からひゞいて來る公園閉鎖の太鼓の音が、九時を報じても、まつたく明るく、その明りの中を人々はサン、ミシェルの門の方へと靜かに歩みいだす。彼等は明日も來る可きこの公園をいかにも立ち去りかねた足どりで、振りかへりながら、物おしみするやうな眼付きで眺めやりながら歩みいだす。

夕暮の光りを照りかへすセエヌの流れは、眠るまへの微笑を、キッスを送るやうに、おだやかに靜かに、いくつかの橋下を流れて行く。この河そのものが巴里の歴史であり、巴里の藝術である。ノオトル、ダムのゴティックのカテドラルは澌闊を壓して立ち、サン、ジャックの塔は、奈良の唐招提寺のやうなしなやかな姿をやゝとほく浮ばせる。ルウブル宮の古色と、パレ、ブウルボンとは相對立して時代の相異を建築の上に見せてゐる。パスカルをして「若き人生の深淵」を味はしめた舊い橋も、アレキサンドル三世を忍ぶ黄金と純白の近代の橋も、更らに近代式のエッフェルも、東洋風のトリクロミなるトロカデロ

も生きて動く時代相を表白して、流れをさしはさんで立つてゐる。廢れたものはない。死んだものはない。同時に調和のはづれた喧騒と早急との表現はない。生きた歴史の中に過去と未來とを現在の中に握手せしめ、共存せしめる。こゝに都會のどよみに一種の律調が生ずる。この律調を具體的に人に感知せしむるものは、寺々の鐘樓よりひゞき出づるアンジェリウスの鐘の音である。

未信者も不信者も、來つてこの鐘の音に耳を澄ますがよい。煙をまじえざる巴里の曉の澄んだ空氣の中に、空へ向つて活動の響きを散らし、疲れた日暮れを、セエヌの岸に暫し立つ頃、兩岸の寺院から、働きの後の休息を知らせる樂しい鐘の音、何もむづかしい傳統をその中に求むるに及ばない、賑やかな樂しげな活動と安息の直接の表現を胸に享けよ、この中にも公開せられたる共有の音樂がある。これは或る個的天才の獨創の發現ではなく、多數の人々の普遍的な直接要求の集りより作りいだされたる共通の音樂である。

寺院こそは各所に散立してゐるけれど、墓場にいたつては、巴里全體で二三の共同の廣場を持つてゐる。そして東京に見る如き寺院の移轉、墓地の移轉なぞはない。おそらく、これは世界の首都の中にて、現代では、日本の首都に於てのみ行はるゝ現象であらう。我々日本人は死後に於てすら安住の地を持つことが出來ない。

出來る限り墓石を飾れといふのが、フランス人の何人でもの持つてゐる要求である。こゝに最もよく、彼等の保存癖が現はれてゐる。

「我死なば、我が墓に柳を植えよ」

そして忠實なる妹は、詩人ミュッセの墓に、兄の墓に、柳を植えた。ペエラシェズへ行く人は、すぐにこの柳がその垂れさがつた長い絲で純白な詩人の碑面を拂つてゐるのを見るであらう。ゾラの紀念碑もほど近くにある。サンメトリックな小徑が縱横に走つてゐる中に多樣多種の形をした墓石が横はり、或は立つてゐる。同形のものといつてはかつてない。巴里婦人の被つてゐる帽子と同じく、かつて同形のものをこゝに見出すことはない。異つた趣味、異つた表白、そして、それを通じて亂れない整調がある。こゝにはいれば、一種の賑かさと安慰さとがある。

日本の或る漢詩人が「死してなほ爭ふ石の高低」とかいつて皮肉をいつてゐたことを思ひだすが、略ぼ同形のものばかりであればこそそんな皮肉も出るであらうが、各人が各種の特色にしたがつて表現をして行く時は、競爭なぞといふ觀念は起り得

ない。巴里の墓場では何人もそんな嫌な皮肉な感じは持たない。最も好く特殊性を發揮して、個性を發揮した集合生活の圖畫として巴里の墓場を見ずにはゐられない。

從つて、こゝも一種の共同の休息處である。各人が好きなポーズをもつて休息してゐる場處である。モオパッサンの墓が、ボードレエルの墓が、多くの人々の中に、樂しげに氣樂げにまじつてゐるのを見出す。

パンテオンも今日では、やはり一種の墓場である。ルウソオがヴォルテールが、ユゴオが、ゾラが、ベルトロ夫妻が、また將軍連がこゝで柩の中に横はつてゐる。けれどこれは寂しからう。あまりに飾られた墓の寂しさがある。ナポレオンの墓にいたつては更に寂しい。「帝王の寂寞」が遺憾なくその墓場に現はれてゐる「我死なばセエヌ河の畔りに埋めよ」とナポレオンがいつたにせよ、オテル、デ、ザンバリドの寶石箱のやうな處へおさめられたのではあまりに寂しからう。それよりはサン、ドニにある歴代の王者等の墓場の方が、遙かに賑かである。こゝにマルグリット、ナヴァルが兄のフランソア一世と共にゐる。歴代ルイ王が肩を並べ、頭を並べてゐる。この中にはいかにも人間的な墓場の感じがある。我々の踏んで歩く礎石の下にも人がゐる。右にも左にも、上にも下にも、寺院の中にみち〳〵てゐる。

十一月一日、總聖日(トウ、サン)の日は、有ゆる家族が個々人として、また市全體として、過去の人々を記憶に呼び返へす日である。この日ぐらゐフランス人が現在と過去とを握手せしめて、おだやかな中にしめやかな悲しみも悦びも味はう日はない。有ゆる墓場が花で飾られ、プロセッシオンが市中をねつて歩く、

公園と墓場とのほかに、幾多の廣場(プラース)がある。こゝには巴里人共同の記念像(モニユマン)である。廣場そのまゝが一つの生きた歴史であるが、その歴史の中央にさらにその歴史を記念する立像が若しくは群像がある。この廣場は多數の人が、公開に於て事を議するところであり、祭典を擧げ、悦びを分かち、人を迎ふる處である。忌はしき建物があれば、それを破はして廣場にする。公開の雄辯は直接の訴へである。廣場は公衆のための安全瓣である。都會の處々にこの空濶地があつて、常時は雜閙を寛和し、非常時は臨時の議場となる。バスチユの廣場は自由の歴史を、エトワルの廣場は勝利の記念を、一つは國内的に他は對外的に語つて居るのである。

小革命の騷ぎでも巴里の美術品の一つでも破壞されはしなかつた。と歴史家はいふが、それどころではない。千八百七十六年の議會では幾百萬フランの支出を議決して、美術品の購入を

し、全國の彫刻家に對して、この革命の眞の藝術的表現を懸賞で募集してゐる。藝術的表現とは、即ち革命そのものゝ眞髓の直接の表現である。フランス人にとつては藝術は人間の集合生活の最も完全なる表現であると思はれる。從つて何事にせよ、人間の集合生活の上に起つた出來ごとであるならば、それを一度び藝術的解釋を經て見ることを求める、即ち眞髓を最も的確明瞭に表示して見たい要求が起る。この要求は如何なる事實に打當つても變らない。從つてその的確に表現せられたるものは、即ち嚴正なる批判を經て來たものであるが故に、これは彼等自身の生命そのものゝ表示であり、生命そのものである。

一國の首都としての巴里の美は、即ちフランス人そのものゝ藝術の具體化せられたるものである。從つて國境なき藝術の國は、巴里をして一面に世界市たらしめ、如何なる種族の人といへどもこの都市に足をいれたもので悅びを感じないものゝないのは、即ちこの具體化せられたる藝術の國へ我々が足を入れるからである。

單なる記念像の並列、單なる記念塔の林立した國であるならば、寧ろうるさゝを感じやう。戰爭紀念の展覽會の如きものである。過去が現在の中に生きるといつたところで、それは一度び藝術的選擇を經たる過去でなければならない。即ち最純正なる姿を現はした過去、最も嚴正なる批判を受けた過去でなければならない。またかゝる過去の姿でなければ現在の中に生きてゐることは出來ないのである。

即ち巴里の美とは、最も正しき姿をとる過去が、嚴正なる藝術批判を經たる過去が現在の中に生き、またかゝる現在が刻々に過去の中へ繰りこまれ、かくして永久に生きてゐるといふことを示してゐるのである。これ以外に於て一都市の美は決して有り得ないはづである。

印度の町の話

南　薫　造

世界中何れの都會も其れ相當に皆な何か特色を持つて居るが、其の點から印度の諸所の都市は殊に著しい特色を發揮して居る。印度を旅行して居る時に何が最も私を悅こばしたかと云ふと風俗、景色、建築、彫刻であつた。印度に於ては萬物皆な宗教に根源を持つて居ると云つてよい、從つて風俗、建築、彫刻は其の內最も宗教に關係が深かく、其等の物が集まつて出來上つて居る都會は宗教の香が殊に濃密である。即ち南方に於て

はシバ神を祭る大伽藍を中心とするマツラがあり、中央部に於ては印度教を主とし回々教、ジャイナ教其他の佛教などの建物の集合地なるベナーレスの聖都があり、アグラ、デリーの如き回々教に依つて建設せられたる都がある等である。

今ま旅行中の記憶から最も印象深かつた一二に就いて座談的に記るして見たい。

ベナーレス（婆羅奈斯）は恐らく世界中最も色彩の富かな美しい都であらう。洋々として流れるガンヂス河の西岸を占めて無數の宗教的の建物が建てられてある、そして此都の河に面した全部といつてよい程な廣い場所が緩やかな大石階を以て河面に迄降りて居る。町と河の面との高さの差は數丈あるのであるから此の石段の堂々たる事は素晴らしいもので此の石段（ガットと呼ばれてある）はまた一つの大きな禮拜堂とも曰ふ可きで、ガンヂス河を禮拜する群衆（印度教に於てはガンヂスは神の化身として考へられて居る）は川向ふの廣い野原から昇る朝日を身に浴びて此のガットを上下し河水に手を浸しては坐禪を組み又か經文を誦ずる。其等は男も女も朱や緑や白や黄やの幅廣い布の衣を身に卷きつけて居るので何んとも云へない程美しい。此の河に近かくに黄金の屋根を持つた印度教の神殿。聖牛を祭る宮、ネパールの佛教の珍らしい木造の寺院、高塔を持つ回々教の禮拜堂、諸國から此の聖地に參集する無數の巡禮者の泊する大きな家等々種々雜多な大小の建築物が蒔ち、所によれば僅かに一間程の幅の往來が不規則に其の間を縫つて全く迷宮に這入つた樣である。加之も多數の牛は町の中に放し飼ひになつて居るので、此の狹まい場所でも勝手にやつて來る事もある。印度教に於ては此のベナーレスは最も神聖な土地で誰れも一生に一度はこの聖地を踏み此の河神に手を觸れ度いと希望して居る。それで他地方にある富者等は其老年に入つて此の聖地に於ての死を希ふ爲め屢々此所に移む者も多いと云ふ。そして死者は河岸の火葬場に於て露天に於て燒かれ其の骨や灰は直ちに此の神聖なる河に流される。新市街は此の賑やかな古い町を遙かに西に離れて造られ其所には英國の政府の兵營や、學校や、ホテル、停車場其他の物が廣大なる土地を圍んで造られてある。ベナーレスの郊外三四哩の所に釋迦の初めて說法せるサラナス鹿野苑の古跡がある。總て村落に通ずる道路は立派で馬車の乘心地も甚だ宜敷し、到底日本の道路なんか比較にならない。而して雅味ある村落が點々し道路の兩側には榕樹、マンゴ、菩提樹、イミリー（アカシヤ類か）の並木があつて氣持ちの好い事は非常である。此所には人家など殆んど無いけれども發掘されたる大規模な僧院の傍に發掘品を陳列された立派な博物館が建てら

れてゐる。此の現場へ博物館を建てると云ふ遣り方は最も好い事と思ふ。

アグラ。ベナーレスは印度教の香の濃い大都であるが此のアグラは全く回々教に依つて形造られた美しい町である。若しベナーレスを假りに日本の京都と見立てるならばアグラは正に奈良に比す可きである。感じが落ち着いて過去の都市である事も似て居る。ベナーレスは赤褐色の石材から出來上つて居る、アグラでは純白の大理石で代表的の建物が出來て居る。

町はガンヂスの支流ジュムナ河に跨つて回々教の禮拜堂なるジャマ、マジッドを中心として不規則なる曲つた町が之れを取り卷き、河に面する一方にはアグラの城寨が築かれ其の内に王宮が含まれて居る。また遙か南方に離れたる河岸に彼の有名なるタヂマハルの莊麗極まり無き建物が屹立する。河を距て丶對岸にはイチマドウツドーラの清淨なる建物やチンカロジヤの華麗な禮拜堂が存在する。之等の建物の多くは主として十六世紀から十七世紀の前半紀頃に出來上つたもので、回々教の君主に依つて出來た町であるから印度としては甚だ歳の若い都市である。左手に經典を捧げ右手に劍を持して旋風の如く此の地方に來たり、僅かの年代の間に於てデリーの大都市を造りまた此のアグラの町を拵え上げた勢は實に盛んなものである。住民は主として回教徒であるから風俗も自ら異なり頭に布を卷く代りに鍔無しの帽を冠る者が多い。産物でも西方アラビヤ地方の感化多き金銀の刺繍、大理石の象眼等である。アグラに程近かい所に今は全く住む人の無いファテプリシクリの恐る可き大規模の宮殿がある。印度全土殆んど何處も左様であらうが此の附近に於ては殊に野禽の多くを見た。印度人は殺生をしないから其等の動物も安じて人間と伍して樂しんで居る。鸚哥の色々の種類、鳩、鷲、斑の鳥、孔雀、名の知れない種々雜多の小鳥、其れから猿や大蝙蝠等隨分面白ろい。交通機關としても一寸他で見られないものがある。即ち馬車に色々な種類のある他に駱駝車の乘合がある。之れは大きな二階つきの車を二頭の駱駝が牽くので一個の車の中には幾十人の乘合が便を借りて居る。之れは暑い日中を避け、日が暮れてから出發し涼しい夜を通して町から町に野を越へて行くので實に詩趣豐かなものである

此んな話を記して居たら切りが無いから最後にダージーリングの事を極く簡單に書いて筆を擱くとしよう。ダージーリングはヒマラヤ連峯の一部にある町で實に海拔六千八百尺の高い場所にある、從つて他の印度の町とは温度の差が非常で私の行つた三月でも華氏四十度以下の時があつて粉な雪を吹き上げた。

此町の人口は十五萬人からあると云ふ（海拔四千呎から九千呎

間に存在する附近の村落も合せて）のであるから山上の都會も中々賑やかなものである。之れに登るにはヒマラヤの麓のシリグリの停車場でヒマラヤ登山鐵道に集り８の字を畫いたりくの字を畫き乍ら數時間登るのである。町は甚だ清淨で心持ちがよく日本の氣候と似て居ると云ふので日本から移植した杉や櫻が繁つて居る。町全體が公園と云つてもよい程に庭園が多く名物の石楠が種々な色に咲き亂れて居る。町は山腹の狹まい場所に出來て居るので前は數千呎の溪谷を見おろし、其の谷を越えて雪の連山（最も美しいのはキンチエンジヤンガ峯で海拔二萬八千百五十六呎）を見る眺めは實に此の世の物とは思はれない位に清淨である。人種は主として西藏人で印度人も混じて居る。町の中央に廣場が設けられ日曜日毎に市が立つ、吳服、油、靴山し、煙草の葉、食料品、古道具など何んでも持ち寄つて來る。家は木造で宗敎は喇嘛敎である。人家の前に幟を立てゝ居るなど日本の田舍に彷彿たるものがある。

空氣は澄み切つて二十哩から四十哩を離れて居る山の襞が手に取る樣に明らかに見へる。

彫刻家の見た紐育

—並びに市俄古、華盛頓—

一彫像師

スカイスクレーパアー——摩天閣——の多い、紐育市の感じは、建築物のかたまりといふよりは、寧ろ一つの群像に似てゐる。若し「塔の都」と云ふ名があるとしたならば、それはまさしく紐育市に名づくべき適當な名である。三角形の屋根の多い、東京あたりのスカイラインが、若し、鋸の齒のやうであるといへるならば、紐育市のスカイラインは、まさに錐(きり)を立て並べたやうであるといはなければならない。然し、それは、ブラツ、エンド、ホワイトの影繪(かげゑ)として、紐育を遠く眺めた場合である。これを近く見るならば、そこには直ぐ、一つの群像が聯想される。

私は、紐育へ行くとすぐ、あの、ブルツクリン、ブリツヂの上から、その尨大なる群像としての、ローア、マンハツタンを望み見て、この群像の持つてゐる、サブジエクト——内容——を知らうとした。紐育の地盤は岩が多く、さつしてその岩石の

の層は、この大都會の基礎になつてゐるから、東京市の地盤なぞとは違つて、どんな大建築をもその上に建てることが出來るのであるが、これは、彫塑の上で云ふ、ソリッドファウンデーション――釘づけの心棒――にあたる。大規模な彫塑をするのには、塑土の重みがかかるから、どうしてもこのソリッドファウンデーションでなければゝたない。この點に於て、紐育は、大都會となるべき、基礎の上に建てられたる大都會であるといはなければならない。して見ると、東京なぞは、彫塑の方で用ふる、サスペンデング、ホールダアに、ひつかけられた土のかたまりである。その基礎は始終ぐら〳〵してゐる。

何しろ、紐育の、ローア、マンハッタン、と云へば、マンハッタン、アイランドの尖端に當つた甚だ狹い土地である。それは、イーストリヴアと、ハドソンリヴアの間に、はさまれた土地で、そこへ二十階、三十階、四十階の高さのある大建築や、また六十何階と云ふ高い塔を、ぎつしりと建てならべてある。私の初めて行つた日は、丁度日曜日で、凡てのビジネスは休みであつたが、然し、この狹い土地へこれだけの高さに、石や、鐵材や、煉瓦や、セメントコンクリートを堆積しなければならないと云ふことは、如何にこのデストリクトに、人間の力が、かさりなり合つてゐるかと云ふことを思はせられる。狹いところへあつまつて來た、人間の力の颶風は、平面の上にひろがることが出來ないから、竪にその渦を卷き上げたのである。さうして見ると、この一大群像の語つてゐる意味は明瞭に、私にわかつてくる。建ち並んでゐるスカイスクレーパアを、數へながら、私は色々なことを考へて見た。

歐羅巴から歸つて來た人は、よくいふ。紐育に藝術的な建築はない、また紐育市は、何等美觀を持つてゐないなぞと。然し、私に云はせれば、その人たちの想つてゐる、藝術とか、或ひは美とか云ふ概念をもつて、紐育を見ることが既に間違つてゐるのである。紐育を見るのには、藝術の持つてゐた過去の意味や、また過去の人の感じてゐた美と云ふものを、しばらく捨てゝかゝらなければならない。ゴチック式や、ビザンチンや、また グリーキの古建築のカアヴラインの配合や、またシムメトリイやそんなところにばかり美があるやうに教へられて現代の活きた藝術に眼を開く事の出來ない、舊式な頭腦の所有者には『塔の都』紐育の壯觀は、一寸、わからない。電信柱をきらつたり、鐵道をきらつたり、蒸氣汽罐をきらつたりしてゐるやうなことでは、もう現代に活きてゐる價値さへない人間である。現代の美は、却てそれらの人々からきらはれてゐる、 の物質力の横溢のなかにあるのである。ロコモテーヴス、モー”

アス、シップス、エレクトリツクワイアス、エーアシップス、エロプレンス、ドツクス、キヤナールス、みなさうしたオブジエクトのなかに、新しき美があり、またそこに、現代人に適切な藝術のあらはれがあるのである。太古に存した埃及の量の藝術は、また新たに産れて來た。然しこの度は、コワンテテー、エンド、フォース——量と力——の藝術として復活して來たのである。なる程、埃及の藝術が現はした、その巨大なる量にも、力の美を含んでゐることは事實だ、然し、現代の量的藝術は、力の變化を示すところにその美がある。それは靜止してゐる力ではなくつて動いてゐる力である。それは、爆發してゐる力である。亞米利加へ來て、過去の繪畫や、彫刻を見るやうな態度で、その都市なり、或ひは建築なりを見たつて、しかたがない。亞米利加は世界で最新な文明國だけに、そこに現はれて來る、美なり藝術なりは、自ら歐羅巴とは違つてゐる。紐育のスカイスクレーパアを見るのにも、あらかじめこの考へを持つて見なければならない、とかう私は考へた。

また日本から渡つて來た人は、よくいふ。亞米利加は物質的文明の國だ。紐育のスカイスクレーパアはその物質文明の表象だなぞと。然し、私はそれを聞いて笑ひたい。そんなら日本は精神的文明の國か、その日本の精神文明とはどんなものだか拜見したいものだ。このスカイスクレーパアの語つてゐるところのものは、亞米利加人が、何の力によつて、これだけの大きな建築的群像を築いたかと云ふことである。それは黄金の力だと云ふ人があるかもしれないが、働きのある國民が黄金は物質だと云つてゐる其ひまに、働きのない國民は黄金は神だと云ふ。要する所は、その國民の精神の力である。物質力の伴はない精神力なぞと云ふものはありはしない。精神の力は物質に依て證明されて初めてそこに其力の價値を生ずるのだ。群像としてのスカイスクレーパアは此亞米利加人の精神力を物語つてゐる者でなしに、果して何んであらうか。海上には、幾百の大汽船、幾千の小汽船が浮んでゐる。海岸には、丁度、櫛の齒をひいた樣に長いピーアや短かいピーアが並んでゐる。さうしてすぐ其海岸からビルデングのグレーテスト、グループ、モニユーメント——大群像——は、聳へたつてゐるのである。若しこれが夜ならば其一つ一つのスカイスクレーパアの塔にはイルミネーションが輝きわたつて、光は光を照し合ふ壯觀を呈すのである。さうして、其幾千萬と數へきれない窓と云ふ窓には、一時に灯が點つて、それがまた悉く、海の面に反射して、一面の燈火の世界を現出する、さうしてその中を、青い灯や、赤い灯の點つた船が、浮御殿の樣に、往つたり來たりするのである。ローアマンハツタンの夕暮の美觀を

見やうと思へば、スタアテングアイランドへ渡るフエリーボートの上からこれを見るに限る。

然し、私の最初に見た日は、丁度秋のなかばで、紐育は、藍色の霜のなかに包まれて、それ等のスカイスクレーパアスの群像は、巨大なる墳塋のやうに立つてゐた。日頃熱鬧なところだけに、ハッシアツプした日曜の光景は、一種の寂寞を湛えてゐた。林立してゐる建築物の下を通ると、空氣は、狭いチヤンネルを流れてくる水のやうに、そこの壁につき當り、ここの角にせかれて、はげしい勢ひをなして、ところどころに、塵芥のポイルプールをつくりながら、また、捨てられた新聞紙や、その邊の立ち樹の落ち葉を巻きにげながら、私の顔にあたつて、どうかすると、かぶつてゐる帽子を持つて行かうとした。日曜の紐育はどこでも淋しいが、ことにこのビジネス、セクションの、オフイス、ビルデングばかり並んでゐる町は、淋しい。殆んど人通りもないほどで、たゞ紐育見物の田舎ものが、街角に立つてゐる繪葉書賣りから、紐育案内記や、名所や、ビルデングスの寫眞なぞを買つてゐるくらゐなものである。靜かな、深閑としてゐるなかに、スカイスクレーパアを見上げると、それは全くトムヤードで冷やかな、石の彫刻を見てゐる感じだ。こゝが月曜の朝からは、目のまはるやうな、また叫んでもその聲が、自分の耳にさへきこえないやうな、喧騒の巷に化さうとは思ひもよらない程である。

だが、このビルデングのグループ、スタチウは、私の目には、キユビツクなスタチウに見える。尤もこのキユビズム——三角派——の彫刻と云ふものは、その荒削りのところに、鋭敏な彫刻的效果をあらはしてくるのであるが、亞米利加の都會文明と云ふものも、その通りでその特長を荒削りな截斷面の上に見せてゐる。そこには、或ひは、グレースフルとか、デリケートとか云ふものはないかも知れない。だがそのど迄もグロテスクな、またテンペラメンタルなところが、得も云はれなく新鮮な感じを人に與へるのである。日が西のジヤシーセテイに傾いて、波には三角形の黄金の光が並べられる頃になると、ローア、マン、ハツタン、アイランドは、濃い藍色の陰影を刻んだ一つのキユーブな彫像となる。さうして、それが、紐育市の精神を、聲高に叫び出す。極く簡短に、曰く『これは、ビジネスの都會である』と。

さて、私が、今迄話したところは、實は、大紐育市の、ほんの一部分、即ちローア、マンハツタンの商業區域だけであるが、これから大紐育全體に亘つて、そのポエツスアイビユー

話して見やう。

紐育市といつたところで、そこには、澤山な都會が群集して居るし、また、それには、澤山な他の都會が隣接してゐるのであつて大體として見ても、やつぱり、それは、一つのグループ、スタチューである。今の、ローア、マンハツタンを、そのうちの一つの巨像の頭部とすれば、その左の足の下にはブロンクスといふ都會が横はつてゐる。右の足の下には、ダイクマンと云ふ都會が寢てゐる。そうしてそのまた下の方には、ヨンカアスと云ふ小さな町がころがつてゐる。丁度、足頸のところに、イーストリヴアと、ハドソンリヴアとをコンネクトする、ハアレムリヴアと云ふのがある。この水は、ハドソンリヴアの方から、イーストリヴアの方へ流れてくるのであつて、そこに二つの島がある。ハアレムリヴアの川口にあるのがランダルスと云ふ島で、それから少し上にあるのがワアルドスと云ふ島である。イーストリヴアと云ふのは、河上も河下もない河だ。河とは云ふものゝこれは湖水で、その兩端は海につらなつてゐる。このイイストリヴアの左には、ロングアイランドと云ふ大きな島がある。そこには、ブルツクリンと、ロングアイランドセテイと云ふ、二つの都會があつて、イーストリヴアに面してゐる。これは、マンハツタンと並んだ例の巨像と思へばいい。それから、今度は、ハドソンリヴアの向ふ岸には、ゼアセイ、シテーと云ふ都會がある。ホボケン、ウイハウケンなぞと云ふ都會がそれに連なつてゐる。さうして、まだある。それは紐育灣と稱してゐるアツパアベイの對岸にはスターテンアイランドと云ふのがあつて、ここにも一寸した町がある。例の自由の女神像、スタチウ、リバアテーは、ハドソン河の河口に立つてゐて、このアツパアベイのなかの一つの燈臺のかはりをしてゐる。先づ大紐育のマツプはこのくらゐにして置かう。

ハドソン河には橋はない。けれども、フエリイボートは、なんでも五六ケ所にあるし、河底を渡る汽車もある。また、イースト河には、四つの大鐵橋がかゝつてゐる。汽車の發着する大停車場は二つある。一つは、グランドセントラルステーションと云ひ、もう一つは、ペンシルヴアニアステーションと云ふ。どちらも、紐育市の中心にあつて、それは宏壯な大建築物である。ことにその地下建築とその光線の取り方は驚くべきもいである。そこには五つの地下層があつて、汽車から卸りた人たちは、地上の往來へ出ることなしに、すぐそこから地下電車へ乘つて思ふ方向へ行けるのである。一番下のコンコースからは、

ロングアイランド行きの汽車が出る。これはチューブでイースト河の底をぬけて行くのである。それからまた、昇降機もあつて、一番上から、一番下まで、まつすぐに降りることも出來る。汽車は、みんな都會の下を走るのである。紐育の地下電車はセヴンスアヴェニューにブロードウエイ、それからレキシントンと、三つあつた。もう一つあつたやうにも思ふが、それは私のゐなくなる迄には、まだ出來上らなかつたと思つた。それから、高架電車は、ナインスアヴェニューに、セツキスアヴェニュー、それだけがウエストサイドの方にあつて、イエストサイドの方には、サアドアヴェニューに、セコンドアヴェニューの二線がある。中央の、グレートセントラルパアクのなかに、市街水道の貯水池が三つある。そのなかの一つはなか／＼大きくて、見たところ四角な湖水のやうである。紐育には、岡もなければ坂もない。少しばかりの地ぶくれはあるにしても、先づ水平の上に建てられた都會だといふことが出來る。往來に對して直角線上にその身をたてて、歩くことが出來るのである。

さあ、紐育の話しは、このくらゐにして、今度は、市俄古の模樣を少し話して見やう。だが、市俄古は、私の住みなれた土地でないから、さうくはしい事は知らない。

市俄古は、立像として見る都ではなくして、これは、浮彫として見るべき都だ。制限のない土地の上に建てられた都は、上にのびあがると云ふよりも、八方に廣がる方が自然である。だから市俄古は、シヴイク、センタアを置いて、そこから市街は八方に分れてゐる。いや、分れやうとしてゐる。市俄古は今、改造中である。元來、この都會は、都會そのものが平に廣がつてゆくばかりでなく、こゝは、合衆國中での工業の中心で、こゝから四方へ廣がる物貨は、この市にある六個の大停車場に忙がしく運びこまれる。のみならず、この都は、ミシガン湖に面してゐて、その物貨は、船で、キヤナダの方へも、運ばれて行くのである。また、こゝには世界一の屠牛場があつて、合衆國中のストツクは大抵こゝへ集まつてくる。私は、この都會はあまり好きでない。なぜならば、工場が多いので、空氣は常に煤烟を含んでゐて、建築物なぞは、まつくろによごれてゐる。さうして紐育にくらべると荷馬車が多いせいか都會中、至るところ馬糞の臭ひがした。往來をあるいてゐる人たちも、皆働き人のやうな、あらあらしいところがあつた。紐育が、ビジネスの都ならば、こゝはヲルク——働き——の都であらう。

私の行つたのは、丁度夏だつたが、流石にレーキフロントはいいところだと思つた。グラントパアクの青い木の葉を、青い

ヴェイルのやうに透きとほらせる、アアクランプの下の小径を歩きながら、夜のミシガンの湖水の波が、ヤツト、ハアボアの防波堤にうちつける音をきくと、海の港の都會とは違つて、大陸のなかの湖水に面した都會に、また趣きが違つてゐる。レーキショーアの公園も、今頃は、大分よくなつたらうと思ふ。市俄古市を丁字形に縫つて一つの河がある。シカゴリヴアと云つて、この河をさしはさんで、この都會の心臓に當る區域に横はつてゐる。今、シヴツセンタアにならうとしてゐる、横のハルステツドストリートと、斜のブルーアイランドアヴエニウと、竪のコングレスストリートのあつまつてくる、そのハリソンと、コングレスと、ヴアン、ビユレンストリートの間を、若し市俄古の心臓とするならば、シカゴリヴアー、キヤナルは、丁度、腹部をくくつた帯に當つてゐる。だから市俄古には、たくさんの橋がある。また市俄古は、汽車が都會の地面を通過するから、うるさい程に踏み切りがある。幅を廣くしてよくなつた、ミシガンアヴエニウは、一番、湖水に近い通りで、湖水に面した側には、グラントパアクの綠の列樹と、綠の芝生が目にまばゆく、また右側には、十階建ての大建築が建ち並んで、その赤と、白との建物を、一ブラツクごとに入れ違ひに見せてゐる。さうして、それが、大陸の、黄ばみを帶びた空氣のなかに沈んでゐる。それに、通りが、どこ迄も眞つ直ぐだから、見通した向ふの方に、丁度、黄色いテラコツタに刻み出した、浮き彫を、そのフイギユアの側面からながめるやうな感じがする。市俄古で有名な通りは、このミシガンアヴエニウから、みなアツプタウンの方へ向つて、横はつてゐる。ステートストリートと云ふのは、丁度紐育のフエフスアヴエニウにもくらぶべき通りで、市俄古での目貫きの通りだ。それからデアボン、クラーク、ラツセル、ウエルス、フランクリン、マツケツトストリート、それからキアナルを渡つてカナルストリート、この上がクリントン、ジエフアソン、デスプレイン、それからハアルステツドストリートとなる。その先のアツプタウンに限りなく十二三哩も續いてゐる。今日の市俄古は、どこへ行つても、市區改正の最中で、往來のまんなかには、アスフアルトを溶す、ステームローラーの、ロコモテーヴが、黑い烟をはいてゐる。タアルを流す火は、まるで火事場のやうな有様だ。同じく都市の改善をするのならば、あゝ云ふやうに一と思ひにやる方がいくらいいか知れない。尤も、東京市などは、金がないのだから致し方もないが、外國の都市を見た目には、東京は、まるでなつてゐない。改善後の市俄古には、市をめぐつていくつもの公園形のブレバアドや、パアクウイや、パアクや、ブレーヴラウン

アなぞが出來るはずである。さうなると、少しも雜閙する往來へ出ずに、眺める緑の色に飽き、足にはやはらかい土の迫を踏みながら、市俄古市を一とまはりすることが出來るわけだ。まだ約束の華盛頓を書かなければならないから、市俄古の事は、これで終りになる。

華盛頓と云ふ都市は、亞米利加のほかの都市とは、まるで變つてゐる。これは都市と云ふよりは、一つの大きな公園と云ふやうな感じだ。亞米利加人にいはせると、これは世界中で一番美麗なセテーだと云ふ。それはさうかも知れない。なぜならば、この都會はかつて、ビジネスの中心地點になつたわけでもないし、また、工業の中心になつたわけでもない。こゝはもう、昔から、政治機關の所在地ときまつてゐる。住んでゐる人は大抵は、亞米利人の所謂、パブリツクサアヴアントばかりである。日本ならば、所謂、御官員様の住宅地だ。さうして、そのまた建築がすばらしい。しかも　の建築は、澤山の樹木の間にかくれてゐて、ことさらにゆかしく感じられる、ペンシルヴアニア、アヴエニウの中央に立つて見渡すと、兩側の、デパアトメントオフイスビルデングは、そのアーキテクチユアルの美を、限りなき緑葉の波のうしろに見せてゐる。華盛頓モニユメントのオベリスクを中央にして、廣いヴイスタ——列樹路——は、歩道と車道のあひだにも青芝のガアデンを、青い敷物を敷いたやうに敷きつらね、一直線　延びてゐる。そのつきあたりには合衆國のキアピタル——議　堂——が立つてゐる、さうして、それを、中心として、デストリクト、オブ、コロンビヤの道は八方に分れてゐる。このヴイスタの、他のつきあたりには、合衆國のプレシデントのゐるホワイトハウス——白亞館がある。この都會の殆んどなかばをかこんで、ポトマツクリヴアと云ふのが流れてゐる。云ふ迄もなく、この都會の人氣は、まことに上品だ。言葉なぞも亞米利加の、他の都會とはちがつてゐる。華盛頓から來た人だと云ふと、紐育あたりに住んでるものでも、一種の尊敬を拂ふ程である。一般住宅の造り方なぞも、往來からすぐ、ステヤケースのあるやうな紐育や市俄古邊の家とは違つて、家の前には必ずガアデンがある。さうして、殆んどどの通りにも、兩側に列樹がはつてゐる。華盛頓市に彫刻として見れば日光の下に輝いてゐる大理石の女神像のやうなものである。

この他の、米國の都會では、ボストンは落ちついた都會であらう。ヒラデルヒヤは、ものがたい都會であるが、ピツツバルクは山

のなかの工業的都會である、河に沿うてゐて、見たところなか〱いい。デトロイト、セントルイス、サンフランシスコなぞ、私の見た都會もまだあるが、もう書くべき頁もなくなつたから、これで筆をとめて置く。

埃及カイロ府の第一印象

工學博士 佐藤功一

明治四十二年六月三日の朝ポートサイドに上陸した。これからカイロ府に急がうとするのである。

スエズの運河を船足ゆるく靜かに靜かに來た、幾度も船を止めたり舵を取りなほしたり、汽笛の聲やウインチを卷く音やバタバタと甲板上をかけ歩く響などが絶間なかつた。それを聞きながら眠つてしまつたのであるが、けさ起きて見ると船はポートサイドの港に入りつゝあるのだ、やがて錨を降すと波止場から小蒸汽船や小船が集まつて來て、どこの港にもある通り宿引きや商人や兩替屋なぞがぞろ〱甲板へ上つて來る。

私は最初から倫敦へ直行しやうと思つて居たのだ、ところが今こゝへ船が着いて見るとどうしても埃及内地の旅行がして見たくてたまらない、丁度トーマス・クック支店の番頭が船へ上つて來たので、これから上陸してナイルを遡りたいのだがやつて呉れるかと聞いて見た。實は埃及の旅行は十一月から三月迄が季節で、其の季節にはクック社の遊覽船がカイロと上埃及の間を夜通して居るのである。勿論見る可き古跡は孰れもナイルの兩岸にあるのだから、旅行は此の方法に依るのが最も便利なのである。番頭の答は、今はどても暑くて深い内地の旅行はむづかしかろう、しかし御望みとあらば荷船でやつてあげませう、だが健康の點は保證が出來ません、と斯うであつた。なにしろ船の上でさへ南國の六月の氣候であるから中々耐へられない、丁度この邊は鹿兒島附近と同緯度であるが、砂漠の熱砂の上を渡つて來た風のためにきびしい暑さを感ずるのだ、これでは更に南に進み行く内地旅行はたまるまい、殘念乍ら思止まる事にした。しかし又考へて見ると、一度歐洲へ入つてからでは例へそれが豫定の行動であつても或は實行が困難になりはせぬか、折角來たついでゞあるからカイロ附近位は見て置きたい、斯ういふ心がムラ〱と湧いて來る。それで遂に上陸してしまつた、そして荷物を一時此の町に其當時雜貨店を開いて居つた日本人

の青年にあづけて置いて、カイロからアレキサンドリヤあたりへかけて二週間の旅行をして次便の郵船で立つことにした。税關の調べや健康診斷もすみ銀行へ行つて英貨を此の國の貨幣に替へた。時間表に依つて午後の六時發の汽車に乘ることにきめた。晝飯に料理屋で初めて伊太利料理の小魚のかき揚げをうまいものと思つた。

夕刻まで暇にまかせて市街のスケッチなどをやつた、レセプそれはこのカナルの完成者なる佛人レセプの銅像から眞つ直ぐの大通りの並木の花が滿開で、木の名に知識を持たないが何といふ強烈な香の花であらう、私は今でも夏の眞最中に時々此の熱帶的の強い香の並木を思ひ出す。

ポートサイドは新開地で、其の當時一萬一千餘人の歐人を加へて人口僅かに四萬餘人、レセプの銅と六百七十四尺のコンクリート造の燈臺の外には何等見る可き建築物もない。場末の土人の家は木の柱に木の梁を渡して外を泥や石片で無雜作に包んだ四角形のもので、雨がないから勾配ある屋根の必要はないのである。市街の家屋は煉瓦壁の建物の外に木で張り出しをして、その下を通行の出來るやうにコロネードになつて居る。そして其の二階三階は同じやうに張出し廊下にあつて外側に幅の狹まい薄い板を斜に網の目形に打ち付けてある、これは暑いから日光の直射を防ぐ爲めであらうが、またサラセン風の格子窓の簡單なものとも見られる。

市街の見物にもあきてカッフェ店に入つて時をつぶした、埃及のカッフェは土耳古のものと同樣で、三オンス程はいる手の付いた眞鍮の壺へカッフェの粉末を入れて湯を差して、ほど火に掛けて沸立つたものを小さな茶椀について出すのである、一緒に出す硝子のコップの冷水と此の香氣の強烈なカッフェとを一口づゝ交互にすゝりながら、埃及葉の卷煙草の煙をゆるやかにはく氣持は申分なくよいものである。こんなことをして隣の席でパタリ／＼とやつて居る此の地方特有の扇の音をきゝ、ながら愉快に往來を眺め暮らした。

時が來たので雜貨商の青年と馬車で貧弱な木造の停車場へかけつけた、カイロの下宿へ電報を打つて貰つて三等室へ乘り込んだ。三等室には一人の歐人も居ない、同乘者は孰れも穢たない服裝の土人許りであつた。あたりの景色を眺め乍ら行く、日沒の頃になると腰掛の上に坐つて肱を張つて手をついて平身してメッカ？の方へ向つて幾つとなく頭を下げて回教式の拜禮をする男がある、やがて日が暮れた、程なく月が出た、滿月の夜で油壺の中から出た樣な圓々たる月の上る有樣、下の方は一面にナイル河口の廣々とした沼池で蒲や葦などの生へて居る間に

月の光が映じ遠くへボートツと烟の樣に霞んで見える樣は何とも云へない大きな感を與へる、モーゼの母なるレビの娘がパラオの怒りをおそれて、葭(よし)で編んだ淺いかごに青瀝(チャン)と樹脂(やに)とをぬつて、生れて三ケ月の幼兒なるモーゼをこれに乘せて葦の中に置いたのは丁度こんな晩であつたにちがいない。葦の隈をすかしてきら〳〵と月にきらめくさゞなみが、レビの娘の金の腕輪のやうにも見えた。

イスメイリエ停車場迄六十基米の間はスエズ運河に沿ふて來た、これからは線路は別れて一つはスエズ方面に他は埃及內地に入る。停車時間が長いのでプラットホームに降りて步いた、屋臺店を出して辨當を賣つて居る土人から、英語が通じないので手まねで其の一つを買つた、辨當と云つてもパンの一切とチースの大きな塊である、汽車の中でもプラットホームでも外國人と思はないのか、外國人が珍らしくないのか一向注意して見る者も無い。十一時にカイロに着いた。停車場はポートサイドのものに比して遙に大きい、漆喰塗のサラセン風の建物であつた。

電報によつて下宿から迎えに來て呉れた、後で聞くと此の人も下宿人だつたさうだ。馬車でオエケル街と云ふ歐羅巴町のパンシオン・アメリケーンといふ宿屋に着いた。

入口を入ると食堂である、料理屋風に出來て居て戸を開けると食卓がならんで居る、突當りに勘定臺があり左手にピアノがあつた。

旅宿の主婦は伊太利人で中々愛嬌のある四十七八の女で、十六七になる跛足の娘と少し年長の妻君の姪と云ふのと居つた。丁度私が入つて行つた時には三四人の男が酒を飮んで居り、其の傍の卓では二三人が骨牌を玩んで居た、食卓の一人がヴアイヲリンを彈いて娘がピアノを奏でると、細君が若々しく樂器に合して足拍子を取る。

私は三階の部屋に案內されたが、直ぐ下に降りて食事を取つた。

客には英語を話す人はなかつたが、家の人では娘丈けであつた、日本語と英語と餘程違ふかなとゝは無邪氣である。寢臺に歸つたのは一時半であつた、恐らくは十六七尺もあつたらうか、天井の非常に高い室である。全體伊太利人の家は天井が高いが、それにしても之れは高すぎる。恐らく氣候の暑いためであらう。

がらんとして寢臺と衣裝戸棚と洗面臺の外何等の裝飾もない殺風景な室に今自分は立つて居る。電燈や瓦斯燈もない、枕元の燭臺の蠟燭に火をともす丈けである、寢臺は眞鍮の手摺の付

いたタプルペットで白い蚊張がついてあつた。何しろ外國人の宿屋に寢るのは其の夜が初めての事だ、何となく面白い感であつた。

此の眞夜中でも暑さがきびしいので、窓を開けた儘窓掛丈け下ろして殆ど裸躰になつて蚊張の中へ入り込んだ、餘り上等でない宿へ泊つたなさけなさに夜中南京蟲に襲はれて首すじから手足皆やられた。

四日、コンコンコロコロとピアノのやうな高い不思議な響きに目を醒して窓から外を見ると向ふ側の屋根にはもう日が當つてギラギラ光つて居る、丁度直下の往來で、ストリート、オルガンをやつて居つて不思議な響は其處から來るのであつた。

此のストリート、オルガンと云ふものは丁度カビネット・ピアノ位の大きさの箱に車が付いて居つて輕く運搬し得るやうになつて居り、箱の一方の取手を廻すとオルゴールの様な仕掛けで一種の音樂を奏するのである。丁度かど付けのやうにこれを押し歩いては所々でコンコロ鳴らして、あたり近所の家々から何程かの金を貰つて歩くのである。

歐羅巴の市街の四辻などではよく貧民の兒童が此の箱を取圍んで響に合せて足拍子を取つて踊り戯れて居る樣な有様を見る事がある。

自分は今此の軒下の光景に熱さもつかれも忘れはてゝ物珍らしく窓から首を出して居ると、オルガンの取手を廻して居る男が左手で帽子をぬいで氣取つて一揖して心付けを請求する、何がしかを投げてやるとまた丁寧に御辭儀して車を押して行つてしまつた。

さて今日は市街の見物をする積りである。カイロ府はナイル河の東岸にあつて、其西岸には、古王國の都メムフィスの墓地であつたあの大ピラミッドや大スフィンクスのある今日のギゼーがある。埃及人は此の市を Clere-Ohe と呼んで居る、これは戰場といふ意味から來て居るので、神話時代に南方世界の神なる光明神ホルスと、其の叔父に當る北方世界の神なる暗黑神セトとの戰爭をした古跡であるとの傳說に由來して居る。古王國時代には此の地はヘリオポリスの一郊外を形作つて居つたものである、希臘人は當時こゝをバビロンと呼んだ事がある、羅馬時代には埃及駐屯軍の營所があつた、紀元六四一年に回教王オマールが此の地を領して城砦や回教寺を建築したのであるが、今日の市街は九六九年に Fatima 統回教王 Muizz の大將 Gohar に依つて建設せられたと見るがよい、ゴハル將軍は盛に市の經營をなし、ナイルの泥で煉瓦を造り、今日の市の衞城の立てるマカタム岡より石を切り出し、又對岸の古王朝時代の都市メ

ムフイスの廢墟から石材を運び來つたものである。ギゼーの大ピラミッドの上皮の石をむき取つて、城壁に使つてしま たのは或は此の時の事であつたらう。丁度城の礎石を置く時に、あだかも火星が市の子午線を通過したために火星の亞剌比亞名の Kahira を取つて此の市に El-Kahira といふ命名をしたのだといふ事である。一八世紀末奈翁大帝は埃及遠征の際暫時此の地に滯在した。この時から歐人の埃及考古學の研究が初まる。

私の行つた折は、ナイル河に沿ふた市の凡そ三分の一が道路整然たる歐羅風の新市街で、これと反對の方が不規則な古い部分であつた。そして其の人口約六十二萬人、其の内外國人は僅かに五萬人で、多くは希臘人と伊太利人とである。土着の人種の大部分は埃及亞剌比亞人で、其の他はヌビヤ人、コプト人、土耳古人、アルメニヤ人、ユダヤ人であり、なほ亞弗利加黑人ビヅイン人、シリヤ人、ペルシャ人、印度人、其の他東洋各地の植民人を含むとの事である。

自分は先づ最初市街の大體の樣子を見たいと思つて、どこといふあてもなく案内記を手にしてブラリと表へ出た、二三丁行くと中央郵便局前の廣場に立つた、此處は目貫きの商業街で四方に電車が通じて居る、車蓋の低い吹き貫きの電車の引いきまが間斷なくガラ／＼と動いて居る、其の間を右往左往に行きから雌巣、赤い土耳古帽子に背廣服のハイカラ男、同じ帽子に同じ衣ではあるが土耳古風の下をくゝつた太い袴の男、同じ帽子に筒側の足の方へ長くパツと開いて居る亞剌比亞風の、黑や、青の木綿の衣服を纏つた男、さてはダブ／＼の黑い着物に頭を白布でぐるぐる卷き付けた男、是等の土俗の風をした人人は踵の無い柔かい靴をはいて居るか或は全く裸足である。女はと見れば孰れも銀や眞鍮の腕環、耳環、踝環などを付けて、顏には黑いかつぎを被り、鼻の上に木の棒に眞鍮の輪を箝めた一寸竹の節の所を短く切つた樣に見えるものを付けてそれを紐で後ろに結び、それからだらりと布をたらして眼ばかり出して居る、純粹な歐羅巴風をした男女は極めて少ない、季節が季節だからであらう、ピウ／＼と鞭を鳴してガラ／＼とやけに馳けさせる二輪車がある、埃り立つ路を山羊の皮袋に水を入れた物を背負ふて水撒きをして居る老人が有る。向ふから大きな硝子瓶にレモンの汁を滿して其の中に氷を浮かしたものを肩から掛け、眞鍮の鉢樣のものを二ツ片手に持つて鳴らしながらレモナーデ／＼と大聲に呼んで來る偉大な男がある、カラン／＼と賑ふ音のするのを何かと見れば首に鈴を付けた數匹の牝山羊を引連れて小僧がしぼり立ての乳を賣つて歩くのであつた、右からパラ／＼と早足しの驢馬に跨がつて、其の低い背からダラリと地に

近く足をたらした大男が來れば、左からはノツソリ〱と小山の様に動いて來る悠長な駱駝が通る。此の雜沓の中に立つて、ジリ〱照り付ける日光の下に、案内記を手にして香氣さうにあたりを見廻して居る男がある、之が自分だ。是迄寄港した南方支那から印度地方では、男は孰れも白の夏服を着て居つた、それで自分も今其の姿の儘下宿を出かけたのであるが、この地には白服を着て居るものは一人もない、我れながら自分の異様さが殊に目立つた。

四方吹き抜きの電車が風を切つて進む有様は如何にも涼しさうである。どれにか一つ飛び乘つてどこかの方向へ行つて見たい、幸い目の前にチタデルラ(衛城)行きの電車が來た、直ちに飛び乘つて案内記を繙き、地圖を按じて方向を定める。

やがて彼の有名なるスルタン・ハツサンの回教寺とリファイエの回教寺との間を通つて、ルーメレーの廣場の終點で下車した。

樹木の蔭もないじり〱とやきづく黄色な埃立つ路を上れば、其所が衛城である。城は古くは十二世紀の昔しから存在したもので、亞剌比亞史家の言によれば、ギゼーの小ピラミツドから採石して建てたとの事である。然し當時のものは僅かに東壁及び二三の塔だけに其の名殘を止めて、他は後期のものである。しかも今は全く廢城となつてたゞ其の一部に衛舍が置かれるのみであつた。

新門を入り外庭を過ぎ更に中門より進めば、其所は大中庭となつて居つて、ムハメツド、アリの回教寺が茲に建つて居る。其の周壁の北面の中央を入れば更にモスク前面の中庭に出る、そしてその周壁の内側は列拱で廻廊を形作り、廊の幅と拱を支ふる柱との間と等しければ、廊の天井は柱に依つて正方形のペーに別たれ、その上に一つ宛平たい椀形の小ドームが、ヅラリと並んで下から見通される。拱間から透し見た中庭は眼もくらめく許り明るいのに、茲は穩かな影を作つて靜かな畫面效果を引き起さしめて居る。

外には何等の裝飾も一つの窓もない平たい周壁、内にはどんな事があるだらうかと空想を大ならしむる周壁を置いて、其れのたゞ一つの入口を入れば、其所には降りそゝぐ強烈な光線が、一面に敷きつめられた白大理石の敷石に當つてパツト反射する其の燦爛を展開せしめ、これに浴して後初めて、靜かに冷く淡暗き神秘の殿堂に入らしむる、しかも餘りに明るい光に眩惑せられた眼は、しばしは殿堂内に於て何物をも捕へる事は出來ないが、やがて徐々に幻影のうすらぐに從つて、紺地に金のモザイツクの天井、それは起原に於て夜の星の空を象徴したものだと云ふ天井から、林立せる貴重石の柱、其間に降りそゝぐ明り

様に天井から下がつて居るランプ釣りの線條、床の幾何學的模様の敷石から奥の祭壇までが、朧に顯はれて來る樣に仕組むのが是等の殿堂の慣用手段で、古くは古代埃及から西は羅馬、東は亞剌比亞から支那日本あたりまで及ぼした傳統的の建築術である。

　モスク中庭の中央には水屋(みづや)がある。今此のモスクにあ　ものは八角形のもので、アラバスターの噴水と呼ばれる。勿論八角形の石造の建築物の周圍に、下から二尺五六寸の所に並んで水口(コツク)が付いて居り、其れを捻ると水を出し、口や手を清むる事になつて居るので、其八角の周圍に張つてあるアラバスター石か實に美事なものであつた、譬へば瑪瑙色をしたアルヘー樹の延板と云はふか、表面は滑らかに磨かれて、半透明の白い地へ其飴色の木目形の斑紋が溶けこんだ有様、ダイヤモンドやルビーが裝身材料の寶石であるならば之れは又建築材料の寶石と云つてよからう。

　モスクの内部の一般は既に述べた所だ、特に此のモスクに付て解說すれば中央にビザンチン風の大ドームが掛つて之れを四つの圓柱が支へて居る。圓の周りは高くアラバスター石で張つて有る、そのためこれが一名をアラバスターモスクと呼ばれる。ドームを中心として同心圓形に大きな金屬製の輪が天井から條線で低くつるされて、此れに種油の小ランプが無數に付いて居る有様は、如何に人の心を引き付けて是れあるに依つて益々其の堂を大きく感ぜしめる。

　モスクの東南の戸口を外に出ると、其處にはジツと手摺形に胸壁(パラペツト)が廻つて下は切つ立つた石壁、此處よりの眺望は實に見事なものだ。直下のサルタン、ハツサンのモスクの屋根から起つて黄灰色の町が、北西南の三方に廣がる、其の所々にモスクの圓頂屋(ドーム)や、モスクの四方に地上から立てられた小尖塔(ミナレツト)が頂　出して居り、家々の陸屋根の頂上には無數の通風器が付いて居る、その通風器によつて涼しい南風を室に導き入れるものであらう。町端れの方には黄灰色の甍の間に綠の色が段々と增して行つて、ナイルの兩岸は一面に綠色に彩どられ、更に對岸の向ふは綠の間からだんだんと黄色に砂丘が霞の内に消へて、ピラミツドは腰の方をぼかして其の尖つた頭丈けを出して居る。右手の三ツがキゼーのピラミツドで、左手に遠く五つ見えるのがサツカラ邊のものであらうか。南方の足下には籠を伏せた様な小さいドームが幾個も見える、之れが、マメラウクスの墳墓である、やがて其處を離れて此度はモスクの東北に出た、此の方では城壁の一部をくづして石を採掘して居つた、中央の天守へ登つて下のドーム形の屋根を見ると、荒い煉瓦を泥土で無雜

作に積んだものである、此所でアラビヤ文字の飾りを彫りつけた大理石の軒飾りの破片と煉瓦の一つを番人から得た。

次に四角な坑で周圍に石の廻り階段の付いて居る深さ約五十間と云ふ所謂ヨーゼフの井戸を見て、そこから他の城門へ出た、玆にはまた門の扉が完全に付いて居る、日本の城門で見る様　筋鐵張りの處が面白い。

城を出て更にルーメレーの廣場にもどつて其所の腰掛で暫く休んで、サルタンハッサンのモスクを見た、之れは亞刺比亞式建築の内の最美のものの一つで、一三五六から四年掛つてサルタン、ハッサンの建築したものである、建坪二三六〇坪で今尚一方に建増をしてゐる、こう云ふ様な所は孰れも入口で切符を買つて入るのである、見物のくだ〳〵しい記事はやめて次の事だけ書付けて置く、八十五尺の高さの入口のある事、内部の壁の裝飾には六分位厚さの大理石の板が竪張りになつて、色は重に、白、黑、赤で一つ置きに張り分けと云ふやり方、白と黑は何んともないが、其の他の色のものは風化作用を受けてはぜて居る事、赤花崗石の大柱もまた表面がはぜて居る事、亞刺比亞風の幾何學的の模樣を打ち出して之に金銀の線を鏤ばめて形容し難い程美華な青銅の扉のある事。

リファリエのモスクの見物は他日に讓つて中へは入らなかつた。そして電車通りから橫町へ曲つて其所の古い亞刺比亞町を見た。孰れも二車を並べて通し難い狹さで、兩側の家から突出した算盤玉繋ぎの格子戸を有するバルコニーは殆ど相接して居る、道路の大部は土の儘で石敷きの處は殆どない、町の辻々には戸外に机を出してジヤラ〳〵と錢を鳴して居る兩替屋がある、支那あたりにもこんな風俗があつたやうと思ふ。

宿に歸つて晝飯を食つて居ると、赤い土耳古帽子にピツタリと合つた歐風の軍服を着た洒落れた士官が左手で長劍の束を握り右手に長い毛の拂子を持つて入つて來た、此の拂子は此の地に多い蠅や埃を拂ふためのものか、往來でよく之を持つた人を見掛ける。士官は自分の脇へ席を占めて食事を取りながら自分に話しかけた、墺太利人で埃及の警察官をして居り現にピラミッド警察署長を務めて居るとの事、見た所二十歳前後の青年だが若い警部長もあるものだと思つた。

警部長は今日の午後一緒にピラミッド見物に行かないかと云ふ、案内者がうるさいから自分と行くのが便利だし、それに自分は晝飯は此の家で取るが、宿はピラミッドから少しはなれた岡の下の土人の家にあるのだから、見物後自分の所で茶を飲もうではないかと勸める。好都合と思つたから一緒に行くことを約束をした、馬車に乘つて博物館の前 過ぎてナイル河に

られた獅子の親柱のついた大鐵橋を渡つた、三角帆の舟の、竹のやうな形をした帆柱が岸邊に繋つた椰子の前に無數にならんで居る、　電車の窓から左に三ツつピラミツドが見える。最も前方にあるのが大ピラミツドである。大ピラミツドの麓から五丁程手前が電車の終點で茲で車を降りた、附近には巡査派出所と郵便局と小旅館と二三の掛茶屋風の休み場所がある許り、此の附近の低地には少しは木蔭もあるがピラミツドの方を見渡すと茶褐色の丘陵が起伏して居る許りで樹木と稱すべきものは殆ど一つもない。

ピラミツド巡りのために驢馬や駱駝の口を取つてアラブからるさく付いて來て自分等は驢馬を撰んだ。

大ピラミツドの下へ驢馬の頭を列べて立つた時には、若かい士官は士宜丈けの知識を話す、斯う云ふ大きな石の山とも云ふ可き無用の長物は今日何等の役に立つ物でない、されば埃及政府も不日之を取毀つて或る工事に使はせやうとして居ると、これには自分も噴き出して答ふ可きすべを知らなかつた。今から考へるとなぜこんな事を士官がいつたのか殆ど諒解に苦しむ、今でも士官の名刺を所持して居るが、たしかにピラミツド警察署長と立派に印刷してある。

此のピラミツドは今を距ること約四七〇〇年前「尤も人によりては此の年代に多少の相違がある）の王たるクフの墳墓である。此の時代の王の墳墓は悉く此の形式に依つたもので、著名な王の墳墓は其の名に伴つて大きい。それは王が位に即くや直ちに或る大さの設計に依つて墳墓の工事に取りかゝり、丁度日本で俵を積むやうに段形に石を積み上る。若し王が非常なる權力を得て其の長生を樂しむ樣になると、更に年々其の計畫を大きくして行つたもので、斯ふいふやうにして斯くの如き大いなるピラミツドが出來たのである。全體は約三尺の段形に積まれたる帶黃色の石灰岩から出來て居り、それは此の附近の化石を含んで居る地質から採堀したものである。此の段形の石灰石の上に、當時はナイルの對岸十哩餘のマカタム岡から切り出した大理石で平滑に被はれてあつたものであるが、前にも述べたやうに或る時代に亞剌比亞人に運び去られたのである。各邊正しく東西南北を向いて居る。そのために最初佛蘭西の學者は單に天文臺として建てられたものと觀察したものだそうである。周圍は大部分砂に埋まつてあるが、一部其の基礎迄掘出されてある所があつた、其の面積一萬六千三百八十四坪である、國技館の總坪數が九百十四坪であるから、約これの十八倍と見てよろしい。高さは四百八十二尺（今日のは上が壞たれてあるからそれより少し低い）これに用ゐられた石の總花數六百八十四萬噸、こ

れを汽車の七噸貨車に積めば鹿兒島から釧路迄の鐵道の幹線上に並べて其の二倍を要する。遠方から眺めるとなるほど大きい、しかしそばに寄つて見ると左程に見えないものである。それにしても斯う數字をならべて見るとまた其の廣大なのに驚かれる。紀元前五世紀の彼の有名な希臘の史家ヘロドツスの記事に依れば、クフ王は此の大ピラミツドを築くに、先づ十萬の人を三ケ月間使役して十年を費して、ナイル河より此地に至る幅十間の石造の大道とピラミツドの地下室（王棺を安置する）とを作り、更に十萬の人を年々三ケ月間使役して十二年を費してピラミツドを完成したとある。實際計算して見るとこれは事實で、年々三ケ月といふ事は丁度ナイルの氾濫期に當る、恐らくは此の期間には農業が不可能であつたために、其間十萬人が石の運搬に當つたもので、石切場の仕事は此の人數以外であつた筈である。斯う考へて見るとまた人間の偉大なる仕事といふ感が殊に深くなる。

正しく西南に走る一直線上に、殆ど其の各對角線を置いて大ピラミツドと一列に並んだ第二第三のピラミツドの麓を廻つて、今日では殆ど地下に造られたものかと思はれたほど砂に埋もれた花崗石（グラニツト）殿堂を見て、其の隣りに大ピラミツドに近く横はる人獅身像（スフィンクス）に近づき立つた。像は太陽神を象徴して作られた物で、恐らくは第二ピラミツドの建設者タフレ王の時の作物だらうといはれてゐる。もとは頗る端麗たる容貌を持つて居つて、代々の埃及王朝下つては希臘羅馬時代に於ても、賞讃と崇拜の的となつて居つたものであるが、ムハメツド教の教徒を極端に行つて偶像破壞の熱を逞しうした所のサルタン・マメルケスのために標的となつて、いたいたしく此の様に鼻と鬚とが缺け落ちたものである。その上多くの年月、風露の爲めに首は細まり、他にも毀損した所少くはないが、往古其の顔面に塗られた紅色の色彩は、今日なほそれをしのぶ事が出來、其の輝ける眼の表情笑みを含める口元は如何にも莊嚴であつた昔の様子を想像する事が出來る。私共の中學あたりで用ゐた地理書には、砂上に首ばかり出した此の像の圖が掲げられてあつたものだが、今玆に來て見ると全部が堀り出されてある。昔しから屢々砂漠の風に屢々埋もれ又屢々堀出されたといふ事が記録にある。これは此の地に生へぬきの小山から刻り出して作つたもので、前足を横ふる臺の上から頭の頂迄が六十六尺、前足の端より尾の付け根までが百八十七尺、顔の廣さ十六尺六寸といふ大さである。私等の此の前に立つた時、恐らくはこれも案内者であらう長く裾に屆つた黒衣を着て、頭に白のタウバンを卷いた亞刺比亞人が此の上にあつて、

一人は立ち一人は屈んで私共を呼んで居つた。

此所は前にも述べた通り古王國の王都メムフィスの墓街（ネクロポリス）であるから、附近には第四第五王朝時代の墳墓が無數に有る、地上に表はれて居るのもあるが、現に地面を鐵棒で上から突いて見て穴の内部迄通る所へは印が付けてある、此の如き墳墓が數限りなくあつて一方から順次に發掘をして居る。

案内者が大ピラミット内部の見物を勸める、言葉に動かされて士官とは後から其の家を訪ふ可く約束をして、自分一人引き返へして入る事にした。案内者の一人が蠟燭を持つて先に進み、二人が頭と手を抱へ二人が足を擔いだ、斯んな事をせずとも自由に入り得るのであるが彼等は金の爲に餘計なことをするのである。道は勾配をなして段形に刻んである、併し之れを構成する花崗石は頗る滑かに磨いてあるので油斷すると辷つて倒れる懼れがある。道には黄色い埃が積つて居つて歩む空氣の動揺に連れて埃は濛々と立ち昇り蠟燭の火も淡暗い有樣である、擔いで行かれる窮屈さと、蒸暑さと、埃でむせる苦しさ、軈がて大分進んで行つたが、刻一刻と不安の念が嵩じて來て、此の上進む事が嫌になつた。五人の雲突く許りのアラブは何を言つても解らないのか一向取合はぬ。無理に引返す事を命じて漸く出口へ戻つた。外に出てから彼等の慣用手段で何かと約束以外の金を請求する、よい加減に切りぬけて士官から書いて貰つた地圖を當てに、砂丘を上つたり下つたりして其の家へ驢馬を急がした、今から思へば駱駝に乘らなかつた事とピラミッドの奥を究めなかつた事が殘念でならぬ。若し駱駝に乘つて居つたなら、定めし意氣揚々と此所のテント張の寫眞屋に、勇姿の撮影を命じた事であらうし、ピラミッドの奥を究めたなら、もつと衒學的の講話が出來たであつたらうものを。

士官の家へ急ぐ途中驢馬から一寸下りた際に、路傍で貝の化石を拾つた。軈て土人の村に着いた、村の家屋は壁の内部に木で大體の骨組を作つて、其れを包んで直徑七八寸の割石を泥を以て無雜作に積み上げ、入口の所だけを比較的丁寧に仕上げた四角な箱のやうなものである。少し上等なのが入口の所を切石積にし、或は壁面に泥を塗り或は更に其上に漆喰を塗つたものである。

屋根は普通一尺五寸間位いに木の丸太を壁上に水平に並べ其上にこれに直角に天井板を竝べて更にその上に泥を載せたものである、軒を壁面より一尺位突き出したもの、軒を出さずに泥で箱形に塗りつぶしたもの、或は壁の頂より屋根を一段低くして一方に二本位の水抜きの管をつけたものなどがある。入口の戸は多く軸摺りになつて居る。是等の家屋の一團の内に漸く土

官の家を尋ね當つた、前に述べた樣な入口を入つて其室に通された、下は十人の家族の居室で其部屋借りの二階へ通つたのである。見渡せば粗末な歐風の寢臺其の他二三の家具がある許りで殆ど裝飾といふものがない。

茶を啜りながら種々な話しをして居る中、日本の茶は苦いものだと云ふ話が出たら、それだから色が黑いのだらうなど、眞面目である。茶を飲むと色が黑くなるとは獨り日本だけでいふ事ではないと見える。先程拾つた蟹の化石を見せると、ピラミツト附近で拾つたなら之れは昔墳墓に納めた彫刻だと云ふ。そう云ふものなら面白いだが之れは實は化石であると種々說明してやつたが解からぬらしかつた。何といふ無學な士官だらう、服裝と風采とはこんなに立派なくせに。

士官が云ふには、若し墓から掘出したものが欲しいなら、家の阿爺が澤山持つて居るから呼んで御目に掛けやう、と云ふので阿爺を連れて來た、軈て床の上に並べたものは、から〳〵になつた木乃伊の頭――それには眞紅な毛があつた――だの壺の破片だの、小さな燒物だの人形だの、土燒のランプなどであつた。尤も埃及では極めて巧妙な模造品を賣て居るので往々にして欺かれると云ふ話できるから一寸不安に思つたが、士官も保證をするし、完全なものが一つもないのを見ても僞物でなさそうに思はれるので、其の中人の頭になつて居る石壺の蓋と、コプト人の使用したランプと、小さい青いウシヤブチ人形とを買つた。歸途には士官が停車場迄送つて呉れた、大ピラミツドの處を過ぎる頃には既に日が落ちた後で、最早あたりには案内人だちの影だもない、月が遙かに砂山の上に顏を出し掛けて居る。急に涼しい風が吹いて來て、踏む足も輕く空は澄み渡つて居る、恐らくはカイロに住んで居る歐人であらう、若い婦人の一群がひら〳〵と白い袴を飜へし乍らピラミツドの頂上から降りて來る、晝間ピラミツド登りをするにはどうしても案内者に手を引いたり尻を押したりして貰はねばならぬ事になつて居る。然るに今見ると十四五の小娘すら人に助けられながらも降りて來るのである。之を見ると幾段でもよいから登つて見たくなつて、進まぬ士官を促して十二三段許り上つた、歸りの綠がれる事ではあるしそれ丈けで中止して、兎に角ピラミツドへ登つた事にきめた。

停車場へ着いた頃はもう路がシツとり濕つて居つて少し寒い位であつた、掛茶屋の表庭の卓上で綠の葉の繁りを通じて來る月の光で別れのビールを傾けた。非常に氣が澄んで風が冷かで叢には虫が鳴いて居つた。

宿に歸つて遲く夕飯を取り食後市中を散步してカツフエー店

に入つて例の如くあたりを眺めながら濃いカッフエーを吸つた。傍では例のパタリ〳〵と將棋をさして居る、中には長いゴム管から硝子瓶　水を通じて來る煙草を味つて居るものがある、あちこちの卓でガヤ〳〵と話をして居る男連、人道にはそろ〳〵と行き來の人々、富籤賣り、繪葉書賣りが幾人となく卓の側へやつて來る。カッフエー店にはオーケストラがあつてそれにつれて正面の一段高いプラットフオームの上で若い美人が唄を歌ふ、唄の相間〳〵に若い女が盆を持つて金を集めに來る。十二時近くに歸つて床に就いた、例によつて南京虫にせめられた。

翌日は朝の内博物館の近くの公園に遊んだ、中々よく整理の付て居る公園である、不思議に感じたのは鴉の頭と羽丈けが黑くつて腹と背とは灰色をして居るのだ。コロンボで見たのも多分態んな鴉だつたと思ふ。雀も又日本のものと違つて全體の色合が汚くつて頭が灰がかかつて居る、埃の色が鴉や雀をして自然に斯くならしめたものか。公園で充分朝の空氣を吸つて宿に歸つた。今日は古代品博物館を見るつもりである、スケッチ帖と拓本のための墨肉と薄美濃紙を用意して出掛けた。すばらしい大きな博物館であつた、古代埃及ものに加ふるに古代希臘のものが陳列されてある、何丈といふすばらしく大きな石像か

ら、二三分の小さい裝身器に至るまで、整然と陳列せられた斯んな大きな博物館を初めて見たのであつた。室が大きく天井が高いものであるから頗る涼しい。渇を覺えて門番の老爺から、あの水を入れて日蔭につるして置けば、外側にしみ出した水分が蒸發するにつれて熱を奪ふ爲に内部の水は氷の如く冷たくなるといふ、此素燒の壺に貯へられた水を貰つて飲んだ、水の味も忘れられないが、太い所で徑六寸計りの腰の縮つた、そして口徑は一寸五分位であつた、丁度よく古びのついた此壺の形が今でも目前に彷彿する。一日博物館で暮して、歸りがけに此の種の新しい水壺を求めて今でも所持して居るが人に見すべきやうたものでもない、骨董店で欲しいウシャブチ人形と古い亞剌比亞壺とを見たが遂に買はなんだ。此の夜は早く寢つて勞れを休めた。

次の日も次の日もまた次の日も滯在した、そして亞剌比亞博物館や、大學や宮殿や、またモスクなども見た、何にしても暑さは暑し、夜は虫に攻められるといふので、大分に健康も損じたし思考力や記憶力も鈍くなつた。まだ少しはナイルの上流に行く可き日數もあつたが、殘念乍ら思ひ切つてアレキサンドリヤに出た。玆では都合よく良いホテルに宿る事も出來たし、それに此の海岸は涼しかつた。希臘人と伊太利人との多い此の市

街はカイロより見事なものであつた。夜の散歩は殊によかつた。名所舊蹟もトレミー時代から羅馬時代へかけての見る可きものが中々多く、希臘羅馬藝術のよい博物館もある。そして玆にはまた氣のきいた日本人の若い雑貨商が居た。水泳もした。娛樂館（カジノ）で日を暮したこともあつた。自働車で郊外のドライブもした。しかしもうそんな記事はやめよう。なぜといふに自分はカイロの第一印象を書けば澤山なのであるから。たゞ少しばかり最後に、眞つ直ぐな大道よりも曲りくねつた小路、快適なホテルよりも不便ながらも小さな下宿の方が、旅の心に寧ろ强い印象を與へるものである、といふ事を述べて置く。

近代式模範都市「伯林」

法學博士　渡邊鐵藏

何處の國でも首府は其國の國民性や、文明や、藝術や、其他の物を代表するものであるが、伯林は獨逸聯邦の首府ではあるが、いろいろの意味に於て獨逸國の代表であると云ふ事は出來ない。それは伯林が未だ割合に新らしい街であると云ふ故もあるが、獨逸は其國柄が聯邦であるから、それぞ〳〵の國が孰れも各々その首府を持つて居り、又ハンブルグや其他ハンザ同盟以來の自由都市も各獨特な歷史的な發達をして來たのであるから、各國家の首府や之等の街はそれぞ〳〵地方的の歷史的の色を以て一部の代表をなして居る。

斯樣に伯林は必しも獨逸國を代表する街とは云へないが、此街を見れば獨逸人に共通な特性はよく窺はれる。街の建設にも共同生活にも、科學と秩序と組織の應用せられて居る事は何人にも直ちに肯かれる。後藤男爵は近頃頻りに科學と生活との接近と云ふ事を唱へられるが、獨逸人の都市、獨逸人の生活には遺憾なく之れが行き渡つて居るのである。伯林は其代表的なもので、最も近世的な、最も完全な都市と云へる。譬へば伯林では建物の高さも殆んど一定して居て、街並が整然として亞米利加の都市のやうにスカイスクレーパーが無作法に、我儘に振舞つて居るやうな樣子はない。無暗に高い建物を亂雜に作る事は「近世的」ではない。寧ろそれは野蠻と無規律の表現である。文化的の國では皆公共の利益のために建物の高さを規律するやうになつて居る。此頃では流石に無鐵砲の米國も漸く目醒めて、建物の高さを規律するやうになつて來た。此樣な點に就いても規律心の嚴つい獨逸人の特長は直ぐに表はれて來る。伯林では建物の高さは路の幅までとし、猶ほ最高限を七十二呎と定

めて居る。從つて土地をなるべく經濟的に使ふために、六階建の建物が最も多く作られるやうであるが、良い區域へ行くと五階建位の建物がずらりと並んで居て、同じやうな家が家並を揃へて數町の間凡帳面に整列して居る有樣は、見ても寔に心地よい。又路幅も一定の規律があつて、且つ道路の系統は一定の計畫の下に作られたものであるから、街筋が徹つて方々への連絡も頗る便利に出來て居る。そして全市が大部分新らしいのであるから、道幅も家の高さも一律に出來て居て、何の方面へ向いても街外れの方へ歩いて行くと市の中心から直線に大道路が放射線的に郊外と連絡して居つて、家並も兩側とも同じやうに續いて行く。そして街外れに行くと道路は猶ほ續いて居るが、突然家がなくなつて、地均らしをした敷地か、畑や野になつて了ふ。日本の都市の街外れのやうに、家が段々小さく汚なくなつたり、疎らになつたり、又愈々郊外に出てから粗末な遽か普請の家があちこちに、ちらほらと亂雜に建つて居るやうな、無秩序、無方針な有樣は到底見かけられない。此整然と立並んだ建物は、勿論頑丈で耐災害的に出來て居るが、最下階は多くは店になつて居て、それ以上が住居になる。一階毎に別な家族が住み、又同じ階にも數家族が住めるやうになつて居る。吾々が下宿する時は其家族の持つて居る室の中の一つを借りるのである。

斯して建物も經濟的に利用され、生活上にも便宜なやうになつて居る。伯林の道路が隅から隅まで鋪裝されてある事は申すまでもないが、其掃除もよく行き屆いて居て、自分が初て伯林に着いた時も卷煙草を啣へて往來へ出て、其捨て場所に困つたやうな有樣である。毎夜々々水で道路が掃除されるが、其後は街燈の光がキラ／＼と映る程で河の面のやうに美しい。個々の建物に就いても内部の設備が總て近世的、科學的に出來て居る。ロンドンの家のやうに來客が訪れた時に鐘で叩くやうな傳統的な舊式な設備は遺つて居ない。煖房裝置にしても獨逸式の密閉した煖爐は、既に英國式の開いた煖爐より經濟的であり、衞生的であるに相違なく、吾々は又頗る優雅にも亦氣持よく感じて居たのであるが獨逸人は遠慮會釋なく近世式の煖房裝置に代へて行つて、今では大抵中央煖房裝置で蒸氣を送つて室を煖める事になつて居る。之れなども一つの釜で十數若くは數十家族の住んで居る一つの建物の煖房が出來るのであるから、經濟的でもあり、手數が省けて便利で且つ衞生的である。生活改善、經濟的科學的の生活と云ふ事がどんな物にも行き亘つてゐる。此樣に伯林の建物や内部の設備は年毎に近世式になつて行くのであるが、今まで新らしい建物は住宅でも勿論昇降機がついて居るが、更に近年の建物になると其昇降機が自動式になつて1、2、

3など丶番號のあるボタンを押せばひとりでに自分の欲する階に行つて止まる事になつて居て、頗る便利に出來て居る。要するに伯林の街や生活は一口で評すれば近世式、文明式、獨逸式と云へやう。ロンドンから伯林へ來ると、整然として居るのと、新らしいのと、何となく明るい氣持のする事を感ずるのであるが、街に遊ぶ子供達も割に新らしい清潔な着物を着て居る。之れは英國人は家でも衣服でも品質の好いもの、趣味のあるものを用ひるが、改良とか清潔と云ふ點に於て獨逸人程行屆かない故であらう。獨逸人の清潔癖は恐らく文明國人中でも第一等であらう。それは國民性であるかも知れぬが、例の衞生思想の普及宣傳で此樣に仕つけられたのかも知れない。但し此度の戰爭後の狀態は之れはまた特別である。

伯林の街は科學的ではあるが、藝術的でないと云へる。家並や構造が餘りに劃一的であると云ふ事、重要な個々の建物にも特に美術的に推賞すべきものがないと云ふ事はパリなどに比較して恐らく劣つて居ると云つて宜からう。セーヌ縣知事ホッスマンに依つて行はれた大改造、都市計畫は大規模のものであるが、單に實用の點のみならず、頗る藝術的に出來上つて居る。エトワール廣場、シャンゼリゼーやコンコルド廣場や、アンバリードなどの相對應した藝術的の組織や、パンテオンやトロカデロや、アンバリードのやうな藝術的な建物は伯林には少ない。

伯林の代表的な建築物は王城のあるスプレー河の川中島に集中して居るが、其王城や、博物館や、繪畫館は素人目にも建築美術上餘り感服したものではない。殊に其處にある「ドーム」はチーアガルテンの一隅に在る帝國議會の建物と共に最も醜くい建築の代表的のものであると云はれて居る。殊に其國の藝術の代表として總ゆる精神的の能力と巨費を投じて建築せらるゝオペラ劇場の如きは到底パリのオペラと比較すべくもない。又美術館の內容を見ても繪畫彫刻等に餘り秀れたものが見當らない。之れは一方獨逸が新興國であり、ベルリンが新らしい街であり、又必しも實質上聯邦の中心地でないために、歷史的の大藝術が集つて居ない故もあらうが、獨逸人が未だ此方面の藝術に對して十分の能力を發揮して居ない事に依るのであらう。繪畫や彫刻のやうな造形藝術には獨逸人の天才は見受けられないが、併し文學とか音樂の方面に於て大天才の輩出した事は何人も認める如くである。ベートーベンや、ワグネルの偉大な力は伯林に多くある音樂堂や、有のオペラ劇場や、クロルのオペラ劇場で沁々と味ふ事が出來る。オペラの建築は粗末ではあるが、其內容に就いては獨逸人は大いに誇るに足るのである。音樂は形に現はれないものであるから、伯林の街を步いても頗る無趣

味に感じるのであらうが、それで直ちに獨逸人を非藝術的の國民、ベルリンを非藝術的の街とも云へまい。此頃「音樂のない國」（ランド、オーネ、ムジーク）と云ふ本が見當つたので繙いて見ると音樂の事などは殆んど書いてなく、イギリスの國民性、社會狀態を觀察批判した本であつた。此點では獨逸人は反つてアングロサクソンを無能力者のやうに考へて居るのである。

藝術的でないと云ふ點に於ては、ロンドンやニユーヨークこそ最も其譏りを受けるであらう。兩者は孰れも海港として發達して來た者であるから街にも其色彩が現はれて居る。ロンドンの煤烟に黑くなつた、狹苦しいビジネスタウンは、僅かにテームス河や、ロンドン塔や、冬の深い霧にその藝術的の情調を繋いで居る位のものである。ニーヨークのスカイスクレーパーを見る者はその無作法に只呆れる計りであらう。

伯林の街が藝術的でないと云つても綺麗な街は澤山ある。否、恐らく伯林の新らしい街の全部が綺麗な街と云つてもよからう。殊に幾つかの街筋の集つて來る廣場には立像があつたり、噴水があつたりして、其周圍に芝生や花園があつて寔に美しく出來て居る。一寸した休み場、小供の遊び場としては寔に好い感じを與へる。伯林の中心を橫斷して居る有名なウンターデンリンデンの街は丁度三十三間堂を縱にして容れられる丈けの街幅があるが、兩側には第一流の商店が其飾り窓を美しく飾り立てゝ建ち並び、車道には植樹帶があつて、寔に廣々とした心地よい街である。此街と最も繁華なフリードリッヒ街との交叉點が伯林の中心であつて、ロンドンのピカデリー、サーカスに當る所である。此ウンターデンリンデンの兩端には皇太子の宮殿や、大學や、圖書館や、遊就館や、大使館、オペラハウスなどの公共的な建物が集中して居る。此街の一端に在るブランデンブルグ門は、パリの凱旋門に似たやうなもので、伯林人の誇りとして居る建築物で、ドリック風の柱で通路を幾つかに分けたかなり立派なものである。大學はフレデリック二世の弟のヘンリーの宮殿であつたものを下賜されて千八百九年に大學の建物となつたものである。學生聽講生を合せると其數一萬に及び流石は學術國の一流の大學であると肯かせるのであるが、其構內の建物は餘り立派なものではない。日本の大學の方が餘程堂々として居る。伯林の新らしい部分、シヤロッテンブルヒ、ウイルマースドルフ、フリーデナウなどは皆新しい住居地として頗る美い街であるが、殊にシヤーロッテンブルヒのビスマーク街は伯林の中心にある大公園チーアガルテンの一端から、郊外グリューネワルドに連る大道路であつて、人道、車道電車路、自動車路、植樹帶、左右兩側に分たれて寔に整然とした美しい街である。

之れ程整頓した且つ美しい街は恐らく何處の大都會にもあるまい。パリのシャンゼリゼー街が廣さと美しさとで之れに匹敵するのみである。此街は普佛戰爭の償金の一部で作つたといふ話を聞いた。

ベルリンの中心にチーアガルテンと稱する面積七十七萬餘坪もある大公園がある。上野公園の三倍餘の廣さで、中には大きな池があつて、舟を浮べて遊ぶ事も出來れば鬱蒼と茂つた林の中に都合よく散步路がついて居て、市民が群り遊ぶ所であるが、一隅にはツエルテーと稱する平民的な大料理店（カッフェー）があつて、其數は五つばかりあつたと思ふが、孰れも數千人を容るゝに足る大いさで、夏などは「カッフェー」付きの樂隊の奏するかなり好い音樂に耳を傾けながら、市民團欒してビールやカッフェーを飮みながら談笑に日を暮らして居る。此チーアガルテンは伯林の肺藏と稱せられて居るが、實に其言葉の通りで、伯林人は此大公園に依つて保健慰安の上からどれほど利益を被むつて居るか知れぬ。東京の日比谷公園は此公園の十四分の一位の廣さしかないのであるから、現在のやうな混雜を來すのであるが、せめて今の四五倍位の廣さがあれば、どれ程市民が有效に利用し得るか知れない。チーアガルテンの池でも、パリの「ボア・ド・ブーロン」公園の池でも皆舟を浮べて樂しく漕ぎ廻つて居るが、上野の不忍池なども此樣な設備が出來たならばどれ程市民が喜ぶ事であらうかと常々思ふ。此公園の一端にチーチスアレーと云ふ特別に美しく飾られた路がある。其路傍には三十二の歷代のプロシヤ王の大理石の立像があつて、其後には各々其當代の偉人二名の胸像が飾つてある。此設備は總て皇室費で作られたものであるが、此路の一端帝國議事堂の前に聳え立つて居る戰勝紀念碑と共に、國民の愛國心を刺戟する手段として作られたものであらうが、なかなか美しく出來て居るので、外來者は必ず此處へ案内されるやうである。

チーアガルテンもビスマーク街の一端に在る郊外のグリューネワルドの大林野も共に皇室の所有財産であるが、人民に古くから開放されて居るものである。此グリューネワルドは廣袤千四百萬坪あつて、東京市の三分の二位の廣大なものであるが、日曜日などには伯林の市民は辨當持ちで、地下鐵道を利用して此郊外に出かける。林の奧深くさまよつて一日を遊び暮すのであるが、此林の一部分のハレンゼー驛の近方は美しい別莊地になつて居る。伯林は一流の世界的都市の中でパリに次いで最も人口の稠密な都市であるが、チーアガルテンが伯林人を適度の密集狀態の弊を幾分救濟し、グリューネワルドは更に其後援者になつて居る形である。日本の大都市の郊外にも廣い野原はある

が、樹木のない所も多く、殊に特別散歩路も、休息の設備も、亦適當な交通機關もないから、市内に十分な公園を持つて居ない市民は郊外に於ける清遊を樂むにも矢張不便を感ずる有樣である。

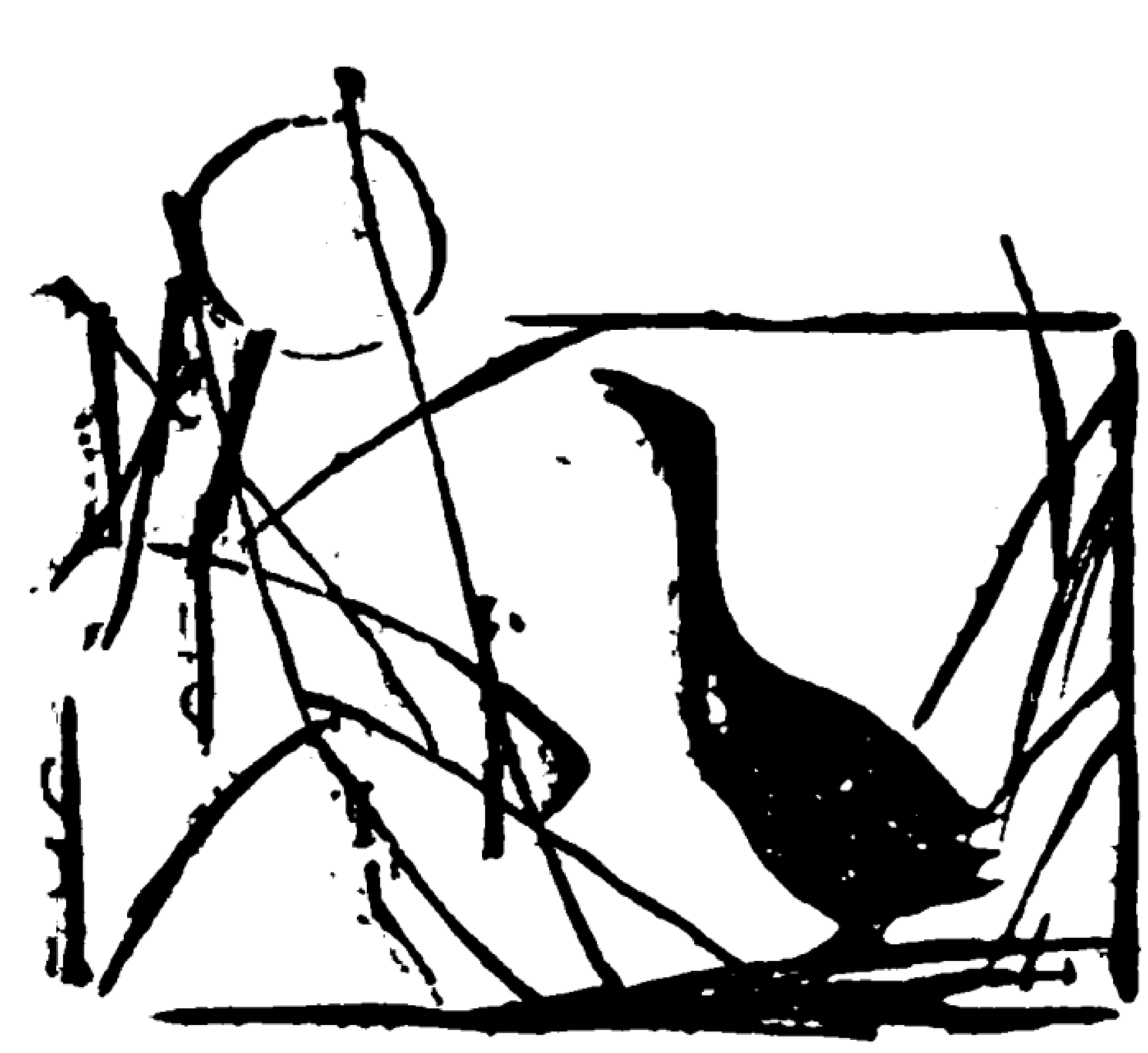
あの整然とした綺麗な伯林の街は、如何に科學的な組織的な獨逸人でも餘程の大決心と巧妙な手段とを講なければ出來なかつたのだ。最初伯林建築協會と云ふのが大規模の計畫案を立て伯林の中心から半徑十五哩の區域に渡り、百箇の町村を含む範圍に道路網を定め、各方面の交通に適當する路幅、自動車、自轉車、徒歩者等のために路の區劃、新らしい鐵道の連絡、電車、運河、埠頭を計畫し、住居地域、工業地域を特定し、之れにそれ／＼公園、庭園、池、小供の遊び場等を附屬せしめ、又運動場、競馬場等を定め、又公共の建物、寺院、圖書館、博物館、學校、劇場、體育場、水泳場、浴場、及び病院等に必要なる場所を保留して、大規模に都市計畫案を立てたのである。此建議に基いて伯林に特別法を以て交通及び都市計畫局が成立して、其具體的設計に基いて今日の大伯林が漸次に建設されたのである。其後は如何なる方法で何人が建築をするにしても此の大計畫案の一部分として行ふのでなければ許されなかつた。從て彼の整然たる市街が理想的に成立した譯である。此大計畫の實行を容易ならしめたのは實に建築に關する制限法と、土地收用に關する特別の規定である。之れに依つて假令地主と雖も自分の好む所、好む時に自由に家を建築する事は出來なくなつた。豫め地方官憲の作つた都市計畫に關する建築案と、其設計したる道路に沿ふてゞなければ、如何なる建築も許されぬ事になつた。我國では地主は自分の土地に自分の金で家を建てるのに何の遠慮が要るものかと云ふ考へで、官憲も亦之れに干渉する事を躊躇して居る狀態で、其結果我國の新開地は草を刈つて小屋を建てると云ふ、適當な道もなく、亂雜極まるものになつた。交通の盛な、且つ自動車の利用される世の中では、家を作る前に先づ道を造るべきで、一定の計畫に基いた道路が出來てから其沿線に建築を許すのが順當である。伯林の街は皆このやうにして出來た。伯林の新らしい街が人間の作つた街であるとすれば、東京其他我國の大都會の新市街は獏の作つた街としか見えない。此邊の相違は、極めて僅かの考へ方の相違と、方針や手段の定め方から生じたのである。餘りに個人の所有權を尊重し過ぎる事はお互の迷惑になる事が生ずる計りでなしに、長い將來の事を考へれば所有者自身の損にもなる。伯林では土地會社が郊外の土地を買占めて建築をしやうとする者に投機的に高く賣らうとしても官憲が頑張つて居てなか／＼許さぬ。譬へば伯林

の效外のテルトウの街で土地を買受ける者が損害を被らんやうに豫め公の都市計畫に設定されたる道路に沿ふ土地のみが建築敷地になるのである、と云ふ事を布告した事があり、又同じく郊外のツァーレンドルフでも土地會社の投機的行爲に依つて土地を買受ける人間か損失をする事を防ぐためにツァーレンドルフの南東の土地は未だ道路設計が出來上つて居ない。從つて此地方の土地を買受けた者が建築を願ひ出ても一切許可をしないと云ふ布告を出した。此樣にして地方官憲が土地の利用と道路の敷設、建築等に關して大きな權力を握つて居たものであるから、土地會社などが跳梁して投機的に巧い汁を吸ふやうな事も出來ず、又土地の利用建築も亂雜にならず立派な街が既定の計畫の下に理想的に出來上るやうになつたのである。我國でも最近都市計畫法、建築物法が出來たが、東京などは最早市街地建築物法が嚴格だと云つて騷いで居るやうであるが、そんな事では理想の實現が望めない。大阪市の附近には土地會社が簇出して、郊外地を殆んど全部掌握して了つて居るやうであるが、大阪市の都市計畫、住宅建築等をなすに當つては彼等に投機的の暴利を占めさゝない要心をする事が肝要だ。伯林では新らしい道路を開く時は沿線の地主に土地の併合をさして、道路に當る部分を無償で提供せしめ、排水、道路の鋪裝、燈火設備等の經費を負擔せしめ、此經費は建築が初まつてから拂ふ事になつて居る。家屋建築をするには此等の負擔が當然かゝるのであるから、衛生上完全な宅地が出來、路面の鋪裝まで必ず出來る事になるのである。泥田のやうな郊外の雜路を持つて居る都市は是非此點を考へねばならぬ。なほ土地を開發する權力は地方官憲の掌中にあるのであるから、道路ばかりでなく其街が將來發展した場合に必要とすべき學校、其他の公共的建物の敷地を土地の所有者に寄附せしむる事もある。伯林の都市計畫事業の實行に際しては常に此義務を土地會社に負擔せしめたのである。斯樣にして新伯林が出來上つて世界中で最も近世式な街である事を誇り得るやうになつたのだ。

獨逸人は其街の設建及び生活の方法に就いて科學的、組織的、經濟的の力を示したが其生活は必しもピューリタン的である次第でもない。彼等の好むものは音樂と、ビールであるが伯林の街は隅々に至るまでカフェーで充滿して居る、そして其カフェーで、必ず數人若しく數十人の樂隊が獨逸の誇りとする音樂を奏して居る。カフェーの大きなものになると數千人を容れるに足り、伯林人や外來人は此所在のカフェーに集つて數杯のビーアに美しい絃樂の音色を味ひながら數時間の閑を消す事を最大の樂にして居る。パリのブールヴァーにあるカフェーではパリー

人が路傍に卓を出して往來を眺めながらのんきにカフエーを啜つて居るが伯林の大規模なのには及ばない。四疊半式の孤立主義的な歡樂を喜ぶ日本人は高價を拂はねばならぬが數千人を一堂の下に集める大カフエーの數時間は儉約にすれば僅かに數十錢を要するに過ぎない。

此秩序立つた美しい伯林の市街も、科學的な然も愉快をとる事を忘れない伯林人の生活も、此度の大戰爭の結果として大いに破壞されて街も不潔になり、生活も困難になり、且つ退化した事は思へば寔に氣の毒な次第である。



「都市と田園」を詠ずる詩歌十八集

畑の花嫁 他五篇

白鳥省吾

洪水の約束

静かな冬の透明さは
水清く涸(か)れた大河のほとりに在る、
ところどころに砂の河原あらはれて
岸邊に消えのこる雪の模様の上
寒さを研(と)ぐ日の光
晴れわたる青空の冷たい匂ひ
影うつる枯れ葦や柳も心澄んで
すべて玻璃の輝きに明らむ。

凍えた沈默の中を
大地の脈のやうに照りゆく流れ
その水面に舟二つ浮んで
言葉なき黑い數人に砂利を舟に浚ひ上げては
とき〴〵辷るやうに漕いで河原に棄てる、
それをまた他の數人が土堤の上に運んでゆく。

寂しくそぼ濡れて汗ばんで
人々よ終日を働いて
河底をどれほど深くしたか
來るべき夏の洪水の恐怖を
どれほど少くし得るか。

水源の山脈は雪を戴いて遠く
曠野の果てに鮮やかに起伏し
限りない自然の溢れる力は
莊かに微笑し沈默する。

水はいま優しい生物のこころに
靜かに河底を流れてゐるが

毎年の夏の太陽と雨と風と草木との
極度に強烈なる精彩につれて
洪水の持つ荒い自然の汎濫は
永遠の存在から湧きくる激情は
眼のあたり確かな幻想を人に與へる。

黒く蠢めいて原始人にちかい動作の
無智な祈りの勞働のかなたに
雪の連峯が靜かな光に輝めく時、
人間の力の運命的な微小さが
哀れにも美しく尊く
冬の風景の中に浮彫される、

雪の曠野で

小さい驛の支線からの列車は
凍りついたやうにじつとして發車しない、
列車のなかには古ぼけたストオヴが
何か鬱などの內臓のやうに赤く黒く
惡い石炭を燻ぶしてゐる、
向ひの腰掛には頬に瘤を垂らした爺が

四合瓶から杯に酒をついで甜めてる、
雪のあとの曠野は一しほ寒く黄昏れる。

ふと裸馬に乗つた若者が
列車の窓下を田の畦を駈けて行つた
そして十分とたたぬうちに
細い一本の瑞木を擔いで戻つて來た。

私は知つてる
舊正月に餅をつけて飾る
赤い美しい珊瑚のやうな枝の瑞木を
（私は少年時代に山の雪の中に
　その木を探しに行つたことが度々ある）
若者は此の邊の山の何處にあるかを知つて居て
雪の中でも直ぐ伐つてきたと見える。
なるほどもう三日すると舊正月だから
今日あたりはそちこちの農家で餅舂きだらう。

いま若者と馬とは
いかにも氣心の知り合つた樂しさで

一軒の農家に小躍りして行つて隠れた、
其の農家から此處まで何の物音も聽こえないが
茅ぶきの屋棟はいかにも温かさうに並んで
家族の團欒のさまも目に浮ぶやうだ。

暮れゆく雪冷えの曠野の
おちこちの部落が懐かしく灯を點し始めた頃
驛員はやうやくそれに答へるやうに
發車を報らせる笛を鳴した。

畑の花嫁

ザング、ザングと馬の鈴
雪消えのころ春の日に
田舍の空に麥畑に
晴れた光に隅もなく
喜び事は知らぬ他人にも知らせつつ
樂しく鳴りくる馬の鈴。

遠見の部落の森かげを
ザング、ザングと現はれる

四匹の馬に乘る人の
華やかな色、黒い影。
思ひかけない一群の
近づくままに
目の覺めるほど美しい嫁御であれさ
胸おどる。

可哀さうなこの私よ
去年の今ごろ嫁を貰うて
新婚の夢もさほどでなかつたのに
もう子供さへ出來た身は
いま蟲の觸手のやうに熱く顫えて
他人の嫁御のことなど氣にかける。

――お里がへりでがすよ、嫁御が先だから――
私を曳きゆく車夫は言ふ、
乘掛馬に緋の布團
二枚重ねた四角から
地と擦れすれに朱の房揺れて
斜めに乘つてる打掛姿の

嫁御は俯むき面はゆげ。
續いて乘つてる仲人嬶は
黑縮緬で地味に納まり、
花婿と仲人はほろ醉きげんで
自分で手綱を取つて騎る、
細い朱塗の酒樽を
擔ふ男もほろ醉きげんで
步いてあとから御供する
背中でタプ、タプ、酒が鳴る。

嫁御は可なりの不縹緻だ、
こゝらあたりの結ぶの神は
田圃や畑にござるのだらう、
——さつぱり白粉がのらないな
それに俵端のやうに圓い顏——
車夫はのんきに呟やいた、
——こうして此處にも夫婦が出來た——
私も寂しく微笑んだ。

ザング、ザングと遠ざかる鈴の音
車夫ぁ嬶を思ひ出し
――この間、五番目の
子供を生んだ己らあの嬶は
産後の肥立がいけなくて
一時は駄目かと思つたほどだが、
占つて貰つたら胞の埋め場所が
艮神様の方角に當つてるから
別な處に埋めろと言はれ
今日、出るさきに胞を堀返したが
土が堅くて三十分もかかつた――
と、汗を拭き拭き走つてる。

ザング、ザングの鈴の音も
限なき光の果に消え
ゆくてに廣がる沼のいろ、
たゞ何となく世の戀や
里に待つてる妻のこと
生れて間もない赤ん坊のことなどが
明るく戀しくなつかしく思はれて

どこやら雲雀(ひばり)が啼いてゐる。

七面鳥

秋あさい高い城跡(しろあと)の
傍なる明るい谷間に
今も御殿と呼ばれる昔ながらの屋敷があり
いくつかの農家と田畑と竹藪とが
そのあたりに點在して一廓をなしてゐる。

城跡のかなた眺め遥かに
まひるの平野の果てに
雪の連山は白銀の襞(ひだ)を煙らし
崖下をゆるやかに大河なが〻ゆく時。

御殿の若き主(あるじ)の美しい妻は
今日も庭に下り立ちて七面鳥に餌をやる、
おゝこの佳(よ)き妻を置きざりにして
若き主は他所に女を圍(かこ)ひ
一年に數日しか家に歸らぬといふ。

ほかの夫婦なかのことは
他より覗ひ知られぬ謎だが
若い美しい妻は
夫があつても
寡婦のやうな暮らし、
弓なければ音もたてぬ
ヴアイオリンのやうに寂しい。

静かな谷間、童話めいた谷間の
主なき御殿の庭に春の若草萠え
ほろほろと七面鳥が羽をひろげて
奥さんに餌をねだつて随いて歩るいてる。

おとうさん

――おとうさん、おとうさん、おとうさん――
ゆるやかに子守唄のやうに節つけて
子供をおんぶした若い奥さんが
門の外で無心に歌つてゐる、
子供といつしよに
夫の歸りを待つてる

晴れた夕がたの中空に
圓い月が白く
まだ光らないころ。

この歌ごゑをうしろにきいて
私は郊外の丘を下りる、
六月の樹立の青々とした茂りは
家々を靜かに飾る溢れるいのち、
果てもない丘陵と平地のうねりの上に
此處から群れ連なる大都會、
おゝ二百餘萬の人間の生活の都よ。

私を微笑ませるあの單純な子守唄よ
なんと澤山の『おとうさん』が此の都に
皆それぞれの暮らし向きに住んで居ることだらう!
そして私もついこの間
新しく『おとうさん』に仲間入りをしたのだ。

妻に待たれ子に待たれる其等の人達は
蒼ざめて疲れて家に歸つて來はしないか
みぢめな屈從に日常を暮らして居はしないか

おゝその大多數は何物かに虐げられ蹂躪されて
慰めなき社會の中に人生を素通りして
死の國に惶しく叩きこまれて行くやうな氣がする。

いま此の丘を下りながら
人間の運命的な相互關係
悲しいそれ〴〵の連環としての
見知らぬおとうさん達を其の家庭を
寂しくもなつかしく思ひ浮べる。

暗い雨季

美しい太陽の黄金の匂ひを
この地上は久しく忘れた、
樹林の青ぐらい葉が
かぶさり合つて幽かに震える
曇と雨と風との織り交じる
日本の暗い雨季！。

ぶよぶよした郊外の地面に
地ならしも碌にしないで
急ごしらへの家がそちこちに建つ

魔術で浮び上がる茸のやうだ。

そんな家でも
或る人々は羨ましさうに見て通る
或る人々は『もう借り人が決まつたんですか』と
組立さへ出來ぬところから近所に訊く。

多數の人は家を持つてないのだ、
萬物の靈長の有難さは
よしんば小さなぼろ家にしても
狐の穴や鳥の巣のやうに
そう誰でもたやすく
自分の住家を持てるものでないのだ。

じめじめする暗い雨季にも
とんかんとんかん普請するのは
蒼ざめた日本の首都
東京の持つ都會病の一つ
新しい安普請の家が
茸のやうにそちこちに生れるため。

山院秋晩圖

—心の郷土第二篇—

日夏耿之介

碧空はもつとも深し矣
寂寞　梵境の庭に彳む離俗の法衣の色は
黒く　且つ　白い
いま　十一月の日影稍弱く
わが心　緬々と墮るといへど
疎林　山巒　大斜面　おしなべて
紅葉を赤く燃えたち
わが世の秋氣　今は澄みきはまりたりけらし

精舍の庭は暮れちかく黑々と靜まつて
靜な跫音に　すゞろ儂が魂の汚穢を感じ
自から　ひとゝきを澁み皺をはこぶ
屹然たる古乍らの本堂の裡

讀經淸らに合唱のこの黄昏を
勤行いまは酣か
私は好む　這個の靜謐に住みならへる精神を
御僧よ　希はくば動かずて
わが閑庭の點景をして完くあらしめよ
飽滿　輕忽の輩とて
わが魂の安住を繞ひわたり
かの一旦の喜悅を獲てましとて
宵々は　直に訪る私である

白沙の庭に落ち散つたる
たゞ三葉のもみぢ葉のその美々しさは
たとへば　醜汚の心ゝ時あつて
傷感哀憐を垂れるやうだ
また　この夕闇の大本堂におぼろめく
主僧赤衣の美々しさは
たとへば　持戒の念やゝ廢れて
下品の愛慾や塵勞を掬むに似てゐる

されど　朽ちたる鐘樓に懺悔して
かの祖師が意を解く
奇く錆びたる古鐘は宜し
ある日　試みに　余聲わづか其一音を點じ見よ
山々答へ　陽は西に　鳥は塒に　落葉は土に
かの人間だちとても今は家路を慕ふであらう

日はややに西に白づき
夕風は　紫苑の葉末に
一握の白露をそつと滑きすてて
連峰北角の梢より覗く
白き上弦の秋月をも消てしむる

澄みたる心　また暗闇にかき曇り
消然と歸路を求めるその折から
噴泉の夕とどろきは
いま卒然と高まつて
暗黒は洪水のごとく滿ちあふれ
たゞ臨終の落日の最終列の一線のみ
白き　み寺の　壁の上に

いさゝかの緡を貫す
日は亡び　月さへいとも細ければ
見よ　燦として宵の星　碧空に躍れるあるを
穢なる巷々に燈の瞬かゝやき出たれど
ああいかでこの心古巣に行くか
ああ　かの巷堪えがたし
この偏頭痛をいかに堪えむ
身は重し　心痛し矣

「荒野の娘」の中から

佐藤惣之助

一、女王の船

花に滿たされた果樹園のほとりへ來て
わたしは風の檣や青い大氣の龍骨をみる

李は青と白との瞬間の花である
自然の新戰場から來るするどい雪と松明の女である
かの女は幽鬱な薫香の風の扇を水にひらく……

花桃は雨の女王のあたらしい腕を
靜かな川と空氣の鐵につらね
色や煙の衣裳を青空の裾に染める……

わたしは光線の建築圖のなかに
枝々と花を織りなす地球の斑點をぬひ

もゝらうと木々の榮華に迷はされ魅入られる

滿ちわたる花の稻妻の狂亂に
幼き自然の女王は田舍の紗模様をひろげ
ふかき情熱の春のあらしに彩られ
あざやかな大地の泥の船中で結婚する

夕暮は靈彩な肉體のまゝ
薫香の川から紫羅欄の花の月をとりいだし
色づく白日の燈火と
大向日葵の花時計を空中に交差する……

わたしはそのいのちと夢も焰とたきすて
花盛りの悲哀に氣絶してゐる木々の中に燃え狂ひ
今にも難破しやうとする色やか　女王の船を
眞紅なる空中の傘の陰に見る……

二、田舍の山

名もない春の日の田舍の山へのぼると
あでやかな空間と風の波瀾にたゞよひ

畑はあつい日時計の光線をちらし
風の扇が雲の束を煽つては谷を染める
青天は電と水晶で組むだ透明の棧敷を
枝や鐵の上に貴族席の如く懸けつらね
立木も莖も風を感じ光煌の布をはり
寂寞の美しい耳を沈默が花で埋める

山々は泥の王冠をふせたやうに
ものすごき大氣の幽靈に彩られ
するどくさびしい感覺をもつて
星辰の花火を地上にふりまく……

わたしはこゝでこそ美の地球の
ふしぎに新らしい鮮麗な歴史を肉眼で讀む
記錄にも紀念碑にもかゝれた事のない
靈の地質學としての、星の新考古學としての書を
わたしは英雄や皇帝の歴史を忘れ
新らしい自然の事件と空中文字に氣を奪はれ

一本の枝に、かすかな西風の中に
大自然界の新聞を印刷しやうとする……

三、田舎の寺で

わたしは名も知れぬ田舎の古寺へ行つて
うす紫の夏の風や黄昏の房をつけた花にふれ
村を清め木深い路を飾り
自然と交る田舎の幽霊や星に染まつた寂默の周圍にとりかこまれ
天然の光線で綴る美しい時間をすごすのが
時折のすゞしい樂しみだ

わたしは麥の中に破れた門を突出したり
色やかな雑草にとりかこまれた古寺とともに
蒼い彩色した木彫の龍を忍冬の花の中からのぞかせたり
路傍に立話する農婦や鋳掛屋を見下し
美しい夏の日の夢を見てゐるのも好きだ

本堂の欄間には浮彫の天人が古い極彩色の羽衣を着て
靑い笛を吹きながらとんでゐる
わたしは寂しくなつて、この哀れな木彫の娘を

百合の花をみるやうに愛する
窓から新鮮な花の光線がさしこみ
娘や子供の死骸が黄金の瓔珞の房に鳴り戯れてゐる中で

わたしはこの骸骨と死骸の旅館の下で
美しい黄昏とめぐりあひ、無形の光線によつて奥深い世界を見る
幻影は枝と鼓に、死の生新な色は花やとびくる昆蟲の羽音に
すれちがい、とびちり、光と陰の戰ひが
わたしを透して田舎の空を夕日で飾る中に……

四、野薔薇を伐る

開墾者は
盛上つた花盛りの匂ひの野薔薇を伐る
むらくしく手向ひする田舎女を
夜盗の群れが踏みにぢり突刺すやうに……

川原の開墾者は野薔薇を伐つてしまふ
あかるい日の燈火をつけてゐる
田舍木綿の雑草地を
新らしい死と爭鬪の運河に變へるために

あゝ今は田舍が晴れた上衣を着て
蜂が明るい鐘を鳴らし、天牛が美麗な雲をとばし
路は夕榮を露蜂房のやうに散亂さして
野薔薇の小さい匂ひ洋燈を燈しつらねてゐるのに

開墾者は石と漆食ひと鐵の
貧乏くさい西洋町を川原に築くのか
人足と機械の戰ひや、悲鳴をあげる汽船共を
この田舍の里と夕日に組みあわせるのか

おゝ野薔薇よ、さびしい野娘よ
川の幽靈は埋れたる淋しい徑を花蠟燭でみたしてゐるのに
都會の人足は氣の狂つた大きい鍬で
川原の土まで掘りかへし移住の場所もないやうに
自然の巣を荒しはじめた

伐れ伐れ、狂氣の怨靈共よ
その運河も安鐵橋も雜草の力には敵さない
野薔薇はより繁茂し、枝をくみ根をはり

汝の貧乏町を飾るであらう
燃へよ野薔薇、棘ある地上の花ランプよ
狂ひ狂ひて燃へよ、大なる田舍を
もつと大きい自然の故郷の方へ……。

五、海峽の分水嶺に立ちて

高い場所へのぼると
われ／＼地球の精神は青天に花咲くのである

肉眼で地球の彩筆を見るには
木々の青椅子に座して
左右に海の大公園を置くがよい

陸は海中から醜い月の破片の如くのぼる
大地は水と濤から來た星の建築にちがひない

雪風は體を透し天地を清め
われ／＼の肉體を海のみどりで赤く照らす
われ／＼は鮮麗な色と線の望遠鏡であり
風物をかきあつめる美しい神經の樂器である

あゝ天地の物質はかくまで壯麗な精神に貫かれ
天球の雪と霧の博覽會に加はつてゐる

われ／＼は自然の喜悅をもつては泣き
ふしぎなる人間の悲哀をもつて泣く時計である

六、黑綠色の深山に入つて

(わたしは空中に山嶽の異象を見る

深夜の陣中の篝火の陰で
老ひたる沈默の王が
ひそかに考慮し運命に苦しむ黑い姿を)

山脈はあたらしい物質の未完成な色を
美麗な星の力で塗り變へやうとしてゐる

物凄い夜の女王も、泥の半神獸も
松杉のおひ茂る陰に入りて
寂寞と森嚴な大氣を製出したり排出したりしてゐる

地球は縦桁との鮮かな幽靈を霧にはなつ

大地は醜い形をしたり星を眞似たり
高貴な、荒々しい大エネルギーの波濤で
石斧や銛の如く星雲の中から姿をあらわす

（わたしは山嶽の荒れ野の上に
硫酸銅の藍をつけ、光と陰の武裝した
黒綠色の地の王者の
群がりより來るのを見る）

おゝ美しい西風や瀧をつれて
啄木鳥や松鷄がとびちるなかに——。

——（十年春より夏）

都會の映像

川路柳虹

東京停車場

片輪のルネツサンス、
巨頭の傀儡、
廣場に手をつなぎ合はして
食ひ止める追手のやうに
待ちかまへてゐる東京ステーション、
赤々と照る夕日は硝子に反射し
血のやうな焔を地の上に吐く……
轟、轟、轟
下關直通大プレツスが
いま、驛内へ入つた。

東京よ
それは愛着の名であり、また、

憎惡の名でもある——あらゆる人々に。
今日(けふ)、おまへは歡びの瞳をむかへ、
明日(あす)また涙の顏をおくる。
おまへは迎へる眼にかゞやかしく
嘆き去るものにはつれない、——
見知らぬひとのごとく。詐僞せし人の如く。
都會の吸盤は遠い國の人々をひきよせ、
渦巻く波のさなかに忘れたごとく手放す、
幸福の門か、地獄の門か、
汽車はけたゝましく地響たてゝ
「東京」に躍り込む。

おくる人、迎へる人、歩む人、佇む人、
高官も、商人も、盜賊も、戀人も、
プラットフォームは運命の市場だ、
手にもつたパッスをかゝえて、さて
人生の市場へ向ふ若人(わかうど)よ……
穹窿に反響(こだま)する奇妙な音響(おんきやう)!
アスフワルトを踏む下駄のひゞきよ、

東洋一の大ステーション東京の渦卷く人ごみに
私もも切符をもつて立つた一人。

群集

群集よ……

薄暮がた、灯の溢れ散る街を、
群集よ、鴉の群のやうに
石炭の屑の塊りのやうに
しかも靜まり、力なく、弱々しく
街を練り歩く群集よ。

電車の鈴のけたゝましく鳴る街衢を
おまへは歩いてゆく、男も女も、
疲れた足並に、小さな包をかゝへて
夕靄に定かならぬ色ながら
蒼ざめた顏にうつむいて歩いてゆく。

群集よ……
おまへの背に立つあの工場は
呻りを發する煙突をもち

人をおびやかす機械の響が
おまへの魂を小さくする。
富はおまへの腕からつくられるのに
機械はおまへを虫のやうにいぢめる。
そしてその後の貪婪な黒い手は
おまへを弱らし、疲らし、へと〳〵にさし、
薄暮の闇の中にかくも吐き出す。

群集よ、
鴉の群のやうに
石炭の煙の塊のやうに
塊つてはくづれ、崩れては群り、
あとから、あとから、
あの門をつゞいて路に溢れる
力ない敗殘者よ、そこよりほかに
「生活」がないやうにとりすがる地上の生物よ、
人といふよりはたゞの影、黒いもの影だ。
わたしは君たちの後から
おなじやうに歩きながら
しかも君たちをどうすることも出來ない。

何ゆゑのもの影か、
何ゆゑの存在か、何故の「吾」か、——
わたしの心は手をとつて泣きたい位
君たちの心と共に歩むのに、
しかも嘆く心が何の幸ひをもたらさぬ
この不幸な世界を何としやう。
わたしの手は力なく
わたしの手は空しく路上に振る。

群集よ
わたしは君だちのあとを
ともどもに夕闇に吸はれるため
たゞ歩く、無意味に
うなだれて、うなだれて……。

Silhouettes

都會よ、
すべての忘却の墓よ、
また、ふるさとよ。

赤い毛帽子つけたサンドヰッチマン、
猿のやうな顔に笑ひをうかべて
路端に立ち、ひつこく
過ぎゆく人をつかまへては渡す
廣告紙、薄青い肺病みのやうな紙——
一眼見て（あるひは見ずに）
そのまゝ捨てられる甃石のうへ……
あゝ、風は吹く、風はもてあそぶ、
埃、を塵を、薄青い廣告ビラを、
さてはわが運命を——
遠くに、見知らぬ彼方に……

かくて人は老い、人は死に、
人は生れ、人はゆき、人は去る、
甃石のうへ、巷の上を。

銀座古調（小唄）

——銀座の柳抜かれ夜店の灯なくなるときゝて——

銀座のやなぎにあめがふる

あをいやなぎにひそびそと
戀びとどしのさゝやきの
しめやかさもてあめがふる……「はつ戀」

×

柳なき銀座のさびしや、
掘りかへさるゝ地のうへ
[illegible]りの灯もなき街のさびしや。

大江戸は東京となり、
東京は大都市となる。
飾窓かゞやかに人は往けども
消えゆく夢のさみしさは、昔も今も。

×

銀杏は野暮な樹、野武士の樹、
銀座は美人のとほる町、
そこに野武士は旁立[illegible]用。

（柳に代ふるに銀杏を街樹とするといふをきゝて）

室内風景

西條八十

夕暗の室のなかで
私の夢が靜かに醸される。

青い粗羅紗に包まれた
一隅の圓卓子が
黝んだ丘の姿に見える、
ほの紅い薔薇が、黄昏のなかに
その巓をつゞつてゐる。

丘のうしろに
蒼白くひらけた海は
夕の玻璃扉、——
マヂョリカの花筒は
遠く沖をゆく奇異な三檣船。

私がいま横つてゐるのは
臥椅子の氈ではなくて
ながく柔かい丘の草、——
私はそこで幽かな海鳴と
微風とを聽いてゐる。

ああ、いづくとも知れぬ異郷の
遠さ、懷しさ、——
かゝるとき、丘邊に、家畜のごとく
ふとも立ちあらはれた家婢よ。
しばし、燈を齎すをやめよ。

夕星は、いま
海のはてに煌めきいで
紅い薔薇は、丘を繞りて、
ひとつびとつ、ひらきそめる。……

見知らぬ愛人

さびしい夜だつた。
電車は何處來ても

あなたの姿は見えなかつた、
夜の微風のかよふ
郊外の停車場の、プラットフォームの上に
いくたびか燦かしい群集は雪崩れた。

それらは青い薄紗でつゝんだ螢籠のやうであつた、
夏の夜の電車は。——
そして遠くからは、燐火のやうにも、また色褪せた紫陽花の族のやうにも見えた、
をり／＼海鳴りのやうな音を
星空にひゞかせた。

八時に着くといふ約束が
もう小一時間過ぎてゐた、
私はやけに煙草を燻らせ
なまじろい、人の顔のやうな待合室の時計と、
け慵く睨め合つてゐた。

「どうして來ないのだらう?」
私はあなたの美しい俤を、それから
今宵あなたを引きとめた周圍の人々の姿を、

胸底で切りきざんでゐた
ちやうどあの簑虫に與へるため
色とりどりの毛糸を鋏で切りこまさくやうに。——

あきらめて階段に歩をかけた私に、
もう一ぺん、凩のやうな音をたてゝ、
電車がついた。
扉口から蛾のやうな群集が簇り下りた。
この時である、私が
小柄なA氏の姿を人ごみの中に認めたのは。——

A氏は褐色な麻の獵服を着てゐた、
白い洋裝をした幼ない娘を伴れてゐた、
「どちらへ」と、聲をかけた私に、
瞳のくろい、心もち蒼白めたその顔が、から答へた。
「國の父が急に亡りましてね。これから、
歸るところです。」

悲しみは、草の香のやうに
夜の微風のなかを、つよく泛つた。

見ると氏の足下には、重い旅鞄が
幾つとなく轉げてゐた。
幼ない娘の手をひき
人波に揉まれてゐるその姿が
弱く、いたはしかつた。

私は默したきり。旅鞄の幾つかを抱へて
A氏に蹤いて電車に乘つた、
荷物を棚にのせながら、私の心は
A氏の故郷なる、林檎の白い花咲く北國を、
おもひうかべた。

「ありがたう、ありがたう。」
「ではお大切に。」
A氏の眼は感謝で燃えてゐた。
電車が去つたあと、
私はもう一ぺん、ひとりぼつち、淋しく、
郊外の停車場にとり殘されてゐた。
ああ、をもへば、その夜、

あひ見ぬあなたの愛は、遠くから
いかに奇しく私に作きかけてゐたことよ！
私はあなたの白い手のかはりに
見知らぬ愛人の、より硬い、しかし
温かい手を握つた。
そしてあなたに触るべき双腕が
亡き父の柩にいそぐ旅人の旅嚢を抱いた。

まことに、その一夜、私の夢が
いかにやさしい星の光と
快い微風とにつゝまれてゐたことよ！

靜けさを求めて

若山牧水

雨

生垣に木がくり見ゆる門さきの田植の人に雨の降るなり

雨いよよ降れば田植うる人々の寄り來ていこふわが門の木に

さやさやと音たてて來し雨脚のいま降りかかる窓さきの木に

梅雨降る日瓶に挿せればくれなゐのしみじみ深きダアリヤの花

晴

うす日さす梅雨の晴間に鳴く蟲の澄みぬる聲は庭に起れり

雨雲の低くわたりて庭さきの草むら青み夏蟲ぞ鳴く

一重咲ダリヤの花のくれなゐの澄みぬるかなや梅雨晴の風に

眞白くぞ夏萩咲きぬさみだれのいまだ降るべき庭のしめりに

雀とると飽かぬ仔犬がたくらみの小走りおかし梅雨の晴間を

或る朝

この朝を事あるらしき燕のさへづり聞ゆ庭木の風に

苔のうへ損ひゆく蟻に心とまるわびしきけふを庭木吹く風

ゐつたちつわびしき時はわが飼へる鷄に餌をやり親しむ事す

わが門のまへうちわたす狹青田のはるけきかたに田草とる見ゆ

わがよはひ四十路に近し折る指のせんなき事を心によ置け

かきこもり此處に住めれど明日知らぬ家なしびとは家を思へり

草花

借り住ふすたれ邸のくまぐまの草むら廣み時の花咲く

時來れば咲きつぐ花を八重むぐら荒れたる庭に見つつ樂しき

朝夕につちかふ土の黑み來て鳳仙花のはな散りそめにけり

見る時の心のうへにすがすがししばしうつりて匂ふ草花

居て見るやならびて咲ける草花の香とりどりに飽く花ぞなき

年月いつかれ出で來てわが病めば咲きてあざやけき夏草の花

つぎつぎに病みてしをれば家ごもり庭掃き草す草花を植ゑ

コスモスの茂りなびかひ伸ぶ見れば花は咲かずもよしとし思ふ

雪(ゆき)なせる白きを見れば鳳仙花咲き競ふ色のこれに如かめや

葉ごもりに咲きて眞しろき鳳仙花つゆかもむすぶみづみづしさよ

橋こえて入るわが門い庭みちに植ゑならべたるコスモスの苗

こもり居

靑みゆく庭の木草にまなこおきてひたに靜かに籠れよと思ふ

めぐらせる大生垣の槇の葉の伸び淸らけしこもりゐて見れば

門口(かどぐち)の古りぬる橋の短きをわたりわたらず夕暮あそぶ

こもり居の家の庭邊(にはべ)に咲く花はをほかた紅し夏深みつゝ

近詠四十首

窪田空穗

夏來る

淺みどりはつ夏の空見を廣み眺めわがをればすず風きたる

冬青の葉のむら葉の暗きかがやかし若葉あらはれぬ梢梢に

岡のうへに一もと立つ木時じくに瑞葉をどらす我が見る毎に

立つ風に騒くぽぷら繁くして暗きその葉を空にをどらす

栴檀のうすみどり葉は夏の來てかがやく空にまぎるべく見ゆ

やうやくに開きけるよとねぎらひて待つに久しき白百合を見つ

わが行くは眞日照りひかる白き路しばしたたずみ目をつむりたむ

立ちこむる八重しら雲のにぶく照りひとり動く我の汗ながれやまず

道のべの草の葉青し入りつ日の名殘の明り空に消えつつ

間遠にもともる街燈馴寄りあひまたたきかはす夏の夜かも

人が吹く笛のしらべはわが胸のなつかしき惱みゆりさまし來る

勝負をあらそへるひとり手をとどめほとゝぎす啼くとつぶやきにけり

鎌倉靈仙山

山かひの一つ家いでしわかき男石拾ひ投ぐる山を目がけて
松山のさやけき小峽ここにして人が家ありし地形の殘る
ここにして在りし家あらず海の風松にこもりて哱じくに鳴る
磯山のどのいただきの平されて礎あるは寺かも立ちけむ
この山は地くづれすれば石の棺あらはれいでて限りなしといふ
磯山の木の暮れ來れば身投げびとおほしとぞいふ磯前の見ゆ
身投げびとおほしとぞいふ磯前に山より行かむ細き道見ゆ
身投げすと人が踏みけむ道のべにすみれ花さけり枯生にまじりて
山松のみどり重なり小暗きを透きては空のはるけきが見ゆ
海上の空を廣みと磯山の木暮れに立ちてわがながめけり

折にふれて

あまた子を我の持てれど一の子は極めて愛し君も然らむ（友の子擧げしに）
せつなさに妻をいだきぬいだけるは死にし子にして妻にはあらぬ（過ぎし日を思ひ出でて）
なき母に告げよと子にや教ふべきただ我のみの告げやしぬべき（子、中學に入れるに）

人われを疎むと聞きて驚きに似たる心をわが持ちにけり

人をしも信ぜむとするこのこころ持つに悲しく捨てむにさびし

よきところ一つある人は稀なるをさなもとめそと云はしき父は

人にわれもの云ひつかれやめし時夜の靜かに蛙なくきこゆ

この心移しはかねとわが思ひつつしみて人を離れ來にけり

誠あらぬ生さかし人とものをいひ怒り見せしとうちこらへつも

立ち入りて人と語り誠なき心を聞きてなげきぬべきを

あからさまに我をあらはすことはしもし難き世かも親も子も隱す

わが身にし厭くとはいはね厭くに似る心をりをり襲ひて來るを

かたはらの人さへ知らぬよろこびを生きがひとして我が疑はず

家を移さむとして

ここにして居らむは幾日ふた年をうからと共に住みける家を

岡の家の二階に籠り明け暮れを見おろせる谷よ目に殘るらむ

馴れぬれば今はかなしき岡の家けふの日かげの障子に白し

この家を移りゆくべみ住むほどに庭の楓わか葉せりけり

移るべき家をよしとし見つつ我が移るいそがぬ心持ちをり

市苑の夏

太田水穗

池の端

薫風ゆたかに吹けば水の上におしあひうごく蓮の廣り葉
水こえて西にちらばる夕燒の雲色さびし辨天の屋根
暮れそめて夕闇となる水の色に屋並おちつく池の端町
しめりもつ屋並のうへに梅雨霽の宵闇紅き星のいろかも

夏の花

朝日やゝ暑くなりくる花畑に露をこぼせる日まはりの花
日さかりやいきれて土の香を吐ける小庭のすみの白百合の花
立ちのぼる土のいきれや暑からし下葉しほるゝ白百合の花
わが庭や一木に花の群れて咲く葵に暑き日のつゞくかな

晝空

立ちきらふ屋並の空の夏がすみほとほと來る飛行機の音
晝空の日のかゞやきに光りつゝ閃くなして小さしよ飛行機

ふかぶかと空のみどりのみなぎらふ光りのなかに人あはれたり

大空の海のみどりの深蒼にむせびて人は巾ひふりにけり

日の空の霧にこもりてプロペラの遠ざかりゆく音ぞきこゆる

大河

河こゝに水脈をみだして天つ日の光りをくだく花川戸の瀬

河下のお厩橋の橋ばしら潮干の水に高まりて見ゆ

夏がすみ千住がよひの船窓に見えておぼろの待乳山の杜

吹く風のありとしもなし大荷足いつぱいに帆のつよまる力

鐘ケ淵石垣ひくゝ潮ひきて河小さなり夏の日照らす

河上の流れを見れば煤色の雲ゆあらはれてみなぎらひ來る

さんざめく騒ぎをのせて屋形船大河の瀬をくだりゆきたり

大河の最中の船にうつ太鼓とゞろに水にひゞき來るなり

大河の汀の葦の風のなかに舟こぎ入れてはたらく人あり

見よ岸をはしり過がふと屋のうへに火花を散らす電車のきしり

鴎よなれは知らじか此の岸にいく死にかはる人とさくらを

天の川

千駄木の木立のうへに天の川流れて白き夜とぞなりぬる

この夜るの端居の袖にやはらかにまつはるほどにそよぐ風かも

ひそひそとそよぎて行きて闇の夜の竹にうごける風の音かも

頬をふきてゆきたる風か竹の葉のそよろにゆれて音を立つるは

星白き夜空の下にふかぶかと大きもだしに寝たる山かも(道灌山)

端居して風に吹かるゝつかのまの思ひ無ささへ寂しさなるを

童馬山房雑歌

齋藤茂吉

東京に歸りきたりて人ごろしの新聞記事こそかなしかりけれ

閨中の秘語を心平らかに聞くごとし町の夜なかに蛙鳴きたり

長崎よりかへりてみれば銀座十字を牛は通らずなりにけるかも

さみだれの日ならべ降れば市に住む我が腎ははや衰へにけり

流行の心理は模倣憑依の概念を以て律すべからず夏の都會に

ゆたかなる春日かがよふ狂院に葦原金次郎つひに老いたり

さみだれはしぶきて降れり殺人の心きざさむ人をぞおもふ

わが心いまだ落ちゐぬにくれなゐの胡椰子を商ふ夏さりにけり

われ銀座をもとほり居りてブルドッグ連れし女にとほりすがへり

長崎の晝しづかなる唐寺やおもひいづれば白きさるすべりのはな

朝はやき日比谷の園に腫みたる足をぞ撫る勞働びとひとり

馬に乗りて行く人のあり日がへりに玉川あたり迄行くにやあらむ

淺草の八木節さへや悲しくて都に百日あけくれにけり

ものぐるひを看護して面はればれとしてゐる女と相見つるかも

長崎にて暮らしゝひまに虫ばみし命槐集をあはれみにけり

さ庭べにトマトを植ゑて幽かなる花咲きたるをよろこぶ吾は

けふもまた何か氣がかりになる事あり虫ばみし書いぢり居れども

このごろ又外國人をころしし盗人あり我心あやしきを君はとがむな

疊のしたにナフタリンなどふり撒きて蚤おそれゐる吾をしぬばね

眼鏡井戸の普門院なる御庭べに水引き草いまだのこれり

田園

島木赤彦

五月雨（一）

壺の湯にわが幼子の向股の柔かく靜かなるをぞ洗ふ

みどり子の肥え太りたる腕短しただに戯びて湯をたたき居り

何ものを見るとにあらず幼子の足り頬笑まひてただに見て居り

五月雨のいく日も降りて田の中のいで湯浴み所に水つかむとす

湯をあがりてしまらく憩ふわが肌の冷え著るく梅雨ふけにけり

五月雨（二）

時鳥夜鳴きせざるは五月雨のふりつぐ山の寒きにやあらむ

夜ふけて寒しと思ふに五月雨の雨だりの音高まりにけり

降りしきる雨の夜はやく子どもらの寢しづまれるはあはれたるかな

五月雨の小止みとなりしひまもなし桑原とほく音して降り來

海を越えて行くらな友に寂しくぞ思ひ至りて我は居にけり
わが家の雨戸にあたるは桑の葉か夜ふけの風に亂るる雨か
窓べまで茂れる桑にふる雨の音を立てつつ今日も降り居り
旅にありて若布をひさぐ越の少女ふりしきる雨に濡れて來にけり
日並べて雨ふる軒に家鶏は喉をのばして鳴きにけるかも

松林

赤松の林に湧ける雲の峰にひびきて鳴けり蟬のもろ聲
松の木の脂沁み出でて流れざり暑き眞晝の光りふけたる
この森の深きに居りて見えにけりたまさかにする遠稻光
遠き雷鳴りいでにけり目にあまる雲の峰いくつ未だ崩れず
赤松の林のなかの蘚ふかし洩れつつとほる光りの幽けさ
森の中にわが立つままにかまびすしき蟬のもろ聲の澄みてし響く

富士見原

昨夜いねし野の家の戸をあけて見れば蕎麦の花白しませ垣の外に
戸をあけてすなはちに見つ落葉松のしげりをとほす朝日の光

この朝の風に吹かるる霧うすし隠れつつ動く桔梗の蕾

繁み立てるから松の木の下にして蕎麦の花畑に朝日あたらず

金華山

ささやかなる島に來にけり波の音四方をめぐりてさわぐ日の暮

この島の木むらにあたる風の音聞きつつあればとよもし來る

うしほ風いたくはげしき岬山の芒の中に我は傾く

荒磯岩とよもす波の音にさへ馴れにし鹿の草を食み居り

山のうへの茂り木高き栂のたれに潮風あたり霧となる見ゆ

○

このあつき天つ日の照りの冷ゆるころわが友は一人海越えて行かむ

想華

田園雜感

吉村冬彦

(一)

現代の多くの人間に都會と田舎とどちらが好きかといふ問を出すのは、蛙に水と陸とどつちがいゝかと聞くやうなものかも知れない。

田舎だけしか知らない人には田舎は分らないし、都會から踏み出した事のない人には都會は分らない。都鄙兩方に往來する人は兩方を少しづゝ知つて居る。其結果はどちらも分らない前の二者よりも惡いかも知れない。性格が分裂して、徹底した沒分曉漢になれなくなるから。

それは兎に角自分は今の處では田舎よりも都會に生活する事を希望し、それを實行して居る。

田舎の生活を避けたい第一の理由は、田舎の人のあまりに親切な事である。人のする事を冷淡に見放しておいてくれない事である。例へば雨のふる日に傘をさゝないで往來を歩き度いと思つたとしても、中々さうはさせてくれない。鼻の先に止まつた蚊をそつとして置きたいと思つてもそれは一通りの申譯では許されない。

親切である爲に人の一擧一動は斷えず注意深い眼で四方から監視されて居る。例へば何月何日の何時頃に私が煤けた

麥藁帽を冠つて其の橋を南に渡つたといふやうな事實が、私の知らない人の口から次第に傳はつておしまひには私の耳にも入るのである。個人の一擧一動は誇大やうた濃厚な媒質(メヂアム)を透して傳播するのである。

反應を要求しない親切ならば受けてもそれ程恐ろしくないが、田舍の人の質樸さと正直さはそのやうな投げ遣りな事を許容しない。それで此等の人々から受けた親切は一々明細に記錄しておいて、氣永にそしてなしくづしに此れを償却しなければならないのである。

其處へ行くと流石に都會の人の冷淡さと薄情さはサツパリして居て氣持がいゝ。大雨の中を頭から濡れひたつて銀座通を歩いて居ても誰も咎める人もなければ、餘計な心配する人もない。受けた親切の償却も簡易な方法で行はれる。

それだから一見閑靜な田舍に住つて居ては、とても一生懸命な自分の仕事に沒頭して居る譯にはいかない。それには都會の「人間の砂漠」の中が一番都合がいゝ。田舍では草も木も石も人間臭い呼吸をして四方から私に話しかけ私に取りすがるが、都會ではぎつしり詰つた滿員電車の乘客でも磧の石塊同士のやうに默つて銘々が自分の事を考へて居る。そのおかげで私は電車の中で難解の書物をゆつくり落ち付いて讀み耽る事が出來る。宅に居れば子供や老人といふ代表的の田舍者が居るので困るが電車の中ばかりは全く閑靜である。此のやうな靜かさは到底田舍では得られない靜かさである。靜過ぎて淋しい位である。

これで都會に入り込んで居る田舍の人が居なければどんなに靜かな事であらう。

(二)

今ではどうだか知らないが、私の國では村の豪家などで男子が生れると、其の次の正月に村中の若い者が寄つて、四

疊敷六疊敷の大きな凧をこしらへて其の家にかつぎ込む。そしてそれに紅と白或は紺と白と繼ぎ分けた紙の尾を幾條も付けて西北の季節風に飛揚させる。刈株ばかりの冬田の中を紅木綿やうこん木綿で頬冠りをした若い衆が酒の勢で縱横に驅け廻るのは中々威勢がいゝ。近邊のスパルタ人種の子供等は銘々に小さな凧を揚げてそれを大凧の尾にからみ付かせ、其の斷片を掠奪しやうと爭ふのである。大凧が充分に風を孕んで揚がる時は若者の二人や三人は引きずられる位の力をもつて居る。

凧揚げのあとは酒宴である。それは本當にバッカスの酒宴で、酒は泉と溢れ、肉は林と堆高く、其間をパンの群がニムフの群を追ひ廻すのである。

豪家に生れた子供が女であつた爲に、ひどく失望した若い者等は大きな羽子板へ凧のやうに絲目をつけてかつぎ込むだなどゝいふ話さへある。

子供の初節句、結婚の披露、還暦の祝、さういふ機會は凡て村のバッカスに捧げられる。さうしなければ其土地には住んで居られないのである。

さういふ家に不幸のあつた時には村中の人が寄り集つて萬端の世話をする。世話人が餘り大勢である爲に事務は却つて澁滯する場合もある。そして最後には矢張り酒が出なければ收まらない。

或る豪家の老人が死んだ葬式の晩に、或る男は十二分の酒を飲んで歸る途中の田圃道で連の男の頸玉にかじり付いて、今夜位愉快に飲んだ事は近來にないといふ事を何遍も〳〵繰返しながらよろけ歩いて居た。此れなどは最も徹底的な或は端的な例であらう。

危篤な病人の枕元へは大勢の見舞客が詰めかける。病人の頭の上へ逆樣に油ぎつた顏を差し出して、六かしい挨拶を

し六かしい質問をしかける。一層親切なのになると瀕死の人にいやがらせを云ふ。さうして病人は臨終の間際迄隣人の親切を身にしみる迄味はされるのである。

（三）

田舍の自然はたしかに美しい。空の色でも木の葉の色でも都會で見るのとは丸でちがつて居る。さういふ美しさも馴れると美しさを感じなくなるだらうといふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行はさう見すかされ易いものではない。永く見て居れば居る程いくらでも新しい美しさを發見する事が出來る筈のものである。出來なければそれは眼が弱いからであらう。一年や二年で見飽きるやうなものであつたら、自然に關する藝術や科學は數千年前に完結してしまつて居る筈である。

六つになる親類の子供が去年の暮から東京へ來て居る。此れに東京と國とどつちがいゝかと聞いて見たら、おくにの方がいゝと云つた。どうしてかと聞くと「お國の川にはえびが居るから」と答へた。

此の子供のえびと云つたのは、必しも動物學上のえびではない。えびの居る清冽な小川の流れ、それに翠の影をひたす森や山、河畔に咲き亂れる草の花、さういふやうなもの全體を引くるめた田舍の自然を象徴するえびでなければならない。東京で魚屋から川鰕を買つて來て此子供にやつて見れば此事は容易に證明されるだらう。

私自身も此のえびの事を考へると、田舍が戀しくなる。併しそれは現在の田舍ではなくて、過去の思ひ出の中にある田舍である。えびは今でも居るが「子供の私」はもう其處には居ないからである。

併し此の「子供の私」は今でも「大人の私」の中の何處かに隱れて居る。そして意外な時に出て來て外界をのぞく事が

ある。例へば郊外を歩いて居て道端の名もない草の花を見る時や或は遠くの杉の木の梢の神秘的な色彩を見て居る時に、僅かの瞬間だけではあるが、此のえひの幻影を認める事が出來る。其れが消へたあとに殘るものは淡い「時」の悲しみである。

自然くらゐ人間に親切なものはない。そして其親切さは田舍の人の親切さとは全く種類のちがつたものである。都會には此の自然が缺乏して居て其の代りに田舍の人が入り込んで居るのである。

（四）

盆踊りといふものは此頃もうなくなつたのか、それ共警察の監視の下に保存されて居る處もあるかどうだか私は知らない。私が前後に唯一度盆踊を見たのは今から廿年程前に南海の或る漁村での事であつた。肺結核で其處に轉地して居る人を見舞に行つて一晩泊つた時が丁度舊暦の盆の幾日であつた。蒸暑い、蚊の多い、そして何處となく魚臭い夕凪の上を眠いやうな月が照して居た。

貴船神社の森影の廣場にほんの五六人の影が踊つて居た。どういふ人達であつたかそれはもう覺えて居ない。私には唯何となくそれが御伽噺にあるやうな淋しい山中の妖精の舞踊を想ひ出させた。そして何故だか感傷的な氣分を誘はれた。

其時見舞つた病人はそれから間もなく亡くなつた。

私は今でも盆踊といふと其夜を想ひ出すが、不思議な錯覺から、其時踊つて居た妖精のやうな人影の中に、死んだその人の影が一緒に踊つて居たのだと云ふやうな氣がして仕方がない。

そして思ふ。西洋臭い文明が田舎の隅々迄擴がつて行つても、盆の月夜には、何處かの山影のやうな處で、昔からの大和民族の影が昔の踊を踊つて居るのではあるまいかと。

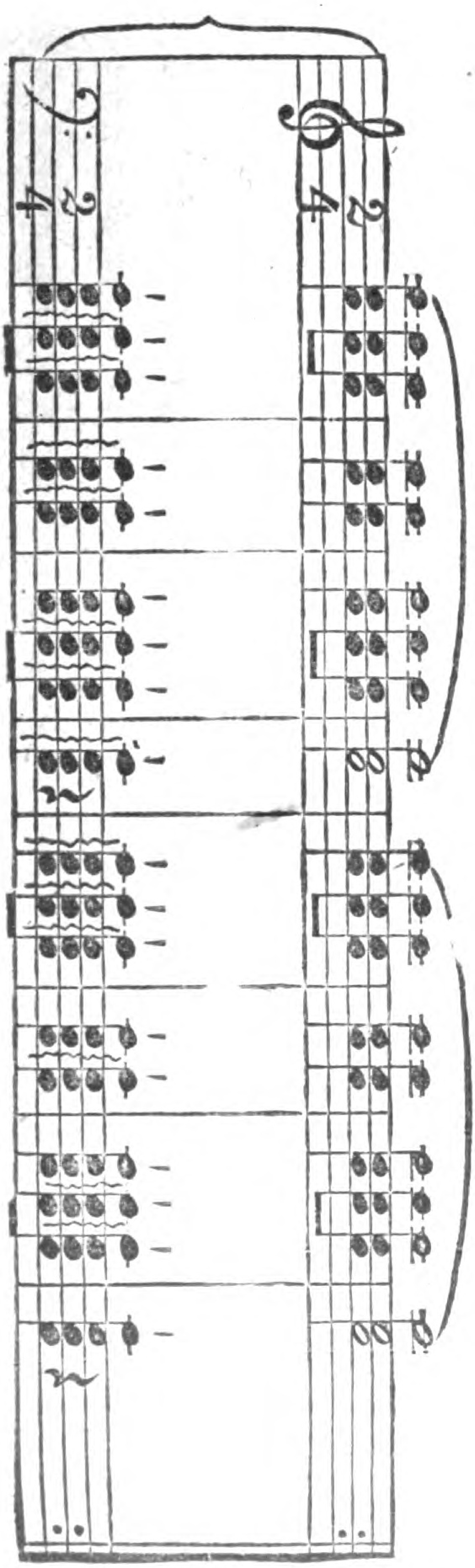
盆踊といふ言葉にはイディルリツクなそしてセンシュアスな餘韻がある。しかしそれはどうしても現代のものではない。其の餘韻の源に遡つて行くと德川時代などを突き抜けて遠い〳〵古事記などの時代に到着する。

盆踊の未だ行はれて居る處があれば其處には未だ何處かに奈良朝以前の民族の血が若い人達のからだに流れて居るやうな氣がして仕方がない。さうしてそれが滅亡に瀕して居るやうな悲しみを感ずる。

(五)

夏の盛りに虫送りといふ年中行事が行はれる。大きな太鼓や鐘が畔道に据ゑられて赤裸の人形が力に任せてそれをたゝく。

Andante con fuoco



音が四方の山から反響し、家の戸障子に衝動を與へる。空には火炎のやうな雲の峯が輝いて居る。朱を注いだやうな裸の皮膚には汗が水銀のやうに光つて居る。凡てがブランギンの油繪を想ひ出させる

耳を聾するやうな音と、眼を眩するやうな光の强さは其中に却つて澄み通つた靜寂を醸成する。唯それはもの丶空虚な爲の靜かさでなくて、もの丶充實し切つた時の不思議な靜かさである。

烈しい音波の衝動の爲に、害虫が果してふるい落されるか、落された虫がそれ切りになるかどうか、たしかな事は誰れも恐らく知らなかつた。しかしこんな事はどうでもい丶やうな氣がする。あれは或る無名の宗教の莊重な儀式と考へるべきものである。

私はこ丶に一つの案をもつて居る。それは例へば東京の日比谷公園に或日を期して市民を集合させる。そして田舎で不用になつて居る虫送りの鐘太鼓を借り集めて來て誰れでもにそれをた丶かせる。社會に對し、政府に對し、同胞に對し又家族に對してあらゆる種類の不平不滿を懐いて居る人は、此の原始的樂器を原始的の努力をもつてた丶きつけるのである。

もう少し社會が進歩すると私の此案を笑ふ人がなくなるかも知れないやうな氣がする。

(六)

郷里から餘り遠くないA村に木の丸神社といふのがある。此れは齊明天皇を祭つたのだと云はれて居る。天皇が崩御になつた九州の或る地方の名が即ち此村の名になつて居る。どういふ譯で此の南海の片隅の土地が天皇と結び付けられるやうになつたのか私は知らない。たしかな事は恐らく誰にも分るまい。其れに拘らずかういふ口碑は人の心を三韓征

代の昔に誘ふ。そして現代の事相に古い民俗的の背景を與へる。

此の神社の祭禮の儀式が珍らしいものであつた。子供の時分に一二度見たゞけだから、もう大部分は忘れてしまつたが、夢のやうな記憶の中を捜すとこんな事が出て來る。

矢張農家の暇な時季を撰んだものだらう。儀式は刈株の殘つた冬田の上で行はれた。其處に神輿が渡御になる。それに從ふ村中の家々の代表者はみんな裃を着て、傘程に大きな菅笠のやうなものを冠つて居た。そして左の手に小さな鉦をさげて右の手に持つた木槌でそれを叩く。單調な聲でゆるやかな拍子で「ナーンモーンデー」と唱へると鉦の音が此れを請けて「カーンコ、カンコ」と響くのである。どういふ意味だか分らない。或人は「南門殿還幸」を意味すると云つて居たがそれはあまり當にはならない。私は寧ろ意味の分らない方がいゝやうな氣がして居た。

神輿の前で相撲がある。しかしそれは相撲をとるのではなくて、相撲を取らないのである。美々しい廻しを付けた力士が堂々として睨み合つていざ組まうとすると、衞士だか行司だかが飛び出して來て引き分け引き止める。さういふ事が何遍となく繰り返される。そして結局相撲は取らないでおしまひになるのである。どういふ由緒から起つた行事だか私は知らない。それに拘らず其れを見る人の心は遠い昔に起つた或る何かしら深刻な事柄のかすかな反響のやうなものを感ずる。

その外「棒使ひ」と云つて、神前で紅白の布を卷いた棒を振り廻す儀式もあつたが、もうよく覺えて居ない。

文明といふ波が潮のやうに片田舍にも押して來て、固有の文化の名殘は大抵流してしまつた。「ナーンモーンデー」の儀式もいつの間にか、廢止された。學校へ行つて文明を教はつて居る村の青年達には、裃をつけて菅笠をかむつて、無意味なやうな「ナーンモーンデー」を唱へる事は、堪へ難い屈辱であり、自己を野蠻化する事に思はれたのである。此

れは無理のない事である。

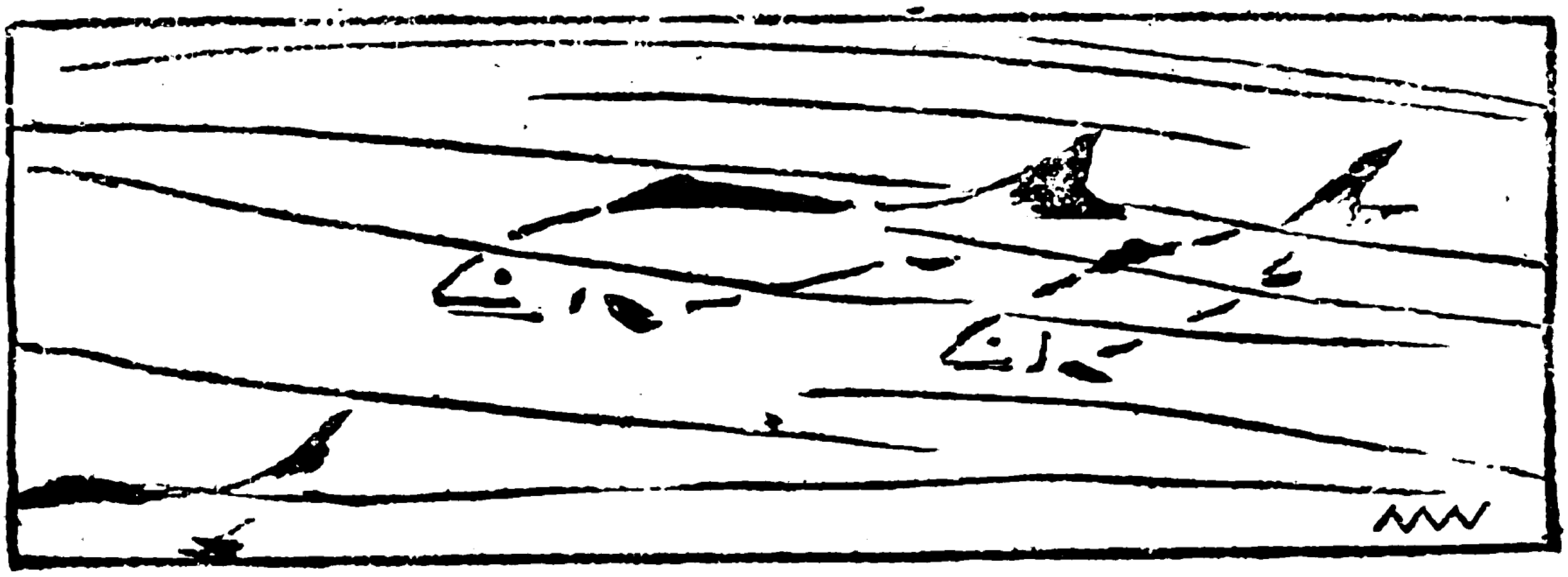
簡單な言葉と理窟で手早く誰れにも分るやうに說明の出來る事ばかりが、文明の陳列棚の上に美々しく並べられた。さうでないものは塵塚に捨てられ、存在をさへ否定された。其れと共に無意味の中に潜んだ重大な意味の可能性は葬られてしまうのである。幾千年來傳はつた民族固有の文化の中から常に新しい者を取り出して、新しくそれを展開させる人は何處にもなかつた。「改造」といふ叫聲は、内にあるものゝエオリユーションではなくて、木に竹をつぐやうな意味にのみも了解された。それであの親切な情誼の厚い田舍の人達は切つても切れぬ祖先の魂と影とを弊履の如く棄てゝしまつた。そうして自分とは緣のない遠い異國の歷史と背景が産み出した新思想を輸入して居る。傳來の家や田畑を賣り拂つて株式に手を出すと同じ行き方である。

新思想の本元の西洋へ行つて見ると、却つて日本人の眼に馬鹿〳〵しく見えるやうな昔の行事が其儘に行はれて居るのは寧ろ不思議である。

どちらがいゝか議論をすると分らなくなる。

唯此頃の新聞紙上を賑はすやうな色々の社會的現象は、大本教事件でも寶塚事件でも、凡てが直接此等の事件とは何の關係もない南海の村落で「ナンモンデー」の廢止された事と連關し、それの當然の歸結であるやうな氣がする。

さうした田舍の塵塚に朽ちかゝつて居る祖先の遺物の中から新しい生命の種子を拾ひ出す事が、爲政者や思想家の當面の仕事ではあるまいかといふ氣がするのである。



移轉前

正宗白鳥

寒がりの私は袷の襲ね着をしなければならなかつたほどの季節外れの氣候も、昨日あたりから順調になつて、今日は朝から夏らしい日が赫耀たる光を放つた。いくら捜しても適當な空家の見つからないのに諦めをつけて、明日か明後日再び湘南の海岸へ向つて、其處で有り合せの住宅を求める決心をした私は、差迫つた用事を片付けたり、買物をしたりするので忙しかつた。これまで誰れにも自分の旅立を知らせないで東京を離れ、前觸れもしないで東京へ歸つて來るのを例としてゐたので、今度も世間的の義理合ひから別れを告げに行かなければならぬ所もないし、またそんなことは些しも顧慮しないのであつたが、東京といふ土地に對しては、何時ものやうに私も別れを告げる氣持になつた。

少年時代から二十年あまりもこの大都會の空氣を呼吸して、此處で學問をし此處で世相を知り、此處で今日までの自活の資を得て來た私は、東京といふ者を念頭から離し得られないやうに出來上つてゐる。私の精神作用が現代の東京の感化を充分に受けてゐるばかりでなく、肉體も東京の氣候風習趣味によつてこんな風に出來上

つてゐるので、いくら藻掻いても努力しても、明治大正期の東京人以外の人間にはなれなくなつてゐるのである。

私は田舎生活にも飽き都會生活にも飽いてゐるのだが、それでも、可成り長い田舎の旅をした後で東京へ歸つて來ると、本當の故郷へ戻つて來たやうな氣で、ごみ〳〵した街上を足の疲れるまで歩いて見たり、人臭ひ息や酒臭いにほひや、種々雜多な臭いで空氣の昏濁してゐる所へ身を置いたりして時を過すのであつた。今度も歸京以來二月ばかりの間に、都會のいろいろな食物を貪り、都會の雅俗さま〴〵な娯樂物に耳目を注いだ。さういふことによつて内心の快樂を感じた譯ではなかつたが、熱烈たる理想も深刻なる煩悶もなくなつてゐるこの頃の私には、そんなこ　でもして時日を消費してゐるのが身に相應してゐるのかも知れなかつた。

私は銀座で買物をした次手に、ふと思ひついて、新富座の新しい芝居を見に行くことにした。此處では市村座を脱出した吉右衛門が新たに旗揚げをしてゐるので、一部の文學者や、役者といふ者に不思義な愛着を有つてゐる一部の東京の男女が興味を寄せて噂をしてゐるらしかつた。私は吉右衛門贔負ではないし、新しい芝居を特に好んでゐるのでもないのだが、東京を暫く離れる前に、この頃流行しかけてゐる新脚本の上演を一度は見て置きたいと思つたのであつた。

所謂新派の役者の出勤してゐる歌舞伎座の前を通つて、新富町へ出て、あたりの景色とは不調和な繪看板を、私は暫く見上げてゐた。數年來全盛を極めてゐた芝居もこの頃は不景氣風に襲はれてゐると聞いてゐるのに、棧敷十間賣切れといふ大きな文字が目についた。吉右衛門に人氣があるためか、新作が觀客を呼んだためか、あるひは連中勸誘の結果なのか、何にしても、芝居といふものは、どんな世にも廢れないものだと、その理由などを考へてゐた。

「役者といふ稼業はいゝのだらうか。毎日同じ藝を繰返すのだからいやになりさうに思はれるがね」と、私が訊くと、

「役者だつて稼業となりや、無論いやなことがあるには違ひないが。しかしいゝ商賣だね。女にはちやほやされるし、

金はよく取れるし、一生派手な生活がしてゐられるんだから、たとへ苦勞があるにしても、外の稼業で苦勞するよりやいゝに極つてるよ」と、ある劇通が答へたことがあつたが、あるひはさうかも知れない。……先日宿の近くの山王臺のあたりを散步してゐるうち、ふと梅幸の本名に[illegible]ない表札を見て、その邸宅の壯大なのに驚いた。……二室か三室の住宅さへ得られないで小旅館の陰氣な部屋に蟄居してゐる私は、ことにその邸宅の壯大なのに目が留つたのであつた。……初春のころ、ある日大磯の海岸を散步してゐると、濤龍館の庭の圍ひからふと、梅幸の素顏が現はれたが、すると、誰れかゞ「あれが梅幸だ」と囁くとゝもに、そこらにゐた人々の目がみんな其方へ向つた。愛慕尊敬の思ひを現はした目付をもつて見てゐた。

現代の東京が與へて呉れる歡樂と榮譽とを恣まゝにされる梅幸や吉右衛門の如きこそ、露のひぬ間の短い命を生甲斐のあるやうに送つてゐるのであらうと、私は現代の東京人らしい感想を起しながら、一幕見の幕替りを待つてゐた。暫くして、立見場から下りて來た客は、ど　も〱汗みどろになつてゐた。羽織の外までも汗の徹つてゐるのもあつた。「こんな苦しい思ひをして芝居なんか見るよりや、家で寢てる方が餘程ましだ」と云つて、火照つた顏を顰めた男もあつた。

私は些つと躊躇したが、折角思立つたのではあるし、この後田舍からわざ〱芝居見物に出て來るのは億劫に思はれたので、目差してゐる新作の開くのにはまだ餘程間のあるのにも關はらず、一幕見の切符を買つて入つて行つた。立見場の梯子段を上るのは何年目かのことで、こんな汚い、くさい臭ひのするところを、感激して上り下りしてゐた私の若い時分のことが思出された。幕はしまつてゐたが、一番目の大詰がまだ殘つてゐるのか、波の音を眞似た太皷の音がしてゐた。立見場は豫期したほど混雜してゐなかつたが、後に西日を受けてゐるのと、風通しが惡いのとで、茹るやうに

暑かつた。左右の客のどれも額から汗を垂らしてゐて、物の腐つたやうな臭ひが場内に滿ちてゐた。棧敷や土間を見下すと、人のかたまりが頭を並べて押詰つてゐたが、それ等の男女の裝ほひも泥溝の中の汚物のやうに、私の目に映つた。……幕の開かぬ前から私の目は疲れて、頭痛がした。

物賣場の婆さんが、ハイカラの若い客と話をしてゐた。

「此方が早く濟めば、明治座の(父歸る)を見たいと思つてゐるんですよ。澤田がどんな風にやりますか、先月此處で猿之助さんが大變よくやりましたよ。スッカリ泣かされました。二度見ても三度見ても、見るたんびに泣けるんですからね。舞臺には蠟燭を二本立てたきりで、あんな身の入つた芝居を見せるんですからえらいものです」と、婆さんが云つてた。

「それは何と云つても、新作の方が見應へがするさ。……しかし、吉右衛門の人氣はえらいものだね。」

「音羽屋さんと別々になつたのは、結局兩方とも勵みがついてよろしいんでせう。今度の××もなか〳〵面白う御座んすよ」

會社員らしい男や、職人や小僧や學生や、私の近くに、女學生見たいな若い女の二人連れもゐた。

やがて幕が開くと、大きな物見の松が舞臺の上に現はれた。人氣役者吉右衛門の扮した勇壯な樋口兼光の立廻りがはじまるのであつたが、暑さと濁つた空氣のために頭を亂されてゐる私は、眼前に活躍してゐる俳優の技藝や舊作者の技巧などをしみ〴〵味ふ力を失つてゐた。……自分を苦しめる煩はしい動作と騷々しい音聲とが、幾人もの役者を載せた舞臺の上に活動してゐるとしか思はれなかつた。……今から二十年前の歌舞伎座の舞臺で、團十郎がこの「逆櫓」の樋口に扮して、名優の片市が權四郎となつて非凡の藝を見せたことがあつたので、その芝居を二三度續けて見た私は、今

でも眼前の舞臺の上に、片市の肥滿した船頭姿の權四郎爺さんの幽靈を、活動寫眞の二重寫しのやうに見て、幕切れの船頭唄「汐の滿干(みちひ)にこの子が出來てなあ」(?)といふ淨瑠璃劇の結末に相應しい感傷的な唄聲を耳の底から思出されるのであつたが、そのかはり二十餘年の東京の空氣に染んで、知らず〲東京の徽が心の中に生へてゐる私は、新しい純な氣持で新しい芝居を味ふことも出來なくなつてゐる。江戸藝術の最後の光であつた團菊の芝居を、清新な感じをもつて受け入れた昔の私は、今日以後の新しい芝居を、胸を躍らして喜び迎へるには、あまりに神經が鈍くなつてゐるやうに思はれる。……芝居にしろ何にしろ、新しい藝術は新しい人々によつて樂まれ味はゝれるのであらう。……近くにゐる女學生風の女は二人とも、蒸暑い空氣にもめげずに、魅せられたやうな目を舞臺の方へ注いでゐる。

「こんなに面白くつてもいゝんでせうか」と、田舍出の老婆が菊五郎のある芝居を見て、溜息を吐いて言つたといふことを、誰れかゝら聞くか、雜誌で讀むかしたことがあつたが、私はさういふ氣持を、二十年の東京生活の間に、眞に感じたことがあるのであらうか。「こんなに面白くつても罰が當らないのだらうか、空恐ろしいやうな氣がする。我々人間が味はふには勿體ないほどの樂みだ」と思はれるほどの幸福を、この大都會の生活から一度も受けたことがないのであらうか。――老婆の言葉が私の胸に響いて笑ひ事でないやうに思はれるのは、私の生涯にもさういふ經驗が一度や二度あつたためではあるまいか。……高が菊五郎の藝ぐらゐでと嗤ふ勿れ。相手が役者であらうとも賣女であらうとも、あるひは無生物であらうとも、それほどの樂みが得られゝば、生きてゐる甲斐があるのではないか。

だが、今新富座の立見場に立つてゐる私は、早く幕の締まるのを待つてゐるばかりであつた。そして、肝心の新作の演ぜられるまで我慢して待つてゐるのが馬鹿々々しくなつたので、やうやく前の一幕を見終つただけで、熱い泥溝(どぶ)の中から出て行つた。外の風はいくらか凉しかつた。

私は再び銀座まで歩いて出て、アイスクリームを飮んで渇を醫した。それから散髪をして、洋食屋で簡單な夕餐を濟まして、赤坂の宿の方へ足を向けた。私は東京人でありながら、飮食店にもカフェーにも、その他の遊び場にも、其處の人だちと深く馴染んでゐる所は殆んど一つもないと云つてい〻のであるが、それ等の家の樣子は可成りよく知つてゐる。自分の退屈を紛らすために時折出入して、一時間二時間、あるひは半日くらゐを潰す所が一二軒無いでもなかつた。私は茫漠として私の意識に上つてゐる東京といふ土地に別れを告げるかはりに、さういふ家へ寄つて、其處を私の心に最も親しい東京として、別れを告げようとしたが、ふと、新富座で嗅いだやうな臭氣が、私の鼻から腦天を强烈に襲つて來たので、私は其方へ向けた足を轉じて、大人しく宿へ歸ることにした。梅雨前の炎天のために弱い神經が疲れてゐるためか、色つぽい雰圍氣のうちで、惡どい刺戟を身心に受けるには堪へられなかつた。

汚れた宿の風呂へ入つた後で、荷物の取散らかされた狹くるしい部屋の中で疲れた足を伸してゐると、知らず〳〵假睡の夢に落ちた。

私は愛宕の塔から飛下りた夢を見た。夢だなとボンヤリ氣つきながら、い〻氣持になつて二度も三度も飛下りしてゐた。

「兵隊さん〳〵……」と呼んで戯談を云つてゐる宿の下女の聲に、やがて私は目を醒ました。夕方になると、××聯隊の兵士が宿の側の崖際まで來ては、無駄口を利くのを私はよく聞かされてゐる。ある日には、模樣の入つてる手巾に包んだ色文が小石と〻もに小庭に投げられたことがあつた。私は何の氣なしにそれを拾つて讀んだが、外の者の目に觸れては宛名の女に對して氣の毒であるし、當人に手渡しする譯にも行かなかつたので、手紙は破つて手巾とともに泥溝の中へ抛込んだ。

それは、噓ふにも堪へないほどに幼稚な附文であつた。「あなたと永久に……」とか、「牛込の親戚だと云つて電話をかけてくれ」とか拙い文字で書かれて、姓名も明かに記されてあつた。……しかし、こんな手紙でも、書いた當人は眞面目であつたのだらう。こんなことを書いてゐる間だけでも、いくらかの心遣りになつたのであらう。

「兵隊さん〳〵」「此處までお出でよ」「行つたら何か呉れるの」「やるよ〳〵」

崖の上で二三人が奇聲を發すると、此方でもそれに應じるやうな戲れた聲を發した。私の目には見えないけれど、雙方でいろ〳〵に面白い動作をしてゐるらしい。……血の氣の盛んな若い男女が、初夏の夕に氣晴らしに戲れてゐるのが今の私の頭の中には繪のやうにも詩のやうにも思はれなかつた。先日ある圖書館へ行つた時に、休息室で煙草を吸つたり茶を飲んだりしてゐると、二人の青年が片隅で横綴の書物を圍んで、ニヤ〳〵笑ひを浮べながら小聲で何か話してゐたが、そこへ茶を入替えて行つた老爺も書物の方へ目をつけると變な笑ひを洩らした。私も好奇心を刺戟されて、脊伸びして其方を覗いたが、すると、私の目に映つたのは、彩色された淫らな繪であつた。私の耳の神經が鋭敏になつたせいか、彼等の無遠慮な話が次第に聞えるやうになつた。

どちら向いても色の世界歡樂の世界であるらしいのに、私自分は何時も欲して得られない物足らなさを感じてゐたければならない。

兵士と下女との懸合ひの奇聲怪音が止む頃には、夕闇が庭を襲つてゐた。都會の眞中でありながら、私の居る部屋は宿の離れになつてゐる上に、後は兵營の崖で横には隣家の土藏や古い廣い庭があるので、田舍びて靜かであつた。いくら古びてゐても家の中が陰氣であつても、靜かであればこそ、二た月あまりも住んでゐられたのだと、この部屋に感謝する氣になつた。

新たに買入れた二三の洋書や、原稿紙などを鞄に入れたり、宿の拂ひや旅費の計算をしたりしながら、都落ちをする前には、一度掛りつけの病院へ行つて身體をよく診て貰つて置く必要があると、幾歳になつても、どう考直してもそれだけは亡すことの出來ない生命惜しい本能に驅られて、明日の午前を病院行に當てることにした。醫薬の助けを借りたいほどに、何となく身體の調子の變になつてゐる私は、この頃流行してゐるヨードの注射がカルシュームの注射を受けるか、あるひは人參か何首烏でも飲まうか知らと、現代の流行に心が迷はされもした。

さうして落着きのない夕を過してゐるところへ、K——といふ人が訪ねて來た。四五日前に講演を頼みに來た人で、全然依頼を受入れる意志のない私は、再び面會する必要はないのであるが、宿屋の玄關で應答するのはいやなので、とに角部屋へ通すことにした。坐る所もないやうな、荷物の取散らかつた所に主客差向ひで、先日と同じやうに話を取りかはした。

「ぢや、この次に、何かいゝ思ひつきでもあつたら演壇に立つことにしませう」と、私はK君の熱心な態度に負けて、頑強な拒絶を押徹し得なかつた。

「是非今度出て頂かうと思つてゐたのですが、田舍へお出でになるのなら止むを得ませんから、その代り秋には必ずお願ひすることにいたしませう」K君は私の答へに滿足した。

「筆の方は長い間の習慣で、机へ向つてゐると何か知ら書けんことはないが、講演をするとなると、上手下手は別の問題として、自分は多數の人に對して何を教へるつもりだらうと、先づ考へられて氣遲れがしていけないんです。自分は萬代不易の眞理を摑んでゐないやうだし、何物かについて新しい發見をしたとも思つてゐないのに、物識り顔に他人に教へるといふのは僭越なやうに思はれてならないんです。確信のない主義主張を説くには熱が添はない譯ですからね。聽

く方でも詰らないでせう。……さう云へば演説には限らない、文章だつて同じ道理で、しつかりした理想や人生觀がもつてゐない人の書いた者は讀む方でも讀應へがしないでせうし、書く當人も筆を採るのに張合ひがないのですね。僕なぞは文章に骨を折るとか、見たり聞いたりしたことをどうにか辻褄の合ふやうに書くぐらゐが精一杯の仕事で、それも歳を取つたゝめか、筆癖が出來てしまつて、どう考直しても、清新な色は出て來なくなりましたよ」

「でも、あなたのお作には、一貫した人生觀があるのぢやありますまいか。外の作家のよりもあなたのには、宗教的の匂ひがあるやうに私には思はれますよ」

K君は正統の信者ではないが、基督教の感化を受けてゐる人であつて、多少宗教に關係をもつた會合の席で私に講演をさせようとするのであつた。

「今の僕には信仰心は全くなくなつてゐる筈です。宗教的の意味で僕に講演を賴まれるのなら當てが外れますよ。神は愛なりといふ宗教の根本からして私はちつとも信じてゐないんだから。……此間お話したダンテの神曲だつて、A君なんかゞ說いてゐられるやうな道德的の意味や、あるひは信仰や理想の上から愛讀してゐるんぢやない。詩人がさま〴〵な世相についてあゝいふ幻想を描いてゐたのが面白いのです。(他人の家のパンの味がいかに鹹いか、他人の家の階段がいかに險しいか)を身に染みて感じたダンテその人の肉體と精神の苦しみが、あの夢のやうな物語に巧みに唄はれてゐるのを面白いと思つてゐるのです。」

「ぢや、そのダンテをお讀みになつた感想を講演して頂く譯には行きませんか。……あなたが少年時代の信仰をお棄てになつた經路をお話し下すつても面白いと思はれます。」

「その經路が僕のは常識的で極く詰らないんですよ」

「常識的でも何でも私だちには參考になると思はれます。……全體文學者で理想々々と云つて、大變な理想をもつてゐるやうに云ふ人もありますが、神を信じない人間に本當の理想があるものでせうか」

K君は宗教上の立場から熱心に一つの理屈を述立てたが、それは珍らしい說でもなかつた。しかし、理想も衣服の柄と同じく、國により時代によりいろ〳〵に變るので、(また變るのが理想の本領なのかも知れないが)そんな薄弱な理想にはさう重きを置くに足らないといふK君の說だけには同感であつた。

「しかし、文學者の方の講演は、政治家や教育家の講演よりも我々の胸に觸れるところがあります」K君は文學者を蔑視したやうな口吻を弄した後で、それを取消さうとするのか、取つて付けたやうにさう云つた。

「どの社會の人間だつて、同じ時代に生きてゐる以上、大抵は同じやうなものぢやないでせうか。政治家だけが飛離れたえらい考へを持つてるとは思はれないが、文學者が今の政治家よりもエライ考へを持つてるとも思はれませんね。……君とでも誰れとでも、かうして意見を話合つてると、お互ひに一寸先は分らないくせに物の分つたやうな顏をしてゐると、ふと氣がついて、自分の方から口を利くのも、相手の話を聞くもいやになることが多いんですよ。これが僕の惡い癖なのかも知れませんね。讀書してゐても物を書いてゐても、どうかすると、この癖が出て來るんですが、さうすると、その書物を身を入れて讀通すことが出來ない、書く事も終ひまでを一心に書き徹すことが出來ない。だから、僕の作物はよく尻切蜻蛉になつてゐたり、氣拔けがしてゐたりするんです。」

K君はお世辭のつもりか、私の卑下した言葉を否定してゐたが、やがて、私が相手に倦んでゐるのに氣づいたらしく「ぢや、この秋にはお願ひします」と、最後に念を押して暇を告げた。

妻は二十日ばかり前から他所へ行つてゐるので、私は獨りでこの宿に起臥してゐるのである。去年の夏輕井澤に住ん

でゐるうち、二週間ほど獨りで自炊をして、幾日も無言で暮らしたことがあつたが、その間ほど高原の風色が身に染みたことはなかつた。今度は都會の俗塵の中に住んで、毎日出歩いてゐるのであるが、どうかして二三日も續けて、殆んど無言で過す時があると、輕井澤での獨居の時よりも却つて淋しさが一層いたましくわが心を襲つて來るのであつた。風の音や蟲の聲や朝日夕日の色取りに耳目を觸れてゐた時よりも、都會の街上の賑はひに耳を澄ましてゐる今の方が、却つて生存の手頼りない思ひに一層はげしく攻められるのであつた。

宵のうちは、私の部屋は自分一人の靜かさを保つてゐるのに、電車の音なんか聞えて來ないのだが、夜が更けるにつれて、電車の音も自働車の音も鮮明に空氣を破つて聞えて來るのが、私には不思議に感ぜられた。自分は直接に人の話を聞いてはゐないのに、部屋の前後左右に漂つてゐる空氣には、種々雜多な人間の音聲や人間の行動が含まれてゐるので、晝の間宵のうちは、遠くの響きが私の耳から遮られてゐるのだ。私自身は無言でゐながらも、終日雜多な人の聲が私の耳に忍込んでゐるのだ。私が絶えず吸つてゐる息の中にも、東京の男女のいろんな喜怒哀樂の音聲が含まれてゐるのだ。（私が東京人以外になれない筈だ）

東京の濁つた空の上に、神の目が光つてゐるのでもないし、惡魔が動いてゐるのでもない。何百萬の男女の心の音が雜然と響いてゐる。……私は明日此處を逃出しても、二十餘年の間吸込んだ東京の空氣は、それに含まれた音聲とゝもに私の心に染みついてゐて、容易に消失せる望みはない。……いくら飽いても嫌つても、東京の臭ひは私の五體から奇麗に拔ける望みはないのに極つてゐる。

私は過去の東京をも現在の東京をも忘れ果てた新たな人間として、新たな心の世界に身を置きたいと、望んで甲斐なきことを夢みながら、この宿での最後の眠りに落ちた。



虚を狙ふ

小川未明

黒い掌のやうな葉が、パタ〳〵と濕つぽい晩方の空に、風に吹かれて鳴つてゐました。私は、蝙蝠かと思つて、上を仰いだのです。すると、破れた雲の間から、星の光りが、眼のやうにぢつと下を見詰めてゐました。

(明日は、晴れるかも知れない)

幾日も陰つたり、降つたり、曇つたりして氣持が腐るやうに、欝いでゐたのが、星の光りを見ると、降るだけ雨も降つて、もう上つてしまつたのかと思はれました。

もう、あたりはうす暗くなつてゐました。あちらの垣根の色も一様に闇に塗り込められてしまひさうに、はつきりと分らなかつた。たゞ空だけが明るかつた。地面の方からだん〳〵暗くなつて、脊の高いもの丶頭だけがぼんやりと空の光りに照らされて見えるばかりでした。

この時、ふと後方を振り向くと、人が立つてゐます。よく見ると、黒い上衣を被て、白いズボンを穿いた、脊の高い男が默つて立つてゐるのでした。

（いつ頃から、かうして立つて居たのか？）

私は、びつくりしました。何も其の男に見られて困るやうなことは、しなかつた筈だが不用意の時分に、心の中まで見透されたやうな、一種の羞恥とそれに對する厭惡の感じと、また腹立たしさとを感じたのであります。

その男が、聲をかけないのは？　また、自分にも直に思ひ出せないのは？　私は、それによつて、全く知らぬ人であるといふことを知りました。

「どなたです」

私は、きゝました。

「ちよつと、おたづねしたいことがありまして……」

「僕にですか？」

私は、こんな男に、物をたづねられる覺えはないのだ。人違ひではあるまいか、けれど、相手がたしかに、自分に向つてさう言ふからは、自分の處へ來たのにちがひはない。

（ことによると高等係（スパイ）かも知れないな）

私は、よく其の顔を見ることが出來なかつた。たゞ、ズボンの白い色が、浮いて見えるばかりでした。兎に角遇つて話をすることにしようと、私は先に立つて、家の中に入りました。

其の男は、瘠せてゐました。長い脚を正しく折つて坐りました。眼の光りが鋭く、黑い顔から、こちらを射るやうに睨んでゐました。私には、睨むとしか思はれなかつた。

「何の御用ですか」

私は、明日の「無産者大會」に關して、やつて來たのだと心に思ひながら、平氣を裝つてきゝました。

「實は、私は、醫者ですが、其の方のことはしばらくやつてゐません。少し考へがあつて特種な研究をしてゐるものですが――疲勞の精神に及ぼす影響――といつたやうな事柄をいろ〳〵職業の異つた人達に遇つて、實際に聞きたいと思ふのです」

「そして、其れを聞いて、どうなさるのですか」と、私は、問ひました。

「まあ、其のことは聞かないで下さい。いづれ研究がまとまつたら分ることですから」と、彼は、白い齒をあら〳〵して答へた。

「それで、もう、いろ〳〵の方面について、ご研究をなさつたのですか」

私は、其の男のほんたうに、私について知らうとしてゐることは、何であるか考へがつかなかつた。また、果して、言つてゐることが事實であるかとさへも信じられなかつた。それで、たゞ偶然こんな質問を發したのであります。

「筋肉勞働者について、まづ最初しらべました。それから、精神勞働者について檢べようと思ひまして、上つた次第です」

男の眼は、また私の顏を見て鋭く光つた。

「それで、どういふことをお話すればいゝのですか」と、私は、つひに彼に言ひました。

(さうです)と、彼は、自分に言つて、しばらく、頭を傾けてゐましたが、

「毎日、毎日、頭をお使ひなさつては、やはり疲勞を感じなさるでせう?」

「其れは、感じますとも、私達は、全く休みのない勞働者なんですから」

「それで何ともありませんか」

「何んともないとは？」

「いや、そのあんまり精神が疲勞すると、反動的に過激な考へが浮ぶものです。刹那主義になり易いものです。そんなことはありませんか」

（いよ〳〵本音を吐いたな、それを聞いて何うしようといふのだらう）私は、しばらく考へてゐた。

「神經がいら〳〵することは事實です。そんな時は、何んでも破壞したくなります。時には、自身の體すら粉碎したいと思ふことがあります。けれど、其れは、思想といふよりは、寧ろ生理的に感ずる必然の現象ともいふべきでありませう。」

「さうです」と、言つて、彼は、うなづいて、

「絕望が外的に發すると、內的に發するとの相違があるだけです。言ひ換へれば、社會に向つてなされると、自身に向つてなされるとの相違があるばかりです」と、彼は、言ひました。

私は、彼と話をしてゐるうちに、どうしてもこの男は、自分で醫者と言つてゐるが、其の樣子の何處にも科學者らしいところがないことを感じました。其のかはり、非常に肉體の上に苦しみを經て來た傷ましい影が見えました。

「あなたは、醫者なんですか」

私は、きつと彼を見て、疑ひの瞳を落しました。

彼は、下を向いて、膝のあたりを見詰めました。のばした髮が、額際にかゝつたのを掻き上げながら、

「醫者だと言つたことをお疑ひなさるんですか。醫者でなくても、何とでも思おなさつていゝのです」

彼は、燈火に照らされながら次のやうな話をしました。

「M村の河の縁に電球工場があります。小さな工場で煙突は一つしかないが其の處には四五人の男が働いてゐます。夜など通りかゝりに伸び上つて、窓から覗くと、煤けて眞黑な顏をした男が長いパイプで、釜の中に煮えてゐる眞赤な液體に、其の端を浸して、やがて一足後方へ退て仰向いて管を振るやうにして吹くと、赤い球が出來る。其れをぽきりと箱の中に切り落すのが見えます。月の出てゐる晩などに、この小舍の中で、かうして男が、かはる〳〵仰向いて赤い球を吹いてゐるのは、物凄い繪を見るやうな氣がしますが、晝間、其の働いてゐる人達の顏を見ると、一層怖しいことを私は發見しました。

「私は、この小舍の中に入つて、其の一人と話をしたのですが、其の男の顏は窶れて、血の氣といふものがなく、青黑い土のやうな色をして、頰から顎にかけて髭が伸びてゐました。誰が見ても、其の男が病氣であることが知れた。男自身も其のことに氣付かないのでない。度々咯血もしてゐる。また、仰向いて一つ、一つ息を吹き入れるのに苦しみを感じてゐる。そのたびに命を吸ひ取られるやうな氣がして、いつか最後の息を吹き入れた時に自分は、ばたりと倒れてしまふのだといふことも考へてゐる。そして、其の男の命が大抵いつまでつゞくかといふことが私に分つてゐます。けれど何うすることも出來ない。私はこの場合、他の無神經な傍にゐる人々と撰ぶところがない。私は、かうなると醫者でもなんでもないのです。社會には、かういふやうな哀れな人間が、どれ程ゐるか分らないでせう」

「そんなにまでなつて、其の男は働いてゐるのですか」と、私は、なんだか其の男を眼の前に見るやうな氣がして、聞きました。

「M村の河の縁の電球工場に行つてごらんなさい。今頃、窓から覗くと、他のものといつしよになつて、あの男は働いてゐるでせう。しかし、もう一月とは生きてはゐないのです」

（何といふ怖いことだ）私は、溜息を洩らして、全く暗くなつた庭先きを見やりました。すると紙屑を捨てたやうに地面に低く這つてゐる、くちなしの花が、ほんのりと闇の中に幽かに浮いて見えてゐました。

「腦神經過勞の結果、發狂するだらうといふこと、もしくは、生活がこの人を過激思想家にさせるのだといふことが分つてゐても、私には、其れを何うすることも出來ないのです」と、彼は、言つた。

「そんなら、なぜ、あなたは、そんなことを檢べられるのですか」と、私は、きゝました。

「恐らく、何うにもならないが、其れを知りたいのです。知るといふことは、たしかに意義のあることだと信じます。」

「何うにかならないことはありますまい。いつまでも、このまゝでは社會はつゞかないと思ひます」と、私は、言つた。

「理性を信じますか」と、彼は、冷かな、前よりはやゝ高い調子で問ひました。

「さうです、私は、理性が最後の勝利者であることを信ずるのに躊躇しません」と、私は、答へました。

彼は、默つて、下を向いてゐました。そして、しばらくぢつとしてゐました。彼の長い髮は、また額際を隱して、顔の上にかゝりました。彼は、それでもぢつとして、正しく折つた膝の上に眼を落してゐました。

（明日は、いよ／＼無産者大會であるが、この男は、高等係（スパイ）ではなかつたのか）と、私は、思ひました。

外で、青桐の葉が、風に吹かれて鳴つてゐる音がしました。

彼のぢつとしてゐる姿が、やゝ動いたかと思ふと、彼は暇を告げて起ち上りました。汚れた麥稈帽子を手に取つて、靴を穿いて玄關に降りると、また丁寧に挨拶をして去りました。

何となく、私には、この男が、幽靈のやうな氣がしたのであります。

私は、室に戻ると、つい彼を見送つた時に氣付かなかつたが、其處に從いたうすい雜誌のやうなものが置いてありました。

（あの男が忘れて行つたのだ）

私は、急いで家の外に飛び出して、往來の左右を見ました。けれど、其れらしい後姿を見ることが出來ませんでした。

仕方がなく、私は、このうすい雜誌のやうなものを持つて二たび自分の机の前まで戻つて來ました。何かエスペラントで書かれてゐるやうです。其れを机の上に乘せて、私は頁を繰つて見ました。

「父親は戰爭に」といふ題が付いてある繪を、私は、「靜物」の寫眞かと思ひました。ちやうど後期印象派の描いた林檎や、梨子には、こんなやうなのが澤山あるからです。けれど、よく其れを見ると決して靜物を描いた繪でなく、子供の寫眞であつたのです。體が貧弱になつて、石段に腰をかけてゐるので、よく分らなかつたが、頭だけが大きく浮き出てゐたからでありました。ある石造の建物の蔭の處で、裸體の小供が三四人石段に腰をかけて、口を開けて此方を見てゐるのです。眼が力なく、そして穴のやうに大きく落込んでゐました。これでは路の上を歩いても、頭が馬鹿に大きいので、下の部分と釣合が取れなくて、直に躓いて倒れてしまふだらうと思はれました。

（戰爭は罪惡だ。何にも其のことに關して知らない小供までが、こんな有樣になつてしまふ）

私は、急に暗い氣持になつて、また、次に挾まつてゐる寫眞を探すべく頁を繰りはじめました。

「食物を充分に與へられない囚人の勞役」と、其の下に書いてあつた。これも、やはり空想や、想像の繪でなく、實物の寫眞でありました。

戰時中、某國に捕虜となつた、其の敵國人の勞役に服してゐる有樣なのです。頭部に負傷したと見えて繃帶をしてゐる者もあれば、また頭髮の伸びてゐる者もある。中には坊主頭のやうに短かく刈つた者もある。口髭のある者、またない者、それは一樣でない。けれど、夏と見えて腰部に何か布を卷いてゐるだけで、彼等は裸體になつてゐる。腕や、脚の節が高く隆起してゐる。肉が落ちて、肋骨が一枚、一枚數へられる程、彼等は瘦せ衰へてゐる。年を老つた者もゐれば、年の若い者もゐる。其れは顏付で分るけれど、何れも眼玉が落込んで、怪しげに光つてゐる。其の光景は、まだ我慢も出來たけれど、次の寫眞を見た時に、私は、思はず顏を反けました。

是等の多數の髑髏が、其の細い火箸のやうな足や、手に力を入れて、この肋骨の數へられる程に瘦せた體に梶棒を當て、車に重い荷物を積んだのを引いてゐる。一生懸命に力を出して引いてゐるけれど、重い荷車は容易に動かうとしない。一人の男が、口を歪めて、手足を折れそうに曲げて梶棒を取つてゐると、後から、横から、この髑髏のやうに瘦せた人間が幾人も其の荷車につかまつて押してゐる。

また、別の寫眞には、其處にへと〳〵にのめつて倒れてゐる人間の姿が載つてゐる。其れを見た時に、私は、自分の横腹までが痛く引き釣つて來るのを感じたのであります。

次の頁を繰ると、「失業者の群」といふ題が付いてゐました。

其れは、戰爭のために、最も疲弊した、某市に起つた事件で、いよ〳〵不景氣が襲來すると、各工場が倒潰をして、多くの勞働者が職を失つて、食ふことが出來なくなつたのであります。彼等は、たゞ一人づつで資本家に對する時は、さまで勢力がないけれど、千人、萬人と群をなした時は、社會を動かすだけの力が出來るのであります。そこで、彼等は、餓死しなければならぬ前に、先づ麵麭を與へよ！と叫ばなければならない。巴里であるか伯林であるか、ある街に

起つた、彼等の示威運動の光景でありました。

ぼろ〳〵に破れた勞働服を着た一列が、首垂れて町の中を歩いて行きます。彼等は死人のやうに默つてゐます。疲れきつてゐます、そして、もうこの上大きな聲をあげて叫ばうとはしない。ある者は、だらりと兩手を下げてゐます。ある者は手を兩方の隱しに入れてゐます。ある者の帽子は橫に傾き、ある者の帽子は穴があいてゐました。彼等は幾つかの旗を立てゐる。恐らく、それには、「我等に麵麭を與へよ」とか、「我等の生命を脅かすものは誰ぞや」とか書いた旗を立てゐました。

其の一列は、ずつと長く、長く、街の中をつゞいてゐました。そして、ちやうど一筋の路の上を通つて、やがては彼方の地平線に沈んで行くやうに、地の上に怨みのある幽靈のやうに。

街の人々は、小高い處に、また路の兩側に立つて、また家々の窓から、痛ましさうな顏付をして、其の失職者の示威運動を目擊してゐました。それだのに、一方では、肩章のついた肩を怒らして、一樣に全じ型の帽子を被つて、劍を下げた警官の群が、怖しい冷酷な眼付をして、彼等を監視しながら、いつしよに歩いて行くのでした。

「最後まで踏み躙らんとす」と、其の下に書いてありました。

このうすい冊子は、疑ひもなく、社會主義の宣傳書であつたのです。

（あの男は、主義者か知らん）と、私は、思ひました。

机の上に、この本を置いて、暗い夜の雨を見ながら、人間同志の鬪爭する有樣と、何故に鬪爭しなければならぬかといふやうなことを頭の中で考へてゐました。床についてからも、肺結核で死にかゝつてゐる、青い顏をした男が、仰向いて、電球に息を吹き込んでゐる姿が見えたり、また、其の眞赤な球が目先にちらついて容易に眠付くことが出來ませ

んでした。

闇の中で、鳥が羽ばたきをするやうな、濕つぽい空氣の裡で身慄ひする桐の木の葉の音を、其後幾度び聞いたか知れません。無心の木の葉まで、時々かうして、何物にか脅かされるやうでありました

私自身があまり健康の方ではなかつた。時々仕事の過ぎた夜などには、寢汗が出たり、胸に痛みを覺えるやうなことがあるので、こんな話を聞くと、何となく未來の日を自分で見るやうな氣がして、身に襲ひ來る恐怖を感ずるのである。

赤い球と、青い顏と、そして、首垂れた、ひもじさうな樣子をして、つゞいた人間の群とが、目を閉いでもはつきりと見えれば、また、眼を開けても、眞暗の中にあり／＼と浮んで見えるのでした。其のために私は、苦しめられた。よく眠らないと翌日は、頭が重くて、一日愉快でないので、また敏捷に働くことが出來ない。これまでの習慣を思ふと、刻々と時の更けるのが分つて、氣を揉むばかりでありました。

明る日は、私は、朝早く家を出ました。

（昨夜の男は、大會に來てゐるかも知れない）

私は、かう思つて、あの男が忘れて行つた册子をポケットの中に收めました。

午後まで、私は、何處かでうろついて、時を費さなければなりません。私は、公園へ行く目的で路を歩いてゐました。いろ／＼の人々と擦れ違ひました。しかし、其等の人達は、午後から街のある處で、無産者大會があるといふことを知つてゐるやうには見えませんでした。彼等は、てんでに各自の幸福を夢想してゐるらしく、或者は杖を振りつゝ行き、或者は煙草を喫しながら歩いてゐました。女は、どんなに自分の服裝の美しさが人目を惹くであらうといふことに

のみ氣を配つてゐるやうにしか思はれませんでした。

公園へ入ると、濕つぽい朝の空氣の中に、眞靑な枝を交へながら樹木が聳えてゐました。私は、其の下にあつたベンチに腰を下しました。そして眼の前に垂れてゐる、一本の枝をなつかしげにぢつと見守つてゐました

まだ、天氣が全く定らないものと見えて、空は、灰色の雲に掩はれてゐる處と、晴れてゐる處と半ばしてゐます。其れでも、遠い雲切れのした靑い空は、深い瞑想を私の心に呼び起さずにはゐませんでした。ベンチから離れて、しばらく公園の花壇を巡つて、眞紅な花や、白い香の高い花を愛しました。至る處に仕事のない人がゐると見えて、もう其の邊のベンチにつくねんと腰をか て首垂れて考へこんでゐる者もあれば、また、煙草を喫しながら當もなく空を見てゐる者もありました。

「働く氣力の無なつたものなら仕方がないが、其れでなければ、君等のために、いよ〳〵戰鬪を布告するのだ。恐く無產者大會へ行け！」

私は、かう叫びたいやうな氣がしました。すると、ポケットの中にいれてある、あの物凄い寫眞のプロパカンダが氣にかゝりました。

（自分が捕つたら、きつとこのポケットの中まで檢べられるだらう。その時、この怖しい、物凄い冊子が現はれる。貴樣は社會主義者にちがひないさあ白狀しろ。この書物を何處から手に入れた）と聞かれるにちがひない。自分は何と言つて答へていゝか。其時、恐らく何んと言つても彼等は信じないだらう）

私は、叫ぶことを躊躇した。空しく立止つて、前方を見ると、白い煙が、一つの煙突から吐き出されて、其の上の灰色の空の中に注いでゐるのでした。私は、なほぢつと煙と空とを見詰てゐました。すると、空と煙の距離は非常な隔り

があつて、煙が空に注ぎ込んでゐると見へたのは、全く、錯覺であることが分りました。

（この灰色と白色のやうなもんだ。似た色合だが、また二つの性格は決して、いつしよに結び付くことはないのだ）

考へて見るとこの人生は寂しかつた。ほんたうに手を握り合つて泣くやうな者は誠に少なかつた。私は、公園を出たのであります。

裏通りを歩いて、ある新聞社の前に出ると、其處には、當日の新聞が掲げてありました。其の前に、商人風の男や、勞働者や、また學生などが立塞つて、熱心に讀んでゐます。私も其の仲間に入つて、三面の社會記事に眼を止めますと本日開かれる「無産者大會」に關して、其筋の警戒は嚴重であらうと書いてありました。私は、皆ながどんな記事に對して興味を持ち瞳を向けてゐるだらうかと思つて、彼等の顏を見廻したのでありました。

其れから、靜かに新聞社の前を立ち去つて、あちら、こちらとさ迷つて時間を消すことに力めました。私は、まだ朝飯を食べてゐなかつたので、やがて朝飯とも、晝飯とも付かぬ食事を取るために、牛乳店を探したのです。硝子戸に赤い字で「牛乳店」と書いたのを見付けて、其家に入つて、私は、また、テーブルの上に載つてゐる數種の新聞に眼を晒らしました。牛乳を飲みながら麵麭を食べて、やがて其等の新聞を讀み盡してしまつた私は、其處にあつた雜誌を引き寄せて、どんな寫眞がのつてゐるかと頁を繰りはじめたのです。其の中には、所謂貴婦人とか、金持とかの令孃の寫眞が載つてゐました。其の顏を見ると、何れも人生の辛酸を知らないだけに、苦勞をした人間の眼から見ると、どこか間の抜けたところがあつて、人形のやうに思はれました。奇麗な服裝を身に纏ふて享樂の道具となつてゐる他に、何の考へもなささうな顏や、腕のふくよかな姿は、私をして譯もなく、この女等を植物といふ感じを抱かせたのです。こんな階級もこの社會にあるのだと思ふと、私の胸の中は何となく、むづ痒くなるやうな——其れは、癇癪の起る前の狀態で

あるが――感じがしたが、無理に押へるやうにして、次から、次の頁を繰つてゐるうちに、ふと「慈善舞踏會」といふ文字が眼に付きました。

私は、この慈善といふ言葉が大嫌ひだつたのです。年の暮になると、救世軍の慈善鍋といふものがあるが、私は嫌ひなのです。いつたい慈善を受けなければならぬ人間といふものが、この社會に特に存在するといふのか？ そして、慈善を施して、其れを名譽としたり、もしくは自己滿足をする階級といふものが特に存在するといふのか？ そして、其の事を正當と解釋するのか？

私は、ぢつと我慢をして、其舞踏會の光景を目撃する――太い圓柱、華麗な建物の内部の賑やかな装、飾りのついた幾つもの電燈が下つてゐる。其の下で、男と女とが抱き合ふやうにして踊つてゐる。女は半裸體で脂肪の塊のやうに肩の曲線を見せて、ちやうど家鴨のやうな様子付で、音樂のまに〱踊つてゐる。男女は、床を踏んだり、また脚を揚げたりして――これが、病める者のために、苦しめる者のために、不幸な人間のために、なされる慈善舞踏會なのだ！無産者は、一生の間に、こんな場處へ來ることは、恐らくなからう。また、こんな處で食事をするといふこともなからう。其れだのに、彼等は、いゝ香氣を嗅ぐ、うまい物を食べる、歡樂に陶醉する、そして、其れが、不幸の者のためになされる慈善會なのだ！

私は、其の牛乳店から出ました。

會場の近くに來ると、隙間もなく警官隊が其の入口を警戒してゐるのを見ました。私は、怖れた。無限の勢力を。光る劍の地面に打突る音、靴のすれる音、彼等は帽子を被つて、眼を光らしてゐる。私は、譯もなく、たゞ仰々しい警戒の有様を見た。前を塞いでゐる鐵壘の堅いことを感じた。

（警官の數は無限である）

何が正義か、何が眞理か、たゞ勢力のある處に歸するのである。私は、かう思ふと急に憤りよりは寂しさを感じました。そして、しばらく默つて見てゐると、警官の凄い目の光りを浴びて會場の門をくゞる者は、皆な青白い勞働に疲れた青年か、さもなくば貧しさうな、きかぬ氣の學生ばかりであつた。刹那、私はあの華かな舞踏會の光景を想像した。これは、何といふ、脆い、また、悲壯な光景であらう。私は、やがて彼等の後につゞいた。

「ペトログラードの革命の時には、兵士は同胞に銃口を向けることを躊躇したけれど、警官は最後まで民衆を壓倒しようとした」……私は、二三日前に讀んだ、ある記事を思ひ出しました。

（猶太人の虐殺、アルメニヤ人の虐殺、朝鮮の虐殺、ニコライエフスクの虐殺、世上に行はれた怖しい、身の毛の慄つやうな事實も、行はれる時は、なんでもなく瞬間にされたにちがひない。たゞ機關銃を四五へんも引けばされることなのだから）

私は、流れ出る血のことを考へると、容が急に紅くなるやうな氣がしました。そして、自分を忘れてゐました。

「オイ、何か持つてゐないか！」

一人の警官は、かう言つて、私のポケットを探りにかゝつた。私は、驚いて言つた。

「これは雜誌です。何にも持つてゐません」

警官は、其の雜誌に手を觸れた。けれど、引出して開いて見なかつた。私は、やつと會場の中へ入ることが出來ました。

場内は、青ざめた顏で滿ちてゐる。それに對抗して、無數の劍を携げた警官隊が向ひ合つてゐる。——かうして時間

は經つて行つた。

やがて場内を形容のされないやうな氣味惡い沈默が占領した。この時、咳一つする者がなかつた。私は、アンドレイフの「赤い笑」の中にある、ある場面を思ひ出した。この沈默を破るものは何か？次の瞬間に、私の胸はわく／＼とした。拍手の音が急に起つた。つゞいて、黑い服を着た背の低い勞働者が、演壇に現はれた。拍手の音がいよ／＼盛に起つた。

其の男は、火のやうな、熱烈な口調でしやべつた。

「諸君、……賃金値上が目的でない。目的は資本主義制度の破壞にある。人間平等の權利を主張するにあるのだ……」

何かもつと強く言つたと思ふと「中止！」された。次に出た辯士も半途で中止された。そして、其の次に、社會主義者として、名の知られた某が出ると、中止！……會は遂に解散を命ぜられた。

場内は、急に騷々しくなつた。マグネシユウムの爆音、罵詈、至る處で警官と民衆の格鬪がはじまつた。そして、騷いだ者は悉く檢束された。

この時、私の前に、數尺隔つた處で紺の着物を被た學生が急に脫いだ帽子を、片手で振りながら、革命歌をうたひ出した。

「…………………

老いたる父もいたましく
彼等のために餓死したり
…………

我等は寒く飢えたれど
尚ほ團結の力あり
嗚呼起て君よ×××」

其時、警官は走り寄つて、「默れ！」と叫んで青年の襟許を掴んだ。青年は、それでも手を振つてうたひつゞけた。すると、二人、三人警官は群集を押し分けて、青年を目がけて走り寄らうとした。そして、力を合せて、青年を檢束しようとした。すると、私の傍に、羽織を頭から被つて、顔ばかり出して、鷲の眼のやうに光る眼付で、先刻からぢつと其の有様を見詰てゐた勞働者があつた。其の眼は憤怒のために燃えるやうな輝きを放つてゐた。

「何しやがるんだ」と、彼は、低く力強く叫ぶかと思ふと、身を躍らして、檢束しようとする警官の手から、青年を奪ひ返さうとした。しかし、其の勞働者もまた忽ち、多勢の警官のために檢束されてしまつた。

私は、押されて、いつしか會場の門の外まで出てしまつた。すると、其處でも警官は群集を追ひ立てた。

私は町を拔けて、濠端の方へ歩いて行きました。暗い、濁つた水の面に、木の影や、雲の姿を映してゐました。そして、水の上がほんのりと光つてゐました。私は、しばらく土手について默り込んで歩いてゐました。

顔を上げると、此方を振向いて立つてゐる男があります。私は、誰を其男が待つてゐるのかと思つて、あたりを見廻はしたが、他に人影がなかつたので、怪しみながら近付くと、

「あなたは、無產者大會に行かれたのですか」と、其の男は、私に、たづねました。

「さうです」

「僕も、行つたのです。ちつともしやべらせんのは、實に横暴ですね。頭から叩き潰されるとでも思つてゐるんでせうか」

二人は、並んで歩きました。

(この男は、何處の工場につとめてゐるんだらう)と、私は、思ひました。

「少し、この草の上で休みませんか」

其の男は、傍の土手の方を指して言ひました。私は、うなづいていつしよに、草の上に腰を下しました。

「あなたには、いろ〳〵な會で二三度もお目にかゝつたことがあります」

「さうですか。して、君は、何處の工場ですか」と、私は、きゝました。

「セルロイドの工場です……」

二人は、勞働問題について、また社會問題について語りました。ある時は、私は、其の男が熱心に語るのを默つて聞いてゐました。

「學者達は、いろ〳〵理屈を言ひます。けれど、人間の生活そのものを他に措いて、何も理屈はないのです。實感なんです。虐げられて來た者には、たゞあいつ等が憎いんです。默つてはゐられないんです。反抗しなければならないんです。學者達には、この感じは全く分らないんです」

彼のちゞれた柔かな髪は、其の男の情熱の性質を思はせました。痩せて、色が白くて、眼尻に小皺の寄つた顏付には善良な氣質が表はれてゐたけれど、何處にか傷ましい影があるのは、この男の生活の苦勞を偲ばせるのでありました。

「貧困の最中に、僕は、小供を亡したことがあります。小供は苦しみぬいて死にました。僕は、小供が小さな體で、或

後まで死の苦しみと戰ひつゞけた、其の間、これをぢつと見てゐながら、何うすることも出來なく、全く氣が狂ひさうでありました。肋骨の見える痩せた胸は苦痛のために、折れさうに波打ちました。そして、最後まで私に縋らうとして、子供の眼は私の顏を見詰めてゐました。額際からは、玉のやうな汗が流れてゐました。十になる女の子でしたが、行先きの長いのに、人生を見ずに、慌しく、貧困と不幸の裡に生を終つてしまつたかと思ふと、僕は堪まらないのです。僕はもう何もかもいらないと思ひました。其時から、命を復讐のために捧げるべく決心したのです」

彼は、かう言つて、ばら〳〵と涙を眼から落した。

「よく、君の氣持は分る」と、私は、感動せずにはゐられなかつた。

二人は、草の上から起き上つて、また路を歩き出しました。

別れる時に、

「いづれ、またお目にかゝります」と、彼は言つた。

「左樣なら」と、私は、言つた。

私は、それから獨りになつて、町の中を歩きました。そして、ある橋の上に立つて、あちらを見た時に、灰色の雲を破つて、入日が重なり合つてゐる建物の背後に沈んで行くのでした。水の面が、一時かつと夕映の影を宿して、舟が音なく、上下に動いてゐました。私は、底の方に輝かしい光りを湛えた夕暮方の空を見上げながら、しばらく石の如く默然として立つてゐたのです。

彼方の街には、火が美しくついて、人々が往來してゐました。かうして、天地は靜かに、事なきが如く暮れて行くの

でした。

この地上に、飢餓や、殺戮や、貧困や、牢獄や、死刑臺や、孤兒院や、瘋癲病院などといふものが、存在しないやうに……。

私は、首垂れて群集を分けて、暗い、淋しい、自分の宿の方へと歩いて來ました。

(檢束された、あの人達は何うしたらう)

かう考へるだけでも、私の頭は重苦しくなるのでした。

「山尾君ではありませんか」

不意に、私は、かう呼びかけられた。見ると、背の高い、黑い上衣を被て、白いズボンを穿いた、昨夜の男が、傍に立つてゐるのでした。

(この男は、俺を付け狙つてゐるのぢやないか)かう思つたが、また、遇つたならばと思つて、今日、態々持つて出た雜誌を渡されるのを喜びました。

「これから、上らうと思つてゐたのです」と、男は、冷たく笑つて言つた。

「あゝ、雜誌ですか、こゝにありますよ」と、私は、言つて、其の冊子を渡した。で、直に別れて、群集の中に身を埋めました。私は、どういふものか、あの男に親しみが感ぜられなかつたのです。

――一九二一、六作――



植物物語

室生犀星

晴れた朝日の庭木のなかに、植木屋の市さんの鋏の音が、鶸の小鳥のさへづりのひまひまに、なれた金鳳の柔らかい音を立ててゐる。ひわいろの美しい庭土の上に若芽を着けた小枝があちこちに散らばつて、その若芽が青い蝶のやうに庭土に荒されたまま算を亂してゐる。

前庭でふうてふを私は植ゑこんでゐたのである。ふうてふと云ふ陰草は、敷石にあしらつたり雨晒しの支那壺のまはりに、その齒朶のやうな細かい葉を壺の肌に觸れさせたりする下草である。ぜんまいのやうな白い綿帽子をかむつてゐて、なかには、綿を破つてでた芽生えの淺い綠がわけても美しい優しい色を日に透かしてゐる。敷石のまはりに三株ばかり植ゑると、私は草履ばきで、そのまはりの柔土を踏んで固めてゐた。が、どうも惡寒がしてならな つた。手洗鉢のまはりには縞葉蘭を二株、袖垣の前にはおかめ笹を還はして、そこへ壺を二つばかり轉がしてをいた。吉字草や擬[illegible]

の芽を隅にあしらつて、最後にいぶきで玄關の片側をへり取らうとしたとき、うしろからどつと寒い氣を吐きつけられたやうで、すこし身慄ひをかんじた。

奥庭では、市さんがベンチを拵へてゐて、がりがりと丸太に鋸を入れてゐた。私は立つてみてゐるうち疲れてしまつて、オガ屑がだんだん土の上をほの白く染めてゆくため、水のうづまきを見るやうで、まぶしくて、くるくる、少し光るため、眩まひがしてしかたがなかつた。

「田端の臺の上には四百疋の飼犬が居るんだつて、それに野犬が百疋ゐるんです。」

市さんは、こんどはかんかんと釘を打ち出した。息づかひをはづまして、それゆゑ、幾度となく春の鼻水をすするのである。

「晩なぞうつかり歩けませんや。」

私はその光つた釘のあたまが、生きてどんどん沈んで行くのを眺めてゐた。あたりは靜かで、かんかんと金槌の音冴えが若芽にひびくばかりでなく、私のあたまにまで、心立つて痛かつた。

市さんは垣根のそばへ行つて尿をした。あたたかい湯氣があとまでのんびり上つて、植木の新緑のあひまに消えた。となりの櫻がにきびいやゝに美しくふくれてゐた。よく、皮膚のなめらかな人にありがちな、にきびのやうで、さきが光つて、こんもりと小さな家くらゐな枝擴がりをみせたやつが、日ごとにふくらんでゐた。

石を一つ据えても、市さんはすぐ後から筋目を立てた。さうしないと、据はり方がはつきりしないからであらう。誰かの句に敷石に蝶々がひらひらして石が形づいたとあつたのをおもひ出した。

ちよき、ちよき、鋏の音がして梅の手入れがはじまつた。梯子の上の市さんは默つてゐるだけ、あたりはなほ靜か

で、遠鷄のこゑがして、おひるに近かつた。私はぼんやりして市さんの下りるのを待つたが、やりかけの仕事を一と纏めにしないと降りてこなかつた。よい天氣で、梅も杏も紫色の幹をがつしりと組合せて、蝶のやうな若芽をひろげようとして居た。

「動くか。」

「ええ。ぴくぴく。」

「ひだりか右か。」

「こんどは右なんです。ほら帶の上からでも見えるでせう。ぴくぴく。」

帶の上からでもと女はいふけれど、私にはどうもわからなかつた。動くといひ出してから永い間である。さきが動くといふ割合に私は何とも感じないことがある。現に帶の上からそつと見てゐても別にそれらしいことがない。女が自分の腹のなかで動いてゐるため、帶までうごくと考へてゐるのかも知れない。さういふふうに神經ぶかくなつてゐるかも知れない。

私はあたらしく出來たベンチに腰をおろしに、女のそばを離れた。居れば又うごくといふからである。なにがうごくにしろ、私は怖いからである。いまにも、よくありがちな赤子の這ひ方で、えつちえつちと這つてきさうな氣がして叶はなかつた。

「市さん。ごはんですよ。」

「あ。」

女中は、春になつて一どきにふくれてゐた。

前庭へ出てみると、さつき植ゑたものがみな落着いて、水をほしがつて、ちぢんで、葉尖きをちいいと巻いてゐた。窓をひらいて、さて背伸で、三ツ葉のおひたしと鯛のおしほと、庭さきにこぼれた日かげのうららしたのを眺めてゐたが、どうも矢張り寒氣がして、火のそばへ寄つたが、それは却つてあつ過ぎ、はなれると薄いさむさで、たばこが甘美くなかつた。

「植木屋といふやつは鋏と梯のしごとだな。一本切つては撥いて、煙草をのんで、空をみてそれで日が暮れるのだ。」

つまらないことを言つて私はおひるを濟したのである。市さんもいつの間にか遣つてきてお茶をのんでゐる。お茶はいい色に出てゐて、庭の方をながめて話してゐるのである。植木屋とお茶をのむのは、うまいものだと考へてゐた。じつさい、のんびりと樹のほそ作りの足を片つぽを緣側の踏石へのせ、片つぽをまつすぐにして、乘せたやつはくつきりと蝙蝠の色をしてゐた。音をさせない足袋素足て、猫のやうにひつそりした踵をしてゐた。

たとへば、一ところに纏めるために、篠竹に地藏、やや暗みと數とを添えるか、又、あかるい位置に水蓮の大きな鉢を半分土に埋め込んで、緋目高を泳がして、まはりは青々した高麗芝を植ゑ込むか、さうでなければちやぼ松を二三本流はせた下に小さい泉水を澱はせるか、それが子供らしければ、やはり沈丁花やつつじの群生のなかに大きな支那の素燒を据ゑるか、いつそ雪見燈籠に青苔を生やせるやうに雫のこまかい樹を植ゑ込むか、あれか之れかと、私はあたまを疲らして、庭ぢゆうを歩きまはつた。

「何をしてもおもしろくもなささうだし、思ひどほりに拵へたとしてもそれまでだし……。」

私はごつくりと喉をならして考へこんだ。ほんとに何をしても、こさへるまでの樂しみに過ぎない。みんな思ひどほりに造れたとしても高がしれてゐる。寂しいまぎれに次から次へとさまざまな手數を追ひ込んでみるにはみるが、さて

それがどうあらうと、あとから考へたらつまらない

「市さん、それを手入れして貰ふのは止めて貰はうかな。二日や三日ではできさうもなからうし……。」

廣い葡萄の棚の手入れを私は手をふつて止めたのである。吊り床の棕櫚繩がもう腐り込んで、丸太が弱つてゐた。

「葉が出て重みが一どに遣つてきたら一と耐りもありませんぜ。葉の重みときた日にやそりや大變ですから。」

市さんは、木鋏を手にもつたまま、踏臺の上から私のほうを見た。

「そのときはその時さ。今すぐしなくともいいから。」

私はむしろ物憂い眼とつかれた頭とで、いやいやさうに答へたが、市さんは最う一度念を入れると、梯子から下りてきた。――今剪つたばかりの葡萄の小枝からしきりなしに水が噴いて、きれいな雫が落ちてゐて、なかなか歇みさうもなかつた。

「いま水をあげてゐる最中ですからちよいと止みますまい。」

市さんは、さう言つただけ、うすぐらい大きな枇杷の小枝を整りはじめた。ばさばさ音させる小枝が、鋏の音につれて、地上に落ちてきた。枇杷の葉といふものは不思議に乾いた音を立てるもので、小鳥か何かの嘴を啄き合せるやうな音がするものである。

市さんが晩方歸へると、きふに庭のうちが靜まつて、春夜があたたかい翼をひろげるやうに落ちてきた。妙に人數のすくない家といふものは、ああいふ市さんのやうな人がゐなくなつても寂しいものである。

が、葡萄のれいの小枝の雫は、晩になつても時を置いては、しとしとと落ちてゐて、きりがなかつた。水分の多い樹のこととて、内部にあるものをすつかり噴き切つてしまひさうで可哀想な氣がした。手入れされた庭はしんとしてゐた

からで、なほ氣がかりになるの、ある

「いったい何時まで落ちるのだらう。」

さう話してゐる晩ぢゆう歇まなかった。灯あかりで小枝の切れ口を小紙で結へてやっても、じくじく沁み出て、滴りになってもう雨垂れのやうな穴を穿つのである。それがあらたに越してきた此の家の緣起をわるくするやうで、氣味惡くひどく神經にひびくのである。

「足をぴくぴくさせる。足らしいものがおなかを突きあげる。」

女はさういふ間にも、腹の方ばかりを氣にかけた。

「すると女かな。」

「どうですか。」

女の腹の方を向いてゐると、腹のなかの兒の容貌が寫眞のやうに、私の顏をすこしづつ寫してゆくやうで私は顏をそむけた。おれのやうな顏だとたいへんな氣がし出した。こんどは庭のくらやみに自分の顏をはっきりと描くことができた。

庭へ下りた。葡萄の雫がしづかに落ちてゐるしたで、ひいやりと一滴、頰のところをやられた。惡寒がまたした。ぞくぞくしたので居間へあがった。

「寒い。おそろしく惡寒がしてきてならない。」

床につくと、れいの前庭のふうてふの陰氣な綿帽子が仄白くうかんだ。どうもあの草がいけないやうな氣がしたが、ぜんまいのやうな嫩葉はきらひではなかった。何もふうてふを植ゑたって何でもなからう。さうおもひながら眠ったの

である。

朝、もの憂くだるい氣分だつた、市さんは最う樹の上で鋏を鳴らしてゐた。どうも悪寒がしてならない。前庭へでると、れいのふうてふが、しんと卷葉に綿をかむつてすくすく立つてゐるのが見えた。が、その根元の土が亂れてゐるので椽下駄でそつと踏んでやつた。大盃といふ楓が赤い芽を亂雁のやうに仄めかしてゐる。

「どうも寒い。」

座敷へあがつて、あぐらを掻くと、組んだ足がどんより登つて重かつた。起きあがらうとしても後方がだるくて、そのまま座つてゐた。

額があつくなつて、からだが火照り出したのである。檢温器を脇へはさんで見た。そのとき珍らしく何年にもない變な豫感におそはれた。すくなくとも十日くらゐは病氣になるかも知れない。どうも病氣にとつつかれさうな氣がするのである。だいいち庭が廣くて前は陰つてゐるからである。——そつと抜いで見ると八度七分あつた。

「とすると風邪でせうか。」

女がきふに心配さうな顔を作り出していふのである。心でかんじるよりも、表情がさき廻りをしてゐるのではあるまいかと、ふいに考へ出した。

「風邪だらうな。」

醫者がきて、左の肩のしたばかりを聽診器で、ひやひや當てた。

「病院へ行つた方がよござんすね。どうもこちらがおかしいんで……。」

私もその氣でゐたのである。こんどは遣られさうな氣がしたのである。

すぐ近くの病院へ行つた。玄關さきに三人の看護婦が階段をうしろにして迎へに出てゐた。ふしぎに眞なかに紅い肥つたのを挾んで、右と左とに低いせいの女が食つついてゐたのだ。偶然かな。ああいふふうに並んでゐるのは。——ちよいとひよろついた。

白い寢臺の上へごろりとやつた。九度六分あつた。醫者がしきりに右の肩さきを、さきの醫者のやうに叩いた。はいせんがいけない。腸もいけない。膀胱もいけない。

「それにしては脈が低すぎますね。かう熱があつて、變だな。」

さう醫者はいふと、氷嚢をひたひに、枕も氷をいれたやつにした。いいきもちだつた。

「氣持は……。」

私は微笑んで、べつにだるい外はなんでもないと答へた。じつさい何でもないからである。醫者はたいがい二度づつ廻診にきた。看護婦がひとり座つてゐる。

九度六分を一二度下つたり上つたりする日が三日ばかりつづいた。私はうつらうつらと睡つたり醒めたりした。檢温器を殆一時間ごとに當てて見てゐたが、熱はなかなか下らなかつた。水銀がいつも九度五六分のところに靜かに停つてゐた。つまり一時間ごとにさうして見てゐるので退屈しなかつた。べつに纒つたことを考へるでもなく、仕事をしようといふ氣が快くなつても起りさうも思へなかつた。

窓のところに櫻の木があつた。玻璃戸越しにながめてゐるといふ氣持ちだつた。ドアを開けては看護婦が脈をとりに

きては去つた。ドアの藍色と、れいの桃色の皮膚とが、ドアの新らしいせいか目に殘つた。

四日目に醫者はあたまを振つた。

「いつたい何の病氣なんですか。それから聞かないと氣がかりですが。」

「はいせんが良くないんですね。」

さう言つて品川の御殿山に、專門の友だちの醫者があるから今日呼んで診てもらつて上げようと言つた。おなじ獨逸へ行つたときの友達だと云つてゐた。この醫者は專門が外科だつたのだ。

「ふしぎに斯うして寢てゐられるからね、さう退屈もしずにね。やはり病氣なんだね。」

私は女にさういふと、女もその通りだと言つた。

女は、大きなおなかを抱えて、毎朝、うちから風呂敷包をもつて、柔らかい食べものを病院のたべものの外に搬つてきた。女中も、それに手傳つて通つてゐた。

呼吸器專門の醫者がきて、ひととほり打診して見てゐたが、足のさきをひよいと叩いて見て

「神經の反射がひどく烈しい。へいぜいから過敏な方でせうな。」

醫者は、私の目いろを讀み込んで、さう言つて、膝のあたまをがつくりと又叩いて見たのである。

「いくらか過敏な方です。」

私は微笑んでみせた。内心ではちよいと近づきやすいやうで嬉しかつた。誰も何も知つてくれない病院で、よそからみた醫者がさう言つてくれたのが、とり止めもなく私を微笑ませた。

「ともかく心臟を冷やすのですな。膀胱は懷爐(くわいろ)で溫めて——。」

この御殿山の醫者は、内科だけにもの優しかつた。そつと横にとか、そのままにとかもの靜かに言つた。

心臓を冷してから、熱は五六分度づつ下りはじめた。そとは花見らしい埃ばんだ風が吹いてゐるらしく、れいの櫻の枝が揺れて、揺れるごとに、ぼたぼた太つてゆくやうに思はれた。

絶對安靜だつたので、仰向いたきりで動かないやうにしてゐたが、小用のときは、女も看護婦もみなドアのそとへ出てもらつた。起きてもらつては困るといふ看護婦をも、無理に廊下へ出したあとで、寢臺につかまりながら、ひよろついて小用をした。さうしながら僅か二三分の間にでも、誰もゐない寂んとした病室が好きだつた。訪問も止めさせられてゐるので、内實は誰もそばにゐて貰ひたくなかつたからである。

看護婦はふしぎに溜息ばかり吐く女だつたので、氣になつた。もう遣るだらうと思ふと必つと溜息を肩のさきからやつた、どうかしてあれを止めてくれればいいがなと思つても一向やめなかつた。

「その溜息をやめてほしいんだが、どうも氣になつていけないんだ。」

看護婦は、すぐ微笑つて

「くせなもんですから、つい思はず知らずやつてしまつて――。」

さう言つて、なるべくしなくなつたのである。

女は毎日、食事どきになるとやつて來た。私はだまつて柔らかいものを雀のやうにたべた。さうして用事がすむと、すぐ歸へるやうに言つた。もうあと一月もないのに階段を昇降するだけでも大へんだらうと、さういふことが氣がかりなのである。さうして私はやはり八度二分の間をうつらうつしながら、かなり快いきもちで、窓のそとをながめながら暮らすのだ。べつに快くなつてから何をしようといふ氣も起らない。ぼんやり怠うやつてをればそのうち快くなるだら

と、さう、ぐずりぐずりと考へてゐるのである。

「ふうてふはどうなつた。もう葉を出したかな。」

私はたまりかねて、なるべく變におもはれまいと、やつてきた女にたづねたのである。あれから最も四五日經つてゐるから、多分、あの綿帽子をぬいでしまつてゐるにびつてゐると思つたのである。

「ふうてふつて何でせう。」

「前庭へ植ゑたぜんまいのやうな草なんだ。敷石のまはりにある……白い帽子をかむつた奴だ。」

私は布團の間から手を出して、ぜんまいのやうな形をえがいて見せた。

「あ、あのふうてふですか。」女は快活にいつて「もうすつかり葉をひろげて美しくなりましたよ。」

「どんな葉だ。」

「齒朶のやうな、こまかい綠いろの葉です。こまかい。」

それきり私は窓のほうへ顏を向けた。あそこは机の方から見ると逆光だから、きつと葉並がきれいに透いてみえるに違ひないと、さう考へた。が、はじめ、あそこの土が堀つたとき變な根切蟲のさなぎが幾疋も土にまみれて出た。それが生々しい蒼白い蛆のやうな肌をしてゐて、むづがゆい細かい足を、仰向けにされたのでむづむづうごめかした。それが何ともいへない逃さと細さと、むづ痒さでこちらの肌までかゆかつた。と、そこへ日光がしづかに移つてきた。なほ、肌のいろが白々しかつた。

その一疋の蛹に何氣なく、目を閉ぢて椽下駄を乘せかけた。ぶつすりと肌がやぶれて濕つた音がした。氣味のわるいことをしたものだと思つたが、可哀さうだとはずつとあとから感じた。が、そのときは、その椽下駄をきふに上げて、

とができなかつた。潰れたものを目の前にみるのが耐らくなつて、さうやつて椽下駄を片方そこに置いたまま、とんとんと椽側の方へ礫のやうに飛んできて、さて何もしらない家の者に下駄をとらせた。あとの土をも目立たないやうにならしてをいて呉れと、れいの蛹のことは話さずにをいた。

「あのよき土を掘つたときに、なんだかやはり悪寒がした。あれが一番最初だつたかしら。それともずつと後だつたか知ら。」

ともかく黒土で、なかは温かかつた筈だのに、こちらは反對にさむかつた。まだ幾疋もゐたのを皆土のしたへ埋めこんで置いたやつが、やはりむづむづ動いてゐるにちがひない。きつと土のなかでは暗いにちがひない。それにしてもみんな潰してしまへばよかつたかも知れないのだ。

あの日だつたか、さきにゐた家へ越してきた知人の妻君が、越して落ちつくと病氣してしまつたと聞いた。こちらも越すなり遣られたし、向ふのうちも越すと病みついた。へんだ。

夜は蒸しあつく、だるい幾晩もつづいた。ちよいと寝がへりをうつと、氷袋ががらがら音させて額から辷りおちた。看護婦に目をさまさせまいと、物憂い手を出して額のうへにをいた。が、すぐ辷り落ちた。

「氷ですか。」

看護婦はすぐ目をさました。とうとう目をさましたかな。

「氷がみんな解けてしまつた。氣の毒だが湯みたいだ。」

「ただいま、すぐ。」

看護婦は、氷袋を持つてドアを出て行つた。しばらくすると、階下で、鋭い錐の尖端でがりがり氷を砕いてゐた。そ

れが階下の廊下ぢゆうに響いて、ただ一つの脱けくちの階段から上つて、すぐ私の病室のドアにひびくのである。がりがりとも聞えるし、錐を突つ立てる音もする。やはり蒸しあつたかい靜かな晩である。ギイと開くと、新しい冷えを私は額と後腦と、もう一つ心臓のところに感じた。それが奈何にも新鮮でいきなり冷たい果物にしやぶりついたときの氣持だつた。すぐ起してくださいといふと、この小さい女はすやすやと眠入り込むのである。それがどうも可哀想にみえる。

夜が明けると嬉しくなる。乳屋の車がそのころ病院の前で停まる。それから雀と、窓のさくらと、勝手のポンプの音と。私はすぐに窓掛けをあげさせる。いつも見るものは空の色ばかりである。飽きないものだとさう考へる。

窓の櫻がぽつぽつ散り出した。看護婦らしい好みで枕もとへ生けた櫻を棄てさせた。擽つたくなるからだ。心臓を冷してから熱はずつと下つた。七度五六分あるきりだ。二三日すれば退院しようと考へた。しばらく寢てゐるうちに、すつかり何かが變化つてしまつたやうに思はれる。病院からすぐ近い自家の通りもかはつてゐるやうに考へるのである。

晩、あたたかかつたので、きふに退院したい氣がした。みんなの止めるのも聞かないで、車に乘つた。――家へかへると、前庭を見ないで、又睡つた。

五六日經つと、座敷のなかだけ歩けるやうな氣がして、歩いてみた。膝がしらにちからがなくてふらふらした。が、柱につかまつて、やはり、れいの陰草のふうてふを眺めたのである。すつかり伸びて淺い綠がこまかい葉を日影にす

して見せてゐた。れいの綿帽子はどうなつたか判らなかつた。

「いつたいあの陰草でこんどは遣らたれらしい氣がする。なんと言つても綿をかむつた格構がたまらなかつた。」

寝てゐても床から伸びあがつては見た。氣になつて仕様がない。

市さんが又笑はじめた。

「飛んでもない災難でしたな。わづかな間だつたが。」

市さんは、仕殘した手入れをぼつぼつ庭さきではじめた。

「庭へ出たいがまだふらふらするのだ。」

私は、硝子障子のうちから、市さんの鋏の音をききながら、起きあがつたりした。ふしぎに胡瓜や蕗や茄子や荀がたべたかつた。わけても青いあたらしい胡瓜のつけものが食べたかつた。

女は、私の病氣がよくなり出すと、病中はすこしも言はなかつた腹の子のことを話し出すのである。それも、ときどき今夜にでも生れさうにいふのである。腹の子がずり落ちてきてならない。と言ふのである。

「今夜なんてことがあるものか。まだ一ト月ある。」

私は、指を折つて幾たびもしたことを又繰りかへすのだ。

初めて氣がつくと、なるほど、女の腹がふくれてゐる。一日づつふくれてゆくのが、毎日見てゐるせいで、一向に氣づかなかつたのである。さかさまになつて、八ツ手の新芽のやうなやつが、あそこに潜んでゐるのだ。それが動いてかなはない。とさう女は、くどくどと言ふのである。

「ともかく何かが、毎日ふとつてゆくのだ。それにおれがつたがれてゐる。」

私は布團をかむつてゐるなかで、手さぐりで蜘蛛のやうなものを操つてゐるやうで、それが何故さういふ氣がするかといふことは判然いへないが、なんでも然ういふ氣がしてくるのだ。布團のなかは暗くて、暗いなかで、おれのからだが横になつてゐるからだ。人間のからだの大部分はいつもさういふ暗みになれてゐるわけだ。生涯日光をうけないからだだつてあるにちがひない。

私はむんずり立つてみて、立てることに自信をかんじた。ずつとさきに、はじめて疊の上だつたか板の間たつたかを やはり、かうしてふらふら起ちあがつた經驗があつた。なんでも生れてから二三年してからだつた。私はあかるい方へ向いて這ひ廻つてゐた。障子だつたか窓だつたかが、いつぱいに明るい光にみちてゐて、やはり暖かすぎる頃だつた。青い樹のかげを見たやうな氣がした。ぱつとした花やかな物だつた。それすらも今かうしてゐるので、それから起きてくる感じかも知れないが、這つてゐたことは實際だつた。兩手をばたばたた疊だつたか板の間だつたかに音をさせて、やたらに這ひ廻つてゐたものだつた。蟲とおなじいやうに明るいところが本能的にすきだつた。すくなくとも然う考へたらしくばたばた這つて行つたのだつた。

それから何かの支へがあつて、やつと起てたのである。そのときも膝から下がふらふらしてゐた。支へてゐるものが柱だつたか人間だつたか、それとも何かから机のやうな角ばつたものだつたかも知れなかつた。さうおもへば、その角ばつた机のやうな箱のやうなものの角で、腹を突きあてたおぼえも殘つてゐた。さきがふしぎに丸かつたところから考へると、机や箱でなくて、人間の膝とか肘とかだつたかも知れなかつた。そのときは吃驚したが泣かなかつた。いや泣いたかもしれなかつたが、そのどちらだつたか覺えなかつた。――何でも立たうとした。さうして立てたのである。やはり明りの方を向いてゐた。蟲のやうに――そして私は聲をあげた。嬉しかつたのだ。はじめて高みで膝がすくんだの

だ。

私はそれゆゑ今かうして起つたことが、かなはないほど嬉しかつた。なほつたぞといふ氣と、庭をあるけるぞといふ氣とが、私をむやみに潔よく快活にした。病氣でねたのは十四五歳のときに十日ばかり遣られただけで、ずつと今まで持ちこたへた。十五六年もちこたへた。永い間もちこたへたやうな氣がした。そのとき私はもうヒイローといふ煙草をのんでゐた。それが病氣してから些つとも喫みたくなかつた。ふだん着の袂のなかにやはり全快してからも、れいの柔しい紙箱がのこつてゐた。それをさぐり當てたときは嬉しかつた。やはり青いものの芽ばえる五月ころだつた。庭へでて、杏のわかばの蔭にしやがんで、そのあまい煙をこつそりと喫んでみたいのである。が、味はなかつた。ふしぎに辛過ぎて咳せた。若葉のせいだつたか空氣の濃いせいだつたか口の中が荒れてゐたせいだつたかも知れなかつたが、うまくない、唾を吐いて、長い纎いやつをすつと惜氣もなく棄てた。棄てたところに日が當つてゐて、わづかな紙卷の西洋紙が光つて眩しくて弱つた視力を一度に刺戟した。私は目に片手をあてた。さうして反對へ向いた。そこの草むらには百合が五六寸、石菖が敷石をとりかこんで行儀よく、眞蒼にすくすくつツ立つてゐた。

あの病氣ちうもやはり鷄卵と牛乳が置かれてあつた。こんども、しつこく鷄卵と牛乳とがおれのあたまの上に置かれてあつた。圓いやつと圓いやつとが累つて、上のやつのうつすりした影が濁り水に日があたつたやうに落ちてゐた。そこは牛乳が白濁りして、それはいつも一本立つことにきまつたやうに、やはり一本立つてゐた。牛乳も寂しからうがこちらも耐らなかつた。毎日ああして新しく取りかへられて執念深く立たされたのでは、それがもの言ひさうで、へんで、白くて靜かで、あたまのカチンといふバネまで變だつた。前もうしろもなかつた。どちらを向けたらいいか、スイと指で押し倒すと、それきり不安で、やはり立てることにした。横においたら一生氣になるやうな氣がしたからだつた。

「乳の瓶をね。そとへ出してをいてくれませんか。」

私は、あらたに雇ふた貴族の令嬢のやうな顔をした一等看護婦にいふたのである。束髪が恐ろしく衒學的だつたのだ。

「お氣にさはりますの。」

「どうもいけない」

そこでかれは、これをドアのそとへ出したのである。やはり鷄卵の胴ッ腹を私はまい日ながめてゐたのである。晴れた日と、曇つた日と、かげがうすかつたり濃かつたりした。

女がきて、それを茶碗の端で、ばさばさ破つた。きいろい奴と白いやつと、べつべつに殼のなかにゐては生涯一しよになれないやうだつた。女は、それを黄いろいやつばかりを私に吸はした。喉へ、そいつがいつも流れこんで、たまぬるくて、匂ひが鼻についてならなかつた。

「また卵か……。」

私はしまひにさう言ひ出した。おなじものばかりで、味氣ない世だつたのである。女はそれきりそれが戯談とも本當とも、どちらにも取れないで、ぼんやり殼をもつたままで居た。

「卵より外になにもないんです。お乳ぐらゐで。」

「牛乳は室へいれてくれるな。匂ひをかいだだけでも二度ぐらゐは上る。」

私はうそと本當とまぜて、かさだかに怒らいふと、誰にあてつけたといふこともなくいゝ氣味だと思ふた。ほんとにいい氣味だつた。そこで女はしかたなく自家へかへつてゆくのである。切角こしらへたものを持つて行つてもだめだし、大きなおなかをかかへて行つても邪魔氣にされるし、同じ道を一日三度づつ通ふので近くの人がへんに見送つてゐ…

し……女は、垣根にはさまれた靜かな町をとぼとぼとかへるのである。

「もう歸つたか。」

「え。おかへりになりました。」

看護婦はさう答へた。私は窓の方をむいて、さて胡瓜や茄子、いんげんを起きたらたべようと考へながらうとうとするのである。

ふしぎな食慾が起りはじめたのである。はじめ胡瓜が食べたかつた。青い二寸ばかりの奴をさつくりと齒にあてるといい氣持だつた。茄子は銀座にも上野にもなかつた。神樂坂に二個あつたきりだつた。荀、いんげん、わかめ、蕗などが毎日たべたかつた。嫁菜は庭の隅にたくさん生えてゐた。山薮の芽は、人の家の垣根にあつたのを女中がこつそり採つてきてくれた。

いちばん甘美いものは胡瓜だつた。青くさくて、腹のなかへ新しい空氣をかためて入れてをくやうでうまかつた。床の上で、毎晩買つてくる胡瓜を、次の間からそのまま買ひ立ての風呂敷から取り出して見せてくれるのを、私は樂しんで眺めたのである。そのあとで、次から次へと、食ひもののことを考へてゐた。

私はふしぎな、れいの西洋芹のことをぼんやり考へた。私の郷里の犀川の上流を、そのころ齋任したばかりのアメリカの宣教師がコックに案内させた。宣教師などは古い市街のことでほんの一人か二人に過ぎなかつた。三年とか四年目にカナダから交替してやつてくるのだつた。

その宣敎師は、ポケツトから小さい紙片を取り出して、上流の磧の位置や橋の名をコツクに向つては、紙片とつき合してゐた。そこは上流でも、めつたに水のついたことのない高い磧になつてゐて誰もあまり行かなかつた。磧へ下りると、宣敎師は、れいの紙片と照し合せて、どんどん雜草や茨やすすきの間を步いて行つた。丈の高い西洋人の黑服が、草頭にややともすると隱れようとしてゐた。いつたいコツクは何のために、その西洋人が河原ぢゆうを搜してあるくのかわからなかつた。かれは言ひ附けられたまま、そこらの石の上に腰をおろして待つてゐた。間もなく西洋人は高い聲で呼んだので、行つてみると、宣敎師は額の汗をふきながら眩しいほど白いワイシヤツ一枚になつて座つてゐた。

宣敎師は嬉しさうにすぐ前の一叢の靑いものを指さした。見るとそれはまがふ方もない柔らかい西洋芹で、あたりのどす黑い綠の雜草にくらべると、明るい綠のいろをしてゐた。コツクは、この古い市街に一株として生えてゐない此の西洋芹が、しかも僞う云ふ荒凉とした磧に生えてゐようとは思ひがけなかつたのである。

「これを御らんなさい。」

宣敎師は、さう言つて、れいの紙片をコツクに手渡した。それには、上流の土手から磧の道が、ちようど西洋芹の生えてゐるところまでこまかい雜草の名まで記されてあつた。その手蹟は、この間までゐた宣敎師の手蹟だつた。

「あめりかで、この芹の生えてゐることをきいたんです。それにしても能く生えたものだ。」

宣敎師は、さきの牧師が日本を發つときに種を蒔いてをいたことを話しながら、懷かしさうにその明るい綠のあたまに觸つてみてゐた。

私はこの話を去年國からきた人から聞いたが、いまでもあまり人に知られないで澤山生えてゐるといふことだつた。れいの、こまかい美しい葉をもつた西洋芹が、荒い石と水とから盛りあげれた磧に生えてゐるかと思ふと、それが食べた

くて仕方がなかつた。へんに歪み出した食慾は、青いおひたしになるやうな物さへみれば、それがすぐおひたしにして食べられさうで、さう爲ないのは、こちらのがまだ然ういふことを知らないからだとも思へた。擬寶珠の芽生えなど、どう考へてもうまさうで、柔らかい味をもつてゐるやうに思はれた。さつとゆでて、さつくりと庖丁をあてたらいい氣持だらうと思へた。女がああいふ青々したものを毎日切つたり茹でたり、搦つたりすぐつたりするのが、妙に植物性な肉體が偶然に厨のすみで、なにかかう特別な、聲を出さない話みたいなものをしてゐるやうに思はれて仕方がない。かぶの大きい漬菜の白い根もとをゴシゴシ洗ひながら、はんたいに手を眞赤にしてゐること、そんな日はきまつて天氣のいいこと、水道の走りのいいことがおさだまりのやうだつた。厨のしごとで、女は樂しまないことに嘘のやうに思へた。ああいふ美しい肉感的な野菜を思ふぞんぶん、切つたり鹽したり、ときに、肉がしらで味はつてみることなぞ、私はしごととして快よいもののやうに思へた。さうでないとしたら飾慾だとしかいへない。

さて、その西洋芹のことを、私が案内した植物園で話しながら、いちばん後に話した人がかう附け加へたのである。

「コックが毎日要るだけしか摘まないんださうだ。それ以上毛滞が摘んぢやいけないと言ふのださうだ。」

この話はたえず私のつかれた頭をゆききした。そとを歩けるやうになつたら國へ行つてその磧をたづねて見ようかとさへ考へ出した。が、もう必然みんなが見つけてしまつて、あとかたも無いやうになつてゐるのでないかと、さう心細い氣もしはじめた。

女は女で、毎日、こどもの爲めにちやんちやんやネルの單衣や赤い帽子などを、蟲が蟲の子を可愛がるやうに灯のそばで縫つてゐた。いく枚も數多い小さい着物は、たたまれ累ねられてあつた。ふしぎに女は一枚縫ひあげると、それの兩肩をもつて展げて見せてゐた。なぜさうするのか分らなかつたが、間もなくそれを着るものを僅かに見て取つたやう

にさうするのである。

女はきみ悪いまでに、寝るにも起きるにも小兒のことを口にするのである。私は私で、まだ確かに女の腹のなかに私の兒があらうとは、しつかり考へられないのである。出てしまはないと、私はまだ信じられないのである。たしかに、あそこに動いてゐることとは感じてゐても、女自身のやうにぴくぴく直接うごいてこないから、受けかたが弱い。それゆゑ兒は女のもので、男のものでないやうな氣がする。腹に持つてゐることが何より確かだからだ。

熱い夏のことだつた。清水がじくじく山路や水苔の間から沁み出してゐる山土の崖のところで、小砂利を掘つては私は爪のさきを痛めてゐた。わづかな清水だつたが、冷たくて良い水だといはれてゐた。まれに土蜘蛛や黒い毛蟲のやうな水むしが、うづうづ動いて這ひ出してゐた。そこには紅甲羅をした美しい小さい蟹がゐた。親ゆびの腹ほどの、はしこい鋏の痛いやつだつた。そこで、私は飛んでもない子持蟹が重さうにあるいてゐるのを上からおさへた。普通の蟹なら横這ひにずり抜ける力をもつてゐて、さう上から押へるわけにはゆかなかつたが、身重な蟹だけに、おさへられてしまふと、それきり凝然と動かなかつた。

あのとき悪いことをした。私はそれを思ひ出すために頭をしづめた。目を閉ぢてみたが、あのときは悪いことをしたと、しんから今はさう感じた。なんでも動き出さうとしたのは美事に私の小さい人さし指でおさへられ、その上、蟹のしたの土まで滅入り込んだ。と、私は甲羅の兩はじを持つて裏がへしに腹の方を見たときだつた。實に白い、きやしやな腹が見えた。腹のなかに一杯のあかいつぶつぶの子が詰つてゐて、苛立たしく私を刺戟したのである。

私はそこで、その子持蟹をどうしたか、それを判然とおぼえてゐない。が、しばらくしてから冷たい清水で私は兩手を洗つてゐた。手の指紋や爪さきに何かしら粒々なものが食つついてゐて、ちよいと身ぶるひした。底の澄んだ清水に

粒々が浮いて又沈んで。しまひには見えなくなつた。私は濡れた手を着物の裾の方へこすりつけて拭いた。やつぱり其處にも粒々が執念ぶかく食付いて、あるものは破れて液體になつて了つてゐた。私は恐かつた。自分のしたことを歴然と振りかへつて、私がどういふ事をしたか。それがしてはならないことだつたことまで、思ひ出されてくるのだつた。

ところが誰でもがするやうに私は振りかへつて、裏向きにされた優しい小さい生きものを眺めた。もう完全に死んでゐた。れいの眞白いお腹を空の方へむけて、かあゆい足をきちんと揃へて拡げられたままでゐた。崖の上は楔々陰草や熊笹などがこんもりと暗みを潜ませて、被ひかかつて、それらの陰影が下の方までしてゐた。かれらは一切にそよいでゐたし、みんな聲をひそませてゐた。しんと耳鳴りが神經的におこるほど深い靜かさが、そこら一杯にひろがつた。私はさう一目みると、あはてて後方をみずに崖から跳つて下りた。はしるとき、うしろへ刎ねる足をしよつちう別なものからで刎ね返されるやうで、息切れがして恐かつた。

やつと川べりへ降りてから、ふりかへると崖はなんでもない崖で、樹もあたり前の樹や葉並であつた。が、着物の裾はしつとりと濡れてゐた。これをしらべてゐるうち、私は又思ひ出した。身ぶるひがした。

ふと、私はかう言つて女に話さうかと思つたのだ。

「おれは子持蟹を一疋、潰つつけたことがある。そのとき何んでも蟹の腹がね。おなかのことだよ。その腹から身ぶるひのするほど赤い粒々がはみ出して、おれの手にいつぱい食つついて離れなくて困つて了つた。」

が、私はだまつてゐたのである。「それが今になると惡いことをしたやうで、なんでもないことだが氣の毒だ。」と、さう附け加へたかつた。自分のしてきたことが、いろいろ重なつて段々に酬ひられてくる今になると、厭なこともやつぱりやつてくるのだと、さう考へると、私は椽側から弱つたからだを離して障子をしづかに閉めた。何も入つてきはしな

いが、閉めた方がやはりいいやうな氣がしたからだつた。

女が湯に行つてかへると、脊い顔をしてかう話した、湯壺にはいつてゐると、二歳　らゐの小兒が、何もいはずに、それこそ聲をも出さないで、女の黒くなつた乳首をながめ、ほんとに心から解つてゐるやうににつこりと微笑　でみせた。幾度もさうやると、女はきふにコワくなつたが、それでも女らしく乳首をちよいと抓んで、その小兒に振つてみせるとなほ微笑んで眺めてゐた。自分は、母親の分をしつかり爪の立つほど握つてゐるくせに――女は、その小兒が女の子か男の子か、それを確かめようとしながら、あとからどうしても思ひ出せないとさう話した。女の子のやうでもあつたし男の子のやうでもあつたと。

「默つてみつめられて微笑はれるとコワい。どういふものかコワい。」

「知つてゐるからだ。見たことのあるものだと思つたくらゐだよ。」

「いいえちがふ。」

「どうちがふ。」

「どう違ふつてことはないけれども、どこ　異ひます。」

女はちよいと胸のところをおさへた。おさへたときに、れいの、ぴくりと動いたものらしかつた。ちよいと蒼くなつて、ほつと呼吸をついた。

「あ、驚いた。」

「どうした動いたか。」

私は珍らしくなかつたので戯談のやうに　つた。

「ええ、ひどい動き方をしたんですよ。見えませんでしたか。」
「見えるものか、こちらから。」
女は、神經的に手を當てきりにしてゐたので、又動くといひはしないが、それが氣がかりだつた。さう言はれるごとに此方に感じかねるものを考へるだけでも、神經が疲れた。ひどく疲れるのだ。

庭が歩けるやうになつてから、病院の前まで行つてみると、私のゐた病室にカーキ色の窓かけが垂がつてゐて、內部は靜かさうだつた。どこか藍ばんだ建築のすべてが新しいだけ弱々しく見えた。
——水蓮の鉢がきて、紅目高が水輪をひいて泳いでゐる。そこに蹈んでながめてゐると健康がしだいに回復されてきたことを感じた。そとを歩いても關はないやうな氣がした。足のふらつくのも段々なほつてきたやうである。
書きかけの病氣前の原稿をみてゐると、或る知合ひから預つてある大和守波平安行の一刀をおもひ出した。鍔も柄もないさつまの新刀が、どつしりと押入れのなかに收はれてあつた。それを取り出して眺めてゐると、この知合ひに金を廻してあげなければならないことに氣がつき、病氣前の原稿をS社への約を果さなければならないので持たしてやつた。その半分を知合ひに廻した。
その間ぢゆう私は刀をながめてゐた。冷たく、露が打ちさうな氣もちで、背を袂にあててはながめてゐた。ふいに、そとへ出たくなつて、止めるのも聞かないで、初めて一ト月振りで電車に乘つた。べつに電車にかはりのある筈はなかつたが、妙に氣遲れがしたのである。

團子坂で下りて、古い道具屋をながめて歩いた。古陶や紫檀の棚や支那のれんや、こまかい彫のある筆筒などがあつた。いちいち、それらを眺めてゐると、靜かなこころよい氣持ちになつた。寒山寺の梵鐘をうつした小さな吊鐘や、灰ばんでコワれかかつた木材の燈籠や、樹の根元にころがしてをきたいやうな素燒の雨取手のついた壺などがあつた。最後に坂下で、戸棚のすみに刀劍が飾られてあつたので、二三振ばかり見せてもらつた。

手ずれの程よくついた白鞘作りの、一點のくもりのない無銘の長刀が氣に入つた。帽子先きを往來の方に向けて、すらりと、伸べて見詰めてゐると、波がたの齒がしらが、折柄そこの老舗の軒下にさし込んでゐる午後の日ざしに、虹立つて美しかつた。なんだか花の香を嗅ぐやうな氣さへしたのである。向側にも古い道具店がならんで、硝子戸越しに支那の大空の肌が黄味勝ちにぼんやり浮いてみえた。うすぐらかつたが紫檀物のつやらしい重みある樹のやうなものも見えた。私などの知らない名前の幾振りかを私は丹念にわかりさうもない顔つきまで眺めてゐた。柄とか鍔とか、あるひは鞘などに、黒でこつくりした拵へがあり、さつま物は頑固な、捻ぢれた拵へがあつた。太平の世に指したものであらう細身づくりの古刀など、まるで新しい一疋の鮎のやうにほつそりと、帽子先きが滴つてゐるやうだつた。

「鍔や柄がだんだん離れてしまつて、もう完全な古い揃つたのが手に入りません。みんな離して賣られるんです。」

鍋島の一枚敷の上に座つた、古めかしい山羊髯を生やした主人は、かう言つて鬱金木綿の袋に刀をしまひ込んだ。

「だがいい氣持だ。すらりと拔いて伸べて瞳を遣る氣もちは素的だ。」

私はさう思ひながら、また一振りだけ見せてもらつた。――紫檀のちよいとした買ひ物をして、ぶらりと外へ出た。そこから直ぐ電車に乘つた。あまり長く端居してゐたので、腰がだるくて、すこしばかり足がひよろついた。

家へかへると、座敷に疲れたまま、どかりとあぐらを搔いて默んだ。ぼんやりしながらも先刻見てきた國廣の波がし

らと、ゆるい坂の上へさしかけた日のいろと、骨董店の軒さきの半幅の紺暖簾とが目にうかんだ。私は立つて床の間の、れいの安行をそつと抜いて眺めた。あたりはひつそりとしてゐた。瞳がしづまつて落着いて、疲れた氣分が霧を吹きかけられた植物のやうに、すこしづつハッキリしてきたのである。かういふ刀劍などに感心するほどデリケエトな私ではなかつたが、これはどうしたものか、ぴつたりと切先きを見詰めるほど、頭が爽然としてくるのだつた。それに庭の青いものが影をうつしてきて何ともいはれない靜けさだつた。かういふところにも、おれの呼吸つける美しさがあつたものだ。私は鞘走るこの刀劍を前にのべながら、しばらく默然として端座してゐた。

弱つた神經には決してそれらの鏡のやうな光は刺戟をふくんでゐなかつた。却つて電氣放發のやうなさつぱりした爽快さを身と心と目とにできるだけ夥しく感じたのである。

古い城下町には、私の知つてゐる限りでは、町裏の、うすぐらい軒深な道具屋のなかには刀劍ばかり竝いでゐる家があつた。鹿の角など掛けた澤　の刀劍がしんと冷やりした空氣のなかで、すこし濕つた匂ひをふくんで飾られてあつた。さういふ店には、きまつたやうに誰も帳場には座つてゐなくて、硝子　匣の奥にそとから聲さへかければ答へるやうに座つてゐたゝのらしかつた。店の前には、みがきのかゝつた欄干があつて、私などよく外からそれに凭れて眺めたものである。人目に立たないやうな店飾りで、入口には篠竹にちよいとした竹棧をあしらつて、古い金の手洗鉢には、それらしい綠青の吹いた手杓が添えられてあつた。

趣みのある冷たさを充分にふくんだ物ばかり舖べてある店内には、覗き込むとすぐ、ふしぎな古めかしい感じと、ぜひ、あれを一本だけ欲しいやうな氣がした。鍔や鯉口や鞘尻に鏤めてある黄金細工が、やつと徃來からうつすりとさし込んだ明りに、何かの花瓣の蕋のやうに微かに光つてみえた。毎日、これを覗かない日とてはなかつたのである。同じ

道をゆく幼ない私だちのみちくさは、さういふ古い町だけに、きまつて然ういふ店さきでされるのだつた。ときには、たんねんに鞘や柄の手入をしてゐる老人の目金が、それの輪廓をはみ出した目つきで、よく私だちを眺めてゐた。古い紺絲などで柄のとぢ目を縫つてゐる老人それみづからが、私には死んだもののやうに古めかしい氣をさせたのである。いつも一つ表情で、動かないで、夕方は夕方のあかりで仕事をしてゐた。うしろに決つたやうに障子がしまつてあり、前には、なまこ色をした火鉢が一つこちんまりと置かれ、いやに光つた眞鍮の火箸がつツ立つてゐた。あの年寄りはいつたい死ぬまであゝして座つてゐるのか知らと思へるくらゐ、店にゐるときは咳ひとつしないやうだつた。

川師、鳶のもの、坊主、一俵取りのはしくれまで、または、すこし古い家の暗い押入れや二階納戸や長持の底や、掛物と一しよくたに束ねたなかや、なげしや、さういふ處には決つて一振や二振はあつたものだつた。ちよいとした年寄のゐる家、たとへ車屋さんの家にまでそれが、秘められてあつた。臺所のナタや薪割などにも、折れた刀が用ゐられるほど、たくさん私の生れた市街に殘つてゐたものだつたが、いつの間にか今日それを持つてゐるものが尠くなつてゐた。寂しい刀劍の都には未だ何といつても遺つてはゐるが、しかし最う古い研師もゐなくなつたし、鞘作、塗屋もいつの間にか町から姿をかくした。よほど古い家でないかぎり玄關口に槍をなげしにかけて置くなどといふことがなかつた。古い苔はむしられるやうに、さうした家がしだいに尠くなつたのである。

私はぼんやりと、薄ら日の白みがかつて射してゐる郷里の市街を目にうかべると、たまらないほど寂寞の感じにうたれた。

女は私がさういふ刀劍を目の前に置いてゐるのをみると、ふしぎに危ながつた。それに安行には骨傷といふきづが刀齒がしらに殘つてゐて、骨董屋に言はせると、人のひとりくらゐ切つたものかも知れない。ともかくまだ切つたあとで研

いでたいといふやうなことを言つた。實際、へんなきづがついてゐた。骨だけはきまつてきづになると言はれてゐるのである。

「ここにすつときずがあるだらう。多分これにちがひない。」

女はさういはれると、コワゴワ眺め入つたのである。そこには、いはゆる骨きづなるものが歴然と殘つてゐた。

「そんなものを家にをくのは危なくていけない。」

さう言ひ出した。

「そんなことがあるものか。魔除けと言つて大切なものだ。」

私は鞘にしまふと、床の間にどかりと置いた。茶褐色の壁の地に、黑塗りの鞘がよく尻を落着けてゐて、輕いかんじがしなかつた。床の間といふものはそれ自體がむかしから、さういふ刀劍類にしたしんでゐたやうによく落ちつかせるのである。障子や襖には合はない。

「死人の上には刀を乘せるといふぢやないか。」

私は微笑んでみせた。つまらないことを言つたものだと、自分でもそれがおかしかつたのである。

「さうですかね。けれども危なくてコワくて――。」

女はたださうばかり言つて、腹の方に手をやつて、いかにも危なささうにするのである。そのとき私はやつと氣がついて、これは胎み女に見せてはわるいかも知れない。あぶないといふ氣もちが讀めてきたのである。ともかく私はそれを餘り女に見せないやうにしようと思つた。

ふうてふは、だんだん大きくなつて齒朶のやうな葉をひろげ、いつの間にか綿帽子を脱いでしまつた。そのため明るい陰影をつくつて、敷石の上に半分ほど乗りかかつてゐた。それを暫らく眺めてゐるうち、私はすつかり健康にかへつたことに氣がついた。いつそ刈つてしまはうかと思つたのであるが、かうなると刈ることのできないほど美しい緑をそよがしてゐるからである。

「つまり此の陰庭を陰處から移し植ゑたから病氣になつたのではなく、はじめから彼の病氣がやつてくるやうになつてゐたのかも知れない。」

さう私は考へついて、はじめてゆつくりした氣になつたのである。

「つまり此の草のせいでもなければ、此の庭がわるいからでもない。はじめから病氣が、十五年目に來るやうになつてゐたのだ。」

同じことを繰りかへしながら、同じことばかりを考へてゐた。いちいち神經にかけてはたまらない。と、さう、あきらめながらゐたのである。

土は赤土で、よく見ると途方もない大きな熊蜂が、くらい沈丁花の根元を下りたり上つたりしながら、穴のなかから土を搬んでゐるのが、しづかに目をすゑてゐると、はつきり描くやうに見えた。ああいふところにも、ふしぎな山蛾がゐたな。すこしも氣がつかなかつたのだ。——私は棕下駄を引かけて、カラン(下駄が新らしかつた。)と、いやな音を立てて、その穴のそばへ蹲くまつて見詰めた。蛾といふものは、小さいほど可哀い氣はするが、大きくなると、頭痛のするほどびつくりさせる蟲だつた。たかが大きいと言つても知れてゐるが、その大きさが分り切つてゐるだけに、たほ

びつくりするのだ。

その穴から絶えまなく這ひ上つてくる山蟻のひとむれは、はしこい觸り角をもつてゐて蜂のやうに鋭どく顫はせてゐた。私がしやがんだことを敏うとくに知つたのか、今まで二三疋づつして出てきたやつが、こんどは、やつと一疋だけ外を窺ひながら、（それが如何にも何者かを感知するやうに。）穴の上から覗いてゐた。からだは黒く鎧を着たやうで、つやが普通の漆塗をつやけしにしたやうだつた。ながめて居れば居るほど不思議な形態をした生きものは、それきり穴を這入つて行つて最う出てこなかつた。そればかりではなく、穴のなかは靜まりきつて一疋として這ひ上つてくる樣子もなかつた。知つてゐるなと思ひながら私はそつとからだを離した。そして椽側へ腰かけてゐると、なまいきな蟻は、いちはやく首を穴のなかから突き出して、あちこちを眺めてゐたが、誰もゐないと見澄すと、こんどは穴から外へ出た。さうする間もなく穴へ又はいつて行つたが、それから先刻のやうに幾疋もぞろぞろ這ひ出しながら、れいの土にこびを始めたのだつた。私はひとりで微笑んで眺めてゐた。利巧なものだなアと毎年のやうに珍らしくもなく私はつくづく感心したのである。

それから前庭をながめてゐたが、蟻のほかに歩いてゐるものが一疋もゐなかつた。垣根、下透きから、そとを通る人の裾の方が見えたきりで、なかには花のやうに赤いのが、なまめかしく植木の緑をそめて行つた。いつたい一日のうち何れだけの人があそこから裾をばさばさ遣りながら、いそいで通つてゆくことだらうと思つた。向ふで知らないで、こちらで知つてゐることのお可笑しさが、しまひに微笑なくなつて、いつか向ふでもそれを知るやうになるだらうとさへ思へた。さうおもふと、ここから眺めてゐるのがいけないことのやうに思へた。

一と月ほど向はない机が、拭かれたままですぐ私のうしろに、寂しさうに置かれてあつた。すぐ横の方に火鉢があり湯

がたぎつて、いつでも仕事ができるやうになつてゐた。が、すぐ机に向ふ氣にならない。ただ、その位置をながめてゐるだけで澤山のやうに思へた。頭をいためながら、自分でもいらいらした男女の生活をかくには、まだ餘程頭がいたんでゐたのである。いまから考へると、病院にゐた間は、ほとんど厭な男女の生活や、それに伴ふ生活などを考へてゐなかつた。金のこと、人のことも、ほとんど夢のやうに去來するだけだつた。それだけでも、藍いろをしたドア一重に世間と隔つてゐるやうで、そのときは左う思はなかつたが、今からみると、なんだか心が正しかつたやうにも考へられたのである。すくなくとも、その間ぢゆう一人になつて、つみのない日を送つたのである。

　女は日ごとに腹をふくらがしてゐた。重さうで、だるい足を引ずつて、庭の椅子にかけたり椽側に端居したりしてゐた。どれだけ考へても、女の腹のなかに子兒がひそんでゐるとは思へなかつた。まだ一度も經驗のない私だけに何が生れてくるか、それが不安で仕方がなかつた。私のやうな人間が人間の子を生むだけの精分をからだの何處にもつてゐただらうとも考へ、さういふ人間らしい資格がおかしくなるほど備へられてあるのが、これまた不思議なほど珍らしかつた。

「動くか。」

「いいえ、動くとおもふときには動かないんです。なんにも思はないときにぴくりとくるんです。」

「何んにも考へないときにかね。」

「ええ。」

　女の方で、動くといはないときは、こちらが氣になつてさう尋ねた。うごいて來ないのも氣がかりだつたし、あまり動きすぎるのも苛々しく煩さかつた。その、どちらかが斷へず私を惑はせ刺戟してくるのである。氣にしてゐないで、

すつかり頭をいつの間にか腹の兒にとられてゐることが、やつと解り出した。

杏の頂には一杯の毛蟲が、蜘蛛の巣のやうな袋をつくつて、なかから、うぢうぢした奴がうごめいて、頸首がうす痒くてぢつとしてゐられなかつた。あいつを燒き殺してしまうか、枝を切るかしなければならないぞと考へた。腹の子をかうしてゐる間にも、ちくりと螫しさうな氣もしてくるのだ。ともかく、どうにかしなければならないと、私は竹切れをもつて立上つた。女は何をするのかと訊ねた。私は枝の頂を指さして、そこに蠢然とうごいてゐるものを見せた。女は、そのとき私が最初に感じたと同樣に、ちくりと遣られたらしかつた。

「何んてひどい毛蟲でせう。」

女はからだをちぢめた。空の方では、のんびりと青々した葉のまはりを王者のやうに這ひ廻つてゐた。そこでは何者もさまたげるものもない平安な心持ちで、その蛆のやうなからだを伸び縮みさせながらゐた。

「じつはおれもぞくぞくするんだ。なんだか背中へも一疋這つてゐるやうな氣がしてならない。」

實際、むづむづ這ひこんでゐるやうだつた。私は肌へ手を廻してみたが何も手に觸るものがゐなかつた。

「燒くのはおよしなさい。可哀想ですから。」

「おれもさうおもつてゐるんだが、このまま置くのは耐らない。」

私はそのとき、緑がふくむうすら寒い若葉どきの風がひとしきりさつと渡ると、いちどきに糸を吐いて、しぜんに枝移りするためにぶら下がつた四五疋の毛蟲を目に入れた。そばへ寄るのも厭な氣もちだつた、私だちは、すぐその樹のかげから離れた。どこへでも勝手に行つたらいいといふ氣持で、もはや竹切のさきまで突き刺すのも、ただ物憂く、億劫だつた。どこかまだ疲れてゐたせいも手傳つてゐたのだ。

灯がついてから、どかりと安座を掻いて、れいの、安行を眺め出した。障子も襖をも閉めたひつそりかんとした中に、私は端然と座つてゐた。

女は、晩から腹が痛いと言ひ出した。まもなく女は苦しみ出した。手も足も、一切が震え出して、脈が不規律に亂れ出した。しまひに上目をした。おさへてゐても、女の震えが私のからだにぶるぶる傳はつてきた。

「目が見えない……。」

さう言ひ出すと、きふに靜かになつて、うとうととするかと思ふと、又悶しみ出した。手をおさへてくれといふ。れいのぶるぶるした荒い電氣のやうな慄えがやつて來た。産婆と看護婦とがどやどや這入つてきた。私はそのとき女の室を出た。

夜がすつかり明けきつて、烈しい雨降りになつてゐた。樹の多い庭のことゆゑ、雨の音がひどかつた。

「あああ……。」といふ聲が、きれぎれに女の室から起つてきた。産婆と看護婦とが、低い聲でしきりに何か言つてゐる。産れるのだ。私は室内をあちゆき此方ゆきした。雨は益々ひどくなつてきた。うすら寒い夜明けがたのなかに若葉が垂れて雫打つて、したしたと音を立ててゐる。

「ぎあぁ――。」

と泣き聲がした。はつとした。氣のせいかと耳をつッ立てた。右の手の煙草の灰が、ぽとつと盆のうへに落ちた。それがきれいに崩れてみえた。

「ぎやあ、ぎやあゝ——。」

そのとき女のうあき聲がばたりと歇んだ。私は鼻のさきを抓まれたやうに、きゆと昂奮した。がすく歇んだ。女はとうとう生み落した。私は何度も襖に手をかけた。見たい氣と觀ると恐ろしいやうな氣と、詰らないやうな氣と、面白いやうな氣とが交る交るしてきた。やつぱり女の腹のなかにあつたのだ。動く動といつてゐたのが、とうとう出てきたのだ。私は坐敷の端へでて、ぼんやりと膠つきをして、雨の庭をながめた。

「ぎやあ、ああお、ああお。」

私は、微笑みながらきいてゐると、もつと泣けといふ氣がした。ふしぎな人間のつながりが何時もかういふ形式で出てくるのか。それにしても私は私の小兒を手にとつてみることが恐かつた。

「さうか、これがかい。」

私は曖昧な顏をして、おそろしおそろし赤子をながめた。まだ目を閉ぢてゐて、鼠の子のやうに柔らかかつた。よくこんな大きなやつが腹のなかにゐたものだと眺めこんだ。が似ゐると思つた。

「ふしぎに育てゐるぞ。」

やはり女と毎日向ひ合つたときに、れいの、寫眞のやうに寫つて行つたのだ、どうも、うつすりと私の顏が、ちぢまつて、映し出されて震えてゐた。ここにもおれがゐる。おれが二人になつたのか、それともおれとは別な人間であるかもしれない。私は足と手とをしらべた。みんな揃つてゐた。

「みんな揃つてゐる。」

私はひとりごとをして室へかへつた。

「ぎやあ、ああおー—。」

と、來た。びくとした。しらずしらず机のところから立上つた。行つたつて仕方がない。座つた。また泣いた。また立つた。ぎあぁ、ああおと泣いた。雨は益々烈しく降り出した。

女は、すやすやと眠つてゐた。何も彼もしてしまつた氣安さが、女をしづかに眠らせてゐた。そのよこに、小さい白蚋のなかに赤子もねむつてゐた。看護婦が雜誌をよみよみ、室內は靜まりきつてゐた。女は蒼白い障子のあかりに揉まれた皮膚をして、左の手を赤子の蚋のそばに寄せてゐて、蠅が一疋じつと止つてゐた。かういふ靜かな時がやつてきたのだ。赤子は、もう一人前になつてねてゐる。母親もべつになつてゐる。

翌日、赤子は、すこし暗くしてやると、うつすりと眼をまぶしさうに明けた。くろい瞳が非常な靜かさで、おどおどと明りの方へ向いた。

「ほら開いた……。」

女は、さう言つて、その細い目を指さすのである。

「何も見えはしないのだ。」

が、おれに、はじめて目をあけたときの記憶があるかどうかと考へたが、そんなおぼえがあらう筈がなかつた。やはり無意識にさう開けてゐるかも知れない。併し私は、かうして目を開き、手足を動かすのが、一日づつ恐ろしい氣がしなくなつて、當り前のことに思はれた。

けれども、れいの、ああおと泣き出すごとに、その聲音が一日づつ強い張りを含んでゆくのが、だんだんに解つてきたのである。夜は頭にひびいて痛かつた。

富籤

長田幹彦

十日餘りもじめじめと欝陶しく降りつゞけてゐた梅雨が、その日の午過ぎからやつと少しづゝ晴間を見せかけてきた。空一面に掩ひ被ぶさつてゐた灰色の雲にはいつの間にかだんだら縞のやうな濃淡のけぢめが出來て、高い雲と低い雲とが面白い樣に違つた速度で比叡の一角へ崩れだすと、それと一緒に西山のうへには久振りに狐色の明るい雲の斷れめが裂ける樣にぽつかりみえてきた。通の方では雨で洗はれた道の面に、長雨の晴れ間を待ちあぐねてゐたやうな輕い下駄の音が亂れて、小供達が精一杯嬉れしさうに喚きながら彼方でも此方でも我を忘れて遊び戯れてゐる。それでも鴨川へ落ちて行く溝川の水音はまだ山國の町のやうに騒々しく聞えてゐた。

良英尼も雨の晴れるのを待ち兼ねた一人であつた。彼女は寺住ひをしてゐた時分と違つて此處へはほんの二三枚の着換へしか持つて來てゐないので、身のまはりのものはもうすつかり着汚して、明日からする湯卷さへないのであつた。からツとした天氣になつたら、先づ何よりも先に洗濯からして、せめてさつぱりしたものを身につけたいと、それぱつかり樂しみにしてゐたのであつた。長雨でもう骨の髓

しとつてしまつたやうで、それに彼女は此處へ來てからは身重な自分を恥ぢて滅多に風呂へもいかないので、自分で自分の肌へ觸つてみるのさへ不氣味なやうな心持ちがしてならないのであつた。

良英尼はふとみると、西向きの窓がかッと明るくなつて來たので、思はず立つていつて、そこの障子を開けて見た。と、西山の彼方には雲の裂けめから、今度は斜陽が紅い縞を描きながら洪水のやうにあかあかと流れ出してゐる。低い町端れの紅殼塗りの家並や、寺の屋根や遠い山々の頂までがその光で、いつになく生々と輝いてみえた。

良英尼はそれをみると茲幾日の間沈みきつてゐた氣持ちがいくらか晴れてくるやうな氣がした。この鹽梅なら明日はきつと晴れるに相違ないと思つて、彼女はやがて、ともすると出澁る元氣をやつと揮ひ起こして、そのまゝ汚れものを抱へながらそゝくさ階下の井戸端へ下りていつた。そしてそこで息切れのする懈い體を持て扱ひながらせつせと洗濯に取懸つた。

井戸は上方風に臺所の土間のなかにあるので、そこいらは妙に薄暗かつた。ものゝ饐えてゆくやうな、濕つぽい匂ひがして、板張りの流が蛞蝓でも匍ひさうにぬるぬるしてゐる。それでも水口の櫺窓から射してくる夕陽の光がたつたひと筋井戸の喞筒の口のところへしみついてゐるので、漸次と晴れてゆく空の氣色をゐながらにして感じることが出來て、良英尼はさうしてゐるうちにいつかしら氣に張りが出てくるのであつた。

良英尼は喞筒の井戸をがちやがちややりながら水を汲んで先づ腰巻きからぢやぶぢやぶ洗ひ出した。少時の間、蹲んだまゝ盥のうへへ掩ツかぶさるやうになつて洗濯をしてゐると、もうぢきに肩には恐ろしい凝りがくる。それと同時に腰骨のあたりがしくしく痛んで、腹の中では宿つた胎兒がさも苦しさうに足を動かすのがはつきりと感じられてくる。良英は幾度か洗濯の手をやめて、深い嘆息を吐きながら體を後様に伸した。

良英は丁度今月で七月目の大腹を抱へてゐるのであつた。一體が小造りな方なので、つひ此間までは身幅の廣い法衣を着てゐると、さして人目にも立たなかつたが、先月へ入るともうどうにも隱せなくなつて、到頭二十才の時から十年近くもゐる瑞泉院を出て、朋輩の淨泰尼の周旋でこの家の二階へ下宿をしたのであつた。彼女はこゝでこつそり世を忍んで身二つになるつもりでゐた。もう此頃では悪阻に惱まされることも少くなつたが、そのかはり血色がひどく悪くなつて、妙に浮腫のやうなものが蒼ざめた顔にあがつて來た。頭も長い間剃らないので、まるで爺むさい學生のやうに眞黒な髪毛が耳のうへまで掩ひかゝつて、襟脚のところが坊主鬘のやうに可笑しな格好になつてゐた。それでも彼女は世間體を思つて、手拭で姉さん被りをして、着物も態と黒つぽい縞の單衣を着たりしてゐた。

良英の相手になつた男は、本山の執行所にゐる了順といふ坊主であつた。まだ佛教大學を出てから幾年にもならない若僧で、年も良英よりは三つも下であつたが、併し辯口の達者な、いかにも小悧巧な男なので、本山では可成りいゝ處へ用ゐられてゐるのであつた。尼僧なぞといふものは浮世の生活圏外に離れてゐるやうに思はれてゐるが、併しあの中にもなかなか激しい競爭があつて、いゝ寺の住持になるためには、いろいろな運動もしなければならないし、術策も弄しなければならなかつた。それも修法一切に凝つて就籍を堅めるのが眞實の道ではありながら、當世の尼僧達は決してそんな迂遠な、愚かな道は歩かなかつた。尼僧達は寺格のいゝ處へ入るためには大概所謂手ツ取り早い犠牲を拂つた。良英もその一人であつたが、併し彼女の場合には、その犠牲か却つて皮肉にも、尼僧としての生活を根柢から覆すやうな負擔を彼女の肉體に負はせたのであつた。

良英はもと名古屋の産であつた。名古屋は寺衆の間では佛國と稱せられる程あつて、彼女が十九才で得度するときには、近在でも評判の立つほど讃めものになつたのであつた。それから京へ上り菊溪山で修業をして、本山の安居にも通

ひ、漸う彼女は室町の高倉にある瑞泉院へ入つたのであつたが、爾來十年の間、彼女は漸次と何うにも出來ないやうな境遇に追ひ込められてしまつたのであつた。固より彼女自身が働きのない、弱々しい性格なので、さうなつたのでもあらうが、一緒にゐた朋輩達は漸次と伊勢へいつたり、鳥取あたりへいつたりして、各自一山の住持になつてゆくのに、彼女は十年一日のごとく瑞泉院の役僧の地位から浮び上ることが出來なかつた。殊に最近に住持が變つてからは、一層彼女は焦悶かしい思ひをしなければならなかつた。そんなことから彼女は初めは政策的に本山の了順に接近していつたのであつた。そしてかうした身のうへになる頃には、もういつかしら第一の目的よりも性の誘惑を却けることの出來ないやうな凡下の女になつてゐたことゝを彼女自身も感じてゐたのであつた。

良英尼は腰卷を洗つてしまふと、今度は腹の切なさをやつと抑へながら次の肌襦袢にかゝつた。

表の小格子のはまつた店の間では、この家の主人がパリパリと妙な侘びしい音を立てながら頻りに革具の細工をしてゐる。彼は烏丸にある大きな革具店の居職人で、十四五になる小僧を一人使つて、毎日鞄の下縫ひやら、馬具の糊付けやらをやつてゐるのであつた。口數の極めて少い男なので、仕事をしてゐる間は店はしんとしてゐた。生國は何んでも大和とかで、その商賣が示すごとく近邊でも誰れ知らぬものゝない新平民であつた。併し律氣で勤勉で、可笑しいほど正直ものであつた。

今店には烏丸の店から誰れかゞ仕事を受取りに來てゐるとみえて、水淺黄の汚い暖簾の下つた向ふでは、内儀さんが恐ろしく輕薄な調子で、頻りにつべこべ世辭を云つてゐる。その内儀さんは京都の在のもので、亭主とは反對に、氣の勝つた、口の輕い女であつた。いゝ鹽梅に雁雨があがつたと挨拶をいふにも、立て續けに二三分間も饒舌り散らかすの

で、此方で聞いてゐるとその白々しさが可笑しい位であつた。

お店の者は饒舌り立てられて、やがて歸つていつてしまつた。それと引違へに、今度は戶外の方からそこの家の一人息子の永造といふのがばたばたと驅け込んで來て、いきなり臺所へ入つて、そこにあり合ふ水桶から手杓でがぶがぶ水を吞む。平顔の、眼と眼の間の離れた、いかにも無智さうなその顔は父親の血統を明らかに語つてゐた。

永造は水を吞んでしまふと、色の褪めた久留米飛白の單衣の袖で鼻汁と一緒に唇を横ツちよに拭いて、そのまゝつかつか良英の傍へ寄つて來て、平氣な顔で、

「なあ、お寺のあばはん、錢お呉れやす。」と、せびる。

良英は階下の夫婦に氣嫌をとるつもりで、いつも折があると一錢、二錢の金を、息子に呉れてゐたのであつた。

良英はもういつものことなので、顔もあげずに默つてゐると、永造はついとその鼻の先へ手を出して、

「お寺のあばはん。錢や、錢お呉れやすちうてんのに。」と、いふ。

そこへ店の方から内儀さんがその聲を聞きつけて、ふいに此方へ出て來ながら、

「これ、永やん、又あんたそんなこちうて、……」と、睨む眞似をして、急に良英の方へ愛想笑ひをみせながら「ほんまに、この子ちうたらしようむない、お人さんの顔さへみたら錢、錢いうて、……」と、いふ。

良英は洗濯をしながら默つて笑つてゐた。

永造は身體をしなくなさせて、

「お母ん。さうかて僕、錢欲しいのや。今あこの角にえゝもん賣りに來てんのや。なあ、そやつたらおかん、お呉れやす。」

內儀さんは恐い顔をして、

「阿呆なこちはんとおゝきいな。學校へいてる子が、そないえゝもん買はんかてよろしい。そなこと云はんと、もうお天氣もあかつたはけえ、戶外へいて遊んどいでや。」と、叱りつける。

永造は猶ほも執念くせがんでゐたが、到底皆が金を呉れる見込がないとみてとると、不貞腐れた調子で、

「お寺のあばはんのしみたれやあ!」と、大聲で喚いて、又戶外へ驅け出していつてしまつた。

內儀さんは憎々しげにそのあとを見送つて、

「ほんまに仕様んない子や。氣隨ばかりしをつて、一遍きつい目に遭はせてやらんと、此頃のやうでは私ら、叶ひまへんわ。」と、態と良英に聞かせるやうに云つてやがて自分も上框から下りて來ながら、「そやけどえゝ鹽梅にお天氣もあかりましたえなあ。この日の色やつたら、明日はよう照りまつしやろえ。もう祇園はんのお祭も近うなりましたはけえ、雨があかつたらその代り暑うおつせなあ。」と云ふ。

良英はそれでも默つて笑つてゐた。

內儀さんはそのまゝそこいらを片づけながら、偸むやうにおろおろ良英の後姿をみてゐたが、やがて何かふいと思ひついたやうに、

「なあ、あんたはん。淨泰はんはほんまにどないおしやしたんどつしやろな。昨夜も來る云ふて、とうとうおいでしまへんどしたなあ。」と、いふ。淨泰といふのは、良英をこの宿へ周旋した尼僧であつた。その淨泰が金錢上のことから一切を引受けてゐるので、もう月末も過ぎてしまつた今、內儀さんが彼女の來否を氣にする理由はそれとなく良英にも感じられてゐるのであつた。

良英はやつとむくんだやうな顔をあげて、肩先で息をしながら、

「ほんまになあ。昨夜はあないにきつと來るいふて、葉書まで呉れやはつたんに、何んで來とくれやしまへんのどつしやろな。私、他にも頼まんならん用がありますのに。」と、いふ。その聲は鼻へかゝつて、妙に愚痴を云つてゐるやうに聞えた。

内儀さんは水口のところで漬物の桶を開けてみながら、態と此方へは脊中をみせて、

「あんたはん、きつと何んどつせ。あの御本山のお方から届くもんが届かんので、そんで淨泰はんもおいでしまへんのどつせ。きつとそや。せんどもそんなことといふといでやしたはけえ。」と、いふ。

良英は一寸心細さうな顔になつて、それでも打消すやうに、

「さあ、そなことあらしまへんやろ思ひまつけど、……」と、云つて、肌襦袢をゆすぎながら、「ほんまにもうあんたはんとこのお拂ひもせんならんのに、何をしとゐやすのやろなあ。ひよつとしたら、今夜來とくれやすか知れまへんえ。」と、空頼みをしてゐるやうにいふ。

内儀さんは漬物をみて、良英の盥の水で一寸手を洗ひながら、

「さうどすなあ。さうかも知れまへんけど、私とこも實は一寸お金の要ることがおすさかいに、今夜でもお拂ひが貰へたら思ふてんのどつけど、……」と、云つて、そのまゝだらしなく上框へ腰を下ろしながら、「そやけど、ほんまに坊さんかて何かて、男はんちうもんは皆薄情なもんどすえなあ。御本山のお方もあんたはんをこないきつい目に逢はせて置いて、もう一月にもなんのに、一遍もこゝへはお見舞ひにさへ來とくれやしまへんのどすなあ。そんではあんまりやおへんか。」

良英はさう云はれると返事のしやうもなかつた。本山の了順からはもう三月の餘も何の音沙汰もなかつた。聞けば近江の方へいつてゐるとかいふ話だつたが、併し京極で出逢はしたといふものもゐた。この家へ引移るについて、金の無心なども手紙で云つてやつたのだが、それには返事さへなかつた。淨泰が心配してその時には自分で本山へ出向いていつて、了順を魚の棚の善哉屋へ誘ひ出して、巧に談判して呉れたので、僅か二十圓ばかりの金をそれでも渡して呉れたのであつた。それからもう一月になるのに、彼は一度もこの家へは寄付きもしないのであつた。憎い男だと思つても、時偶は懷かしさ、戀しさが湧くので、良英は人目のないこゝの家なら却つと逢引きをするのに都合がいゝからといつて色めかしく誘ひをかけてみることもあつたが、それでも彼は返事さへ寄越さなかつた。

そんなこんなから、良英はもう此頃では腹の子は自分の因果とあきらめて自分の手で所理しようとそれとなく覺悟をきめてゐるのであつた。彼女は初めて自分に肉の快樂を教へて呉れた男に今も猶ほ未練があるので、一方ではあんまり子供の始末のことなどで煩く云つてやつたらそれこそ愛想をつかされてしまやしないかといふ恐れもあるのであつた。彼女は腹の始末がついたら、またもう一度了順との仲をもとどほりにしようと思つてゐたのであつた。

併し彼女は今內儀さんにさう云はれてみると、二六時中彼女の頭腦を惱ましてゐる金の問題がまた心に歸つて來た。子を生み落としてしまふ間の費用さへどうにかして呉れればあとは何うにでもなると彼女は思つてゐた。生れた子供は何うすると聞かれると彼女は一寸返事に困つたが、不安たたかにもその時になつたらまた何うにかなるであらうといふやうな心持ちが常に彼女に一時の偷安を與へてゐるのであつた。初産だけに彼女には正直のところ果たして滿足にこの子が浮世の光をみるかどうかもまだ疑問であるやうな氣がしてゐた。それよりも彼女は差當つての金といふものにひどく困つてゐた。

内儀さんは指の先で後毛を掻き上げながら瘦せ削けた顏をしかめて、

「ほんまに男はんちうもんはしようむないもんどすなあ。この女と手に入れようとお思ひやす時には、もうやかましう云ふておきながら、出來てしまふたら邪魔臭いでそんなり放かしてしまふて、あとは知らん顏や。女はそこへいたらほんまに損どすなあ。あんたはんはえらい惡い籤をおひきやしたんや。お爭はんで子たちが出來ては、お商賣に障りますわなあ。」と、調弄ふやうに云ふ。

良英もさすがに恥かしくなつて、やけにぢやぶぢやぶ水音ばかりたてゝゐた。

内儀さんはやがて前へ乗り出すやうに體を伸ばして、何か思ひついたやうに聲を落としながら、

「なあ、あんたはん。實はよんべお隣のおかはんにえゝこと聞かして貰ふたんどすが、あんたはんもこないにしといやしたかてどうせあかんのどすさかいに、何うどす、一遍私の云ふやうにしとみやしたら、……」と、云つて、爪の長く伸びた人指し指で鼻の穴をほぢくりながら、「あの、何んでも猪熊の東に產婆はんばかり預つてやはる家があるさうにおつせ。そこやつたら一日一圓五十錢で、何んぼでも預かつて吳れやはるさうにおつせ。ほて子たちが出來たらお產の時もあんじようして吳れやはつて、そのうへまあ里子にやらうお思ひやしたらその口も探して吳れやはりますさうにおつせ。それに又體のわるいお方や、人に聞えたら惡うおつけど子たちが出來てお困りやすお方には、それ、誰れにも知れんやうにあんじようして吳れやはりますて。」と、眼を晒ゑながら云ふ。

良英もいつぞや　泰にそんな話を聞いたことがあつた。町の淫奔娘や後家さん達がさういふところへ一時身を隱して腹のものをうまく始末してしまふといふやうな噂は他處でも聞かされたことがあつた。併し良英は何う考へてもそこへ入つて體の始末をつけるやうな氣になれなかつた。それも唯金故であつた。金さへあれば何うでも出來るとは思はれ

が、併しそれだけの金の工面が出來ないのは初めから分つてゐるので、彼女はてんから自分では問題にもしてゐないのであつた。で、内儀さんにさう云はれても彼女は別に珍しくも何んとも思はなかつた。

内儀さんは自分の家が責任を負ひたくないといふいかにも他人がましい心持ちを露骨に見せて、その産婦預所の話ばかりしてゐた。良英はあんまり云はれるとカツと血が頭へ上つてくるやうな氣がするので、唯默つてやけに洗濯ばかりしてゐた。五枚の汚れものも大方洗ひつくしたので彼女はそれをもう一度ゆすいで一刻も早く二階へ上つてしまはふと思つてゐた。

そこへ折よく表の方から

「今日は。」と、云ひながら誰れかゞ訪ねて來た。そして、「おかはんゐやはりますのか。」と、云つて、その客はつかつか此方へ入つて來て、暖簾をあげて臺所を覗き込みながら「お、おゐやすのやなあ。えゝ鹽梅に雨もあかりまして、……」と、いふ。それは五十五六の脊丈の低い厄病神のやうな皺枯れた婆さんで、それでも頭には一握りほどな毛を集めて丸髷をちよこんとくツつけてゐた。盲縞のやうな單衣に古風な綿風通の帶をしめて、片手には大道商人がもつて歩くやうな古鞄を下げてゐた。

内儀さんはそれをみると、ふつりと話をやめて、

「おう、おいでやす。まあ、店へお上りやすな。」と、云つて、そのまゝうへゝ上つていつてしまふ。

その隙に良英はすつかり洗ひをゆすいで厭な匂ひのする裏の納屋前の草干場へいつてそこの干棹へかけてしまつた

空は半分だけ灰色にたそがれて、まだ今日のうちにもう一度は降りさうな氣配で、東北の方には氣味の惡いほど眞黒な雲がもくもくと動いてゐた。溝の水音は戸外へ出てみるとさあさあと納屋の軒先にひゞいて、眞向ふのキ裏の火見櫓

では鳥が空を見上げながら明るい聲で啼いてゐた。

良英は二階へ歸つて來ると、もううんざりして、そのまゝ窓の下へいつて、我れにもなく横になつてしまつた。左を横にすると、胎兒が餘計に動いて、心臓を壓迫するやうで息苦しいので、彼女は態と窓の明りの方へは顔を背けて、右の肱を枕にして海老のやうに寢そべつた。それと一緒に脇腹のところがじんじんして下腹が拘攣るやうに痛んでくる。痛みがとれると、今度は水でも當てゝゐるやうに體中が冷たく感じられて來た。下腹に觸る胎兒の足のことを思ふと、彼女は眼も何もみえない、ぶよぶよした赤黒い肉塊が暗の中で無意識に手足を動かしてゐる有樣がふと眼に映つて來たが、あゝ此れが世間並の子供となつて生れてくるのかと思ふと、彼女ははつきり想像は浮ばないながらも淡い恐怖のやうな感じが迫つて來た。

良英は體がいくらか樂になると、今度はひどく差迫つたやうな心持ちで、腹の子供のことよりもまた金のことが心配になつて來た。寺を出る時に持つて來た金ももうあと僅か三四圓しか殘つてゐない。階下への拂ひは賄ひつきで二十七圓のきめであるから日割にしても二十五圓あまり拂つてやればいゝのである。そんな金が何うして今の自分に自由になるだらう。しかし海泰は了順に逢つて、何うしても月に三十五圓づゝは仕送りをするやうに無理にも賴んでみると云つてゐたし、それにいよいよ可けなければ檀家先である今出川の呉服屋の後家さんに賴んでみると云つてゐたから、きつと何んとかして呉れるであらう。あの世話好きな海泰のことであるから、今夜にもきつと來て呉れるに違ひない。彼女に逢ひさへすればと思ふと、そんなに行詰めた氣になつてゐながら、良英は又別な考へにもなつてゆくのであつた。

良英は海泰から借りて來たおけい、籠ひとつしかない自分の今の身のまはりお見廻はしてみた。その部屋は六疊で、天

井が船底のやうに片下りになつてゐて、窓がたつたひとつ開いてゐるきりで、あとには何んにもなかつた。壁や襖は見窄らしく處斑げがしてゐて、そこへは小供の手習草紙の古紙が張つてあつたりした。それをみると、良英は了順と度々逢びきをした古門前の道具屋の二階を思ひ出した。そこもこんなやうな造りで、もつと小綺麗ではあつたが、何にしろ風通しが惡いので、如何にも暑苦しかつた。それでも外窓の障子には蒼白い月影がさし渡してゐた晩もあつた。又暑さに蒸されて、人前も恥ぢずに肌襦袢一枚になつて、了順の酒の相手をした晩もあつた。さうした思ひ出も今となつては耐らなく懷かしかつた。

良英はうつとりと過去つた幻影を追つてゐるうちに、又いつものやうに最初のあの時を思ひ出した。良英は外の女と同じやうに、瑞泉院の前通にある悉皆屋の孫娘が薄鈍であるから、北如を唆して白粉を買つて來させ、それを態と人に見付られないやうに、本堂の佛座の後へ隱して置いて、外へ出る晩にはそれを手掌へ少しづゝ垂らして、本堂へいつてこつそり顏へ塗けた。そして何度も何度も手拭で拭いては何食はぬ顏で出ていつたが、それでも一緒に寢る淨泰に匂ひを氣どられて、胡麻化すのに困つたこともあつた。淨泰は薄々感づくと初めは年甲斐もなく露骨な嫉妬をみせた

最初に了順と關係の出來たのは嵯峨の永隆庵へ遊びにいつた時のことであつた。二人は今日のやうな晴れ惱む五月雨あがりの野路を人目のないのを幸ひに、埒もなく戯れながら歩いていつた。永隆庵へ來てみると、丁度庵主が出懸けたあとだつたので、少時の間暗い庫裡へあげてもらつて　そこで休ませて貰つた。寺の婆さんは二人が來たのを幸ひに、一寸天龍　前まで買物にいつて來るからと云つて、留守を賴んで出ていつてしまつたので、二人はそれをいゝことにして、そこでも惡巫山戯をした。人里離れた松山の間にあるので、何をしても外へ洩れる恐れがなかつた。その時、あの幽凄な庭には、病上りの女の顏のやうな紫陽花がこてこて咲いてゐたのを、良英は今だに忘れることが出來なかつた。了順は

良英の側を離れると、緣先の筧の山水で手を洗つて、笑ひながら、佛前へ燈明をあげて、職業的
「如來樣に口留めをして置かいでもえゝかいな。」なぞとてれたやうに笑談を云ひながら、
な唄ふやうな調子で、十念に唱したりした。良英はさすがに恥かしくて口がきけなかつた。

瑞泉院へ歸つて來ても良英は體の工合が變でならなかつた。……

良英はその時のことを思ふと、胸がわくわくするやうで、その時の切ない快感が今でも誘ふやうにくつきりと思ひ起された。それと一緒に了願の脂臭いやうな、日向臭いやうな法衣の匂ひが、すうッと鼻の先へ匂つてくるやうな氣がして留度もない空想が先から先と彼女の神經を焦だゝせて來る。

そこへすぐ耳の側で、突然近邊の寺でつく鐘の音がぐわんと聞えて來た。それは入相といふやうな情趣を少しも湧かせない、極めて殺風景な破れ鐘であつた。

良英は不意を打たれたので、その咄嗟に泉院にゐるやうな氣がして、思はずびくりと胸を衝かれた。誰れかに自分の猥りがはしい空想を隙見されてゐるやうな恥かしさを覺えて、思はず半身起き上りながら四邊をきよろきよろ見廻はしたが、第二の鐘の音は續いて彼女の胸腹を衝くやうにもう一度ぐわんと響き渡つて來た。

と、その時、階段のぎしぎし軋む音がして、やがて階下から內儀さんが、どうしたのか先刻の婆さんを連れてにやにや笑ひながら上つて來た。何用かと思つて、良英は思はず居坐ひをたゞしたが、內儀さんはにやりにやり笑ひながら、

「なあ、あんたはん、えゝことがありますのどつせ、まあ聞いとくれやすな。」と、云つて、づかづか遠慮會釋もなく、良英の傍へ來てべたりと坐つた。

婆さんも、

「えらい、お邪魔を致します。」と、云ひながら顔中皺だらけにして間内へ入つてくる。

内儀さんは婆さんを隣へ坐らせて、良英の方を向　ながら、

「なあ、へ、あんたはん、あの、實は今度えゝ富籤が出来こんのでなあ、あんたはんもお入りやしたらどうどすれえ私今このあばはんからすゝめられまして、一口入りましたんどつせ。そらほんまに鹽梅よう出来こまんの。あんたはんも何うどす、お入りやすな。又何かの御用に立ちまつせ。」と、慾から先に口へ出すやうにいふ。

良英は富籤なぞへ入つたことはないので、眼をきよろきよろさせながら、

「さ、私、よう知らんのどつけど、……」と、云ふと、内儀さんは一人で引受けて、

「知るも知らんも、あらしまへんわ。ほん分つたゝ理屈どすさかいに、何もむづかしいことはおへんがな。ちよつと云ふたら月懸けに何ぼちりてお金をかけとくのどすなあ　ほて何ケ月　かにそれの籤を引いたらほんでよろしいのどすがな。その籤にあたつたら、えらいお金が儲かりますのどつせ。」と、もうその金を掴んだやうな顔をして、婆さんの方を振顧りながら、「なあ、あばはん、一圓五十錢　やつたら三月目の籤どつかいな。」と、いふ。

婆さんは抜衣紋をしながら、良英の異様な姿を氣味の悪いほどじろじろみて、それでも愛想笑をしながら、

「阿　らしい。一圓五十錢懸けやつたら、二月の籤どすかな。二月目に一度づゝ籤になりますのや。當籤は八十圓取りどす。」

「まあ、一圓五十錢で八十圓、えゝ仕事やなあ。」と、態と良英に聞かせるやうに云つて、「なあ、あんたはん、こないにえゝ、けはあらしまへんやろ。あんたはんもお入りやすな。」と、いふ。

良英は一寸返事に困つてゐた。さうしてゐる間にも彼女の鼻の先には了順の體の匂ひがまた匂つて來た。

内儀さんは婆さんと顔を見合せながら、

「なあ、あんたはん、今も階下で話したんどすが、世の中には運のえゝ人もあるもんやおへんか。大德寺前の青物屋はんのおつさんはたつた三月懸けで、八十圓よる儲けしやはつたんどすて。まるで唯取りやおへんか。今時どないええお商賣かて、そんな譯にはいかしまへんわ。」

婆さんはそれを手で押へて、顋をひくやうにしながら、

「あんたはん、それよりもまだ運のえゝお方がありまつせえた。今出川にお　でやす中學校の先生の奥さんどすが、そのお方はあんたはん、ほん一月懸けたばかりで、百五十圓の籤を　さはり來ましたんどすがな。尤もこの口は二圓がけどしたけども、それにしたかて百四十七圓ちうもんは唯取りや。私は親元と話してあんたなんかきつと　の世でえゝとして來やはつたお方に違ひない云ふ　ましたんどつせ」と、仰山な笑ひ方をする。

良英は何んと云つていゝか分らないので、

「まあ、學校の先生ちうやうなお方もやつぱり入つてゞつか？」と、いふ。

婆さんは大きく合點いて、

「入つとゐやすどころかいな。私の廻る先にも師範學校の先生と、女學校の先生がゐやはりまつせ。何んでも吉田の方の廻りをしてる人の話では、名は隱しとゐやすさうにおつけど、大學校のえらい先生もやつぱり入つとゐやす　うこつでつせ。ほんまに人は誰かてお金は大事どすわ。お寺はんかてさうやおへんか。なあ、あんたはん」と、云つて、下からしやくふやうにしながら良英の方へ下卑た媚びるやうな笑ひ顔をみせる。

良英は思はず顔を背けて、もう我慢がしきれなくなつたやうに、

「あの、ほんなら折角どすさかいに、私も一口入らして貰ひますわ。」と、云つたが彼女は八十圓の當籤といふのをもうそれとなく心に描いてゐた。あと二月で籤になるとすると、丁度その金は臨月の用に立つ。そんないゝ運が向いて來やうとは思はれなかつたが、それでも彼女は何んとなく先が明るいやうな氣持ちがしてならないのであつた。

婆さんはそれを聞くと、笑ひながら頭を下げて、

「入つとくれやすか。そらまあおほきに。そやつたら今月の掛金も頂けまつしやろか。お金はあんたはん、そないにせかんかてよろしいのどつけど、日數によつて又籤の間に合はんといきまへんよつてなあ。」と云つて、傍に置いた古鞄を引寄せ、その口を開けてやがて横綴ぢにした大福帳のやうな帳面を取出す。それには幾枚となく不審紙のやうな紅い紙が挿んであつた。

良英はやがて立つて、あけび籠の中から小さな袋を出して、その中から四つに折り疊んだ五十錢紙幣を三枚出してきて、婆さんの前へ置いた。

婆さんはこくりと合點いて、

「おほきに。そやつたら御面倒はんどつけどどうぞお名前を、……」と、云つて、鞄の中から眞鍮の矢立てを取り出して、まるで爺さんのやうな手つきで帳面をつけはじめる。帳面の頁には鐵屑のやうな拙い字で、何やらごたごたに書いてあつた。

良英はまさか寺號や仲名を云ふ譯にもいかないので、ひどく當惑しながら、やつと思ひついて俗名を云つた。

「並木はつ………。」

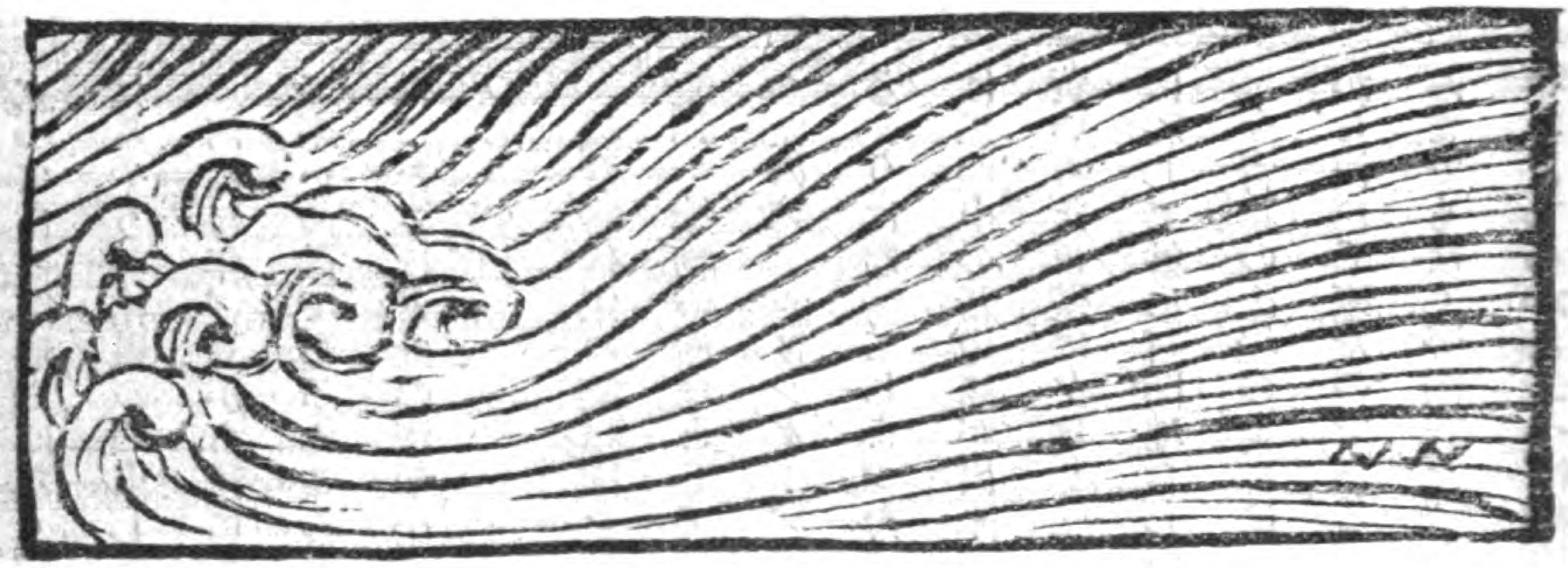
婆さんはよく聞きとれないやうに、

「何木どすて？」と、訊き返したが、良英は更らに低い聲で、それでもはつきりと、
「並木はつ。」と、もう一度云ひなほして、「並ちう字は何んちうたらよろしいやろな。そ、普門品の普ちう字から日をとつたゞどつせ。」と、いふ。
婆さんはそれでも分らないやうに、筆の先を甞めてばかりゐたが、それでも無理に笑はれまいとして、
「並木どすな。」と、知つたか振りにいふ。
良英は埒があかないのでやがてそつと手をのばして、
「私が書いてあげますわ。」と、云つて、帳面を此方へ貰つて、それへ尼らしい、くねつた字で自分の名を書いた。前の頁には變な當て字やら、假名やらで、可笑しげな百姓のやうな人の名がごちやごちやに書いてあつた。
良英は俗名のはつな　といふ字はもう何年にも書いたことがないので、何んだか自分の名ではないやうな變な心持ちがした。それと同時に、お初やん、お初やんと呼ばれて、手一杯に我儘を云つて暮らしてゐた小娘の時代のことがふつと心に浮んで來る。何んにも知らなかつたゞのやうなその時分のことを思ふと、彼女は何故か胸が一杯になつて來た。首を縮めると氣味惡く襟脚に觸る毛の感じが不思議に昔の髷の感じを懐しませたりして、今の身の情なさが彼女の心を深い哀愁の底へ引込んでゆく。
良英はやがて默つて、俯向きながらその帳面を婆さんの方へ押遣つた。婆さんはそれを見て、あゝこの並木どつかいなといひたげな顏で、
「おほきに。」と、云ひながら、それを伏せた。そして今度は紙幣を取上げて克明に數へたあとで、押頂くやうな格好をして、それを如何なる好運をも生みさうにない古鞄の中へ大事さうに納めた。

戸外では、丁度時間になつたとみえて、いつものやうに近邊の紡績會社から退けてくる職工や女工の足音がひとしきり騒々しく聞えてきた。と、きくと、又降り出して來たのか、ぱらぱらと傘を打つ雨音のやうな響が聞えて、往來の人はその音をのせたまゝ次の町の方へ流れていつた。

その時、天井から下つた薄呆けたやうな貧乏くさい電燈が、息を吹き込まれるやうに漸次と紅くじわじわ點つて來た。

――大正十年七月六日――



河畔

宮地嘉六

大きな河が北から南へとゆるやかにうねつて靜かに流れてゐる。兩岸には青草に掩はれた高い土堤が河と共に遙かの彼方へ續いてゐる。錆色の鐵道の釣り橋が幾つか弧を描いて土堤から土堤へ長く架つてゐる。河巾の三分の二は洲だ。或る部分は葭がみつしり生ひ茂つてゐて、よしきりが絶え間なく鳴いてゐるのだ。キヨツ、キヨツ、キヨツ〳〵キキキ、キヨツ、キヨツ、キキ……と鳴いてゐるのであつた。

河下の方には森林の黒ずんだ綠のかたまりが幾段にも積み重なつてゐて、遠きは煙り、近きは鮮やかな綠色を見せて横たはつてゐる。そしてその中に河尻は細く白く消え込んでゐた。

あたりは見渡す限り田圃である。青々とした、植ゑつけてからまだ日數のあまりたゝない稻田である。初々しい蛙が臆病に鳴いてゐるのだ。

尤も土堤下に町があつた。それは五百戸に足らぬ町である。しつかりした瓦屋根の二階家もあり、煉瓦造りの倉庫つき家もある。そして小さな町のくせに工場の煙突の數が馬鹿に多いのだ。煙突と云つても都會の工場町に見るやうな、ぬつと空高く突つ

立つてゐる筒形ではなく、此所のは、どれもこれも、ちよつと見ると高爐竈のやうな、例へば昔の鍛冶屋の屋根の上に見るやうな格風の煙出しなのだ。工場と云ふ工場が鑄物製造所であることはその煙出しの格構でうなづかれる。

河は毎年、夏から秋にかけて増水し、氾濫し、その爲めに流れて來る小砂が河底に沈澱して、それが鑄物製造に持つて來いの砂であるところから此の土地に鑄造工場が發達し、今ではすつかり大工場地に化してしまひつゝあるのであつた。なるほど此の河の小砂と來ては、柔らかで、鐵色をした、それは手ざわりのよい、精選された餡のやうな小砂であつた。

鎌倉時代宋の某諸國を編歴し川口に入るや此の河底の砂粒ノ特質を發見し云々と地誌にもあるが、昔此所は鍋釜、鐵瓶類の鑄物の產地として知られてゐたに過ぎなかつたが、機械工業の時代に入つて一躍有望な鑄物工場地になつてしまつたのだ。シリンダー、ロツプブーリー、ストーブ、齒輪類、其の他あらゆるエンヂンの主要部の器物を一手で製作するやうになつてしまつた。もう十年經たぬ間に東洋一の鑄物の本場になるだらうと云ふ勢ひで、町の西手の田圃の間には二間巾の新道路が出來、遊廓が許可され、踏めばずぶ〳〵するやうな耕地に新建の家が所々に軒を並べて續き、その黄いろな板壁に夕日を受けて夜は軒提灯を吊した二階からはやり歌の三味の音が響き、それが小田の蛙のかしましい聲に和して妙に新開地らしい哀寂の趣きを作るのであつた。

今青草の土堤の上には一人の若者が兩足を投げ出して腰を休めてゐる。彼は今日、此所から三十里ほど離れた鑛山町から汽車で來たのである。カーキ色のズボンをはいて木底の靴を足にはめてゐる。上衣はぬいで手に持つてゐたが、云ふまでもなく勞働者だ。よほど窮した果てに此所へやつて來たのらしいが、別に心配氣な、憂鬱らしい顏もしてない。寧ろどちらかと云へば極度にこまり續けて來た人間によくある弛緩した顏だ。よく此の土堤にはさう云ふ勞働者が何處

からともなく迷ひ込んで來て腰を休めて河を眺めてゐることがある。

彼は此所までの汽車賃をやつと都合して働きに來たものである。彼は汽車から下りて少しばかり町を歩いて見た。町はほんの一筋町であるが、立派な酒屋があり、川魚の料理屋があり何となく面白く働けさうな土地だと思つた。彼はさうした料理店や酒屋やいろ〳〵の店屋を見ると早く此の土地で職にありつきたくなつた。またこんなこともちよつと考へて見ないではなかつた――半年か一年ゐるうちに土地の小娘と面白いことも出來るたらう。さうなると俺は此の土地ですつかり幸福に暮すことにならうも知れぬと。

彼の仲間の幾人かゞ此の土地でうまく落ちついて働いてゐる筈であつた。彼は先づその一人に逢ひさへすればしめたものだと思つてやつて來たのだ、仲間と云ふのは彼が監獄で四ケ月間一緒に苦しんだストライキの連中である。

『あ、早く逢ひたい。工場の出口で俺は待つてゐるより他に手はあるまい。すると奴等はいきなり俺を見て抱きしめるか腕にまきつくかしなきや承知しないだらう。そしてどん〳〵俺を自分の家へ曳つ張つて行くのは分りきつてゐる。それから他の連中も集つて來る。それから互に出獄前後の話で持ちきつてしまふ、兎に角奴等はどんなことがあつても何とか方法をしてくれるに定つてゐる……』ステーションへ着いた時、彼の胸はなつかしさに顫えたのである。

然したよりに思つて來た仲間はとつくに此の土地を去つてゐないことが分つたのである。

『お前さんは此の土地で働く氣ならあの連中を知つとると云はんやうにしなさい。あの連中は警察の方からやかましい注意があるでなあ。』と工場の門番が彼に云ひ聞かせた。

そこで彼は今、途方にくれて此の土堤の上から河を眺めてゐるのだ。彼は今夜宿屋にとまるだけの持ち合せもない。が、然し最前から河の兩岸の景色を眺めてゐると不思議にのんびりした氣持になつて行くのだつた。河巾と云ひ、背景

の間を走る白帆の影と云ひ、河下に横たはつて見える黒ずんだ森と云ひ、さてはまた、よしきりの冴え〳〵とした聲と云ひ、彼が幼ない時分、里子で育てられた筑後河のほとりを思ひ出させるからである。知らない初めて來た旅の空のやうな氣持がしない。河向ふの土堤一つ越えればなつかしい下田村がそれは彼の幼ない頃の乳母の里村の昔のまゝでありさうに思はれるのだ。然しさうした幻想に陷つて行く彼の心持は、矢張長い間旅を放浪して疲れてゐる證據であつた。

汽車がやつて來て鐵橋へさしかゝつた。若者は其の方へ目を移した。鐵橋の轟く響きで、よしきりの鳴き聲は暫く打ち消されてしまつた。汽車の窓から見て過ぎる乘客の目にはかうした境遇の人間も、唯此の河畔の景色の點景物に過ぎないものであつたらう。列車が通過してしまうと、よしきりの聲はまたもとのやうに冴え〳〵と聞えるのであつた。キヨツ、キヨツ、〳〵キキキ、キヨキ〳〵〳〵……と。

間もなく日はすつかり沈みきつてしまつた。

地下室の機關夫

上司小劍

一

「地下室では朝からボイラーに火が入つた。」この蒸しあつい陽氣に、ボイラーとはぽら聞えません。」なぞと、機關夫の一人は、わけのわからぬ駄洒落を言つて青い作業服の袖口をいぢつてゐた。

二三日前に、この中央銀行から「機關夫を命ず、日給金八十錢を給す、」といふ文字を墨黒々と嚴めしく、と言ひたいが、實は餘り上手でなく、ひよろ〱と倒れさうに細く書いてある辭令を貰つた春田影彦は、隨分久し振りで手にした奉書といふ紙を見詰めて、ほろりと一滴。……………丁度「日給金八十錢」の「八」の字の上へ落したのであつた。

昨日、この銀行へ出入りする仕立屋へ頼んで、今日はもう出來て來た青い作業服を紺飛白の單衣の上から着てみて、變つた自分の姿をば、わざ〱石段を昇つて、二階の窓ガラスまで寫しに行つた時、顔ではほくそ笑ひをしながら、眼にはまた涙が溜つた。

この姿を、今は亡き澄江に一目見せなかつたのが殘念であると、涙はさういふ方の腺からも沸き出して來るのである。

『自分の力で生きて下さい。自分の腕で活きて下さい。………勞働をしてほんたうに活きて下さい。』

彼女は郊外の病院の分病室(傳染病室)で、腸チブスの高熱に苦みながら、黒く乾いた脣を幽かに動かしてから言つた。其の聲はわく／＼と耳鳴りをしてゐた春田の鼓膜へ、辛ふじて響くほどの弱い空氣の波動であつたが、春田はこの愛人の最後の言葉をば、深く魂魄に滲み込ませてゐる。澄江の魂魄も恐らくこの言葉を抱いて、何處かの空を彷徨ひつゝ、蔭から自分を護つてゐてくれるであらう。――さう思ふと、春田の眼からはもうこらへることの出來ない涙の玉が床板に湯氣の立ちさうな熱さをもつて、滴り落ちた。

春田は、唯一人の同僚に涙の顏を見せるのを氣づかつて、直ぐには地下室へ歸らずに、事務室へ通ふ廊下をぱうろうろした後、通用門の方へ出る道に、麻裏草履の足を立てた。コンクリートで固めたり、鐵板を敷いたりしてある自分たちの働く地下室から、石段を上つて、紳士どもの働く一階へ出ると、同じ堅い床ながら、柔かな感じが頭を撫でゝくれるやうであるが、更らにかうして、温かさうな地べたを踏んでみると、幼い時母の膝に凭つかつた感じを夢のやうに思ひ出させるほど、土が懷かしかつた。

コック室では、午飯の支度に、魚肉を煮るにほひと、獸肉を燒くにほひとが、こんがらかつて、小さい窓から、湯氣と煙りとが流れ出してゐた。

土を懷かしみつゝ、通用門の方へ、十二三間ほど、とぼ／＼歩いて行くと、守衛詰所の小さな建物に突き當りさうになつた。制帽の庇の下に窪んだ眼を光らした老守衛は、皺だらけの顏に、むづかし氣な人相を浮べて、出勤簿を前に、

チロリと此方を睨んだが、直ぐ仰向いて、天井から下つてゐる電燈を見た。

この電燈を見るといふ、何んでもない他人の動作が、自分には何んの關係もなく、意味をも持つて居らぬものと、春田は全く氣にも留めないでゐたのであつた。しかし、自分が地下室から出て行くと、各室の人々は、必ず自分を見た眼を直ぐ電燈や電話に移すので、漸く自分の機關夫といふ職掌に氣が付いて、電燈と電話との故障をなほすこと、それからエレヴエターや其の他總べて、電氣の力を必要とするものをいぢる職工といふ地位に、自分が置かれてあることを、ハツと夢から覺めたやうにして意識するといふほど、春田はまだ自分の仕事に就いてぼんやりしてゐたのである。

二

郷里の方の大都會で、慰みにいぢつてゐるうちに、いつしか少しづゝ覺えて、電話機を分解したり、組み立てたり、電燈のソケツトへプラグを差すことを覺えたりして、其の小器用さが、或る時はうるさがられ、或る時は重寶がられたのを、今はかうして表藝に言ひ立てつゝ、この國の中央銀行の機關夫として、働かうとは思はなかつた。それだけに、地下室で青い服を纒ふてゐても、うたゝ寢の夢には、まだ決して自分の姿が表はれなる一勞働者としては映らなかつた。

今は亡き愛人の面影が、一番よく其の父の顏に殘つてゐる。愛人の母は、最愛の一人娘を失つて、殆んど狂氣せんばかりに哀んだが、漸く心を取りなほして、神田の隅の貧しい町で、野猿のやうな近所の子供たち相手に、駄菓子を賣ることを初めて、傷ついた心をそれに紛らしてゐる。何分にも汚なく狹い店の奧に四疊半一室といふあばらやなので、父親が礑と困つてしまつた。三十年前の古物でも、文學士といふ稱號をもつてゐながら、專門の史學の方をいゝ加減にし

て、久しい前から、社會問題や勞働運動の興味に身體を繋がれた爲め、世間的に身を立てかねて、五十幾つの今日、氣の利いた家に起臥することも出來ない境遇を悔いも嘆きもしないとは言へ、流石にこの貧民窟のやうなところには住みかねたのである。

濱町の路地の中の二階家は、二室切りであつたが、入口に格子戸がなくて、西洋風の扉に、白い把手が附いてゐるといふだけでも、變つてゐて面白かつた。それに比らべて、どうもこの駄菓子屋の店では、時々人から頼まれる英文の飜譯の筆も執れなかつた。

目黒の方の郊外に、春田が一日、足を棒のやうにして探した末、夕方になつて、惡魔のやうな暗が、森の中から動き出して、町の方をばだん〳〵に包んで行かうとする頃、漸く其の森の中に、手頃な借家を見出した時は、久し振りに彼れの寂しい顏へ、歡喜の色が浮んだ。

それは言ふまでもなく、愛人が逆緣にこの世へ遺した老父海野三郎とゝもに、春田が男世帶の家を持たうとする爲めであつた。春田が家を持つといふのではなくて、海野の父親が、其の乏しい貯蓄の半分を、母親の駄菓子屋の店へ注ぎ込み、他の半分で、自身の安靜な隱れ家を求めたのであつたが、表面は總べて、春田彰彦の名目にして、海野がそれに同居するといふ形式をとつた。

其の家は二疊に六疊といふ二室に、もう流し板の腐りかゝつた臺所が附いてゐた。建つてからまだ三四ヶ月にしかならないで、前に大工の夫婦者が住んだゝけだといふにしては、隨分荒れてゐた。荒廢に急ぐといふ風な、安普請中の安普請であつた。それでも節穴だらけな天井板にも、薄く塗れるだけ薄くした壁にも新しい色の消えないのが、五十年來の生活に今までまだ一度も新建ちの家に住んだことのないといふ海野の父親を喜ばせるのも哀れであつた。

ほんの寢食に必要なだけのものを、濱町から越して行つた神田の駄菓子屋のガラクタ道具の中に運び出して、森の中の長屋に運び込んだのであるが、一つとして鼠の足に汚れないのはないといふやうな木造の器具によつて、安普請の家の新しさは、いよ〳〵引き立つて來た。米箱は神田の方で母親が一人暮らしに石油の空罐を作りなほしたのを使ふからといふので、鼠の齒の痕のある大きな、黑ずんだのを持つて來た。それを柱の側へ置くと、柱が急に白く見えた。

『これは忘れもしない、濱江の生れた年に買つたんだ。』と言つて、母親は其の古い米箱に殘つた米を、ざあーと石油罐の方へあけてゐた。淚が兩眼から滴つたけれど、兩手がふさがつてゐて、拭くことも出來なかつた。米の中へ、賤をうるほして淚が落ちた。

この家のものになつてから、十九年。度々の地方生活にも棄てないで持つて行つて持つて歸つたこの米箱から出たものが愛人濱江の血となり肉となつて、其の肉は、世俗の厄年に、腸チブスで、郊外の病院の露と消え、火葬場の烟と化し、一壺の白骨となつて殘つた。

愛人の肉體が滅びたことによつて、愛人をば全く自分のものにしたといふホツとした安心を抱かなければならないほど、誘惑の多い、また誘惑され易い愛人であつたことを、春田はしみ〳〵考へなければならなかつた。生死の境から、死の瞬間にかけて、春田が戀の優勝者といふ位地は確定したのであつたけれど、殘るものは勝利の悲哀で、其の悲哀から味はふ痛ましい快感に、彼れは生きようとしたのである。しかし、彼れの全身に燃えてゐる熱誠は、彼れを駈つて、愛慾から勞働へ、勞働から爭鬪へと導かなければならないのであつた。

靈が肉を去つた濱江の冷たい手を握つても、過ぐる日の暖かさの蘇生つて來ないのに、絕望し、發奮した彼れは、濱江の最後の言葉――『自分の力で活きて下さい……』に、一層强く勵まされて、驀地に工場の門へ進まうとした

のである。」

三

海野の父親の方から、流石に交際の廣いのを辿つて、頼み廻はつたり、また自分に奔走したりして、春田は漸く中央銀行の機關夫に缺員のあるのを見出してもらふことが出來たのである。缺員があつたとて、直ぐ其處へ坐り込むわけにゆかぬのは勿論で、先づ本所の電話局へ差し向けられて、其處の技手に一通り電話に關する技術の試驗をされた。本式に習つたのではないが、其の道の術語を相應に知つてゐて、分解された機械の組み立ても火焰を撒きながら、やつと出來た。技手に喚ばれた工夫は、今春田が組み立てたばかりの機械に線を繋いで、何處かに居る同僚と、通話を始めようとした。

春田は打ち取つた犠牲を實驗に供へてゐるといふやうな心持ちで、チツと工夫の一擧一動に眼を注いでゐた。『あゝゝあ　話し解りますか。あゝゝゝあ。』と暫く變な聲をしてゐた工夫は、電話機をかちんと引つかけて、『差し支へありません。』と、技手に報告した。春田はほツとして、この時ばかりは神佛の加護を受けたやうな氣がした。

それからまた技手にいろ／＼と質問されたが、答へられることゝ、答へられないことゝが、相半ばしてゐた。まるで答へることも出來ず扱ふことも知らなかつたのは交換手が頭へかける後鉢巻きのやうな、ニツケル鍍金のものゝことで、其の名稱さへ、春田は知らなかつた。

『君は感心ですよ。今までなか／＼中學を卒業した人なんか來なかつたんですが、……』と言ひ／＼、技手は春田の服

歴書に眼を移して、「よく出來たやうに報告しときますから。」と、スッカリ同情して、春田の知らぬ電話機械の扱ひかたを、いろ／＼と教へてくれたりした。

森の家へ歸つてくると、海野の父親は窓際へ机を控えて、「文明の破壞」といふ英文の原書の飜譯をしてゐた。一種の未來記ともいふべき本であるが、出版の日附けを見ると、今から五十年ほど前に出たもので、前世紀の文明が大に榮へて、蒸汽時代が全盛を誇つてゐる頃に、五十年後の今日を豫想し、それが恐ろしいほど適中したところがあるといふ逆に行つたアナクロニズムとでも評すべき興味に惹きつけられて、初めは氣乘りのしなかつた飜譯を、この森の中の家へ移つてから、父親は殆んど其の背皮の破れた本と首ツ引きをして、譯文の筆を走らしてゐる。

春田はあの鼠の糞の痕のある米箱から、七合の米を精確に量り出して、バケツで磨いだ。森の一部分を切り拓いて建てた三棟十二戸の長家と、家主の住居一棟とに、井戸が一つだから、夕方なんぞは、バケツを提げて行つても、黑い人だかりで、井戸側を見ることさへ容易でない。それで春田は早や目に井戸端へ出かけて、思ふ存分白い水を流して來るやうにしてゐた。春田が甲斐々々しく炊事をしたり、拭き掃除をやつたり、また洗濯にまで手を濡らしてゐるのを見ると、父親が涙を浮べて、

「濱江と二人で、かうして生活したかつたなア。濱江は女の癖に女のする仕事が嫌ひで、ガスで飯を炊くのさへ、ぐづぐづ言つた。君がかうして、炭火をおこしてゐるところを、彼女に一目見せてやりたかつた。」と飜譯の筆を耳朶に挾んだまゝ、臺所へ出て來て言つた。家の割りには廣い臺所が、キチンと片付いてゐた。

優しいことを言はれるほど、春田は父親が懷かしかつた。亡き濱江の父親をば、自分の父親のやうに、いつしか「お父さん」と呼んでゐた。よく自分を叱つた自分の亡き父よりもこの父の方が父らしく思はれて來た。初めは先生と呼んで

ゐて、早く『お父さん』と呼ぶやうになりたいと思ひながら、亡き濟江の耳へ『お父さん』と呼ぶ其の聲を聞かせないうちに濟江はあの世の人になつてしまつた。

四

桝といふものを買つたことのない父親は、これまで母親とゝもに居る時、幾度かそれを買ふ提議をしては、母親に斥けられてゐたのであつたが、今度春田と二人で男世帶を張るに就いて、多年の宿望から、漸く一合桝を手に入れて、毎日炊く米の分量の正確に行くのを喜ぶとゝもに、桝といふものゝ案外高價なのにも驚いてゐた。

時々臺所へ來て、鼠の齒の痕のある米箱に手を差し入れ、新らしい一合桝に政府の檢印の鮮かなのを取り出しては、つくぐ眺め入りつゝ、殆んどこの家に唯一つの新らしい道具といつてもいゝ一合桝をば、父親はなかぐに珍重してゐた。新らしい道具を買ふことが好きで、それが容易に出來ない生活の苦しさをつゞけて來た父親に取つては、この桝といふものゝ割合ひに高價であつたことが、また其の慰安の度を高める種にもなつた。一人娘の濟江を亡つてから、この一合桝を手に入れたといふことによつてのみ、父親は纔に心を紛らしてゐるのではないかと思はるゝほど、小さな桝を愛翫してゐた。

春田は春田で、電氣に關する僅かの知識を應用し、座敷の電燈線に針を差して、別に臺所へ線を引ツ張り、其處に一つまた電球を輝かして、夜の炊事を明らかにしたりした。

そんなことが、この老人と青年と二人の侘しい共同生活を慰める手段で、それよりほかには亡き濟江の寫眞の前に好きであつた食物を供へるのが、二人に取つて何よりも嬉しい仕事であつた。

着物だけは、母親の苦心で、中流の若い娘の中へ押し出しても、さう引けは取らぬやうに装はせてゐたが、食物なんぞほんたうに贅澤を知らぬ濱江であつた。

『到頭今年のトマトを喰べないでしまつたね。』と、父親は娘の啃んだ赤茄子の皮を剝いては涙ぐんでゐた。剝いた薄い皮が、父親の指先きに絡まつて、血が出たやうに見えた。

床の間のない座敷なので、寫眞の飾り場所に困つた。大工の住む隣家との仕切りの壁に添ふて、濱江の使つてゐた一閑張りの小机を置き、其の上に濱江の十七の時の寫眞を立てたが、夕方になつて、隣家の大工が二三人の弟子たちを連れて歸つて來ると、棟梁の晩酌の前で蓄音器が始まつて、八木節、浪花節、端唄の騷々しさに、濱江の寫眞が眉を顰めるやうに見えたので、何處かほかへ寫眞を移したいと春田は考へたが、どうもいゝ場所がなかつた。

便所を座敷の中に取り入れたやうな造りかたの家で、押し入れの脇に三尺四方の板の間を附け、其處から直ぐはゞかりの戸に手がかゝるやうになつてゐた。拔けるだけ手を拔いてどうにかかうにか雨露さへ凌げればいゝといふやりかたで家の形さへ空中に描き出せば、根太を据え切らぬうちに、借り人の申込みが降るやうに來るといふ時節に附け込んだ、粗惡の境を通り越した鷄小屋のやうな建てものだから、床下の土を掘り取つて、其のまゝ下地へ塗り着けた壁に、濱江の寫眞を凭せかけて置くことが、春田は可愛想でならなかつた。

それに三年前の寫眞では、どうも親しみが薄かつた。生憎今年になつてからの寫眞は、昨今始めた素人の安價なコダツクに入つたのが一枚あるだけで、それは半分背後を見せた横向きなので、飾つて置くにふさはしくなかつた。今一枚、其の素人の手に正面を向いたのがある筈だが、それは飾ることの出來ない形のものらしく、取り戻してくれといふ故人の遺言を聽いてゐながら、春田はまだ其の家に出向くことを躊躇してゐるのであつた。畫で誘惑され、文章で誘惑され

寫眞で誘惑されて、遂には醜い影を、或る男の手に殘した濱江の罪も、死ぬ前の懺悔によつて滅びたとはいへ、さういふことを考へるのは、春田に取つて、苦惱の第一であつた。

隣家では、弟子たちが蓄音機に飽きて坐り角力を始めた。蓄音機は蓄音機で、まだ粗雜な音色をつゞけてゐる。『梅にも春』が唯一つ、聽いてゐられる程度のもので、これならば濱江の寫眞も眉を顰めまいと思はれたが、バラツクのやうな家は、隣りの坐り角力から、此方の天井をも搖り動かして、ドタンと足を壁にぶつけたので、濱江の寫眞は其の震動で、一閑張りの机から轉げ落ちた。もうどうしても、此處に寫眞を飾ることが出來ないと思ひ定めた春田は、窓際の父親の机に並べて、一閑張りの机を揃え、其處の柱に凭せかけて、寫眞を安置した。

『大阪でもさうだつたし、東京へ歸つてからも、濱町の家で濱江の机と俺の机とはよく置き場所が問題になつて、お父さんと机を並べるのはいやだと、強情を張りよつたが、到頭この机と俺の机が並ぶやうになつたなあ。』と、父親は眼をしばたゝきながら、濱江の寫眞と其の遺愛の机とに見入つてゐた。

四

『御志望の件に就き來る××日體格檢査執行致候條、午前九時より正午までの間に左記の場所へ御出頭相成度候也』として、駿河臺の或る病院を指定した中央銀行の葉書が來たのは、電話局で試驗を受けてから、一週間ほど後であつた。

『いよ〳〵合格したな。』と言つて父親は笑つてゐた。

其の前々日であつた。薄セルの背廣を着て、新らしい麥稈帽子を被つた若い紳士が、突然この濱の家を訪ねて來て、『中央銀行文書課中根何某』とした立派な名刺を出したので、春田はこの書き付けのやうなものと中央銀行の名前とを對

照に一種の不審を感じながら、きまりのわるい思ひをして、若紳士を座敷に通すと、父親もひどく恐縮して、自身が机の前で敷いてゐたこの家に唯一枚の古い夏座蒲團を取つて、上座と思はるゝ見當に置き、『むさ苦しいところへよく入らして下さいました。』と、挨拶嫌ひがこれだけのことを言つたのを、春田は今まで一度も見たことはなかつた。

『實は、貴方の身元調べを、銀行から命ぜられて來たんですが、御近所で訊いても分らないので直々お尋ねしたやうな次第です。あなたのことをあなたに訊くのも可笑しいが、これまでの御經歴でも一通り話して下さい。近所で聞いたやうにして、いゝ加減に報告しておきますから。』と、其の中根といふ若紳士は、おほやうに構へつゝ、如何にも恩に着せるやうに言つた。

『それは、わたくしからお話しゝませう。實はわたくしの罪でございまして、……』と、無口な父親が、もぐ／＼と唇を動かして、太い聲で言ひ出した其の調子は、濱江そつくりであつたから、春田は覺えず涙が込み上げて來て、窃と座を外した。

草の根が敷居の中にまで莚つて來てゐる土間で、殆んど草履ほどの薄さになつた薩摩下駄の、ひどく爪先きの方の缺けたのを引ッかけて、外へ出やうとする時、脱ぎ棄てゝあつた客の靴をちやんと揃へたが、後からまた、それが恥辱のやうにも考へられて來て、靴を元の通りにしようかと、二三歩引つ返しかけて、暫く佇んでゐた。

前面には二棟の長屋が、上り下りの列車の同時にステーションへ入つて來たやうな形に並んでゐる。それに比べると自分の家は二軒長家だから、家賃が二圓高いだけ優つてゐる。しかしこの家主の立てた長家には總べて格子戸がないので、如何にも物置のやうに見える。こんなものを建てゝ、法外の高價に貸さうとする家主の心の淺ましさを憐れみたいやうな氣がして來たが、家主の方ではまたこんな家へでも先きを爭つて、住みたいと望む宿無しどもを笑つてゐるであ

らう。高く貸したいと思ふ心と安く借りたいと望む心と、詰まりは同じ種類の慾といふ心なのである。二つともそれが相當といふ範圍を離れて、高く貸したいと思ふ心が強者となり、安く借りたいと望む心が弱者になつて、惡玉と善玉とのやうに、ふは〳〵と地上に踊つてゐる時、多くの人は言ふまでもなく善玉に喝采を浴せかけるが、善玉とは惡玉の假裝したもので、惡玉とは善玉が禮服を脫いだものである。同じ形の「慾」といふものが異つた衣裳を着けてゐるに過ぎない。

この森の一番高い樹に同じ高さの樹をもう一本接ぎ足したほどの空に、鳶が一羽、輪を作つて、人間の利慾心が、忽然としてこの森の中に出現させた三棟のごた〳〵した粗末な長屋の柿屋根を嘲笑ふやうに、ゆる〳〵と舞ふてゐた。

春田は、總べてのことが馬鹿らしくなつて、森から原の方へ進んで行つた。原の彼方には、稍人間の住居に見えさうな、しつかりした家々が並んでゐて其のうちの一軒からは、隣家の大工のよりずつといゝ蓄音機の音が聞えて來た。耳を澄ますと、それは亡き濱江の好きであつた「夜の調」の獨唱であつた。春田は覺えず耳を押へて、原から森へ逃げ込んだ。

五

もう大抵よからうと思つて、格子戸のない家の一つ、それが自分の住居だとは、まだどうも、しつくりと胸に滲みて考へられない二軒長屋の手前の方に立つて、樣子を窺つてゐると、黒い土のよく固まらない土間へは、敷居の下から土龍が忍び込んでむく〳〵と草の根を持ち上げてる。

「何んしろ、給料は安くとも、名前がいゝものですから、去年でしたか小使を募集しましたら、二千人からの應募者がありましたよ。まるで高等學校の入學試驗です。みんな中央銀行といふ名に惚れて、ほかの銀行の小使なんぞもやつて

來るんですね。二千人の小使候補者が集ると、隨分賑かでしたよ、小使の觀兵式が出來ますね。はツはゝゝ。』と、また笑つたのも中畢が、內部から入口まで聞えた。

『大將と少將では、さう格も違ひませんが、大使と小使では大變な相違ですよ。はツはゝゝゝ。』と、また笑つたのも中根といふ若紳士であつた。父親の聲は聞えなかつた。

春田が足音もさせずに入つて行くと、若紳士は、頻りに一閑張りの机の上に飾つた濱江の寫眞に見入つてゐるところであつた。繪姿だけになつてもまだ男に誘惑されさうな濱江であつた。春田はむら〳〵と起る嫉妬の情を押さへつゝ、屹と、若紳士の樣子に眼を付けた。

『君、僕がいゝ具合に報告しとくからね、十中の八九は採用されるだらう、採用されたらきァ、辛棒したまへ。給金は安いが、名前がいゝからね。日給が八十錢に、九割增しの七十二錢を加へて一圓五十二錢だ。一と月勤めて、四十五圓六十錢、物價は高くても澤さへしなければや、一人にや澤山だ。』と、若紳士はもう、自分の部下のやうに思つたのか、急にぞんざいな言葉を使つた

『何分よろしくお願ひいたします。』と言つてゐるよりほかに、春田は答へのしやうもなかつた。若紳士が無作法にも手を伸して、一閑張りの机の上の濱江の寫眞を取り上げて見た時は、むら〳〵として來たが、何んとも言はずに、元のところへ立てかけたので、ほッと安心するとゝもに、また若紳士が寫眞に就いて何も言つてくれないのが物足りなくもあつた。

『何んしろ、名前がいゝですからね。女事務員なんかも、隨分いゝのが居ますよ。大變なハイカラがね。日曜なんか、途中で立派なお孃さんにあふと、向ふからお辭儀するんだ、吃驚してあんな人に知り合ひはないがと、よく考へてゐるうちに、あゝあ銀行の女事務員だと、二三丁も行き過ぎてから思ひ出すこともありますよ。給料は安いけど、名前がい

ゝからね。』などと、腰を落ちつけて喋舌り出した若紳士は、なか〳〵歸りさうにもなかつた。

今度は父親が窃と座を外したので、春田は父親の性分から言つて、一番嫌はれさうに出來てゐる若紳士の薄ツぺらな口の輕い人物に、到頭僻易したのだなと思つて、心の裡で笑ひながら、自分もうまく逃げ出して、この男を唯一人にしておけば、如何なお喋舌も相手がなくなつたら、立ち去るだらう、さうしてやれば面白いなあと考へつゝも、また折角出來かゝつた働き口が、其の爲めに消えてしまふのも殘念だと思ひなほして、チツと辛抱しながら、若紳士の相手をしてゐた。

稍暫らくすると、父親はカチヤ〳〵妙な音をさせて歸つて來たが、其の太い手には、二本の麥酒と、三つのコツプとがあつつた。それから『お待ち遠さま。』と言つて、森の下の貧しい町の鮓屋の女が、臺所へ岡持ちを持ち込んだ。

最愛の一人娘を亡つてから、父親は全く人が變つたやうに、氣の弱い老爺になつてしまつてゐた。

若紳士は遠慮なく麥酒を飲み、鮓を摘んで、『君ツ中央銀行は名前がいゝからね。』を繰り返してゐた。

六

體格檢査の日は、身體がだるくて、熱も少しあるやうに思はれ、春田は自分で自分を持ちあぐんでゐた。今日は行くまいかと考へかけたけれど、それが爲めに、中央銀行へ入れなくなつては、父親が失望するだらうと、自分よりも父親の爲めといふことが、春田の勞働に志ざした第一の動機になつてゐるのも不思議であつた。自分の實の父親には、我儘ばかりして困らせ抜いたが、愛人の父親に對しては、自分を犠牲にすることを厭はないといふ心持ちも、春田には分つたやうで分らないぶかしさであつた。

とぼ〳〵と森の家を出て、駿河臺の病院へ辿り着いた時は、濱町の家から濱江の釣り臺に引き添ふて、郊外の病院へ行つたのと、丁度逆の道を歩いたといふ感じが深かつた。市街から郊外へ、郊外から市街へ、春田の歩く運命の途は、十字形に交叉されてゐるやうに思はれて、愛人濱江の臨終の床頭に立つてゐた看護婦の白帽の赤い徽章も考へ出された。

若い醫者が出て來て、簡單に檢査をしてくれた。檢溫器は、態と下の方へ滑らして、巧みに、六度七分を出して置いた。こんな不完全なかけかたをして、六度七分にも騰つたところを見ると、ほんたうにかけたら少くとも八度ぐらゐにはなつたかも知れないと思つて、少し恐ろしくなつた。さうして、濱江の身體をば十九歳で奪つた腸チブスの四十度からの高熱が、やがて自分を襲つて來て、二十四歳を一期に、東京の露と消えるのではないかといふ哀しさが、黑い薄絹のやうに自分を包み込まうとするのを覺えた。

『狹いなあ。…………』と、醫者は胸廓を測りつゝ言つた。春田は何んだか癪に障つたので、うんと息を吸ひ込んで精いツぱい胸を張ると、醫者は少し周章てた風をして、『あゝツ結構、結構。…………もう澤山。』と言つて、卷き尺を持つた手を引き込めた。

『いゝやうにうまく報告しといて上げますからね。』と、醫者はにツこりして言つた。今度のことが始まつてから春田は至るところで、かういふ言葉を聞くのを心外に思つた。情實の渦の中で手遊品にされてゐるやうな氣がして、腹立たしくもあつた。親切な人が世間に多いのだとは、どうしても思へなかつた。

寂しい心持ちで、とぼとぼ森の家へ歸つて來ると、父親が熱のある春田の身體を氣にして、井戸端のところまで見に出たのに出くはした。家主の宅の櫺子窓のところには、白いレースの風に搖いでゐる奥に、女子大學を出たといふ女を

借家人の出來る度に敷金と交換に話して聽かせる細君がもう四十に近い顏へ、こつてりと白粉を塗つて立つてゐた。ツンとしてゐる女だが、春田の家にだけは、父親が古い文學士であるといふことをどうして聞いたか、知つてゐて、特別の待遇をするつもりか、顏を見ると先方からにツこりした。文學士が家の家作へ入つたといふことも、やがて長屋中へ觸れ廻はされた。牛込の方に事務所を持つて、借託業のやうなことをしてゐる家主が工學士であるといふことも、細君の女子大出身とゝもに、長屋の嬶までが皆耳へ押し込まれてゐた。借家の拂底に乘じて、家作師を兼ね始めた家主は、忙しい身體だとかで、滅多に森の中へはやつて來なかつた。貸家のことは細君が一手で切り廻して、自分の家の表へ立てた電燈の料金をも、長屋中の往來安全の爲めだと言つて、軒別に十錢づゝ徴集したりした。『この電燈は高い電燈だよ。』と、聞えよがしに言つて、夜おそく五燭の外燈を眺めて罵る女房たちもあつた。

春田と父親とは其の電燈が、どうしたのか今日は晝間も赤く點いてゐる前に立つて、暫らく體格檢査の話をした。

七

其の翌々日であつた。また『御志望の件に就き……』といふ文字を冒頭に印刷した中央銀行の葉書が來た。『來る××日出頭相成度候也』と讀み終つて、春田はいよ〳〵合格したなと思ふと、嬉しい氣もするが、少し氣味惡るくも感じないではゐられなかつた。父親は幾度か其の葉書を取り上げて、ほく〳〵してゐた。

其の日になると、父親は行李からセルの背廣を取り出して、『これを着て行つたらいゝ。』と言つてくれた。肥つてはゐないが、大柄な人の洋服を、瘠せた春田は借り着をするのに氣が向かなかつたけれど、濱江の魂魄が、側から、『着ていらツしやいよ。』と、太い聲で言ふやうに思はれたので、今日だけ着て行くことに定め、ワイ襯衣から何から、父親の微臭い

のを一切借りて、だぶ〳〵のズボンを穿き、いよ〳〵上衣を着込んで見ると、思つたほど不恰好でもないらしかつた。鏡といふものゝ一つもないこの家では、姿を寫すことが出來ないので、春田は便所の前へ行つて、手洗に置いてあるバケツの水に顔から襟のあたりの寫るのを覗いて見たが、よく分らなかつた。しかし學校このかた着たことのない異様な自分の服裝を、チラと眺めることは出來た。鏡の好きであつた亡き濱江のことが頻りに思ひ出された。鏡は女の魂といふことを聞いてゐるから、神田へ行つて、母親から濱江の數あつた懷中鏡の一つを貰つて來て、寫眞とゝもに飾つて置かうかと考へたりした。自分の顔を濱江の遺品の懷中鏡に寫したら、定めて生きた濱江に再會したやうな氣がするであらうとも考へた。其の懷中鏡を手にした時、自分の顔が寫らないで、鏡の面へあり〳〵と、濱江の顔が現はれたら、どうであらうなどと、空想を浮べても見た。

森のゝを出て、中央銀行まで、電車の乘り換へが面倒であつた。半分地中に沈みかけたやうな棟の低い石造建築が、矢張り雄大な、ドツシリとした灰色の姿を、自分の眼の前に現はした時、今日から自分は此の大きな建物の中の、一つの細胞として働くのかと思ふと、胸がどき〳〵した。

正門から入りかけて、通用門のあるのに氣づいた春田は、堅く踏み固められた石のやうな土の上を、先づ守衛室にかゝつて、出勤簿と睨めツこをしてゐる老守衛に、銀行からの葉書を見せ「何處へ行けばいゝんですか。」と咽喉へ引ツかゝるやうな聲で訊くと「小使に案内して貰つたらいゝだらう。」と、白い鬚が二分ほどに伸びてゐる痩せた汚ない顋をしやくつて、守衛は制帽の廂に手をかけてもくれなかつた。さうして、借り物を看破したといふ風に、じろ〳〵と、春田の身にそぐはぬ洋服を見た。

この上また小使室の所在を、この老守衛に訊くのも業腹であつたから、春田は行きあたりばつたりに、奥へ進んで、

印刷所の前を通りつゝ、自分のところへ再三來た葉書も此處で刷つたのだと思つたり、炊事に忙しいコック室の前ではつひ内部を覗いてみたくなる自分の心のさもしさを、先頃まではこんなでなかつたのにと、自ら叱つて、大釜に湯のたぎつてゐるところまで行くと、其の側の暑さうな一室に、小使らしい男の四五人集合してゐるのを發見した。

『やあ。』

かういふ聲が先方からかゝつたのに驚いて、春田が屹つと眼を注ぐと、先頃森の家へ身元調べに來て、いやに中央銀行員風を吹かして行つた中根といふ若紳士が、今日は詰め襟の使丁服に身を固めて、にこ〳〵してゐた。

彼れの正體は小使であつたか。………とさう思ふのさへ、春田は氣の毒でならなかつたが、先方ではしやあ〳〵して、『君、いよ〳〵採用になりましたか。』と、何んだか恩に着せるやうに言つた。

八

『えゝ、先日はどうも有りがたうございました。………これは何處へ行つたらいゝんでせう。』と言ひ〳〵、春田はこの廣い館の多くの人の中で、うまくこの男に逢へるやうにしてくれたのも、濱江の雛が手引きをしてくれたのかも知れないなぞと考へて、あの葉書を見せた。

『あゝ、僕が連れて行つて上げませう。』と言つて、今日はどうも若紳士とは言へない其の中根といふ男が、麥酒と鮓との効能を今こゝであらたかに顯はしつゝ、先きに立つて案内してくれた。地下室へ下りる石段は、もう直ぐ其の近くにあつた。

石段を下りて、花崗石の敷いてある上を、父親からの借り物の大きな半靴の、動もすれば脱けそうになるのを踏みし

めく〳〵、おツかな吃驚で左へ曲ると、細長い通路には鐵板が敷いてあつた。

「この下にスチームのパイプが通つてるんですよ。」と、中根といふ男は、底の厚いドタ靴で其の鐵板の上に力足を踏むやうなことをしたり、また右側の一室に暗く錠前のおりてゐる所を指さして「此處で紙幣を燒くんですよ。尤も燒くのはもう暫らくで、其のうち煮ることになるでせう。煮てドロ〳〵にして、また紙に漉くんですな。」なぞと、問ひもしないことを教へてくれたりした。

右の方には、三つのボイラーが冷たく並んで、火の氣のないのが猛獸の死骸のやうに見えた。奥の右側の一室に汚ない卓子を扣へて、青い作業服を着た眼の窪んだ中年の男と、今一人の若いのが居た。中年の男が機關夫の監督で若い男が春田と一緒に働く電氣係りの機關夫であつた。この銀行では下層に働くものを皆機關夫と呼んでゐて、火夫も鍛冶も皆機關夫であつた。監督は本職が鍛冶工であるといふ話であつた。

中根といふ男は、監督の前へ春田を置きツ放しにして、直ぐ立ち去つた。これからいろ〳〵の話や、面倒な手つゞきがあつて、春田はいよ〳〵、「機關夫を命ず……………」の辭令を貰つたのであつた。

監督に連れられて、同じ下層の仲間へ挨拶に廻つたが、一番電氣係りとは交渉の多いといふ電話交換室へ、眞ツ先きに連れて行かれた時、交換臺を前にして腰をおろしてゐた若い女が八人、一齊に立つて、春田にお辭儀をしたので、春田はどぎまぎして、顏を眞ツ赤にした。

それからエレヴェーターの係りにも紹介された。「よく故障が起りますから、何分よろしく願ひますよ。」と、瘦せてひよろ〳〵した其の男は言つた。

監査室の前を通りかゝつた時、案内をしてゐた監督が、何か怖いものでも見付けたやうに、横ツ飛びをして、一散に

逃げてしまつたので、春田は呆氣に取られて、ぼんやり突ツ立つてゐた。其の脇をば、向ふから來かゝつたフロックコートの紳士が、まだ老ひない元氣のいゝ顔に、口を堅く、丁度あの兌換劵や債劵の古いのを燒く室の錠前のやうに結んで、さツさと大股に、珠突きやゴルフに凝つてゐるといふ手で、應接室の扉を開けて、立派な姿を消してしまつた。すると横ツ飛びに逃げた監督が、何處からか、ひよツこり現はれて、ペロリと赤い舌を出した。

「君、あれが總裁ですよ。」と、監督の額には汗が流れてゐた。何もさう逃げ隱れするにも及ぶまいものをと、春田は不思議な感じを催しながら、監督に隨いて、元の地下室へ歸つて來た。

此處が君の席だと指定されて、與へられた堅い椅子に腰をおろしつゝ、春田はきよろ〳〵と其の地下室の内部を見廻はしたが、凡そ八坪ばかりのコンクリートの床の眞ん中に發電機が据え付けられてあるが、これは電燈會社の方に故障の起つた時火力で發電させるもので、――其の時はたまらないほど忙しいさうだ。――平常は矢張り猛獸の死骸のやうに、冷たくなつてゐる、それから其の脇に蓄電するモーターが蓄電池を前にして嚴めしく控へ、次ぎには電話信號のモーターがくる〳〵廻はつてゐる。其の直ぐ側に、配電盤が一つ、これは電話に使ふ分で、其の次ぎにも同じ配電盤が三つ、これは、エレヴェーターと電燈との分として並んでゐる。かうしたいろいろの機械に壓し附けられるやうにして、一つの汚ない卓子と二つの椅子とが、二人の電氣係りの機關夫を迎へてゐる。其の一つの椅子に、今日から自分が腰を載せることになつたのも、何かの因縁であらうと、春田は汚なく堅い椅子に、キスをしたいやうな心持ちになつた。

九

二三日するうちに、だいぶ慣れて來た。地下室の汚ない卓子の上に備へてある電話の鈴がチリリリンと鳴ると、直ぐ

受話機を取つて、電燈や電話の故障を聽き取り、大抵は捻ぢ廻はしを一つ持つて、獨りでさつさと出て行くことが出來るやうになつた。ハイカラの女事務員なぞは、故障もない電話に故障を言ひ立て、機關夫に無駄足をさせて、嬉々と笑つて喜んでゐる。大きな脚榻を持つて、日に幾度エレヴェーターに乘つたり下りたりするか知れない。

『毎度御苦勞さまで。…………』

『いや御苦勞さまで。…………』

エレヴェーター係りのひよろ〳〵した男とは、こんなことを同じやうに言つて、笑ひ合ふやうになつた。

晝間も電燈を點けてゐるこの大きな煙筒のやうな館では、電燈の故障が頻繁に起つた。ソケットへプラグを差すと、パッとスパークが出て、手が黑くなるほどの目に遭つた。

『危ないッ…………ショートしましたね。大丈夫ですか。』と、傍に居た電氣係り出身の若い事務員は親切に言つてくれた。そんな風の變な術語を、平氣で自由に言ひこなせるまでに、器用な春田は、二三日でもう一人前の機關夫になりかゝつてゐた。

そろ〳〵煽風機の季節に近づいたので、其の方の手入れにも可なり忙しかつた。春田の素人細工では間に合はぬやうな、むつかしい仕事が後から後からとやつてくるので、其の度に冷汗を掻いたが、それでもどうにか切り拔けて行かれる自分の才氣が、自分にも賴もしかつた。

五つに仕切られた地下室は、春田と其の同僚とが、誰れかの所謂機械麾下の人間として、見窄らしく控へてゐる一室が、左り側の一番奥で、其の次ぎの室が、監督の室になつてゐて、其處には各種の材料を入れる押入れと、稍見まさりのする卓子とが並んでゐる。其の次ぎが嚴重に、總裁の口元のやうに錠前をおろした、兌換券及債券、證券の燒却室で

其の向ふ側には、夏も火を絶たないボイラーが一つ、五坪ほどのところに据ゑられてゐて、其の次ぎの二十坪ほどのところには、例の猛獣の死んだやうな三つのボイラーが冷たく並んでゐるのである。それが丁度春田たちの機械と雑居してゐる室の向ふ側だ。

『君、春田君。……一寸来てくれたまへ。』

隣りの室へ通ふ扉と厚い壁との間に首を挟まれたやうにして、監督は春田を呼んだ。

『はい。』と答へて、春田が監督の室に入り、其の卓子の前に立つと、其處には自分の卓子の上にあるのと同じ丼の中飯に、煮肴の皿を添へたのが湯氣を立てゝゐた。

『君、中飯はまだかい。何んなら一緒にやらうぢやないか。銀行ではまア、かうやつて毎日中飯をくれるからいゝよ。月によるとなかなか御馳走があるからね。……だが日曜は駄目だよ君、行員もコックも皆休んで、出るのは我々だけだから。……』と、監督は上機嫌であつた。

日曜日も休めないのかと、春田は情哀しく思つた。

『君、君にゆつくり訊いてみたいことがあるんだがね。君は養子に行かないかね。単刀直入に話すがね、あの門衛の爺さんね、知つてるだらう。あの爺さんに、一人娘があつて、今年二十五だ。髪結をしてるんだがね、島田はなかなか上手だと、神田邊ぢや評判ださうだ。どうだね、君、行かないかね。尤も先方は二度目ださうだが、一と月百五十圓は缺かしたことがないやうだから、彼家へ行けや君氣樂だぜ。君はあの門衛の老爺に見込まれたんだ。』と、監督は笑ひながら畳みかけて言つた。

故障もない門衛室の電話に故障があると言つて、三四度もあの禿頑固の老爺に呼び付けられたわけが、漸く分つたと

思つて、春田は苦笑した。朝出勤簿へ印を捺す時に、門衛の老爺が、佛頂面をくづして、何かと話しかけようとすることも思ひ出された。

『君、今夜湯に入つたら、歸りに二人で寄つてみようぢやないか。神田の今川小路ださうだ。……見合ひといふ格でね。娘は美人ぢやないが、一寸可愛い顏をしてるぜ。』と、監督は押し付けるやうに言つた。

焚いてゐる方のボイラーの側に、西洋風の浴槽があつて、いつでも入浴が出來るやうになつてゐた。

『一寸汗を拭いて來てからお返事をします。』と言つて、春田は一先づ其の機關夫專用の浴室へ逃げ出した。

――長篇「東京」第二部「勞働篇」の第一節――



K商會の俊才

石丸梧平

一

「世の中もこないに順當に行くと定つたら文句はないな。なあお君、今度のボーナスは一萬圓や、お前がなんぼ費たかて大丈夫や。」

昨日、夕飯のあと、少しお酒がまはつて居たその元氣からであつたかも知れぬが、夫の俊三がさう云つた言葉を、お君は思ひ出して居た。戰爭以來ほんとに調子がよくなつて、俊三が勤めて居る商會も、このごろはめつきり大きくなつたのである。それにしても半期の賞與が一萬圓も貰へるとは、お君にはまるで夢のやうな話なのである。

ほんまに一萬圓のお金など見たことがない。明日をも知らぬ病人やさかい、この世の名殘に一萬圓のお金を見て死にたいものとや。——呟くやうに云つたが、すると急に、忘れようとして居る苦痛がはつきりとまた考へられるのであつた。

こないに幸福が向いて來てるのに、今わたいが死なねばならぬとは、何と云ふ因果

なことや。――お君は決して死にたくはなかつた。随つて死ぬことなどは思ひ出したくはなかつた。

けれどもお君は、すぐに一週間ばかり前につとめた義母の佛事の日のことを思ひ出して居た。あの日にまゐつた淵昇寺の老僧は、このあたりでは名高い學者ださうだが、お母さんの佛事を大切にするつもりで俊三はあの老僧を迎へたのであつた。お君が久しく病床に居ると云ふことを聞いて老僧はわざ〳〵枕元まで見舞つてくれた。その親切はありがたいとしても、すぐにも往生の大切なることを話したのには、お君はすつかり氣をわるくしてしまつた。女學校を途中で廢してしまつたお君には、新しい學問のことは知らぬけれど。それでも地獄があらうなどとは、今の世に考へるものはあるまいに――。さう思ひながらも、老僧があんなことを云ひ出したとき、お君は、全く氣が狂ひさうに、いやになつたのである。

「お寺はんよりは、よつぽど天理さんの方が好え。」

天理さんもあまりはか〴〵しい功能が見えないので、この頃は少し信心をおろそかにはして居るが、天理さんはお寺はんのやうに死ぬことはあまり云はない。信心さへすれば病氣がなほると、そればかり云ふのだから――こないに病氣が長引いて退屈やさかい、またあの天理さんに來て貰はうか知らん。」

それを決斷するよりもお君はすぐまた繁子の言葉を思ひ出して居た。

「肺病もな、二十前後に出たのは、とてもあきまへんで。すぐだすさ。けども三十越してからの病氣なら大丈夫だす。よし悪なる一方にしても、五年や七年で死なしまへん。――それにあんさんのは、こないに旦那さんが大切にして養生さして下はるんだすよつて――氣長うお居でやす。きつとなほりますよつて。」

いろ〳〵人の噂も聞いて見ると、なるほどさうだと、お君は一安心をしたのである。たゞお君は今年二十九で、三十

にはまだ一年間があるのだが、それを訊きかへすのは何だか恐ろしかつたので、そのまゝ口を噤んでしまつたのであつた。……

「奥さん、郵便がまゐりました。」

「わたいに？――」お君は女中が枕元の方へ廻らうとするのを、それには及ばぬと云ふつもりで、床の上に起き上つて手をさしのべた。

「――」手紙は清一からであつた。親兄弟のないお君には、それから友人と云ふものを、あまり持たないお君には、郵便が自分の名宛で來ると云ふのは、たゞ繁子からの時々の見舞状ばかりであつた、それでも退屈なお君には、郵便ときくと、誰れから、どんなよいことを云つて來たらうと、胸さわぎさへするのであつた。「清一からか！」

つまらなさうに一寸さう呟いたが、こないだからの事件のつゞきでもあり、殊にはこの事件が起る少し前からは、清一は非常にお君の方に、凡てをたよるやうになつて居て「――清一も、あれでなか／＼やさしい子やこと！」

手紙には、先づ、お君の病氣のことをいろ／＼心配して書いて居る。その上、毎日神樣に全快をお祈りして居ることまでこま／＼と記されてあるのであつた。

「あの子も不幸な子やが」と、お君はいつの間にか涙ぐんで居た。

清一が、俊三の姉の長男として生れたころは――もう十五年前のことだからお君は當時のことは知らぬわけだが、俊三の話によると、その頃は、姉の嫁いだ大島屋は農人橋界隈では二つとない大きい呉服屋だつたさうだが、肝心の夫が遊ぶことだけしか知らぬぼんちだつたので、清一が小學校へ入學する頃には本も子もない素裸飴の商人に落ちぶれてしまつて居た。「あの死んだ姉夫婦は、それは／＼どのくらゐこの家に迷惑かけてる知れやへん。あの人等の爲めに、この家

の、出かけた芽がなんぺん枯らされたか知れんねさかいな！」

と、これは俊三から幾度となく聞いた怨みの言葉である。姉が亡くなり、そのつれあひも間もなく死んでからは、清一はこの家に引き取つて、やつと高等小學校だけは一昨年卒業させたのだが、それからは俊三のはからひで、すぐに御堂筋の吉川と云ふ呉服屋へ奉公に出してしまつたのである。

「そんな、中學校へ行きたいなんて考へは、きれいに忘れてしもて、それよりも一日でも早よもとの大島屋になるつもりで神妙に奉公するのや！」

俊三が別れの言葉をさう嚴しく申し渡すと、まだ十四歳の、殊にあの子は虚弱い子だが、清一はしほ〳〵と世話人に連れられて行つたのであつた。

「可哀さうにおまんな。――それにあんさんがあんまりきついこと云やはるよつて――」鼻をつまらせながらお君がさう云ふと、

「そらわしかて可哀さうやと思ふのやけど、あれだけきついこと云ふて置かな、なか〳〵辛抱が出來んよつて。」

「――」少し冷酷過ぎると思はれて、自分の夫ながら恐ろしい氣さへしたのだが、清一を見送つてからの俊三の打ちとけた言葉をきくと、俊三の人柄はやつぱりもとのまゝの好い人だと安心はしたものの「奉公と云ふことはなるほどつらいものだんねやろな！」一層清一が可哀さうになつたのである。

「わしかて、高商の豫科へ入る前――小學校を卒業してから一年間奉公にやられてたんやよつてな！　わしのお父さんと云ふ人は、中々えらい人やつたと云ふ評判やが、それだけきびしかつた。」

それは清一への同情ではなくて、いつの間にか俊三自身の自慢話に落ちて居たのである。……

「さて今度の、わたしの商業學校入學希望のことに就ては、叔母さまに一方ならぬ御無理をお願ひ致しまして、まことにすみませんでした。叔父さんは、折角叔母さまがそれほどまでに云つて下さつたのに、御快諾下さらぬこと、別に怨むと云ふわけでは萬々ありませんけれど、叔父さんはどう云ふお心なのでせうか、學校を卒業致しましたら、きつと／＼御恩返しをするつもりです。月給が取れるやうになつたら、借りた學資金もきつとお返し致します。何とかお許し下さるわけにはまゐりませんやろうか。決してつらいことを厭ふわけではありませんけれど、毎日かうして店で小僧として働いて居ても、いろ／＼考へて見ますと、どうもさきの見込みがないやうに思はれます。この文明の世の中に、小學校しか卒業しないやうな人間が、將來立派な商人として成功出來るとは思はれません。

叔母さん、どうか今一度叔父さんにたのんで見て下さいませんか。そのうちに一度かへりたいと思つて居ますが、何にやかやと店が忙しくて、それでも午後とか夜とか一寸なら出られますけれど、魚崎までと云ひますと、ちよつとおきのやうでも、やつぱり出にくいのです……」

お君は今一度、そこのところを讀み返して見た。字はあまり上手ではないが、文章は、お君自身でもと、ても云へないと思ふほどにうまいことと書いてあるのである。

「あの人はどんなつもりか知らぬけれど、本人が、こないに勉强したがつてるのに、何とか――今一度云ふて見ようか知らん。」

それからまたお君は、自分の病氣のことをいろ／＼たづねて心配してくれて居るところを、讀みかへしては居るうちに、また、だん／＼淸一が可哀さうになるのであつた。

「――わたしはおばさんをほんとのお母さんのやうに思ふて居ます。どうか一日も早く全快して下さるやう……」

あの子が家に居るころ、殊にはお君がこゝへ嫁いで來たころは、清一はそれは〳〵腕白ざかりで、手にへぬほどだつた――隨つてつい憎らしいこともあつたが、この一二年來何かとなつかしいことを云つて來るにつけ、その上、自分にはいよ〳〵子供が生れないときまつて見ると、淋しさが一しほ深く、さうして自分の膝下に取りすがつて來るものは、やはり可愛いのであつた。殊に清一の弟の久吉は、まだおさないとは云へ、それは〳〵腕白もので、まだ情味と云ふものはなく、それにお君があまり自由のきかぬ病人だと見くびつて、云ふことなども少しもきかぬのである。

清一は可哀さうだつた。まだ二三年まへまではこの家も先代の借金などで、それに景氣もよくはなかつたし、つい奉公に出してしまつたのだが、弟の久吉は「この頃なら、あの人もまさか奉公には出さないのやろが――」

この一二年來、世帶がだん〳〵樂になり、殊にはその配當賞與が二千圓も三千圓にもなつてからは、いつも心配して居たあのむつみ會へ出る着物なども贅澤に作れるやうになつて「――あ、こないに生活が樂になつたのに、性の悪い、病氣になつたりして――」

さう思ふと、誰れを怨むこともないのだが、それだけ一層悲しくなるのである。――清一も、この頃家のくらしのよくなつたことを知つて居るに違いない。さうして見れば、さきの見込みのない小僧で居るよりは、せめて商業學校だけでもと思ふのも無理はなからう。弟の久吉は學校の成績が好い〳〵と、あの人はいつも賞めて居るのだから、無論中學校から高商へも入れてやるのだらうし、あの人はまた、この頃はだん〳〵身體も達者になり、景氣が好いので大得意だし、「――さうや可哀さうなのは清一とわたいと二人や。」

お君がこの村島家へ嫁いで來たときは、俊三はまだ學校を出て、それからやつと兵隊に行つて來ただけだつたので、今の商會から貰ふ月給もほんの僅かばかりであつた。それに舊い借金があり、お父さんもお母はんもまだ健康で、生活

は隨分苦しかつたのだが、やつとこゝまで漕ぎつけて、——兩親がなくなり貧乏も逃げて、やつとこれからがお君自身の天下となるこの時に！「繁子さんの云やはつたやうに、病氣はなほるやろ。またなほらなけらどむならん。」

あの福島のせゝこましい町に住んで居たことを思へば、この別莊は、廣くはないにしてもそれこそ雲泥のちがひである。あの福島の、黒い煙が一日中座敷の中へ流れ込んで來るのと比べると、この魚崎は、白い砂と青い松で……お君は女學校の一年生の時に白砂青松と云ふ言葉を習つたのだが「ほんとにその通りの好え景色で、空氣も好えところへ來て居ながら、こんないやらしい病氣にかかつたりすると云ふのは、何と云ふ因果なことやろ！」

お君は、清一の手紙をいつまでも、讀むともなく眺めて居たが、自分一人が考へたとて果しのないことなので、どうせ今夜俊三が歸つてからのことだと思ひ返すと、それを叮寧にもとの狀袋に入れた。——暫らく起き上つて考へごとをした加減か、一寸疲れを覺えたので、また横になつたのである。

二

俊三が歸れば、何とか清一のこの希望を遂げさしてやりたいと思ふにつけて、お君は急に俊三の歸りが待ち遠しい氣がするのであつた。

「もう電氣がついてから大分になるのに——」と、呟きながら枕元の時計を見たが、まだやつと六時で、いつもよりはたゞ三十分ばかり遲いくらゐであつた。——この頃は、考へ出すと何だか氣が短かくなつて——、

「もういつかのやうなことがある筈がない。あの人かて、あれだけものゝようわかつた人やよつて——。」

それに繁子が見舞に來てくれた時の話によると——繁子は社長の奧さんから直接評判を聞いて來たらしいが——俊三

はあの繁子の夫の栗島と二人、やつぱり陸山商會の大黒柱とまで、社長から見込まれて居るらしい。それならばこそ、今期の賞與金は一萬圓も貰ふことになつたのである。前期などは、どんなに景氣が好いと云つても僅かに二千圓しかなかつたのだから、今度はやはりその會計主任に出世したからのことであらう。それにしても俊三が一萬圓とすれば副支配人の栗島はいくら貰つたか。「――一萬五千圓は動かぬところやろ。繁子さんは、さぞ喜んで――」

すると繁子のにこ〳〵した顏が見えるやうな氣がするのであつた。それからまた、あの時に繁子が云つた言葉も思ひ出されて嬉しいのであつた。

「二人があゝして兄弟分になつてしつかりやつてるんでツしよつてにな。あんさんとわたしも姉妹になつて、助け合ふて行きまひよかいな！――そやよつて、あんさんは一日も早よ、快うなつて貰はななならん。」

俊三と栗島とは長い間の學友で、それに學生時代から眞面目な人間だと、教師たちからも云はれて居たのだが、卒業するとすぐ二人は同じく今の陸山商會に入つたのであつた。そして眞面目に仕事をするばかりでなく、頭腦もよく腕も利くと云ふので、社長に非常な信任を受け、多くの先輩があつたにも係らず、拔擢されて、最近に昇進することになつたのである。

「――社長さんの奧さんは、よつぽど二人を信用して居やはりまつさ。――二人とも酒も飲まず、女はきらひで、大阪人には珍らしく堅い人やと、さう云ふてな！」

繁子からその話を聞いた時にも、お君はすぐに考へたことだが、なるほど栗島は、繁子があんなに健康で、可愛い子供が二人もあり、それに繁子は女學校も卒業してるのだから、何かと夫に對するつとめも、行き屆いて居るのだらうが――「わたしはこないに半年以上も寢て居て、子供はなし――」

と思ふと、俊三がこの頃だん／＼家を嫌ひ出して、たまに日曜日など家に居ることがあつても、始終むしやくしやして居ることが、お君には氣になるのである。

それも無理はないとしても、こないだの栗島が見舞に來てくれたとき――それは繁子が來てくれたあと、すぐまた來てくれたのだが――その時に俊三が栗島と話して居たことが――。

「あゝ、それではやつぱり、美しい小間使でも置いて、そのことをよう云ひ含めて、あの人が淋しがつてることを、何とかしようか知らん！」

それはもう仕方のないことだと、さう思ひながらも、この頃、耳について離れないあの時の、二人の會話がまた聞えて來るのであつた。……

「――さうか、それは驚いた。いかんな！　僕はまた奥さんが急にわるくなつて、その爲めに缺勤してるのだとばかり思てたんや、――そんなら三日も彼處でゐつづけしてたんやな！」それは栗島の言葉であつた。いつも女のやうにひそ／＼聲で話す人だが、それは可なりの大聲であつた。栗島が驚いて居ることは、それだけでよくわかつたのである。お君は栗島以上に驚いた。

「そんならわざ／＼見舞に來るのやなかつたな！」そのあとを栗島は斯う云つて笑ひもした。

ほんの五六日前に繁子が訪ねてくれたのだが、どうして栗島が重ねて訪ねてくれたのかと――その不思議はこれで解けたが、そして同時に、俊三が會社の用事で三日間旅行すると、わざ／＼ハガキをよこしたのも、それは眞赤な僞であつたこともわかつたが、それ等の凡てを知ることは、お君には大きい悲しみになつたのである。

お君ははばかりをすましてから、またそこに立ち止つた。――これまで立ち聞きなどしたこともなかつたが、しかし

座敷の話がだん〳〵氣になるので、そのまゝ病室に歸る氣にもなれず、廊下に立つたまま何ほ半時間ばかりも聞いて居たのであつた。

栗島が話しつゞけて居る。「――けども、これからはもう行くなよ。僕としては今日の君の氣持はようわかつてるけどもな！　それに今迄そんな道樂なんてせなんだ君だけに、この頃どうしてもなしやくしやしてたまらなくなつたと云ふのは全く同情するよ、けども今は僕たち二人には大切なときなんやから。」

その時、栗島は急に聲を小さくして、それから變に笑ひながら云ふのであつた。

「君、何故僕がそんなことを云ふのかと云ふとな。實はこないだ妻が社長の新妻君のところへ御機嫌伺ひに行つたんや。すると――」

それはもうお君が、葉子から聞いたことゝ同じで、奥さんが頻りに、二人の道樂をしないことを賞めたと云ふそのことなのである。

「僕等の重川が案外そんなことに原因してるかも知れないで。は、は、は――」

「社長はえらう奥さんに惚れ込んだんやな！――僕たちの昇進に、つまり奥さんの意見なんだな。」それは俊三の、元氣のない聲であつた。

「惚れ込んでると云ふこともないけれども、――しかしまあ惚れてるのかな、東京から華族の娘を後妻に貰つたことを光榮に思つてるのかも知れん。」

「女と云ふものは、男の道樂が苦になるのやろな！　社長の夫人もそれなんやろ。」

「無論さうや。けど、この頃は社長も大に堅くなつたな。あれで若い頃は、それは〳〵道樂もやつたんやさうなが――。」

「自分が若い妻君を貰て堅なつたもんやさかい、社長はみなも堅なれと云ふわけやな。人間も勝手なもんやな！」俊三は不平らしく云つた。

「そいでも君、そんな廻り合せが來たから僕等のやうな謹直な人間が拔擢されたと云ふわけやないか。」

「それで僕の藝妓買ひを、君が忠告してくれると云ふわけか！」俊三は自ら嘲笑するやうに云つた。「――店ではへとへとになつて働く、家へ歸れば病人で陰氣くさいし、藝妓買ひをすれば信用がなくなるし――」

その時こそお君ははつとした。自分ながらどうして好いかわからなかつた、

「まあ暫く我慢するのやな！」

「そいでも、社長は、そないにも思てやへんねやろ。女道樂ぐらゐ大阪人の習慣やし、それに自分だつてこれまでさん〳〵やつて來たんやさかい。」

「それがな、僕こないだ社長から斯う云ふ意見をきいたことがあるのや――社長曰くやな！　どうも大阪人の習慣はいかん。何でもお客をお茶屋で御馳走して、そんなことで得意先をごまかして行かうと云ふのや。それはまあ好いとして、番頭がただ案内役だけですましてる間はまだ好いが、おしまひには自分一人でもお茶屋へ行きたくなる。女が出來る。金が入用と云ふわけで、つい店の金をつかい込むのや。――酒を飲む人が惡い人間と云ふことは無論ないが、何と云ふても酒や女の好きな奴は信用出來んな！　とことん委さうと云ふ氣にはなれん――、と斯うや。」

「自分の若い時のことを知つてるからやな、――人間も勝手なもんやな！」

お君はもつとき〻たかつたが、もうぐつたり疲れてしまつたので、這ふやうにして寢床へ歸つたのであつた。

けれどもそれ以來お君は、どうしても俊三の道樂のことを自分の手で何とかせねばならぬ氣がするのである。

俊三は、それでも、あのことがあつてから一ケ月にもなるけれど、たゞ一度した外泊しなかつた。尤も時には夜遲く歸ることもあるが、それは店の忙しい時はいつでもさうなのである。

「會計主任になつたのやさかい、もしか道樂が重なつてお金を使ひ込むと云ふやうなことになつたら！」それが何よりも、お君には心配なのである。そしてそれは自分、が長い病氣で寢て居る爲めに――と思ふと、やつぱり何とかせねばこのまゝでは濟されない氣がするのである。

「それにな、長い間の病人やのに、あんさんをそないに大事にしておあげなはると云ふことを聞いて、そいで社長さんの奥さんが、よけいに信用して居やはりまんのや。」繁子はさうも云つた。

それはお君には一層都合の好いことなのだが、そしてもし俊三がいつまでも、お君を大切にしてくれて、藝妓買ひも栗島さんの忠告通りふつつりと止めてくれるならこれほどありがたいことはないのだが、しかし、いつまでそんな辛抱が出來るであらうか――。

「外でしたらわかるけれど、家でならわたしさへ辛抱してたら、わからんことやし、それにわたしが得心の上やと云へば、わたしと云ふ女のねうちが上りこそすれ、あの人の罪でもなんでもないのやから！」

さう思ひつめると、お君は、やつぱりこの頃考へついた、その美しい小間使ひを雇ひ入れることに決心したのである。「さうや、これはほんまにええ考へや！」

三

玄關に俊三の歸つたけはいがしたので、すぐにも清一の手紙のことを話さうと待ち構へて居たが、今日に限つてすぐ

には病床へは顔を見せてくれなかつた。

「この頃はこゝへ來るのさへ、もうそんなにいやになつたんやろか！」尤も訪ねてくれると云つても、ほんの洋服をつけたまゝ一寸のぞくだけで、すぐにも茶の間へ歸つてしまふのだけれど、たゞそれだけでも、今日に限つて來ないと云ふことは怨めしかつた。

「今日はほんまに寒いな。」俊三が女中にさう云つてる聲が聞えた。

で、お君もなるほど少し寒いと思つた。この硝子張りの室の中に、一日中引き籠つて居て、寒ければ適當な暖を取つて貰ひ、外の世界のことはまるで關係がないので、それには氣がつかなかつたのだが、

「火鉢にでもあたつてるのやろ――」そのうちに來るだらうと思つたので、お君は不快になつた心持を思ひ返して暫らく待つて居た。でも、まだ來なかつた。とう〳〵こちらから聲を掛けて見たのである。

「あなた。――一寸來とくなはらんか。」

今一度聲をかけて、やつと聞えたのか、俊三は顔を見せたのであつた。

「今日はどうや？」

それでもいつもの通りさうきいてくれた。

「あのな――」お君はそれに答へるよりもすぐに枕元に置いた清一の手紙を取り上げてこれを俊三の方へさしのべたのである。「清一からこんな手紙が來ましたんや。」

「清一か。」俊三は、折角さしのべた手紙を受取らうともせずに「――清一は今日店へ來たんや。」

「まあ、さうだつか！」それではこの頃はよほど思ひつめて居るのだと考へるにつけても何とか望みを遂げさしてやり

たい氣がするのであつた。「そいであんさんはどう云ふてでしてん？」

「それはわしは前から同じ意見なんや、前に一度云ふてきかしたこともあつてん。それに清一はまだわからんのや、あいつはよつぽど頭腦が惡い。」

「――」それだけではお君には意味がわからなかつたので訊きかへした。「そんならやつぱりあのまゝにしときなはるつもりでつか。」

俊三は默つて居た。お君は一寸取りつく島はなかつたが、清一があれほどまでに云つてるのだし、一萬圓の賞與もやがて入るのだから――それを云つて見ようと思つた。「家もこれからだん／＼樂にもなりますのやさかい、どうですやろあんまりあない云ふてるのに可哀さうやさかい。」

「お前までがそんなこと思てる。――わしは何も清一が憎くてするのでもなければ、學資金が惜しくて云ふのでもないのや――」

で、俊三の云ふ意味は、清一は、小學校に居るころから、學校の成績があまりよくない。小學校程度の學科が出來ぬくらいの人間が、學問をしたところで、ただ時間を空費するばかりでなんにもならない。よしまた甲種商業を、やつとのことで、卒業したところが、それで月給取になれると思ふのがそもそも間違つて居る。月給取になると云ふことは、大阪の商賣人は一番卑しんでることだが、まあそれはよいとしても、平の月給取になつて、いくら貰へると思ふ。それに月給取氣質と云ふものは、いつもぶら／＼して居て死に身でやらぬものだから、たとへ或る商店へ入つても、本氣で商賣が覺えられない。一生涯僅かな月給取で居るつもりならそれでもよいが、そんなことでは先きの見込みはなし、殊にこの大阪で、食ふことさへも出來なくなる。それで俊三の考へでは、寧ろ小僧から苦勞した方が、商賣人としてどれだけ本當に

なるか知れない。またどんなことをしてももとの大島屋にならねばならぬのだから、しつかり商賣の道を覺え、同時に苦勞と云ふことを心からたたき込んで置かねばならぬ。――さうして神妙につとめて居さへすれば十年の後には、店主が積んでくれる淸一の貯金も可なり大きくなるし、人間が仕上る。「――その上、その時にこそやな、二千圓や三千圓の資本金はわしからも出してやるのや、さうしさへすれば、しつかりした店の基が出來る、初めは小さくても、それでなら大きくなる見込がある。」それから俊三は、今日店へ訪ねて來た淸一の言葉を思ひ出したのか、急に嘲笑するやうにつゞけた。

「學校を卒業しましたら、借りた學資金は返しますさかい――なんて淸一は云つたが、わしは笑つてやつたんや、考へて見るがええ。甲種商業を出て貰ふ月給で、どうして返金が出來ると思とるのか。そりやわしは必ずしも返して貰はうとは思はへんけど、わしなら、そんな學資金を貸すよりも。店を開くときに三千圓やつた方がよつぽど得心が行く！」

「――」さう云はれて見るとお君はもうあとは云へなかつた。それに俊三の元氣がいつになく荒くて、一寸口が出せなかつたのである。

「腹が減つた。飯を食て來るから。」

さう云つて俊三は立ち去つてしまつたのであつた。

四

お君はがつかりした。なるほど俊三の云ふことにも一理はある。けれどもあれほどまでに賴んで來て居る淸一に――

お君は今夜はすぐにも好い返事を書いてやらうと樂しみにして居たものが、急にがつかりしてしまつたのである。

「よし、それが理屈としても一萬圓も賞與が貰へるなら――」お君は今一度口の中で呟いて居た。「そのことを云つて頼んで見ようか」

「お前などはすぐにそんなことを云ふ。今年は儲つても來年はすぐにも不景氣が來るかも知れんのや」なにかお君が云つたとき、俊三は叱つたことがあつたのである、さうした用心深いところがあるので、これまでからお君は、大船に乘たつもりで安心もして來たのだが、しかし今の清一への言葉は、理屈は理屈でも――「あの人も、根がしまつ屋やさかい！」

お君はすぐに、自分がこの病氣になつたころのことを思ひ出した。尤もあの時は、お君自身もそれほどにも思つて居なかつたのだが、今日の清一の話を聞くにつけて、何だか腹立たしい氣がするのであつた。

もう七ケ月も前のことだが、或は肺病ではないかとお君は一寸心配になつたことがあつた。それはもう風邪を引いてから一ケ月にもなつてからである。俊三自身は元來が健康な質で、隨つて自分は病氣にかゝるやうなことは一度だつてなく、のみならず、病氣になる奴は心に隙があるからだと云ひ／＼して居て、醫者は大嫌ひなのである。

でも、あまり風邪が長引くので、賣藥ばかりでもあるまいと思つて近所の醫者に見て貰つたのであつた。

「少し肺尖が惡いやうですな、今のうちに要心なさつた方がよろしい。」とのことであつた。

丁度その時、隣の木村さんの奥さんにそのことを話すと、土佐堀に自分の親しい專門醫があるから、もし御希望ならば紹介しても好いと、わざ／＼さう云つてくれたにも係らず、俊三はいつもの通り醫者は嫌ひだと不機嫌で、その上、

「もし呼吸器が惡いのやつたら、空氣の惡い大阪市内の病院に入院するよりは、何にもしなくてもこの魚崎海岸のええ空氣のところに居た方が、よつぽどええ」

と、さう云ひ張つたのである。

お君もまた、それには充分の道理があると考へたので、やはり近所の醫者に見て貰つて居たのである。

けれども俊三も、やはりお君の病氣を多少氣にして居たと見えて、或る日、店から歸るとすぐに云ふのであつた。

「今日或るところでお前の病氣の話をしたら、いろ〳〵家の方位のことをきくから、きくまゝに答へて居ると、――それは方が悪いと云ふのや！」

お君はその話を聞きながら、方位の大切なことはこれまでからきかぬこともなかつたが、何だかあまり突然な氣がしたし、それに今この家を動くのは自分も一寸氣がすゝまなかつたので、云つた。「その方位のことを云やはつた人はえらい人でんのか。」

「うん。なか〳〵ようあたる人や。――」

それから俊三は云つた。「そら、わしも、こんなことは迷信やないかと思ふのやけれど、悪いとやかましく云ふので、このまゝ居るのは好え氣味もせんよつてな！」

それからいろ〳〵話の末、たゞお君一人だけが、海邊近くの或る家の二階を借りて移ることになつたのである。お君としては病院へ入ることは、何よりもお金のかゝることだから――丁度昨年の暮頃からだん〳〵貯金もまして來て、俊三は、この分なら五六年の後には相當の金を溜めて、獨立で商賣をやれると樂しみにして居たので、その俊三の目的を、一日でも早く達しさせたいと思つたので、お金のかゝる病院へ入ることは、お君としても別に望んでは居なかつたのである。

だが俊三や久吉と別れて一人移るのは淋しかつた。――けれども、お君に取つては今年の「方」は辰巳が好いので、

そこに三ケ月移りさへすれば、病氣もなほるとのことだつたので、お君は移つたのであつた。

「病院へも行かずに斯うして三ケ月居さへすれば病氣がなほるのは、そんな好え都合はない！」

でも、ともすると、これが單なる迷信ではないかと思はれるのであつたが、俊三もあれほどに云ふことではあり、で、なるべくそのことを信心するやうにして暮して居た。

同じ魚崎でも、お君の家は鐵道線路を越えて山の方だつたので、初めのうちは二階から見える海の景色が珍らしかつた。

「毎日海岸へ出て深呼吸でもするとええ。――とにかく病氣と云ふものは精神にゆるみがあるからや。」

俊三にいつもさう云はれるので、お君は、そこへ移つてからは一生懸命に養生をして居た。

ところが、或る日のことであつた。

その深呼吸をして居たとき、急に胸がわるくなつたと思ふと、ぬる／＼したものが咽喉から流れ出て――「あゝ、それがわたしの最初の喀血やつた。」

お君はその時の悲しさと不安を決して忘れることが出來ないのである。――とう／＼ほんとの肺病ときまつたので、俊三もわざ／＼大阪病院から博士を迎へてくれたのである。

あの病氣の初めの頃は――尤もお君もやはり金が惜しかつたのではあるが、あの時に俊三がもつとしつかりしてくれたら――お君は、これはやはり俊三がしまつ屋であつたからだと、今も清一の話をききながら腹が立つて來たのである。――

「いゝえ、さうばつかりも云ふて居られない。それよりも――」お君はまた、自分が半年以上もこんな病氣で寢て居る

ことがどんなに男を不自由させて居るかを思はないでは居られなかつた。

「そいでもあの人は、この頃一合ばかりの酒が飲めるやうになつたさうなが――」

多少でもそれで氣がまぎれてくれることは、お君には嬉しかつた。清一のことをきいてくれないのは一寸嫌な氣もするが、しかしそんなことであの人を怨んではならないと云ふ氣もした。

「いゝえ。」とまたお君の心は迷ふた。「あの人がわたしにそれだけの養生をさしてくれるのは、あの人の眞心からの親切やろか。」親も兄弟もないお君には、今では、どんなことがあつても俊三をたよるより外ないのだが、こないだ繁子から聞いた言葉は、考へれば何だか氣になるのである。

「――それにな、あんさんが、こないに長い間病氣してやはるのに、村島さんが親切にして居やはると云ふてな。――社長さんの奥さんは一層信用して居やはるのだつせ。」

繁子の言葉から推せば、俊三の親切は、ほんとにお君への親切ではなくて、さうした世間體からではなからうか。

「もしかそんなことなら！」とお君は、さきほど決心した美しい小間使を雇ふことも、何だか恐ろしい氣がして來るのである。――もしかその小間使が、すつかり俊三の氣に入つてしまつて、その上、子供までが孕むやうなことがあつたら！――まだそれさへもあきらめるとしても、もしほんとに俊三が誠心を持つて居ないものならば、やがては小間使はお君を邪魔ものにして、早く死ねば好いと、もしかそんなに取扱はれるやうな日が來たら――。

「あゝ、その時は、わたしは、どうしたらええやろ！」

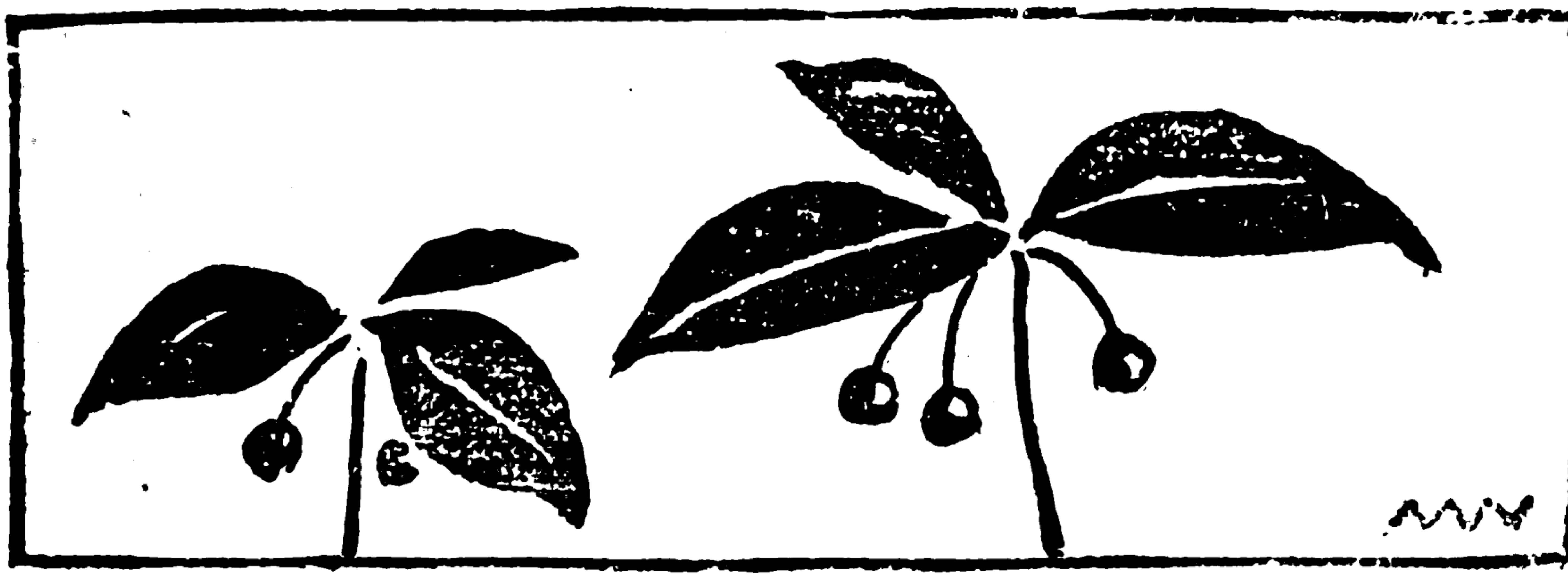
「春になつたらなほりますよ。」と繁子は云つてくれたけれども、まだ一年や半年で全快しようとは思はれない。「いゝえ、そればかりではない、あの繁子さんさへも、その時になつてわたしを可哀さうだと思てくれるか知らん！」

もうお君はたまらないほど悲しくなつたのである。そしていつの間にか、聲にまで出してしまつた。

「なにを泣いてるのや！」それでも俊三はさう云つて見に來てくれた。けれどもその聲は決してやさしいものではなかつた。で、お君は、返事をするかわりに、まだ泣きつゞけたのであつた。

「そないにヒステリー起したらいかんやないか。——ここちよつとの間が大事なんやさかい！」

（大正十年七月作）



宇治の一日

徳田秋聲

井村は或日の朝、三四日前から來て泊つてゐる嫂の弟に當る人の家を出て、その次男の芳次郎と同道で、宇治に同行する約束のあつた芳次郎の兄の良太郎を訪ねた。

どうせ何處へ行つても、期待を裏切られることは判つてゐた。京都にしても奈良にしても、須磨や明石にしても、歴史と古美術とに趣味をもつことのできない彼には、迚も氣分が合はなかつた。しかし此の小旅行のうちに其等の土地を一とわたり瞥見しておきたかつた。

「宇治へおいでゝしたら私も同行しませう。」と良太郎は父の家で久しぶりで井村に逢つて其の約束をした。

井村は彼を子供の折に知つてゐたが、大きくなつてから二度ばかり彼の父の支店へ來たついでに遊びに來たりして、叔父さん／＼と呼ばれてゐた。良太郎は二年ほど前に商店を出て、外洋航路の船の事務長などしてゐたが、母と折合のわるい妻のために陸へ上つて、天滿の方に別居生活を營んでゐるのであつた。

井村は良太郎のほかに、其の土地に現住の二組の若い夫婦から叔父さん／＼と呼ば

れるやうな關係にあつた。彼等は良太郎の妹夫婦若しくは、從兄夫婦であつた。つひ近頃まで學生であつた彼等は、いつの間にか揃つて結婚生活に入つてゐた。

井村は良太郎等の父に誘はれて、文樂へ行つた晩から、新築のその二階へ來て、づつと泊つてゐるのであつた。逗留してゐる地方の支店長と一緒になることもあつたし、顧客先の旦那やその愛妾などと、一つ座敷で晩餐を食べることもあつた。晩餐がすむと、主人は下のひつそりとした座敷で、店員などと勝負事を遊んだりした。何うかすると主人は助けに來てゐる妾に命じて、客をつれ出して芝居見物をおごつたりした。二階は始終旅館のやうに賑はつてゐた。でも井村がおちついて筆を執るやうな部屋に事かくやうなことはなかつた。そして土地流に、誰も彼もせか〳〵してゐたが、良太郎だけはそのどつしりした體のやうに、どこか態度が悠揚としてゐた。井村は外の二組と共に、彼の新世帶をもちよつと見舞はなければならなかつた。

「やれ洋服を作つたとか、やれマンドリンを買うたとか、何とか彼とかいうて金をもつていきよる。月々の世帶かつて未だにこつちが持出しや。」

父は口でこぼしてゐたが、それがまた大きな得意でもあつた。

「叔父さんに是非訊かんならんことがある言うて、文子がお手のすくのを待つてゐますのんや。」

主婦は良太郎等の噂や、自分の立場などを話したりする折に、追つき女學校を出ようとしてゐる末の娘の[illegible]決いだが、その文子は帳場に二階にゐる井村に近よつては來なかつた。彼は時々下で發育ざかりの彼女の姿を[illegible]した。

彼女は清楚な風をしてゐた。内氣などは少しもなかつた。

「叔父さんに訊くこと〳〵と言ふのは、何んなことだらう」などゝ、井村は揶揄ふやうに訊いた。

彼女はどこか誇らしい大きい目に微笑をたゝへながら、

「そら叔父さん、訊きたいこと聞いていたゞきたいことが澤山おますさかえ。大阪かて新しい女が澤山をりますがな。」

「新らしい女なぞ、阿母さん嫌ひや」と、母は顔を顰めてゐたが、井村に向つて、

「この人は東京へ行て、もつと學問がしたいのやさうです。姉さんのやうに結婚しても詰らん言ふてた。」

最近に嫁をもらつてから、遙かに良太郎に離れていかれた彼女は、文子の近頃の氣分にも危惧を感じないではゐられないらしかつた。

井村はしかし其の話に深く立入る機會もなくて過ぎた。

井村は同志社の經濟部にゐる芳次郎の案内で、電車で天滿の良太郎の家を訪ねた。其邊一體は彼がこの土地を放浪してゐた時代に、よく出歩いたところだけに、何となく懐かしく感ぜられた。町の形もまるで見違へるほどに變つてもゐなかつた。

良太郎の家は、上も下も硝子戸で圍まれた、狹い地面を極度の小器用さで利用された都會的住宅の一つであつた。そして井村が芳次郎と一緒にあがつて、妻君の琴や良太郎のマンドリンなどのおかれた座敷へ通つて、しばらく休んでゐると、そこへ彼自身の兄が訪ねて來た。

「ほう、こゝへ來てゐるのか。」兄は弟の顔を見て、慈愛に充ちた相恰を崩しながら、良太郎夫婦としばらくお座の話しなどしてゐた。

氣がついてみると、良太郎の妻も姙娠であつたが、井村の兄の家の嫁——それは良太郎の妹にあたる——も、今一つ良太郎の從兄にあたる青年の嫁も同じく姙娠であつた。良太郎の妹は三人目であつたが、良太郎と從兄の妻とは孰も初

事であつた。

暫らくすると、兄は包みをほどいて、一つのボル箱を出してそこへおきながら、

「これを取つておいてもらはんと、折角の弟の志が無になるから」と微笑で言つて良太郎夫婦にすゝめた。

「そんな心配してもらうては困ります。それはやはり持つて歸つて下さい。」良太郎も井村の前を憚るやうに言ふのであつた。

井村には一寸感づけなかつたが、直にわかつて來た。それで彼が嫂や若い三人の嫁だちのためにと言つて、妻から托かつて來た下駄の一つで、何かの行違いか、良太郎の勘定損ひかのために、良太郎の嫁の分が不足した、それを兄が自分の嫁の分を代りに提供して、井村の妻の好意を表示しようとするものらしかつた。後でほゞ想像のついたことだつたが、良太郎の母の手に托された良太郎の嫁の分が、途中で餘人の手に渡されてしまつたのであつた。

「足りなければ、家へさう行つてやりませう。」井村は言つた。

「何に、そんな必要はありやせん。これで十分ぢや。」兄は打消した。

井村は良太郎兄弟と、やがてそこを出た。

「こゝは二階が二室もあいてゐますから、父の家なぞごたごたしたところにゐられる必要はありません。幾日でも來てゐて下さい。」良太郎は家を出かけにも、くれぐれも言ふのであつた。

三人はひどく混雑する天滿から電車に乘つた。初夏の頃で、町には輕い砂が立つてゐた。空は煤烟に濁つてゐたけれど、朗らかに晴れてゐた。水に沿ふた電車の沿道の光景は、市内とちがつて、まるで想像のつかないほど變つてゐた。電車のなかも可也込んでゐた。まだ扇子を使ふほどではなかつたけれど、人いきれで噎れるやうであつた。良太郎は大抵沈默して

ゐたかはりに、制服制帽の弟の芳次郎はよく話した。京都の寄宿生活や、東京から時々講演にやつて來る藝術家の噂や、婦人界の動靜や、そんなことについて絶えず語つた。目をあげてみると、その邊一體の郊外の發展は意想の外であつた。どこのステイションへいつても、人が一杯であつた。町がそれから其へと聯絡してゐた。

中書島とか云ふところから、井村たちは別の線に乘りかへた。そして初夏の風にそよぐ青田や、岸邊に猫柳などの芽の伸びた流れや、新綠につゝまれた丘や森を背景にした村邑や、松原の根なくつゞいた古戰場や、古い寺院の塔などを眺めながら、やがて宇治へ着いた。何處を見ても青嵐が煙つてゐるやうに見えた。

宇治川の流が直に井村の眼前に現はれた。そして其と同時に宇治といふ土地の氣分が、此旅行中今まで受けたことのない爽快な感じを彼に與へた。涓々として川幅一杯に碧く流れてゐる早い水勢も比較的荒くて好かつた。鬱蒼とした兩岸の綠も深かつた。川上に見える山にも陰影の深さがあつた。

「これは好いな。」井村は橋の中程へ來たところで、立停つてしばらく四邊を見廻はしながら呟いた。

「嵐山より少し景色が大きくて荒いだけ宜しいな。」良太郎も言つた。

「こゝなら暫らく居てもいゝね。」井村はさう言つて、またぶら〳〵歩き出した。少年の頃愛讀した日本外史の宇治川先陣などの事蹟を彼は想出してゐた。

橋を渡つてから、井村たちは旅館や料理屋などのある町を通つて、名高い鳳凰堂を見るべく、ぶら〳〵歩いて行つたが、井村には建築を鑑賞するだけの豫備智識がなかつた。そして風雨に洗ひ晒された本堂や、翼廊やの均勢的に配合された優美な建造物を、外面から岸觀した後、寺院の方へと道を辿つて、そこで少しばかりの廢頽した裝飾畫などを見ながら、お茶を飲んで暫く涼んでゐた。そして其處を出てから、水のほとりへ出て、土手を溯つてゐた。遊覽客の麥稈帽

や傘の影が、到るところの新綠の陰に見られた。井村はこゝへ能く遊びに來る友人の幸福を羨みながら、行く〳〵青綠色に淀んだ水の流れや、晴嚀な色に包まれた川上の山の姿などを飽かず眺めてゐた。そして空腹と渇とを感じて來たところで、水邊の或る料亭の石段を上つて行つた。

その家は、母家の外に幾箇もの瀟洒な離室を、路次庭の繁みのあひだに、飛び〳〵に持つてゐた。井村たちは直ぐ手近にある其の一つに案内されて、飛石づたいに庭木のあひだを潜つて行つた。そして羽織などぬいで、風を入れながら通した料理の來るのを待つてゐた。

「こゝは料理だけか知ら。泊めないだらうな」などゝ、井村は窓から庭木ごしにみえる、奥まつたところにある同じやうな部屋の様子などを覗ひながら言つた。

「さあ、何うでしやろ。」良太郎は曖昧な返事をしてゐた。

飲料や二三品の上方風の料理が、忙しさうにしてゐる女中によつて、暫らく待つてから運ばれた。芳次郎は勿論、良太郎もまだそんなお茶屋へなぞ餘り足を入れないらしかつた。猪口も殆んど口にしなかつた。

井村は良太郎に逢つたら、色々話したいことが溜つてゐるやうな氣がしてゐた。良太郎の妹を養女として、それに養子を迎へて、近い將來に三人目の孫が產れようとしてゐる兄の家庭――たとへば兄夫婦と養子と、養女と養子との關係や氣持、生活狀態、まだそこに其のまゝになつてゐる井村自身を初め家族の籍のこと、それは早晚分けなければならないものではあつたけれど、老いた兄を寂しがらせるやうな氣がしたのと、一つは血統の絕えるのが惋惜しくて、今度も兄や嫂に一と話しようと思ひながら、嫂や良太郎の父の意志でなされたことなら、それも彼等としては至當のことだと云ふ氣がして……それかと言つて、更めて籍をぬくのも氣まづいやうにも思はれて、まだ口へも出さずにゐる、その

聰明で公平な良太郎にだけでも話しておきたいと考へながら、そして又良太郎自身もそれについて、いくらか責任を感じてゐはしないかと云ふ忖度もあつたりしたために、何となく各々の生活に觸れて行くのを惧れるやうな風で、妙に硬張つたやうな氣分になつたり、打釋けようとすればするほど、双方の態度が餘所々々しくなつたりするのであつた。で、また自然彼自身の結婚生活、彩動とした欲求に燃えたつてゐながら、やはり其の姉と同じやうに、平凡な結婚生活に落着かせられさうな文子などの問題にも觸れて行くのが臆劫であつた。

「一郎さんもう中學卒業でつしやろ。」良太郎はふとした機會に、井村の長男の消息を訊きなどした。

「さう、來年だね。」

「何か御希望ですか。」

「それが一向判然しないのでね。」

「自然文學がお好きでつしやろ。」

「さうね、今時の中學生のことだからね。しかし當にはならんよ。」井村は苦笑してゐた。

「みよ子さんが生きてゐられたら、今年幾歳にお成りですか。」

「十六かね。」と井村は溜息をつくやうに言つた。

「ほう、惜しいこつてしたね。叔母さんお力落しでせうと、いつも從兄なぞと其の噂をしてをるんです。」

「有難う。あれもみよ子を亡くしてから、少し老けて來ましてね。」

「さうでつしやろな。」

いくらかしみじみして來たが、やつぱり他人行儀であつた。

「さあ、ぽつ〳〵出ますかね。」井村はさう言つて羽織を肩へかけた。

三人はまた水邊へおりて行つた。そして渡場のあるところまで下つて、そこから舟に乘つた。興聖寺を見たり、對岸を歩いたりしたかつた。

どんよりした雨雲が空に垂れさがつてはゐたが、そしてその影が時々、青々した草のうへや、水の流れに落ちたりしたが、日はかん〳〵照りつけてゐた。綺麗な水草の生えた砂のきら〳〵した小さい洲のやうなものに堰かれて、水がその邊では、底の小石の見えすくやうな美しさで、ちよろ〳〵漣を立てゝ流れてゐた。舟がその邊を徐ろに離れて行つた。舟には俳諧師じみた風流人の一行が乘合せてゐて、懷ろからノートなど取出して、何やら苦吟してゐた。

するうちに江戸川を聯想させるやうな、青々した深い流れの中流へ、舟は出て來た。そこからは遠く重なり合つてゐる山の間から出て來る川上の水脈が、遙かに見渡された。流れは迅くて、しかも江戸川ほどの寂しさを感じさせなかつた。明い親しい感じであつた。

井村たちは舟を乘棄てゝから、岩を切開いたらしい、兩側から枝葉を差交はしてゐる、隧道のやうな長い涼しい道を辿つて行つた。爽かな風が木立のあひだから流れて來た。竹があつたり、楓があつたりした。

物綺麗に掃除の行きとゞいたこの禪宗のお寺の境内には、燃えるやうな躑躅が咲いてゐた。禪寺らしい幽邃味や閑寂味には乏しかつたけれど、得がたい風光だと思はれた。

三人はそこを出てから、流を左に眺めて廣い道を下つて行つた。宇治川水電の發電所からの水が渦をまいて落ちてゐたり、閑靜な住宅か別莊かゞあつたりした。名物の瀬戸ものを賣つてゐる家などもあつた。

井村は橋頭まで來て、そこでお茶の小壺を買ひなどしてから、黄檗の方へ歩いて行つた。

黄檗までは可也の距離があつた。茶園や茶を作る家などが、時々目の前に現はれたが、その邊は一體に、陰鬱に荒れた森が深くて、暗い竹籔などがじめ〳〵してゐた。夏草が盛夏のやうに蓬々と伸びて、白い砂をかぶつてゐた。黄檗では、時の總理大臣や名士の寄附金を掲出した大小五つ六つの高札が目を惹いたほか、高僧の手蹟に成つた山門の扁額や柱聯などが到るところに見出された。こゝも想像したほどの背景と寂びとに乏しかつたけれど、京や奈良などで見る寺院よりも、何のくらゐすが〳〵しい感じを與へたか分らなかつた。

井村たちは山門内の池のほとりで、貨物の繪葉書など買ひながら、茶店の縁臺に腰をおろして疲れを休めた。

そこを出たときには、日もやゝかげりかけて、ステイションのあたりは、關西一體の空氣がもつてゐる嬾い氣分に荒んで、井村は何となく不快を感じた。

中書島で、京都へ歸る芳次郎に別れて、井村は良太郎と天滿行の電車に乘つた。

井村は良太郎の細君に迎へられて、埃をはらいながら上へあがつてから、やがて良太郎と風呂に入つた。彼女は立居がやゝ苦しさうに見えた。

井村は良太郎が取出して見せる、異邦の寫眞帖を繰ひろげて、彼の說明に耳傾けつゝ、夕飯の食卓に向つた。もう電氣がついてゐた。

それから別室で籐椅子にもたれながら、八時頃まで雜誌に時を移したゐたが、お互の內部生活に觸れるやうなことはなかつた。

「こゝ宜しおまつしやろ。」

二階へ寝にあがつたとき、良太郎夫婦も上つて來て、懇ろに彼の逗留をすゝめた。

臥床についた時分、廂に雨の音がしはじめた。一日の行樂に疲れた井村は、快いこの雨を耳にしながら、やがてうと〳〵と眠に陷ちた。

翌朝井村は身重の細君を煩はすのを畏れて、二人の好意に背いて、雨を冒して兄の家まで歸つた。

CHUO KORON (The Central Review.)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription yen 11.90; Single copy 70 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可



御旅行と三越

御旅行の御用意は三越へ、お出でに限ります

御旅行の際にも日常お使ひ慣れの三越の品を御携帶遊ばされれば、興味多いお旅行が、一層興味を増します

御旅行先きで、お不自由の品がありましたら三越へ、三越の通信販賣部は、すぐにお届け致します

◆◆八月定休日◆十日◆二十五日◆一日は棚卸で休業◆◆

東京 三越呉服店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す